

明星の虚偽、常闇の真理

長閑

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

“世界”の終末から幾星霜も過ぎた“現在”

仮初めの世界を生きる人間達と、仮初めの世界で生きる遺物の青年は交錯する

月と楽土の願いを叶えんと青年は足掻く

仮初めの世界で青年は、“自らの答”を得る

目次

| | |
|-----------------------|----|
| 兄弟紹介 | 1 |
| Seeking | |
| 廻り出す運命 | 4 |
| 再会 | 6 |
| “オレ”と“レイフォン・アルセイフ” | 11 |
| それでも廻り続ける運命 | 15 |
| 小隊としての距離 | 23 |
| “オレ”と“レイフォン・アルセイフ”の距離 | 27 |
| “レイフォン・アルセイフ”という存在 | 31 |
| 導くさ、お前が迷っているならば | 39 |
| 生きたいという意志 | 44 |
| 微かな違和感 | 46 |
| まだ、知るのは早い | 50 |
| 考察 | 56 |
| それぞれの思考 | 60 |
| めまぐるしく回る生活 | 65 |
| 追憶 | 68 |
| 新たな情報 | 73 |
| …緊張感…無いな、ここ… | 76 |
| 接触、戦闘開始 | 82 |
| 「当たり前だろ」 | 89 |
| 帰還 | 96 |
| 異変 | 99 |

| | |
|-------------------------|-----|
| “リーリン・マーフェス”という存在 | 104 |
| 出撃 | 111 |
| 騒動 | 116 |
| 思考 | 127 |
| 苦悩 | 133 |
| それぞれの思い | 138 |
| 一旦の平和 | 144 |
| 第十七小隊と第十小隊 | 147 |
| “サリンバン教導傭兵団”の男 | 154 |
| “ハイア・ライア”という男 | 158 |
| “リーリン・マーフェス”の存在 | 162 |
| 後輩の同級生と課長さん | 167 |
| 善と悪、そして世界とは、果たして | 171 |
| 電子精霊シユナイバル | 175 |
| 心配事と複雑・乙女ゴコロ | 180 |
| “サリンバン教導傭兵団”の目的 | 184 |
| “ハイア・ライア”と“レイフォン・アルセイフ” | 189 |
| 葛藤 | 195 |
| 心の底に押さえ込んだもの | 200 |
| 出来る事、出来ないこと | 204 |
| “意志”と“思い” | 208 |
| 対峙 | 211 |
| 確執 | 215 |
| 新たな決意と、思考 | 220 |
| それなら、いいですけど | 225 |

3人寄れば文殊の知恵、4人寄れば喧嘩が勃発

「……で、なんだこれは」

模擬小隊戦、開始

言葉の裏に

自らが出した新たな「答え」

「ただの人間」、そんな平凡なものに

「オレたち」を示す定義

病院にて

お前はそう言うけれど

キミにそう言ってもらえるから

消えないモヤは抱えられたまま

各々のすることの為

初志貫徹、彼の意志

その瞳に世界の覇者を見据え

茫漠の白に飲まれる

合流

R e r o t a t i o n

消えたその背中

自戒する少年、熟慮する青年

違和感を持つ男

行き交う人々

自己への疑念

その眼に映るもの

「僕」と「レイフォン・アルセイフ」

焦燥

揺れる水縹

364

混乱する都市達

372

戸惑い

378

気掛かり

382

疾走

387

息をつく間もない

392

歩み寄りをみせる僕の心

397

不機嫌な医者、響く声

401

闇を纏う少女は妖艶に笑みを浮かべ

405

枯れた瞳

409

「きつと大丈夫だ」って、僕は言い聞かせて

414

それが、どんな結果であろうと

420

ほんの少しでも、あの日々より良い未来を

427

もどかしさは拭えない

430

ウォルター・V・ルレイスフォーン

433

追想

439

〈天剣時代〉戦場に立つは、黒と銀

444

〈天剣時代〉赤、青の電光

451

変動

460

戦場を動かす

463

誘導

469

消えた姿の行方

473

拉致

479

躊躇

484

摩擦

489

| | | |
|-------------|---|-----|
| 存在の変革 | 5 | 627 |
| 存在の変革 | 4 | 621 |
| 存在の変革 | 3 | 616 |
| 存在の変革 | 2 | 611 |
| 存在の変革 | | 606 |
| 脆い虚勢 | | 599 |
| 逸らす | | 595 |
| 押し込める | | 589 |
| “色の無いカンジヨウ” | | 580 |
| 鋭利なコトバ | | 568 |
| その感情は、一体 | | 562 |
| 影が、寄る | | 553 |
| 黒の少女 | | 550 |
| 影が、忍ぶ | | 546 |
| 手を伸ばした | | 541 |
| それがお前なのだと | | 535 |
| 戦場に吞まれる前に | | 531 |
| 重なる瞳 | | 528 |
| 痛み | | 524 |
| 挑発 | | 520 |
| 裏舞台 | | 516 |
| 声が名を呼ぶ | | 510 |
| “剣”の到来 | | 505 |
| マイアス戦、開始 | | 500 |
| 軋み | | 495 |

| | | |
|--------|---|-----|
| 夏の訪れ | 2 | 678 |
| 夏の訪れ | | 670 |
| 似たもの集団 | 4 | 660 |
| 似たもの集団 | 3 | 649 |
| 似たもの集団 | 2 | 645 |
| 似たもの集団 | | 639 |
| 存在の変革 | 6 | 632 |

兄弟紹介

話の数が多くなってしまったので、こちらに移動させていただきました。

移動と同時に、加筆させて頂きました。

本作主人公名

ウォルター・ルレイスフォーン

黒髪に赤髪が束で右から左へ流れている。

短髪。左の黒髪を一つ束を作ってピンをつけている。

武芸科3年（ニーナと同級生）

十七小隊所属（アタッカー兼ディフェンス）

錬金鋼：基本形状は刀で鋼鉄錬金鋼、その他各種使いこなせる

基本剽技としては外力系衝剽。

化錬剽もしばしば使う（トロイアットが使っていたから）。

錬金鋼は第三十三話から「鋼鉄錬金鋼」から「黒鋼錬金鋼」に変更。

使用可能な剽技については変更無しです。

ウォルターは念威操者でもある為、こつそり重晶錬金鋼も制服の内ポケットに入れて持ち歩いている。

時々隠れて使っている時もあるが、鋼糸も使えるのでそつちを使つて方がウォルターとしては楽。

脳の作りは武芸者よりなので念威操者程的確な念威は使えない。

せいぜい軽く状況把握と通信が使える感じ。

ただ、元々頭脳明晰なので勉強面では困ったことは特に無い。

常識で困ることは多々ある（グレンダン慣れしすぎている為）

異民能力

- ・ 己に仇為すものすべてを破壊する
- ・ 数量限定で自らの願いを叶える
- ・ 演算、記憶力強化

元々ウォルターに武芸者としての力はない。
2つ目の異民能力で叶えたこととして武芸者になっているが最強。
ただ、純粋な武芸者ではない為、一瞬の隙を突かれる場合などでは不利な状況になりがちである為、ウォルターはあたりへの警戒をしていることが多い。

弟

ルウ・ルレイスフオーン

ウォルターと同じ年

ウォルターと双子である

ただし髪色は白基調に赤髪の束が左から右へ流れている。

短髪。ウォルターのつけているピンは元々左の髪をかきあげるためにルウがつかっていたもの。

訳あって肉体を失っている。

現在はウォルターの異界法則の元にウォルターの「中」でなんとか存在している状態。

時たま幽体として身体を具現できるが、消耗が激しい(精神力の)為しない。

声だけを外部に発信することは割とある(短篇集より)

暗い場所でそれをする周囲に怖がられるので意外に楽しんでい
る節がある。

異民能力

・ 自らの選択を実現する範囲を作り出す

(yes、noの単純な選択のみである)

ウォルターは都市外用スーツを付けずとも外に出られる。

それはルウの異民能力が効いて居る為である。

また、ルウは規模が小さい場合は複数領域を展開することが出来る。

しかしその場合は、展開する領域の位置が、展開の中心（ウォルター）から限られる。

Seeking

廻り出す運命

僕は、あのときのことを忘れない。

そう、あのとき、あの憎たらしくて仕方がなかった。

あのときの僕の目の前にいた、前座ヴォルフシュティンを。

いとも簡単に、手を抜いて僕をたたきつぶしたくせにそれなのに情けをかけてきた。

あの男を、僕は決して許さない。

「勝者、」

「待て」

「……………」

「まだ、終わっていないぞ」

少年は、地面に倒れている。

圧倒的な力の前に、少年は地に伏せさせられた。

少年が傷つき、疲弊しているにもかかわらず、少年の目の前に立つ男にそんな様子は一切見受けられない。

少年に、冷たい目線が刺さる。頭上より見下ろす一人の青年は、なにも感情を含まない、凍てついた眼で少年を見下ろしている。

「……………」

僕は睨んだ。ありったけの憎しみを込めて。

やらなくてはならないことがあるのに、それを全力でたたきつぶしてきた、この目の前の男を。

まるで、僕のことの一切が無駄であるかのように見下してくるこの男を。

「天剣が、欲しいか？」

男が問うてきた。僕は、答える。

「……………勿論」

「何故？」

「家族を、守るために、そのために、いま、ここにいる」
「……………」

目の前の男は、凍てついた眼はそのままに沈黙する。

そして、突如背を向けるとそのまま、手に復元していた錬金鋼、天剣を僕の目の前に投げた。

その天剣は地面に突き刺さる。とどめをさされるかと一瞬、身体が強張ったのを感じた。

「……………くれてやるよ」

「…は…？」

「そんなに欲しいなら、そんなもんくれてやる。…………オレの負けだ、審判」

「…………しよ、勝者、レイフォン・アルセイフ！ 敗者はウォルター・ヴォルフシュテイン・ルレイスフオーン！ 勝者であるレイフォン・アルセイフは天剣授受者決定！ レイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフに決定！」

「なっ…………?! ま、待て!!」

僕は目の前の「元」天剣授受者、ウォルター・ルレイスフオーンを呼び止めた。

ウォルターは足を止めたが、背は向けたままだった。

「なんで、」

「オレには、もう必要ないものだ。丁度、空きができるのを防いでいいだろ。それに、オレに敵わなくなっただってお前は十分強いから安心しろよ」

そういつて、そのままウォルターは僕の前から去る。

その姿はすぐに見えなくなった。

不意に、僕は視線を目の前に突き刺さった天剣へむける。天剣が霞む。瞳に、涙が溜まっていくのが分かる。

明らかに手を抜かれた試合であり、僕の敗北は決して居たものにも関わらず、情けをかけられた。

これに勝る侮辱は、人生でも決して無いだろう。

再会

「くくく」

ふと、笑い声が漏れた。何年か前の出来事を思い出している、思い出し笑いだ。

「どうした?」

「いんや、なんでもねえよ」

そういつて、机の上にだらりと伏せる。

呆れたように肩を竦めるこのクラスメートの反応も、いまではもう見慣れたものだ。いま、ウォルターは学園都市、ツエルニにいる。ウォルターとしては二度目の学園生活。

現在は武芸科3年。隣にいるのは同じ十七小隊の隊長であり、クラスメートでもあるニーナ・アントークである。

「そういえば、今日は入学式だな。誰か有望な武芸者でも居ると嬉しいんだが」

「居たところで、うちみてえな弱小小隊に入隊したいって奴はいねえだろうよ」

「そう言うな! まったく、お前と来たら。お前、人一倍の実力があるのに、全力を出さないからこうなるんだ」

「いやいや。オレ一人が頑張ったって、小隊のプラスにはなんねえだろ? その辺も考慮してんだよ、オレは。わかるか? この慈悲深さ。アントークもこれくらいの慈悲ってモンをだな」

「嘘をつけ、嘘を」

ニーナに睨まれ、今度はウォルターが肩を竦めた。

それと同時にウォルターは席を立ち、教室を出ようと扉へ足を向けた。そうすると、後ろから呆れた声がウォルターに話しかけてくる。

「まったく、本当にお前と来たら。今日の訓練、放るんじゃないぞ」

「へーいへーい」

適当な返事をニーナに返し、ウォルターは教室を出た。

入学式。ウォルターも約3年前にしたものだ。

当たり前前のことではある。この学園都市に入学する上で、入学式とは重要なものである。

「あー、だるっ」

首を回し、関節を鳴らす。そのまま廊下をのろのろと歩いていく。このような姿も、すでにツエルニではもう見慣れられたものだ。武芸科の制服を着ていなければ、誰もこのような姿のウォルターを武者であると思わないだろう。

「講堂で入学式だっけ？ 先に行こうかな」

混み合うと面倒だし、と呟きつつ、足を講堂へと向けた。

「結局、混み合ってるのな」

溜め息混じりにウォルターが人の波をかき分け、席へと向かう。

その過程のなかで、何か見たことのあるものを見た気がした。しかし、そのまま気にせずウォルターは人の波をかき分けていく。

立ち位置につくと、丁度剽の波動が身体に触れた。

ちらとそちらに眼をやると、どうやら他都市の諍いを持ち込んだらしい武芸科2人が剽を発していた。

「……………」

周囲が動揺しざわめく中、ウォルターは冷静にその様子を見ていた。興味がない、と言った様子で、くだらない低レベルの喧嘩に手を出す気にもならない。

人の波がウォルターにぶつかりながら、大講堂の扉へ殺到する。

その中でもウォルターは一步もそこから動くことはしない。

ウォルターの眼は、2人の武芸者の剽の動きを捉えていた。汚く、淀んだ剽の流れと色。それらに眉根を寄せる。

——無様だ

くだらない。

あのような、見れば視界の暴力にしかならないような無様なものをみせられて、こちらとしては低レベル、技術力のなさ。

すべてに反吐が出る。そう思いながらウォルターは鎮圧するべく足を踏み出した。

1歩目は緩やかに、2歩目は少し強く。3歩目は……過激に。

大講堂の床を蹴り上げる。剽は足裏に収束、弾けさせる。それと同時に速度は急上昇し、未だ押し寄せる人の波をすり抜けるようにして喧嘩の中心へと足を踏み入れていく。

それとほぼ同時。もうひとつ、この生徒にしては巨大な剽の波動がウォルターの髪を揺らした。

空気の波でさえ乱す事のできていないウォルターの髪をだ。

その剽の波動は、どこかで感じたことのある懐かしい剽だと思った。

どこだったかと考えて、その答えが出るよりも先にその姿を強化されているウォルターの視力が捉えた。

——— ああ……。あいつか

鳶色の相変わらずなぼさぼさの髪、あときは髪が長かったが、いまはぼさりと切ったらしい。

そしてやはり相変わらずの感情の沈殿した瞳だ。

ウォルターが天剣授受者として認め：てはいないものの、天剣を放りやった少年。

「レイフォン・アルセイフ……だっけか？」

その眩きをしたとき、丁度2人の武芸者のうち1人にたどり着く。

そのうちの1人の腕をねじ上げ、ひねると床に叩きつけた。

むこう……レイフォンも同じような事をしたようで、武芸者が倒されている。

よっこらせ、と言いつつウォルターは屈んでいた体勢からもとの体勢へ戻し、首を鳴らしながら、何気なくレイフォンへと視線を投げた。

武芸科の制服ではない。一般教養科の制服だった。だが、剽にはかげりがないどころか、刹那感じた剽ではあったものの、あるときよりも磨かれた剽の感触がした。

何故一般教養科の服なのかは気になったが、ウォルターはどうでもいいと思の外へそれを放った。

それよりもいま思考を占めているのは、そんなことではなく。

——— また騒ぎ起こしちゃったな……

であった。数日前に生徒会室に呼び出されて怒られ。

ニーナに怒られ。フェリには脛を数回打たれた。

原因は自分ではないのに理不尽だと思いつつ、一ヶ月は暴れないと十七小隊と約束していたというのに。

「まだ謹慎3日目だぜ……勘弁してくれよ」

大きく溜め息をつき、額に手を当てた。とはいえ結局見逃せば良かったものを見逃そうとしなかったのはウォルター自身の判断であるため、なにも解決はしない。

再び溜め息をつく。

とりあえず、一般生徒の防衛したってことでなんとか出来るかな？
と言いつつ、腰に手を当てた。

そんな中、控えめな声がウォルターにかかった。

「あ、あの……」

「……なんだ？」

声をかけてきたのはレイフォンだ。レイフォンは戸惑ったような声音でウォルターに問うてくる。

「あの、ウ……ウォルター……、ウォルター・ルレイスフォン……ですよね？ グレンダンの、元天剣授受者……ウォルター・ヴォルフシュティン・ルレイスフォンじゃねえぞ。オレはただのウォルター・ルレイスフォンだ。勘違いすんな」

「……やっぱり……。あなたなんですな。ウォルター……僕は……あなたに受けた仕打ち、忘れたつもりはありません」
「仕打ち？ オレは忘れたねえ。お前の言う“仕打ち”に対して……」

「……あなたは、なにひとつ変わっていない。その、上から人を見下した態度も。その酷薄な瞳も。……僕は、そんなあなたが大嫌いだ。ウォルター・ルレイスフォン」

レイフォンの憎悪のこもった視線がウォルターに向けられている。だが、ウォルターはそれを溜め息ひとつで流す。

「つべこべ五月蠅い。手え抜かれて、その上情けまでかけてもらって。」

だから屈辱でしたっけ？ああそうだろうな。だからなんだ？ 他都市の諍いを持ちこまない。それが絶対だ。『規律は守れ』よ？ 新入生レイフォン・アルセイフ」

ひらりと手を振ると、後ろでレイフォンの頸が刺すようにウォルター自身の背に感じられた。

よっぽど嫌われてんのか、オレ？ そう思いつつ、大講堂を後にした。

“オレ”と“レイフォン・アルセイフ”

「やっぱりか……」

数分前に生徒会室へ呼び出しがかり、ウォルターはどうやって言い訳をしようと再び思考を巡らせた。しかし、言い訳をするために巡らせた思考は、いつの間にか先程見たレイフォン・アルセイフの方へとちった。

レイフォン・アルセイフ。

孤児でありながら卓越した剣力と、サイハーデンという小規模武門の剣技を修め、戦う、というよりは生き残る、という方に特化した技能を持つ。サイハーデンが少数派でありながら残り続けたのは、生還者が多かったせいでもある。

天剣授受者の決定戦に、負け無しでウォルターに挑んできた。その瞳は乾燥していて、幼い頃から世の非情を味わってきた苦渋さがにじみ出していた。

それを自身も酷薄な瞳で見下ろしながら、感情を沈殿させながらも必死さを纏わせつつ振るう剣を、非情に弾き飛ばした。

子供ながらの必死さを纏わせた剣はウォルターが再びはじいたことにより、レイフォンを地面に縫いつける磔の釘と化した。

『天剣が、欲しいか?』

感情の沈殿した瞳は、問うたウォルターを追わず常に天剣を追っていた。

斬り合いのさなかでさえ、天剣授受者を追わず、天剣を追っていた。こちらを睨む眼は、ウォルターを睨んでいるつもりだろうが、ちらちらと天剣に眼がいつている。

『……勿論』

瞳が、睨みあげてくる。

『何故?』

それでもウォルターの態度は変わらない。

『家族を、守るために、そのために、いま、ここにいます』

『……………』

感情の沈殿した瞳を見つめる。

家族。それを守るために。そのために、ここにいる。ウオルターの脳裏に、ただひとりの肉親が過ぎった。

ただひとりの弟。ただひとつのこのために、身を墮としたひとりの哀れな弟。

おもむろに持っていた天剣を投げた。

身を強張らせたのが目に見えて分かった。だからこそ、言う。

『……………くれてやるよ』

『…は…?』

『そんなに欲しいなら、そんなもんくれてやる。オレの負けだ、審判』
審判が観客にレイフォンが勝者であると告げる。

観客が沸く。レイフォンの問いかけにウオルターは、さらりと答えただけで去る。

もう、語り合うことは無いはずだ。

「おっと」

思考に気をとられすぎて、生徒会室を通り越しそうになった。考えを現在に引き戻し、ウオルターは生徒会室の扉をノックした。

「失礼しますよ……………」

扉をくぐると、そこにはレイフォンが先客としていた。

意外な人物に一瞬眼を見張ったが、すぐに戻して生徒会長……………カリ

アンに眼をやった。

「…生徒会長、今回のことは不可抗力だって分かってくれませんか
ねえ?」

「勿論。今回のそのことは不問だ。だけど、彼の事で呼んだんだ」

「……………アルセイフの事?」

「そう。わたしだって彼の情報は持っている。だけど、実際見た……………
と言うより戦った君の方がよく知っているだろうと思ってね。君は

レイフォン・アルセイフくんを武芸科に転科させることをどう思う」

「……………どう思うって言われても」

ウォルターは頭をかく。

レイフォンにやる気が無ければまず話は進まないし、やる気がなかったとしても何処の小隊に入れるかでいろいろと考えが違うんじゃない。その上ウォルターがいる十七小隊へ入れるのは良くないような。

そんなことを悶々と考え、説明するのも面倒だと溜息混じりにさっくりと結論だけを口にした。

「……………やめた方がいいんじゃない？」

「だが、戦力の増強にはなる。君の助けにはなるんじゃないのかい？」
「ならねえな」

あつさりと言いつつウォルターに、レイフォンも驚いたがキャリアも驚いている。

「何故？」

「剽の量だけはいっちよまえだからな。扱いを知らないクソガキにや、改善する気がねえんだから何させようと無駄だ」

「…………別に、そんなことありません」

「オレには関係も無いしどうでもいいが、そう言うつてことはやる気があるつていう表明か？」

「武芸は失敗しています。やる気なんてあるわけが…………」

「…………それ、本当に失敗してんの？」

「は？」

ウォルターの言葉に、レイフォンが素っ頓狂な声を出す。

そんなレイフォンに対して、特になんとも思わないウォルターは平然と言葉を紡ぐ。

「…その様子を見るに、都市外退去になったつて感じだろ？ 金稼ぎに手え加え過ぎたつて所だろ？ お前の悪いところは…何でもかんでも自分でしようとする所じゃねえの？」

「あ、あなたに…っ、あなたに何が分かるんです？ 僕の何が、分かるつて言うんですか！」

レイフォンが明らかな憤りを見せた。しかしウォルターは相変わらずの酷薄な瞳で、冷徹な態度でレイフォンのそんな態度を見やる。

「知るかよ。大体な、何が分かるンだつつわれても、お前から何も言われなけりや真意なんて知らねえよ。お前から言われないンなら誰もお前の事なんか分かんねえし、分かつてもしねえ」

「……………」

低く重いウォルターの言葉に、レイフォンが黙った。カリアンは話の流れを見ていたようだったが、ウォルターに言う。

「それで、ウォルター・ルレイスフォン。君はどう思う？」

「……好きにしろ。オレは別に止めやしねえよ」

「……………」

「じゃ、オレは行くぜ」

ウォルターは足早に生徒会室を出ると、自宅……アパートに向けて歩を進め様としたが、ふと思いついて練武館に歩を進めた。

それでも廻り続ける運命

小さなころの記憶は、あまりない。

昔から武芸者として錬金鋼を握っていたから、早く過ぎていったから、早く過ぎていったから、またたからだ。

だけど、僕は感覚として一つ覚えていることがある。

それは、錬金鋼を握るよりも昔のこと。

顔も覚えていないけれど、あの人の手と、笑みだけ覚えている。

養父さんと何かを話していた誰か。

彼は、どこかデジャヴを感じるような笑みを浮かべていた。その後、僕と幼馴染が少し離れた所に立っているのに気がついた彼は、こちらへ歩み寄ってきて、僕の頭と幼馴染の頭を撫でていったんだ。あの時の手が、とても暖かくて。

誰かもわからないのに、撫でられたことが、ひどく……うれしかったことを覚えている。

「遅い！ 遅いぞウォルター!!」

「悪かったって、アントーク。生徒会長に呼び出されてたんだよ」

「ああそういえば。放送がかかってたな」

「だろ？ だからだよ、アントーク」

「ぬうう……。しかたないな……今回はそういうことにしておいてやろう。だが、次は許さんぞー！」

練武館に呼ばれていたのを思い出して来て良かった。ニーナの機嫌は悪い方に最高潮。

珍しくいたらしいシャーニッド・エリプトンに肩に腕を置かれつつ声をかけられた。

「で？ どんなお話？」

「はあ？ ンなときめく話なンギしてねえですけど？ エリプトン先輩」

「あくあく、つれないねー。後輩との親睦を高めようとしてるんじや

ないか」

「馬鹿馬鹿しい。大体、あんたは女限定でしようそういうの。ってことで特に報告は無し。黙秘権発動だ」

「本当に冷たいな」

シャーニツドがウォルターの肩においた腕をどけながらやれやれと肩を竦めた。

ウォルターはそれを無表情で返す。そして、ふとひとりいない人間に気がつき、ニーナに問うた。

「アントーク。ロス妹が来てねえみてえだけど？」

「ああ、フェリならいま新人を呼びに言っている。つい先程わたしも呼ばれてな。お前が来る2分前に。それで、十七小隊に入れる新人をひとりもらったのだ」

「……それって、講堂で暴れてた奴沈静化したひとり？」

「ああ。お前ともうひとりの、もうひとりの方だ」

「……会長何考えてんだ……」

「どうかしたのか？ その新人と」

「……インや…別に」

明らかにテンションの下がったウォルターにニーナが首を傾げた。しかしウォルターも相手に出来るほど忍耐が残っていない。

本当に会長なにしてんだと、その思いばかりが募る。そう考えていると練武館の扉が開いた。

入ってきたのは、十七小隊の念威操者を勤め、カリアンの妹でもあるフェリ・ロスと、先程話にも上がったレイフォン・アルセイフ。武芸科の制服を着ている事と、十七小隊のバッヂをつけていることから、恐らくはカリアンに押し切られたのだろう。

渋々といった様子が目立つレイフォンに、ニーナが説明をしていたが、あまりに遠回し過ぎてレイフォンがぼかんとしたまま、呆けた言葉を見た。

その瞬間シャーニツドの笑いが最高潮。勢いよく笑い転げる。

「うるせえですよ、エリプトン先輩。いい加減にしてください。鼓膜破れる」

「ぎゃはは！ 悪い悪い。しつかしニーナ、いまのはお前が悪い！」
笑いながらそう言い、シャーニツドがレイフォンに改めて事情を説明する。

ウォルターも改めて考えで整理する。レイフォンが武芸科の制服を着て、バッチをつけて、ここにいる時点でやることはひとつしか無いのだが……。

「テストだ。お前の力量をはかるのと、ポジションをするためのな。と言うことで、ハーレイ」

「うん。はい、これ。適当に練金鋼とつてね。そのかわり、設定を変えられることは出来ないから気をつけて」

「はい」

練金鋼メカニック、ハーレイから練金鋼を受け取ったレイフォンが練金鋼を構え、復元する刀身の長い、広刃の剣。

レイフォンは、部屋の隅にシャーニツドと共に立つウォルターを見て顔をしかめたが、すぐに切り替え、ニーナと向き合った。

「いくぞ」

レイフォンに向かってニーナが飛びかかった。鉄鞭の双牙がレイフォンに襲いかかる。それをレイフォンは剣で避け、流し、双牙から逃れる。

「おーやるな。ニーナの初撃を避けきった奴なんて初めて見た」

「嘘付け。オレもアントークの攻撃は凄いでただろうが」

「あんれ、そうだったっけ？」

さらりと流したシャーニツドの態度に、ウォルターはやや舌打ち混じりに話を切り替える。

「……大体、いつも言ってるだろうが。アントークは攻撃が単調すぎんだよ。特に初撃。組み合ってからにはまあまあだが、初撃は直線すぎて猪だぜ。と言ったって、それ以外の所は真面目丸だしだ」

「厳しいご意見だな」

「ちなみにお前は、初撃はいいがそれ以外はパターンが同じで読みやすい。初撃とあわせると、お前は単調すぎる」

ウォルターの言葉に相変わらずだな、とシャーニツドは頭を振つ

た。そのシャーニツドに、ウォルターは不機嫌そうに顔をしかめた。少し遠くにいたフェリが、ウォルターによつてくる。

「ウォルター先輩。あなたの目から見て、あの新入生はどう思いますか」

「んー？　そうだな…、アルセイフは…：まあ、昔よりも冴えは悪いな。剣の筋が歪んでる。それに、剣線が迷つてばかりで真つ直ぐと振れて…、」

「違います」

「…ん？」

「わたしのサボりの仲間になるでしょうか」

「……………」

珍しく真面目に聞いてきたなと思っていたら、いつも通りのフェリの言葉にウォルターが苦笑いをする。

「…：まあ、あえて、なんじゃねえかと言っておいてやろう」

「そうですか」

「ウォルターもフェリちゃんも適當すぎだろ」

シャーニツドが呆れたように話す。

後方より投撃物接近。速度8・7。接触まで3・6秒。回避補助必須人物存在、在。

———お？

久しぶりに来た感覚にウォルターは一瞬戸惑ったものの、即座にニーナとレイフオンの方を見る。そしてさつとフェリを抱え、横へ飛び退いた。

その瞬間に、レイフオンが壁に叩きつけられ、気絶して落ちた。叩きつけられる前に、ニーナの衝剄の感覚がしたため、おそらくレイフオンはニーナが放った衝剄をいなしきれなかったのだろう。

「…：あぶなっ」

シャーニツドがウォルターを睨みながら言う。ウォルターがフェリのみを庇ったためだろう。しかしウォルターはそんなシャーニツドを不機嫌顔で一蹴する。

「…：お前は武芸者だろうが。ロスは念威操者。だから自分でしろ」

「差別だ！」

「男に抱えられて嬉しいか？」

「嬉しくねえな」

至極真面目言ったシャーニツドに、ウォルターはやっぱりな、と呆れた笑いを零す。

ウォルターは抱えていたフェリを降ろすと、床にのびたレイフオンの額をつつく。

「ん、完全に伸びてる」

「……すまない」

「あん？ アントーク、どうした？」

「いや……新入生にちよつと厳しすぎたかなと」

「……関係ねえだろ。……こいつには良い刺激になったんじゃないの」

ウォルターが面倒くさそうにレイフオンを抱える。

「ウォルター？」

「アントーク、オレはアルセイフ連れて医務室行ってくるわ。ってことで。ばははい」

「ば、ばははいって……」

ウォルターはニーナに断り、レイフオンを抱えたまま医務室へと向かった。

「つたく、地味に重くなりやがって」

溜め息をつきながらウォルターはレイフオンを医務室のベッドに降ろした。手をふらふらとさせながらどきりと椅子に座り込む。

「はあ……。あん時は、まだそんなに重くなかったのにな」

ウォルターは、ふと天剣授受者の決定戦のことを思い出した。剣を投げつけ、一旦姿を消したウォルターは、歓声がどよめきに変わったのを感じて、ひき戻った。そうしたら、レイフオンが地面に伏せたまま気絶していたのだ。

呆れながら抱え、備え付けの簡易医務所においてあるベッドに向かって放り投げた。

あのときは凄く軽かったな、と思いを馳せた。

しかし、彼と出会ったのはもつと昔にもある。まだ、本当に赤ん坊の頃。記憶にもないであろう時期。ウォルターが一度目にツエルニに訪れ、「獣」と共に過ごしていた日々の中で、それはあった。

その後、グレンダンで起きた珍事件で再会したのだが、正直な所確証は無い。この鳶色頭があ那时的子どもだと証明するものを、彼が持っていないからだ。

——だがまあ、結構気にしてたはしてたか、前から

ウォルターはふむ、と顎をつまみながら考えた。

時々サイハーデン孤児院にも顔を出していたし。お陰で彼らの養父のデルクとはそれなりに顔なじみになっている。あの時は天劍授受者だったから、妙に甲斐甲斐しくされた。それが鬱陶しくて、長居をしたことはなかったが。

ふと、ウォルターが視線を向けた椅子の隣にある棚の上に、ペンがあるのに気がついてひらめく。

「ま、手間かけさせてくれたことのお礼って事で」

ペンをキャップから引き抜き、きゅきゅつ、とレイフォンの顔に落書きする。

「……つく」

「……なにしているのですか?」

「お、ロス。これこれっ」

「…本当になにをしているんです」

静かに入室してきたフェリが呆れた声を出す。ウォルターは心底楽しそうにみせる。

レイフォンの顔には落書きがされている。それも意外に巨大で、繊細にかかれている……

「カイゼル髭、ですか」

「うめえだろ」

「そうですね」

「お前生返事だろ」

「いいえ?」

フェリの相変わらず淡々とした答えにウォルターは溜め息をつき、ペンにキャップを被せる。

「じゃあオレは行くな。アルセイフ頼むぜ」

「え、ウォルター先輩は出て行くんですか」

「……寂しい？」

「ち、違います……！」

「じゃ、オレは行くぜ？ 頼むな」

フェリの頭を一撫ですると、そのままウォルターは医務室を後にした。

夕暮れ時の肌寒い風がウォルターの頬を撫でていった。風のながれた方向に、何となく首をまわした。

夕日だ。その光の眩しさに目を細めた。

神々しい赤が地平を染め、その上から深い黒……闇が迫っている。

「……………」

黒。闇。

どうしても、彼らを思い出す。いや。思い出さなくてはならない。

ウォルターは近い未来この世界に来る災厄を本当の意味で知っている。

その災厄の事も、何故生まれたのかも、何故こうなったのかも、この世界の成り立ちも。

だからこそ、ウォルターはここにいる。

かつての仲間のために。仲間が守ろうとしたものを守る手助けをするために。

その為にここにいるのだから。

学園都市、ツエルニ。新たな運命の紡ぎ手。

ウォルターがグレンダンにいたときには運命は廻らなかった。

しかし、もう一度ツエルニに来てみればどうだ？

運命は皮肉にも事を知っているグレンダンではなく、何も知らない

様な少年少女達を巻き込んで廻りだした。

廻っている、と言うだけであれば、グレンダンでも廻ってはいたのだ。しかし、このツエルニで大きな変化が訪れている。

「この変化は、吉とでるか凶とでるか。見物だな」

かつて、このツエルニには獣がいた。ツエルニの暴君と呼ばれるに至った男が。

その男は、独自の運命の紡ぎ手。いわば、イレギュラーに近いもの。

そして、このツエルニには、まだ闇が残っている。あのとき、ジャニスも言っていた。

『眠り姫は目覚めやしない。闇は震えたかしら？ 月は黙っている』

そして獣は呻いた。

「……………」

はた、と思考から地平に目を戻すと、すでに夕日は闇に飲まれ、月が昇っている。

「月」

しばらく考えに耽った後、帰ろうと踵を返した。まだ廻りだした運命だ。

修正も、ある程度廻ってからしか出来ない。

小隊としての距離

ニーナが怒っている。

そんなことは、この野戦グラウンドにたちこめる空気だけでウォルターには充分だった。

木に隠れるようにして、戦いの状況を見守る。

「……」

ふう、と呼吸を乱さない程度の溜め息が聞こえた。レイフォンの溜め息だ。

レイフォンの手にはハーレイが作った新しい練金鋼、青石練金鋼が握られていて、この緑と茶色ばかりの世界では、ひとつの宝石のように輝くため凄く目立つ。

本人もそれに若干溜め息をついているようだった。だが、おそらく溜め息の大きな原因はそれではないだろう。

——戦況がうまく進まない、そんなところだろうな

ウォルター自身もそれは経験したことだ。グレンダンでは集団戦線などする必要もなく、たったひとりで汚染獣討伐に出た。

その為、戦況は自分の動かしたい放題、好きなように戦えば良かったのだ。

とにかく、倒すことが出来るのならば。

集団戦線に不慣れなうえ、自分が好きなように動けないのはレイフォンにとつては初の事だろう。

幼少期から、ほぼ個人戦をやっていたに近い。

幼性体や雄性体程度ではグレンダンはどよめきひとつ見られない。そして、十代前半というレイフォンでさえも戦場に出してもらった。

汚染獣との戦いは、グレンダンではほぼ一匹に対してひとりという感覚で行われていた。

いま戦っている機械に対しても、おそらくレイフォンはそういう心持ちなのだろう。

「だが、あまいな」

ウォルターは呟く。ここはグレンダンではないのだ。

学生は敵一体でさえひとり倒すなど不可能。そんなところで、敵一体に対しひとり感覚で戦っているはいけないのだ。

そうならば、明らかに死者が出る。そんなことは目に見えている。それは初心だ。それを忘れている。いや、もしくは知らないのかもしれない。

あの激烈な世界でしか生きていけないのだから。

ウォルターは隠れていた木から飛び出し、一番近くにいた自動機械に蹴りかかる。

自動機械に蹴りは直撃し、横転した。

横転したのを確認すると、ウォルターは即座に飛び退いた。

そこへシャーニツドの遠距離射撃が着弾し、ウォルターの目の前の自動機械は活動を停止した。

「次」

きゅ、と足を軸に回転すると、丁度後ろにいた自動機械の斧を横した武器が背を掠めていく。

しかし、それもウォルターには分かり切ったこと。横転を確認した時点で、後ろにもう一体いることには気がついていた。

そして、それを迎撃出来るだけの時間はあった。それをあえてなげうったのは…

「アルセイフー！」

「っ、はい！」

ウォルターのかけ声にレイフォンが応え、自動機械に切り込む。その姿を見て、ウォルターは顔をしかめた。

剽の色が恐ろしく悪い。あの時は咄嗟だったせいかわりと澄んできたが、いまは大講堂で見た時よりも悪い。

斬線に残った剽の煌めきが淀んでいる。そして何より……

「切り込みが浅い！」

ウォルターは舌打ちをしながら蹴りを放ち、自動機械を完全停止させる。

レイフォンはややしまつたという顔をしたが、それには目もくれず、ウォルターは自身の黒鋼練金鋼の刀を地面に突き刺した。

外力系衝剄を化練変化、煌爆^{こうぱく}。

野戦グラウンドを光が満たす。点々と仕掛けたウォルターの伏剄が、ここで威力を発揮する。

ウォルターの伏剄は無秩序に光を放たず、一点の方向に向かつてのみ照射された。

自動機械の目眩まし目的と、あとは熱による機器の破損が目的。

ここから出来るならばニーナが鉄鞭で完全に停止させてくれれば良いのだが、そもいかない。

ニーナは一步踏み出そうとするものの、気力のみで戦っている疲労状態だった。

——ああ……もう

ウォルターは呆れて化練剄を放つ事をやめた。その瞬間、勝敗は決した。

野戦グラウンド近くの休憩所に入った十七小隊は、みなそれぞれ休み方で疲れ切った身体を休めようとしていた。

ウォルターは例外で、誰よりも動いていたにもかかわらず相変わらぬの平然顔で鞆に荷物をしまい、てきぱきと片付けをしていた。

ニーナはというと仲間達の前に立ち、顔には沸点間近の怒りがあつた。

「急造チームだ。連携がとれないのは分かっている。分かっていたことだ」

ニーナはそう言いつつ、仲間達に自分が思うよくなかった所を指摘し始め、それでも適当に言葉が流されていく事にニーナが苛立ちを持ち始めた最後に、ウォルターへ話がふられた。

「ウォルター、お前もそうだ。最後の前のシャーニッドへの射撃配慮は良いと思っただが、最後が駄目だ。何故あそこで化練剄を放つのをやめた？ 化練剄を放つことをやめなければ、レイフォンやわたし、またはシャーニッドの射撃があつただろう」

「…馬鹿言え。そんな無駄な事するかよ。ばかばかしい」

ウォルターがバツサリとそう言い返す。ニーナが眉をつり上げ、何かを言いたげに口を開こうとしたが、それより先にウォルターは口を開いた。

「なにより、こういつちや悪いが今回はアントークの体力不足と作戦の立て方に問題があった」

「わたしに、だと?!」

「そうだろうが。最後に一番近かったのはお前だ。その場合、他がフォローに走るよりもお前が走った方が確実に、的確に仕留められただろう。だけど、今回は相手に振り回されすぎだったせいで全員の体力配慮が足らなかった。そう言うことだ」

「…し、しかし…!」

「オレが行けば良かったってか？ 馬鹿たれ、さすがに衝剳使つていようと活剳使つていようと素手で機械殴るとかオレドンだけチャレンジャーだよ。確実に拳痛むからね。治療費請求するぞ」

ウォルターが冗談を含めながら話す。ニーナは少し頭が冷えてきたようだったが、やはり不服そうな顔で俯いた。

「つてことで。オレ、バイトあるから行くぞ。アントークも急げよ。お前もあつただろ?」

「あ、ああ……………そうだが」

「んじや。時間には遅れるなよ」

ウォルターは自分の荷物を持ち上げ、さっさと退室していった。

“オレ”と“レイフォン・アルセイフ”の距離

重低音の機械音が、ウォルターの鼓膜を揺らす。

機械音が響くこの場所は、都市の最深部と言っても過言ではない、機関部だ。

都市を動かす中枢となっている機関部。その清掃活動をしている。

「よっこおらせっ」

油分などを含んで汚れたモップを入れたバケツは、水と混ざり合い、重さを増している。

気合いを入れて持ち上げ、水の組み替えへと向かう。

「ルレイスフォーン！」

「あー？ どうしたんすか？」

機関部清掃での先輩からの声に、ウォルターは気の抜けた返事を返す。

「この後輩と当たってくれ」

「面倒です」

「そういうな。頼んだぞー！」

投げやりな言葉を返したものの、あちらも投げやりに、しかも押つけて去っていく。

ウォルターはそれに顔をしかめ、さらに現れた後輩に顔をしかめた。

「……………アルセイフ」

「……………よろしくお願いします」

無言のまま、清掃を進めていく。

話さないと言うかは、話せない、話したくないと言った雰囲気の中、ウォルターとレイフォンは黙々と作業を進めていく。

—————
なんだかねえ……………

ふう、と軽く溜め息をつくど、ズボンに入れ込んだ懐中時計を引っ張り出し、時間を確認する。

丁度食事が取れそうならい時間はある。ウォルターはレイフォンに声をかけた。

「アルセイフ」

「……………なんですか」

「……………なんだよ、その間は。…弁当持ってくるから、お前そのバケツとモップ、洗い場のオレのところに突っ込んでいてくれ。後でやるから」
「なんで僕が、」

あなたの分まで……………と言おうとしたのであろう。しかし、言葉を言い切るよりも先に、レイフォンの腹が声を上げた。
ぐううううううう……………

「……………」

「……………」

やや沈黙の後。

「……………つく」

「つわ、笑わないでください!!」

「いや、は、ぶはっ、何だよ、つく、ははは！ 分かった分かった、早く持ってきてやるよ。だからそれもってつてくれ」

腹を笑いで痙攣させたまま、ウォルターが歩いて行く。

レイフォンは顔を赤くしたまま、とりあえずとモップをしまいに
行った。

「いただき、ます……………」

「いただきます」

2人同時に、ぱくりと口へサンドウィッチを運ぶ。そのサンドウィッチに、レイフォンが眼を輝かせる。

「美味しい」

「そりゃあ良かった」

「え？」

「オレのお手製」

「え?!」

「いやほんとに」

ははは、と笑うウォルターに、レイフォンがやや唾然とした顔を向けた。

弁当箱ではなく、市販のプラスチックケースに詰められたそれは、店で売っていたものを購入してきたものだとはかり思っていたと言う顔をレイフォンがした。

それにウォルターは苦笑いを返しつつ、サンドウィッチを食べべきり、次のサンドウィッチへ手をつける。

「ま、だからどうってことあねえだろ？ 気にすんなよ」

「……………あの」

「あん？」

「……………あなたは、あのときどうして」

レイフォンが口を開いた。あのときとはやはり天劍授受者決定戦の時の話だろう。

ウォルターはそれに渋面を作りつつ、サンドウィッチをくわえ、横に置いておいたドリンクのカップを手にとった。

「答えてください！ ……確かに、あなたのあのときの判断は正しかったのかも知れない。でも、それでも、あなたの真意が分からない……………」
強く意思を持った言葉。それでもウォルターは呆れたような眼でレイフォンを見た。

サンドウィッチを口に入れ、カップに口を付ける。

「あのとき言った通りだ。オレに、アレが必要なくなった」

「その必要なくなったって言うのはなんですか？ 天劍授受者として、ではなく、その位置に居ることが必要だったんですか？」

「……………まあ……………な。オレがしたいことのために、あの地位が必要だと思っていた。しかし、あの地位はオレに必要なかった。オレは関わる運命に居る。例え、それとして居なくても」

「……………話が、読めません」

「それはそうだろう。別に、お前に分かって欲しいとも、分かって貰おうとも思わねえ。んなこと、それに関われなければ知る必要がないしな。……………何よりお前は、絶対に知ることになるからだ。いまはまだ時じゃねえ。それだけだ」

「……………」

ウォルターの言葉に、やはり意味が分からず困惑する。

ウォルターは不敵な笑みを浮かべ、サンドウィッチの最後のひとかけらを口に放り、カップの中身を喉の奥へと流し込むと立ち上がる。だが、立ち上がったウォルターの服の裾をついとレイフォンが引つ張り、上目で見えてきた。

「…………それは…………僕がいずれ、ウォルターの関わっている『運命』に関わることになる、っていうことですか…………？」

「…………さあね。実際は知らん。過去を知っていても未来を知ってる訳じゃねえんだから」

「…………………………………ですか」

「ま、急がば回れ。落ち着いていけ。まだ時間はある」

「………………………この学園は、6年制ですもんね」

「………………………そういう意味じゃあ無いんだが……………まあ、良いか。面白いから」

「え？」

「ほら、さっさとそれ食べ。清掃再開すんぞ」

「あ、はい」

—————少し反応が素直になったか？

レイフォンの反応の変化に、ウォルターは首を傾げたが、まあいかと頭の隅へ放った。

“レイフオン・アルセイフ”という存在

小隊戦。それは、小隊同士での実力がはっきりとわかる戦いだ。十七小隊もまた例外でなく、小隊であるからには小隊戦には参戦する。そして今回は、レイフオンが加わってから初となる小隊戦だった。

緊張するからと言ってトイレへ行ったレイフオンの顔が浮かばれないのを見て、ウォルターはいつもの調子で話しかける。

「どうしたんだよ」

「……いえ、その……」

一蹴されると思っていたウォルターは、口ごもったのに眉根をよせた。それに気付いたのか、レイフオンがやや俯き気味に答える。

「会長が……」

「ああ、あいつな。あんま真面目に相手すつと身が持たねえぜ」

「……あなたが言いますか」

「お、ようやく調子が戻ってきた？」

「……僕を、元気づけようか？」

レイフオンがウォルターにとって心外な言葉を言ってくる。

ウォルターは虚を突かれた顔を一瞬したもの、すぐさまいつもの不敵な笑みへとかえる。

「馬鹿か。足手まといが居ると面倒くさいだろってだけだよ」

そういつてつん、と人差し指でレイフオンの額を突く。

「隙あり」

「っ！」

「氣い張れとは言わねえが、締めてかかれよ。例え“お前”といえど、不意を突かれりや危険なんだぜ？」

「こ、子供扱いしないでください！」

怒ったレイフオンの頭を一撫でし、「その元気がありや大丈夫」と言つて、野戦グラウンドに足を踏み入れた。

先に行ってしまったウォルターの背を、レイフオンは撫でられた頭を押さえて茫然と見送ってしまう。

レイフオンの視線は腰に付けられた剣帯……その中の練金鋼に向けられた。

——僕は、一度は剣を捨てた。だけど……

ウォルターの、あの不敵な笑みが浮かぶ。相変わらず真意が読めない。

しかし、昨日少し落ち着いて話しをしたからだろうか。あの笑みが頼りになる気がした。

「…………やるしか、ないのかな」

レイフオンも、野戦グラウンドへ足を踏み入れた。

砂煙が舞い、活剋で強化された嗅覚に砂塵のにおいが克明に漂ってくる。そして、いまや戦いの場所と化したこのグラウンドに漂う喧騒の空気。

「ああ、面倒くせえ……………」

「ウォルター、その性格直せと何度も言っている筈だ」

「面倒くさいんだよ、大体な……」

言葉を繋げようとしたウォルターを放って、ニーナは丁度来た相手の小隊の隊長に挨拶をする。だが、ただ嘲笑われただけで、そのまま去って行かれてしまう。

ニーナが唇を噛み締めた。ウォルターは溜め息をつき、ニーナの頭へ手を乗せる。

「な、なんだ！」

「落ちつけ、アントーク。焦るな。乱されたら終わりだ」

「……………す、すまない」

「わかりやいいさ」

気が利くやつだ、とニーナがウォルターへと視線を投げると、ウォルターは軽くウインクを返す。

それにニーナがやや反応するが、即座に集中する。

「さあて……………始まるな」

開始のブザーが鳴った。

アタッカーとしてニーナ、レイフォンが走る。

ウォルターは2人の剽の奔りに眼をやったが、それを見て顔をしかめる。

——アントークはいつものことだが、アルセイフ、迷ってんなあ……

バックでデイフェンスに徹しているウォルターだが、剽は中々奔らない事にやや苛立っている。

練金鋼が……というより、武器がいつもの物ではないこの感覚は、どれだけ使っても慣れない。

真面目にやるのも馬鹿らしいので、適当に片足重心で練金鋼を復元し、弄ぶ。

(いいんですか)

「何がだ？」

念威端子が後ろに来ていたのは知っていた。十七小队念威操者、フェリ・ロスだ。

(真面目にやらなくて。また隊長が怒りますよ)

「どうでもいい。つうか、この小队戦こそどうでもいい」

(いいますね)

ウォルターは笑いを零す。

フェリも言うが、フェリこそ十七小队サボリ魔といえるだろうに、そういつてしまえるのはフェリだからだろう。

「あ」

(どうかしましたか)

「アルセイフがやられつつあるな」

(それで良いのでは？ 無駄にやる気を見せるとあの人喜んでしまいます)

「そうかねえ……。オレとしては、会長よりもニーナ・アントークの方が怖いね」

ウォルターは苦笑混じりに呟く。

フェリの端子からやや不思議だと言った雰囲気が漂って来たので、

ウォルターは練金鋼を基礎状態に戻しつつ言う。

「手加減されてて、それなのに勝てたみたいな風にされてたと知ったらあの隊長のことだ、激怒するに決まってるだろ？」

(成程)

「しかもオレそれ知ってるからよ、オレに飛び火してくンだぜ、絶対」
(そうですね)

「人ごとみてえに……。人ごとだけどなあ」

後方に敵反応ふたつ。現在フェリ・ロスへ直進中。避けられる可能性は0・2パーセント。

演算ではじき出された情報にウォルターはふうと溜め息をついて、駆けだした。

フェリの方へ。

(っ！)

「おおっとー！」

走りながらウォルターは手早くフェリを抱え、左足を軸にして旋回、そのまま木を足場にして地面にほぼ平行に走る。

「……っ!!」

フェリが声にならない叫びをあげているが、それにはほぼお構いなし。ウォルターは空いている方の手で練金鋼を復元する。

「っくー！」

2人とも接近型の武器を装備している。しかも男だ。

ウォルターは眉根を寄せて相手を睨み付け、復元した練金鋼……刀に刃を込めて1人目に頭上より高速で振り下ろし、その勢いで横薙ぎを放ち、2人目も昏倒させる。

「か弱い女の子相手に男が2人がかりとか、情けねえンじゃねえのか、あ？」

ごっつ、とやや厚底のブーツで相手の頭を踏む。

ウォルターにかかれば、ほんの少し力を入れるだけで相手の頭蓋を踏み砕き、内容物を見るも無惨な姿に変えることは容易だ。

そしてウォルターにはそれができるだけの非情さがある。だがしかし行う気にはならず、行うわけにもいかない。ここは学園都市なの

だ。

足をどけると、抱えたままだったフェリをゆつくりと地面に降ろす。

「大丈夫か？ 悪かったな、怖い思いさせて」

「べ、別に……この程度、平気です」

「……そうか」

明らかな強がりだったが、ウォルターは苦笑いと共に流す。それと同時に、強い剉の波動を感じた。

「……アルセイフ」

「……レイフォン……ですか？」

「ああ。本性みせたみてえだな」

「……裏切り者」

不機嫌全開の様子で言い放ったフェリに、ウォルターは渋面を作りつつやれやれと肩を竦め、フェリの頭に手を乗せる。

「そう言っただけやるなよ。いろいろあるんだよ、若い子は、さ。きつと近々大きな事が起きる」

「……？」

「その流れに足を絡め取られる。気をつけな」

「……？……？……？ はい」

終始意味が分からないと言った様子だったが、ウォルターは「良い子良い子」と言っただけ頭を撫でてフラッグの方へ駆け出す。ブザーが鳴り、終了の合図があった。

「お、終わったか」

フラッグの元へ行くと、レイフォンを囲んでシャーニッドやハーレイが嬉しそうにしていた。

その中でニーナは、明らかに傷ついた顔でレイフォンを愕然と見、ウォルターが来たことに気付くと、その表情を怒りに変えた。

「ちよつと、来い」

「あー、面倒くせえからい、」

「来い」

否応無しに引きずられていく。ウォルターはふう、と溜め息をつ

き、仕方なくついて行く。

小隊戦で勝ったというのに何故不機嫌なのか、理由は分かり切った事だったが、馬鹿馬鹿しくて考えるだけで頭が痛くなった。

「ウォルター、お前は知っていたな。レイフオンがあそこまでの手練れだと」

一足先に更衣室に帰ってきた、というかこさせられたウォルターは、凄い剣幕でニーナに睨まれていた。しかしその怒りを買っている本人であるウォルターとしては、涼しい顔をしたままである。

「えー、あー、まあねえ……………」

「答えるー!」

「……………知ってたよ」

溜め息混じりに答えると、ニーナは泥にまみれつつも綺麗なその顔にさらに怒りをにじませた。

「何故黙っていた」

「会長と、本人の意思を尊重したまでだ。それに、オレは別にアルセイフが本気だそうと出すまいとどうだつて良かったんだよ、別に」

「……………わたしは、あの手合わせで、筋は悪くないからこのあいだに鍛えれば言いと思っていた……………」

ニーナが喪失感を含んだ声で呟く。ウォルターは特に何も感じないと言った瞳でニーナを見下ろす。

「だが、あれはなんだ?! そんなものの次元を越えている……………いや、訓練の必要すら感じない程、あいつは……………っ!!」

ニーナがウォルターの肩を掴んで、大きく揺さぶりながら叫ぶように言ってくる。

「……………明らかな事は、一朝一夕の訓練をしていたという訳ではないと言うこと。何より、この学園都市の武芸科で学ぶことは、あいつに何一つ無いと言うことだ……………!」

「……………まあ、個人戦で学ぶことあ、あいつにやねえかもな」

「……………!」

ニーナが強く唇をかんだ。

「だが、あいつがここで学ぶことはたくさんある。そして、お前もあいつについて知るべきだ」

「……？」

「お前は、あいつの先輩だろう。そして、小隊の隊長だろう」

「……だが、わたしが伝えられることなど……あいつが学ばなくてはならないことなど、無いのではないのか？」

ウォルターは大きく溜め息をつき、ニーナの肩を掴んだ手を離させ、言う。

「いいか？ あいつは個人で戦ってきた。いつもひとりだった。あいつ以外に、強いヤツがそこに居なかったわけでもない。だが、アルセイフの生まれの場所では、あいつしか、他を救う手を伸ばせなかったんだ。

だから、団体戦どころか、誰かと何かを、自分1人で抱え込まない、誰かを頼る……そんな簡単なことができないような、1人の殻に強がつて籠もってるんだ。幼い頃から強かったから、強さで学ばなくてはならないことすべてをすつ飛ばしてきた。だから、学園つていうこの場所は、あいつにとって良い刺激になるだろう。

お前もあいつと似て、やると決めたことは誰にも頼らずに、自分の手で護ることに固執する。そこが悪いところだ。だが、その猪突猛進ぶり、ンでその意志の強さは、お前にしかない事だ。それを、あいつに教えてやればいい。

……まだお前にもあいつにも分からないだろうが、戦う理由を他者に預けすぎたヤツは、ある時ぱったりと弱くなるモンなんだよ」

「……ならわたしは……、まず、何をすればいいのだろう」
ニーナの力の抜けた問いに、ウォルターはやはりあきれ顔で言った。

「だから、知れば良いんじゃないの？ 初歩は相手を知るところからだろう」

「そ、そうか！」

やや頭の冷えた様子で、ニーナは勢いよく飛び出していった。

恐らくは、生徒会長……カリアンのもとへ行くのだろう。

そのニーナの背を見届け、ウォルターは着替えをはじめ。

自嘲気味な笑みを浮かべながら。

「諭すなんて、オレの性分じゃねえんだがなあ」

それもまた青春か？ などとガラにもない事を考えつつ、機関掃除へと向かった。

導くさ、お前が迷っているならば

ブラシをかけながら移動していると、突如大きな揺れがウォルターを襲った。都震だとすぐに分かり、ウォルターは戦闘態勢をとる。

ウォルターの強化されている聴力が都市のある一方で、何か蠢く音を拾い上げた。

「……………汚染獣か？ 幼性体…………この程度なら、いけるか？」

そう呟きつつ、ウォルターは左の親指でぴしり、と髪につけたヘアピンを弾く。

「ルウ、出番だぜ。外縁部から数メートルおいて領域を作ってくれ（分かった）」

ヘアピンを叩く動作は簡単な余裕の現れに過ぎない。

ルウとは「話そう」と思えば思考のみでも話すことはできる。ウォルター自身が空間支配の能力によりルウを入れる「箱」を内部に構築しているのだ。

物理的ではないが、その為にある意味ルウはウォルターの中にいると言っても過言ではない。

ウォルターの言葉通り、外縁部から数メートル置いて領域が作られる。ルウの作り出す、拒絶する力を応用した領域。それにより、そこ以上は汚染獣の進行はあり得ない。

「行くぜ」

ウォルターは跳躍する。パイプに手をかけ足をかけ、上へと上っていく。と、茫然と立つレイフオンの姿を視界が捉えた。

うっすらとニーナの劉の残滓があったことが気になって、ウォルターは足を止め、そこに立つレイフオンへ声をかける。

「どうした」

「あ……………ウォル、ター……………」

「ンだよ、ンな黄昏れた顔しちゃってまあ」

「……………僕、分からないです」

「何がだ？」

「僕は、グレンダンで武芸を失敗しました。正しいと思って行ったのに、最終的にはただ非難の的になっただけ……。もう、僕はあんな風になりたくない。そして、もうどうしようも無い……。なのに僕はいま、再び剣を持つか持たないかなんて考えている……」

どこか疲れた顔をして、そう、ウォルターに言う。レイフオンのその苦渋に染まった瞳にウォルターはやや頭をかきつつ、眉根を寄せた。

「……まあ……。な、失敗は誰だって怖いだろうよ。オレだって怖い。だが、それを恐れたら進むことすらできなくなる。お前がグレンダンで失敗した理由はなんだ？」

お前がすべてをすべて、自分だけで片付けようとしたからだろう。そりや、昔はお前しかそこまでの実力を持ったヤツが居なかつたかもしれない。けどいまは、同じ志を持った奴らがたくさんここには居る。

オレが居る。そうだろう？」

レイフオンが驚いたような、安堵しているような、そんな顔でウォルターを見上げてくる。

ウォルターはそれにやや居心地が悪そうに頭をかき、苦笑いをしながら言った。

「まあ……。なんだ、お前のことは周りが支えてくれる。何よりな、お前がそののでけえ力に振り回されて、どうしようもねえときとか、お前が道を踏み外しそうなときは……」

そこで一拍おき、ウォルターは背を向けて言った。

「オレがお前をただしてやるよ」

「！」

「道を踏み外したことがあるからこそ、誰かを裏切ったことがあるからこそ、見えるモンや、教えられるモンがある。威張って言えることじゃねえ。けど、支えてやることはできるから」

「……………ウォルター」

「それにな」

ウォルターはやはりバツが悪そうな顔をしていたが、ある種の自信

を持った表情で言う。

「お前は間違ったことをしたと思ってるのか？」

「……………あのときは、それが最良だと思っていました」

「だったらそれでいいじゃねえか」

「……………え？」

レイフオンの間拔けた声。ウォルターはそれに苦笑いで応じる。

「正しい事をしたと思ってるのなら、誰がどう言おうと胸張ってる。お前はお前だ。誰に否定されようと、お前が信じたことを貫き通せ。お前に少なからず救われたヤツは居るんだ」

ウォルターの言葉は、過去に何かがあったことをにおわせる言葉のようにレイフオンには取れた。しかし、だからといってウォルターの過去を知らないいまのレイフオンに、それをくみ取ることとはできない。

「……………な、アルセイフ」

その笑みは、レイフオンが初めて、ウォルターへの憎しみを持っていたことの外で見た笑みだったかも知れない。

だからこそ、その去って行く背が、笑みが、たくましく、頼りがいのあるものに見えたのだろう。

(格好いいこと言ったね、ウォルター。流石僕のウォルターだね)

「まだんなこと言うか。痛いめ見たからいまの状態になってんだろ、ちよつとは反省しろよ」

(やあくだよ)

「は……………まあいいや。さて、ルウ。『外』に出るから頼むな」
(はあい)

快いルウの返事が返って来た。ウォルターは調子良いな、とやや苦笑しながら屋根の上を走る。

外縁部の幼性体の密集地へ向かう。

ルウの領域が働いて居るようで、そこまで目立った損害は都市に見られない。ウォルターは左腕にはまった金の腕輪をみやる。

「……さて……行くか」

腕輪を指で弾くと、腕輪は形を一旦崩し、ウォルターの手の中で馴染みのある刀の形へと変わる。錬金鋼と似て異なる、ウォルターの為の武器だ。

力の奔りに淀みはない。

踏みだそうとした所で、背後に見知った感覚がして振り返ると、少し後ろにフェリの念威端子があった。

「ロス。どうした？ こんな時に」

（レイフォンに頼まりました）

「そう。良かったな、お前もあいつも大人の階段ひとつ上ったじゃないか」

（嬉しくありません）

「ははっ、そりゃあ残念だ。……って言うか、となるとアルセイフがいま戦ってんのか？」

ふと気付いた事をフェリに問うと、至極当然だといった様子で反論される。

（当たり前です。わたしに頼んでおきながら安全圏でのうのうと、なんていうことは許しません）

「あらあら。手厳しい。ところで鋼糸使ってるのかな？」

（鋼糸…あ、はい。そのようなことを言っていましたね）

「ふうん。まあいいや。オレも出るよ。アルセイフにオレも出たって伝えてくれ。どうせ会うけど」

（分かりました）

瞬間、その場からウォルターの姿がかき消える。ウォルターの姿は幼性体の群れの中にあった。

「行くぜ」

斬線、垂直90度。振り下ろしまでに0.52秒。影響直線距離800メートル。

刃を込めた刀を振り落とす。斬線上に居た幼性体が裂けて死んでいく。

外力系衝刃を变化、轟卓。

刀に込められた剄は濃密な剄の量により肥大し、もとの大きさの数
千倍にもなり汚染獣を裂く。

裂かれた汚染獣はそこで死骸と化し、ウォルターはその中を、飛散
した体液のひとつも浴びずに平然と進む。

後方より一名接近。レイフォン・アルセイフ。

「ウォルター!!」

後ろから声がかかる。レイフォンだと先に分かっていたウォル
ターは平然と振り向く。

「どうした……って言うか、お前先輩ってつけるよ」

「……す、すみません……。あの、幼性体は僕が鋼糸で片付けます」

「ああ。オレはこのまま母体を潰しに行く。お前は外に出るな」

「え、でも……あの、都市外用スーツとかは………?」

「オレはいらねえの。見てな」

勢いよく踏み切る。エアフィルターを突き抜け、ウォルターは都市
外の大気に晒される。が、外に満ちている筈の汚染物質はウォルター
の肌を焼く事は決してかなわない。

汚染物質のひとつとして、ウォルターの髪の一房でさえも焼くこと
は無い。

「……………!」

レイフォンが息をのんだ。それと同時に、レイフォンは視界に集中
し、ウォルターの剄の流れを見るが、一切不審な点は無い。

外力のように放射している様子もない。だがまるで、ウォルターの
周りの空間だけが、異質のような気がした。

生きたいという意志

「さてと、母体は下だな」

汚染物質の混ざったにおいもしない。ルウの「拒絶する」という領域が的確に働いている証拠だ。汚染物質はイグナシスの悪意が変質した物。それはルウにとって不利益で、必要のない物。必然にルウは拒絶し、ウォルターに悪意が届くことはない。

一直線に幼性体が出てくる割れ目に飛び込み、ウォルターは下降する。向かってくる幼性体は切り刻みながら、下降を続ける。

最下まで着くと、動けないままに逃げようとする母体の姿が視界に捉えられた。

それは一瞬、過去最も殺すときに動揺した相手の動きと重なった。

しかしそれは一瞬。次には霧散し、消え去る。

変わりに、消えぬ言葉を紡ぐ。

「生きたいと思っているのは、思っていたのは、あいつもオレも、そして元々ナノセルロイドのポーンであったお前も、同じなのかも知れない」

マザーのナノセルロイドから分離したポーン。オーロラ粒子に侵蝕され、まさに異獣と呼ぶにふさわしかったポーン達。

彼らはゼロ領域にたたき落とされようと、放浪することになると、生きることには必死だった。

「それでも、オレはあいつとの約束を守るために、生きなくちゃならない。この世界を、運命の紡ぎ手を護らなくちゃならない。例えそれが、独自の紡ぎ手で会っても」

そうだ。約束したのだ。あの男と。

自らで護れば良いものを、こんな、一番人間というものに愛着を持っていない男に頼んだあの愚かで、哀れで、仕方のない男と。

「だから、生きるんだ。死ねねえ。何があっても。オレは、オレの選択のために死ねないよう決めた。だから………」

刀を振り上げる。

微かな違和感

ウォルターはゆつくりと流れる感覚に身を置いていた。

電子精霊達の縁の空間に精神だけを沈めた感覚は、何とも言えず落ち着きと呼ぶものだった。

元々何かに動揺することなどはあまりないのだが、学生という身分上、やはり騒がしい場所に身を置くことが多い。

この縁という空間は、中々にウォルターにとつて安らぐことのできる良い場所だった。

だが、その感覚は早くも破られ、現実世界へと戻っていく。

「おおーっと、これはこれはく!!」

アナウンスが耳に痛いほど響く。ウォルターはうんざりとした顔をしてニーナを見やった。

十四小隊との戦いにおいて、今回の敗北率はウォルターの演算結果では50パーセントを遙かに上回っていた為、ウォルター自身はあまり驚きもせず、感慨さもなく、ただ現実を受け入れただけだった。

そんなウォルターに対し、ニーナは茫然とした様子で立ちつくしていた。だらりと鉄鞭を力なく握り、荒い息を肩で整えている。

十四小隊隊長……シン・カイハーンに声をかけられ、何を言っていたのかは聞こえなかったが、音を拾い上げる気にもならなかった。

「さて、帰るかな」

ウォルターは溜め息をつきつつ、いち早く更衣室へ戻っていった。

いまは練習の前、レイフォンがハーレイに練金鋼の調整をして貰っている。

同級生のクラスメイトに弁当を作ってきてもらったのだのなんだの

と話をしていたが、ウォルターは何が嬉しいのやらと肩を竦めた。

「嬉しいじゃん、それだけ慕って貰えてるって事でしょ？ いいなあ、僕も作ってもらってみたい」

「作ってもらえばいいじゃないですか」

「誰にや」

平然と言ったのは調整をして貰っているレイフォンだ。ウォルターは余計なことを言うのではないかと思っていたが、本当に言われた。

「…えつと…ウォルター…先輩に」

「えー、嬉しいと言えば嬉しいんだけど、嬉しくないかな」

「嬉しいがられても困る。男の料理にそこまで喜ぶな」

「いやいやでもね、ウォルターは自覚無いと思うけど、実は女子の間でも男子の間でも人気あるんだよ？ キミ」

「…オイ…サットン、それ誰だコラ、ちよつといまから三途の川わたらせて来てやる」

「お、落ち着いて！ 誰も本気じゃない!!」

ウォルターの眼が座ったのが手に取るように分かった周りが一斉に宥め始める。ウォルターを嫌いだと言い張るレイフォンでさえそこへ加わった。しかしそこへ、空気を読まない剽軽な声が入ってくる。

「よおーハーレイ、アレできてるか」

「いまそれどころじゃない！ できてるけどそれどころじゃない！」

何とかウォルターを宥めた——本人はまだ不服そうだ——周りはなんとかウォルターを宥められた事に安堵していた。

ハーレイはシャーニッドに言われた、アレを渡す。黒鋼練金鋼だ。

銃を使うシャーニッドは基本軽金練金鋼を使っていたはずなのだが、と思いつつウォルターが見ていると、シャーニッドがおもむろに復元する。

「銃衝術ですか」

「銃衝術か」

声がかぶった事にレイフォンがやや嫌そうな顔をして、ウォルター

はそんなレイフオンに苦笑いを返した。

そんな2人にもお構いなしに、シャーニツドは出来を確かめていた。

「しかしお前、銃衝術が使えるなんてな。知らなかったぜ」

「まーな！ お前が使えるだろ？ あれに感化されちまってな。まあお前を除けば、こんなん使いたがるのは恰好付けか、すげえ達人か？ が、おれは恰好付けの方だぜ」

そう自信満々に言ったシャーニツドに、ウォルターは肩を竦めた。レイフオンはウォルターに眼を見張った。

「ウォルター、銃衝術使えたんですか？」

「まあな、と言ってもかじった程度だ。それに、銃なんてモンはオレにあわねえな」

「かじった程度であれかよ」

シャーニツドは見たことがあるらしく、肩を竦めていた。

どうやら銃を基本としているシャーニツドでも敵わない程才能があつたらしく、顔を歪ませている。

「銃衝術って？ 確かに僕もウォルターのやっていたの見た事あるけど、よく分からないんだ」

「簡単です、銃での接近戦のために作られた技術ですよ」

「銃は遠距離が基本だが、いつでもバックアップがいるって訳じゃねえんだ。だからこそ、その為に接近戦への技術が必要だ。それが銃衝術だな」

レイフオンとウォルターが挟んで説明をする。さすがだな、とシャーニツドが再び肩を竦めた。

「所でニーナ遅えな」

「本当だな。アントークならもつと早くに来てる筈なんだけどな」

ウォルターが髪をかき上げながら溜め息を吐く。そんなウォルターの意見にもつともだと賛成したのはシャーニツドだった。

「遅れました」

「おーロス妹。よかったな、アントークはまだ来てないぜ」

「……………あの訓練馬鹿とも言える隊長がですか？ 気味悪

「いです」

「はっはっは、もつともだがな、もちつと言いつてモンはねえのかな」

「ありません」

苦笑いをしたウォルターに、フェリが言いよどむ様子もなく言い放つ。それにウォルターは苦笑いを洗面に変えた。

「すまん、遅れた」

ニーナが遅れてきた。練金鋼を入れた剣帯が変な音を奏でる。

ウォルターはそれに眉をひそめ、ニーナの全身を見た。

「……どうした？ ウォルター」

「……え？ ああ……なんでもねえけど……」

「いやらしいですね、ウォルター先輩」

「うおい？ 一体何を言ってくれてる？ オレは別にそんなんじや……」

「……………何だウォルター、そういう目で見ると……………」

練金鋼を構えたニーナがにじり寄る。ウォルターはその姿にもやや違和感を覚えたが、何とか誤魔化しておくことにした。

まだ、知るの早い

結局、ニーナが先に帰ってしまい、変える方向が同じであるフェリ、レイフォン、ウォルターは肩を並べて歩いていった。

「なんだか企まれているようで、気持ちが悪いです」

フェリとレイフォンの会話を聞き流しながら、ウォルターはニーナに感じた違和感の正体を知ろうと考えに耽っていた。

「こんな所で詮索していた所で、答えは出ないでしょうけどね」

「それはそうですね…」

「……………」

「……ウォルター、どうかしたんですか？」

押し黙るウォルターに問いかけをしてきたのはレイフォンだ。ウォルターは首を横に振り、苦笑混じりにレイフォンの額を小突く。

「“先輩”をつけるっていつも言ってるだろう？」

「ウォルターにつける“先輩”なんて無いです。それと毎回額小突くのやめてください」

「やだね。ったく、ロスには付けるくせに、生意気なアルセイフだな」

「失礼です」

「失礼はどつちだ」

「いい加減にしてください、うるさいです」

「……ロス、ばっさりきるなあ……」

ウォルターはフェリのばっさりとした言い方に苦笑を深めた。共に黙らされたレイフォンはややウォルターに対して不満そうな顔をする。

「ともかく、そんなことはどうでもいいのです」

「よくねえよ」

「いいです。…兄が、あなた達に話があるそうです」

という事で、只今フェリ宅。ちなみにオレは2回目。

少し前にフェリに夕飯の買い出しを手伝えと言われて手伝った為、

荷物運びでここまで来たことがある。

「では、夕食をつくりますので、ここで待っていてください」

リビングの椅子にレイフォンと向かい合い、ウォルターはだらりと座る。

レイフォンは割ときちんと座っているが、ウォルターのだらしなさに少し眉を潜めていた。

「ウォルター、人の家ですしきちんと座ったらどうですか」

「面倒くせえだろ、んな事」

あからさまにレイフォンは溜息を吐いて見せた。ウォルターはそれに肩を竦める。

「……あの」

「あん？」

「……ウォルターは、どうして“外”に出ても平気なんですか？」

この間の汚染獣の襲撃。大量の幼生体の出現は、ツエルニに大きな動揺をもたらした。

その中でウォルターとレイフォンはツエルニを守るということに大きく貢献し、レイフォンは幼生体の殲滅、ウォルターは外と外に居る母体の駆除といった具合に。

外に出たウォルターは、外に満ちている筈の汚染物質による影響を一切受けなかった。

それに対しての、レイフォンの疑問。ごく自然な疑問ではある。

この現在という地点において、あの汚染物質に打ち勝つ事ができているのは汚染物質に適応した汚染獣のみであり、人間は外の空気に触れるだけで肌が焼け爛れる。

それは、レイフォンの故郷、グレンダンで最強と言われていた天剣授受者であろうと同じ事だ。

彼らは超常的な力を有し、到力という点でも、逸脱した存在だ。だが、彼らは“そこが”ずば抜けているだけであり、人間である事に変わりはない。

異民という存在は、その“異民”自身が一つの“世界”として確立している。その世界を共有することは、すなわち侵食、すなわち強い

「異民」が弱い「異民」を取り込むという、暗黙の死を指す。ウォルターやルウのように、「人間である」事に対して逸脱した訳ではないのだ。

一般人からすれば、そこらの武芸者ですら敵わない存在であるのだろうが、ウォルター達「正真の異民」からすれば、それは一般人の感覚として片付けられてしまう。

「人間ではない」ウォルター達は、なにがあってもレイフオン達とは違うという事がもとより定義としてされているのだ。

武芸者であろうと、武芸者の中での逸脱者であろうと、「人間である」事には変わりがないのだ、「人間ではない」ウォルター達からすれば、それはそれ、これはこれ、という話だ。

とはいえ、汚染物質というものにウォルター自身が打ち勝っている訳ではない。

ルウの「領域」により、汚染物質を自分に接触する前に排除してもらっているだけだ。だが、「自分の中に弟がいる」、「自分は人間ではない」といきなり言っつて、信じるヤツはどのくらい居るだろうか。

あの「獣」は少し違うから飲み込めたであろう事実だが、レイフオンには到底理解できるとは思えない。

「……んー…、オレ☆マジック?」

「面倒な人ですね」

「酷えな。ちよつとふざけただけなのに」

「うるさいです。変な事をウォルターが言うからだめなんですよ。大体なんですか、☆」を付けるとか、なんで疑問形なんですか」

「…いやいや、オレにもはつきりしてないだけ………ん?」

ともかく軽く誤魔化しておこうと言いつつ訳をしている最中、それは聞こえた。

ト………ン………

……ト………ト………ン………

「………なんの音………、ですか………?」

「あー……」

レイフオンの怯えた表情を見ながら、ウォルターは呆れたような、

困ったような気分になりながら、台所へと足を向けた。

後ろからレイフォンが着いて来る。ひよい、とウォルターが台所を覗き、レイフォンも覗く。

そこでは、フェリがややいつもより更に青い顔をして、じやがいもを切っている姿があった。

「あの…先輩。なにを作って…」

「いま…話しかけないください」

険しい顔つきでじやがいもを切っているフェリにレイフォンが話しかけるが、鬼気とした雰囲気です。フェリが言い放つ。

「ロス…またか」

「またか、とはなんですか。ウォルター先輩は出来るんですか」

「…？ オレはプロ並みだぜ。一応、そのへんのバイトやったことあんだよ。結構良い評価もらってんだぜ」

「……………」

さらりとウォルターが言い返すとフェリにじとりと睨まれた。ウォルターは困った顔をして、その赤と黒の入り交じる髪をかき混ぜながら、言った。

「つてことだな、ロス」

「…なんですか…」

「一応、言わせてもらうと…、じやがいもの皮を剥いてからやった方が、後々やりやすいと思うぜ」

後ろでレイフォンが微かに頷く雰囲気を感じながらウォルターがフェリに視線をやると、フェリの瞳が大きく見開かれていた。

もぐ、と口を動かした。

ウォルターがいま食べているのは、自分が切った材料のきのこ、バター、そしてフェリが半端なく大量に切ってしまった（皮付きで）じやがいもをきちんと皮処理したものを蒸したものだ。

結局は不慣れなフェリに代わり、手慣れたウォルターとレイフォン

の合作となった。

その食事にはカリアンもありついていて、いまは4人で食事をとっていた。

さすがにこの兄妹を並べるとかわいそう（主にフェリが）なので、ウォルターがカリアンの隣、レイフォンがフェリの隣というふうになった。

「しかしうまいね。ウォルター君が得意というのもなかなか驚きだ」

「失礼な。オレはこれでもうまい方だと自負してんだぜ？」

「それはそうだね」

「僕もやりましたけどね」

「はいはい、お前もうまいよ」

「……………」

じとりとした眼がレイフォンから注がれる。ウォルターはそれに苦笑しながら、大皿に置かれたパンに手を伸ばした。

「作れるというだけで尊敬するよ。……レイフォン君、キミは料理が好きなのかい？」

「いえ……僕の育った孤児院では、料理はみんなで作るものでしたから」

「ははあ、なるほどね」

カリアンがそう言って頷く。レイフォンは、自分の親を知らない。実を言うと、ウォルターはレイフォンの母親、父親が誰か、見当はついていないのだ。

1度目の学園生活とその少し前、「獣」と共に行ったある都市で出会ったある女と男。

「運命の外側」に居る事を備えられた赤子”を抱えた”世界の壁を揺るがす”因子を備えていた女”、そして、赤子に備えられた因子を元々所持していた”男”。

いまでも、その名は覚えている。

だが、それがそうだと確信がない。

だが、そうだと感じている自分もいる。

しかし、それはレイフォンに伝えることでは無い。レイフォンとい

うこの子供は、ほんの小さなことですぐに迷ってしまう。
だからこそ、いまは告げない方が得策だ。

そして何より……

——正直、そうだとオレが認めたくないしな

一つだけ、あの女の子もだとはつきりとさせる“モノ”がある。
だが、彼はそれを持っていない。それが一番引つかかっているのだ。

——ま、あんな粗雑なモン捨てられて当然だけど……

無駄な事したな、とは軽く思うが、それすらもどうでもいいと思う。
彼に渡していたモノは、彼が赤ん坊の頃に渡したものだ。だから、
“それ”に込められた意味がわからなくても当然だろう。“それ”
に込められた“モノ”もまた、わからなくて当然だろう。

何より安物であつたし、それが高価なものであれば気にもかけたか
もしれないが、実際そうではない。ならば、捨てられて当然だろうな
とやはりそう思うのだ。

(ウォルター?)

(……ん? あ、ああ……昔話だよ。また今度教える)

(それもそうだ。いまは少し忙しいし……絶対だよ?)

(もちろん)

ルウに返事を返し、ウォルターはカリアンに声をかけた。

「で、会長。話つてのは?」

「それは後で、だ。食事は楽しく食べただろうか?」

カリアンは食事が終わるまでは話す気が無いようだ。

レイフォンは早く帰りたくて仕方のないような顔をしていたが、逃
れられるのはもう少し後になりそうだとウォルターは内心で呟いた。

考察

「さて、本題に入ろうか」

フェリが皿を片付けるのをウォルターが手伝い、いまはフェリが淹れてきたお茶を飲みながら、カリアンの話を聞いている状態だ。ひとつの封筒をとりだして、中から一枚の写真を取り出した。

「これは、五百キルメル程離れた山だ。そして、気にしてほしい場所はここ」

カリアンがぐるりと指でそこに円を描く。

ウォルターは一見して「ああ」と呟き、レイフォンはしばし写真に見入って「ああ」と呟く。

「どうだい？」

「んー」

「ご懸念の通りかと」

「なんですか？」

フェリが隣から声をかけた。それに対し、ウォルターが口を開く。

「汚染獣だよ」

そう告げると、フェリがきつとカリアンを睨みつけた。

「兄さんは、また彼らを利用する気ですか？」

フェリとカリアンの論争が繰り広げられる中、ウォルターは写真を手にとって見る。

(んー…これはちよつとやばい気がするなあ…)

(どうして?)

唐突にウォルターの頭のなかに声が響いた。ルウの声だ。

(これはたぶん、ツエルニの錬金鋼じゃ太刀打ち出来ないだろ)

(あ、もしかして……?)

(たぶん、そうだ)

ウォルターが思考でルウと会話していると、レイフォンが口を開く。

「おそらくは雄生体でしょう。何期の雄生体かは分からないけれど、

この山と比較すると1期や2期とはいかなそうだ」

「……………」

「…………ウォルター？ どうしたんですか。珍しいですね、黙りこくつて」

「オレが日頃騒がしいみたいない方をすんな。……確かに雄生体ではあるんだろうが…………」

「なにかあるんですか？」

「んく…。これは本当に嫌な予感がすんだよなー」

ウォルターがこめかみを押さえながらそう言うと、カリアンは苦笑した。

「となると、余計に2人に出てもらおう事になりそうだね」

「…まあ、オレは構わねえけど。埃かぶってる劉も使えるしき」

「その表現の仕方はどうかと思いますけど…」

レイフォンの呆れた言葉を聞き流しながら、お茶を口に含んで、喉に流し込んだ。

螺旋階段でのレイフォンとフェリのやり取りをウォルターは苦笑混じりに見やりながら、レイフォンとウォルターは帰路についていた。

「ウォルター」

「あ？ どうした」

突然レイフォンから声をかけられて、ウォルターは内心驚きながらも平然と返事を返した。

「ウォルターは、今回の件、どう思ってますか」

「今回の事？ んく…まあ、オレはどうでもいいかな」

「…………どうでもいいんですか？」

ウォルターがあっつけらかんとして言った一言に、レイフォンはどこか呆れたような顔で聞き返した。そんなレイフォンに対して、やはりウォルターはすらすらと答える。

「そうだなあ。オレはしたい事があるし、別にその障害にならなければどうでもいいかな」

「……もし、阻害になる事になったらどうするんですか？」

「単純だろ。…全力で排除する。それだけだ」

「…そうですか。……もし……、もし、ですよ？ 旧友がそうだったら、どうするんですか。いま言い切ったように、排除するんですか？」

「……お前は問いばかりだな」

ウォルターはレイフォンの質問攻めに肩を竦め、ふむ、と考えてから答えた。

「そうだなあ……。それが “どの” 旧友かによるかな。別に天劍授受者のヤツらなら問答無用で叩き斬るけど……」

「他にも、旧友が居るんですか？」

「……お前、オレがぼっちみたいない方やめろよな。あいつらのもつともつと前の知り合い」

「そうですか……」

レイフォンは俯いて何かを考えだした。

ウォルターは空を見上げて、“闇” が覆い、星が輝いて、色がところどころ変わっている空に懐かしさを覚える。

「……あの……」

「あ？」

「ウォルターは、どうしてそんなに思い切りがいいんですか？」

「……んな事知るかよ。昔からオレはこうだ」

「……やっぱり性格的なものでしょうか」

「だろうなあ……。昔っからだし」

「……そういえばウォルターって、きょうだい居るんですか？」

「居るけど……」

「え?! 居るんですか？」

「なんだよ。居るぞ、弟が」

突然話の話題が変わった事にウォルターは少し戸惑ったが、それでもレイフォンの狼狽ぶりに一瞬笑いかけた。

「ええ、意外です」

「意外か？ オレに弟って……」

「意外です。…どんな弟さんなんですか？」

「んー、双子なんだが…」

「双子!?　ますます意外です…」

「そんなにか。一卵性双生児なんだが、性格はまったく違うぞ。寧ろ逆だ」

「良かった。非道な兄とは似てつかなくて」

「失礼な」

人間性でヤバいというならばルウの方がよっぽど凄いぞ、とレイフォンに言っただけだが、さすがにそれはやめた。

オレと2人で居たいが為に世界中の人間を殺した——実際したのはニルフィアだが——なんて知ったらどんな反応するだろう。

ちよつとそんな誘惑にかられるけれど、さすがに言わない。やばいから、本気で。

「ま、知らない方が幸せなこともあるってね」

「……………」

「ほら、帰ろうぜ」

ウォルターはそう言っただけで、話を切った。

それぞれの思考

面倒くさい。はつきり言ってると思う。

現在は体育館で、ウォルターは監督生として教える側に回って武芸科の生徒に指導を行なって居る。

だが、まあ時々まじめにやらないヤツらも居て……

「がふっ」

「ぐっ」

今回はその「ヤツら」がレイフォンと3人の馬鹿だったりするのだ。

「あーもー…、お前ら、なにやってんだ？」

「……ウォルター……せん、ぱい」

こういう場では一応付けるらしい先輩という言葉だが、酷く嫌そうな顔をしている。

今回はウォルターが監督生だと知ってる筈である為、ウォルターがここにいる理由も知っている筈だ。だがこうしているというのは、まあ……、倒れている3人の馬鹿がレイフォンに喧嘩を売った、というところだろう。

レイフォンの隣にはレイフォンの同級生である女子武芸者も居る。

「まったくよー、喧嘩はよそでやれてんだ。せめてオレの管轄でやんな」

「……………」

「押し黙るくらいなら最初からやんな。…おい、そのの。この馬鹿3人連れてけ」

「は、はい」

向こうに居た生徒に声をかけ、3人を医務室へ連れて行かせ、ウォルターはレイフォンにつかつかと近寄って、頭にチョップを食らわせる。

「！」

「反省すること。おらっ、さっさと再開しろ。集まるな」

レイフォンのきよとんとした顔を置き去りにして、ウォルターはもとの場所へと戻った。

「……果たしてあの人はあれでいいんだろうか」

「ナツキ？」

「いや……もう少し注意されるかと思った」

叩かれた頭をさするレイフォンの隣で、ナルキ・ゲルニがそう呟く。ナルキの言葉は最もだと思うが、それでもレイフォンは苦笑した。

レイフォン達から離れて、集まってきた生徒達に指示を飛ばしているウォルターを見ながら。

「あの人はいいんだよ。ああいう人だから」

レイフォンの言葉に、ナルキはむうと唸っていたが、練習を再開した。

ウォルターはがしがしとモップを動かしていた。

機関掃除はなかなか骨が折れる作業ではあるが、慣れてしまえば身体を動かすだけで何かを複雑に考える必要も無く、とても簡単な作業で助かる。

そう、上の空でモップ掃除を続けていくと、うっかり足元にあったバケツに足をぶつけた。

こんなところにウォルターが置いてある筈はないので、他の人のバケツだ。

「あつと、悪い……って、アントークか」

「ウォルター……」

「なんだよ、そのしよぼーんって顔は。……また何か考えに耽ったか？」

「……まあ……な」

やはり表情が曇ったままのニーナに、ウォルターは隣でさりげなくモップ掃除を続けた。

ニーナはそれに少し困惑したような様子だったが、それでも口を開く。

「……会長から、レイフォンの事を聞いた」

「そうか」

「あの強さの理由も、そして、その強さがどれだけのものかも……、今回のことで、よく……分かった」

「まあ、強いよな」

「……わたしは……、幼生体をたった一人で……いや、ウォルターも居たが……、倒したレイフォンを、……”本当に人間なのか”と疑ってしまった。そして、たった一人で母体を潰しに行ったお前に対しても、同じ事を思った。……同じ、十七小隊の仲間なのに」

「……ま……、人間そうそう簡単には信じたり出来ないもんじゃねえの？」

ウォルターはさらりと言ったが、ニーナはそれにどうも納得出来ないようだ。

「……だから、疲れて倒れたあいつを見て、安心したんだ。お前がその状況をみて、大笑いする所を見て安心したんだ。ああ、おなじ人間だ、と」

「……ん……」

そのニーナの言葉に、ウォルターは小さなひっかかりを感じた。

確かに、レイフォンはそうだ。武芸者という肩書きのついた、人間なのだ。だが、ウォルターは違う。 ”正真の異民” という肩書きだけでなく、本当に人間からかけ離れている。

そこに、ニーナとの意識の差を感じた。

「……だが、その後のことがそれをわたしから少し忘れさせてくれた。だから、レイフォンとお前が強いということだけが残った。このまま強くなれば、わたしたちは武芸大会でツエルニを勝利に導ける、と思ったのだ。……だが、負けた。負けてしまったのだ」

「まあ、負け戦だったな、あれは」

「……何故、それも平然としていられる？ お前は、この都市が滅んでもいいというのか？」

「誰もそうは言っていないだろ」

ニーナの懸命な言い方も、ウォルターの前では大波に飲まれる子供が作った砂山のようなもの。ウォルターからして、 ”くだらない” 思

念などにウォルターが構う筈もない。

「……じゃあ、なんなのだ？ このまま負ければ、ツエルニは確実に滅ぶ。今年の武芸大会が鍵なんだ。負けるわけにはいかない」

「まあ、そうだな」

「……お前は本当に物事に無関心だな」

「まあね。けど、だからって見放してる訳でもねえ。ツエルニを滅ぼされる気もないし、そうする気もねえよ。だが、お前程に熱い思いは持ってるねえ」

「…お前、何か隠しているんじゃないか？」

「は？」

「会長は、お前の過去の経歴については何も知らないと言っていた。実際、お前が口止めを…」

「できるかよ、あんな偏屈会長。……まあ……、もうそれ知ってるお前だし、言ってもいいか…」

はあ、と溜息をついて、ウォルターはモツプを握り直してから話し始めた。

「オレは、元々天劍授受者だった」

「……………」

「アルセイフがなった天劍はヴォルフシュティンって言うんだが、その元、ヴォルフシュティンだ。オレは、天劍授受者決定戦でアルセイフとあたって、アルセイフを叩き潰した」

「……それで、お前をあんなに毛嫌いしてるのか」

「そ。でもって、いらねえからって、あげた」

「……都市の最高権威を、か？ そんなまるで菓子子供にやるような言い方…」

「いや、でも本当。アルセイフには、『オレには要らないものだから』って言って渡した」

「……お前はつくづく思考がかけ離れているな」

「それはそうかもな。って言っても、オレは別にだからって後悔してる訳でもない。実際本当に要らなくなったからあげた。ンだけだろ？」

ウォルターのあつさりとしたいい振りに、ニーナは開いた口が塞がらないらしい。

困ったように肩を竦め、ウォルターが苦笑した。

「天劍授受者だった、か……だから、お前もそんなに強いのか」

「んー、どうかねえ。オレからしたら天劍授受者のヤツらなんて雑魚いし、正直相手にもならない。グレンダンの女王は天劍授受者を凌ぐ力を有してんだが、オレより弱いしなあー」

「……お前がとんでもなさすぎるんじゃないか？」

「それはあるな。確かに。けど、それオレが悪いわけじゃねえんだし」

「……お前、そんな力を持つてなにをしたいんだ？ 武芸者の都市での最高権威を要らないと言えるまでのしたい事って、なんなんだ？」

ニーナが真剣な眼差しで問うて来るが、ウォルターは不敵に笑みを浮かべただけだった。

「ウォルター……ん？」

ツツ……

不意にニーナの髪がひかれた。後ろに居たのは、この都市の意識、電子精霊のツエルニだ。

「ツエルニ」

「よう、久しぶりだなあ、ツエルニ」

ニーナがツエルニを抱きしめ、ウォルターが軽く腕をあげた。相変わらずツエルニはにこにこしているだけで、特になにかというわけでもない。

ツエルニを抱えて何か思いに耽るニーナを尻目に、ウォルターは掃除を再開する。

「わたしは、自分の手でお前を守りたいんだ」

そんなニーナの呟きが、聞こえた。

——自分の手で、ねえ……

そう言う聞こえは良いのだが、実際それは行き過ぎれば固執になってしまう。

それが暴走しないことを、ウォルターは祈るばかりだ。

めまぐるしく回る生活

翌日、練武館に遅れて行ったウォルターの視界に飛び込んできたのは、レイフォンが身の丈より大きな大剣……らしきものを振り回している、と言っても上段からの振り下ろしなどだが、をしている姿だった。

「でかいな、あれ」

「うん。こないだの調査の続き」

「成程ね」

おそらく、これはあの汚染獣専用だろう。そう思いながらレイフォンの動きを見やる。

——劉の煌めきはそこまで悪くなくなってきたな

そう思いながらレイフォンの動きを見やっていた。ふう、と小さな吐息が落ち、動きが止まる。

「……満足しましたか?」

冷ややかな声が聞こえて来る。

——まあ……気付いてたけどね……

フェリが、後ろに立っていたことには。フェリの輝かしい銀髪は風圧により巻き上げられ、ぐちゃぐちゃになってしまっている。

シャーニツドはわざとらしく口笛を吹き、レイフォンはレイフォンで頭が上がらないらしく懇切丁寧に謝っていた。

ハーレイはほほとぼつちりのような形で怒られ、ウォルターはさすがに苦笑する。

「まあまあ。ロスも許してやれよ」

「いやです。これ、どれだけの手間がかかっているかかかっているんですか」

「んー」

「……そう言うなら、あなたが梳いてください」

「オレが? ……いいけど……」

フェリが元々持ち歩いているらしい櫛を借りて、フェリの髪を丁寧

に梳く。

ニーナが到着し、今日の野外訓練も平和に終わった。だが、その後が平和ではなかった。

ニーナが最近行なっていたレイフオンとの連携訓練をしばらくしないと言い出したのだ。ウォルターと話していた事がひっかかっているのか、とも思ったが、それでも無い様子で、ただやらないとだけ言ってる。

夜の練武館にて、レイフオンの大剣の練習を終え、フェリ、レイフオンと共に再び3人でカリアンを待っていたウォルターはよくわからない会話に巻き込まれた。

「そんなことよりも、先輩という呼ばれ方は他とまとめられていて嫌です。別の呼び方を要求します」

「え？」

「レイとん、とか呼ばれているそうじゃないですか。ウォルター先輩も、私のことをロスと呼ぶので不快です」

「酷え言い草」

元々は「やれる人がやれることをすべきだ」という話だった筈なのに。いつからこんな話に。

「ともかく、あなたの別の名前を搜索しましょう。……レイ、レイちゃん、レイ君、レイちゃん、レイっち……どれがいいですか？」

「え？ もうその中で決定ですか？」

「他に何か候補がありますか？ ウォルター先輩はどうですか？ これ以外に」

「んん……『閃光のレイ』とかどうだ？」

ちよつとふざけてみた。

きりつとした様子で言ったら、まあレイフオンはいつもの通りの反応なんだけど、フェリが異様にツボったらしい。

「閃光のレイ……ですか。なかなか馬鹿っぽくていいですね、呼びたくは無いですけど」

「だったらやめてくださいよ！　と言うか閃光ってなんですか!?!」

「閃光っていうのはだなー、一瞬できらめく光、または瞬間的にきらめく、閃く光の事を言い、」

「そんなことは聞いてないです!!」

「ンだよ、最後まで言わせろよな」

「……では、フォンフォンにしましょう」

「うわっ、大逆転！　なんですかその珍獣みたいな名前は」

「いいじゃねえか、フォンフォン」

「あなたが呼ばないでください！」

「やったぞ、ロス。お前は呼んでいいってよ」

「やりましたね。よくできました、褒めてあげます」

「うわー、嬉しくねえ」

ウォルターはそういつて笑いながらフェリを見た。

そのあと、カリアンが来て、結局はフェリとレイフォンと食事をし
て帰ってきた。

ふとベッドに寝そべって、過去に思いを馳せた。

追憶

同事刻、レイフォンもベッドに寝そべっていた。

思い出していた事は鋼系の訓練をして居たときのこと、腕にある深い傷跡を見つめながら、思い出していた。

勝手に一人で鋼糸を使い、血を多く流して出血多量、その為に気を失っていたレイフォンを発見したのは、ウォルターだった。

「……なにこの状況」

ウォルターは呆れた顔をして、レイフォンを見やる。血の気の失せた顔をみて、大きく長く溜息をつく。レイフォンを抱えた。後ろには抱えられないうえ、出血している為必然と横抱きになった。

まあ別いいか、と思いながら、服が血で汚れる事も構わずに病院へと向かう。

少し遅れてきた、レイフォンの鋼系の師であり同じ天劍授受者もあるリントンスに事情を説明すると、並々ならぬ大きな溜息……リントンスは煙草を吸っていたので紫煙を吐き出していた。

「あの馬鹿は……」

「はっは。盛大に叱ってやるといい」

「…だが、意外だったな」

「なにが」

「お前なら、なにもしないだろう」

「こうやって、したけど？」

「だから意外だと言っているんだ」

リントンスの端的ながらも鋭い指摘に、ウォルターは肩を竦めた。そしてそのリントンスの視線がウォルターの血に濡れた服に向けられている事に気づき、更に肩を竦める。

「……そんなにかねえ？」

「そんなに、だ。大体、何故お前がここに居るのかも分からん」

「……、というのは病院というよりもグレンダンのことだろう。」

「いやー、天下のハーデンがそんな噂に左右されるなんてね。目の前に居るんだから、これが真実。そうだろう?」

「……………そんなことはどうでもいい」

「あ、そ。…ま、オレもどうでもいいけどね」

「……………あいつに見つかつたら面倒だろう」

「ん? アルセイフにつて事? ん、確かにねえ…、この服もさつさと洗わないと血染みになる」

そう言つて血に塗れた服を引っ張つた。

「……………だつたらさつさと帰れ」

「つれねえなあ、ハーデン。まあ、あいつにじつろおおつて睨まれんのもヤだし、オレはささつと帰るよ」

「…ウオルター」

「あん?」

「真実、と言つたな。お前が放浪バスに乗つていた……………それもまた真実だと、おれは知つている」

「……………あらゆる事が真実と成り得る可能性というものは世界に存在する。Aの言うB、Cの言うBが違うように、見るヤツによつて真実は変わる」

ウオルターが何処か深い意味を含むように言う。リンテンスはその謎かけのような言葉に不快そうな表情で眉を潜めた。

「だが、中には変わらない真実というものもある」

「……………だな。…じゃあ、帰るよ。……………そうそう、アルセイフにはオレが助けたつて事は黙つといてね」

「分かっている」

リンテンスの端的な了解を得て、ウオルターは病院をあとにした。

「……………ああもう、オレつてヤツは……………」

嘆息する。別に、これはオレが悪いわけじゃない。ただ、ウオルターは自分の人の良さに悪態をついていた。

結局ここはレイフォンの病室であり、レイフォンが静かに眠るだけの空間と化している。

一旦は帰ったのだが結局ここへ来ているウォルターは、自分はどうなのだともうどう言えいいのかよくわからない感情にかられる。

「……ガキ」

レイフォンにそう呟く。

今度こそ帰ろうか、と重い腰を上げると、後ろから呻き声のようなものが聞こえ、おそろおそろ後ろを見た。

「……………う……………？」

「げ、起きた」

「……………ウォルター・ルレイスフォン……………ッ?! どうして、ここに……………！」

「あ……………」

ウォルターは大きく溜息をつき、赤と黒の髪をかき混ぜながらレイフォンを見た。

「お前が勝手に怪我してたからここに居る。ンだけだろ?」

「心配ですか」

「いや、全然」

「……………なんですか、それ……………。じゃあ、どうしてここにいますか」
「やかましい。意気がりやがったガキがどんなツラしてンのか見に来ただけだよ。つとに、ガキの癖に意気がりやがって。そのぎまがこれだ。お前は力はあるがまだまだ子供だ。出過ぎたことをしてンじゃねえよ」

「な……………ッ」

ウォルターがレイフォンの言葉を不機嫌そうにきくと、レイフォンは心外だ、という顔をして身体を起こした。しかし、体重をかけた腕に激痛が走り、レイフォンは眉をしかめて枕へ頭を落とす。

だが、口はウォルターへ悪態をつこうと口を開く。

「あなたになにが……………」

「知るかよ。オレはお前なんかに興味はねえ。だが、ここで天劍授受者になったからには、オレの後がそんな雑魚じゃ困るんだよ。オレの眼が悪いつて話にもなるンでね」

「……………自分の為、つてことですか」

「まあね。……だからって、お前に気張れって言ってンじゃねえのさ。お前はもう少しでもないガキで、もう少しもなくでかい力を持つてる。だが、それをまだコントロール出来てねえ。なによりお前に足らねえのは経験だ」

「そんなことは…ッ」

「分かってねえからこうなったんだろう。いい加減、自分の落ち度を認めたらどうだ？ ガキが。……身の程を知れ」

レイフォンは何かを言おうとしていたようだったが、結局はその言葉の奥に飲み込んでなにも言わなかった。

いいや、言えなかった。

「本当に、あれは酷い」

あの時は本当に憎いと思っていたから、ウォルターの顔を見た時は本当にどうしてやろうかと思っただくらいだ。

もし身体が動けば、ウォルターに斬りかかっていたかもしれない。だが、いまになって言っていたことを考えれば、ウォルターが言っていた事はよく分かる。

まだ、あの時は子供だったのだ。

「……………」

腕の傷を見やる。あのあと、ウォルターが去ってから気付いた。

自分の身体から微かに、ウォルターのにおいがすることに。

傍に居るだけでは染み付かないであろう程、濃く染み付いたにおいだった。

リテンスもなにも言わなかったけれど、おそらくウォルターが病院へ自分を運んできたのだと気づいた。

だが、それと同時に思ったのは疑問だった。

何故、ウォルターがそんなことをしたのか。何故、ウォルターはそれを黙っているのか。

いまになればそれは解き明かせる謎だけれど、あの時は本当にわからなくて、数日悩んだりもした。だが、それでもその疑問はしばらくして思考の波に飲まれ、消えていった。

そして今回のことを経て再び思い出した。

今なら、その答が分かる。

「いまなら、言っていたことがわかるんだけどな」

あの時は本当に憎しみしかなくて、次あつたらどうしてやろうかなんて思ったものだ。

ふっと自嘲な笑みを浮かべ、追想をやめて瞳を閉じた。

新たな情報

「お願いですウォルター、助けてください！」

いきなりそう血相を変えてレイフォンが飛び込んだとき時はどういうことだ、どうすればいいんだとやや慌てたものだ。

だがまあ、用件はニーナが倒れたということだったので「ああ」とそれのおかげで落ち着いた。

最近ふらふらしていたし、全員に黙って一人で訓練しているということも知っていたことだ。だからこそ倒れたと言われても特に驚きもしなかった。

それ以上に驚いたのはレイフォンが駆け込んできたことだったけれど。

ともかくということだ。ニーナをウォルターが抱えた。

最近緊急指定の病院は減っている訳ではないのだけれど、結構特定の生徒しか行けないということもある。レイフォンが来たという事らしいので、ウォルターの知り合いがやっている病院へ向かうことになったからだ。

いまは病院でニーナが治療を受け、寝ているという状況。理由はまあ、ウォルターが懸念していたとおりに剽脈過労、というところだった。

ウォルターは診断結果だけ聞くと、外の自動販売機に飲み物を買って行った。

「ウォルター先輩」

「お、ロスか。どうした？」

「……兄から封筒をあずかっています。探査機が持ち帰った写真が同封されています」

現れたフェリから封筒を受け取り、買ったジュースの缶をフェリに預けると封筒の中身を取り出した。

数日前に見せられた写真よりも克明に撮影された写真。

(間違いないな。雄生体……しかもこれは……)

(老生1期、つてところかな?)

(だろうな……)

内心での呟きに声をかけて来るのはルウしかない。ウォルターはふう、と溜息をついてふとフェリの方を見た。

「おうい、ロス。それはオレの缶ジュースだ。なにをしようとしている」

「見ればわかるでしょう……飲もうと思ってプルタブを開けようとしています。しかし開かないので開けてください」

「……なにしてんの、本当に……しゃあねえヤツだな」

ウォルターは苦笑とともにプルタブを開けると、買った缶ジュースをフェリに渡す。

平然とした顔で飲み始めたフェリをおいて、もう2缶、缶ジュースを買った。

「2つも飲むんですか?」

「もう1本はアルセイフに」

「そうですか」

そう言いながら病室に戻ると、レイフォンとハーレイが何故か壁を見ていた。2人の前にはうつ伏せに寝かせられたニーナの姿がある。

背中には針が大量に刺されており、剷脈の治療をしているのだろうとそこまで考える。

フェリが用心深くニーナを確認し、その後にレイフォンとハーレイを睨み、言い放つ。

「スケベ」

「見てませんよ」

「そういう返事が帰ってくるあたりスケベです」

「うっ」

「………? ロス、なにがスケベなんだ?」

「あなたは気にしなくていいです。気にしたところで無駄なので」

「んく……? そうなのか? よく分からねえんだが」

ウォルターは首を傾げて、やや赤く染まるレイフォン達の顔を見ていた。

レイフォンに缶を投げてよこし、先程ウォルターが受けた説明をフェリが話す。ハーレイ、いや、ハーレイ達が開発していた錬金鋼は、複合錬金鋼と名付けられたらしい。

1本しか無い為、必然的にそれはレイフォンが使うことになる。

「怖いですか?」

「……ロス?」

「怖いですか? 汚染獣と戦うのは」

その問いは2人に投げかけられていた。ウォルターはフェリの頭にぽふぽふと手を乗せる。

「大丈夫だよ。もうなんかそういう次元の話じゃねえし。平気平気」

「……ですか。それあらばいいです」

「もう、止まりようもねえさ」

そう呟き、ウォルターは軽く笑みを作った。

…緊張感…無いな、こころ…

そんなこんなで、いまは出撃準備をしている。と言つてもウォルターはなにもすることがない。

都市外用スーツなんて要らないし、錬金鋼もツエルニで使うヤツはいらないので置いていく。

ウォルターには、左手首に付けた腕輪しか必要ではなかった。

「ウォルター、本当になにもしなくて大丈夫なんですか？」

「なに？ 心配？」

「……するに決まっているでしょう」

「へ」

レイフォンの意外な言葉にウォルターは珍しくきよんとする。

ウォルターのそんな反応に困惑した様子でレイフォンが慌てて訂正をかけてきた。

「あ、違いますよ?! えっと、僕が超えるまでに死なれたら困るってだけですよ!!」

「……………そか。まあさんきゆな」

ウォルターはレイフォンの慌てぶりに笑みをこぼし、まだヘルメツトをかぶっていないレイフォンの頭をぐしやぐしやとかき回した。

「ちよつ、やめてください」

「んだけ元気がありやあ大丈夫だ。オレが居るから負け戦にはならねえよ。…なんだよ、そのふてくれされた顔は」

「不毛です、そんなの」

「だが、事実だろ？ 別にお前が頼りにならないって言ってるわけじゃない。お前はお前にできることをしろ。オレはお前に過剰な期待なぞしねえ。まあ、要するに…気張れって言ってンじゃねえのさ」

ウォルターはそう言ってランドローラーの検査に向かった。

レイフォンはウォルターに撫でられた頭を押さえたまま、少し俯く。

「……あなたは、いつもずるいです」

『まあ気張れって言ってるじゃねえのさ』

あの時も、同じ事を言っていた。

いまはやわらかな笑みを浮かべていたけれど、とは言え少し前思いつ出した事と同じ事を言われると、少し不思議な気分にもなる。

「おいアルセイフ、準備出来たぞ」

「あ、はい」

レイフォンがウォルターに声をかけられ、ランドローラーに乗り込む。タイヤが荒れた大地に接触し、疾走を始めた。

出たての頃はしつこくレイフォンに「本当に大丈夫なのか」と問い詰められ、フェリにも同じ事を問われてやや困ったが、10分も経てば静かになった。だが、レイフォンとフェリが話していた内容が唐突に変わった。

(そういえば)

ウォルターのポケットに突っ込まれた念威端子から、フェリの声が聞こえてくる。

その声に、ウォルターは問い返した。

(わたしの名前の話はどうなったのでしょうか)

「あー、そういえば放ったままだったな」

(ええ、兄のせいで。というところで、レイフォンと共に考えてください。わたしも本意ですが考えます)

ウォルターはくつくつと笑いながら話の経過を見守っていた。

レイフォンが思いつくままにフェリのあだな案を出していくが、すべて一蹴されて却下される。

それを聞いているウォルターとしてはなかなか面白くて口をだすことをやめた。

(ウォルター先輩、笑っていないでさっさと考えてください)

「いやいや、オレはそう言うのは後付タイプ。いろいろ小提案が出たら言うよ」

レイフォンの恨めしそうな視線を横から受けながらそれでも笑いを零す。

(いやあ、面白いなあ本当に)

(楽しそうだね、ウォルター)

(ルウはなんとも思わないのか？ こういうの)

(……僕は……ウォルターが楽しいなら楽しいかな)

(相変わらずだな……)

ルウと思考で会話をしていると、隣でレイフォンが捨て鉢になって言い放った言葉が耳に入る。

「フェリ」

言い切った。そう思いながら話の成り行きを聞く。

(ふむ……創意工夫も何もなく、そもそもあだなですら無い。ですがまあしかたがないのでそれでいいです)

「適当だな……」

(ということで、続いてウォルター先輩のあだなを考えます)

「オレ？」

「えー、嫌です」

「心底嫌そうだな、お前は」

「嫌ですもん」

呆れ顔で「ああそう」と言うとフェリの反論が帰ってきた。

(なにを言っているんですか、フォンフォン。フォンフォンはウォルター先輩を呼び捨てで呼ぶからいいでしょうけれど、ウォルター先輩は先輩を酷くつけにくい名前をしています)

「そういう文句は親に言ってくれ」

(ですから、先輩をつけやすい名前に変えようということです)

「改名はおとなになってからだぞ」

(ということでレイフォン、考えてください。寧ろ考えなさい)

「命令形?!」

しょうがねえヤツら、と言わんばかりにウォルターは溜息を吐く。レイフォンが首を傾げつつ思いついたものを思いついたままに口にする。

「ウォル」

(意味がありません、却下)

「ウル」

(代わり映えしません、却下)

「ルレイスフォーン……だから……レイ……はだめだ、フォン……、も、駄目だ、ルター？」

(昔の偉人のようです。却下)

そこまで言いながら、フェリがふと誇らしげに気付いた事を告げました。

(……ウォルター先輩、気づきましたか?)

「なにを」

(ウォルター先輩のルレイスフォーンから「ル」と「ス」と「」を抜くとレイフォンになります)

「知らん」

「嫌です、そんなの」

「オレだって嬉しかねえよ」

「僕だって嫌です」

レイフォンの苦情を横暴だとウォルターが苦笑いした。

そんな苦笑にフェリがやや考え込んだ声音で考える。

(ふむ……なかなか無いものですね、では、…ルウ、などはいかがでしょう)

「ルウ、ですか。すつきりしていていいんじゃないですか？ 問答無用で」

「おいこら。ってか、それ弟の名前だから、それはオレが混乱する」

(弟さん居たんですか)

「ルウって名前なんですか？」

「そうだよ。だからそれ以外で」

「じゃあ他に呼ばれていた名前とかは？」

「ん〜……。『ルイス』ってよばれてた」

(ルイスですか……。ふむ。ではイオにしましょう)

「どっからそうなった」

「いいんじゃないですか？ 僕は呼びませんけど」

「うるせえよフォンフォン」

「く……ッ！」

ウォルターが眉をよせた。あだな自体は実際どうでもいいのだ。問題は、そこでは無い。

「大体どっから？」

（いえ、ルイスの「イ」と、ウォルターの「オ」でイオです）

「……もう好きにして」

（では決定ですね。イオ先輩。ふむ、すっきりしました）

「僕は嫌ですよ……。ウォルターはウォルターですもん」

「もういいよ、本気で好きにしろ」

ウォルターは溜息をついて肩を落とす。

レイフォンのやややむくれたような言い方に苦笑し、フェリの言葉に呆れた声で対応する。

（それともう一つ）

「あん？」

（ロス呼びをやめてください）

「えー…、ヤだ」

ウォルターがフェリにそう言う。だが、そこで黙るフェリではない。

（兄とまとめられていて不快です）

「って言われてもなあ……」

ウォルターは渋った。正直、現状は名前を呼びたくないというのが本音だ。

理由は特に無いのだけれど、何故かあまりよくないと思っている。

昔は特にそうは思っていなかったからあの男の事も、少女の事も、獣のことも、闇の事も、すべて名前で呼んでいた。だが、“あれ”以来、違和感が生じるようになってしまったのだ。

「……………」

「どうしてそんなに嫌なんですか？」

「……嫌ってわけじゃないんだがな」

（では、こうしましょう。フェリ・ロスにつけられた、フェリというあだなを呼ぶ、それでどうですか？）

「……………」

それ、実質的には同じじゃ。そう思ったがそれはさすがに言うのをさけた。

「…………じゃあ……、そのあだなという定義で『フェリ』って呼ぶのは良い。だけど、こつちも条件つけさせてくれ」

(?)

「あの生徒会長が卒業したら。それでいいならいい」

(……………仕方ないですね……………)

フェリの渋々の承諾を得て、ウォルターは微笑んだ。

(…………では、約束です)

フェリが急に神妙な声音になって呟いた。

(イオ先輩はいまの言葉を忘れないこと。…………そして…絶対に、ふたりとも無事で帰ってきてください)

それ以降、フェリの多弁さはなくなった。

接触、戦闘開始

昼を過ぎた頃、ようやく目的地についた。

フェリが念威端子を回してくれている間に、レイフォンとウォルターは簡単にゼリー状の栄養剤で栄養補給をする。

「どうですか?」

(こういう状況です)

フェリがレイフォンのフェイススコープに映像を貼り出した。

ウォルターはフェイススコープをつけていない為、フェリの映像では確認不可だった。だが、まだレイフォン達にも言っていない事がある。

ウォルターは右手に重晶鍊金鋼を構える。そんなウォルターにレイフォンが首を傾げ、問うてきた。

「ウォルター? どうして重晶鍊金鋼なんて持ってるんですか?」

「あ? あー……、……オレ……ネンイ……ツカウ……」

「なんでカタコトなんですか? ……というか、え……念威使えるんですか?!」

「うるさい、喚くな。気付かれたらどうする」

「………なんでそういう大事なこと黙っているんですか」

「別に大事じゃないだろ? こんなこと」

そう言いながらウォルターは重晶鍊金鋼を復元して念威端子を飛ばす。その手慣れた様子にレイフォンがますます怪訝な態度でウォルターを睨んだ。

「これは……」

「……雄生体の5、6期ってところじゃないですか?」

「………ん〜………」

レイフォンの言葉に、何処か煮えきらない態度をとるウォルター。そんなウォルターをレイフォンは怪訝に見やった。

「なんですか?」

「………なんか違和感があるんだよ、この汚染獣」

「…死んでいない、ってことに…ですか?」

レイフォンも気付いていたらしい。そう、汚染獣はただ眠っているだけだ。まだ気付かれていない為、話す余裕はある。

「いや…それはそれだ。そうじゃない。この汚染獣……」

ウォルターが、自身の感じる違和感を告げようとした途端、荒れた大地が大きく揺らいだ。

「まさか……!?!」

「眼を覚ましたか……。ロス、ツエルニは？」

(……進行方向を変更しました。都市が揺らぐほどの急激な変更です)

「気付いていなかった、ってことか……」

「ウォルター、構えてください」

「わかってるよ、言われずともな」

レイフォンの沈黙した瞳……、見るのはあの天剣授受者決定戦以来か。

あの時は、この瞳でさえ抑えきれないほどの感情をぶつけられたものだ、と思いつながらウォルターは左手首についた金色の腕輪を右手で軽く包み込んで手を引く。

レイフォンが眼を見張った。

ウォルターの右手の動作に合わせて、ウォルターの刀が出現した。

鍔と柄部分は白と赤を基調としており、特に鍔は円形を模している、一見錬金鋼のようにも見える。だが、それとは何処かかけ離れた物質のようにもレイフォンは感じた。

そんな刀をウォルターが肩に担ぎ、不敵な笑みを浮かべてレイフォンの横目で見やった。

「さて。行けるな、アルセイフ」

「……もちろん、です」

レイフォンも支給された複合錬金鋼を構え、怪しい光を放つ飢餓の瞳でウォルター達……獲物を捉える汚染獣を見据えた。

ウォルターはレイフォンの表情の引き締まり具合に口角をあげ、小さく笑い声をもらした。

「っは」

汚染獣の姿は、まさにこの世界の覇者と呼ぶにふさわしい風貌だ。汚染物質に適応し、荒れた外界で生きる為に硬い殻や鋭い牙を有すようになり、大地を駆けるのに適すよう足が増えたり、または翅を生やしている汚染獣も居る。

幸い、この汚染獣は、まだ翅は生やしていない為現時点では空を飛ぶとは考えにくい。

だが、どうなるかはわからない。汚染獣というものは恐ろしく奇天烈な生き物だ。

「さて……、やるか」

ウォルターが刀を握りなおした。柄尻に結び付けられた長めの薄い藍錆色の紐が揺れる。

蝶結びにされたこぶ部分に交差して付けられた柑子色のピンが紐の動きに連動して揺らぐ。

そこでようやくレイフォンは、ウォルターが左位置の髪につけているピンと同じものだど気付いた。だが、レイフォンがそんな事に気を取られている間に、ウォルターは駆け出す。

内力系活剷の変化、旋剷。

靴裏……足の裏に剷を収束させ、地面との接触と同時に爆発させ大地を滑るように駆ける。

汚染獣は、ぱきぱきと固まっていた殻をひび割れさせ、その甲殻を大地に落とす。

接近するに連れて、その巨大な身体から重力に則って下降する殻を避けながらウォルターは疾走し、背を下に、大きく身体を仰け反らせ、跳躍した。

「ウォルター……ッ」

レイフォンの声が小さく聞こえた。だが、ウォルターの動きに淀みはない。

跳躍した流れのまま、仰け反った身体を更に上半身からねじって刀を上段に構える。

下半身がねじれに伴う動きに合わせ、下降する。

ウォルターの存在に気付いたらしい汚染獣が、ずらりと並ぶその獠猛な牙をウォルターに向かつて曝け出す。

ウォルターは己の口角が上がるのを感じつつ、一切の迷いなく刀に剄を収束させ、振り切った。

外力系衝剄を变化、喰劍^{はけん}。

残線角度、40・623度。振り下ろしまで、3・68。到達まで、5・76。

刀に閉じ込められていた剄は上段からの振り下ろしに伴い開放され、斬線の型に沿って放たれる。そして、その剄が通った残線の形に汚染獣の肉が抉れ、屠られる。

「アルセイフ、いつまでぼっとしてるー！」

ウォルターの叱咤にレイフォンがうたれ、構えた剣を握り直して動き出した。

——思ったより動きが速くない汚染獣だ。これならなんとかなるか…？

ウォルターは再び剄技を放った。

外力系衝剄を变化、空断。

残線角度、34・72度。到達まで2・98。

大気を裂き、汚染獣に対して直線的な攻撃を仕掛けた。だが、汚染獣に当たることは無く、汚染獣に跳ばれて避けられてしまう。

回避率、46・734%。攻撃から到達までのタイム・ラグ算出：5・9。

——脚力の強い汚染獣なのか？

レイフォンが応戦している間に、幾度と無く汚染獣の頭上を跳躍で行き交い、汚染獣を観察する。汚染獣には太く、巨大な足が生えている。

それが先程の跳躍力の理由だろう。山よりも大きな巨体を支える足であり、そしてその巨体を随分と大幅に跳躍させる脚力。

これならば、素早さが無くてもうなずける。

（イオ先輩、後衛と前衛を決めた方が懸命だと思いますがどうしますかとフォンフォンが言っています）

ウォルターの服のポケットに入ったフェリの端子からそう声が聞こえた。ウォルターは跳躍し、レイフオンの方まで舞い降りると汚染獣の狙いがずれた事を確認してレイフオンを肩に担いだ。

「ッ?!」

「黙ってる」

ウォルターは一気に内力系活剷によって汚染獣との距離を開けた。

内力系活剷の変化、水鏡渡り。

神速と化したウォルターが一気に大地を駆け、汚染獣を挟んで巨大な岩場の後ろに隠れた。

ウォルターは自分の念威とフェリからの連絡で汚染獣の位置を確認し、とりあえずと抱えていたレイフオンを下ろした。

「わ……っ！ つ、いきなりなにをするんですか!」

「うるさい。オレがなに言ってもお前素直に聞かないだろう。だからこうしたまです」

「……聞きますよ……」

レイフオンの不服そうな言い方に、ウォルターはどうだかね、と呟いて肩を竦めた。

「ともかくだ。さっきの話だが、前衛はお前がやれ」

「僕が、ですか？ 僕は後衛で鋼系を使おうかと思っていたんですけど」

鋼系。レイフオンがツエルニに幼生体が押し寄せた際に使用した錬金鋼の形状。

目に見えない鋼の糸を無数に操り、相手を即座に切り刻むことのできる、使い慣れればとても便利なものだ。だが、それはそれで危険なのだ。ウォルターは過去のレイフオンの事から知っている。

「ああ。はつきり言うが、正直オレ、後衛は好きじゃない」

「本当にはつきり言いますね……。だったら前衛やればいいじゃないですか」

「お前のそのオンボロ錬金鋼と、かじった程度の鋼系技術に任せるのは些か不安が残るンでな。アルセイフは前衛、オレが後衛。文句は聞かねえよ」

酷い言われようだ、とレイフオンは眉を寄せたが、すぐさま切り替えた。

レイフオンにとって、ウォルターとは未だ許しがたい人物ではある。だが、いまはそこまで憎しみを抱いては居ない。

何故なら、ウォルターがどういう人間かが、いまははっきりとわかってきているから。

そしてなによりウォルターがどう思ってくれているのかが分かっているから。

だからこそ以前よりも、どちらかと言うと尊敬の念が強くなってきているのがレイフオン自身分かっている。

だが、それを表に出すのは別だ。そんな事は、さすがに出来ない。というのも、ウォルターから言わせればくだらないプライドなのかもしれないけれど。

「さて。オレが先に化鍊剄で仕掛ける。アルセイフはその隙に出ろ」

「……分かりました」

レイフオンが視線を合わせて頷くと、ウォルターがにやりと笑みを浮かべた。

——本当に、この人は……

嘆息する。ウォルターと居ると、うっかりここが戦場だと忘れそうになる。

この、軽い様子に流されて、ウォルターと居るといつもの取り繕ったような自分が居なくなる。

ああ、と眩きをもらす。

外力系衝剄化鍊変化、剛天^{ごうてん}。

ウォルターが上空へ向けた刀の切っ先から細長い針状の剄が放射され、汚染獣に狙いを定めて飛び交う。それが硬い汚染獣の殻を突き破り、中の肉にまで達する。

呻いた一瞬を利用してレイフオンが飛び出し、汚染獣に向かって剣を一閃させる。

「……さてと、再開しますかねえ……」

面倒だけど、という眩きは轟音に飲まれて消え去り、化鍊剄だけが

残った。

外力系衝剋化練変化、龍^{りゅうしゅんじん}逡巡。

レイフォンが前方に居ることと、フェリには見られていない事をい
い事に、口角をあげ、鮮烈な笑みを湛えた。

そういえば、こういうことに燃える戦闘狂がグレンダンには居た
なあ、と思いつながら。

「当たり前だろ」

ニーナとシャーニツドはひたすらランドローラーを走らせていた。ハーレイからレイフォンとウォルターが外に出て、汚染獣と戦っている。聞いたせいであつた。まだニーナの剽脈過労は完治した訳では無かつたが、それでも居ても立っても居られなかつたのだ。

「くそつ、あいつら……」

ニーナはフェリの端子に向かって話しかけた。

「フェリ、あいつらは無事なのか？」

（無事です。ただ……）

「ただ……？　なんだ？」

（ふたりともが同じ事を言いました。それ以上は近付くな。もつと後方に退避しろ、だそうです）

フェリがそういつた瞬間、ニーナ達の前方から轟音が鳴り響き、巨岩が砕け散つた。

それに伴い膨大な剽が放出され、砕け散つた巨岩を更に砕き、跳躍する巨大な黒い物体に向かって突き刺さっていく。

「なんだ……?!　あれは……」

（現在ふたりが相手している汚染獣です。退避してください）

「馬鹿を言うな！　あの2人が戦っているというのに……!」

（つべこべ言わず退避しろ、うるせえな）

突如念威端子から聞こえた声。それはいつもの澄んだフェリの声ではなく、こんな状況でも何処か気怠そうな雰囲気の声。

ウォルターの声だ。それも、聞こえてきた念威端子は別の念威端子だつた。

フェリの念威端子はうるこ状のものだが、この念威端子はどちらかと言うと楕円形に近く、上下が鋭く鋭角的だつた。

「ウォルター……?!　お前、念威を……」

（うるさい。いまはお前の相手をしてる暇はねえんだ、退けと言つたら退け。邪魔だ）

「同じ隊の仲間だ！　放っておける筈ないだろう!」

(知るか、そんな事。ここじや邪魔だろうが、ンなモン)

ニーナはウォルターの言葉に驚愕した。ニーナはニーナなりの誠意を持ってそういった。だが、ウォルターはそれを切り捨てた。

驚愕でニーナが言葉を失っていると、ウォルターが一拍おいてから言葉を紡いだ。

(ここじや同じ隊のヤツだろうとなんだろうと弱いヤツは死ぬ。……もう一度だけ言うぞ、邪魔だから来るな)

その言葉を皮切りに、ウォルターからの通信は切れ、再びフェリの声が聞こえてきた。

(隊長……)

「……わたしがあいつらより脆弱なのは分かっている……だが……」

「……ニーナ。ここはそう言っていられる場所じやねえだろ」

「だが……ッ!!」

「ここまで来たら、来るなって言われても行くしかねえだろ」

「……………」

シャーニッドが自信満々に言った。ニーナはてつきり反対するものだと思っていた為、一瞬虚を突かれた。

「ここまで来たんだ、行こうぜ」

「……………ああ」

再び、ランドローラーは走りだした。

ウォルターは先程放った化鍊剄の間を縫って跳躍し、レイフォンが攻撃を叩き込んだところに二段攻撃として密度に圧縮した剄を込めた刀を叩き込む。

(ありつ)

ウォルターは何処か不可思議な気分になる。それは、汚染獣に対して、だった。

(どうかしたの、ウォルター?)

ルウにも問われる。

(なんかいま、違和感が……)

そう答えた瞬間。

「…退避ッ！」

咄嗟に叫んだ。

レイフオンにも声は届いたようで、レイフオンも後方へ跳んだ。

「……こりや、きついねえ……」

汚染獣の背が割れた。それだけならばまだいい。だが。だがだ。

「……ここにかよ……」

脱皮だ。元々レイフオンは雄生体だと検討をつけていた。だが、ウォルターが感じていた違和感は、これだったのだ。

「成程ね……！ 普通に老生体かよ……」

少し遠方でレイフオンの歯ぎしりが聞こえた。心なしか、レイフオンの剣を握る手に力がこもっているようにも見える。

「……どうします、ウォルター」

「どうしますじゃねえだろ。……だが、お前の様子を見る限り、現状倒すことは無理だとわかった」

レイフオンが持っていた錬金鋼は現在レイフオンが握っている錬金鋼でラストだ。

つまり、これ以上の長期戦はレイフオンには無理だということ。

「……すみません」

「謝るなよ、お前が悪い訳じゃない。……あえて言うなら、こんなタイミングで脱皮してくれる汚染獣の方かな？」

「…言っている場合でも無いですよ。そうすると、せめてツエルニから狙いをそらす打開策を考えるべきです」

「そうだなあ……」

ふう、と溜息を吐く。正直な話、ウォルターはレイフオンが居なければ出来るのだ。

“正真の異民”としての自らを開放し、異民として刀を振るう事が出来るのであれば。だが、ここではそれが出来ない。レイフオンとフェリの念威がある以上、下手に大きなことを起こすべきではない。

ここではあくまで“人間”なのだ。“人間”の枠を超えた

「異民」になるわけにはいかない。

(どうも面倒だ、これは)

(僕の「領域」を広げてアイツを消そうか?)

(だめだ。それは違和感がありすぎる)

ルウの意見もまた、レイフォン達が居なければ使える事である。だが、ルウの「領域」による「拒絶」は、一瞬にして、忽然と存在自体を消してしまう。

唐突に消えられたら、レイフォンも動揺を隠し切れないだろう。さすがにそれをやったのがウォルター……正確にはルウだが、自分達の事によってということ悟られるのはまずい。

——まいったね、こりや

どうも「人間」というのは面倒だと思いつながら刀を構えた。

向かってくる。そう思った、しかし汚染獣は違う方へ向かい出した。

その急激な方向転換に、ウォルターの脳裏に一つの可能性が浮かぶ。

「まさかッ！」

ウォルターの跳躍に合わせてレイフォンが跳んだ。そして、ウォルターより数瞬遅れてレイフォンが気づいた。

「こんなところまで！」

合図や意思確認なしに意思疎通し、レイフォンは跳躍のまま下降を始め、新たに戦場に現れたランドローラー……ニーナ達の方に向かって下降し、ウォルターはランドローラーへ向かう汚染獣に向かって剽技を放った。

外力系衝剽を变化、光琳玉。

刀の切っ先に収束する巨大な剽の球体。

その球体から細長い無数の剽弾が放射状に放たれた。剽弾は汚染獣に直撃し、こちらに向かいながら跳躍を繰り返していた汚染獣を墜落させる。

「ったくー！」

一旦の墜落を確認すると、ウォルターもニーナたちの方へ向かつ

た。

「なんでいるんですか?!」

レイフォンの怒りの滲む声がニーナ達をうつ。ウォルターも到着し、ウォルターは颯め面で盛大に舌打ちした。

「なにしてんだ、お前ら」

そうウォルターが言い放ったが、ニーナ達はそれどころではないといった様子で目をむいた。

「お前ツ、どうして都市外用スーツ無しにここにいる?!」

ニーナの焦りに満ちた声音に、そういえば説明していなかった、とウォルターは盛大なため息を吐き、「ともかく」と話を切り出した。

「オレは退けといった筈だ、どうしてここにいる」

「退けと言われても、退けることと退けない事があるだろう」

「退けることだ、これは。……退けて言われたら退け。さつきも言った筈だ。邪魔だと」

「だからといって、わたしがお前のその言葉を受け入れ無くてはならない理由はないだろう!」

「:…だったら死んでもいいんですか?!」

ウォルターとニーナの話に叫ぶように口を挟んだのはレイフォンだ。

「ウォルターがなんて言ったのかは知りませんが、ここでは力無い者は死ぬんです。:…僕だって、ここじゃいつ死ぬかなんてわからない場所です。隊長達はもっとその可能性が高い。ここで、かばい合う事はほぼ不可能に等しいです。元々僕は集団戦の利が無い」

「……………」

ニーナがレイフォンの言葉に口を噤んだ。

「だけどよ、なにも出来ねえっていうのも嫌だろ?」

「だからって荷物になられても困るんだよ」

シャーニツドがなんとかニーナをかばおうとしたが、ウォルターに一蹴される。しかしウォルターはやや苦笑し、ため息を再び吐いた。

——— 本当に、こいつらは

嘆息する。

退けといったのも、邪魔だといったのも、ニーナ達が死ぬよりはマシだと思っただけののだが、それはどうやら通じなかつたらしい。なにを言っても来るだろうとは思っていたが、本当に来るとは。

面倒だなと思いつつ、ウォルターは頭をかいた。

「……だが……、今更帰って言ったって無駄だな。ここまで来たら」
「なら……!」

「だが。アルセイフもすでにお前らと同じような状態だ」

「……………」

レイフオンの錬金鋼はすでに壊れる寸前だ。

ウォルターは自分の武器を使っている為そんなことはないが、レイフオンはそうはいかない。

「つてことで」

「?!」

ウォルターはひよいとレイフオンを持ち上げて、ニーナ達のランドローラーに乗せた。そして、再び活動を始めた汚染獣の方へと踵を返す。

「ウォルター、なにを……ッ?!」

「エリプトン……先輩、さっさとランドローラー走らせてツエルニに戻れ」

「な……ッ、お前だけ残るといのか?!」

「そういうことだ、さっさと行け、アルセイフもアントークも邪魔だ。ロス、そっちのサポート出来るな?」

(できませんが……)

「なら行け。ちよいとでかいの使うから巻き込んだら面倒だ」

「ウォルターッ」

珍しく心配そうなレイフオンの声がウォルターの鼓膜を揺らした。

ウォルターは顔だけ振り返って、レイフオンを見る。

普段、決して見せないであろう情けない顔をレイフオンがしている事にウォルターは苦笑を浮かべた。

「心配そうなツラしてンじゃねえよ、アルセイフ。大丈夫だ、オレは死なないから」

「…………あなたなんて…………、本当に帰って来なければいいんです」
「ははっ、そうなれば憎いヤツが死んで、お前は嬉しいな。…………けど、お前がオレを超える前にオレが死んだら、一生お前はオレに負けたまま、つてこった」

「……………」

汚染獣が疾走してくる。脱皮したことにより速度が格段に上がっている。

背後でシャーニツドが、「信じてるぞ」と小さく呟いた。

ニーナの頷く気配を感じつつ、ウォルターは刀を構え、こちらへ向かってくる汚染獣を見据える。

汚染獣が近付く。ランドローラーは走りだした。

不意に、背後から念威端子が近付く。

(レイフォンから、伝言です)

「……………」

(絶対、帰ってきてください。信じています、と)

フェリがそう告げたと同時、念威端子はフェリからの念威を失い力なく荒れた地面に落ちた。

「…………絶対帰ってきてください、か…………。っは」

ウォルターはレイフォンらしい、子供のような行動に微笑んだ。そして次には消えていた鮮烈な笑みを湛え、刀を上段に構えた。

「当たり前だろ」

ウォルターは自らの異界法則により不老、そして半端ながら不死の身体を持っている。

たとえルウがこの場で領域を解こうとも、死にはしない。大怪我を負うだけで。だが、だからといって油断している訳ではない。

残線角度、90.687度。到達まで、1.7。

汚染獣は目の前。

獰猛な瞳で、ずらりと大量の牙が並び、唾液が口内を照らす。

そんな目の前の死に恐れることはない。

ウォルターは自らが凶暴な笑みを湛え、ただ、刀を振り下ろす。直後、辺り一帯が白に埋没した。

帰還

ニーナがシャーニッドの後ろに乗り、レイフォンは1人でサイドカーに乗っていた。

走りだしてからすぐ、後方が白く染まった。だが、それだけで他の気配もなにも無く、フェリも沈黙していた。

戦いの疲れが押し寄せると同時に睡魔も押し寄せてくるが、レイフォンは一向に眠れる気にならなかった。その懸念の理由は、ウォルターをあつ汚染獣の元に残してきてしまったことだ。

確かにウォルターは都市外用スーツはいらぬ存在であるし、天劍級の錬金鋼を持つているうえ、体調も万全だった。

そうなれば、心配の必要など一切ないことは分かっている。だが、どうしても一抹の不安が拭い去れずに居た。

サイドカーの中で1人膝を抱え、膝に顔をうずめるように静かに活剷を全開にする。

もしかすれば、強化された聴力であればウォルターがこちらへ向かう音が聞こえるかもしれない、という思いからだだった。

「……………」

「…レイフォン…」

ニーナが心配そうに声をかけてきた。レイフォンはあえてニーナの方を見ずに顔を上げて前を見た。

「平気です、すみません」

「…………いや…………」

ここにいる全員が、レイフォンがウォルターを心配している事はわかりきっている。だが、それを口にだすことさえも不要なほど、レイフォンが弱り切っているのだ。

「……………大丈夫だ」

「…………隊長？」

「ウォルターのことだ。絶対にけろりとして帰って来る。…………そうだろう」

「……………はい」

レイフォンが小さく頷く。そして、背後から音もなく声が聞こえてきた。

それがレイフォンでないことはもちろん、シャーニツドでもない、第三者の男の声。

「そうそう。そうやってオレは突き放されて行くんだよな」

「う、うわッ!!」

「よー。いい驚きっぷりだな、アルセイフ」

「…………ウオル、ター…………?」

活剷を全開にしていたレイフォンに、音はまだしも気配さえも気付かせずに帰ってきたのは、いままさに生存を懸念していたウオルターだった。

「ウオ、ルター…………!!」

「なんだよ?」

「…………もつと、早く帰ってきてください!」

「横暴だろ、その言い方!」

これでも急いだんだぞ、とウオルターが眉を寄せた。ニーナやシャーニツドは笑みをこぼし、ウオルターの帰還を喜んだ。

レイフォンも、零れそうな涙を堪えて多くの悪態をつきながら微笑んだ。

レイフォン自身、どうしてこんな気持ちになっているのか分からなかった。

いままでだって、何度も後詰と言うことはやったことがあった。誰かが戦っているのを、見ているだけということはあった。だが、こんな風に心配になったり、不安になって押しつぶされそうな気持ちになったことはなかった。

だからこそ、戸惑い、そのことに更に不安になった。そして、それとともに帰ってきてくれたウオルターに対して酷く安堵したのだ。

—————もしかして、僕は……………

失いたくないのかな……………?

この、ウオルター・ルレイスフォーンという存在を。

そう、少なからず思った。だが、答えは出なかった。

いざれ分かるだろうと、レイフォンはとにかく帰ってきてくれたウォルターに思いつく限りの悪態を吐くことにした。

ウォルターの呆れ顔と苦笑いの入り混じった表情に微笑みながら。

異変

グレンダンにいたりリンは、レイフォンから送られてきた手紙を見て大きな溜め息をついていた。

頭を押さえてウーアー唸っていた所、後ろからいきなり声をかけられて驚く。慌てて後ろを見れば、そこには銀髪の青年がいた。足を組んで悠々とベンチに座る青年は、リンの恥ずかしさなど気にもしていない顔で呟く。

「やあ」

第五小隊と小隊戦を行っていた十七小隊は、レイフォンの動きとウォルターの働きにより、順調だった。

レイフォンの身体を剽の煌きが覆い、残光が後をついてまわる。活剽衝剽混合変化、千斬閃。

——アルセイフが独学で千人衝を学んだ末の結果か

ウォルターは剽の流れを追う。追うが、特に変化は見られない。ウォルターは、レイフォンの剽に淀みもないかわりに変動も無い事にやや眉をひそめた。

「うーん、なんか違和感」

ウォルターがそう呟いたと同時に、勝敗は決した。

「あ、レイとん見つけー！　そしてそしてウォルター先輩も見つけー！　…ミイ。どうしたの？」

「おう、元気だなロツテン」

芝生で寝そべっていたレイフォン、そしてそれにちやちや入れに来ていたウォルターを発見したのはミイファイ達、レイフォンの同級生三人娘だった。

後続に居たメイシエンの手には一般生徒、しかも女子には似合わない大きな弁当箱が握られている。

「あ、メイ。そっか、もうお昼だ」

「……なににお前、弁当なんて作らせてんのか」

「違いますよ」

「えー」

「メイが作りたいたからーって言うてですね、それをもらってってくれる訳ですよ、ウォルター先輩」

「へえ……厚意は飢えからアルセイフを救う」

「……なにが言いたいんです?」

じとり、とレイフォンがウォルターを睨みながら上半身を起こした。ウォルターはレイフォンの不機嫌そうな眼に肩を竦める。

「はいはい」

「あの…、あたしが作ったわけじゃないですけど、ウォルター先輩も一緒にどうですか?」

「え、いいの?」

「なあ、メイ」

「あ、はい。どうぞ。たくさんありますし」

「じゃあ悪いなあ。一緒にさせてもらおうわ」

やんわりと笑みを浮かべつつ、メイシエンの弁当をありがたくもらう事にした。

受け取った弁当を食べながら、大量に作ったなと思いつつ箸をつける。朝には自分が受ける授業の用意やその他もろもろもあるはずだ。前日から作っておいたにしても、重箱にみっちりするほど料理を詰め込んでくるとは、なかなか張り切っている。

厚意で作るにしては気合の入った料理だとも感じたウォルターは、ふむ、と小さく首を傾げながら口を動かしていると、ミイファイがふと呟く。

「それにしても、ウォルター先輩もレイとんもよく食べますよね」

「そうか? 武芸者はこんなモンぐらいが普通なだけだな」

「ナツキはそんなに食べない?」

「あたしもそこまでは食べないな。確かにミイ達よりはよく食べるが」

ウォルターが肯定し、レイフォンが更に問いを出したが、3人は首

をひねっていただきます。

「まあでも、武芸者の人と一般人は運動量が違いますしね」

「そうだな。それに身体のできも違うかからな」

「ですよ。僕も、孤児院の料理当番の時に僕の場合で作ると多いって言われちゃいますし。まあ、元々感覚がわからないっていうのもあるんですけど」

量の調整下手なんですよ、とレイフォンは笑った。

笑ってから、隣でウォルターがへえ、と頷いている事に気がついてレイフォンは「あつ」と声をもらす。

「あ、あなたに言った訳じゃないです」

「……でもさつきお前、オレの後に『ですよね』って……」

「いいい言っただけです、言っただけです！」

「……あ、そ」

ウォルターがくつくつと笑い、レイフォンはふてくされた様子で弁当に箸を伸ばす。

「……む……？」

そこで、突然ウォルターの背中をかけた感触に身体を震わせる。その為にウォルターの隣で弁当を食べていたレイフォンが吃驚して箸を落とした。

今度はメイシェンがレイフォンに驚いて連鎖的に箸を落とす。

「ど、どうしたの？」

「どうしたんだ？」

ウォルターの反応に驚いたらしいナルキとミイファイもちらりと見やっている。

「……………」

下を見ながら、地面を撫でるように見つっ、後ろへと視線を流す。後ろに何かいるのかと皆が視線をウォルターに付いて動かしていく。

「……………なんだ？」

「ウォルターが言ったんでしょ?!」

いきなりウォルターのぼけたような言い草に、レイフォンがツツこんだ。それでもウォルターはレイフォンの言葉に耳をかさない。

——まさか、グレンダンに汚染獣が…？　こんなに反応が古いのに、なんで気付かなかった？

念威も使うことの出来るウォルターは、任意でグレンダンに眠る真の意識…：サヤの元に念威端子を置いている。

とはいえこの念威端子は現在では念威端子という役割すら失っており、電子精霊の縁の空間を通じてルウがグレンダンを覆う領域を発生させている為ウォルターとリンクしている、という状態だった。

だがそれでも、微かな汚染獣反応であろうとウォルターは見逃す訳にはいかない。

残っていた弁当を口へかき込むと、勢いよく立ち上がる。

「ど、どうしたんですか？」

「アルセイフ、悪いが午後さぼるからアントークに言っておいてくれ。ついでにその鞆も届けておいてくれ」

「ええ?!」

そういった途端、ウォルターの姿がかき消えた。

「ちよつ、一般人もいるのに!」

そんなレイフォンの声は届かない。

「…：ウォルター先輩は、どうしたんだ？」

ナルキが困った顔でレイフォンの方を見た。ウォルターの姿はすで見えず、鞆だけがその場に残されている。

レイフォンもまた、ナルキと同じように困った顔をしている。

「時々あるんだよ、あの人…：こういうこと」

大きいため息を吐いてレイフォンは芝生の上に残された鞆を拾い、ついた芝をばたばたと払う。

「もう…：しようがない人なんだから」

そう言いながらしつかり言われたことをするレイフォンも凄いな、とナルキは思いながら、弁当を食べ進めた。

ウォルターは縁の空間を流れていた。グレンダンへ行くのには、時を越え、縁を掴むのが早い。

「おかしいよな、ルウ？」

(なにが?)

ルウに語りかけるが、ルウはいまいちピンときていない様子だ。ウォルターは怪訝な顔で腕を組む。

「簡単だよ、お前の領域はしっかりしてる筈なのに、なんでこんなに気付くのが遅れた?」

(さあ……。潜伏とかだと気づきにくいかも)

「潜伏ねえ……。汚染獣がそんな事狙ってするか?」

(どうだろう。グレンダンのことだし、確実に潰すためにそういうことは練っているかもしれない)

「だよなあ」

だが、反応の様子を確かめると一月だ。一月もかかるようなまでに苦戦する汚染獣なのだろうかとウォルターは首を傾げる。

(でも、どうしてもとりあえずはこのままの時間でとんだほうがいいよ)

「ん、それはわかってんだけど」

何処か納得の行かない、と言った様子でウォルターは縁の空間を抜けた。

“リーリン・マーフェス”という存在

「話は簡単なんだ、リーリン・マーフェスさん」

にこやかに笑った青年、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンス。そして、その隣にいる男はリントンス・サーヴォレイド・ハーデン。槍殻都市グレンダンが誇る天剣授受者だ。

「キミの身をしばらく守らせて欲しい。いろいろあつてね」

につこりというが、あまりにも胡散臭い。というか、貼り付けたような笑み、とでも言うのだろうか。彼の笑顔には、感情が見えなかった。

どちらにせよ、見えようと見えまいと胡散臭いことに変わりはないが。

「あの、それは…あの、レイフォンに…」

「ごめんね、質問は受け付けない」

言い切ったサヴァリスだったが、突如、天剣授受者と呼ばれるふたりでも気付けなかった気配が、サヴァリスの背骨に膝をクリティカルヒットさせた。

「っ?!」

驚いて後ろを振り向く。続いて勢いよく振ってきた靴裏に、サヴァリスは咄嗟に腕を交差させて受け止めた。

飄々とした声音が、口角を上げた青年から発せられる。目の前にいる青年に、サヴァリスは顔をしかめ、単純なちからの押し合いをさせられながら頬をひきつらせた。

「質問くらいはさせてやれよな、心の狭いお方達だねえ…。女の子には優しくするモンだぜ? 自意識過多なのは置いておいてよお」

へらり、と笑って現れた男は、見覚えのある…というか、ありません。ありました。

「……ちよつと……ウォルター・ルレイスフォン、何やってくれてるんだい」

「っは、くたばれルツケンス」

「い、いたつ、何するんだい?! 久々に厳しいじゃないか!」

「はっはっは、ばーかばーか」

「ばかとは酷いだろう。ちよつ、本当にいたつ、いたたた」

連続でウォルターがサヴァリスの交差させた腕を蹴りつける。

本人だんだん楽しくなつてきているようで、はじめはただの挨拶代わりのようなものだったのだろうが、いまはただ蹴りつける事が楽しいようだ。

リンテンスがそれを呆れた表情で一喝する。ウォルターの表情は先程から至つて変わつていないものの蹴る足は止められた。

やれやれといった様子でサヴァリスが立ち上がり、蹴られた腕を困つたように眉を潜めて見る。

そんな様子を、リーリンはぽかんと見ていた。

この人が誰かは知っている。

ウォルター・ルレイスフォーン。レイフォンに天剣を与えた人物だ。

あの時と同じ不敵な笑みだ。

しかし……

「…ウォルター、とりあえずは仕事という名目で動いているのだが？」

「どうでもいい。くだらない。どうせ馬鹿の使いだろ、大変だねえ」

「ウォルターしかそう言える人はいないと思うよ」

「言える人が居ない? イエーイ」

「……ウォルター……」

ふざけた様子のウォルターが両手を上げる。

それにもう頭がいたいと言いながら額を抑えるサヴァリスだったが、未だサヴァリスの脛はウォルターの足の攻撃に遭っている。

その為にサヴァリスはため息混じりにやや苛立った様子で腕を組みながら言った。

「一応は陛下に対しての評価でそういう言い方してると……」

「あん? あの女王のことだろ? 要するにおばかさんの使いつぱにされてんだ。大変だねえ、オレほんつと天剣授受者やめて良かった

わー」

あれの我が儘に使わされるとかマジで勘弁、と良いながらウォルターが言う。

わざとらしいウォルターの言い草に、サヴァリスが眉根をよせた。

「珍しいね、キミらしくもない」

「なあにが？」

「雰囲気か」

「そおかあ？ 良く分かんねえなあ」

へらりと掴みどころのない笑みを浮かべてとぼけるウォルター。

これ以上は何を言っても無駄だな、と察したサヴァリスは肩を竦めただけで終わる。

「ともかくだ。話が進まんだろう」

「で？ えーっ……と……。要するに、リーリン・マーフェスを日常生活に支障をきたさない程度に護衛しますよーって話だろ？」

「まあ、そういうことですね」

「だそうだけど？」

「あ、はあ……。あの、やっぱりそれはレイフォンに関係あるんですか？」

リーリンが再び切り出した質問にサヴァリスが苦笑する。その表情から、ウォルターはぼむと手を打った。

「ああ、うん、そう」

「……そうですか」

リーリンはあっさり引いた。それはリーリンにとって、レイフォンの事とは天剣授受者に歯向かってでも気になることだったらしい。後のことを顧みずにそんな風にできるのは若いうちであるのは然り、若気の至りもまた然り。

けらけらと笑いながらウォルターがしみじみと呟く。

「若いっていいねー」

「キミも充分若いと思うんだけどな」

「若くないぜ？ あれだよ、見た目は若いけど、ってヤツ」

「知らないよ」

「あらら」

「お前らしい加減にしろ」

リンテンスの怒気が含まれた視線を穴が空くかという程向けられるが、ウォルターもサヴァリスも飄々と微笑んだ。

「ああ、すみませんリンテンスさん」

「悪い悪い。久しぶりにテンションあがってるわー」

「……………」

どうしようも無いヤツらだな、と言わんばかりにリンテンスの睨みを受けた。

グレンダンの建物の屋根の上を跳躍で跳びながら、ウォルターはどことなく何処かへ向かっていた。とはいえ目的がある訳ではない為、空中で身体を回転させたり、捻ったりして時たまアクロバティックなジャンプをしていた。

「ん~~~~、ん~~~~……………」

そんな最中でさえ、首を傾げる。

(なにがそんなに引つかかっているの?)

「おかしいんだよなー。普通に潜伏してるんだったら、即座に見つけて殺せばいいだけだ。それなのにそれをしない」

(…………確かにね…………。だと、潜伏してるってわかっていても、手が出せない状態だとか?)

「…………寄生とか、か…………可能性としちゃあありだが…………ん~~~~」

それでも尚はつきりとしないうォルターの態度に、ルウは首を傾げ、ウォルターに問いかける。

(それ以外に何かあるの?)

ルウの問いにもウォルターは少し唸って首を傾げたまま跳躍した。問いから2つ程屋根を飛び越えたところでようやく言葉を紡ぐ。

「それがなー…………、オレとしてはこっちの問題の方が気になる方」

(こつちって?)

「リーリン・マーフェス」

(ああ……確か、レイフォン・アルセイフの幼馴染だったよね?)

「そうなんだけど、それだけじゃない気がするんだよなあ……」

(どういうこと?)

「なんか、懐かしい感じがするっていうか……んくく……」

ぽん、と外縁部に到着する最後の屋根を飛び越えた瞬間、ウォルターの姿は消えた。

「ウォルター……?」

「っげ」

再び縁の空間を通じてツエルニに戻って来たウォルターだったが、鞆をとりについた教室の目の前には鬼のような形相をしたニーナが居た。

「お、おー悪いなーアントーク。わざとじゃないんだが……」

「…今回はサボリの事はいい」

「またなんぞ?」

「会長から呼び出した。お前が捕まらなくて困っていたところだ」

ニーナに連れられて生徒会室へ向かう。

そこにはすでにレイフォン、そして第五小隊の隊長、武芸科長のヴァンゼもいた。

——第五小隊……確か隊長はゴルネオ・ルツケンス……

ルツケンス? その名前、つい先程呼んだような気がして、「あ」と呟いた。

「ゴルネオ・ルツケンスって……ああ。ルツケンスの弟だっけ」

「……兄さんを知っているのか?」

「そりゃあ。なにせ元同僚な訳だしな」

「……そうか…、ウォルター…、ウォルター・ルレイスフォーンか」
「そういうこと」

にやり、と笑みを浮かべたが、ゴルネオはやや渋い顔をして先に生徒会室へ入室した。

何をそんなにも渋い顔をする必要があるのか、と怪訝な表情を浮かべたウォルターの隣に立ったレイフォンが眉をよせて耳打ちしてくる。

「あまりそういう事言わない方がいいですよ」

「なんで」

「結構、サヴァリスさんのこと重く感じているみたいですよし」

「……そういうお前も、あいつに嫌われてるみたいだけど？」

ウォルターの隣に立っていたレイフォンを見てゴルネオが一瞬顔をしかめたのを、ウォルターは見逃さなかった。

「……………いろいろあるんですよ」

「そりゃあ知ってる」

はぐらかしたレイフォンの言葉にウォルターは肩を竦め、ニーナはそれに首を傾げた。

ニーナはレイフォンが「やってしまったこと」は知っているがゴルネオなどのルッケンスとの因果関係は知らない。

因果……そう、まさに因果だ。

「ともかく、オレらも入ろう」

カリアンからの話は端的だった。

補給に向かうツエルニのセルニウム鉱山の間近に廃都市がある。

そしてその廃都市が並々ならぬ雰囲気を持っている為、調べてきてほしいと。

「汚染獣に襲われたな」

「私もそう思う」

そんな会話が繰り返り広げられる中、ウォルターは提示された写真をじつと見ていた。

白炎都市、メルニスク。そうだ。この都市の名はメルニスク。

かつて、ツエルニに来る前、天剣授受者になる前に行った都市。

この都市は獣と、微かに闇にも出会った都市。

獣と、そして魔女と、1人の念威操者と、そして……、月からの分

体を相手にした都市。

——汚染獣の襲撃なんかじゃない、ってことだけは確かか
ウォルターがじっと写真を見ている事に気付いたのか、レイフォン
が声をかけてきた。

「ウォルター、どうかしたんですか？」

「……いや、特になんも」

「…そうやってウォルターはいつもすぐにはぐらかしますよね」

「そうか？ そんなつもりはないんだが」

「わざとらしいですよ」

「悪いな、そういう性分なモンで」

口では悪いと言いながらまったく雰囲気を感じられないウォル
ターに、レイフォンは苦笑を返した。

出撃

出発は2時間後。

カリアンにそう告げられた為、急遽小隊のメンバーを集めて準備が行われる。

「お前らは大変だな、準備があつて」

「そうですね。まあ僕としては準備よりもそのウォルターの気の抜けきつた表情の方が大変だと思います」

「そおかあ？ 人生、どんなことでもこのくらいの余裕を持つてだな」
「腹立たしいです、即刻その口を閉じてください」

ウォルターは天剣授受者の時と変わらない、自身の私服だという私服を着て、くつくつと笑いながら左手首に付いている金色の腕輪をいじっている。

白を基調に赤で色味をもたせているウォルターの服は、何処と無くツエルニの服装に似ている気がした。

レイフォンは自身の準備を進めながらさり気なくウォルターに問うた。

「……ウォルターっていつも同じ服着てますよね。それしか持ってないんですか？」

「いや、そういう訳じゃないんだが……昔から着ている服だから、一番馴染みがあるんだよ。それに、都市外に出るんだったらこれが一番強度あるし」

「へえ……」

「なんだよその顔。なに？ ついにオレに興味持ちちゃった？」

「持ってません、自意識過剰は勘弁して下さい」

レイフォンが呆れた顔でウォルターを見やった。ふと、ウォルターもその存在に気付く。

レイフォンに向けられる敵意。

その発生源を見ると、巨漢の男ではなく、その男の肩に乗る童顔に赤髪の少女から発せられていた為、拍子抜けした。

「……………う？」

「ああ、第五小隊の副隊長の……シャンテ・ライテだっけな？ 野生児だってよ」

「……それで……どうして僕はあの人に『いーっ』てされなくてはならないんでしょうか」

「気に入られてないからじゃねーの」

「それは、最もですけど……」

あの人の気に食わないようなことはしていない筈、とレイフォンが首を傾げる。

シャンテと、そして巨漢の男……ゴルネオに目を向け、先程の様子から「ふむ」と小さく頷いてウォルターは呟く。

「まあ、ルッケンスが意図してそうしている訳じゃないだろうが、影響受けてるんじゃないの？ 無意識に。それか……」

「それか？」

「……いんや、これ以上は深追いか」

苦笑を浮かべたウォルターに、レイフォンはやはり首を傾げた。

ランドローラーが荒れた大地を疾駆する。

現在運転はシャーニツドとウォルターがしており、シャーニツドの方にニーナ、ウォルターの方にフェリとレイフォンを乗せている。とは言え、片側は食料などの荷物が乗っている為レイフォンはほぼ荷物に埋もれていた。

「大丈夫か？ アルセイフ」

「平気、です……」

「あまり平気には見えない状態ですね、それ」

レイフォンは本当に半分埋もれていて、足がサイドカーのフロント部分に持ち上げられている。

そしてさらにその体勢に追い打ちをかけるように背中の下や腹の上に荷物がどっさり置かれていた。

「呼吸しにくそうだな、その格好」

「だったらもつとばしてください」

「いやだ」

「……………」

「怒られるだろ、オレが」

「大丈夫ですよ、イオ先輩。あなたは叱られてもめげない子」

「それいいことなのか悪いことなのか判断つかねえわ。それとなんで上から目線?」

「悪いことですよ、そのくらいの判断はつけてください」

「状況によつてはいいことだろ?」

「この状況じゃ悪いことです」

「そうか? 悪いことならまだまだ苦しんでもらうことになるんだが」

「……………良い事でもいいです……………」

ウォルターが加速の合図を後方のシャーニッド達に出すと、シャーニッドからOKの合図が帰ってくる。ウォルターはレイフォンの腹の上の荷物を少しどけてやり、レイフォンが体勢を立て直したのを見届けるとアクセルをひねった。

「っど、っわ!!」

「イヤッホウ——」

「っちよ、はや、速いですよウォルター!!」

ウォルターは目一杯アクセルを全開にした。

その為に小さな地面のおうとつでさえ激しくランドローラーが上下する。グラグラと揺られるサイドカーの中でレイフォンが悲鳴に似た声を上げた。

「っちよ、速い、速いですっつてば!!」

「加速しろって言ったのはお前だろー」

「ここまでしろなんて言つて、なッ、あぶなっ、荷物落ちる!」

「ロス、平気か?」

「平気です」

淡々と帰ってきたフェリの返答だったが、何処と無く眼がきらきらしているような気がしてウォルターは薄く吹き出した。

「意外に楽しそう」

「意外すぎです」

「エリプトンも大丈夫そうだし、さっさと行こうぜ。もうだいぶ近付いてきた」

「ですね」

「ちよ、勘弁して下さい、どうしてウォルターも先輩も楽しそうなんですかー!」

『フォンフォン……』

「二人してそれ呼ばないください!!」

まともな人が居なくなつた、と思いながら吐きそうな思いを堪えてレイフォンは揺られ続けた。

半日程ランドローラーを走らせると、目的の都市に到着した。停留所はあるようだが破壊されており、ゲートも閉まっている。

「どうする?」

先程調子に乗りすぎたか、とウォルターはレイフォンを見て思う。さすがにヘルメットをかぶっている上、いまはそう出来る状態では無いため出来ないようだがレイフォンは今にも吐きそうな様子でげえげえと息を喘がせていた。

ともかく、と言つた様子でウォルターが問うと、ニーナが少し考えてから答えた。

「そうだな……、ワイヤーで上まで上がるか」

「ん、それもいいけどなー。面倒だしゲートぶつ壊そうぜ。そしたら早いだろ」

「エア・フィルターは生きていますよ、別に問題はないと思いますけど」

フェリは至つてどうでもいいといった様子でウォルターに賛同した。

「だめだ。生存者が居たらどうする」

「居ねえよ、こんなボロの都市」

「だめだ。むやみやたらに壊して都市に損害を与える事もよくない。わかつているだろう?」

ニーナに言われ、ウォルターは肩を竦める。仕方のないヤツだと言
う眼をニーナに向けられ、苦笑交じりで仕方がないと頷いた。

騒動

軽い探索とともに第五小隊、ゴルネオたちと合流してウォルター達は一旦休憩のため駐留所を訪れていた。

「なつ、こつ、てめえ……！」

ウォルターは手洗いから戻ってきた時、やや緊迫した空気に立ち会うことになる。

シヤンテとフェリの2人だ。

やや眉を寄せてそれを傍観していたウォルターが、シヤンテの手が錬金鋼にかかったのを見て即座にフェリの前に出た。

「！」

それと同時に向かいにいたらしいゴルネオもシヤンテの制止にかかっており、ウォルターの後ろでフェリが息を飲んだ音が聞こえた。小さく、ほんの少し動揺した声音でフェリがウォルターを呼んだ。

「……イオ先輩？」

「わり、ちらつと見えたモンだから」

「……いえ、構いませんよ」

ウォルターはフェリに怪我は無いかと訪ね、静かに沈黙したまま頷いたフェリにひとまず胸をおろした。シヤンテはゴルネオの態度が気に入らないらしく、足を殴りつけて去っていく。

「…悪いな、うちの隊員が」

「構わねえよ、こつちに怪我がなけりゃあ」

「……………あなたは、納得していませんね」

フェリがウォルターの後ろで静かに口を開いた。ゴルネオは静かにうなずき、答える。

「ああ、納得できる筈もない」

「…大変だねえ、優秀すぎる兄を持った弟っていうのは。……いや、いまのは私怨の方か？」

「……優秀すぎる兄、か……それもある。だが、兄さんは兄さんだ。そして何より、私怨だろうとなんだろうとおれはあいつを許すことは出来ない」

「まあねえ……けど、知らない事があるお前も悪いンじゃねえのかね」
「……知らない事……？」

「……ま、別に知ろうと知るまいと、起こった事実は事実だ。なんにも変わりはないから良いンだけどな、オレは」

フェリを促すとゴルネオから離れていく。ウォルターの横を歩くフェリは、不快だと呟く。

それには苦笑するしか無かった。

ぞぐり、と背中を悪寒のような何かが、ウォルターの背をかける。
現在はウォルターとレイフォンの合作料理を小隊に振るまい、食事をしている最中であつた。

周りのニーナやシャーニッド、フェリと言つた十七小隊は、皆賑やかに合宿の話を持ちだしたりしていた。だが、ウォルターはそんな会話に参加せず、背を駆け巡つた悪寒のような感触を必死に確かめていた。

(これは……)

(出たよ、ウォルター。潜伏していた汚染獣だ)

(分かつた)

現在の状態を考えるとなかなか切り出しにくかつたが、それでもウォルターは手洗い場に行くと言つてその場を去り、縁の空間に飛び込んだ。

ガハルド・バレーン。

その名をきいたのは1年程前。

レイフォンが天劍授受者としての最後の試合であり、そして都市外退去になつた理由を作つた男の名前だつた。だからといって、ウォルターは別にガハルド・バレーンに対して憤りがある訳でも、同情がある訳でもない。

ただ、弱かつたからそうなつた。その一言で一喝するつもりだ。

だがそれ以上に気に食わないのは実はレイフォンの方なのだ。

実際試合を見ていたウォルターにとっては、そこが気に食わない。

最後の最後で迷いが斬線に現れ、ガハルドは腕を失っただけで死ななかつた。

剽脈に異常をきたした怪我、武芸者を続けられなくしたとはいえ、殺さなかつた。

あの一瞬で完全に殺してしまえばこうはならなかつた筈なのだ。

闇試合に手を出していたことを悪いと咎める気はない。ウォルターも余興ではあつたが、闇試合に手をだしたことがあるからだ。

闇試合は使い方によっては多額の金を一気に手に入れることのできる賭博場。だが、レイフォンは同じ孤児院だけでなく、他の孤児院にまで寄付をしていた。

そして、その為に闇試合に手を出した。たとえ正義のためであろうと、やっていいことと悪いことがあるということは確かだ。

それもまた真理。しかし果たしてこの場合は正義なのだろうか、悪なのだろうか。

レイフォンの行動により救われた子供は多く居るだろう、それは正義、正しいことだ。だが、一方で禁じられた事をしているという点では、それは悪、正しくないことだ。

——すべてを善悪で区切ることは出来ない、か……

だからこそ人は迷うのだ。善と悪の境で彷徨い、自らの意思に最後は従うのだ。

レイフォンはその結果が、これだっただけ。

誰にも頼らずにしようとした結果が、これだった。それだけだ。

ウォルターはきりがないと頭を振って、夜が持つ静寂に、喧騒が紛れ込む空気の張り詰めるグレンダンに舞い降りた。

グレンダンに潜伏を続けていた汚染獣……汚染獣に寄生されたガハルド。

それは、一月の間においてリーリンを襲撃した。

ガハルドの剽技……ルツケンス秘奥、砲剽殺によりデルクは地に伏せ、リーリンは恐怖で竦み上がっていた。

「あ、ああ……父さん……」

リーリンの愕然とした声が落ちる。ガハルドの唸り声が最高潮に達しようとした、その時、それは舞い降りた。

蒼銀の体軀、蒼銀の尾。そして、もう一人。

「つとに、グレンダンってのは迷惑しか起こんねえなあ」

暗闇でリーリンの視界には入りにくいのが、黒と赤の髪。その人物を、見間違える筈もない。

「ウォ、ルター・ルレイス：フオーン……？」

「よお、遅くなって悪かったな」

唸るガハルドの口が、開かれた。

外力系衝剄の変化、ルツケンス秘奥、砲剄殺。

「つかあ!!」

それと同時に、ウォルターの口からも同様の振動波が放たれた。

ガハルドが小さく唸り、ウォルターをぎらつく瞳で睨む。

「させるか」

不敵な笑みを浮かべ、ウォルターは唇を舐める。

戦闘する気満々で立ちふさがったのだが、ウォルターとの戦闘は実現されなかった。

それは、第三者の声がしたためだ。

「そういえばキミは、一応父上から秘伝書の閲覧を認められていたんだっけね？」

ウォルターは声の方を振り返った。

「普段通り」、よくわからない笑みが貼り付けられた顔。目の前にある戦場にうずうずしながら、楽しみに待っている顔だ。

「やあ。数日ぶりだね、ウォルター」

「ああ…、ルツケンスか」

「なんだい、その今気づいたって言うような言葉は。元々気づいていたくせに」

「あり、バレてた？」

ウォルターがわざとらしい笑みを浮かべる。

サヴァリスがいた事は、ここに到着してからずっと気付いていた。だが、それもまた余興。

気づかないふりをしていたのも、なにも言わなかったのも、すべて興味が無かったからだ。

「……んー、戦う気だったんだけどな…。なんかお前見たらやる気なくなつたからやめとく」

「酷いな、人が不愉快の塊みたいな言い方して。そのうえ残飯処理扱いかい？」

サヴァリスは苦笑しつつも、ガハルドを引き連れて何処かへ向かう。

ウォルターもそれを追うべく一歩踏み出そうとしたが、珍しい人物に足を止めた。その人物は、疲れて眠ったリーリンを抱えて居る、なかなか育ちのいいところという女性だ。

ウォルターはわざと余所余所しい態度をとって話しかけた。

「おや、夜遊びはよろしくないですね」

「…あら。久しぶりね」

「ええ、お久しぶりで」

「……そう言えばあんた、少し前好き勝手言ってくれたそうじゃないの」

「おや。誰情報ですか、それは」

「サヴァリスよ」

「ではあとで細切れにでもして棺詰でもつくりますでしょうか」

「……その意は？」

「棺桶詰めです」

「………さらつと言わないでくれるかしら」

「おやおや。聞いたのはあなたではないですか。それに、あなたには勝りませんよ。……陛下」

そう最後に付け足すと、目の前の女性……グレンダンを統治する女王、アルシエイラ・アルモニス女王陛下は眉をよせた。

「ちよつとー、やーめーてーよー。いまのわたしは純情な、下町のちよつといいところのお姉さん、シノーラ・アレイスラなんだから」

「では、アレイスラさん。早く家に帰ってはどうぞです？」

「ってか、その喋り方やめなさいよ。潰すわよ？」

「…………それが出来ンならな？　ひさびさに会ったんだからいいだろう？　たまには」

普段の話し方に戻すとやはり笑みを浮かべ、ウォルターはシノーラ、もといアルシエイラを見た。

「つたく、あんたももつとちやんと働けよ」

「あの言葉は本気ってことね」

「つたりめーだろうが。あんたが働かないせいで、どれだけこつちが苦勞することやら。なあグレンダン」

「グレンダンに聞いたって無駄って知ってるでしょう」

ウォルターはそう言っただけでグレンダン……異様の獣、電子精霊に話しかける。だが、グレンダンは知ったことではないとパイとそっぽを向いた。

「連れねえでやんの。グレンダンのやろー」

「あんたね……まあいいわ。大体どうしてこんな時に居るのよ、あんたの方こそ」

「オレ？　オレはまあ色々ね」

そう言っただけでやりと笑った。

アルシエイラには深くは教えていないが、グレンダンが『運命』を知っているように、ウォルターも同じ存在であるとは告げている。

その為、アルシエイラが神妙な顔をした。

「もしかして、何かあったの？」

「…………いいや。あえて言うならここだな。一月も汚染獣が退治されねえなんて、なんかあったのかーって来ただけ」

ふと、リーリン・マーフェスの事を聞こうかと思った。

アルシエイラがシノーラ・アレイスラとして下町に顔を出しているのは、常にリーリン・マーフェスにちよっかいを出しに行っているのを知っている。ならば少し前に感じた、あの感覚の事が何かわかるかもしれないと思った。

だが、やはりやめた。

理由は特に無い。しかしもしもあのリーリン・マーフェスが『運命』にいずれ関わる存在であるというならば、必ず知ることになるから

だ。

アルシエイラはウォルターの答えにやや不服といった様子ではあったが、結局はなにも言わなかった。

「そう……」

「ま、これ見届けたらまた行くけどね」

「あ、そ。せっかちなね」

「せっかちって訳じゃなくて、やらないといけない事がありすぎんだよ」

そう言つてウォルターは肩を竦め、アルシエイラを見る。だが、アルシエイラは特にそのことに関して言うつもりも無いようで、不敵に笑みを浮かべただけにとどまった。

「じゃあ、オレは試合観戦に行つて来る」

「あら、行くの？ 意外に気にかけてるのね」

「気にかけてなんてねえよ。ただ、どっちが棺桶詰めにできるかなーって」

にやり……、とウォルターが笑みを浮かべた。

その笑みにアルシエイラは怖気が走るとでも言いたげに眉根を寄せ、小さく声をもらす。

「だからその顔しないでって言ってるでしょ、本能的に怖い！ ……
ともかく、そのへん頼むわよ」

「へいへい」

ウォルターは気の抜けた返事を返し、そのまま夜の闇に溶けるよう跳躍した。

サヴァリスとガハルドがリンテンスの用意した戦場にて戦いを繰り広げている。ウォルターはリンテンスの隣にひよいと降り立った。

「……お前か」

「よ、ハーデン。お久」

「……………」

「やめろよその無言の圧力」

ウォルターが苦笑気味にリンテンスにそう言う。当のリンテンスはウォルターからすぐに視線を外して、その言葉を見殺した。

「…お前、またこんな時になにをしている」

「なにをしてるって……こうしてるンだけど？」

「……なにを言ってもお前とは幾星霜も平行線だな」

「しようがないだろ、だってお前とオレだし」

「……お前と話していると少し遠くで嬉々として戦っているあの馬鹿と同じだと思っるのはオレだけか？」

「ん、ハーデンだけじゃ無いと思うけど？」

リンテンスに酷く冷たい視線で見られた。

その視線にウォルターが真顔で返すと、逆にリンテンスに今度は見放したような視線を向けられた。

「……あ、終わった」

鋼糸を突き抜けてガハルドが崩れていく。ガハルドの身体は、鋼糸を突き抜ける際にバラバラになって地上に落ちる。

それを確認したリンテンスは早々に戦場を作っていた鋼糸を解いた。

「ふん」

「あ、ルツケンスも落ちる」

「……この程度で死ぬならば天劍授受者になどなれん」

「なんか文句言ってるけど……まあ、そうだけどね」

「なにが言いたい」

「…いや、オレとしてもルツケンスの事は正直どうでもいいンだけど…」

「……じゃあなんだ」

それも酷い言い分じゃないか、と思いつつもなにも言わずリンテンスは問いかけを強調した。

ウォルターはふむ、と考えていたようだったが、結局は笑みを浮かべてはぐらかす。

「……んー……。……いや、やっぱなんでもねえや」

「……………」

「そのいかにも怪しいぞって眼をやめてくれ。…………ま、オレやりたい事もあるしさっさと撤収するわ。じゃあな、ハーデン」

リンテンスは沈黙を貫いた。ウォルターはひらりと身を翻し、夜の中を跳躍した。

そして、ウォルターの姿はそのまま闇に溶けこむ。

目立つ服装をしているにしても、その姿が視認できなくなるのは早かった。

「…………ばあさん」

(はいはい)

「いますぐウォルターを追ってください」

(あら、動きだけなら中継している念威端子で追っていますよ。まだ存在確認しています)

相変わらず仕事が早いと思いつながりリンテンスはウォルターが消えた方の闇を見つめた。

ウォルターが何かを隠している。

その事実は天剣授受者全員の中で暗黙の了解だ。だが、あのアルシエイラ・アルモニスはわずかにその事実の真相に近いものを知っているようだった。

しかしそれも僅かに、であり、事実の真相をきつちりと知り得ているわけではない。

それはリンテンス然り、他の天剣授受者も然りである。

(あら)

「どうした」

(反応がぱったりと消えました)

「なに?」

デルボネの言葉にリンテンスが怪訝に眉を寄せた。だが、デルボネが間違えるはずもない。

百を超えるかという長齢の老女だが、それでもなおデルボネが天剣授受者として座しているのは彼女を凌ぐ念威操者が存在しないからだ。

——— どういうことだ？

しかしそれ以上に気になるのは、ウォルターがみすみす姿をくらましてみせたことだ。

ウォルターがデルボネの追跡に気付いていない筈は無い。だが、ウォルターは消えてみせた。

これはいったいどういうことを表しているのか。

(そういえばウォルターはなかなかの念威操者でしたね)

デルボネがふと思いついた様に言う。

レイフオンはウォルターの後任であった為に伝えられなかったが、他の天劍授受者はウォルターが武芸者であり念威操者である事は伝えられている。

「攪乱させた可能性もある…：そう言いたいのか」

(どうでしょうね。そんな感触は伝わって来ませんでした)

「あいつならばやり遂げるかもしれん」

一度だけ、アルシェイラの余興に付き合っただけでデルボネとウォルターが全力で念威対決をしたことがある。

ウォルターは酷く面倒くさそうに不機嫌だったのをよく覚えてい

る。
念威による防衛と攻撃を繰り返し、お互いの念威端子を奪い合うというものだ。分数を決めて、その分数が経った時にいくつ自分の念威端子としているか。

それが競われた内容であった。だが、実際には分数など関係無かつた。

ウォルターは開始三十秒程ですべての念威端子を自らの支配下に置いた。

つまり、処理能力、防衛、攻撃、反撃においてすべて上回ってしまったという事だ。

ウォルターとデルボネの年齢差などは念威において関係なく、その時点で必要なのは念威の量とコントロール力、そして経験だった。

(あれは見事でした。わたしもはじめから本気でしたが、一瞬で乗っ取られてしまいましたからね)

「……………」
リントスはウォルターの消えた方角から眼を逸らし、踵を返した。

思考

デルボネが追跡をかけている事は知っていた。だが、それでもそれに構うような気はなかった。

だからこそそのままメルニスクへとんだのだ。ウォルターは元の時間の軸へ戻る。

「……ウォルター？　いつまでトイレにこもっているつもりだったんだ？」

廊下で丁度出くわしたニーナはそう言って不満だと言わんばかりに眉を寄せていた。

「ああ悪い、アントーク」

「皆、もう食べ終わったぞ」

「そか。…まあいいや、オレもういらねえし」

「……いいのか？」

「ああ」

ニーナにそう返すとウォルターは自室として振り分けられた部屋に向かった。

ひとり、廊下に残ったニーナはウォルターの去っていった方を見つめていた。

——あいつ……

明らかにおかしかった。姿が見えなかったウォルターを探して一室一室確認しての遭遇だった。その上、きちんと居ないと確認したところから。

——どうということだ？

ニーナは訝しげに、ウォルターが消えた方を見る。だが、底に広がるのは闇ばかりで、何もかもを隠していた。

これで、ごまかせているんだろうか。ベッドに寝そべりながらふとそんな事を思った。

あちらこちらに飛び交っているウォルターからすれば、いじられな事はありがたいと思うが、だからといってバレているかどうかというのは……

「検討もつかねえ」

(……検討もつかない、じゃありません。いきなりなに言ってるんですか)

「うお？　ロス」

(うお？　でもありません。レイフォンが正体不明の何かに接触しています。とつとと働いてください、イオ先輩)

「へえへえ」

先輩使いの荒い後輩だと思いながら軽く返事を返し、のそのそと動きながら指示された場所へ向かっていく。

一番後に動き出した筈だったが、ついたのは意外にも一番はじめだった。茫然と立ち尽くしていたレイフォンを見つけ、ウォルターは訝しげに声をかける。

「アルセイフ？」

「っ、……あ……、ウォルター……？」

「なんだよ」

首を傾げたが、そこでちらと見て気付いた。

ぱつとレイフォンが両手を後ろに隠した為わかりにくかったが、明らかにその手は震えていた。

「……………？」

「なんでもないです」

「……あ、っそ……」

ウォルターは強がったレイフォンの態度に呆れた表情で返すとレイフォンが居る方とは反対を向く。なにも言わずにウォルターが詮索してこない事に安堵したのか、レイフォンは気分を落ち着かせる事に徹した。

ニーナ達が到着したのは、それからすぐの事だった。

翌日も調査が続けられ、墓のようなものが見つけられた。

その場は第五小隊が調べることになり、十七小隊は別の場所を調べることになった為、移動を始めていた。

ウォルターとレイフォン、そしてフェリは並んで歩いており、ニーナやシャーニッドはやや先を歩いている。

「……フォンフォン……」

「……先輩、約束が違いますよ」

ふたり……というか、この名前の考察をしていたウォルター、レイフォン、フェリの間のみでの名前フォンフォン。

それを軽く発言したフェリにレイフォンが慌てた。

「聞いてませんよ。そんなことはいいのですが」

「良くないです」

「いいです。いますぐ屈んでください」

「か、屈む？」

「はい。屈んでください」

フェリの要望に答えてレイフォンが渋々屈むと、フェリから「もつと低く」といわれる。ウォルターはなんだなんだと見ていたが、レイフォンは体育座りに近い形にさせられる。

そしてフェリは少しレイフォンの肩を見て、呟く。

「肩が狭いですね」

「普通だと思いますけど」

「ちよつと狭いんじゃないか？ オレもうちよつと広いぜ」

「あなたと比べないでください」

「仕方ないですね。イオ先輩、少し手をかしてください」

「あー……？」

ぐい、とウォルターは片手をフェリに取られ、フェリがレイフォン

の肩に座った。

いわゆる、肩車。

「つちよ、なにしてるんですか?!」

「肩車です。見ればわかりますよね」

「オレはな。アルセイフは見えねえぞ」

「一言余計です」

「へえへえ」

ウォルターが肩を竦めて苦笑混じりに返事を返す。レイフォンはフェリくらいのサイズは初めてなのか、なかなか安定が取れずにふらふらとしている。

「アルセイフ……」

「なんですかつ？ 今忙し……いたたたた、先輩つ、髪引っ張らないでください」

「だったらもう少し静かに歩いてください」

「はっはっは」

「ウォルターも笑わないでください!」

レイフォンの苛立ったような言いぶりにも無視をして、そのまま笑い続ける。だが、急にレイフォンの反論がなくなった。

「どうした？ アルセイフ」

「……い、いえ……」

「……………」

「フォンフォン、ちゃんと支えてください」

「いえ、違うんです、これは色々深い理由が……」

「それはきつととてつもなく浅くて邪なものですから即刻破棄してください」

「邪？ 浅い？ ……なにがだ？」

「真顔ですか」

ウォルターの言葉にレイフォンが困ったような表情で遠くを見る。しかしそれでもなかなかレイフォンが支えをしっかりしようとしないうえ、フェリがしびれを切らしてウォルターの髪を引っ張った。
「痛い。なんだよロス」

ウォルターが髪を引つ張られたことに対して怪訝そうな顔つきでフェリを見た。

フェリはウォルターのそんな表情は気にせず、近くまでウォルターを引き寄せて肩に手をつく。

「……………」

「下ろしてください。フォンフォンの挙動がおかしいです」

ウォルターはどういう意味かよくわかっていなかったが、レイフォンからフェリを下ろそうと抱え上げる。

「……………」

「どうした？ ロス」

「ちよつと下ろすの待ってください」

フェリがそういうので、仕方なくウォルターは首を傾げながらフェリを空中停止させる。

レイフォンはようやく肩の荷が下りたと言った顔で困った様子でフェリとそれを抱え上げるウォルターを見た。

「…………ふむ。邪でないという点ではイオ先輩が一位ですね。そのまま抱えてください」

「え、オレが？」

「はい」

「…………お前はもー…………」

渋々ウォルターがフェリを抱える。右腕でフェリを抱えて、レイフォンの左側に立つ。

抱える方向はいいようだが、立ち位置についてフェリが一つ申し
た。

「どうして、こうですか…………」

「…なにがだ？」

「…………いえ…………、あなたにこんなこと言っても無駄ですね」

ウォルターが再び首を傾げた。レイフォンはやはり困った顔で頬を掻く。

「…それにしてもフォンフォン、昨日はすみませんでした」

フェリはそう切り出して、レイフォンと武芸者と念威操者の話をし

ていた。

2人しか知らない話なら2人でするべきだろ、と思いながらウォルターは苦笑混じりに遠くを見つめる。

「……大丈夫ですか？」

「僕一人を狙うのなら、どうしても対処ができません。気をつけて欲しいのはフェリたちの方ですよ。……ウォルターは心の底からどうでもいいですけど」

「おい」

レイフォンが最後に付け足した言葉にウォルターが呆れて呟くが、つんつ、とそっぽを向かれた。だが、フェリの言葉にウォルターは何処かレイフォンの解釈とは違う意味を感じずにいられない。

フェリもレイフォンの解釈のように言ったつもりでは無いらしく、不服だという顔をしている。

『それでも、自分が悪いとどうしても思えない僕は、きつと壊れているのでしょうかね』

そう、レイフォンは小さくもらしていた。少し前、幼生体がツエルニに押し寄せた時、ウォルターが言った言葉。

あれはきつと、遠くに放り去られているのだろうか、と思って苦笑をこぼした。

——別に、ウォルターの言葉を忘れた訳じゃない

レイフォンは小さくそう思っていた。

だが、グレンダンの人々や同じ孤児院の仲間たちの反応からきつとそうなんだと思っていた。

ウォルターの言葉によりその思いは軽減されているけれど、それでも拭い切れないのだ。

苦悩

レイフオン達は機関部に降り、ウォルターは外で来た道を帰っていた。

というのも、ウォルターは第五小隊の方を見てこいと言われたせいであるからして。

先程は地上ルートを使った為到達まで時間がかかったが、いまウォルターが使っているルートは屋根上だ。

あつという間に第五小隊のところまで辿り着くだろうと思っていた。

(ん?)

(ウォルター、赤い野生児の反応)

「……シャンテ・ライテ……か」

足を止めて視界を駆け抜けた赤の去った方向を見つめ、何処へ向かうのかと見やっていたウォルター。どうやら進行方向的には十七小隊の方……のようだが。

「嫌な予感しかしない」

そう呟いて、ウォルターはきた道を引き返し始めると、下の地上ルートに第五小隊長、ゴルネオの姿が見え、そちらへ降りた。

「おい、ルツケンス」

「…お前…、……シャンテを見なかったか」

「ライテはこの先だ。見たところうちの小隊の居る方へ向かった」

「…あの馬鹿が…、まさか勝手にレイフオン・アルセイフの方へ向かうとは」

その言葉にウォルターが眉を寄せた。

「まさか、こないだ言ってた事で？ アルセイフを闇討ちでもしようってのか？」

「分かん。だが、アイツの事だ、そういうつもりだろう」

「……………あほらしい……………」

正直なところ、実力差ではレイフオンの方が明らかに上だ。

剽の量という点では似たり寄ったりかも知れないが、それでも技量という点ではレイフォンにシャンテは劣っている。

シャンテの熱くなると周りが見えなくなるという事を思い出して、それではレイフォンには到底かなわないだろうな、と何気なく思う。

「んー……面倒な事になってきた……」

そう呟きながら、ゴルネオとともに機関部への入り口へ駆けつけると、入り口近くの木陰にフェリが倒れていた。

「ロスー」

ウォルターはフェリに駆け寄って脈を確かめる。幸い気絶しているだけのようで、ウォルターは胸を撫で下ろした。

「無事か……。さすが子供」

さすがに殺すまではやらないな。そう言いかけて口を噤んだ。

ウォルターの場合、昔の仕事柄や事情により息の根を止めていただろうが、学園都市に居る事や、まだそういう裏社会というものにスレたことの無い子供が、軽々と殺しをする筈も無いかとやや軽率だった自身の思考を咎めた。

「くそっ、あいつに離れたのは迂闊すぎたか」

「まあ、ガキだしねえ……。ともかくだ。サポートは任せろ、オレも後で追う」

「……………分かった」

ゴルネオはウォルターのサポートとというものはつきりしなかったが、そのまま暗闇に飛び込んだ。

(ルッケンス、見えているか?)

後方から追いかけてきた念威端子からウォルターがそう声をかけた。

ゴルネオはフェイススコープをつけていないものの、端子から発せられる高密度の念威がどういう仕組みかはつきりしないが、ゴルネオ自身に作用して暗闇でもあたりが形をとらえられるくらいには見えるようになった。

「…お前…、念威操者なのか？」

驚いた声でそう問いがかけられたが、すでにウォルターはこの質問に飽きている為溜息で問いを無視した。

（ともかくだ。エリプトンとアントークの生存は確認済み、アルセイフとライテは現在戦闘中。コンなど所で戦うなんて、なかなかアグレッシブだな）

「……返す言葉もない」

（いいさ、アルセイフが殺られることは万が一も無いだろうし、ロスも無事だったしな）

ウォルターが軽い調子で返す、しかしゴルネオはやや神妙な声で問いを放つ。

「……………お前は、何故ヤツを後任に選んだ」

（あん？）

「ヤツが天劍授受者になった経緯は知っている。ほぼ、譲った形で天劍授受者になったとな。だが、何故だ？ 何故ヤツを選んだ」

（簡単だ、一番実力があつたから。ただそれだけだ）

「…それだけ、か」

（そうだ。天劍授受者に必要なのは絶対と言えるちから。そして、とどまり続けることを知らない底なしの強さを有し続けることだ）

ウォルターが言い切ると、ゴルネオはやや渋面を作った。

「何故、ヤツが認められたのか……ずっと知りたかった」

声に自嘲気味な雰囲気混ぜられたことに、ウォルターはほんの少し眉を寄せる。

「実力……か……。なら、おれはどうしようもない存在だろうな」

（いきなりなんだ）

「ルッケンスは兄さんが継ぐ。なら、才能も特におれはどうするべきなんだろうと、ふと思う時がある、そういう話だ」

（まあ……あの戦闘狂を天才と呼ぶなら、お前は秀才だ。そして、秀才止まり。そこで頭打ちだ）

ウォルターが言い切った言葉に、ゴルネオは小さく唇を噛み締めた。

(だが、秀才止まりだからといって、そこで足踏みを続けるのか、そこからそれでも一歩進もうとするか。お前はそういう点ではいいヤツだと思っただけだなあ、オレは)

「……おれを励ますつもりで言ったのか？ いまのは」

(え、ハゲマス？ なにそれ美味しいの？ ……あ、禿げます？ 禿げるの、お前)

お前は……と小さく呟いて、ゴルネオはこの若い元天劍授受者を少し見なおした。

——どうやら気を使わせたようだ

後輩に気を使わせてしまったということにやや苦笑をして、シャンテ達の元へ向かう為足を急がせた。

ゴルネオがレイフオンのところに追いついたのを確認すると、ウオルターも気を急かせてレイフオン達の元へ向かう。

だがそこは炎が噴き出す崩落場。どうやらシャンテの放った剄技による炎がパイプ内のセルニウムに引火して火がついたようだった。

ウオルターは舌打ちをして、炎に包まれながらもシャンテを自らの身を挺して守るゴルネオの姿を視界に捉えると自分が着ていた上着をゴルネオの方に投げる。

レイフオンがルツケンスの秘奥、剄剄殺を放った。

「かあっ!!」

分子構造を破壊する振動波が紅を貫き、パイプを貫き、そして壁さえも貫く。都市の外が見え、豪風が流れこむと同時に、爆音が鼓膜を叩いた。

「うあっ!!」

なれない剄剄殺の影響により、レイフオンは防御のための剄を充分に練ることが出来なかった。その為後方に吹き飛ばされ、脆くなっていた都市の部品…、天井が降ってくるが見える。

そしてそれと同時に。背中から誰かに掴まれて、そのまま庇われるよ

うに包み込まれた。

目の前に来たのは、戦闘衣とは違う黒色だった。

それぞれの思い

ぱらり、と天井から砂が落ちてきた。

「……ってー……」

「……………」

一瞬、こわばっていた身体から力を抜いて目の前を見ると、そこには見慣れない衣装を来たウォルターの胸板があった。

「ウオ、ルター…?!」

「無事か、アルセイフ」

「……ぼ、僕は……平気ですけど」

……………しまった…、…気まずい……

瞬時にレイフオンの思考を駆け巡ったのはそれだった。

ウォルターは怪我こそしていないものの、実質レイフオンをかばったのだ。

それにどう対応すればいいのか分からなくて、レイフオンは視線を泳がせる。だがウォルターは特に気にしていないようで、先に動き始め、立ち上がった。

「……手をかした方がいいのか、この場合」

「……結構です」

ウォルターが立ち上がった後に続いてレイフオンも立ち上がる。

右手に持ったままの青石錬金鋼を見て、レイフオンは剣を手放していない事に安堵した。

そして、少しだけまじまじとウォルターの格好を見た。

いつもの上着の下はこうなっていたのか、と。

場違いだとは思ったが、白から黒へのカラーチェンジはどうにも違和感がある。

黒色のニット素材のような服は、左肩がさらけ出されていて、そこには2つほど背中から胸に向けて黒いバンドが白のシャツに合わせ付けてられている。

いつも締めている黒のネクタイも、こうして違う服で見ると雰囲気

が違うのだ、とも思った。

「……なに見てんだ？」

「……………いえ、なんでもないです」

視線に気付いたらしいウォルターに問われ、レイフォンは頭を振った。そして気持ちを切り替えて、声を張る。

「ゴルネオ・ルッケンス！ 生きていますか？」

レイフォンがゴルネオの生存を確かめ、ウォルターが周囲の警戒をする。

「どちらかと言えば、たすけたのだろう」

ゴルネオの言葉には苦渋が浮かんでいた。だが、レイフォンの言葉はやはりそれを斬り裂く。

ガハルド・バレーン。

ルッケンスでの部門を修める人物であり、あのサヴァリスの性格を考えると、ゴルネオを鍛えたのはあのガハルドなのだろうと思う。

だからこそ、気付けば遠くの存在になってしまっていたサヴァリスよりも、愛着がある。

そういうことなのだろう。

「……ウォルター・ルレイスフォン」

「あん？」

ゴルネオに唐突に声をかけられ、ウォルターは少しだけ驚いた。

「…おれは、間違っているのだろうか」

————…やべっ……話聞いてなかった……

どうしてみんな個人で話していることをいちいちオレに聞くのか、と内心嘆息する。

ウォルターは大きくため息をついて、一言言う。

「………知るかよ」

「……………」

「考えることは自由だ。だけど、お前が気に食わないってんなら、お前は自分の道でアルセイフに示すしかねえと思うぜ、オレは」

ウォルターの言葉に、ゴルネオもレイフォンも黙った。

正直、内心冷や汗をかいているウォルターとしてはその沈黙が痛

い。

——…ごまかせた…か……？

(ウォルターったら)

——ルウごめん、いま本気で困ってるからやめてくれないかなあ…？

脳内でくすくすと笑ったルウに反論したが、ルウは楽しそうに笑っただけだ。

どうやら後ろの2人にはきちんとかどうかは知らないが整理はついたようだった。だが、そんなか別の声が響いた。

シヤンテの声だ。

「……………」

ウォルターがむき出しになった壁のほうを見た。

——ルウ、まさか…

(エア・フィルターは切れているみたいだ)

——先に言ってくれよ…

ウォルターは呆れながら思う。ルウは飄々と言う。だが、ウォルター以外には死活問題だ。

「あー、もう、さっさと脱出するぞ！」

(ようやく見つけました)

「フェリ！ 無事だったんですね」

フェリから状況を手短かに聞くと、ウォルターとレイフォンは向き直る。

ウォルターが錬金鋼のスタンバイをして、レイフォンがゴルネオに呼びかけた。

レイフォンが呼びかけたのと同じ時、ウォルターもゴルネオに声をかける。

「ルッケンス、さっきお前に投げた上着！ それでちゃんとライテ包んどけよ！」

「お前は?!」

「オレは平気だから任せろ」

「……………分かった」

少し渋っていたようでもあったが、ゴルネオの承諾を得てウォルターが鍊金鋼を振りかぶり、同時にレイフォンも振りかぶった。

外力系衝剄の変化、閃断。

2人が同時に同じ剄技を放った。

内力系活剄の変化、旋剄。

ウォルターとレイフォンはまた同時に都市外に飛び出し、腕をふるって身体の向きを転換させる。

「くっ！」

レイフォンを汚染物質が焼く。ウォルターはすでにルウの領域が働いている為、汚染物質に焼かれることはない。痛撃に唸りながらレイフォンは鋼糸を展開しゴルネオを引きずり出す。

だが。

(まずい)

勢いを殺しきれていない。

鋼糸では補助できない事はウォルターもレイフォンもわかりきっている為、どうするかと思考を回転させる。

ゴルネオは意識を失っているらしく、すでに気力もない。そんな中、空中に踊り出たのは鮮烈な輝きを零す金髪を揺らした姿だった。

「隊長?!」

「アントーク?!」

2人を受け止めた衝撃は大きいのだろう、ニーナの表情が苦悶に歪む。だが、ニーナがゴルネオの勢いを殺してくれたお陰で、後3人にかかるのは重力のみとなる。

レイフォンの鋼糸がニーナ達を引っ張りあげ、地上部めがけて放り投げた。

レイフォンとウォルターも地上部に到達する。

汚染物質によって真っ赤に染まった眼で、ニーナがレイフォンとウォルターを見た。

「わたしの気持ちが変わったか?」

ニーナがふと、そう呟いた。

「お前らが無茶をしている時の気持ちはきつとこんな気持ちだったん

だ」

「……無茶をしないでくださいよ」

脱力してへたり込んでいるニーナに、それでも困った笑顔で憎まれ口をたたくレイフォンも地面にへたり込んだ。

ウォルターは「だらしないな」と呟き肩を竦めた。だが、レイフォンとニーナは先程のやり取りが何故かツボにハマったらしく、ウォルターにはよく分からなかったが笑い転げて動けなくなってしまった。

ウォルターは「しょうがねえな」と溜息を零し、苦笑する。

結局、シャーニツドたちが来るまでには時間がかかるだろうということでもウォルターが4人も抱えて移動することになった。

「重、これ重い……」

「つべこべ言わないでください」

「すまないな、ウォルター」

「……はいはい。つか、なんでアルセイフはそんなに偉そうなんだ」

シャンテを首に回してゴルネオを背に抱え、ゴルネオの顔を置いている肩の方、左腕の方にニーナを抱えて右腕にレイフォンを抱える。

ニーナはまだ全身だめらしいが、レイフォンの場合腕は回復してきたらしい。

「つたくよ、なんだよこの大所帯」

「しょうがないじゃないですか、動けなくなっただんですから」

「だからって偉そうすぎだろ」

「すまない……」

「アントークには言っただけよ」

「大体この状態、ゴルネオ起きたら怒りそうですね」

「ルッケンスはまだしもライテが嫌だ」

このまま起きた場合、シャンテはウォルターの耳元で騒ぐことになるのだ。

「絶対嫌だ」

「……よし、起きろ、起きろ、起きろ」

「呪文をかけるな。起きて困ンのはお前もだろ」

「隊長も一緒にどうぞ。言うと身体の機能が目覚めるんですよ」

「本当か！ 起きろ、起きろ……」

「明らかな嘘に騙されるなアントーク」

確かに身体機能は目覚めるだろうが、それはニーナとレイフオンのことではなくシャンテとゴルネオが眼を覚ますぞという点で身体機能が目覚めるという意味だ。

……どうして馬鹿しか起きていないのか。

そう思いながらウォルターは重みになんとか耐えながらシャーニツドやフェリ達の元へ戻っていった。

レイフオンはどうしようもない思いに戸惑っていた。あの時、老生体との戦いの帰りに感じた思い。

失いたくないのかと思った。この、ウォルター・ルレイスフォーンという存在を。だが、それは少し違った。いや、失いたくないという思いは変わっていない。

少し、そういうと語弊があつたのだ。

……そうか、僕は……

1人、すっと胸に落ちてきた答を胸に畳んで、レイフオンはウォルターをからかう。

ウォルターの困ったような笑み。ニーナの笑顔。

———そうか

もう一度だけ気付いた思いを復唱して、レイフオンもおもいつきり笑った。

一旦の平和

「都市がセルニウム鉱山に向かうに辺り、休校が近づく今日この頃。オレはいつもと同じ重箱弁当。感慨に浸っても今日の朝と変わらな
いおかず。ああ……口が飽きるぜ」

「何言ってるんですか？　と言うか誰に言ってるんですか？　ついでに言うは無駄に真面目な声で言わないでください」

呆れた声で言うのは、十七小隊で同じ隊に所属する、後輩でもあるレイフォン・アルセイフだ。

年齢の割にはウォルターからして武芸の能力が逸脱しており、ウォルターよりは劣るものの、それでも都市で最強とも称される人物だ。彼は昼寝を邪魔されたのが苛立たしかったのか、ウォルター自身を毛嫌いしているからこそ顔をしかめているのかは定かでは無いが、ウォルターは構わなかった。

「うるせえなあ、オレはいま黄昏れてんだぜ？　放っておいてくれよ」

「痛い一人言は心で呟いてください」

「もうちつと心遣いがお前には欲しいぜ」

老性体との戦いや廃都市での事などもあり、昔ほど毛嫌いされては
いないものの、やはり仲が悪い……ととれる対応をしてくるレイフォ
ン。

ウォルターはやれやれと頭を振り、溜め息をつく。

溜め息をつきつつも嘲笑うかのような顔でレイフォンに言うと、レ
イフォンはやはり苛立ったような様子は見せたもののそこまで突っ
かかって来なかった。

これは進展か？　と思いつつもウォルターは笑みを変えず、そのま
まで居る。

「レイとん」

「え？」

「うわっ」

いきなり現れた影は勢いよくレイフォンの胸ぐらを掴みあげ、もの

凄い形相でレイフオンに詰め寄る。

「レイとんだな？ あたしの事を隊長さんに言ったのは」

「え？ え？ な、なんのこと……？」

未だレイフオンの胸ぐらを掴みあげているのは、ナルキ・ゲルニ。
レイフオンと同級生の女子武芸科生徒だった筈だ、とウォルターは記憶回路から情報を引き出す。

——ナルキ・ゲルニ。

将来の夢、警察官になる。都市警察に所属している為、練金鋼は一応所持。形状は打棒。

たまに独自の技……というよりは父直伝の捕縛術なども習得。

レイフオン・アルセイフを巻き上げたことがある。それと同時にフェリ・ロスも。

ウォルターは丁度良い整頓の機会に、記憶の整頓を行う。

「レイとんが言ったんだろう？ 隊長さんがあたしの所へ来た」

「え？ ……いや、…あ、確かに言ったけど、意見を求められたからで」

「なに？ 言ったのか」

「いや、言った、言ったけど！ それに過敏過ぎ！ 意見求められたからって言ってるじゃん！」

レイフオンがやや涙目で言うが、ナルキに耳を貸す様子はない。
ウォルターは溜め息をつきつつ、ナルキに声をかけた。

「ここから。あんま締め上げてやるなよ、来たくらいならいいじゃねえか」

「そんなわけない！ あたしは警察官になると決めているんです！」

ウォルターは面倒くさそうに頭をかく。掻きながら苦笑いし、ナルキに言う。

「でもほら、無理に来いなんて言われてねえんだろ？ だったら行かなくてもいいだけだ。ンな締め上げるほど怒ることじゃねえだろう」

「……ですが……。……そう、ですか……？ で、もー！」

わたわたと慌てるレイフオンを笑いながら、巻き込まれないうちにウォルターは少しレイフオンから遠ざかる。

ナルキの後ろには同じ幼馴染の2人がいた。

ミイファイ・ロツテンと、メイシエン・トリンデンだ。

ちなみにミイファイ・ロツテンの方は、ちよこちよこ小隊のインタビューなので会うので知り合いではある。メイシエン・トリンデンの方も、時たま気が向いた時に行く喫茶店……という名の菓子屋でバイトをしている為知り合いである。

「久しぶりだな、ロツテン、トリンデン」

「お久しぶりです、ウォルター先輩！」

「相変わらず元気だな」

「あ、えと、お久しぶり、です」

「おう、久しぶり」

ミイファイの元気な返事に笑みを返し、控えめなメイシエンの答えにも笑みをこぼした。

第十七小隊と第十小隊

「それより、少し意外でした」

「なにが？」

「良い人なんだなーって。それに、メイのお店にも定期的に行ってるって」

「……あー、いつも世話になってるよ」

「お菓子好きっていうのも、ちよつと意外」

「……そうか？」

「…………です」

ミイファイとメイシエンが頷き合っている事に少し頭を搔き、ウォルターは肩を竦めた。

「でも……ギヤツプっていいですよね」

「ギヤツプ？ ……なにがギヤツプなんだ？」

「ああ……レイとんと同じタイプなんですネ、ウォルター先輩」

「…………？」

ミイファイの言葉に首を傾げたが、ミイファイはにやにやと笑って答えてはくれなかった。

（ルウ、分かるか？）

（ふふっ）

（……わかってるな、その笑い方は）

ウォルターがルウの笑い声にミイファイの言っている意味を理解していると思っただが、ルウもはつきりと教えてはくれない。

（気付かなくていいよー。ウォルターはそのままでもいいし）

（なんか引つかかる言い方なんだが……まあいいか）

特に何か関係も無さそうだった為、いいかと放った。

だが、後ろで唸るレイフォンの声がだんだん聞こえなくなって来たことに後ろを振り返ると、ナルキが怒りのあまりレイフォンの首を締めすぎていると気がついた。

結局ナルキを宥めるのには時間を要した。

レイフォン達と先にわかれたウォルターは、一足先に練武館へ向かう為屋根の上を跳んでいた。

「……………んん」

ひよいつ、と身体を回転させてくるくと回る。回りつつ体勢を変えたりしながらも屋根を跳んでいく。

「ん」

最近の移動手段がこれの為かよく屋根の上で回っているなあ、とか関係ないことを考えつつウォルターは首を傾げる。

唸っている理由は、別に先程のミィファイ達との話を気にしているわけではなく、実質はこの都市から遙か彼方遠くのグレンダンにあった。

数日前の白炎都市メルニスクにおいてあつた戦闘の最中にグレンダンで起きた戦い。

それはウォルターがしなくてはならない事として準備をしている事象からすれば、それはそれはとても小さな出来事だ。

潜伏であつた、そしてなかなか姿を見せなかつたという為時間がかつたということも把握した。だが、それでも思考を巡らせて居るのには理由がある。

ひとつは、やはりリーリン・マーフェスのことだ。気になった違和感は、この世界での違和感でしかない。ウォルターの感覚でいくと、どちらかと言えば違和感ではなく懐かしさだ。

———そう……異民、その感覚。それも……

よく知っている感覚。闇は世界に放たれている。獣もどこかで活動中。となれば……………

———グレンダンが、因子の収縮に成功し始めた……………いや、成功したってことか？

だが、それは本来グレンダン王家が継ぐ筈の事。

そこでふと、数十年前にグレンダンで起きた不可解な事件を思い出した。

———もしかして……………

ウォルターもその場に居合わせた。誰にも気付かれてはいなかったが、必要な事かとのぞきに行ったのだ。

「ん……………」

まあいいか、とウォルターは一旦その思考にけりをつけて、練武館の入り口前へ跳び下りた。

しばらく1人で硬球を使った訓練していると、ニーナが来たので2人になり、続いてレイフォンが来てレイフォンも加わる……そんな流れで十七小隊全員が集まった。

一旦ウォルターとニーナ、そしてレイフォンが硬球を撃つのをやめ、シャーニツドとフェリを交える為硬球を増やしている間、ウォルターが珍技に挑戦していた。

「あ、これ結構ぐらぐらする」

「……………なにしてるんですか……………」

レイフォンが呆れ果てた顔でウォルターを見た。散らばっていた硬球すべてを重ねて、その一番上の硬球にウォルターが立っている。

十五個の硬球はぐらぐらとしているものの、ある程度のバランスはとれていた。

「おー、これはいいもの発見したかも」

「馬鹿言っていないで準備してください」

レイフォンが硬球にむかって蹴りを放った、それより数瞬早くウォルターは飛び降り、にやりと笑みを向けた。

その笑みに対してレイフォンは酷く不機嫌になるが、ぱつとウォルターから眼を逸らして思考を切り替える。

「遊ぶな。はやく始めるぞ」

「へいへい」

「……次こそは……」

ニーナが悔しそうにレストランのメニューを睨みつけながら握りしめる。

メニューは悪く無いだろうと言いながら、睨まれるメニューを哀れに思う。しかしそれ以上に握りしめ過ぎて握り潰さないかとやや懸念しながら、ウォルターは割と高めメニューを選ぶ。

硬球をうちあう事もまた訓練だ。レイフォンの提案による、基礎の底上げの為の訓練。

ウォルターも良いんじゃないかと同意した。

今回の戦歴は、ウォルター0点の、フェリ3点、シャーニッドとレイフォンが12点、ニーナが13点、という事になった。

ちなみにレイフォンにぶつけたのはすべてウォルターであり、フェリやニーナにぶつけたのはシャーニッドとレイフォン、そしてこの二名のお互いである。

「大体、ウォルターは僕を狙い撃ちしすぎです。周りからも来るんですからどうあつても避けられる訳無いじゃないですか」

「へえー、言い訳すんだ」

「……言い訳なんかじゃないです」

「お前戦場じゃそう言ってるんねえんだぞ？」

ムスツとした顔でレイフォンが言った言葉に、ウォルターはメニューから視線を外さずに言う。そんなウォルターの言葉に対し、更にレイフォンがすねた顔で、つん、と視線を逸らした。

「知ってます。大体、こんな眼にあうことなんて絶対に無いです」

「それこそ無いだろ。オレとお前が絶対敵対しない確証なんて無いわけだし」

ウォルターが何気なくそう言うと、レイフォンは驚いた様子でウォルターを見た。しかしウォルターはレイフォンの方を見ておらず、注文を聞きに来たウェイトレスに料理を頼んでいた。

レイフォンはやや胸のあたりにもやがある事に気がついて、それを消そうと思いを切り替える。

だが、それよりも先にウォルターが小さく鼻で笑いながら肩を竦め

ていた。

「つま、今回ぶつけたのはさしずめ、愛のムチだよ」

「……死んでください」

「即答かよ。しかも言い方が辛辣だな」

「あなたにかける情けなんて無いです」

「邪なヤツにいわれたくないんだけどなあ」

「な……………ッ」

「なあ、ロス」

「……わたしにいきなりふらないでください」

「話で『話ふってもいい?』なんて聞かないだろ、普通」

レイフォンがびしりと固まり、ウォルターはフェリと話を続ける。

「まずあなたは邪だということの意味がわかっていません」

「あー、それな。だって教えてくれないだろ、お前」

「それはそうです。面白いですから」

「おい」

「……なんの話だ?」

「アントーク、アルセイフが邪だってロスが言うんだが、この邪ってどういう意味だ?」

「……………わたしは知らん」

「エリプトン…先輩は?」

「あー、それはだなあ……………」

「つちよ、シャーニツド先輩!」

レイフォンが慌ててシャーニツドに声をかける。だがシャーニツドは余裕たつぷりに言葉の間にためをつくり、手を肩程まで上げて言う。

「そう、それは……男たちが一度は踏み入れる新たな領域……………」

「よく分からん事を言いながらそしてそれに浸るな。さつさと言え」

「お前は雰囲気がわかってねえなあ」

「分かりたくもない」

「まあ要するに、思春期……………ってことだろ?」

「……………思春期? 思春期ってあの思春期?」

「そうだよ、その思春期。……あれ、思春期って何歳までだっけ？」

「大体、12歳から17歳までだ」

「じゃあ丁度真っ盛りだな」

「この場合の真っ盛りは14歳と15歳の狭間のような気がするんだが？ まあでもあながち間違いでも無いか……」

「そんなところだけ真面目に考えないでください」

レイフォンがやや涙目でウォルターを睨んだ。だがウォルターはけらけらと笑ってレイフォンの視線を流していく。

「そういえば」

口を開いたのはハーレイだった。ウォルターを睨んでいたレイフォンに声をかけ、少しうきうきした様子で告げる。

「この間の簡易版が出来たから、今度渡すね。最終調整に手伝ってもらうことになるけど」

「あ、はい」

「……この間のって……あの馬鹿でかいヤツか？」

「アダマンタイト複合錬金鋼ね。手頃な重さのが出来たから」

ハーレイはそう言って微笑んだ。全員の注文が決まり、料理が並んだ。

「そういえば、あの硬球の訓練ってレイフォンが考えたの？」

「いや……あれは園長が」

丁度そのとき、がやがやとした音が近付いてきて会話が途切れる。

「……………ん？」

「……………お？」

ウォルターもその人物を視界にとらえた。

禿頭の、痩せぎすな男。

——確か……デイン・デーだったけ？

届いた料理に手をつけ始めていたウォルターは、スパゲティを口に含みつつそう考えた。

第十小隊の隊長。元はシャーニッドが居た隊で、いまは仲が悪くなっていた筈。

そう考えているとシャーニッドとデインが何やら話しているよう

だったが、特に興味もないウォルターはもぐもぐと口を動かす。

「そつちの変わり者も相変わらさずみたいだな。ウォルター・ルレイス
フオーン」

「あん？」

声をかけられたウォルターはデインを見やる。

デインの目つきには鋭いものがあり、それがウォルターを射抜くように見ていた。

「……………なにが言いたいんだ？」

「……………いいや、なんでも無いな」

「あ、そ」

デインが話を切った為、ウォルターも気にせず再びスパゲティに手を付け始める。

「ウォルターって、本当に色々大変ですよね」

「……………どういう意味だそりゃあ」

「いや、物おじしないっていうか……………」

「だったら素直に褒めろよ」

「嫌です」

「即答かよ……………」

レイフオンの答えに苦笑いをこぼしつつ、ウォルターはスパゲティを口に含んだ。

“ザリンバン教導傭兵団”の男

「っはー」

単純な作業というものは、単純であるという分だけ考える余裕があるということ。つまり端的に言えば、ウォルターは現在考えに耽っているということだ。

「ん〜…」

やはり気になる。リーリン・マーフェスに感じた雰囲気。

あの時アルシエイラに聞けば良かった、なんて事は思わないが、それでも一度気になると気になり続ける。

(ああもう)

誰かばつさり関係ないことだよと言ってくれ。

(悩んでるね、ウォルター)

(おー…絶賛悩み中だ)

(やっぱリーリン・マーフェスの事?)

(そうなんだよなー…なんか懐かしい感じがするんだよな…)

(そう言ったら、ここの世界の人はみんなあいつの子孫じゃないか)

(そうだけど)

そう言われたら終わりだ。まあ、それが一番しつくり来る答えなのかもしれないが。

確かにそれはそうだ、すべてこの世界に居る人間はあいつの子孫だ。だがそういうことではなく、何処か“完全に”懐かしいと感じるのだ。となると、濃い因子を持っているという事になるのか……

(ん〜……)

(悩むのはいいけど、あまり悩み過ぎないでね)

(あ? あー…、んー…)

(ウォルターの思考があんまりにも他の人のことではいっぱいになってるなんて考えたら、僕が死んでもこの世界の人々を全員“拒絶”して消したくなっちゃうから)

(……怖いからやめろよ、そういう事言うの)

この世界が出来上がる前、敵対していた頃実際に「そういう事」の補助をしていた事を考えると本当にやりそうで怖い。

(あはは、冗談だよ)

そう楽しそうに笑うけれど何処から何処までが冗談なのかがはっきりしない点、ウォルターはやや気苦労が増えた気がして溜息を吐いた。

機関掃除が終わった。とはいってもウォルターはいつも早めに切り上げることが出来る。

任された範囲が終わった者から帰ることが出来るので、早く終わった外はまだ真夜中だ。

「さて」

呟きは小さく。声が出ることは仕方がない。ただの気持ちの切り替えだ。だが、切り替えた気持ちはすべて違う方へと切り替わる。

近くの建設中の建物が倒壊を始めたのだ。

「……………なんだ？」

おそらく都市警察が活動しているのだろうが、それにしても派手すぎる。

ウォルターは眉を潜め、倒壊した建物に近づいていった。

倒壊した建物には2つ程気配があった。

ここでは感じたことのない気配だったからおそらく他都市の者だろうと検討をつける。だが、そうになると犯罪者の可能性もある。

こんな学園都市で出会うような知人はいない。そう思いウォルターはツエルニ支給の錬金鋼を復元して近づいていく。

「！」

いきなりだ。

闇夜に乾いた金属音が鳴り響く。鏝迫り合いとなり、そのまま自然と押し合いが始まる。

目の前には、闇夜の中でもはつきりと分かる暖色系の短髪を揺らす、顔の半分を布で隠した青年と思しき男。

身長的には同年代くらいか。瞳には明らかな闘争心が宿っている。しかしウォルターは、その剽の波動と質から眉を潜め、目元や髪色を見て違和感を覚えた。

どこかで出会ったことのあるような風貌、感触だったからだ。

「……………お前は……………」

だが、問う暇は無い。男は衝剽でウォルターの刀を弾き、ウォルターを後退させると上段に振りかぶり、間合いを詰めながら振り下ろした。

ウォルターは仰け反る形で鼻先を掠めていく刀を避けると、そのまま蹴りを放って相手の刀を真横にあつた壁に突き刺した。

足で刀を固定したまま自身の刀を瞬時に逆手で持つと男の首を切り落とす勢いで突きを放った。だが、その突きは不発に終わる。

男が自らの刀からぱつと手を離して、降参のポーズをとりながら制止をかけたからだ。

「ま、待った…………!!」

「……………」

ウォルターは訝しげな視線を向ける事はやめず、そのまま刀の鎧を男の顎にひたりと付けた。

「……………参った、さく…………。おれっちもだいたい強くなったと思っただけど、やっぱりあんたには敵わなかったさ」

「……………その口調」

「覚えててくれたみたいで嬉しいさく」

片手はあげたまま、もう一方の手で男は顔を覆っていた布を外した。

目の前に居た男は、グレンダン時代の知り合いだった。

「ウォルター・ルレイスフォン。久しぶりさく」

「……………ハイア・ライア」

目の前の暖色の髪を揺らす男、ハイア・ライアは、にこにここと笑っ

てウォルターにまわりつく。

「ライア……動きにくいんだが」

「別にいいじゃないかき。久しぶりに会ったんだからこのくらい許してくれたって」

「……あのなあ」

さすがに夜中に屋根の上で話し合いという訳にもいかない為、ウォルターはハイアを連れて自分のアパートに戻ってきていた。

「それにしてもここ、ウォルターしか住んで無いのかき？」

「そうだけど」

「へー、1人で広々出来て結構楽しんでるみたいでなによりさ。けど、ここ交通の便が悪すぎさ」

「それは思うけど、一番安かったから楽だったんだ」

大人数と居るのは苦手だし、と言うとけらけらとハイアが笑った。

ここは駅からも随分と離れた年季の入ったアパートだ。今のところ住人はウォルター1人。

ウォルターだけで使うならばとても広い。広すぎる程に。ともかくとハイアを椅子に座らせて、ウォルターは台所に立つと飲み物の準備を始めた。

ハイアはウォルターの言葉に嬉しそうに椅子にまたがって座るとウォルターを見やつてくる。

「そういう所は相変わらずさね！……ウォルターは変わってないみたいで、安心したさ」

「なんだよ、その意味深な言い方は」

ウォルターは眉をひそめながら台所から自分の分のカフェオレとハイアの分のカフェオレをつくつてくると、ハイアに差し出した。

「ほら」

「あ、こりや丁寧に。いきなり邪魔しちゃって悪かったさ」

「別にそれはいいんだけどな」

ふう、と先程淹れたばかりのカフェオレを吹き冷ます。

さすがに熱湯で作るべきじゃなかったか、と思いながらも口をつける。

“ハイア・ライア”という男

「じゃあなにさ？」

「簡単だよ。なんでツエルニに居る？」

「それこそ簡単さ、ウォルターに会いに来たのさ」

「……………」

「じよ、冗談さ！ その冷たい眼はやめてほしいさー！」

じとりとハイアを睨む。ハイアはすぐにたじろぎ、慌てて言葉を紡ぐ。

何故こんなにハイアになつかれているのか、正直ウォルターにはよくわかっていなかった。

天劍授受者時代、丁度グレンダンに帰ってきていたハイアの所属するサリンバン教導傭兵団というところに顔を出せとアルシエイラに言われて顔を出した所、このハイアに出会ったのだ。

一応同年代なのだが、どうも自分より子供らしい所ばかりが眼について（ウォルターの実年齢がこの世界の誰よりも上ということもあり）、犬かと思う時もある。

何度か手合わせをしたことはあるし、その度になついてくるし。今では顔を合わせればこの状態だ。本当に犬かと思う。

前世の魂は犬なんじゃないかな、と思いながらハイアの言葉を待った。

「おれつちがウォルターに会いたかったのは本当さ。おれつちだつてまた強くなったから見て欲しかっただけさ。けど、本当の狙いはそれじゃない」

「……廃貴族、か」

「お、知ってるさ？」

「まあな。ルツケンスから余興まじりに聞いたことがある程度だが。で、それがどうかしたのか？」

「その廃貴族がここにいて話、さ。元々は隣の都市にいたみたいだけ」

「……………そういやあ、探索中にアルセイフが正体不明のなんかに接触した、つて言ってたな。オレは見れなかったけど、…キンピカピンの牡山羊を見たとか」

「へえ……………キンピカピンの牡山羊か、さ？」

「そ」

ウォルターが手で形を作りながらそう言うと、ハイアは興味深そうに頷く。だが、ウォルターが言った名前にハイアが眉を寄せた事をウォルターは見逃さなかった。

「…ところでお前、アルセイフと何か一悶着あるのか？」

「えっ」

「眉。寄せたろ」

「……………本当にウォルターには隠し事出来ないさく……………あいつは、おれっちと同じサイハーデンの流派さく。その癖して、本領である刀を使わずにずっと剣使ってるのさ」

「……………そう言われれば、サイハーデンは刀の流派だったな。けど、あいつ天劍授受者決定戦の時も剣だったぜ」

叩き潰したけど。最後にそう付け足すとハイアは苦笑しながらカップに口をつける。

「まあ簡単に言えば、おれっちはあいつが気に入らないってことさく」

「あ、そ」

「……………本当にそういう所淡泊さ」

ハイアはそう言うが、ウォルターは眉を竦めただけでその言葉を流した。

淡泊なのは知っている。人が死のうとも平然としているようなのだ、その程度では動揺もしない。

————— 面白いや昔はもつとすごかったなあ……………

昔から比べたらいまはまだまだ平和だ。

汚染獣程度の脅威なんて目じゃない生活をしていたウォルターからすればそう思う程度。

敵に高度な知能があればあるほど殺すのが面倒だし、何より人というだけでめんどろな騒ぎが起こる。人が死ぬなんて日常茶飯事の世

界が昔だったが、それでも一応「警察」というような組織は動いていた。あれに見つかるのだけは本当に勘弁願いたい。

人が敵でないだけでこうも楽なのかと正直思う。

こういうことは他人には言っていないが、言ったら非人道的だと罵られるのだろうか？

ハイアにでも言ったら、驚愕してもう寄ってこなくなるのではないだろうか。

そんな事を思うが、それで独りになる恐怖は微塵も無く、そうなたらそうなたで面白いなと思う程。

昔に思考が飛びすぎていたなと気持ちを切り替えて、ハイアに向き直った。

「それで、オレにどうして欲しいって言うんだ？ お前は」

「さっすが、話が早いさ。このトップに会いたいのさ。廃貴族を捕まえる手伝いをしてほしいってね」

「……ふむ……まあ、あいつに掛け合うくらいなら出来るな」

「本当かき？」

「ああ。だが、その前に一応あった方が良さげなヤツがいるけど」

「ウォルターから話聞いたから別にもういいさ」

「あ、そ。……じゃあいいや……と言いたいところだが。オレはいろいろとやらないと行けない事がある。そいつの場所を教えてやるから言ってくるよ」

「え〜〜〜」

ハイアが面倒くさそうに声をもらす。持っていたカップの中はすでにからのようで、テーブルにカップを置いた。

ウォルターはハイアの反応に眉を潜め、テーブルの上に置かれたカップを手取る。

「いいから行け。お互い、やる事があるだろう。……弁当やるから」
「行くさ」

本当に早いな、と思いながらも適当にプラスチックケースに詰められそうなものを選び、サンドイッチが楽かときぱき作業を進める。ハイアも台所にやってきてによきつと後ろから顔を出した。

「なに作るんさ〜?」

「行つてからの楽しみの方がいいだろ? 椅子に座つておとなしく待
て」

「……………」

待てに反応したのか、台所の入り口前にハイアが立つ。

「そこですか。いいけどよ…」

ともかく邪魔をされなければいいか、とウォルターは作業を進め、
完成品をプラスチックケースに詰め込んだ。

ずっとそこに居るかと思つていたが、脱いでいたコートを羽織に
行つたりしていない間に、プラスチックケースを袋に入れてハイアに
渡す。

「ほら」

「感激さ〜! ウォルターの弁当なんてはじめてさ」

「言つてねえで早く行け」

「了解さ〜!」

上機嫌で去つていくハイアをやれやれと見送り、ウォルターは精神
を集中した。

そして、縁の空間に飛び込んだ。

“リーリン・マーフェス”の存在

グレンダンでは王女……つまりアルシエイラとリーリン・マーフェス、そしてデルク・サイハーデンが謁見するらしい。

少し前のグレンダンに潜伏していた汚染獣の事で、とのことだ。それはそれで少し気になる。

今からこの時間のまま行つた所で途中になるとは思うが、まあ顔はただけはただかとグレンダンの王宮へ降り立った。

「……………あれ」

「あつ……………」

だが、そうはならなかった。

「久しぶりだな、デルク・サイハーデン」

「ウォルター・ルレイスフォーン……、お久しぶり……ですね」

「オレに敬語はいらぬよ。もう天劍授受者じゃない訳だし。数年前の話だからな」

警護当番の武芸者の所へ連れてきてもらった筈が、そこに居たのは元天劍授受者、ウォルター・ルレイスフォーンだった。

リーリンもデルクも、何故彼が居るのかと驚いた。

「まあ、いろいろあつてな。オレも当事者だから出たほうがいいかと思つて」

にや、と笑みを浮かべたウォルターは、気軽にリーリン達に話しかける。だが、リーリンはやはり戸惑いを隠せず、視線を泳がせた。

「ともかく、だ。あの女王に会うんだろ？ ささつと行こうぜ」

ウォルターを先頭にして、謁見の間に入る。

御簾の向こうに姿を隠すアルシエイラを見たデルクは、ソファの前まで来ると膝を折つた。そして、リーリンもそれに伴い同じ動作をした。だが、ウォルター1人が笑みを浮かべたまま頭を垂れなかった。

アルシエイラは何処か訝しいような雰囲気を見せた。

「……………すまないが…先に聞かせてもらおう。ウォルター・ルレイスフォーン、何故ここに居る？」

厳肅な空気の中、アルシエイラがウォルターに問うてきた。

内心びつくりしているんだろうな、と思いながらウォルターはくつと笑い、敬語は忘れないままに軽い口調で言った。

「いやあ、オレも当事者ですし来た方がいいかと思いましてね」

「……………それだけ、か？」

「ええ」

アルシエイラの確認をさらりと流して、普段のアルシエイラには胡散臭いと言われるであろう笑みを浮かべた。

溜息混じりな女王の合図でもう一つ椅子が用意され、ウォルターは遠慮なく座る。

デルク達是不躑だ、と言うような視線をウォルターに向けていたが、ウォルターはそれに対して肩を竦めただけだった。

「まあ、座りたまえ。その失礼の塊もすでに座っていることだ」

「酷いですねえ、陛下」

ウォルターは再び肩を竦め、侍女が用意したお茶に口をつける。

「……………そういえば、あれは元気にしているかい？」

「えっ？」

「レイフォンだ。あれは元気にしているのかい？ それとも、手紙のやりとりもしていないのかな？」

「あ、はい。……………あつ、いえっ、してます！」

アルシエイラの突然の問いにリーリンが狼狽した様子で答えている。ウォルターはそれにくつくと笑い、リーリンがややむっとした顔を向けてきたので笑みを苦笑に変えた。

「笑っているが、いまあちこちを旅しているキミはあれの事を知っているのかな？」

「アルセイフの事ですか？ ……まあ、元気と言えば元気ですよ。なんとも言い難いですけどね」

「……………いまのレイフォンを、知っているんですか？ ……その、ウォルター……さんは」

「まあね。知ってるといえば言ってるけど、興味が有るかと言われれば無い無い」

けらけらとウォルターが笑うと、リーリンは少し俯いて考えこんでしまった。

「おや、と思いなながらウォルターはリーリンを見る。

「おーい、マーフェス？」

「あ、はい？」

ぱつと顔をあげてウォルターを見たリーリンと、目があった。

—————あ……………

そこで、気づいた。

—————……………そうか……………、アルモニスがこいつを大事にしている理由は、そういう事か……………

気付けば、面影はあった。誰かに似ていると思っていた。だが、片方の血が濃いのだろう、知っている方の面影がうす薄くてわかりづらかったのだ。

ヘルダー・ユートノール。

そして、かつてグレンダンで起きた事件、メイファー・シユタツト事件。

メイファー・シユタツト。

グレンダン王家の狙い。いずれ来る筈の「運命」。それを迎える為の準備。

天剣授受者。そして、因子。

—————そういう事か

感じていた懐かしさは当然の筈だった。

本来ならばアルシエイラ、アルシエイラの子供にでも受け継がれる筈の「運命」が、神様の悪戯によりこんななんの力もない一般人に受け継がれたのだ。

—————修正をかけるべきだったんだろうか

メイファー・シユタツト事件については、ウォルターも関係していた。

人知れず活動していたが、それでも人の心を完璧に動かすのは無理だと言ってもいい。

ならば、これこそが「運命」か。

「いやです」

は、と物思いに耽っていたウォルターは現実に引き戻される。話は刻々と進んでいたようで、リーリンとデルクはすでにソファから立ち上がっており、謁見の間から出て行くところだった。

——オレ、この癖直したほうがいいかも……

考え事に耽ると周りの言葉を聞いていないというのはなかなか困った癖だ。

今度から直すか、と溜息をつくとき、すでに御簾を外したらしいアルシエイラが伸びをしていた。

「ウォルター、後半聞いてなかったでしょ」

「別にいいだろ、オレには関係ないんだから」

「……そうだけどね……」

アルシエイラは困ったようにウォルターを見たが、ウォルターはウォルターで肩を竦めた。

「あんた、いいの?」

「なにがだ?」

「あんたはレイフォンと同じ所に通ってるんでしょう? だったらいろいろと知ってるはずでしょう。リーリンに教えてあげてもいいじゃない」

「……………いや……………。教えるようなことはなににもないよ」

ウォルターはそう言って平然とお茶のおかわりを淹れて貰うとお茶を口に含んだ。

「で? 実際どうなのよ。女王権限で教えなさい」

「……ん……。最近は一……なんかちよつとふらふらしてたみたいだが、大分安定してきたみたいだ」

「そうなの?」

「あー、うん」

「適当ね? その言いぶりは」

「……………いや、そうでもない。……………と思う」

「なにそれ」

あやふやなウォルターの言いぶりにアルシェイラは肩を竦めた。ウォルターは特に気にせず、やはりお茶に口をつけるだけだ。

「あんたねー……。まあいいんだけど。あんたらしくて」

「そういうあんたがずっと神秘的な顔を御簾の向こうでしてンだろうなあ、なんて思うとオレはやばい程腹が震えたぜ」

「……………あんた、ほんつとあんたよね」

「おう。やばい程オレだ」

にやり、と笑みを浮かべて2杯目のお茶を飲み干すとソファから立ち上がった。

「あら、もう行くの？」

「ああ。オレはオレのやることをする。向こうでやるべきことがあるからな」

「……………そう。気をつけてね」

「っは」

ウォルターは笑いをこぼし、踵を返すと手を振った。

「あんたらしくねえな」

アルシェイラには自分のことはそれなりに伝えてある為、そのまま縁の空間に飛び込んだ。

ツエルニへと帰還する。

後輩の同級生と課長さん

翌日、ウォルターは大あくびをしながら錬金科を尋ねた。尋ねた理由は単純で、定期的な錬金鋼の検査だ。

ウォルターの剽が多いことはすでにハーレイやハーレイと同室であるキリク達には伝えてある。

どれだけ加減をして剽を流して使っても、錬金鋼がだめになるのは早く困ったものだと思うがそういうふうなのだから仕方ないと思う。

もう少し効率の良い使い方はないものだろうかと考える。

そうしている間にハーレイたちに振り分けられている錬金科の部屋の前まで来た。

「失礼するぜー？ サットンいるか？」

「いるよ。っと、いまレイフォンの錬金鋼見てるから、ちよつと待つて」

「ん？ なんでアルセイフも……って、また派手に壊れた錬金鋼だな。

一体どうした」

「……………いえ、少し」

「…昨日の都市警察の仕事か？」

「……………ええ……………まあ」

レイフォンのほぐらかしたような言い方に眉を寄せたものの、ウォルターはおとなしく待つ。

「えーっと、これはもう新調しようか。修復じゃあどうにもならなそうだし」

「分かりました」

「ウォルターは……検査かな？ レイフォン、これにデータ入れたら復元してみてね」

ウォルターの鋼鉄錬金鋼をハーレイは受け取ると、レイフォン用の複合錬金鋼を取り出してデータを入れる。

片手で作業を済ませ、レイフォンに複合錬金鋼を渡すとウォルターの方の作業にとりかかる。

「えーつと、これが……ああ、これももうだめそうだ」

「えー、本当かー……。……こりやあだめだな、確かに……。だったら、もういつその事青石鍊金鋼とかでどうだ」

「それはなあ……。キミには向いてないとおも、」

「これって……！」

ウォルターとハーレイが話していた中で、レイフォンが驚いた声をあげた。

「これ、刀……ですよ」

「ああ……。そうなんだ。キリクがその形にしちやつたんだよ」

ハーレイは小首を傾げながら言う。レイフォンが動揺する中、ウォルターはへえ、と感心していた。

——あれで見破ったか

レイフォンは少し前の老生体戦で、幾度か鍊金鋼を破棄していた。そしてその中で、レイフォンが持ち帰った鍊金鋼からレイフォンの本領は剣ではなく刀だと見破ったようだ。

実際そのよみはあたりだ。

ハイアも言っていたように、レイフォンはサイハーデンという刀の流派であり、その動きは叩き斬る動きではなく斬り裂く動きだ。それはまさに、幼少期から刀の訓練をしていたからこそその賜物なのだろう。

「それは、その形が最もふさわしい」

キリクがそう言っただけでレイフォンを鋭い目つきで見た。レイフォンは何か言いたいような顔をしていたが、唇を噛み締めていた。

「……向こうは向こうでさせようぜ。サットン、頼むわ」

「え？ あ、うん……」

ハーレイはウォルターに促され、新しい鍊金鋼の素材を引っ張り出す。

「もとはどうする？ やっぱり機能性を求めるなら鋼鉄鍊金鋼だけど、そうなるやっぱり壊れやすいといえれば壊れやすいよ」

「んー……」

ウォルターはハーレイが差し出した鍊金鋼の素材をがらがらとあ

さる。

「バランス型として考えるなら、やっぱりレイフォンと同じ青石錬金鋼をおすすめするよ？　だけど、キミは剽の奔り過ぎとかのせいで熱膨張して錬金鋼がだめになりやすいから、そういう点を考えると少し慣れるまでは不便かもしれないけど黒鋼錬金鋼とかはどうかな？」

「んー……そうだなあ……」

黒鋼錬金鋼。確かにそれもありといえはありだ。だが、慣れるまでにかかるのというのは、それはそれで困るのだが……

「……まあでも、汚染獣相手の時は自分の使っていていつて言われてるしな。それでも困らねえし、じゃあ黒鋼錬金鋼で頼むわ」

「いいの？　流される感じだったけど」

「特にこだわりねえし、いいよ」

「ふーん……分かった」

ハーレイに設定してもらっている間、右から左への後ろの会話を聞く。基本ウォルターは自分に関係がないならば気にはしない。

勿論、それは気にかけているレイフォンであっても同じだ。レイフォンの精神的問題ならば、それはウォルターが干渉する幅では無い。

例外があることは認めるが。

なんだかんだと言いながらレイフォンは結局押し黙り、飲み物を買っていくと言ったウォルターの言葉もすべて上の空で聞いていなかったようだが、それでもウォルターは構わなかった。

新しく設定してもらった錬金鋼は、まだ剣帯にまだ馴染んでいなく何処か違和感をもたせた。

そんな違和感を覚えながら自販機で飲み物を買っていると、少し体格が太めな男と、その後ろにふてくされた顔をしたレイフォンの同級生……ナルキ・ゲルニが居た。

「あれ、ゲルニ。それに……ええと」

制服は養殖科の制服。男は苦笑しながらウォルターに声をかけてきた。

「はじめましてだな。おれはフォーメッド・ガレン。養殖科5年だ」

「……はあ、よろしく……」

「あたしの所……都市警察の課長なんだ」

「へえ、課長さん」

ウォルターが感心した様子で頷くと男……フォームメッドは苦笑した。

「武芸科のヤツらにはかなわないな。ところで……バツヂがある所を見ると、小隊員か」

「ああ……えつと、ウォルター・ルレイスフォーン。十七小隊。一応」
「一応って……」

ウォルターのよく分からない自己紹介に、ナルキが呆れた顔をしたが、フォームメッドは気にしていないようだった。

「そうか、丁度良かった。ニーナ・アントークは居るか？」

「……練武館の方に居ると思うけど」

「そうか」

「丁度戻るし、行くよ」

ウォルターはそう言っ先頭を歩く。

善と悪、そして世界とは、果たして

「悪いな。今回は…色々手間な事件が起きていて」

「構わねえさ、オレを巻き込まないならな。第一、オレには特に関係ねえし」

「……関係ない、か」

「だろう？ 違法酒なんてモンはオレの興味の範疇に無い」

「フオーメツドが感慨深そうに呟くと、ナルキがその隣で納得がいかないという顔をした。」

「……同じ生徒なんですよ？ それに、興味があるとか無いとかそういう問題じゃないと思います。……そう言い方は……」

「無いと思う、か？」

「……」

ナルキはウォルターの問いに頷く。ウォルターはそれを気配で悟ったようだが、それでも鼻で笑った。

「だけど、オレの興味が無いことは確かだ。一番それを危惧してんのはお前ら都市警察や、治安が乱れるという点で危惧する生徒会だけだろうよ」

「…けど、やっぱりそういう話でも無いと思います」

「…そうかもな？ まあでも、情けをかけるということでは、そいつはそれ以外どうしようもなかったらどうする？ 違法酒を使わなければなにも成せないようなヤツだったら？」

「……でも、ここでは禁止されています。……もしも都市の為だったとしても……それは悪だ」

「……悪、ねえ……」

ウォルターは感慨深く呟いた。義を持って事を成しても、手段によつては不義とされる、か。

——まあ、ねえ……ゲルニの考えもまた、義ではあるな

悪いことは悪い、だからやってはいけな。それは正しいのだ。理の中ですべての根底、基礎としてあることだ。だがそれを必ずしも正しいと言えるのは、まだ「知らない」からだ。

それでも、ウォルターやレイフオンのような存在には、どうあがいても来るのだ。

いくらだめだとわかっていても、何かをやらなくてはならない時が。

その手段が不義だとわかっていても、それを義として通さねばならない時が。

——そう考えると、アルセイフはそれを思い知るのが早かったよな

義として行ったことが、周りからは不義だと罵られる。世の中、そういうことがあってもおかしくはない。だが、あいつは知るのが早すぎた。

その為に、幼い意志をこなごなに打ち砕かれた。

それだけの話なのだ、簡単にいえば。

そう、それだけの話だ。

そう思考している間に練武館の入り口にたどり着いた。ウォルターは扉を指す。

「さてと。ともかくつてことで、ここだ。オレは別の用事あるからちよつと先に会っててくれ。すぐ戻る」

「分かった」

「分かりました」

ナルキ、フォーメッドと別れるとウォルターはさっさと歩きだした。

用事と言っても、特に大事な用事では無いのだが。

そう思いながらウォルターはツエルニの屋根を駆け、そのまま縁の空間へと飛び込んだ。

縁の空間というものは、なんといっても不思議だ。

ウォルターは「ここ」が出来る前のゼロ領域について知っているが、ゼロ領域のようでそうではないこの空間は、何処か不思議な感覚に陥る。

それでも、劉というものはオーロラ粒子……劉を練る為の元素となるもの、がやはり干渉している。

もとより、あの隻眼の男に植え付けられたものが因子としてこの世界に散らばって現在の「武芸者」というものが生まれただけであり、ただの発展型にすぎない。

それでもやはりオリジナルが優っているのであろうと思うと、首を傾げる事になるのだけれど。

縁の空間では、辿り着くまではそう時間はかからない。だが、やはり考える時間というものは存在する。

ウォルターはなんとなく追想して、やはり思うのだ。
自分はすべきことをできているのだろうか、と。

現在ウォルターがここに居られるのは、ルウの領域が咄嗟に発動し、隻眼の男の右目の効力が届かない領域へとウォルターの周囲が変化していた為だった。

それ以外になにもなく、それ以上でもない。

ああ、と思う。この世界は、こじつけの世界。

哀れで愚かな男が、たったひとりの少女を守るためにいま尚続く戦いの戦地、戦場である。

だが、この世界……レギオスの人々はそれを知らない。

本当にこのままでいいのだろうか。

世界の誰もが自らの存在する世界について知らず、運命の歯車を回すグレンダン、そしてツエルニに眠る闇、電子精霊達……それらだけが知っているだけで、果たしてこの世界の人々は満足出来るのだろうか？

なにもわからないけれど、それでもツエルニという舞台は必要な舞台なのだと、ウォルターは個人的に思っている。

武芸の実力は、グレンダンが補う。ならば、ツエルニが存在して、ツエルニが運命の歯車として活躍すべき場は、と言われれば。

それは、まだ答えられない。過去を歩き来出来ても、未来は不確定要素が多すぎてウォルターにはどうすることも出来ない。

そうなれば、ウォルターは見定めることしか出来ないのだ。過去を

知り、いまを知り、そして未来を定めていく。

選択肢を増やすこと無く、確実に役目を果たすことが出来るよう、ウォルターは精一杯取り組むことしか出来ないのだ。

「と言っても、オレはなにも大層な事は出来ないけどな」

自嘲気味にそう嘆息して、ウォルターは縁の空間の先を見た。

「……そろそろか」

そう呟いて、ウォルターは縁の空間の中で溜息をこぼした。だけどどうせ、抜けるまでのもう少しの間ウォルターは考えに耽る事になるのだけだ。

電子精霊シュナイバル

ウォルターは縁の空間を流れていた。

縁の空間は流れが柔らかく、喧騒を生きるウォルターにとってはある意味の安らぎでもある。

「……はあ……」

(ウォルター、大丈夫?)

「……なにがだ?」

(だって、なんだかとっても疲れているみたい)

「…そんな事ないぜ。いつもと変わらない」

(そうかなあ……)

「そうだよ」

ウォルターはルウにそう言葉を返し、上方を向いた。

「……はあ」

もう一度溜息をつくとき、ウォルターは縁の空間を抜ける。

するりと飛び出したウォルターが場所は、ニーナの出身都市である仙鶯都市シュナイバルだ。とは言え、ウォルター自身は別にツエルニのゴタゴタが面倒くさいからといってツエルニから逃避行しにきたというわけではない。

会いに来たのはこの仙鶯都市シュナイバルの意識である、電子精霊シュナイバル。

「さてと、機関部に行こうか」

電子精霊と機密に話す場合であれば、縁の空間で話すのが一番だ。だが、ウォルターは縁の空間を使ってあちこちを行き来出来るだけで、本来の電子精霊達のように電子精霊を呼び出す事は出来ないのだ。

「あー、オレも出来たらなー」

そう呟きながら機関部の入り口へと滑りこむ。機関部の入り口はほぼツエルニと変わりがない。

つまり、機関掃除をしているウォルターにとっては特に苦にならない

い。

機関掃除は本当に多くの人間が行なっている為、ほぼ活動している人間を把握していない。

その為、特に人数程度が見知らぬ人物がいた所で気にもされな
い。

ウォルターは迷わず機関部を進み、そして人の目が一瞬他へと向いたと同時に機関部の下へ跳び下りた。

重力が加算し、ウォルターは地面に垂直降下する。

一番下に到達する前にルウの領域が働き、ウォルターは地面に衝撃を受けること無くふわりと着地する。

「華麗な着地……、か？」

(疑問形なの?)

ルウは柔らかに笑った。

ここにレイフォンが居たらきつと鬱陶しいような、呆れたような顔でウォルターを見るのだろう。

(……ねえ、ウォルター)

「うん？」

ウォルターは機関部の更に奥に行くために歩く。声をかけてきたルウに、やんわりと問い返す。

(僕はさ……)

ルウは何気なく呟いた。ルウは、ウォルターと共に居ることを望んでいる。

そしてそれは何よりも願ひであり、ルウにとってはなにがあつてもかなってほしいと望んでいることだ。

だが、はたして。そう、いま思ってしまった。そしてそれを問うことが、酷く恐怖と感じた。

「…ルウ？」

(……なんでもないよ。行こう?)

「……………そだな」

ウォルターはルウがなにも言わなくなった為、話を切り上げて歩き出す。

「…シユナイバル!」

最下層にたどり着いたウォルターは、都市の電子精霊であるシユナイバルを呼んだ。

「……いないのか?」

(いない筈は無いと思うけど)

電子精霊だし、とルウが付け足した。ウォルターもその筈だと頷く。

だが、シユナイバルは姿を現さない。

「……シユナイバル! 出てこい!」

「…騒々しいですね」

「………はあー………やっと出てきやがったな。遅いんだよ」

「妾が悪いと言うのですか?」

「そっだよ」

にやり、とウォルターは笑みを浮かべ、目の前に現れた半獣半人の電子精霊を見やる。

呆れた雰囲気を漂わせ、シユナイバルはウォルターを見やった。

「………ともかく………あなたは何故ここへ来たのです?」

「…みなまで言わないとわからないか、シユナイバル」

「………あの都市のことですか? それとも…哀れな道をゆく我が子のことですか」

「どっちもだ。報告に来たって訳じゃあないんだが、お前のところに来るのが得策かと思ってな」

「…何故です?」

「オレは縁の空間を使うことはできるが、お前みたいに電子精霊を呼ぶことは出来ないし、電子精霊と意思疎通が出来る訳でもない……。となれば、お前に聞くのが一番だろう」

この都市は、唯一電子精霊を生み出す事のできる都市だ。つまり、現在世界に存在する都市……電子精霊達は、このシユナイバルから生まれた者達が多いということだ。

少し前に行った都市……メルニスクは、このシユナイバルという都

市にある、〃リグザリオ機関〃という機関から生まれ、そして都市と
なった。

要するに、メルニスクはシュナイバルの子供にあたるということ
だ。

「……そういうのはまた正論と言えば正論です。しかし…、あなたが
ここに来るといふのは感心しませんね」

「……………しょうがないだろ」

「しょうがない事なんてないでしょう。あなたは妾達と別行動して違
う道を見つけると選んだ。ならばやり切るべきでしょう」

「……だが、それでも事の把握をしなければならぬだろう」

「……………そう、とも言えますね。ですが……………」

「意味のない問答を繰り返す気はない。…メルニスクの事、お前は把
握しているのか、していないのかどっちだ」

「………」

質問の末、シュナイバルはそう告げた。ウォルターは顔をしかめ、
シュナイバルを見た。

「していないのか？」

「ええ、していません。妾はただ電子精霊を生み出し、都市になること
を願うのみ。妾はここで時を待つのみです」

「……………じゃあ、無駄足だった…か」

「それでもありません」

シュナイバルの否定に、ウォルターは首を傾げた。しかし、シュナ
イバルは沈黙を選んだ。

どうやらその事に関しては答える気は無いらしい。

「……………わずかながら、運命が動き出しました」

「それは知ってる」

「……………ならば、まっとうしてください。あなたがすると決めたことを」
「………」

ウォルターはバツが悪いという顔をしながら、踵を返し、そのまま
縁の空間に飛び込んだ。

シュナイバルは、ウォルターが去った場所を見つめ、静かに眼を伏

せた。

「……あなたには言う必要が無いのです。何故ならば、あなたは必ず知ることになるからです。あなたは……そういう運命の上に立っている。そして、必ず知ることになる道を歩んでいるからです。あなたはそうなることを選んだ」

そう呟き、シユナイバルは自らもすべきことのために消えた。

心配事と複雑・乙女ゴコロ

翌日からの十七小隊の訓練には、レイフォンの同級生、ナルキ・ゲルニも参加していた。

硬球を使った訓練も、参加しているナルキは必然的に行うことになる。

ナルキは頬を伝う汗をタオルで拭いながらレイフォンに問うた。

「ふう……。レイとんや……。その……。ウォルター先輩もしているのか？」

「え？　ああ……。うん。でも今日はまだ簡単だった方だよ」

「……そうか……。やはりハードだな」

「そうか？　オレとしてはもう少し動きたいんだが」

『……………』

率直な意見を言ったら白い目で見られた。

いまの発言のなにか悪かったんだろうかとウォルターは苦笑した。

「ウォルター……。体力ばかのあなたと僕らを一緒にしないでください」

「……お前な……。お前だって一緒だろうが」

「僕は違います」

「生意気、言うなっ」

「うあつ！　つちよ、なにするんですか！　う、首、しまッ……!!」

「……レイとん……」

「ナツキ……。っ、言っていないで、助けて……」

レイフォンが呻きながらナルキに助けを求めるとき、ウォルターはにやにやとしながら首を締める。

「ぐ、えっ……。や、やめ……」

「……………」

「真顔になってもだめですよ、ウォルター先輩！　離して上げてください」

「しようにねえなあ……」

「……はあ……。死ぬかと思った」

「んー……帰りに柔軟でもしていこうかなー」

「…それはいいですけど。決して僕を巻き込まないでくださいね」

「えー……」

「……する気だったんですか？」

明らかに不服そうな表情を浮かべるウォルターを、レイフォンは面倒くさそうに見た。

ウォルターは不敵に笑みを浮かべると距離をとったレイフォンに歩み寄る。

歩み寄ってくるウォルターに、レイフォンはやや眉を潜めた。

「…な…なんですか…？」

「……んー」

ウォルターはやや首を傾げながらレイフォンの不造作な烏色の髪をかき混ぜる。

「つちよ、やめてください！ なにするんですか！」

「んー……なんかなあ……」

「……やめてくださいって、言ってるじゃないですか……！」

「おいよ、考え事してるんだからほっとけよー」

「もうちよっとマシなやり方は無いんですか？」

「ないー」

「もー…あなたって人は」

レイフォンは苛立たしそうにウォルターの手を払うが、それでもウォルターはしつこくレイフォンの頭を撫で続ける。

「……………」

頬は引きつったままだったがレイフォンはどうやら抵抗することを諦めたらしい。

ナルキはやや慌てた様子だったが、それでもレイフォンが耐えだした事にひとまず安心したらしかった。

「んー……」

——ライアは果たしてうまくいったかねえ…

カリアンに会いに行くだけ……その前にゴルネオに会えといったが、まあとって食われる事はないだろうし、さほど心配はしていない

のだけれど。あの性格でなにも報告が無いというのは、また少し心配になることだった。

なんとなくそう思いながらレイフォンの頭を撫で続ける。

「……………一体なにに悩んでいるんですか？」

早く解決したほうが得策だと考えたらしいレイフォンがウォルターにそう問うてくる。

ウォルターは「ん？」とやや口角をあげて微笑み、一瞬考えた後に笑みを浮かべて言った。

「……明日の弁当、どうしようかなあ…つて……」

「そんなことは勝手に考えてください!!」

レイフォンは今度こそ手を払いのけ、足早にウォルターから離れていった。

「ははは、怒り症だねえ」

「さっきのは……ウォルター先輩……が、いけないんじゃない」

「ひでえな……。オレは真剣に悩んだのに」

ウォルターは空笑いをこぼした。

「イオ先輩」

「ん、ロス？」

少し離れた場所からフェリに呼ばれ、ウォルターは歩み寄る。

「どうした？」

「……………」

「……………?」

フェリがひよいとウォルターの手をとった。

普段のフェリらしからぬ行動にウォルターは一瞬戸惑う。だが、フェリはとった手をほんの少しじつと見つめると、ぼしつと叩き落とされた。

「いてっ」

「痛そうに聞こえません」

「いってえなあ、なにするんだよー」

「……………」

「いてっ」

「わたしに対して舐めた態度をとった罰です」

「ひでえなあ」

フェリに脛を蹴られ、ウォルターは苦笑をフェリに返した。

不機嫌はなかなか治らず、レイフォンたちと解散になる。

ウォルターはフェリと帰る事になった。

ウォルターは、レイフォンとニーナ、そしてナルキ達が都市警察の仕事で動いている事を知っているので特になにも思わなかったが、知らされていないフェリとしてはなかなかおもしろくないことらしく、不満そうだった。

“ザリンバン教導傭兵団”の目的

まあ結局、その後ウォルターは解散後フェリと帰ることになり、帰路を歩いていった。

「……………」

「…どうしたんだ、ロス。黙りこくって」

「……いえ…なんだか仲間はずれにされているような気がします」

「…んー…」

「イオ先輩はなにも知りませんか？」

「んー。知らん。まあ、あえて、という点なら、知らないでもない。だが、それがあっているかと言われればオレは知らないな」

「そうですか」

フェリはウォルターの顔を見やると、ウォルターはフェリに微笑を向けた。向けたものの、フェリはどちらかと言えば不機嫌そうにウォルターを見る。

不機嫌そうなフェリの表情に、ウォルターは苦笑を返した。

「……おい、ウォルターッ!!」

後方から疾駆する物体、1 衝突は回避出来る しかし、加速
「……………」

突然、ウォルターの真後ろから突撃され、ウォルターは身体が傾いで転倒することを何とか堪える。

回避しようと思った矢先、旋刃を使ってまで加速して突撃してきた。

ウォルターは、後ろをばつと振り返って睨んだ。

「……ライア……ッ」

「ウォルターっ♪ さっがしたさー」

ウォルターの怒りもなんのその、突撃してきた人物……ハイアは満面の笑みでウォルターを見上げた。

「探さんでいい、探さんで」

「……モテモテですね」

「やめろロス、そういう事言うの」

ウォルターは困った顔をしてフェリを見て、それからハイアを引き剥がした。

苛立たしげにウォルターがハイアを睨め付けるとハイアはさすがに焦った様子でウォルターから離れた。

「……ライア……?」

「ぐぐぐぐ、ごめんなさいさあぁ! そんな睨まないでほしいさ!」

「それはいいですけど、とつとと離れなさい」

フェリは酷く面倒だという顔をしてハイアを睨んだ。

そうこうしているうちに生徒会長でもあるカリアンが到着し、フェリは一層嫌そうな顔をした。

「……何故兄さんも来るんですか……」

「ウォルターの助言どおりにしたらこうなつたさー」

「……………イオ先輩……………?」

「……オレは別に……会わせろってライアが言ってたから会わせただけで……こうなるとは」

「本当になにしてくれているんですか。あなたはなんて酷いことをするんですか」

「酷いことなのか……」

フェリの鬼気迫る表情で言われ、ウォルターは困った顔をしてフェリを見た。

ウォルターは少し離れて居たところに隠れていたハイアと同じサリンバン教導傭兵団の団員である、ミュンファ・ルファの気配を感じてハイアに呼ぶように告げると、やや戸惑った様子のミュンファが出てくる。

それでもフェリはそんなミュンファには構わずにウォルターに問うた。

「彼らは誰なんですか?」

「ん、まあ、つまるところグレンダンの王家直属の下っ端みたいなモンだよ」

「酷い言い草さ」

「ウォルターの適当な言い方と、雑な扱いにハイアは苦笑いした。それでもウォルターははつきりと言いのける。」

「そんなもんだろ？ サリンバン教導傭兵団って言って、グレンダンのヤツらだ。でもって…、こいつらは王家からの要望…つまり結成された理由を達成する為にあちこちを回ってんだ」

「…サリンバン教導傭兵団…ですか」

「そう。でもって、ライア…ハイア・ライアとアルセイフは仲が悪いつてことだけわかっとなければいいんじゃない？」

「…別に要らない情報ありがとうございます…」

「そりやあどう致しまして」

ウォルターはフェリの不機嫌全開の声に肩を竦めつつ答えた。

それでもハイアは特に構わず、にやりと笑みを浮かべてウォルターを見た。

「ともかく、さく。おれっち達は欲しいもんが貰えればさっさと去るさく」

「その欲しいモンがこの上なく厄介なんだろうが。…ともかくだ。確かに生徒会長に会って言ったのはオレだが、まさかこうなるとはさすがに思ってた」

「…めんどろですな」

「まったくな」

「あなたも原因のひとつでしょう」

「ひでえ」

フェリがひとつ溜息を吐く、ウォルターはやはり肩を竦めていた。カリアンはひとつ息を吐きウォルターに切り出す。

「ともかく、こんな所ではなんだ、一旦生徒会室に行こうか」

「ま、こんなところで固まってたら目立つしな」

とりあえずという形で生徒会室に移動してくると、ハイアとウォルターは適当にソファに腰掛けた。

「で…ハイア、と呼んでいいのかな？」

「いいさく」

「では、改めてハイア。キミの目的を聞こうか」

「ん、きつきもウォルターが言ってくれてたことさ。おれっちはあるもんをグレンダンに持って帰って来いとされている。それでもって、それがいまここ、ツエルニにあるのさ」

「……はたして、それは？」

「それは……廃貴族、って呼ばれるものさ」

ハイアがカリアンに廃貴族の説明をしている。

廃貴族。

廃貴族とはつまり、都市を失った、壊れた電子精霊……または、狂った電子精霊ともいう。

都市の防衛や汚染獣からの回避などに使用していたエネルギーは、人間への憑依、または物質、物体への放出により巨大なエネルギーへと変わる。

そしてこのエネルギーの使い方によって、武芸者は膨大な力を手に入れることが出来る。

その力はグレンダンの女王、アルシエイラ・アルモニスに匹敵するとも言われる。

——って言ったって、純粹じゃないんだけどな

ある意味、自分の力ではないのだから反則とも言えるであろうし実力ではないとも言える。だが戦いという生死、負けは死ぬ事と同義といわれる世界でそれは言い訳に過ぎない。

勝負の世界ではつまるどころ勝った方が正しいのだ。だからこそどういう経緯で力を手に入れられたかは関係がない。

大切なのは使いこなせているかどうか、だ。

ただそれだけだ。

何故ならば、それをいえばウォルターも同じだ。

異界法則を使い、この武芸者と念威操者と同じ様な状態を具現させただけで、この力は後付にすぎない。

つまり、廃貴族を得た人間と同じ。

そういうことだ。

「ウォルター」

「あん？」

「今回の廃貴族の捕獲、手伝って欲しいんさ」

「……………オレに？」

「そうさ。会長さんはしつかり廃貴族についてわかってくれたみたいさ。後は捕獲だけさ」

「……………ええ、面倒くさいしなく…。つてことでアルセイフにでも頼めよ」

「…嫌さ。……………あいつだし」

「わがまま言うな」

「……………でも……………」

ハイアが渋るのでウォルターがじとりとした顔で見やると、ハイアはややバツが悪いという顔をしていやいや頷く。

「……………分かった、さ…」

「よし」

いやいやでも頷いたのでウォルターはハイアの赤髪をかき混ぜた。

ハイアはそれに関しては何処かそっぽを向いていたが、それでも譲れないらしく不服そうに呟く。

「……………あいつがなんだかんだ言ったら、ウォルターがやってくれさ」

「…分かったよ」

ハイアの言葉にウォルターが応じた。

“ハイア・ライア”と“レイフォン・アルセイフ”

結局詳しい話はレイフォン達も交えてすることとなり、生徒会室で解散した。

アパートに帰るウォルターの半歩後ろをついて歩くハイアにウォルターは眉を寄せる。

「どうした？」

「……ウォルター……。その……」

「なんだよ」

ウォルターが問い返すがハイアは渋った様子でなかなか言葉に出そうとしない。

仕方無いと思いつながら、ウォルターは足を止めてハイアの方を見た。振り向かれたハイアはウォルターから顔を背け、視線を合わそうとしない。

「……ウォルターは……あいつの事、どう思ってるんさ……？」

「あいつ……？ ああ、アルセイフの事か？」

ウォルターが問うと、ハイアはゆつくりと頷いた。

その問いに、ウォルターはどう答えようかと首をひねる。

レイフォンを“支える”と言ったことに対して、偽りは無い。何故ならば、これからの事に必要だからだ。それだけを言うとは何処か利己的な事のようにも感じるが、そうはいっても必要な事は必要なことだ。

それがなければ世界が減ぶかもしれない。だが、そんなことはハイアに言っても通じる筈も無いし、レイフォンに言ってもこれは同様のことなのだ。

「……いまは、オレはあいつの先輩だからな。出来るなら、助けになってやらないとだめだなあって思ってるよ」

「……そう……、かさ」

「ん、」

「その事……あいつはどうなんさ？ あいつは……そういう風なのかさ」

？」

「…どうだろうな。あいつはオレを嫌ってるし、あいつ自身、あんまりオレに関わりたくねえンじゃねえのかな」

ハイアはウォルターの言葉に沈黙した。

その沈黙はウォルターにとって「そうだろうな」という肯定のよう
に取られたらしく、やや肩を竦めてウォルターは苦笑していた。

だがハイアからすれば、それは違った。

——そんな訳無いさ

何故なら、あの時のレイフオンの態度がそれを物語っていたから。
ウォルターは基本対人関係に対してあまり興味を持たない。感心
を持たない。だからこそ、ああして鈍感でいられる。

だが、ハイアはそうはいかなかった。

それでもその否定の言葉は飲み込んで、ウォルターには微笑んだ。

「ま、そういう点じゃあ、当たり前におれっちが勝ってるさ」

「つは、そうかもな。お前は犬っぽいし」

「え、犬？」

「犬っぽいよ、お前」

「わー、凄まじいさ、それ」

「そうかあ？」

ハイアが苦笑いしながら「そうさ」というと、ウォルターはまた
笑って手を振ってきた。

「さて。もう帰るよ。じゃ、な」

「そか。じゃあ」

ハイアも手を振り返し、ウォルターの背が消えるまでそちらを見続
ける。

その背が消えた頃、ハイアの思考はすでにツエルニへ来た夜へと飛
んでいた。

「そうさく、三代目さ」

ハイアは不敵に笑った。

目の前に居るのはレイフォン・アルセイフ。

かつて、天劍授受者だった男。

かつて、ハイアの親とも呼べる男に褒められていた男。

そして、それを愚かな行為ですべてをなくした男。

「……………」

目の前の男……レイフォンは、ハイアを見て酷く嫌そうな顔をしていた。

「サリンバン教導傭兵団が違法酒に関わっているなんて、初めて知ったよ」

「悪いがあればここに来るのに利用させてもらっただけさく。おれっちは達は特に関係無いのさ」

「……………」

ハイアは挑発的に笑う。

その笑みに対してレイフォンは酷く嫌そうだったが、それでも視線は外さなかった。

「……まったく、お前はせっかくあの人から直接天劍をもらえたっていうのに、だらしないヤツさく」

「……………」

「おや、忘れちゃったのかさ？ お前の前座ヴォルフシュティン、ウオルター・ルレイスフオーンさ」

「!!」

ハイアの口からその名前が出ると、レイフォンの表情が驚愕に染まった。

いや、グレンダンに拠点を置くサリンバン教導傭兵団の人間が、天劍授受者を把握している事自体はおかしいことでは無い。

だが、レイフォンは酷くその名前に対して狼狽した。

「なんさ、やつぱり覚えてるのかさ？」

「……覚えているもなにも、毎日顔を合わせているからね。嫌でも忘

れられそうに無い」

「……………どういふことか？」

「…ツエルニ、武芸科3年。ウォルター・ルレイスフォーン。…僕の先輩に当たる」

「……………ふん…そりや、面白くない」

今度はハイアが驚く番だった。

だがそれは一瞬で、どちらかと言えばこの都市に居ることが出来れば久々に会えるということの喜びの方が大きかった。

だがいま、それはどうでもいい。

いまはそれ以上に平然とその名が自分より浅く、ウォルターを嫌っている。こいつからその名前が出るのが気に入らない。

レイフォンがウォルターを嫌っていることなど、表情や雰囲気からすぐに読み取れる。

それは、現状においてどんな感情よりも読み取りやすかった。

「……で、お前はウォルターの事嫌いなのかさ？」

「…それはそうだよ。あんな人、いまままで会った事無い。それに、僕はウォルターみたいな人が大嫌いだ」

—— やっぱり、気に入らない

ハイアはそう思っただけでレイフォンの言葉に眉を寄せた。

目の前に立つレイフォンは、瞳から感情を沈殿させていく。そんなレイフォンを睨め付けるハイアは、内心酷く苛立っていた。

「……お前みたいなヤツが、知ったような口を聞くなさ」

ハイアが動いた。

レイフォンが復元していた錬金鋼で迎撃する。

夜の闇に響き渡る乾いた金属の衝突音が、一瞬の静寂を呼ぶ。

—— ウォルターの事を嫌っているくせに、呼び捨てするなんて

ハイアの癢に触っていたのはすべてそれだった。

「…お前なんか、ウォルターの事を呼び捨てにしてるんじゃないさ」
レイフォンの瞳が一瞬揺らいだ。

ハイアはそれを見逃さず、レイフォンの錬金鋼を弾くとそのまま一

歩踏み出て剄技を放つ。

外力系衝剄の変化、蝕壊。

ハイアが繰り出した剄技はレイフォンの青石鍊金鋼を破壊すべく、鍊金鋼にひびをいれた。

ひびのはいつた鍊金鋼を見て顔をしかめたレイフォンを見てハイアが口角を上げる。

「その程度かさ？ ヴォルフシュテイン」

「……………うるさい」

レイフォンは現在の鍊金鋼に走らせることの出来る最大の剄を走らせた。

そしてそのまま鍊金鋼を振りかぶり、ハイアと衝突した。だが、青石鍊金鋼は砕け散る。

砕け散った青石鍊金鋼の欠片の向こうに、会心の笑みを浮かべたハイアが居た。

しかしレイフォンは動きを止めない。そのまま口を開く。

「かあぁッ!!」

外力系衝剄の変化、戦声。

ハイアが仰け反る。

同時にレイフォンの蹴りが腹にとんできた。それを間一髪でしのご、腕で防ぐ。だが勢いに負けて後ろに蹴り飛ばされ、背後にあった建物に激突する。

がらがらと建物が倒壊し、ハイアは大きく舌打ちをした。気配を潜ませると、レイフォンの覇気も消えた事を確認する。

そこから蹴られた腕を押さえながら、ハイアはその場を去る。

くそっ…

内心で悪態をつきながら、ハイアは屋根の上を駆けていく。

……………あれは？

見覚えのある姿に、ハイアは一瞬視線を奪われた。

そして先程レイフォンの言っていた言葉を思い出した。

————— ああ…そういう事、かさ…

自らの視線の先に居る、ツエルニの制服を来た見覚えのある青年。

その青年がそこ居る事に、レイフォンに対して強い羨望を抱いた。
だからそれを少しでも彼にぶつけてやろうと思った。

彼は決してそのことには気付かないけれど、少しでもこちらがちらつかせてやればいいのだ。

ハイアは眼帯で顔を少し隠して、錬金鋼を手に跳躍した。

葛藤

カリアンにフェリと共にハイアを迎えに行ってくれと頼まれたウォルターは、フェリと並んでサリンバン教導傭兵団のバスへと向かっていた。

「不快です」

フェリがあからさまに声のトーンを落とした。

ウォルターはそんなフェリに対して肩を竦め、苦笑した。

「そういうなよ。しょうがないだろ」

ウォルターが諦めた様子で呟くが、フェリはそれにもやはり顔をしかめていた。

念威操者であるフェリがここまで表情を動かすとは、余程嫌なのだろうと察した。

「……だいたい、あなたのような人にしかなつかないあの男はどうしようも無いですね。そしてさらに言えばそんな人をそばに置くあなたもあなたです」

フェリがウォルターをじろりと睨んだ。

そんなフェリに対し、ウォルターは再び肩を竦めた。

「けど実際、そんな悪いヤツじゃあないぜ？ あいつ」

「……性格の話はしていませんよ」

「じゃあ何の話だ？」

「……もういいです」

フェリに呆れた眼を向けられ、ウォルターは首を傾げる。

結局、到着してもフェリは答えを教えられはしなかった。

ハイアと合流して生徒会室へと戻る道の途中、ハイアがふと思い出したというふうに口を開いた。

「そういえば、サイハーデンの刀術で思い出した事があるのさ」

「？」

「サイハーデンの刀術の中で、ある技があるのさ。今回のことには

びったりだと思おうのさ〜」

「…それは、アルセイフにできることなのか？」

「当たり前さ。それこそ、あいつにはちよつと野暮つてもんさ〜。ま、腐つても天劍授受者だったヤツつてことさね」

「……お前の言い方だと、ちよつと含みがあるように思えるんだが？」

ウォルターはハイアの探るような発言に眉根を寄せた。

ハイアはそれでも笑みを浮かべる。

「さすがさ、ウォルター。そう、あいつはあのままじゃ全力なんて出せるわけ無いさ。剄を出せる訳は無いだろうけど、それでも技量という点では劍を使つて刀と同じ事が出来るわけ無いさ〜」

ハイアのレイフォンを下に見た言い方に、フェリは不機嫌な声で言った。

「では、あなたは出来るんですか」

「出来るさ〜。けど、生徒に対しておれっちがやったらそれこそ都市間の問題で大事になつちやうさ。もしあいつがやってくれるんだつたら、それは都市内での揉め事。それこそあの会長さんがうまくやるさ〜」

「…まあ、ライアもサイハーデンを修めてるからな。出来てもおかしくはない。それに、ライアの言っている事にも一理ある」

「……………」

ハイアの言葉をウォルターが肯定した。

フェリはハイアに味方するウォルターを睨め付ける。

睨まれたウォルターは肩を竦めた。

「本当の事だ。実質は合っている」

「……………」

フェリは沈黙した。

ハイアが先に歩いて行つた事を確認すると、ハイアのその背の横にレイフォンの背を並べ、頭を振った。

「フォンフォンは……刀を持ちたくないと言っているのに。わたしは……念威を使いたくないと言っているのに。…わたし達は…何故、こゝうも意志と反することをしなくてはならないのでしょうか」

「……そういう世知辛い世の中だからな」

ウォルターはフェリの頭を軽く撫でると、ハイアの後を追った。

「……なにが言いたい？」

結局はフェリが来るのを待つてから、フェリと共に生徒会室に入ったウォルターの耳に入ったのは、酷く冷えきったレイフォンの言葉だった。

ハイアはやはり挑発的な笑みを浮かべており、レイフォンの発する雰囲気はどんと悪くなっていく。

レイフォンはふつつつと腹の中で煮えたぎるような怒りを感じていた。

誰も彼もが、レイフォンの事を知ったような口で言う。

キリクにしても、ハイアにしても。

どちらもずかずかとレイフォンの入って欲しくない領域へ踏み込もうとしてくる。

レイフォンはその憤りをあらわにしつつあった。

そして、ハイアが口を開いた。

「要するにお前は、ウォルターがいないとなにも出来ないガキってことさ〜」

その瞬間、レイフォンの頭の中で火花が散った。

レイフォンが動く。

錬金鋼を復元し、レイフォンは斬線に迷いなくハイアに剣の錬金鋼を振るった。

それに対してハイアも応戦し、生徒会室に乾いた金属音が鳴り響く。

「……今度は手加減しない」

「上等さ。刀も使えない腑抜けな技がおれつちに通用するか、試してみたらいいさ〜」

「やめたまえー！」

レイフォンとハイアが睨み合う中、カリアンが叫ぶように制止の声をかけるが、ふたりとも錬金鋼をひこうとはしない。

それを見ていたウォルターは、大きく溜息をついて足裏に剄を凝縮させて一気に爆発させた。

レイフォンが使う、内力系活剄、水鏡渡りの応用だ。

ウォルターは競り合いを続けるレイフォンとハイアの錬金鋼を素手で掴み、離れさせる。

「!!」

2人の身体が一瞬傾いだのを見逃さず、ウォルターはそのまま2人襟首を引っ掴んで両サイドのソファに向かって投げのように体勢を倒させた。

「つてー!」

「っ!」

2人がソファに倒れこみ、ウォルターは再び大きく溜息を吐いた。

「なにしてんだ? お前らは」

「……だって、そいつが」

「……だって、ハイアが」

「あ?」

ハイアとレイフォンが同時に言い訳をしようとしたが、ウォルターの凄みのある眼に制されなにも言えなくなった。

「…ライア、時と場合を考えろっていつもいつてる筈だよな。いつでもどこでもその挑発的な態度はやめろって事も言ってる筈だよな」

「……だって」

「……………」

「……ごめんなさいや」

まだ言い訳をするか、と言わんばかりに睨むとハイアはさすがごと謝ってきた。

続いてレイフォンの方を向く。レイフォンは苛立たしそうに眉を寄せ、ウォルターから眼をそむけて地面を見つめていた。

ウォルターはひとつ大きな溜息を吐き、レイフォンに向かって口を開く。

「……アルセイフ。お前も軽率すぎだとは思わないのか?」

「…あなたに何か言われる筋合いは無いです」

「……確かに、普通ならな。だが、ここは学園都市だ。お前はオレの後輩で、オレはお前の先輩だ。ばかやらかしてる後輩を叱らねえ訳にはいかねえだろう」

「……だからって」

「……アルセイフ」

低く、重低音の声で静かに名を呼ぶ。

レイフォンは一瞬それに身体を竦ませた。ウォルター以外は気付かなかったようだったが、それでもウォルターにははつきりとわかっていた。

「……ともかく、だ。ライアもこれ以上暴れるなら商談は無しになるぜ」

「……それは……困るさ」

「だったらここで開きだ」

カリアンに一言告げると、ウォルターはレイフォンの制服の襟首を掴んで生徒会室を手荒に出た。

心の底に押さえ込んだもの

「大体、お前もあんなに怒るなよな」

「……………」

「面倒くさい事になるってことだけは確かだっただろうが」

帰り道、先に行くウォルターはぼつぼつとそう語る。

レイフォンはただ黙りこんでなにも言わなかった。

「ライアもライアだが、お前もお前だ。嫌なら嫌だって言って、それで終わらせればいいだろ」

「……………」

「つたく、本当に手のかかるばかりと犬しか居ねえ……」

「…………うるさいです」

「…アルセイフ?」

珍しく怒気が迸るレイフォンを、ウォルターは振り返った。

それと同時に、剄の波動がウォルターの身体をうった。

レイフォン・アルセイフ、錬金鋼復元。

斬線角度、75.67 こちらの復元まで、0.1 回避まで、0.

5

……当たらない

ウォルターは金の腕輪をかぎして、刀を復元した。刀でレイフォンの突き出した青石錬金鋼をいなしながら避ける。

レイフォンの瞳には感情が溢れ出ていて、いつもの冷静な沈黙を宿す瞳は無かった。

「…………いい加減、そのおしゃべりな口を閉じてください」

「やり方ってモンがあんだろが、」

「…………関係ない」

「おおありだ」

ウォルターは静かにレイフォンの錬金鋼を刀で押しつける。

レイフォンの視線は沈黙を宿し始め、静かにウォルターの刀を見た。

「……刀」

「……あ？」

「……僕にとって……これはとても大切なこと、なんです。……武芸を汚す行いをするからこそ、したからこそ、刀を捨てたままで居たいのに——」

レイフオンは復元していた錬金鋼を基礎状態に戻した。

基礎状態の錬金鋼を握りしめて、レイフオンはウォルターを見た。

「どうすればいいんですか……！ 僕は……、……何か偉そうに言う前に教えてくださいよ……！ ウォルター！」

「……」

「……なにか……なにか言ってくださいよ……っ、ウォルター……っ！」

「……お前が刀を握りたくないというなら……握らなくていい」

「……え……？」

ウォルターが真剣な表情で言った。レイフオンは驚いた顔をして固まる。

「……どう、いう……」

「グレンダンで封心突は見たことがある。やろうと思えば出来る。お前がやらないと言うなら、オレがやるとライアと約束した」

「……」

「簡単だろ」
ウォルターはつかつかとレイフオンに歩み寄り、その無造作な鳶色の髪に手を乗せてぐしゃぐしゃと髪をかき回した。

「……っ……？」

「約束したからだよ。お前とな」

「僕、と……？」

レイフオンは首を傾げていた。

きよとんとした表情をするレイフオンにウォルターは苦笑を返し、髪をかき混ぜていた手を離して、微笑んだ。

「まあ、いいよ。お前が気に留めてなかりょうとな。……じゃ、オレはそろそろ行くから」

「……」

レイフオンはウォルターに言葉を返す事は出来なかった。喉の奥で言葉が詰まって、紡ぎ出そうと思つた言葉はせき止められた。そんなレイフオンに、ウォルターは笑みを苦笑に変えて跳躍した。

——ウォルター……

ひとり残されたレイフオンは、ウォルターの去つていった方向を見つめながら考えに耽る。

刀を握る事。

ハイアの事。

本当に苛立っている理由は……

「……………」

レイフオンは頭を振り、手に持った錬金鋼を見た。

刀を握らないと決めてからずっと握ってきた剣。

だが、やはり剣では出来ないこととできることがありすぎる。

——別に……ウォルターが僕を “支えてくれる” って言っ

てくれた事を忘れた訳じゃない

だが、それでもやはり怖くなるのだ。

ウォルターが何かをするために動いている事は知っている。それをおわせる言葉を何度もウォルターは言っていた。

だからこそ、怖いのだ。

——僕は、いつか置いて行かれるかもしれない

ウォルターの “すべきこと” の為に

そう思うと、酷く大きな恐怖に襲われるのだ。

「……………」

僕は、いつからこんなにも弱くなった？

どうして、こんなにも恐怖する

ツエルニ、クラスメート、十七小队。

失いたくない人たち

その中に、ウォルターも入っているのだ

決して、言つてはやらないけれど、それでも尊敬しているのだ。

「……ウォルター……僕は……」
レイフォンはしばらく、その場から動くことが出来なかった。

出来る事、出来ないこと

試合前日。

ウォルターは学校の視聴覚室に来て居た。

——第十小隊の事、あんまり知らねえかも

レイフォンもそのようだが、ウォルターとしても情報を事前に知ることはあまり好きではない。

だからといって、行き当たりばったりというもの癪にさわる。

せめて、どういう小隊なのかをしろうと思つて、視聴覚室の準備室から第十小隊の情報資料をかりて、視聴覚室に入った。

「……あ」

「…ウォルター」

視聴覚室には先客が居た。

「エリプトン……先輩」

「お前、相変わらず『先輩』つけるの苦手な。どうしたんだよ」

控えめにウォルターが言うとしャーニツドが苦笑を返してきた。

「しゃーニツドの問いに、ウォルターはやや視線を泳がせる。

「いや…オレはちよつと第十小隊の資料見ようと思つて」

「……珍しいな、お前が」

「今回はちよつと事情が違うからな。気にしておくべきかと思つて」

「ふうん」

そう頷きながら、大きなテレビの前に座っていたエリプトン……
「しゃーニツドは席を開けた。」

「あ、悪いな」

「いや。ところで、どの資料持ってきたんだ？」

「あーつと……。この間の試合のヤツ」

「じゃあ、つい最近か」

「そ」

ウォルターは記憶媒体をデッキにセットすると映像を流し始めた。
しばらく映像を静かに見ていたしゃーニツドが、映像を見ながら呟

いた。

「……やってねえな」

「……誰が？ なにをだ？」

「シエーナが。違法酒を」

「……じゃあ、使ってるのはデイン・デイーだけということか……」

「そういうことだ」

ふむ、と一瞬納得しかけて、ウォルターはシャーニツドの言葉に首を傾げた。

「…第十小隊は、うちの小隊と似たような考えなんだよな？」

「……まあ、そうだ。ツエルニを守る。そう掲げてるな」

「…じゃあ、おかしいんじゃないのか、これ」

「そうだな」

シャーニツドも苛立ったような様子でそう呟いた。

ウォルターは、そんなシャーニツドにあえて冷ややかな目線を向けた。

「……ダルシエナ・シエ・マテルナ……だったな、確か」

「ああ」

「そいつは、気付いてんのか？ デイン・デイーのやってることに」

「……おそらくは、な」

「……となれば、相当趣味が悪い」

ウォルターは小さく舌打ちをする。

シャーニツドは肩を竦めたただけだったが、それでも何処か納得のいかない様子ではあった。

「おかしいよな。困ったもんだぜ、本当に」

「……エリプトン……先輩は、元々この2人と居たんだよな」

「……そうだ」

「じゃあ、そのほころびは分からなかったのか？」

「…わかってたからこそだ。…だからオレは、あそこを出た。あのままじゃだめだと思った。……だが、オレは結局中途半端に壊しただけみたいで、もつれを残していたみたいだ」

「……みたい、じゃないな。残してたんだ」

シャーニツドはウォルターの言葉を沈黙で肯定した。だが、特にそれに対してウォルターは責める気は無い様で、なにも言わなかった。逆にその静かさにシャーニツドが不安になったようで、口を開く。

「……なにもいわねえの？」

「いまさらどうしようもないだろ、こりやあ。こうなつちまつたんなら、もう後はあんたがきつちり壊しきる以外ない。：残したもつれという因果は、あんたじゃないヤツには切れない」

「……………」

ウォルターはシャーニツドが沈黙した事に続いて沈黙し、映像を見つめた。

「……なあ」

「あ？」

「レイフォンは、オレがシエーナと戦わせてくれって言ったら、させてくれっかな」

「させてくれるだろ。あいつだってこういうことは分かってンだろうし……、大丈夫だろ」

ウォルターはシャーニツドにそう言って話を切った。

端的な話の切り方にシャーニツドはやや苦笑をして、それからまた画面を見た。

「……壊す事に、恐怖は覚えてねえのさ」

「……………」

ほつりと、シャーニツドが言葉をもらす。

「…あいつらとの関係。入学したての頃。抜けて、十七小隊に入る少し前までの状況。それらの終止符を打つことに対して、恐怖はねえんだよ」

「……………」

「一番こええのは、そのせいであいつらが死ぬことなんだよ。……だけど、やるって決めたからには、手を抜く真似なんて、しない。したくねえ」

「……………そうだな……………。決めたならやり遂げるべきだ。たとえそれが、非道だと罵られることであっても、やるべきことならば……………」

ウォルターがうつすら笑みを浮かべながら座っていた椅子から立ち上がった。ウォルターは視聴覚室の扉を開け、出ようとする。しかし、その一歩手前でピタリと足を止めた。

そんなウォルターをシャーニツドは静かに視線でそれを追い、そして視線を背けた。

「たぶん、デイン・デューとはオレがやる。……と言いたいが…、アルセイフがどう言うかが現時点でわからない。からなんとも言えないが…、ある程度はあんたの好きなようにやるといいだろう」

「……………分かった」

ウォルターは視聴覚室の扉を静かに閉めた。

「意志」と「思い」

「不快です」

「最近そのセリフよく聞くなあ」

「イオ先輩は少しのんびりしすぎなんです。……あのハイアの目的がはつきりしない以上、油断はできません」

「……いや、目的ははつきりして……」

「そ・の・遂・げ・る・方・法・で・す」

「……………はい」

フェリはどうやらピリピリしているようで、ウォルターの些細な言葉にも過敏に反応してきた。

現在は第十小隊との試合の為の準備時間なのだが、どうやら十七小隊はウォルター以外気が重くてしょうがないらしい。

そういうウォルターも人並みには気が重いつもりなのだが、どうやら表情に出ないためあまりわかってもらえていないらしい。

「あなたの『人並み』は八割程人並みではありません」

「ひでえ言い草」

「……ウォルター、今回のことに対してもまだ軽い気持ちか？」

「……アントークまで言うか」

ニーナの真剣味を帯びた表情と言葉に問われ、ウォルターは肩を竦めた。

「いやあ、そこまで軽いつもりじゃないんだが……。やつぱりそう見えるかねえ？」

「…生憎、わたしには普段の表情と変わって見えない」

「ウォルターがはつきり表情変わるのって甘いもん見た時だけでもんな」

「それだけじゃねえつもりなんだがねえ……。……アルセイフ？」

「……………」

「アルセイフ？」

「……あ、…なんです？」

呼びかけに反応せず、何処か遠くを見つめるレイフオンの態度に

ウォルターが怪訝にレイフオンを見た。

「どうした？」

「……いえ」

ウォルターがレイフオンに怪訝な顔を向けて居るうちにニーナ達は野外グラウンドに出た。

移動の速さに苦笑いしていると、未だ腰の上がないレイフオンがウォルターの戦闘衣の裾を引っ張った。

「……あの、ウォルター……」

「……どうした？」

「今回の事…、ウォルターがやる、って…言っていましたよね」

「ん？ ……ああ、そのつもりだが」

「……僕が、やります。 ……やらせて、ください」

レイフオンがまつすぐにウォルターを見てきた。

そんなレイフオンの視線に、ウォルターは問いを返した。

「…お前がやるというなら、オレはそれに反対はしない。 ……だが、やれるのか？ いざつて時に迷ってたら意味がねえんだぜ」

「わかってます。 ……けれど、迷っているのはいんです。 ……僕は、天剣の時も技を汚さない為に剣を使い続けた。 外れているというのは、今更だとわかっています。 でも、僕はいまさら剣を握るといことが… 酷く…僕自身が無様に思えて……」

レイフオンは剣帯に収まった簡易型複合錬金鋼の柄尻を静かに握りしめる。

見つめたままではあったが、わずかに視線が泳ぐレイフオンにウォルターは辛辣に言い放った。

「お前が無様なのはいつもだろ」

「ちよ、酷……ッ」

「けど」

言い返そうとしたレイフオンの頭をくしやりと撫で、ウォルターは、にやっと笑う。

「そう思える事が大事なんだよ。 人間どれだけ無様でも生きられる。 ……大事なのは、それを見過ごさない事と、そこからどうするかだ。

……オレは先に行く。決めてこい。もしやるといふなら、それでいい。やり切るならな」

ウォルターは足早にその場を去り、レイフオンをひとり残した。

「……だから、そういう余裕たつぷりなところがのんきにみられるんですよ、ウォルター……」

最近、頭を撫でられる事が多くなつたな、と思ひながら悪態をついて、レイフオンは撫でられた頭に触れる。

「……やるしか、ないのかな」

たしか、一番初めに試合に出た時も同じ事を思つたような気がする。

あの時は本当に投げやりに思つたけれど、いまはこの言葉を噛み締める。

都市の命。

ハイアの思惑。

ウォルターの意志。

十七小隊としての思い。

「レイフオン・アルセイフ」の思い。

それぞれのすべきこと。

レイフオンはゆっくり立ち上がって、更衣室から出た。

対峙

「オレさ、一回でいいから腹の底から叫びたいわ」
（……なんの話ですか）

ぼそりと呟いた言葉を聴きとつたらしいフェリが冷めた声でウォルターに言う。

念威端子から届くフェリのその冷めた声に、ウォルターは苦笑を零す。

「いやさ…、この歳になると、もう青春って遠くてね……」

（時々イオ先輩の年齢を疑います）

「酷えなく。オレはぴっぴちのじゅ、」

（集中してください）

ウォルターが、軽く言おうとしたことをフェリに遮られ再び苦笑浮かべる。しかし確かに実際、そこまでふらふらとしている暇は無い。事実もう試合は始まっていて、ウォルターは野戦グラウンドに居るのだから。

——まあ、実年齢は確かに違うけど

今年何歳になったんだっけ？

そんな途方も無い事を何気なく思考した。

右方向より強襲 到達まで4.6

——遅……

ウォルターはすうつと眼を細めた。

復元されたツエルニ支給の錬金鋼……少し前に新調した黒鋼錬金

鋼は、すでに朝の素振りにより手にある程度馴染んでいる。

手元を狂わせはしない。

横に目もくれないまま、的確にウォルターは相手の錬金鋼の鍰元を叩き、錬金鋼を破壊する。

相手が驚愕に表情が染まるどころだけを横目で見流し、相手に蹴りを放つ。

「つとに、面倒だねえ……」

ウォルターは何気なく呟いた。

——あっちでもこっちでも面倒ばかり。疫病神でもついでのかね

「此方側」で仕事をやっている間であろうと厄介事は容赦無い。

ウォルターが溜息を吐く、そしてレイフォンが居るであろう方、シャーニツドが居るであろう方に視線を向けた。

「さて。どうなるかな」

場合によつては多大な干渉をすることになりそうだが、そう思いながら左方向から来た相手は無表情で蹴り飛ばす。

それと同時に、レイフォン側で煙幕が撒き散らされた。

「それはおれっち達の獲物ささ」

レイフォンがデインに封心突を放った矢先、デインの真後ろには何故か黄金の牡山羊が出現した。

それに驚いていたレイフォンだったが、新たに現れた姿に眉をひそめずに居られなかった。

レイフォンに睨まれた姿は、間延びした声で野戦グラウンドに落ちた。

突如現れた男……ハイアはやはり笑みを浮かべている。

「……ハイアっ！」

「廃貴族はおれっち達がもらう。そういう約束ささ」

デインが跳躍した。

しかし四方から放たれた鎖が、デインをがんじがらめにするものでそれは阻止され、更にハイアの蹴りによって地上に落とされる。

デインの少し後ろに現れている金色の牡山羊……廃貴族には目もくれず、ハイア達はデインを捕らえる。

「どういうつもりだっ、廃貴族はあっちだろう」

「あれはおれっちは捕まえられないし、元天剣授受者のレイフォン君にだって無理。我が女王陛下でも無理ささ」

「どういふ……」

「だけど」

ハイアがにやりと、笑みを悪戯に変えた。その笑みにレイフォンが一瞬戦慄を覚えかける。

「宿主を見つけたなら話は別さ。それなら、おれつちだつて捕まえられる」

「彼をそのままグレンダンに連れ帰る気か！」

「ま、つまりはそういうことさね」

ハイアがあっけらかんとした様子で言い放った。

レイフォンの後ろに立つナルキは、2人の放つ気に圧倒される。

——— 凄まじい、気だ

到の波動は並のものではない。

相手のハイアはサリンバン教導傭兵団、しかも団長であるため当たり前といえば当たり前なのかもしれないが、ナルキからしてレイフォンも同じような気を放つことにほんの少し違和感を覚えていた。

——— もしかして……ウオルター先輩もこういう風の人なのか？

ウオルターはこの2人に平然と、そして不敵に絡むこの学園で唯一の人物だ。

であるならば、やはりこの2人と同じ程……いいや、それ以上の強者であるような気がしてならない。

「待てっ」

鉄鞭を構えてやってきたニーナがハイアに向かって叫んだ。

ニーナが会話に加わるも、ナルキには話している内容が酷く高次元のものに思えて、話の内容は一切頭に入っていない。

ニーナがハイアに宣戦布告をした。それは、レイフォンの動く方針が決まったということ。

レイフォンが簡易型複合錬金鋼を剣帯にしまい、青石錬金鋼を抜きながら言う。

「お前たちの相手なら僕がする。サリンバン教導傭兵団四十三名。技の錆を落とすにはちようどいい質と数だ」

すでにハイアと戦う気で居るレイフォンに、ナルキは制止をかける。

「サリンバン教導傭兵団と言えば、猛者の集まりだろう。無茶だ、やめろ」

しかし、レイフォンの瞳はすでに感情が沈殿しつつある。

話をきこうとしないレイフォンは、剣をだらりと下げ、ハイアは鋼鉄錬金鋼を復元して斜め上段八相に構えた。

確執

「……………」

(イオ先輩、ハイアが野戦グラウンドに…！)

「ああ、気付いてる」

フェリの焦ったような声が念威端子から聞こえる。だが、ウォルターは至って平常運行。のんびりとした声音で対応したのだが、それが癪に障ったらしい。

(何故行かないのです！)

「アルセイフが居るからだよ。あいつが居んなら、オレが出る幕じゃあねえだろう」

(……そうも、言っていられないのでは？)

「かねえ？ そうなったらそうなんだ。ま、観戦には行ってやろうかな」

ウォルターはそう言ってその場から姿を消した。

レイフォンとハイアの剽があたりに撒き散らされる。

野戦グラウンドに飽和していく剽は、時に衝剽となりあたりを無差別に破壊していく。

レイフォンを止めようとしたナルキをニーナが止め、言葉をかける。

「レイフォンなら大丈夫だ」

「けどっ、相手はあのサリンバン教導傭兵団ですよ？ 勝てる訳が無い」

ナルキが言い放った言葉。

ニーナは少し苦笑交じりに言葉を繰り返し、後ろから声がかかる。

「平気だってー。アルセイフだし」

「ウォルター、先輩……。……あなたは、心配という言葉を知らないんですか？」

「ん〜？ 心配で人間が死ななけりやいいんだけだな。とはいえ、ア

ルセイフだってもう誰かに何かをやってももらわないと死ぬようなガキじゃないんだ、放つとけ」

「……………あたしには、あなたの言い分はわかりません」

ナルキは鋭い眼差しでウォルターを見た。

しかしウォルターは相変わらぬ笑み。

「ま、お前基準で言われてもな」

「な……………」

「つてことで、おとなしく待つとけ」

ウォルターはそう言つて両腕を頭の後ろで組む。

茫然としたナルキに、ニーナは呆れた顔をして告げた。

「まあ…………、安心しろ。あいつがああ言っているということは、あいつが信頼している証拠でもあるんだ」

「……………そう……………なんですか……」

「なんだかんだ言つて、心配性だからな。レイフォンを信頼していなかったら、ハイアと対面すらさせないだろう」

——それなんて過保護

ナルキが内心で結構な衝撃を受けた。ニーナはある種の自信を持って言い、レイフォンを見ている。

「それに、レイフォンも強い。なにより、ウォルターもな。…………上には上が居る。2人を見ていると、痛感させられるよ」

ウォルターは、静かに構えたまま動きを起ささないレイフォンとハイアを見つめていた。

デインの元にミュンファ・ルフアが居る事もすでに把握済みだ。それでもそちらはシャーニッドと第十小队ダルシエナ・シエ・マテルナに任せた。

ウォルターは自らの出る幕では無いといったん眼を伏せる。

先程ニーナがそちらへやや遅れて走つていった事も知っている。

だが、それでもいいと思つた。

——あなたは分かるべきだ

シャーニツドは少し昔よがりになる時がある。

もう、いまのシャーニツドの居場所は“ここ”なのだ、わかってもらおうには良い場所だろうとウォルターは何気なく思う。

きっとそれはウォルターも同じなのだろうけれど。何かにつけ、過去を思い出すのはそういうことなのだろう。

自嘲気味に笑みを浮かべ、再びレイフォンとハイアへと視線を戻した。

ハイアが警戒は解かないまま、口を開いた。

「……お前はあの人を嫌ってる」

「……………」

「あの夜、お前と会った時にお前の態度で分かった。……なのに、どうして一緒に……同じ所に居るさ」

「……成り行きだ」

感情は沈殿させたまま、レイフォンが答える。

「お前、あの人の事憎んでるんじゃないか」

「……そうだよ。ウォルターの事は、いまでも時々腹が煮える気になる」

ハイアが、“ウォルター”とレイフォンが呼び捨てにする事に顔をしかめた。

——ああ、腹が立つ

ハイアが初めてウォルターという存在に出会ったのは、ウォルターが天剣授受者の時だった。

あの頃はそれなりに技術も見についてきていて、少し気分が高かった時だ。

初めて会った時の彼の瞳は、いまでも覚えている。

酷く冷め切った瞳をしていて、酷薄な眼をしていた。そして勝負を挑んだハイアを手酷く潰してきた。自信もプライドも何もかもを叩き潰すだけ叩き潰して、去っていった。

あの時は本当にどんなヤツだと思いましたが、後に知り合うう

ちに段々とウォルターという人間に「尊敬」と「憧れ」を持った。
絶対という強さを持つて、それでいて誰かと近くなるわけでもない
その強く輝く存在に。

このひとを、もつと知りたかった。

このひとに、もつと近づきたいと思った。

だからこそ、気に入らない。

皆に同じ思いを抱けと言いたい訳ではない。

ただ、「レイフォン」だから気に入らないということもあると、分
かっている。

しかし、譲る気もない。

——譲ら、ない

ハイアは眼差しをきつくしてレイフォンを見据えた。

「お前みたいなのが、ウォルターの事を呼び捨てにしてんじやないさ」
「……………」

「同じ所になって、居たくないんじゃないのかさ？ お前は。ウォル
ターの事手酷く嫌ってるお前は」

「…少し前まではね」

「……………」

ハイアが怪訝に眉を寄せた。

レイフォンの、沈殿された筈の感情が浮上してきている。

「少し前まではそうだった。ウォルターとなんて一切関わりたくな
かったし、思い出すことも嫌だった。でも……、でも、ウォルターが
僕のことをあんなに考えてくれるなんて思ってた。僕は
まだ子供だったんだ。ウォルターは、僕を支えてくれると、僕の力に
なってくれるといった」

ハイアの表情が変わった。

「前までの僕だったら、そんな事信じなかっただろうと思うよ。でも、
いまは……いまの僕は……」

そうだ。

ウォルターの思いを知った。知らなかったウォルターを知った。
だからこそ、いまだからこそ言える。

「……僕は、ウォルターと居たいと思ってる。ウォルターが僕を支えてくれるなら、僕もウォルターを支えたいと思った……！　僕も、ウォルターと一緒に……、邪魔だと言われるかもしれない。来るなと、関わるなと、関係ないといわれるかもしれない。それでも僕は、ウォルターと共に戦いたいと思った……！　それが……、それが、いまの僕の答だ!!」

感情に反応し、剽があふれだす。

ハイアは唇をかみしめて、レイフォンを睨みつける。

レイフォンは強い激情から、ハイアは強い憤慨から、剽を膨大に放出する。

「お前にや、譲れねえさ」

ハイアがそう言い放ち、動くべく機を待つ。

放出された互いの剽が剽を食い、いなし、叩き付け、切り崩す。あらゆる斬線が思考上で、視線上で絡み合う中で、ハイアが叫ぶように言い放つ。

「……お前みたいに、身勝手な思いだけで本領を隠すヤツなんて、あの人の隣にふさわしくねえさ!!」

「っ……!!　身勝手なんかじゃ、ない!!」

ハイアが言い放った言葉に、レイフォンが怒気をあらわにして、動いた。

新たなる決意と、思考

レイフオンとハイアはお互いにすれ違い、レイフオンの右頬には切り傷ができた。

ハイアが切り返しを行おうとした瞬間、レイフオンの青石錬金鋼に触れた鋼鉄錬金鋼が崩れ落ちていく。

外力系衝剄の変化、蝕壊。

レイフオンが、ハイアに初めて会った時に使った剄技。

それを今度はレイフオンがハイアに放ったのだ。

「……………くそう……………」

ハイアが地面に伏した。レイフオンは鋭い眼差しで傭兵団を威圧し、その場に縛り付ける。

血を吐いて倒れたハイアだが、レイフオンの錬金鋼は安全装置がかかっており、刃引きされている。その為肉を断つ事は出来ないが、衝撃はハイアの内蔵にまで届いた。肋骨は折れているだろうし、内臓器にも随分なダメージがいつていることだろう。

レイフオンはハイアに目もくれず、ただ傭兵団を威圧する。

「……………」

静かに成り行きを見届けていたウォルターは、ゆつくりとレイフオンに歩み寄り、頭を撫でた。

「もういいぜ、アルセイフ」

「…ウォルター…」

「ん？」

「……………僕、」

「もういい、そう言ったぜ」

ぐいっと頭を抱き寄せ、抱え込むようにして髪をかき混ぜる。

いつもなら反抗してくるのだが、いまはそうもいかないらしい。

ぎゅ、と小さく服が握られ、レイフオンの身体は小刻みに震える。

悔しいのか、情けないのか。それとも、他の念がなにかあるのか。

なにで泣いているのかは、ウォルターにはわからない。

それをウォルターは知ろうともしないし、知ろうとも思わない。だが、いまはただ、落ち着くまで居て欲しいのだろうと察するのみだ。

「よくやったよ。頑張った。お前は頑張ったよ」

背後で、廃貴族の気配が消え、風にのって声が聞こえた気がした。

「愛していた。そして、さようならだ」

それは、ひとつの物語の終わりを知らせる言葉だった。

少し落ち着いたらしいレイフォンはそそくさとウォルターから離れていった。

ウォルターはそれを苦笑交じりに見送り、ハイアの方へと歩み寄る。

(……ウォルター・ルレイスフォン)

「よう、フォーア」

ハイアの近くにいた念威端子から聞こえる機械質の音が、ウォルターの名を呼んだ。

ウォルターは気軽に機械質の声……フェルマウス・フォーアに答えた。

(お久しぶりですね)

「ああ。ところで、うちのモンが悪かったな。だからって訳じゃねえが、オレがハイアをそっちの放浪バスまで運ぼうと思うんだが」

(それは助かります。すみません、迷惑をかけてしまって)

「いいや、うちもうちだったしな。おあいこってことで」
(そうですね)

ウォルターはハイアを担いで歩き出す。

「……ウォル、ター……?」

気付いたららしいハイアが、小さく口を開いた。

小さく開かれた口からは、切れ切れの音が紡がれる。

「しゃべんな。きついだろ、いま」

「……………負け、ちまったさ」

「…その割に楽しそうだな」

ウォルターが苦笑して言うのと、ハイアが眉を潜めて、言った。

「弱いヤツは、要らない……………さ？」

「んなこたあねえよ」

ウォルターは一瞬苦笑を渋面に変えたが、すぐに苦笑した。

「ごめん、さく……………負けて」

「別に。…と言うか、お前ら嫁姑みたいな言い合い人の前で……………つてか、本人の前ですんのやめてよな」

「あれは重要だったんさく……………。……………絶対、譲りたくない」

「あー、そうですか」

「…そうさ」

ハイアの力強い肯定に、ウォルターは溜息をこぼした。

正直、「恥ずかしい」の一言に尽きる。あの言い合いは。

なに人の前でこそ真面目に恥ずかしい言い合い繰り広げてくれたんだ、と叫びたくなかった。

言わなかったけど。言えなかったけど。あんまりにも2人が真剣すぎて。

「……………今回は、負け…たけど。次は、勝つ。強くなる」

「……………ああ」

「天剣授受者にだって、なる。なつてやるさ」

「楽しみにしてるよ」

「……………うん」

ハイアは、ウォルターの雑だけれど柔らかな優しさを噛み締めた。

「デイン・デイー」

帰ってきた部屋で、ウォルターはベッドに寝そべりながら呟いた。

シャーニツド・エリプトンに関係する、『デイン・デー』の記録は一旦終了した。ウォルターはデイン・デーについて得ている知識を思考でまとめる。

(今回のことは、どうだったんだらうな?)

ウォルターが何気なくルウに声をかけた。中のルウが首を傾げ、ウォルターに問う。

(どういうこと?)

(アルセイフにとつても、うちの十七小队にとつても。微妙じゃないか? 今回)

(……うん、そうだね。でも、今回の事はきつと成長につながったと思うけど)

(なら、いいんだが……)

(うん、大丈夫だよ)

今回のことは、おそらくいろいろな意味で辛いことだっただろう。

ニーナもニーナで自分の『正義』を通すために行動を起こした。

しかし、ナルキにとつてそれは不必要な『正義』ととれただろう。

2人だけではない。

今回の一番の当事者であるシャーニツド、そして、ハイアのこと。

シャーニツドは、デイン・デーについて、そしてダルシエナ・シエ・マテルナについても。

レイフォンについては、ハイア都の対人関係についてもだったが、刀という自らが封じたものを強制されて使うという、苦渋の決断をしていた。

(まあ、レイフォン・アルセイフが辛い状況に居ることはいつものことだし……、しょうがないことといえましょうがないことなんじゃないかな?)

(そう、かもな)

(だったら、ともかく今日は寝たらどうか。今日は疲れたでしょ?)

(……そうだなあ……、寝るか)

(そうそう、寝よう)

ルウが軽くあくびをして言う。

ウォルターとしては、ルウは“この中”で眠くなる事があるのかどうなのかわからないので、そのあくびが、“人間としての名残”なのだろうか何気なく考えつつ、眼を閉じた。

それなら、いいですけど

「……ルレイスフォン、どうした？」

唐突に、共に機関掃除をしていた同僚にそう声をかけられた。
ウォルターは首を傾げて同僚を見やる。

「なにがだ？」

「いや、妙に浮かれてるっていうか……なんというか」

訝しげな表情を浮かべながら言う同僚の男に、ウォルターはへにやりと笑みを浮かべた。

「……いや、近々合宿があつてな」

「ふうん、合宿が楽しみなのか？」

「……………いや？」

「じゃあなんだよー」

ウォルターの真顔の答えに同僚は強くツツコミを放った。

しかし、そんな同僚の渾身の一撃もなんのその、けらけらと笑いながらウォルターは呟く。

「んー、なんとなく、かな」

「なんとなくの上下差が激しい」

「そうか？」

「そうだよ」

そう言われて、ふむ、と考えた。

そんなに眼につくような行動だっただろうか。

確かに少し浮き足立つようなテンションだった事は否めないのだが……

「そうかねえ……」

「はあ……、もういいよ……。悪いけどおれ、先に上がるわ。おつかれー。
お前、向こうで今日担当してる後輩ともう一人が居るから行けよ」

「えー」

———そんなにオレあからさまだったかな

自分の事に関しては何に気にしたことがないのでよく分からない。

どういう程度で他の人にどうとられるかということもあまりよく考えたことが無いウォルターはただ首を傾げるだけだ。

それでもウォルターは、去っていく同僚の背中から視線を逸らして溜息を吐く。

先程より幾分かは落ち着いた足取りでウォルターは去っていく同僚の背中から視線を逸らしてしようがないと溜息を吐く。

バケツとモップを持って移動していくと、明らかに見慣れた背中が見えた。

「……………おうふ」

「…ウォルター。お前も今日シフトだったのか？」

「……………ああ、そうだけど……………。居るのってアントークとアルセイフかよ」

「悪かったですね、僕で」

「はいはい」

レイフォンの言葉にウォルターは肩を竦め、バケツをおいてモップを構えた。

「…そういえばウォルター」

「んー？」

ニーナに声をかけられ、ウォルターは構えたモップを少し下げた。

「さつき話していたんだが、レイフォンの事をナルキ達に伝えるべきだろうか」

「んー…………？ アルセイフの事か？」

「そうだ」

「…さあ…。他のヤツの感性まではオレも知らないし、どういうヤツらかあんまり知らないし…」

時々関わるけど、と付け足してウォルターはモップを動かす。

ニーナはそんなウォルターに呟くように言う。

「やはり、言うべきでは無いか？」

「まあ、最後は結局アルセイフが決めることだしな。今回ゲルニが新しく隊に入ったんだし、仲間意識をきっちり持つならそういう隠し事はすべきじゃないと思うんだが…………」

こういう話をするのも、本日ナルキが改めて第十七小隊に入ってきた為だった。

違法酒の事で一旦入っていたナルキだったが、潜入の為ということの主だった為、ナルキが改めてきっちり入りたいといったのだ。

ニーナもそれを素直に受け止め、ナルキの入隊試験を行なって合格と判断した。

ナルキは実際内力系活到においては1年生でなかなかいい筋をいっていた。そういうこともありウォルターも反対しなかった。

「警察になりたいとか言ってるヤツだし、ちよいと厳しいかもな。：けどま、堅物の代表アントークに納得してもらえたんだし、なんとかなるンじゃねえの?」

「……それなら、いいですけど」

ニーナがウォルターの言葉に嫌そうな顔をした、しかしウォルターは特に気にもせずレイフォンに声をかける。

「…全部恐れてたら、なんにも出来ねえぜ、アルセイフ」

「……………わかってます」

ウォルターの言葉にレイフォンは不満そうに頬をふくらませた。

その日の機関掃除は、終了までずっとその話をしていった。

3人寄れば文殊の知恵、4人寄れば喧嘩が勃発

「…おひさー」

「あら、ウォルター」

ウォルターは久々にグレンダンに顔を出していた。

突然現れたウォルターだったが、それに動じる事無く廊下を歩くグレンダン女王、アルシエイラ・アルモニスは返事を返した。

ウォルターがここへ来たのは、まあ単純だ。

約一ヶ月前の廃貴族の騒動についてということ。

「話は来てるか？」

「ええ、あんたんとところに廃貴族が出たんですって？」

「おう。ライアから手紙が来たかねえ」

「そんなところよ。大変ね、あんたも」

アルシエイラがそう言つて洗面を浮かべた、ウォルターは苦笑して肩を竦める。

「いやあ。それほどでもねえな。……ところで、お前からリヴィンの劉の反応があるんだが…」

「…実はね、さつきシメちやつた！ テヘペロっ」

「……アルモニス……」

ウォルターは呆れた顔をしてアルシエイラを見つめた、見つめられたアルシエイラはそれでも舌を出して「てへ」と言う。

「てへ、で済まされることじゃないぞ、それ。お前がやつたら殺人事件になる」

「酷いなー、これでもある程度手加減したんだぞ」

「お茶目全開だつて顔するのはやめてくれ、対応に困る」

言葉程怒っているわけでもなく、ただ淡々とウォルターは溜息を吐く。そして本題らしい話を切り出した。

「……まあ……、どうせ天剣がどうたらこうたらでなつたんだろ？」

オレはどうでもいいけど」

「んー…あんだだつたらどうする？ 廃貴族」

「弱いからいらねえ」

「……さすがあんたね」

アルシエイラがどこか呆れたような顔をしながらウォルターに言った。

言われたウォルターはなにがさすがなのかがさっぱり分からず首を傾げる。

「でもあんたのほうがやっぱ頭柔らかくていいわね、帰ってこない？」

「ヤだ——」

「え——」

二人して微笑み合いながら呟きあう。

するとふと、アルシエイラが真面目な声音でウォルターに呟いた。

「ねえ。わたしって要ると思う？」

「……は？ いきなりだな」

突然の問いにきよとんとして、ウォルターはアルシエイラを見た。

ウォルターのよく分からないという目線にアルシエイラが澁面を浮かべる。

「…実はね、いまなーんとなく、唐突に思ったのよ。…だって、ウォルターはすつごく強いでしょ？ 実質わたし以上。あんたの事情はある程度教えてもらってるから強い理由も知ってるけど……。それで

も、あんたが居るならわたし要らないんじゃないかなーって。……思ったり」

「……ばかじゃねえの」

「え」

アルシエイラの意外すぎる言葉に対して、ウォルターは吐き捨てるように言った。

今度はアルシエイラがきよとんとしてウォルターを見る。

「お前な、オレが “どういうヤツか” 知ってるだろ？ そのくせしてその言葉は無いんじゃないの？」

「……え、つと……？」

「……だから、いいか？ オレはあくまで “外” のモンだ。この “世界” の事は、はつきり言っておレには関係ない。オレが守ると言っ

てンのは、〃ここ〃の下に居るヤツだ。…だから、この〃世界〃を守るのはきつちりお前の仕事なんだよ、アルモニス。最後に選ぶのはオレじゃない。お前らだ。…そこを履き違えるな」

ウォルターがそう言つて金の腕輪をかつんと叩く。

アルシエイラは少し考える素振りを見せて、ウォルターに問うた。

「…じゃあ…、いざとなつたら戦つてくれないつて事？」

「…さあな。状況による。それに、お前と対峙することになるやもしれないつて事は頭に入れておいてくれよ」

「…そんなことは、わかつてるわよ。あんたはいま、ツエルニの〃生徒〃なんだものね。…あんたが生徒だなんて、笑えるわ」

「えー」

アルシエイラが笑みを浮かべて言う。

ウォルターはそれに対して苦笑を浮かべただけで特にそれ以上言うつもりも無い様だった。

丁度そんなアルシエイラとウォルターの元へ、サヴァリスがやってきた。

「…ありやま、ルッケンス」

「おや、ウォルター。久し振りだね。と言うかキミ、〃ありやま〃つて…」

くつくつと楽しそうにウォルターを見てサヴァリスが笑う。

ウォルターはそれに対して眉を寄せる気も無いらしく、ただ呆れた顔をした。

「なんか文句でもあつたかねえ？」

「いいや？ キミらしいなと思つてね」

「おう、ならばよし」

——それもどうなの

サヴァリスは喉まで出かけた言葉を飲み込んで、アルシエイラの方に向き直ると言葉を紡ぎ始めた。

「…陛下、実はツエルニに居る弟から手紙が来たものでして」

サヴァリスは相変わらずの笑みを浮かべている。

つい先程その話で不機嫌だったようで、眉を潜めた。

「……不機嫌だつてわからないかな？ 天劍授受者は最近調子に乗っているみたいだね。ウォルターも居ることだし少しシメちやおうか？」

「こら。オレはなににもやらねえぞ」

「そう言わない。で？ それ以上になにかあるのかな？ サヴァリス」

「いえ、よろしかったら僕を使っていただけたらと」

サヴァリスの言葉に、ウォルターが今度は眉を潜めた。

「なに？ 廃貴族に興味でもあンのか、お前」

「…なんだ、ウォルターも知っているのかい？」

「もちろん。お前が喋ってきたんだろうが」

「ああ、そういえば。……欲しくない、と言えば嘘になるけれど…、まあ、それでもあくまで興味の範疇だよ」

サヴァリスが言う、しかしウォルターは眼差しを鋭くしてサヴァリスを見やる。

その視線にサヴァリスが肩を竦めた。

「まあ、別にどうということはないんだよ。ただ、陛下と並ぶその力。使ってみたいと思っただけだよ」

「……あ、そ。どうでもいいや」

「キミは本当に興味の無いことには無関心だよね」

ウォルターがため息混じりにそう言い放ち、サヴァリスはそれに対して再び肩を竦めた。

それでも特に悪気は無いらしく、ウォルターはあっけらかんとして居る。

「だってよ、廃貴族つていってもそんな劇的に変わる訳じゃないんだぜ？ 完全使役できようと、適応する精神と身体を持っていない事にはどうにもならねえ」

「ふうん…、そういうものなのかな？」

「そ。だからどうかねえ…」

「まあ、僕も心の底から欲しいとは思っていないんだ」

サヴァリスが言う、だがウォルターはやはりあっけらかんとしたま

まで居る。

そしてその視線をアルシェイラに向けた。

「まあでも、送ンなら送ればいいンじゃねえの？ お前、戦いの事に関しては何と〃割と〃律儀だから」

「……そうねえ……、考えておくわ」

「ありがとうございます」

アルシェイラは言葉と共にウォルターに手を振り、先を行く。

残ったサヴァリスとウォルターだったが、サヴァリスがウォルターに声をかけた。

「助け舟を出してくれたのかな？」

「いいや、そういうつもりは無い。……ただ……」

「げっ」

新たな声はその場に響き、そちらへ顔を向けた。

「あ、ノルネに……ファイランデイン？」

バーメリンとトロイアットという珍しい組み合わせにウォルターは首を傾げた。

「おや。どうしたんです？ バーメリンさんとトロイアットさんが一緒に居るなんて珍しいですね。…ははあ、明日は老生体でも来るんでしょうか」

「来そうで嫌だなー。お前らが一緒に居るなんて、老生体どころか槍が振るンじゃねえ？」

「避けれるからその程度は……」

「じゃあ老生体戦の時に槍が降る」

「なにそれいやだ」

「おいあんたら勝手に話を進めるな」

バーメリンが苛ついた様子でウォルターとサヴァリスを睨んだ。

「悪い悪い。じゃあどうしたンだよ」

「……行く方向が一緒だった、それだけ。じゃなきゃこんなくそと一緒に歩くか、キモい」

「……そう言う割に隣に並ン、」

「……そういう言い方ウザ、ウォルター消し飛ば」

「酷い」

バーメリンが手荒く錬金鋼を剣帯から引き抜き、銃を復元した。

「あはは、頑張つて」

「えげつないな、お前。つかお前のせいでもあるだろ」

「キミがああいう言い回しするからじゃないのかな？」

「うっせ」

「仲いいなー、お前ら」

「仲良くねえよ、お前の脳みそはやっぱり腐つてんだろ、ファイランディン」

ウォルターはバーメリンの射撃を避けながら、錬金鋼……黒鋼錬金鋼を抜き出してトロイアットに向かって剄技を放った。

トロイアットが軽く悪態をつきながらそれを避ける、続いてトロイアットも錬金鋼を抜いてサヴァリスに向かって剄技を放つ。

「ちよつと、なにしてくれるんです」

「いや、ここまで来たらお前に打つべきかと」

「違うだろ」

「ああもう、避けるな、うざい、死ぬ！ マジ死ぬ！ 焼かれてそのキモい髪までチリになれ」

「おいキモい毛ってなんだ、これ地毛だぞ。人権の侵害だ」

「お前に人権なんてあんの？」

「ファイランディン？ あとで真面目な話を3時間くらいしようか」

ウォルターは苛立たしげに剄を放ち、射撃の軌道を変えつつトロイアットに狙撃の剄を撃った。

しかしやはり避けられる。

加減している剄技ではさすがに天劍授受者、避けられる事は決まりのようだ。

「ノルネじゃねえけど、うざい」

「わたしじゃないけど、ってなんだ。うざいのはあんた。とつとつチリになれ」

「言葉遣い、言葉遣い」

ウォルターは上半身を仰け反らせて剄を避けるとそのまま地面を

蹴る。

「つか、こんなに大騒ぎしてたらアルモニス怒るンじゃねえの？」

「陛下なんて知るか」

「まあ陛下は陛下だから」

「いまはなかなか楽しいのできりつけられないです」

——だめだこいつら

ウォルターは遠い目でそう察して、結局はこの微妙な戦いに真面目になる。

「なんだこの四角関係！ 凄まじい！」

「お前がルツケンスに手を出さなければこうはならなかったんだが」

「そうですよねえ」

「耳障りだ、消えろこのくそ共！」

「耳障りはあんたらよ!!」

最終的にはアルシェイラの劉弾が飛んでくることになった。

「……で、なんだこれは」

「おーう……」

ウォルターは、何故か頭痛がする目覚めに呻いていた。グレンダンにて、女王に派手な剽弾で喧嘩仲裁されてから数日の現在、ここ、養殖湖近くにある合宿所に来ている。

昨日からここで合宿が始まり、ウォルターは第十七小隊のひとりとしてここに来ていた。

だが、何故か今日に限って頭痛がする。

———　　なんでだ……？

ウォルターは様々な理由を考えるが、それでも答えは出ない。

「……うー……」

久しぶりの頭痛にやや涙目になりつつ上半身を起こす。

———　　そういえば……

この「世界」に来た頃は、よく頭痛がしていたなと思う。

その理由は単純で、色々な事を行ったからだろう。

まあ具体的に言えば世界に適應する為に武芸者、念威操者としてのちからを発現させたり、時を操るちからを使えるようにしたりした為。

事実前者は必要なものだし、後者もウォルターには必要なものだ。

ただ、念威操者の能力は正直要らないかとも思っていた。

だが外へ出る事になった時に都市外用スーツを着ないウォルターは、レイフォンやニーナ達などといった都市外用スーツを着る他の武芸者達が付けるフェイススコープも付けない。

そうなれば自分で周りの把握が出来ない場合において、外で活動が出来ないということにもなりかねない。

その防止、という意味では得ておいて正解だったかとも思うのだが。

しかし、と更に思考を巡らせる。

ウォルターが得た、時を操るといううちからは実質的にはただ時空を

行き来するだけ、という方が言い回しとしてはあっている。

事情により時間を巻き戻して行く場合もあるので、その表現も当てはまる、というだけだ。

だが、いまウォルターが強く考える事はそんなことではない。

「…うー、水が欲しい…」

水、というよりもどっちかといえば、すつきりするもの。

いつその事レモン汁でもいい、などと投げやりを考えつつ、頭痛のする重たい身体を起こして、ウォルターは厨房の方へと向かっていった。

「……で、なんだこれは」

元々の頭痛に加えて、目の前で繰り広げられる奇怪な現状にウォルターは呆れた顔をしていた。

厨房の入り口で、ニーナとフェリどちらもが片手で調理道具を握り、引っ張り合ってどちらも譲らないという気迫の中静かに取り合いをしている。

そしてそれをシャーニツドがにやにやと見ているというのが現状。

そんな厨房の入り口を放って、厨房の中では和やかにレイフォンと今回の合宿の料理手伝いに来てくれるメイシェン・トリンデンが料理を進めている。

ウォルターの呟きにシャーニツドが笑いながらこちらに寄ってきた。

「いや、実はな。ピューラーの取り合いだよ」

「…見れば分かる」

ニーナとフェリの手に掴まれ、引き寄せられたり離されたりしている調理道具がピューラーだということは料理をするウォルターにはわかりきったことだ。

「…いまなかで2人が仲睦まじくじやがいの皮を剥いている……。大変そうだろう、だから手伝ってやりたいがしかし出来ない！ だがそこに現れる、そんな2人の味方、ピューラー！ …しかし、そこには大きな罠があった……！ …それはひとつしか無い、ということ

……それはつまり……、取り合いだ!!」

隣でいきなり熱弁し始めたシャーニツドに酷く冷めた視線をウォルターは向けた。

「……………要するに、手伝いたいけど技術がねえからピュラーを使おうと思うがひとつしか無いってことで、どっちも譲らねえからああなってる、と」

「…まあ、普通に言えばそうだなー」

「普通に言え、普通に」

ウォルターはやはり呆れた顔で言う、しかしシャーニツドは楽しそうに笑っているだけだった。

ともかく、と本来厨房に向かっていた目的を果たすためウォルターは2人とわらうシャーニツドを尻目に厨房に入る。

「…………水、くれないかな、水」

「おはよう御座います、ふてぶてしいですね朝から」

「…………喧嘩なら買うぞ、あとで」

頭が痛い事と、起きたばかりだからということが重なったため、いつもより二割増しくらい機嫌の悪いウォルターはレイフオンを静かに睨め付けた。

ほんの少しそれに怯えているメイシエンから水をもらい、コップに口をつけながら「外に2人居るぞ」と告げる。

まあ、厨房に入ったウォルターは、現在どういう状況かわかっていたのだけれど。

「ああ、それならもう終わりましたから」

驚愕の顔で固まっているんだろうなあ、とか思ったら、廊下からシャーニツドの笑い声が聞こえた。

朝食が終わった十七小隊は、軽い準備運動を済ませて練習に取り組むべく話を進めていた。

「今回は、試合形式で行う」

「試合形式? …人数足らねえンじゃねえの?」

ニーナの言葉に誰もが首を傾げた。

ウォルターの問いは最もだったが、ニーナは頭を振った。

「いいや、今回はウォルターとレイフォン、その他だ」

「僕と…ウォルター、ですか?」

「そうだ。さすがにひとり対というのは卑怯だろう」

「……そうかあ? オレとアルセイフって方がチートだと思っ
うんだが」

「じゃあどうする?」

レイフォンの隣にいたナルキが首を傾げた。

ふむ、と手を顎に当てて、ウォルターは「あ」と呟く。

「オレが引つ込む」

「他の案ないか」

「即スルー……。冗談言っただけなのに」

ウォルターは困った顔をして遠くを見た。

しかし他に有力な案は出ない。

——…正直ここまで来るとどれだけ影響力があるか分かる
よなあ

何気なくレイフォンは案を模索しながらしみじみと思った。

ウォルターが強いことはよく分かっているし、自分の実力も一応は
理解しているつもりだ。

だが、意外な所で困ることが出てくるとは思っていなかった。

「んー…。じゃあ……」

「他。他ないか」

「おいアントーク。オレ、まだなにも言っていないぞ」

「お前が言う事は五分五分で適当だ」

「いやそれ……。…まあいいや、こうしようぜ。オレ対他のヤツ。
そっちにアルセイフが居ることだし、ある程度は力量のバランス取れ
るンじゃねえの? どうだ?」

「……………そう、ですね……」

やや不満そうではあったがレイフォンはとりあえず納得したよう

で、そういう方針で進むことになった、のだが。

「待つてください」

ひとり異議を唱えたのはナルキだ。

ナルキは不満そうな顔をして、ウォルターを見た。

「4対1なんて、フェアじゃないですよ」

「えー…？ フェア、…だよなあ」

「……ですね。というよりウォルターが少し頭抜けていてすでにフェアじゃなくなってますけどね」

「い、いや……そうじゃなくて！ レイフォンも隊長さんたちも居てウォルター先輩だけを相手なんて、」

「まあまあ」

そんな熱くなったナルキをなだめたのはシャーニッドだった。

ウォルターは珍しい介入者に一瞬眼を丸くした。

「やれば分かるって」

「……そうですか……？」

「そうだよ、ナツキ。ウォルターには頭がち割る勢いで行っていいからね」

「えっ」

レイフォンの不吉な発言にさすがにウォルターが動揺した。

模擬小隊戦、開始

「……ほつ、と」

訓練はすぐにはじまった。

ウォルターは右から来たレイフォンの剣を錬金鋼で受け流して、上半身をひねりつつレイフォンの襟首を引き掴む、そのまま勢いに任せてレイフオンを投げ飛ばす。

一瞬息が詰まったのを見逃さず、容赦なく蹴りを放った。

「がっ」

後方にレイフオンが飛んだのを視認すると、左、正面からフラッグへと走るニーナ、ナルキの前に移動して剄を練る。

外力系剄を変化、夜叉。

錬金鋼に凝縮された剄を、そのまま振る勢いに乗せて霰弾として放つ技だ。

中距離、遠距離に適しているこの剄技は、事実あまり攻撃としては向いていない。

これは錬金鋼の性能が直に反映される技でもあり、錬金鋼はツエルニ製の為あまり威力は期待できない。

「つく……!」

「あまいな」

ウォルターがニーナとの間合いを詰める。左の鉄鞭は錬金鋼で、右の鉄鞭は素手で掴み、そのままニーナの手をひねらせて錬金鋼を手放させた。

「なにっ!?!」

ついでにナルキの錬金鋼を足で蹴り上げ、そのまま足でナルキの腕を絡めると全身を捻ってナルキの体勢を崩させる。

崩した勢いのまま、ニーナのまだ握られている錬金鋼に蹴りを放ち、衝撃で後方に飛ばす。

ナルキは体勢が崩れた事に伴い片膝をついた。

後方に接近、 1 射撃弾数、 5 到達まで、 2. 6

後方よりレイフオン・アルセイフ、到達まで、0.63

——2秒あればアルセイフは潰せるな

ウォルターは復活したレイフオンの鍊金鋼素手で掴む。

「なっ?!」

気付いていた事だけでなく、どちらかと言うと鍊金鋼を素手で掴んだことに驚いたらしい。

ツエルニの鍊金鋼は安全装置がかかっている為刃引きがされていない。棒状の鍊金鋼……ニーナの鉄鞭のような鍊金鋼を掴むならばいいが、ましてや剣を掴むとは思っていなかったようで、レイフオンの身体がこわばる。

だがそれに動じること無く、ウォルターはレイフオンに向かって鍊金鋼を突き出す。

「っ！」

「あまいぞ」

すんでのところで躲したレイフオンの鍊金鋼を捻り、そのまま手の握りを緩めるとウォルターは開いた手で掌底を放った。

「ぐっ」

それはレイフオンの顎を直撃し、レイフオンが後方に傾ぐ。

——あと、0.6秒……

ウォルターの眼は飛来する弾丸すら捉える。

鍊金鋼で弾丸を叩き落とし、そのうちのひとつを発射源に弾き返した。

「うわっ」

遠方からそんな声が聞こえて、狙いは確かだったとウォルターは確信する。

「あー、あまいねえ……、甘い……もの食べたい」

「訳がわかりません」

再び鍊金鋼を構えるレイフオンと対峙する。

ウォルターは呆れた顔をしてレイフオンと鏢迫り合いをする。

「……甘いつて、言ってるだろ?」

後方よりニーナ・アントーク さらに後方、ナルキ・ゲルニ

罅迫り合いから剄を発してレイフォンをはじくと、その余波で二人、そしてその後ろから追撃のため来ていたナルキまでも弾き飛ばす。

後方の2人にはそれだけで充分、ウォルターはレイフォンの足元に向けて左への蹴りを放つ、レイフォンは跳躍してそれを避ける。

だが、そこまでもウォルターの計算。そのまま右手で裏拳に剄を乗せて放つ。

外力系衝剄を変化、鋼拳・龍突。

活剄衝剄混合変化、金剛剄。

「あっ」

レイフォンが咄嗟に金剛剄を使った為、ウォルターの剄技が防がれる。

「ちよこぎいな」

レイフォンがにやりと口角をあげ、ウォルターはそれに対して楽しそうに笑みを浮かべる。

——ふうん、生意気

ウォルターが内心でそう呟き、レイフォンに向かって剄技を放つ。

外力系衝剄を変化、喰剣。

外力系衝剄の変化、閃断。

ウォルターの錬金鋼から放たれる斬線型の剄と、レイフォンの錬金鋼から放たれる斬線型の剄がぶつかり合い、喰い合う。

それが一瞬剄と剄の衝突という衝撃波を作り出し、2人を後方に引かせる。

——踏み込む……！

レイフォンがそう思い一步を踏み出そうとした瞬間、それは目の前にいた。

「もっらっ」

鮮烈な笑みを湛えて。

ウォルターが突き出した右腕はレイフォンの腹を捉え、レイフォンをさらに後方へと弾く。

ぱたぱたと服についた埃を払いつつ、ウォルターは呟く。

「んー、あれはあれで強いんだがねえ」
大きく伸びをしたウォルターは、再び向かってくるニーナとナルキの相手に専念した。

訓練が終わった頃には、ウォルター以外は動けない程疲労していた。

シャーニッドは後方援護しかしていなかったが、それでも定期的にウォルターの攻撃の餌食になっていた為、なにげに体力を削られていたらしい。

「ふー…。あ、そうだ、ウォルター」

「んー?」

「悪かった点と、良かった点を言ってくれないか?」

「え、めんどい」

さらりと流そうとしたらしく、ウォルターが変なところで真顔になって言う。しかしニーナに睨まれ、しようがないと言わんばかりに溜息をつけて各自にアドバイスを始めた。

そんな様子を横から見つめるナルキは、ウォルター・ルレイスフォーンという存在について、酷く傲慢なイメージを抱き始めていた。

——この人は、武芸に対してどう思っているんだろう?

ナルキにとって、武芸とは他の人を守るものであり、自らを高める存在であるといっているだろう。しかし、それが必ずしも誰にでも適応される訳ではないと分かっている。

だがそれでも、ウォルター・ルレイスフォーンという人物にとっての「武芸」とは、あまりにも軽すぎるような気がするのだ。

「えーっと、ゲルニは……、」

名前を呼ばれたことで、ナルキは考えをうちきった。

「足に剷が足りないかってとこ。まあ内力系活剷は割といい筋いってると思うし、意識すれば出来るようになると思うが……、まあ、そこはおいおいやっていけばいいだろう」

ウォルターはひとつあくびをして話を切った。

それを二ーナに咎められて苦笑する、そんなことはこの小隊では日常茶飯事のように、ナルキはその事に何処か納得のいかない気分になる。

もちろんナルキは自分の立場というものはわかりきっている。

自分が入ったばかりで小隊のことに対してまだあまり理解をすることができていない。

しかし、それでもどこかひっかかるのだ。だがそれは、きっとこの小隊の人間に言っても誰ひとり真面目にとりあつてはくれないのだろう、と何気なく思った。

何故ならウォルター・ルレイスフォーンという存在は、周りの許容によつて本人も気付かない程大きく擁護されている。

いいや、擁護、という言い方は正しくない。

周りの人間が、ウォルター・ルレイスフォーンという存在はそれもいいと、認めてしまっているのだ。

——だからだろうか

ウォルター・ルレイスフォーンが、あそこまで武芸に無関心であっても誰ひとりそれを問おうとしないのは。

胸にもやもやとしてはつきりしないものが居座り続けることに対して気持ちの悪さを感じながら、ナルキはもう一度十七小隊の面々を見つめた。

言葉の裏に

昼食はメイシエンがクッキーやサンドイッチを作ってくれていた
ので、それで充分事足りた。

甘党のウォルターは少し不服そうだったけれど。

午後になってからもほぼ午前と同じ事をして、攻守交代しつつ模擬
小隊戦をしていたものの、結局レイフォン達は一度もウォルターに勝
つことは出来なかった。

相手が複数であろうとあまりウォルターには関係の無いことだっ
たようだ。

夕焼けが空を染める頃、ようやく模擬小隊戦は終わり、個人訓練と
なった。

「ふー」

ウォルターが大きな息を吐く声が聞こえて、ナルキはそちらに目線
を向けた。

柔軟をしていたらしいウォルターは、ほんの少しだけ頬を汗で濡ら
して、それを袖で拭っていた。

そういえば今日は長袖だったのだとここでようやく気付いた。

いつもは割と肌に見える服——と言つても練習着なのだが——
を着ているのに、今日はどういう理由かわからないのだが長袖だっ
た。

再び運動を開始して、逆立ちをしてそのまま指二本で体重を支えて
いた。

—— 凄いな……、あの人は

ウォルターの近くで素振りをするレイフォンは頬や服に泥がつい
ていて、珍しく練習をしたと明らかに分かる状態というものだった。
すべてウォルターにされたのだけれど、ウォルターに目立つ汚れは
ない。

砂塵くらいは服に付いているだろうけれど、それこそ固まった汚れ
は見えないのだ。

——これが、実力の差なんだろうか……

きつとレイフォンが居なければ錬金鋼は抜かなかっただろう。ナルキとニーナだけでウォルターに立ち向かっている状況であれば、おそらく素手のみですべての攻撃を潰されていた。

「……………おーいしょっ」

「……………ウォルター、静かにしてください」

「えー。いやいや、いいじゃねえの、このくらいは。気合の声だよ」

「気合の声がだらしないです。その上気合が入っているように聞こえません」

「冷たいな」

まったくねえ、とウォルター溜息を吐いてニーナに話しかける。だがニーナは訓練に集中していても反応していなかった。

そんな様子を見ながらナルキは立ち上がって、打棒を取り出した。

「ごっそさんでした」

ウォルターがぱちんと手を合わせて呟いた。

すでに他のメンツは食事を終えており、シャーニッドとニーナが指揮官ゲームを始めていて、フェリは広間の隅のソファで本を読んでいる。

レイフォンは静かに沈黙を保ったまま、フェリの座っているソファとは違うソファに座って窓の外を静かに見つめている。

先程ナルキと何か話していたようだったが、特に気にもならず聞く気にならず放っておいた。

実際、動かなかったので特に何も無かったようだと本当に気にしなかったのだ。

「お粗末さまでした。口にあったみたいで良かった、です」

「いいや、全然。うまかったぜ。やっぱりトリンデンは料理上手だな」「あ、ありがとうございます…」

ウォルターが素直な意見を言うと、メイシエンは頬を赤らめて手を弄ばせていた。

食べ終わったことを確認し、背後に歩み寄ってきていたレイフォンに、ウォルターが振り返る。

「……………あの…、ウォルター」

「…あ？ どうした？」

「あの、少し……………」

レイフォンの静かな呼びにウォルターはやや眉を寄せて溜息を吐き、それでも先を歩くレイフォンの後ろをついていった。

来た場所は合宿所より少し遠く、外縁部側、うっそうと茂る樹林の近くまでやってきた。

話の内容はレイフォンの過去…………つまりは天劍授受者について、だった。

レイフォンはつらつらと、あるがままに淡々と話を続ける。

その様子にやや不安を覚えるウォルターは、誰にその話をすればいいのか分からず、ともかくルウに話しかける。

(なあ、ルウ…)

(ウォルター？ どうしたの)

(アルセイフさ…………、"なんとかなる"って思ってるんじゃないか?)

(んー…、そう、かもね。…まあでも、どうでもいいじゃないか)

(お前はな…………)

ウォルターは呆れた溜息を気付かれないように吐いた。レイフォンがメイシエン達に向かって、はつきりと言い放つ。

「僕は…………化け物だ」

レイフォンのそのセリフに、ウォルターが怪訝に眉を寄せる。が、それを気取られないようにそっぽを向いた。

「だから、僕を怖がったって、なにも悪くない」

「…………わ…………、わたし…………は…………」

メイシエンが言葉を紡ぐようと思いつつ紡げないようで、視線を泳がせながらなにか言葉を探している。

「……ウォルター先輩」

「……あ？ ……えつと、なに？」

ナルキがウォルターに声をかけてきた。

ウォルターは一瞬癡で睨みかけたのをこらえ、普通に返事を返す。

「…先輩もグレンダンに何か関係あるんですよね？」

「……そ。あるよ。オレが元ヴォルフシュティン…アルセイフの前だ。でもって、アルセイフを叩き潰した。…まあ、そのせいで嫌われたんだけどなー」

にこ、と嘘臭い虚構の笑みを浮かべた。

ナルキはその笑みの意図に気付いたらしく、それ以上ウォルターへの詮索をしなかった。

普段のレイフオンであれば、ウォルターの言葉に何か食って掛かる事はしたであろうが今日はそうではないらしく、なにも言わずに居た。

「……って言ったって別に何か気にしてる訳じゃ無いのね、実際オレは。何故かって言われても特にねえんだけど……、まあ、気にしたってどうしようもねえだろ」

あつけらかんと言って質問をはぐらかそうとしたウォルターだったが、ナルキはそれを許さない。

それという詮索をする気は無いらしいが、はぐらかしたことに關しては逃がすつもりはないらしい。

「あなたは、人の恩恵というものをわかっていますか？」

「………なんの話だ？」

「あなたが、周りの人ありきの人であるとわかっていますか？」

ナルキが鋭い眼差しでウォルターを見た。

「あなたがあなたとして受け止められているのは、ウォルター先輩を周りがそれとして認めてしまっているからですよ。それをわかっていますか？ どうしてそうなにも気に留めないんですか？」

「……んー…それはまあ、わかるけど……」

「じゃあなんです？」

「んーと、ねえ……気にもとめない訳じゃない。気に留める必要がな

いから放ってるだけだ」

ウォルターがりのまま言うのと、ナルキの中で更に怒りがまたよ
うで、眼が完全に怒った。

それでもウォルターは気にせず、肩を竦めて言葉を紡ぐ。

「…幼稚園児じゃねえんだ、言いたいことがあるやあ言つてこればい
い。それが取り合う価値のあるものなら話は聞くさ。けどな、オレは
そういう価値の無いモンは、捨てる」

肩を竦めたウォルターが、怒りの表情をあらわにするナルキに苦笑
する。

しかしナルキはそれでも納得がいけないという様子でウォルター
を見てきた。

——まあ、ゲルニの言いたいことも分かる

ウォルターは冷静にそう思う。

確かにウォルター・ルレイスフォーンという存在は、周りの理解
あつてこそだと思つている。

それがなければ……いや、ウォルター・ルレイスフォーンを
知っている”人間以外は、ウォルター・ルレイスフォーンとはただの
利己主義な人間だ。

それはウォルター自身自覚している。

だが、それでもこうしていなくては出来る事ができなくなつてしま
う。

取捨選択を間違えれば、ウォルターが何のためにここにいるのかわ
からなくなつてしまうのだ。

普通に”ただの学生”としてその場に居るならば、それがウォル
ターであってもレイフオンの事を気遣つたり、たとえくだらない事で
あつても「しようがない」と言いつつ手伝う事も出来る。

しかし、ウォルターは”学生”であつて、”ただの学生”ではない。
ツエルニに居るのは成り行き上、すべきことがあるから、そこに居
ることが必要であるから。

ただそれだけ。

だが、ウォルターも血も涙もない完全な冷徹人間ではない。

確かに他人に対して冷酷であったり、厳しいことをよく言っていたりしていることは理解している。

それでも、ウォルターも「一応は」人間なのだ。すべてを捨てる訳ではない。

基本は切り捨ててしまうけれど、誰かの為になりたいと、考えない訳ではない。

——あの頃があったからな

ある意味他人の為であったけれど、それでいて誰かの命を奪っていた、あの頃。

隻眼の死神と、漆黒の少女。

その2人と活動していた時のこと。

あの頃は本当に、誰かを助ける事は誰かの命を奪うことと同義と言っても過言ではなかった。

抗争が激しかったということもあるが、それでもそれと言い切れない部分が多かった事は否めない。

だから、今だけなのだ。

純粹に誰かを助ける事が出来るというのは。

ただ、誰かの為に頑張っても誰も傷つかないでいてくれるのは。そんな子供みたいなことに、全力をかけられるのは。

だから……

「……ただ、勘違いして欲しくないのは……」

ウォルターがそう言葉を紡ごうとした時。

地面が揺れた。

揺れたと感じるのと同時に、身体が傾いだ。

自らが出した新たな // 答え //

「な……っ?!」

ウォルターは眼を瞠った。

外縁部とは言え仮にもここは自立型移動都市の中だ。

それなのに、何故か崩落を始める。

——— 脆くなっていた……? いや、それにしては……

崩落は的確にウォルター達が居る場所のみで起こっている。崩落の限界はすでに決まっっていて、その範囲は自然崩落にしては狭すぎた。

「どういうことだ……?!」

ウォルターがそう眼を逸らした一瞬に、レイフォンが横を通り抜け、落下するメイシエンへと向かう。

レイフォンがメイシエンを抱えた瞬間、足場が消失した。重力に従い下降する中、レイフォンがナルキの名を呼ぶ、しかし手は届かない。レイフォンは届かないと気付いていた瞬間、ウォルターに視線を向けていた。

「ウォルター……!」

遠い声が、ウォルターを呼んだ。

「アルセイフ、トリンデン!!」

呼び、手を伸ばす。しかし当たり前ながら手は届かない。

瓦礫に囲まれたウォルターは、強く舌打ちをした。

(ルウ!)

咄嗟に呼びかけた。

ルウの答は応と来る。

即座に領域が展開され、あたりの瓦礫を消し去っていく。

——— もう、つべこべ考えている暇は無い!

ウォルターは瓦礫が消えた事により開いた穴に飛び込む、そしてそのまま一気に下降した。

随分と先に落ちたか、レイフォンとメイシエンの姿を見つける事は出来ない。

ウォルターはらしく無い焦りに急かされる。

——くっそ……!!

ウォルターは金の腕輪を叩いて刀を復元すると、目の前や前方、両サイドから飛び交う石つぶて、鞭のようにしなる配線コードを切り刻み進む。

さばききれないものはすべてルウが「拒絶」していく。

そして数分落ちた頃、ようやくウォルターの視界がレイフォンとメイシエンを捉えた。

「アルセイフ、トリンデン！ 無事か？」

後ろからレイフォンの服を掴んで引き寄せる。

レイフォンはしっかりとメイシエンを抱えて守っていたものの意識がやや朦朧としていて、どうしたのかと見ると額から血が流れていた。

どこかでぶつけたのだらうと思うのだが、ウォルターはそれ以上に深刻な状況に気がつく。

——こいつ……!!

「あ、ウォルター、先輩……!!」

「……っち、トリンデン、舌を噛むと危ないから口と、ついでに眼も閉じてろ！」

ウォルターは刀を元に戻し、即座にレイフォンを抱え直してメイシエンもあいた腕で抱える。

空気を肺にとりこんで、そして息を止める。そして足に剄を収束、そして、自身と同じように下降していく瓦礫を踏みつけ、蹴りだす。

「……………!!」

メイシエンが眼を睜り、眼をつむった。

こんな速度で移動するのは当たり前前に初めてだろう。

武芸者でも、普通は一般人を抱えてこの速度で移動することはな

い。

何故ならばこの速度で行動すれば普通の人間は死んでしまうからだ。

ただ、ウォルターはルウの領域によりその空気抵抗……身体に掛かる負荷、圧力をすべて「拒絶」している。ウォルターを中心として半径3メートルは完全に「拒絶」されているのだ。

その為、その内部に居るメイシエンに負荷がかかることは絶対に無い。

それは、この領域内という「世界」の決まりだ。

——このまま、行く！

目の前に開いた裂け目……通れるか通れないかというその小さな亀裂。

メイシエンは眼を閉じている。

レイフォンに関しては特に現在注意する必要もない。ならば、行ける。

ウォルターは2人を抱え直して刀を復元する。

——壊せ

ウォルターがただ、上から下へ刀を振り下ろす。ただ、それだけの行動。

まるでそれは一瞬を切り取ったかのように、静謐な動きのみがその場に残り、ウォルターはそこへと突き進む。

瞬間、亀裂が「砕ける」。

ウォルターの「己に仇為すものすべてを破壊する」という異界法則。それは、「ウォルターという存在」の「世界」が持つ「完全なる法則」が影響を及ぼした結果だ。

雨のように降り注ぐ瓦礫の群を抜けきり、一旦砂地に着地する。

メイシエンは少し身体をこわばらせていまだ眼をつむったまま。レイフォンは虚ろにこちらを見ているが、やはり動けるような気配は無い。

それを少し心配しながら、ウォルターは体勢を低くして砂地を進む。目の前に突き刺さる瓦礫をすり抜けながら進むと、少し先に穴が

見えた。

「行くか」

上方から降る瓦礫を避け、身を翻して穴に滑りこむ。

地下の機関部の端らしき場所であった穴の中で、ウォルターはレイフォンとメイシエンを下ろした。地面に足がついた事でメイシエンも少し落ち着いたようで、ウォルターは静かに声をかける。

「平気か？」

「は、はい…。なん、とか」

「…少し眼でも瞑つとけ。ここに居るから」

メイシエンはほんの少しだけ眼を逸らして、背を壁に預けてこわごわと眼を閉じた、片手はウォルターの服の裾を掴んだまま。

それに少し苦笑したウォルターは、地面に下ろしたレイフォンの額に触れる。

—— やっぱり血が足りてないか…。それにこいつ…

背中の中、おそらくそれに異常がある。

抱えた時からわかっていたことだった。

背に手を回した瞬間、それこそ僅かな変化ではあつたけれど顔を歪ませていたのをウォルターは見ていた。

(しようがねえな)

(待って、ウォルター)

(ルウ?)

自分が行おうとしたことに対して制止がかかり、ウォルターは首を傾げた。

(「願い」を使うつもり? だめだよ、そんな事。レイフォン・アルセイフだって子供じゃないんだし、自分で治せるよ)

ルウの言葉にウォルターは沈黙を返す。

その沈黙を戸惑いととつたのか、ルウは厳しい声音で言う。

(ウォルター、行き過ぎはだめだよ。干渉は最小限に、そうでしょ。それにせっかくウォルターだけが使えることを、他人の為に使うなんて)

ルウの言葉にウォルターは一瞬思いとどまる。

現在数少ない現存する異民——といってもこのレギオス世界に
“形を持って存在して居る”異民は闇と少女、ウォルターそしてルウ
の4人だ——の中でもウォルターだけが使える、「願いを叶える」と
いう異界法則。

それは上限付きであり、もうそれは残り少ない。

もとよりウォルターは、この世界に来た時点で2つ消費している。

これはもう残りが少なく、厳選した願いのみに使うべき。

それはよくよくウォルターもわかっている。

分かっているのだ。

だが……

——それで、いいのか

ウォルターは自らの両手を見た。

かねてよりウォルターは“人を救う”なんて事はして来なかった。

間接的に救うことはあっても、それでも“救った”と言い切れる事は
していない。

別にいまさら、かつての行いを払拭する為に誰かを救いたいなどと
は微塵も思っていないが、それでもひっかかる。

——オレは、どうするべきなんだろうか

きつと、迷わず救う。

それが“正しい筈”の判断だ。だが、方法が方法である事と、レイ
フォンももう転んで泣き叫ぶような子供ではないのだ、自分の怪我は
自分の責任、そういう事であるとわかりきっている。

では、何故迷っているのか。

時間がないとわかりつつ、ウォルターは自らに問いを落とす。

いままでの自らの行い

世界の成り立ち

柄にもない約束

変わらない日々

変わる世界

変わる自分自身

変化を求める世界

変化を求めめる精神

守る意志を持つ若き命達

—— ああ、そうか……、

ニーナ達、十七小队。

ツエルニを守るべく懸命に走る若き命

そんな命に歩み寄りを見せる自分の精神

らしくもない問い、思い、思考、そしてすべての根源である約束。

—— ……そうか、そういうことだったのか

“ただの人間”、そんな平凡なものに

ウォルターは自嘲気味に笑みを浮かべ、レイフォンの胸の上で手を重ねた。

(……ウォルター、本気なの?)

(ああ。どうしてしようと思ったのか、分かったから)

(………そう。別に、ウォルターの決めたことに反論はしないよ。だけど、やっぱり僕は、レイフォン・アルセイフ……うん、他のヤツらは嫌いだな)

(ルウ?)

ウォルターは異界法則を使用する準備をしながらルウに問うた。

(…なんでも守っている気になって、結局ウォルターに守られてる

……、これじゃウォルターの負担が増えるばかりじゃないか)

(…ああ、そういう事。平気だよ、むかしからこうだっただろう)

(だから余計に納得したくないんだよ)

(仕方ないさ。オレもわかりきったことだ)

ルウは少し不満そうな顔で、首を傾げた。

そんなルウに、やはりウォルターは自嘲気味な笑みで異界法則を発動した。

(…こいつらとオレにできることには差がありすぎる。…だけど、きつとこれは……)

光が、レイフォンに収束した。

一瞬の眩しさに驚いたらしいメイシエンが眼を開き、ウォルターにこわごわと問うてきた。

「あ、あの……」

「……平気だ。なにも無いよ」

「そう、ですか…」

「ああ。とりあえず、移動しよう。ここじゃ見つけてもらってもどうしようもない」

ウォルターはメイシエンに手を差し出しつつレイフォンを抱える。メイシエンの片手をとるとウォルターは歩き出した。

「……………あの、レイと…………、レイフォンは…………」

「大丈夫だよ。ちよつと気を失ってるだけ。…………アルセイフにおおきな怪我はない」

「そうですか、良かった…………」

(…………嘘つき)

“中”で小さくルウが呟いた。

ウォルターはその言葉を無視してメイシエンに目をやる。メイシエンが安堵した様子で息を吐いていた。手を握っていたこわばりが解けたのを感じ、ウォルターは笑みを浮かべる。

「……………」

「…………ああ、もしかしてさっきの話の続き？」

メイシエンが何処か探るような目線を向けてきていた為ウォルターが問う。

静かに頷いたメイシエンに、ウォルターは口を開いた。

「……と……確か『勘違いしてほしくないのは』まで話したんだっけ？

……勘違いして欲しくないのは、オレはお前らの事はいままで会ったヤツらよりは大事にしてるつもりだ。……オレはどうやったらいいのかよく分かんないから、ゲルニとか、あんま関わらないヤツにはあまりわかってもらえないってこた分かってる」

「……………ウォルター先輩」

「だけど、それでもお前ら……………このツエルニにはそれなりに思い入れもある。だから、危ない眼にあつてるヤツをそうそう放つて置く気もない。……まあそりゃ、オレだって選り好みはするかもだけど……、少なくとも、十七小隊とか、お前らとかは助けるつもりだ。…………えつと、その…………、なんて言やぁいいのかな…………」

ウォルターは、どう言えばメイシエンに的確に伝わるのかと思考を巡らせ、首をひねる。

そんなウォルターに、メイシエンはここが暗く怖いと感じる場所であるとほんの少し忘れ、くすりと小さく笑いをこぼした。

逆にウォルターは更に首を傾げ、メイシエンに困ったように聞く。

「……なんかオレ、変な事言ったか？」

「……いえ、ウォルター先輩のイメージ、思っていたのと違ったので」

「オレのイメージ？」

「もつと厳しくて、怖いようなイメージがあつて、……その……」

メイシエンが口ごもった。

口ごもるメイシエンにウォルターはほんの少しだけ肩を竦め、続きを言うよう促す。

「……人を突き放しているような感じがしていました。……えっと、自分の世界に踏み入らせないような、感じ……で」

メイシエンの言葉にウォルターは確かにな、と内心頷いた。

簡単に関わってこないよう、そういう対応をしているというのもあるが、七割程はそういう性格だからだ。

「でも、本当は凄く優しい人ですね」

「……優しくなんてねえさ、オレは」

「優しいですよ。……だって、わたしの作った料理を褒めてくれました。それに、手、握ってくれているから」

「……………」

メイシエンなりの気を紛らわせようという配慮だったようだ。

要らない気遣いをさせてしまったな、とウォルターは自らに苦笑した。

（……ウォルター）

（ん？）

（さっきの話だけど）

（ああ、うん、なんだっけ）

歩きながらルウが声をかけてきた、ウォルターはなるべく表情に出ないようルウと会話する。

(さっきの、「差がありすぎる、だけどきつとこれは」のつづき、だよ)
(ああ、それね。…きつとき、これは埋まらなくていい差なんだよ)

ウォルターが納得して、そうルウに「言った」。

それでもルウは納得がいかないという雰囲気で眉を寄せた。

(また、どうして? 埋まっていた方が、ウォルターにとつては楽でしょ?)

(楽か、と言われれば、そうでもないんだよな、これが)

(どういうこと?)

(オレ以上のヤツが現れると、いざそいつが敵になった時に殺せない)

(…まあ、もつともらしいといえばそうだけど。…でも、例えばレイフォン・アルセイフが敵になることはそれこそ無いと思うんだけど)
(言いきれはしない。なによりアルセイフはオレを嫌ってる)

(それ、そう言うのはウォルターとニーナ・アントークだけだと思うよ)

ウォルターはルウの言葉に内心で首を傾げた。

だがそこに関してはもうなにも言う気は無いらしく、話を切り替えてルウはウォルターに鋭い声言で言ってきた。

(…あのさ、嘘つくのやめようよ)

(嘘じゃない。オレは言っただろ? “アルセイフに大きな怪我はねえ”って)

(うん、そだね。…レイフォン・アルセイフには、ね)

(そういうなって。…せつかく堪えてんのに)

(僕が一旦でも消そうか?)

(いや、いい。別に…な。死なないし)

(…やっぱり、嫌いだ)

唇を噛み締め、ルウが低くそう呟いた。

(…ルウ…)

(そうやって何でもかんでも背負い込むウォルターも、それに気づかずのんきにしてるヤツらも。…言わないからわからないってのはあるかもしれないけど…。…やっぱり、殺したい。ふざけるなって

感じ)

(…お前がオレを思ってくれてるのはわかってるから。頼むから実行するなよ)

ルウの不機嫌な声にウォルターは苦笑して言葉を返す。

(でもオレはそうは思わないな。実行してるのがオレだからつてもあるかもだけど)

(嘘つき)

(嘘じゃないさ。ただ、人間適材適所があるってことだよ)

(…僕もだけど、ウォルター人間じゃないもん)

(揚げ足をとらない。それとあつさり言ってくれるな、結構ぐさつとくる)

(今更じゃないか。わかってるでしょ?)

(わかってるって、だからだろ?)

はあ、と小さく溜息を吐き、ウォルターは視界に闇を映す。

(ところで、結局なにが分かったの? さつき)

(ん? ………………悪い、なんの話だ?)

(差がありすぎる、の前にわかったって言ったこと。どうしてしようと思っただのかって話)

(ん……、ああ……それか)

ルウの問いに答えようとしたと同時に、ニーナ、シャーニツドが姿を現した。

「ウォルター、メイシエン、レイフォン、無事か?!」

「ああ、アントーク。平気だ。ふたりとも無事だよ」

「お前は平気なのか?」

ニーナが訝しげにウォルターの顔を見た。

「へいきだよ、へいき」

そういうと、一旦は安心した様子でニーナがメイシエンの方を気にかけて始める。

少し間が出来たウォルターはルウに声をかけた。

(…ルウ、さつきの…、分かった事っていうのは……)

(ウォルター? ちよつと、どうしたの?)

“オレたち”を示す定義

ウォルター・ルレイスフォーンという存在は、“創られた存在”だ。オーロラ粒子、そしてゼロ領域による人体の変質、異民への変化……それを除いても、ウォルター・ルレイスフォーンは“人間”ではない。

細胞、遺伝子レベルでほぼ人間と同じ様に創られてはいるが、それでも人間ではない。

かつてウォルター・ルレイスフォーンが行動していた世界を創りあげた存在……錬金術師、アルケミストにより創られた。

それは、“弟”と定義されているルウ・ルレイスフォーンも同じ事だ。

そしてルウにとって“兄”であると定義されているウォルター・ルレイスフォーン。

お互いにその事実を知らながら、異民となつて遺伝子すら変貌しきつた中でも、お互いはお互いを“兄弟”であると認め合い、決めている。

2人は、人工的に創られた存在で、人工的に創られた世界で生きていた存在だった。

その事実を、決して変わることのない事なのだ。

それを知ったのはもうずっとずっと昔のこと。

いつだったか忘れてしまうような、ずっと幼い頃に気付いた。

気付いた理由すらも忘れてしまったいまでは、ただ自身が“人間”

とはかけ離れた存在であるということのみが、事実としていつもつきつけられている。

この世界……レギオスの世界。

この世界もまた、創られた世界、そして、守るべきものを有する世界。

——…世界。人間。異民。……姿かたちが違えど、それはすべて同じ

根底を違うものとして定義され創られた存在であるウォルターとは違う。

このツエルニに居る、ウォルターと同じ位置に立つ者達、レイフォン、ニーナ、フェリ、シャーニッド、グレンダンの女王アルシエイラ、天劍授受者達。

遺伝子地図を使って創られた人体を持つ “この世界の人間達” でさえ、ウォルターとは完全に違う存在とされてしまう。

———なら、オレは何処へ行く。何処へ辿り着く

あの男の約束にとらわれ、ここで律儀にこなす “ウォルター・ルレイスフオーン” は、約束が果てれば何処へ行く？

最後にたどり着き、最後に見るものは……

———ふん………

くだらないな、と “ウォルター・ルレイスフオーン” は頭を振った。そんなもの、誰も知り得る筈が無い。

はつきりしていることは、ウォルター・ルレイスフオーンは自らを肯定し続けるということだけだ。

自らを否定しても、なにも成す事は出来ない。

———ならば、オレがすべきことはたった一つだ

自分自身でさえ知り得ない事、それは未来。

過去へは行き来出来る自分が、唯一行くことを許されない時間、未来。

知ることができなくても、切り開くことは出来る。

「……やるしかないよな。…やるしか、ないんだ」

それが自らに与えられ、自ら与えた使命。

やると決めたのは、最後に決断を下したのは自らだ。

ならば、その責任はとる。とってみせる。

“ウォルター・ルレイスフオーン” は口角をあげ、自らの上方から降り注ぐ光に眼を向けた。

———っは

呆れた笑いを内心でこぼして、ウォルター・ルレイスフオーンは現実を見据えるべく、“この瞳” を閉じた。

さあ、
“夢”
の目覚めだ

病院にて

「すみません、ウォルター」

「……………ああん？」

病院のある一室。

「崩落事故により」怪我を負ったウォルターはレイフォンと二人もよく世話になっていている病院に担ぎ込まれていた。

眼を覚ました時にいきなり見えた顔がレイフォンだったことに数秒驚いていたウォルターだったが、それでも暗い表情にウォルターは首をかしげる。

実際ウォルターの怪我は手術を必要とするらしく、しばらく無茶な運動や武芸は禁止と言われた上、現在は点滴が腕に刺さっており、腕を動かすことは出来ない。

だが、それでも目の前でしゅん、と俯く鳶色の髪の少年……レイフォンを見、ウォルターは腕を伸ばそうとして動かせない腕にやや苛立ちを覚えながら軽く眉を寄せた。

「……………すみませ、」

「……………いい加減しつこいぞ」

「…う、すみません…」

「え？ ああ、いや、怒ってんじゃねえんだが…」

ウォルターは珍しくバツが悪そうな顔をして、僅かに動かすことのできる方の腕で頭を搔く。

腕をあげた時痛みがはしかったのか、顔を薄らかにしかめて。

「気にすんな、オレが勝手にやったことだ。お前に非はない」

「……………でも…」

「でも、も、それでも、もねえぞ。いい、つつたらいんだ」

「……………だ、だからって」

「アルセイフ」

「……………ツ、…う…」

鋭い眼差しでウォルターがレイフォンを見た。

「すごすごと、不服そうにレイフォンが口を嚙む。

「……痛みとか、ありますか？」

「…聞かれると、痛い」

「す、すみません！」

「ああ、いや、思い出し痛み」

「……………話中だが、いいか？」

「あ、ティアリス」

部屋の扉をノックして入ってきた医師の名前を呼び、レイフォンに向けていた視線をウォルターは向けた。

医師、ティアリスは手にウォルターの診察カルテを持ち、ぴらぴらとそれをめくりつつ言葉を紡ぐ。

「まったく……お前もお前でここの使用回数が多いな」

「いやあ、わざとじゃあない」

「わざとだったらここから放り出してる」

「なにそれこわい」

「……ともかくだ。お前の怪我は右肩、背中 of 裂傷。まったく、しっかりとしろよ。お前のせいでお前の人体図全部揃っちゃっただろうが」

「っは、なんだっけ、両腕両足はもうあるもんな？　今回で胴体と頭コンプリートしちゃったな」

「笑うところじゃない」

ティアリスに咎められウォルターは笑みを苦笑に変える。レイフォンも少し眉を寄せてウォルターを見ていた。

「まったく…、まあそれはいいとして、だ。今回は回復に少し時間がかかるぞ。背骨の一部が割れて脊髄に侵入している」

「あら、じゃあ取り除くのか。それって面倒くさくないか？」

「まあな。気分的には脊髄総取り替えのほうが楽だ。だが、それじゃありハビリが長い。お前はいますぐにでも戦いたいんだろう」

「人を戦闘狂みたいに言うな」

ウォルターが肩を竦めつつ苦笑した、ティアリスは「どうだか」と小さく呟いた。

「まあ、お前の戦闘狂説は置いておいて…」

「置いておくな。そこ大事」

「いまの状況にはかなわんな。ともかくだ。今度、対抗戦があるだろう、お前。それは出場禁止。医師として許可でらん」

「あらー。…まあまあ、大丈夫、オレが居なくてもアルセイフもアントークも居る。十七小隊はへいきだな」

へらり、と笑ってウォルターが言うのと、レイフオンが何処か驚いた様子でウォルターを見た。

「……なんだよ、その反応」

「…いえ、その……」

「ンだ、お前のことだから『そんな事当たり前です』とか言われると思っただ」

レイフオンは気まずいという顔をしてウォルターから眼を逸らした。

「……アルセイフ?」

「…いえ、すみません…。気にしないでください」

明らかに様子のおかしいレイフオンを止めようとするが、レイフオンは呼びかけに応じず部屋を出て行ってしまう。

ウォルターが首を傾げてティアリスに声をかけた。

「……なあ、オレなんか悪いことしたっけ」

「いつもしてるだろ」

「酷い」

「酷くない。元々お前が怪我しなければよかつただらう」

「……そういえば今日って…」

「お前が担ぎ込まれてから2日…ほぼ3日か、そんなくらい経ってる。1日半寝てたからな。……その間ずっといたぞ、あいつ」

「えっ」

ティアリスの言葉にウォルターがきよんとした顔を向けた。

その顔に対してティアリスは「なに変な顔してるんだ」と頭を軽く叩かれる。

「痛い、痛いー。酷い。オレ怪我人なのに」

「そうだな。患者は早く元気になることが仕事だな」

「それを邪魔する医師ってどうよ」

「邪魔はしとらん。怪我してないところを叩いたからな」

「酷い。こめかみも痛いのに」

「知らん」

ウォルターはティアリスに肩を竦め、苦笑する。

ともかくと溜息を吐いたティアリスはもう一度注意を促すと、部屋から去っていった。

急に誰も居なくなつてがらんとしてしまった病室で何処か空虚な感覚に襲われたが、その感覚を紛らわすように溜息を吐いた。

1週間が経った。

1週間も経てば、はじめの3日程放課後毎日来ていたレイフォンだったが、さすがに来なくなった。

暇を紛らわすにはまあいい話し相手だったのだが、それでもテンションが低いレイフォンの相手はさすがにしがたいということが今回のことでわかった。

ので、ちよつと来てくれないっていうのがありがたいような、複雑なような、微妙な心境。

———どうしてくれよう、本当……

ウォルターは病室ベッドに寝そべり、枕に頭を沈める。

さすがにもう点滴は外されたが、それでも背骨の治療がまだの為、病室のベッドに縛り付けられているということだ。

はじめあたりにちよくちよく抜けだそうかとしたりした為現在は自動販売機への買い出しまでもにティアリスが付いて来るようになってしまった。

その度にウォルターは

「…お前暇なの?」

「お前のせいで暇じゃない」

とても素敵な笑顔で言い返される。

ウォルターはふう、と溜息を吐く。

「よし、自動販売機に行こう」

ウォルターは近くの車椅子を引き寄せて乗り込んだ。

一応歩く事は出来るのだが、背骨の怪我のせいでいちいち歩く度に背中に激痛が走るうえ、歩くなどこれまたティアリスに言われた。

これだけティアリスが、ティアリスが、というけれど、まあ彼が主治医なのだから彼の名前が出てくるのも当たり前ということだ。

「あー、なに飲もう」

「おや、ウォルター君」

「あ？ ……ああ、生徒会長さん」

「少し、話があるんだが、いまいいかな」

「……いいですけど」

「がこん、とウォルターは適当に缶ジュースを選ぶとプルタブを開けた。

お前はそう言うけれど

「へえ、面白いもん持ってるさ〜」

複合型錬金鋼の調整中、ハイアがとことこやってきた。

レイフオンにキリクが複合型錬金鋼を渡して居るところを後ろで見っていたウォルターは、やってきたハイアを見た。

「ああ、ライア。てかこら、勝手に見てたらだめだ」

「えー。気になるさー」

「……機密事項だ、失せろ」

キリクが鋭い眼差しでハイアを睨んだ為、これ以上キリクの機嫌が悪くならない内にウォルターがハイアをキリク達から離す。

「ほーら、オレとあっち行こうぜ」

「ちよつ、そんなハードに動いて大丈夫なんさ?」

ハイアが慌ててウォルターに言ってくる。

怪我のことを言っているのだと気付き、ウォルターは少し驚いた顔でハイアを見た。

「なんだ、知ってたのか」

「知ってるさ。だからそんなハードに動いて大丈夫かさ?」

「いや、これからもっとハードに動くからな? だいたい、お前に心配される程、か弱いつもりはないんだがねえ……」

ウォルターは肩を竦め、ハイアを連れ出した。

少し離れた場所にいたサリンバン教導傭兵団の団員たち……ミユンファとフェルマウスを見つけたウォルターは、そちらにハイアの襟首をがっしりと掴んで差し出した。

「おい、ちゃんとこの犬見とけ」

「ああ、すみませんヴォルフシュティン……いえ、ウォルター殿。お久しぶりですね。……うちの犬が迷惑を」

「本当だぜー。盛りの強い犬はきつちり首輪つけておいてくれ」
「すみません」

「おーい、フェルマウスもウォルターも二人してオレを犬扱いするのやめるさあ」

フェルマウスのノリにウォルターはくつくつと笑いつつ、ハイアを離した。

2人に犬扱いされ、笑われたハイアは何処かバツが悪いという顔でコートを直しつつ悪態をつく。

「酷いさ、ウォルター」

「はいはいごめんねっと」

「謝りに心がこもってないさあ!」

「えッ、オレの精一杯の謝罪だったのに」

「すんまつせんしたああ」

ウォルターはハイアに向かって驚愕したような表情をむけてぐすぐすと泣く振りをした。

意外すぎるウォルターの反応にハイアが狼狽えた様子で両手を顔の前で合わせて謝罪する。

それを面白がるウォルターはハイアを指してけらけらと笑っていた。

「ハイアちゃん……」

「……ミュンファ、呆れた顔はやめるさ。…おれっちはウォルターにだけは本気で嫌われたくない」

「真顔かよ」

「真顔さ。真面目さ。いたってマジ、」

「分かった、分かった。頼むから詰め寄ってくんのやめてくれね」

真顔でウォルターにハイアは詰め寄る、ウォルターはじりじりと詰め寄られる為後ろに後退するしかない。

途中でどん、と後ろにいた誰かにぶつかる。

肩に手が置かれ、ハイアの表情が苛立たしげなものに変わった為ウォルターは後ろに居るのはレイフォンだろうと見当をつける。

「ハイア、ウォルターを困らせるのはやめてくれないかな」

「…お前ほどじゃないさー」

ほら、当たりだ。

この2人少し前の廃貴族の件があつてから更に仲が悪くなったような気がする。顔を合わせれば言い合い開始のゴングがなっているような気がしないでもない。

「……聞いたさ。今回ウォルターが怪我した原因って、お前なんだって？ 呆れるさ」

「……………なにが言いたい」

レイフオンは鋭い目つきでハイアを見た。

それでいてウォルターの肩を掴む手は緩めずレイフオンは居る。

そんなレイフオンに対抗するようにハイアもレイフオンを睨め付け、ウォルターの手をにぎる。

ハイアに手を握られ、レイフオンに肩を掴まれ、ウォルターは頬を引きつらせた。

「……お前ら、オレは男に囲まれて嬉しいタイプの子じゃないぞ」

「そう言わないささ、いいじゃないさ、後ろは災いのもとだけど前はいい男ささ」

「失礼な。それこそ前の方がそうなんじゃないの？ なにせ、誰でも彼でも見境無く喧嘩売るんだからね」

「……………」

「……だからお前ら、オレを挟んで喧嘩をするんじゃない」

なんでお前らそんなに仲悪いの。その前になんでそんなにオレ挟んで喧嘩しちゃうの。

なんでオレ挟むと喧嘩しからないの。いつも喧嘩すんだからオレ挟んだ時くらい仲良くしようよ。

……いや、オレ引率？ 的なの？ いや、どっちかって言うところ、力低い方だけども。

未だいがみ合いを続けるレイフオンとハイアなんとか引き離し、ウォルターは溜息を吐いた。

「いい加減にしろ、お前ら。……それ以上がみ合いしていると、」

「……………」

「二度と口聞いてやらん」
『ごめんなさい』

腕を組んでしらつとした顔で言い放つと、2人が即行で離れて腰を折った。

—— お前ら必死すぎだろ…

ウォルターはどちらかと言うと逆に驚いた顔で2人を見た。

それから溜息を吐いてカリアンに渡された、探査機から持ち帰られた写真を見る。

どういう動きをするんだっけと考えなおしていると、ハイアがよきつとウォルターの持つていた写真を覗きこんでくる。

「あ、ウォルター、オレたちは前情報としては十二体の汚染獣のうち、六体っていう契約さ」

「知ってる。それは聞いた。…となると、残りの六体をオレとアルセイフが三体ずつ、つてところか」

「…そう、ですね。…あのウォルター、やっぱりウォルターは…痛ッ?!」

レイフオンなりの気遣いなのだろう、とはウォルターも分かっている。

だがそれでもそれを言い切らせるつもりも無く、ウォルターが指でレイフオンの額をはじいた。

「くどい。やるつつつたらやるんだよ、オレは」

「…つちよつと…、言ったのはまだ1回目ですよ!」

「まだつてことは言う気なんだろうが。しかも顔がうるさい」

「…顔がうるさいって、失礼です」

「だからなんとも言わせんじゃねえぞ、ガキが。やるつつつたらやんだよ」

ウォルターはレイフオンを睨め付け、強制的に黙らせる。ハイアがウォルターに声をかけた。

「けどウォルターも元気さね。手術は終わったんかさ?」

「…おう」

「そつか。じゃあ割と安心したさ。けど無茶はだめさ」

「はいはい。了解してます」

ウォルターが苦笑交じりに頭を搔く。

それでもハイアは信憑性が無いとでもいいだけに頬をふくらませる。

「ハイア、いつまでそうしているつもりだ？」

「フェルマウス。……さっきわざとノリに乗ったヤツに言われたくないさ」

「そーいやあ挨拶が遅れてたな。久しぶり」

「ああ、お久しぶりです」

ウォルターはフェルマウスに挨拶した。

その後レイフォンがフェルマウスに話しかけられ、少し話を続けている間ウォルターはハイアに声をかけられていた。

「ウォルター、どうするんさ？」

「なにがだ？」

「いやあ、本当に行くのかさ？ その体で」

「……………お前もまだ、言うか……………」

「……………ごめんなさいさ！ けどやっぱり…、心配なんさ……………」

「……………あのね……………」

ウォルターは困った顔をして肩を竦める、それでいてしよぼんと肩を落としているハイアの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「平気だよ、何度も言うけど。そんなに心配されなくてもオレは平気だって。オレがそういうことに強いのは知ってるだろ？」

「…だから余計心配なんさ。ウォルターは周りに人居るといつも無茶するから…」

「……………人居ると無茶するって、オレが頑張り屋さんみたいじゃん、やめろよそういう事言うの」

ウォルターはハイアの言葉に肩を竦めた。

ハイアが真顔で自分の頭を撫でていたウォルターの手を掴んだ。いきなり掴まれたウォルターはきよんとした顔でハイアの顔を見る。

「…そうやってはぐらかすのはやめるさ。おれっちは、本気で心配してるんさ」

「……ライア？」

「だから、そうやって強がるのはやめて欲しいさ」

ハイアが眉を寄せつつ、ウォルターに静かな声音で言った。

キミにそう言ってもらえるから

——強がってる？

その言葉に、ウォルターは片眉を上げてハイアを見た。

しかしハイアは掴んでいたウォルターの手をゆっくりと離すと、ウォルターの後ろに居るフェルマウスの方を向く。

そしてその表情が一瞬変わったのを見てウォルターもそちらへと眼を向けた。

「仮面の下、そうだったのか」

一瞬は眼を瞞ったものの、やはり一瞬、ウォルターは平然とした顔でフェルマウスに言う。

そんなウォルターの様子にフェルマウスの機械の声に驚きが含まれた。

「ええ、そうです。……動じない方は初めて見ました」

「あ、そうなの？」

「本当さね。さっすがウォルターさ」

「あー、まあねえ…、こう言ったらなんかもしんねえが、色々見てきてるし」

異民…：隻眼の死神と共に居た時にあつたヤツらの方がもつと酷い状態だった。

事実としては、フェルマウスも彼らもなりたくてそうなったわけではないのは同じであろうが、それでも生きているのだから、フェルマウスのような状態でも驚いたりはしない。

とは言え、正直ウォルターはもう慣れすぎていた。

人ということに関して、ハイアにはああ言われたけれど正直自分でも実感するほどに、冷淡で酷薄な態度を取りやすいと分かっている。

——わかりきってるんだ、そんなことは

だが、それでも思う事は諦められないのだ。

そして、しようと思っっていることを諦めることも出来ない。

——うーむ…：。オレって結構優柔不断なんだよな…：、こ

う考えると

困ったことだ、なんとなくそう思いつつ内心溜息を吐いた。

「ともかく、だ。とつとと出るなら出るぞ」

(ルウ、頼めるか)

(……………)

意外にもルウから無言が返ってきた。

ウォルターは内心首を傾げて問う。

(ルウ?)

(……………怒ってるんだからね、僕)

ルウの思いがけない反論。

ウォルターは珍しい反論に虚を突かれた思いになってルウになにも言えなかった。

(……………ウォルターの事は心配だけど…………、それでも、怒ってるんだから)

ウォルターはルウの言葉に『現実』で頭を搔く。

(まあ、別にお前がしてくれなくても、オレには他に方法あるし)

(……………)

(別に死にやあしねえ訳だし、このまま出ても? ……ただ、肌が爛れてやばいことになって、再起不能とかになってもう昔の姿なんて見る影もなくなつ、)

(ごめんなさいしますお願いだからそのまま出ないでください悲しくて死んじゃうから、僕が)

(…悪いな。悪気は無いんだ)

だから余計にたちが悪いんだよ、とルウから再び反論が返ってくる。

それにはウォルターも肩を竦めるしか無かった。

(分かってる。オレが利己主義なヤツだなんてことは)

(…………別に、そんなことない。だって、ウォルターより僕の方がそうだからね)

(…………お互い様…か?)

(そうだね…。でも、無茶はしないで。…………いまの僕は客観的にキミ

を守ることにしか出来ない。僕も…、ちよつと頑張らないと)

(頑張るって、なにを?)

(能力の強化。ここでウォルターを守る為に僕ができることはそれだけじゃないかい?)

(ん…そうか…? でも…、…悪いな、本当に)

(いいんだよ。それこそ持ちつ持たれつ、お互い様だと思うよ)

(かねえ。…本当、お前には感謝してるよ)

(ウォルターにそう言ってもらえるならいくらでも)

ルウの嬉しそうな雰囲気に戻ってくる。ウォルターも知らず知らずのうちに頬を緩ませていた。

「…ウォルター、どうかしましたか?」

「…ああ、なんでもない。行こうぜ」

「……………そうですね」

レイフォンが訝しげに首をかしげていたが、ウォルターはとりあえず気にしないことにした。

消えないモヤは抱えられたまま

ウォルターはランドローラーの助手席でぼうつと外を見つめていた。

珍しくレイフォンが運転すると言い張り、譲ってくれなかったのだ。

だがまあ、そういう自分の手間が省ける事はありがたいと思って運転席を譲った。

レイフォンは何処か眉を寄せた様子でウォルターとレイフォンを乗せるランドローラーの前を走るハイア達のランドローラーを見つめていた。

「……アルセイフ、どうした？」

運転は安定しているのだが、何処か遠い目をしているレイフォンにウォルターは声をかける。

しかしレイフォンからの返答は無く、もう一度声をかけた。

「……アルセイフ？」

「……えっ？ あ、ああ……すみません、なに言いましたか？」

「……いや、どうしたんだ？ って聞いたんだ」

ウォルターが眉を少し寄せて問う。そんな様子のウォルターに対し、レイフォンはやはり視線を逸らした。

「……いえ、なんでも、無い……です」

「……それなら、いいけどな」

レイフォンは明らかに疑われているとわかっていたようではあったものの、それでもそれ以上何かを言おうとはせず、そのまま口を噤んだ。

「…………ウォルター、ウォルターは……、いつもそうですよね」

「あん？」

「……あの……えっと……、その……ウォルターはいつも誰にでもつかず離れずで……。それでいて、誰にでもいつも……」

「…………悪いんだが……、なにが言いたいのかさっぱりだ」

ウォルターが助手席で首を傾げる。

首を傾げたウォルターをレイフオンは先程より鋭い目つきで見た。
「……………なにがいたいんだ？ 睨まれても分からねえモンは分からねえぞ」

「…いえ、いいです、別に」

「あ、そ…」

「……………だから、そういうところが…」

「……………ん？ 何か言ったか？」

「いえ…、なにも言っていないです」

「……………あ、そう」

レイフオンは小さな声で呟いた為、ウォルターにその声は聞こえなかつたらしい。

それほんの少し安堵しつつ、聞かないでくれて嬉しいという思いと、聞こえて欲しかったという思いが自分の中でぶつかり合ってレイフオンはもやもやとする感情に気分を悪くした。

ヘルメットで元々息が詰まる思いになっているのに、余計にこんな思いになるとは思わずレイフオンは大きな溜息を吐いた。

————— どうして、ウォルターの為なんかこんな事で……………

レイフオンは顔をしかめ、隣の助手席に座るウォルターをちらと見た。

助手席のウォルターはレイフオンとは逆の方を見ている。

「いつも通り」、ヘルメットも汚染物質遮断スーツも着ていない普段着の姿で助手席に乗るウォルターを見て、ウォルターらしいと思いつつ、それでいてやはり「常識」と照らしあわせて心配になる。

————— ……ウォルターは、僕に隠し事をしているんだよね…、やっぱり

自分にも、他の誰にも言っていないこと、誰にも言えないとされていること。

だがもしも、ハイアには言っている事があって、自分には言っていないことがあつて、自分には言っていない事があるのでは、とか思ったりすると凄く嫌になる。

何よりも、ウォルターの隠し事を明かせないくらい僕は頼りないの

だろうか、などとレイフオンはなんとなくぐるぐると渦巻く思考に、はっ、と唐突に気付いた。

——な、なんで僕こんなにウォルターのことでセンチメンタルになってるんだ?!

はっ、と我に返ったレイフオンの脳内に走った衝撃は、現在のレイフオンからすれば激震だった。

そのおかげでグリップを強く握り過ぎ、うっかりアクセルを掴んだ。

つまるどころ、ランドローラーを爆走させた。

「うおあッ」

「……………ツ!!」

「…つちよ、…おい…、アルセ…ツ、ちよい…まつ、」

ウォルターはいきなりレイフオンにアクセルを回され、思わず反射で助手席の壁に掴まった。

荒れた大地でタイヤは勢い良くバウンドするわ、その衝撃が五臓六腑にまで響き渡るわで、ウォルターは柄にもなくランドローラーで酔う。

レイフオンに制止の声をかけようとするが、酔ったせいで呂律もあまりうまく回らずただ呻き声と制止の声が交錯した。

「…うああああ…、酔…う、…酔った…、やめろ、痛い、尻が痛い、がたがた、やめっ」

声をかけ続けてウォルターはなんとかレイフオンを落ち着かせるが、それでもレイフオンは変な呼吸をしつつグリップは強く握ったままだった。

それからやつとランドローラーをおとなしく走らせはじめ、数分して目的地に到着する。

ウォルターはようやく地獄のがたがたから開放されたとランドローラーから降りて安堵の息を吐いていた。

「……………ああ、尻が痛い……………」

今度からは絶対レイフオンには操縦させない。

そう決め込んでウォルターは目線をあげつつ、レイフオンに問うた。

「…そういや、ライアは？ 向こうか？」

「……そうですけど…、どうかしましたか」

「いや、別に…」

ウォルターがふうと息を吐いて遠く……汚染獣の居る方へ視線をやった。

えぐられたように沈降した大地のその場所に、居る。

この世界の覇者、汚染獣。

それが幼生体であろうと、脅威であることにはなんら遜色ない。まだ休眠中の汚染獣を見据え、ウォルターは自然と眼差しを鋭いものにする。

それを感じ取ったらしく、遠くからこちらへやってきていたハイアは、ひよいとウォルターの方へ寄ってくる。

何気なく、ウォルターが汚染獣の観察をしているとレイフオンが隣でウォルターの服の裾を引っ張った。

「……まだ、眼は覚めてない…、今のうちじゃないんですか？」

「……おい、ヴォルフシュテイン。もうちよい待つき。寝てる時よりも寝起きの殻の方がやわいさ」

「だったら…ウォルターと一緒に待っていればいいじゃないですか。僕は先に……」

やはりハイアと馬が合わないらしいレイフオンは不機嫌な声音でそう言い放つ。

ウォルターは肩を竦めてレイフオンに声をかけた。

「……いいから落ち着けて。オレ、ちよいとしたい事もあるし……、まだ汚染獣が目覚めるまでは少しあるだろう。焦っても集中と精神を欠くだけだ」

「……………す…、みません」

ウォルターはレイフオンのヘルメットをぱしつと一叩きし、にやりと笑う。

それと一緒にいつもポケットに忍ばせている重晶鍊金鋼を取り出して、展開した。

展開された念威端子は宙を漂い、周囲に散らばっていく。

「……さて、いくつか中継すれば……いや、届くか」

「ちよつと、ウォルター……」

「ンだよ」

「ハイアに、この事」言つてあるんですか？」

「……………」あつ」

「……だめだ、この人」

ウォルターが「いつけね」と軽く言つて頭を掻いた。

いつも通り平常運行、レイフォンはウォルターに呆れた目線を向ける。

そんなやり取りをしているなか、当たり前ではあるのだがハイア達は驚いていた。

「ウォルター、それ、念威……？」

「ん、ああ、そうだけ。わり、言いそびれてた」

「……構わ、ねえけど……さ」

ハイアが少しむくれた顔でそっぽを向いた。

何故ハイアがそんな表情をするのか分からず、ウォルターは首を傾げてハイアの顔を覗きこんだ。

「つちよ、近い、近いさ」

「いや、だってなんかいきなり拗ねてっから。……どうかしたか？」

「……なんでもないさ」

「……そうか」

ハイアの言葉にウォルターは体勢を戻し、念威に集中した。

ツエルニへ向けて、念威端子は動く。

レイフォンの胸には、まだモヤが残っていた。

どうすれば消えるのか。そんなことは分からない。

どうすればいいのか、聞こうと思つても聞けない、こんな事。

溜息を吐いて、汚染獣の休眠がとける事と、ウォルターの用事が終

わるのを待つしか無い。

消えないモヤは、また新たなモヤをよぶ

初めて伝えられた事実に、ヘルメットの奥で眉を寄せながらハイア
は小さく溜息を吐いていた。

どうしようもない事実だと言われても、そんな事は認めたくない。

近づいて、認めてもらう。

もう居ないけれど、リユホウに認めてもらいたいという思いと同じ
くらい、彼にもと思っっているのだ。

だったら、迷う必要は無い筈だ

そう思いながら気にしてしまう自分と、まったくそういうことを気
にしない彼に溜息を吐いて、どうするかなあとひとりまた溜息を吐い
た。

各々のすることの為

「何故、レイフォンとウォルターをそんな危険に巻き込む？」

場所は控え室。

第一小隊との試合で敗北してしまった十七小隊であったが、試合後メイシエン・トリンデンによって伝えられた事。

「生徒会長の話を聞いた後、ツエルニに向かえ」という、ひとつの伝言。

レイフォンが事前にメイシエンに頼んでいたことであり、それを実行したメイシエンから伝えられたその事に、ニーナは動き出していた。

レイフォンとウォルターが戦いに行ったというその事実。

また、黙って勝手に2人だけで汚染獣に向かって行ってしまふ。

怒鳴ったニーナに、しかしカリアンは落ち着きをはらんだ声で言う。

「わたしも、彼らには武芸大会に集中して欲しいと思っている。だが、事態はそれを許してはくれない。……これは、彼らでなくては解決出来ない事態だ」

確かに、そうだ。

極端な言い方をすれば、いま程度の實力しか無いニーナ達が倒せる相手に、わざわざレイフォン、ましてやウォルターが向かう必要など無いのだ。

2人がなにも言わず、しかも機密事項として動くのは、やはり彼らでなくてはならないからなのだ。

それにニーナは唇を噛む。

最もな事実口をつぐんでしまったニーナに、カリアンが言葉をかけた。

「…だが…、実は、キミ達が行く事を望むのならば行けるようサポートをしてくれ、…とウォルター君に頼まれていてね」

「え？ ……あのウォルターが？」

「そうだ」

ニーナが眼を丸くして言い、カリアンも何処か不思議そうな声で言う。

ウォルターと言えば、自分の戦場には他人を一切寄せ付けたがらず、敵という敵はすべてたつたひとりで殲滅する。

それがウォルターのはずだ。

しかし今回はどういう訳か、来ても良いと言う。

——— どういうことだ……？

ニーナが首を傾げたと同時、新たな声が響いた。

(……おつ。 ようやく届いたか)

「っ……、……ウォルター?!」

新たな念威端子が届き、銀朱色に輝くその端子は落ち着きと若干の疲れをあらんだ声音を響かせた。

聞き馴染みのある声……ウォルターの声に、ニーナは困惑の声をあげた。

(よう、やっとこさ届いたぜ。 …5分もかかるとは、情けねえわーオレ)

「5分……？ あなたの位置から5分でここまで辿りつけたというのですか？」

現在のウォルターとレイフォンの位置を把握しているフェリは驚きの声もらし、ウォルターの使っている念威端子を凝視した。

その視線にウォルターが答えることはなく、ニーナが口を開く。

「ウォルター、いまは何処にいる？ …何故いいと…」

(サリンバン教導傭兵団の集団戦術、それを見れりやあちつと勉強になるかと思つてな)

ニーナはウォルターの言葉を聞いて、確かに、と思う反面、珍しい事を言うと思つた。

「……お前、そんな事も思うんだな」

(うわ、傷つくー)

「棒読みで言うくせに、お前がそこまで繊細な人間だとは思えないんだが？」

(…酷い。酷すぎる。オレはものすごく繊細なンだけ?)

「そうか。それでウォルターはいつたいたいどうしろと言うんだ?」

ニーナが清々しいまでにウォルターの言葉を無視する。

珍しく強気な様子で話しをすすめるニーナに対し、ウォルターは少し不機嫌な声音で溜息を吐いてから言う。

(…まあ、そんな細かいことは考えてねえが、本物の集団戦術なんてそうそう見れるモンじゃあないし。ちよいと来て見るくらいしておいても損にはならないと思うぜ、ってこった)

ニーナはそうか、と一言呟き、頷いた。

頷いたニーナに、ウォルターは話を切り出す。

(で、お前はどいうするんだ? アルセイフの言うとおり、ツエルニに向かう)のか?)

「…ああ、わたしはそうしようと思う」

(そ。じゃあ他のヤツらはどうするか考えて決めてくれ。あとは任せる)

端的に話を終わらせ、ウォルターの念威端子は宙を漂い去っていく。

ニーナが動こうと踵を返した時、ふと気付いた。

「フェリ? どうした?」

先程から静かであったフェリは、生徒会室ではない何処かに念威端子を飛ばしていた。

ニーナの問いにフェリがらしくない、盛大な舌打ちをした。

「…本当にばかです」

フェリが鋭い眼差しで踵を返す。

踵を返したフェリの周りにはいくつかの端子が浮遊している。

先程までは存在しなかった端子があることにシャーニッドは気が付き、何処から着たのかを聞くよりも先に、機嫌の悪いフェリにシャーニッドが慌てて問うた。

「どうしたんだ、フェリちゃん」

「……………あの不治のばかを患っているばかりのところへ早く行きましょう。急がないと、またやらかしてくれませす」

「……………?」

フェリの言葉が焦りを含んでいるように感じ、シャーニツドは用意を急ぎ、ニーナは再び踵を返す。そんなニーナの服のポケットに、誰にも気付かれない内にウォルターの念威端子が忍び込まされた。

ウォルターが念威に集中している間に、ハイアは少し場所を離れていた。

隣に居るレイフォンは不安げな表情でウォルターを見る。

「ウォルター、あの……………」

「あん?」

手袋越しにだが、レイフォンが手を額に当ててようとしてきた。

ウォルターはそれに一瞬虚を突かれた顔をしてレイフォンを見、当てらかけた手を即座叩き落とす。

「痛いです」

「……………触ろうとすんな、なんだよいきなり」

「…ウォルター、あの…」

「言いたいことは、なんとなく分かる。……………だが、オレはオレのすべきことはやり切る。分かっているだろう」

「……………でも、あの……………」

「……………黙れ。でも、もなにもない。やると言ったらやるんだ」

不機嫌にウォルターはレイフォンをあしらい、溜息を吐いた。

……………余計な所で余計な感を働かせやがって

ウォルターは内心で盛大に舌打ちをした。

変なところで感の鋭いレイフォンに内心で悪態を吐いていると、ひとつの念威端子がこちらへ来る。

フェルマウスの念威端子だ。

(少し、話をさせて頂いてもよろしいですか?)

念威端子から、そう機械音声が伝えてきた。

その言葉にウォルターはちらとレイフォンを見やり、自身は踵を返

してハイアの方へと移動していく。

「…あ…、ウォルター…」

(…すみません、ウォルター殿を避けさせる気は無かったです)

「…構いませんよ。…それで、話…とは？」

レイフォンはフェルマウスの端子に向き直った。

初志貫徹、彼の意志

……ちくしょう……

ハイアは見晴らしのいい場所で汚染獣を監視しながら片膝を抱えて内心悪態をついていた。

悪態をついていた理由は簡単で、先程のウォルターとレイフオンのやり取りだ。

——おれつちが知らねえ事があるのは、しょうがない

だがそれでも、内緒話のようにされては苛立ちを隠せなくなる。

自分がウォルターに関してあまり知識がない事はしかたのないことだ。

彼はあまり自分のことを語ろうとはしないし、自分の決めた線より向こう側、ウォルター自身というものへの侵入を許さない。

そんな彼だからこそ、ほんの些細な事でも知っているのと知っていないというのでは大きな差が出来るのだ。

認めてもらいたい。

その一心で居るハイアとしては、それが出来なければ彼と居る意味が無い、そう考えている。

しかし、どうやら彼と共にいるレイフオンの方が認められつつあるようだ。

推測に過ぎないとはいえ、もしかして、と思えてしまう、そんなレイフオンと自分の「差」が、悔しい。

「……ちくしょう……」

「どうしたんだ、ライア」

ぼん、とヘルメットに手を当てられた。

上から降り注いだ声にハイアはぱつと顔をあげ、声の人物を見る。

「ウォ、ウォルター?!」

「……? なんだよ。お前がぼつねんと座ってたから来ただけだろ?」

きよときよとした様子でウォルターが首を傾げ、ハイアを見る。

どうやら先程の呟きは聞かれなかったようではあったが、ついさつきまで考えていた中心の人物が目の前に居ることにハイアは挙動不審にわたわたと言葉を紡ぐ。

「あ、いいや……、えっと、別につ、……なんでも、ねえさ……」

「…あり、そうなの？　なんかあるような気がしたんだが」

「……………ある、けど……さ」

言い難いといった顔でハイアが言うと、ウォルターはけらけらと笑っていた。

「なんだよ、そのガキみたいな顔」

「ガキじゃないさ。それに、おれっちは一応ウォルターとは同い年さ」

「はいはい、そだね。一応って言う時点でアウトな気はしなくてもないけど」

「……む…、その余裕が羨ましい」

「ライアも三十路くらいになれば余裕出るんじゃない？　まだまだ若いからな」

「……そういうウォルターは、完全におっさんの発言さ……」

大体三十路って。

ハイアが呆れたような、困ったような表情で、複雑そうにヘルメツトの奥で頬をひきつらせた。

しかし、対してウォルターはそれに何か感じている様子もなくやりけらけらと笑っている。

「まあまあ。精神年齢的には確かにおっさんくさいかもな」

「くさい、っていうかは、ほぼそのものになっちまってるさ」

「ありり、それは大変」

口でそう言いながら、特に重大な問題として捉えているような雰囲気はウォルターに無い。

やはり、こういった性格だからこそウォルターなのだろうと何気なくハイアは思った。

「ところで、ヴォルフシュテインの方…に、居なくていいのかさ？」

「いやあ……、なんかフォーアと話すみたいでなあ。オレが居ても

しようがねえよなど思っでこつち来たンだけど」

「フェルマウスが？ ……ふうん……。まあ、別にどうでもいいさ…」

「そうだなあ。別に死にやしねえモンな」

ウォルターはあつさりと言ひ、ハイアが座つて居る場所の近くに腰を下ろした。

そういえば、とハイアが先程聞くことが出来なかつた事を聞くため口を開いた。

「ウォルター。あの、さ……。さっきの、念威の事、なんだけど……さ」

「あ？ ……ああ、それがどうした？」

「…ウォルターつて、やっぱ重晶鍊金鋼が使えるつて事は……。念威操者でもあるのかさ？」

「……ん、いや…あ、でもそうなるか？ ……まあ、念威もひと通り使えるし、重晶鍊金鋼の復元も出来るなあ」

「昔から？」

「ん…、そうだな、昔から」

「ふうん……」

ハイアは曖昧に頷いて、再び片膝を抱えた。

——まあ、嘘は言つてない”

ウォルターは内心で呟いた。

どの時点からの昔、によつて回答が変わつてしまつていたのだが、ウォルターからすれば昔でなくとも “人間” からすれば昔であるということとは多々ある。

到に伴い念威は、このレギオスの世界に來た時に得たものではある為、ウォルターからすれば特に昔でも無い。だが、それはつまりこの世界の創世時期に手に入れた事になり、それは人間感覚で遙か昔のことだ。

それならば、昔と言つても違つていない。

「…あいつが知つたのは、いつぐらいなんさ？」

ハイアが口を開いた。

あいつ、というのはレイフオンのことだろうと見解をつけ、そうだなあとウォルターは思考を巡らせる。

「一ヶ月半……か、二ヶ月くらい前って感じじゃないかな。ツエルニに老生体が来た時のことだし」

「ツエルニに、老生体が？」

「ああ、そうそう。それでオレとアルセイフがかりだされて老生体退治に出た。まあ、オレってほら、フェイススコープつけないだろ？」

それで念威使ったんだよね。その時に知られたなあ」

「……ふう、ん……」

ぎこちなくハイアが返事を返し、ウォルターは軽く頷いて眼を合わせないハイアを見た。

そのウォルターの視線を感じていたハイアはやはり視線を泳がせる。

「……なんで？」

「ちよつと…、気になっただけさ。特に深い意味は無いさ」

「……ふうん……？」

「………あ、いや………あ………る、けど………さ………」

ハイアが、うう、と両膝を抱えた。

あつさりと返事を返してくれたウォルターだったが、逆にその返事が、何処と無くハイアにとって恐怖だった。

何故か、なんて事はハイア自身分かるはずもなく。

首を傾げたウォルターがハイアを見るが、ハイアはこちらを見ない。

——だから…、ずるいんさ、あんたは

隠しておきたい事なのに、ウォルターにちよつと低い声音で問われるだけでハイアは嘘をつけなくなる。というよりも、言われた瞬間に体の底から震えというか、言わない自分に対して酷い嫌悪感を抱くというか、言い難いながか込み上がってくるのだ。

別にウォルターは他人に問うたとしても、相手をはぐらかした場合はそのまま放置するタイプの人の為、別に本音を言わなくてもなにも問題は無いといえば、無い。

先程のウォルターからの「本当に？」という問いも、適当にハイアがはぐらかしてしまえばそれで終わりだった。

ウォルターは他人に対する興味というものが本当に無い。教えてくれるなら聞く、教えてくれないなら聞かない。

本当にそういうところははつきりしていて、こちらからは言い難いから、少し深く聞いて欲しいところでも聞いてもらえなくて、こちらがじれったい思いをすることも多々あるような人だ。

—— ああもう……どうしてこっちがこんなにももやもやしないのだめなんさ……

ハイアはここが都市外でなければ、おもいつきり自分で自分の頭を強打していたところだ。

少しじとつとした眼でウォルターを見やり、ハイアは不機嫌な声音で口を開く。

「……ウォルターって、ものすごく他人の事気にしない人さね」

「ああ、よく言われる」

あっけらかんとした様子でウォルターが言い放った。

そう言われたハイアは、脱力して大きなため息を吐く。

「……ほんと……、あんたって罪作りな人さ……」

「……それは自覚無いな」

ハイアはそつぽを向いて、不機嫌な顔をしていた。

ヘルメットをかぶっているハイアの表情は見えず、ウォルターは首を傾げたまま汚染獣へその視線を投げた。

その瞳に世界の覇者を見据え

「ウォルター」

「……アルセイフ？」

後ろから声がかかり、ウォルターは後ろを振り向く。

声の主、レイフォンは少し後ろに2つの念威端子を引きつれていて、その念威端子の形からフェルマウスの念威だっと思ったのだが、聞こえてきた声は機械音声ではなかった。

(……イオ先輩)

「……この声……、ロス……か？」

聴き馴染みのある声にウォルターはきよとんとした顔をした。

2つの念威端子は隠し切れない怒気を放ちながらウォルターへと寄ってくる。

先程まで顔をそむけていたハイアも、ウォルターを見ると念威端子へと視線を向けた。

念威端子に追い抜かされたレイフォンは、何処か青ざめた顔でウォルターに小さく口を動かした。

「……愁傷様です」

青ざめた顔の為他意がある訳でも、悪意がある訳でも、いつもの調子でざまあみろと思っていた訳でも無いらしいが、それでもウォルターは嫌な予感がしてならない。

(……なにをしているのです……あなたは……！)
「うっ」

フェリの怒りが最高潮に達している事が言葉に隠しきれていない怒気から察する事ができた。

レイフォンはやはり青い顔でウォルターの方へ寄って来て、ハイアの居ない方の隣へと回った。

念威端子は強い光を放ちながら、フェリの鋭い声を届けてくる。

(……あなたの主治医に聞きました。あなたまだ、手術が終わっていないそうですね……?)

「……う」

「えっ?」

先程出発前に、ウォルターはハイアとの話の中で「手術は終わった」と言っていた。

それにレイフォンもハイアも眼を丸くする。

——ティアリスのヤツ、余計な事を余計なヤツに…

ウォルターは内心で舌打ちをし、バツが悪いという顔で念威端子から眼をそむけた。

(その様子では、レイフォン達には言ってお居なかつたようですね。……そこまでしてあなたは戦いたいんですか? 死にたいんですか? それともばかなんですか? なんですか)

「……いやあ…、死にたくはないな」

(じゃあなんです。はつきりしませんね。うやむやにされるのは酷く不快です)

「……いやでも…、しなくちやいけない事があるのは確かだし……」

(あなただけが戦うなど、ばかでしょう!)

「うっ!」

珍しいフェリの明らかな怒りや、ウォルターが言いくるめられているという姿にレイフォンはどちらも、ハイアはウォルターの姿に、眼を白黒させて目の前の光景を見つめていた。

ウォルターは困惑の表情を浮かべ、頬を掻く。

「……えー、と……、……ごめんなさい?」

(何故疑問形なのです……?!)

「……ごめんなさい」

(……まあ、いまはそこまで許してあげましょう……そのかわり、ツエルニにあなたが帰ってきたら、脛を蹴り倒して差し上げます)

「……正直、勘弁して欲しい……」

(……何か、言いましたか……?)

「いや、言っていない」

フェリの不機嫌全開のオーラにウォルターが肩を竦め、苦笑する。

(……ともかく……、いまは汚染獣ですね)

「そうだな。ライア、準備できてるか？」

「……え、……あ……、できてる、さく」

「それならいい。そろそろ休眠もとけるだろう。身体、ならしとけよ」
ウォルターはレイフォンとハイアに言い、溜息を吐いた。

(……あ、そういえば)

「あん？」

(忘れていました)

「あ？ なにが………ツ?!」

2つあった念威端子のうち、ひとつが眼を焼くような光を放って爆発した。

念威爆雷だ。フェリが念威を操作して端子を爆破させた事により、あたりに衝撃が散らばった。

「つちよ、フェリツ!!」

「ウォルター!」

都市外部では決してしてはならない事をした。まさかフェリがウォルターを念威爆雷で爆破しようとするなど誰が考えるだろうか。爆風のせいで砂埃が巻き上がり、ウォルターの安否確認は出来ない。

レイフォンも、ハイアはレイフォンよりももっと、どうやってウォルターが汚染物質遮断スーツも無しに外へ出られるのかという仕組みを知らない2人は焦った。

爆破の影響により巻き上がった砂煙がほんのすこしずつ晴れていく。

「……つとー……、あぶねえなあ、ロス妹め」

ウォルターはそこに立っていた。

服についた砂煙を払いつつ、悠然と立つウォルターの余裕たっぷりの言葉と態度にフェリが苛立たしさを隠さない声音で悪態をつく。

(……だから気に食わないのです、あなたは)

「そりゃあ悪い」

肩を竦めていたウォルターだったが、傷という傷は見られない。それどころか、先程舞い上がった砂粒のひとつついていない。

ウォルターの悠然とした苦笑にハイアとレイフォンはやはり眼を丸くしてウォルターを見ていた。

「…っ、ウォルター本当に大丈夫なんですか?!」

「平気だって、平気」

「……本当かさ?」

「そう疑うなって。お前ら誰に言ってるんだ」

そう言ってるウォルターはレイフォンとハイアのヘルメットを軽く叩いた。ウォルターは軽く肩を竦めて未だ訝しげなふたりの視線に苦笑する。

「……と言うか、ウォルターさつき、フェリ…先輩に、手術終わってないって言われてましたよね。……嘘………ついたんですか」

「……………ああ……………うん……………、気にすんな」

「気にするさ、それでいいと思ってるんさ?!」

「そうですよ。そうなれば、さつき……」

「もうなんも言うな、お前ら」

溜息を吐きながらウォルターはレイフォンとハイアのヘルメットの前方を手で掴んだ。

「つちよ……………っ、そんなことしても見えますからね?　あまり強情

に言うとなフェリに熱感知してもらいますよ」

「おいおい、熱感知は反則だろ」

「そう言ってる場合でもないさ。ウォルターがそんな風なのに、心配せずに居られる訳ないさ」

「……………お前らは……………。大丈夫だって言ったら大丈夫だよ。痛みは無いし、傷にも熱を帯びてるような感覚もない」

「ウォルターがただ意識から省いてるとかそういう話は無いんですか」

ウォルターは頭を振り、レイフォンのヘルメットを軽く叩いた。

同様にハイアのヘルメットも叩き、ウォルターは金の腕輪を弾く。

「おら、つべこべ言ってるな。…休眠がとけるぜ」

背後で気配が動く。

汚染獣の休眠がとけはじめ、甲殻を割って動き出しているのだ。し

かしレイフォンとハイアはウォルターを見ながら眉を寄せている。

「……ふたりとも、んな不安そうな顔してんじやねえよ。戦い前に不謹慎だろうが」

はあ、とウォルターは大きく溜息を吐き、はやくしろとだけ言うように踵を返した。

「ほら、動き出した」

ウォルターは刀を握る。

藍錆色の紐が揺れ、そこに交差してつけられた柑子色のピンも連動する。

ウォルターが瞳を鋭く細め、口角をあげた。

「……さあ。戦の始まりだ」

世界の覇者をその視界に映し、そう、呟いた。

茫漠の白に飲まれる

ハイアの声に合わせて戦闘は始まる。

サリンバン教導傭兵団の団員達は地を這うようにして進み、レイフォンも旋廻によって飛び出した。もちろんそれに遅れないよう、ウォルターも同時に走り出している。

——さて、どうすつかね

サリンバン教導傭兵団が受け持つのは半数の6体、ウォルターとレイフォンはその半数である6体を分けた3体。

現在、ウォルターの進行方向には4体の汚染獣。

——これって前払いかな。それとも後払いかな

なんとなくそう思いながら、両手で柄をきっちり握り、構えた。

外力系衝剄を变化、おほろがすみ 臙霞。

ウォルターは目の前に居た汚染獣4体のうち2体に向かって刀を横薙ぎに振るった。

振るわれた刀はただそこを通り過ぎるようになり、数瞬、薙ぎ切ったその型でウォルターの動きは停止する。

2体の汚染獣の身体は二つに裂け、切り裂かれた上部は下部からずり落ちて地面に大きな体液の溜まりを作る。

刀についた体液を振り払いつつ、汚染獣独特のその体液の質がありありと分かる状況にウォルターは内心で溜息を吐いた。

——オレの担当は後一体……か

だが、目の前に襲い来る汚染獣は2体。

「……なら……、斬る」

再び刀を構え直し、足裏に剄を凝縮させて、前方へ。

爆音のような音を響かせながらウォルターの足が地面を蹴りつけ、そのまま汚染獣に向かって直線的な走りをする。

「！」

そのまま剄を込めてすれ違えばいいところを、ウォルターはあえて大きな跳躍をして汚染獣の牙を避けた。

戦場では凶暴な笑みへとしか普段は変貌を遂げない表情が、今回は
かりは苦痛に歪んでいた。

「つち、」

——傷、開きやがったか。ついでに頭が痛い

背中を駆け抜け、脊髄の神経を刺激する痛み、そして脳みそを揺さ
ぶるまでの頭痛にウォルターは舌打ちをすると、近くにあつた岩場に
着地、再び刀を構え汚染獣を見据える。

世界の覇者はその獰猛な瞳に飢餓の意志を備え、がちがちと牙を鳴
らす。

ウォルターへとまっすぐに走り来る汚染獣。

いまウォルターが居る位置は、汚染獣の一噛みでウォルターを飲み
込む事ができる位置だ。

ハイア、レイフォンは共に遠い。

何よりもこの孤独な死が蔓延する世界では、ただひとりで戦い続け
るのみ。

他者の干渉を一切受ける事無く、ただひとりで敵を屠り、死の世界
に自らが存在することを否定されながら生きなければならぬ。

それはまるで、あの空間に似ている、と頭痛が反響する思考でウォ
ルターは考える。

ゼロ領域は人間の侵入を頑なに拒み、ただひとりで生き残らせ、気
を抜けば死をもたらず。

自らを暴き立て、すべてを曝け出させる。

そんな死の世界を生き抜くものは、自らが「生きる」という意志の
もと、「世界」への変貌を余儀なくされる。

他者の干渉を許さず、すべてを否定し死をもたらず世界。

すべてを暴き立て、死を超える為に「世界」へ変わる空間。
ウォルターは瞳を伏せる。

目の前に、死の脅威が迫る中で、呼吸を落ち着かせる。

一度大きく息を吐くと、先程まで暴れていた思考は酷く静かになっ
た。

思考のすべてにノイズをもたらししていた頭痛も何処かへ除外され

た。

聞こえる筈の外の音は、ウォルターの聴覚を刺激しない。する筈の死の世界独特のにおいは、ウォルターの嗅覚を刺激しない。

噛み付いている筈の足は、死の大地である荒れた地面の感覚を伝えてこない。

まるで、世界と自分が切り離されたように。

ただ、この両手が掴む柄の感覚と刀の重さのみが、この体が重力の支配下にあるのだと、大地に足をつけているのだと、死の世界を生きているのだと知らせる。

覇者を屠るこの武器が、自らがここに存在すると知らせる。

ただ、目の前に居る「筈の」敵を屠ることだけを身体に伝えろ

そうだ、動く

ウォルターの身体は、ゆっくりと重心を落としていく。

上段に構え、切っ先をやや右よりに固定する。

一瞬だ 一瞬

呼吸が身体に響く。

音は無い。すべてが切り取られている。

そうだ、込めろ

剄を

すべてを

この一瞬に

ウォルターがゆっくりと瞳を開いた。

だがしかし、その瞳は「目の前を捉えていない」。

ただ、振り切れ。

斜め左から右下への、袈裟斬り。

その動きは時間がゆっくり流れているように感じた。

ウォルターの腕に唯一感覚を伝えてくる刀から、汚染獣の甲殻を砕き、肉を裂き、その命を断つていく感覚が伝わってくる。

一体目、切り抜けた。

目の前には獰猛な飢餓の瞳を光らせ、唾液が糸引く牙を見せつける汚染獣の口腔が迫る。

背後で飛沫が上がり、上部下部が別れ地面に崩れ落ちる。

光すら宿さないウォルターの瞳が鋭く汚染獣の方へ向けられた。

振り切った勢いのまま右足を軸に回転、瞬間に刀を持ち直し、下段からの切り上げ。

ウォルターの身体は汚染獣とすれ違う、汚染獣はその口腔を晒しながら微動せず過ぎていく。

甲殻を刀で切り裂きながら振り抜ききる。

刀は斬線のまま、切っ先と刃は斜め右上を向いていた。

振り切った型のままウォルターは止めていた呼吸を吐き出す。

呼吸を吐き出すと同時に、”止まっていた”すべてが動き出した。

合流

ウォルターは刀に付着した体液を振り払う、後ろの汚染獣の絶命する音がして、大地を揺さぶりながら崩れた。

「……っち……」

ウォルターは肩で息をしつつ、大きな舌打ちをこぼした。

せき止められていたものが一気に溢れだしたような感覚に襲われ、ウォルターは吐き気に似た何かを腹に感じた。

再び大きな舌打ちをすると、今にも座り込もうとする身体を奮い立たせレイフォンとハイアの方を見た。

さすがにこちらを見ている様子は無い。それも当たり前だろう。

一瞬の油断が命取りのこの世界の中で、むぎむぎ死を迎えようとする輩はこの場に居ない。

「……ああ、だるい」

先程までの激烈な白の世界からいきなり現実世界へと引き戻された意識は、何処か朦朧としていた。

(言ってる場合じゃねえわ、アントークの方の確認するか)

レイフォンにフェリが言っていない様子であった為、状況を知っているウォルターもなにも言わなかったが、忍び込ませた念威端子がニーナの反応消失と共に消失した。

それに縁空間を通じて念威を送り込み、起動させる。

(……この感じは……？ 他の都市……か。映像は取れるか……)

念威端子から伝わる情報を処理しつつ、ウォルターはあたりを見渡し、汚染獣が居ない事を改めて確認する。

(都市は……学園都市？ ……マイアス、か)

一度だけ赴いた事がある。

とは言っても、このツエルニに来る為に3年前に停留で寄っただけだが。

(……アントークがマイアスへ行ったことには、何か関係があるのか？)

元々、シユナイバルからの情報、そして自身で調べた情報からリーナ・アントークという存在がどうい存在なのかはある程度把握している。

武芸者の中でも稀有な存在であり、レイフォンや、あの獣、闇とはまた違った意味での運命の紡ぎ手。

電子精霊と融合し、その身体に電子精霊の特質を宿す存在。

(ルウ)

(……どうかしたの?)

しばしの沈黙の後、ウォルターは「中」のルウに話しかけた。

(グレンダンで、何か動きはないか?)

グレンダンにはウォルターの念威端子が配備されている。

念威、そして念威端子を使い、縁空間を通じてルウが領域を広げる事によってグレンダンの状況を把握できるよう配慮してグレンダン時代にウォルターが構築したネットワークだ。

縁空間を通して領域を使ったルウが、小さく「あ」と呟いた。

(………リーリン・マーフェスが、ツエルニに来るみたい)

(………それ、いいのか?)

(さあ………それも運命のひとつなんじゃないかな? ……でも、道中死ぬことは無さそうだよ。なにせ、なんだかんだ言っって律儀な戦闘狂が護衛につくみたいだから)

ルウの軽く嘲笑うような言葉にウォルターは内心肩を竦めた。

(さすがシノーラ・アレイスラ………もとい、アルシエイラ・アルモニス(そうだね。まさか天剣を護衛につけるなんて。……その間にグレンダンが滅ばなければいいけどね?)

(………そこまでやわじやないだろ、グレンダン……。…それは、いいんだが………)

(だが?)

ルウが首を傾げ、ウォルターの濁しに問うた。

(これと、後の事にキリがいたらグレンダン………と言うより、リーリン・マーフェスとサヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスのところに飛ぶ)

(ええ、本気？ ヤだなあ、またあれに振り回されるのかー)

(……いやいや、あれって言ったって「あいつ」じゃないんだぞ?)

(……むう、納得出来ない。ヤだ、断固ハンターイ)

(言われても、行くから。決定事項だから)

(ちえっ……。…しようがないなあ…。無茶をしないって言うなら、いまは譲歩してあげる…)

(悪いな)

ウォルターは柔らかくそう言い、ルウをなだめた。

視線をレイフォン達の方へ投げると、レイフォンとハイアの方も終了していた。

「さて、帰還か」

(そうだね。……レイフォン・アルセイフ、ニーナ・アントークが行方不明だって言ったら、どうなるかな?)

(なんか、狂ったように汚染獣の群れの中へ突っ込みそうだから想像したくない)

(あつは、言ってる。じゃあ、そんな暴走少年のセーブ、頑張つてね)
(そう言われるとすっげえやりたくねー……)

意気消沈してしまったウォルターはやや虚ろにルウに言いながら、レイフォン達の方へと歩いて行った。

「……ウォルター……。…、どうして居るんだい?」

「いちゃ悪いか、いちゃあ」

「いや……。居たら悪いかじゃあ、なくて……。…ね」

苦笑した会話が隣で行なわれている事に、リーリン・マーフェスは自分が場違いな気分になる。

現在はつい先程グレンダンを出発したばかりの放浪バスの中、隣でグレンダン屈指の天剣授受者と、その元天剣授受者がなにやら話をしているのだ。

元とは言え武芸者の中でも女王に匹敵すると言われる人がいきなり現れて、あたかもそれが当然というような顔で話を進められて居ては、こちらが困惑するというもの。

——でも、本当にどうしているんだろう……

ウォルター・ルレイスフォーン。

レイフォンに天剣を与え、天剣授受者の地位を与えた張本人。

だが彼はその後姿を消し、度々グレンダンに現れては不可解な行動で周りを困惑させていく。

いや、本人は確かな意志を持って行なっているのだらうけれど、その事情を知らないリーリンやいま隣で話をしている天剣授受者、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスはただその行動を不思議に思うだけだ。

リーリンがウォルターときちんとあったのは、これで2回目。

そして1度目は、ガハルドの事の忠告を受けた際。

正確には、ガハルドがデルクと衝突した時も助けに来てくれていたので3回といえるのだが、あの時はリーリンが意識を失ってしまった為話が出来るところかなにもできていない。

そう考えると、やはりその後グレンダン王宮で会った事で2回目と考えるのが妥当だろう。

——うーん……、でもやっぱり、考えれば考える程、不思議な人だなあ……

隣で七歳ほど年上の相手を前に、へらへらとつかみどころのない笑みを浮かべて話すウォルターに横目で視線を向けつつリーリンは思考する。

実力が超えているからなのか、それとも元同僚ということと馴染んでいるのか、2人はすっかり話し込んでしまっている。

先程から何故か「効率的な汚染獣の駆逐」について話し合っているけれど、一般人のリーリンからすれば超次元の話をされているも同然、軽く聞き流す事に徹した。

「んー……、オレはやっぱ斬り裂く方が性に合ってるな。いや、薙ぎ払うって感じか」

「…それはやはり使っている武器や攻撃手段の相違かな？ いや、だけれどそれでは説明が付かない点がいくつかあるような…」

「ああ、…それはそうだな。…だけど…」

物騒な話をしながら花でも飛ぶかという和やかさ。

この2人、きつと王宮とかだったら中庭で優雅にお茶とかお菓子とか食べながらこういう生々しい話をしていそうだとリーリンは頭痛がした気がしてこめかみを押さえた。

武芸者と一般人では、やはり感覚が違うようだとその理解に苦しむ。

「ああ、成程……。じゃあ今度試してみるわ」

「それは素敵だね。僕もぜひやりたいよ。んん、それにしても少し身体を動かしたい気にもなるなあ。はは、困ったね」

「このバスが汚染獣にでも襲われりやいいことだ」

「それは僕が戦えないよ」

「緊急時用のくらいあんだろ。そういう『制約』がつくことも、お前には刺激的なんじゃないやねえの？」

「……成程。ものは考えよう、とはよく言ったものだね」

「悪戯にそういう言葉ができてる訳じゃないって実感出来るなあ」

本当にねえ、とサヴァリスが笑い、ウオルターもけらけらと笑った。一般人からすれば笑い事では無いうえ、本当に起きてしまったら恐怖で塗り固められることだというのに、なんてことを楽しそうに話しているのか。

——…次の都市につくまで、ずっとこの2人の話聞いてないのだめなのかな…

さすがに真隣の為嫌でも話が聞こえる。

リーリンは盛大に溜息を吐いて仕方なく、持ってきた本に集中しようと思った。

R e i r o t a t i o n 消えたその背中

荒れた大地に、人影がひとつある。

「……………こんな事…って……………」

手の中で爆発した光に向かって茫然としたような声音で呟く。

汚染物質を排除するためにかぶっているヘルメットの奥の青の瞳が揺らいだ。

だが、揺らいでいる暇はない。

目の前には飢餓の瞳を爛々と光らせる汚染獣が居る。

————— どうして、ウォルターの錬金鋼が……………

僕の剄に反応する？ そう思いながらも、ヘルメットの奥でレイフォンは瞳を細めた。

だがそこでふと「ウォルターの錬金鋼」という考えに疑問を持った。

————— これは、本当に錬金鋼なのか？

手に馴染む感覚や、剄の通り方という点では至って普通の錬金鋼と特に違いを感じる事は出来ない。

寧ろ驚いているのはこの武器が自分の腕に吸い付くように馴染んでいることだ。

まるで、長年使い続けて来た武器のような錯覚を覚える。

しかもウォルターが使っている時は完全に刀だったのだが、レイフォンが復元した途端、やや反りが刀に近い、それでいて剣の形に復元された。

だがしかし、いまのレイフォンの心には焦燥感しか無く、そんな事を真剣に考えるような余裕は無い。

目の前の汚染獣に集中出来るような心の静けさも、いつもの冷静な瞳も無かった。

————— ……くそッ！

レイフォンは大きな舌打ちをした。

いま使っている「錬金鋼」は、ウォルターのものであり、それも、黒鋼錬金鋼ではなくウォルターが使っていた「刀」だ。

独特の作りをしている刀。

柄尻に縛り付けられている藍錆色の紐が乾いた風になびく、そして交差させてつけられている柑子色のピンがお互いにぶつかりあう。

「……どうして、消えたんだ……!!」

ニーナ・アントークが消えた。それは、ツエルニに帰還したレイフォンにつきつけられた事実。

愕然とした思いでレイフォンは共にランドローラーで帰還したウォルターと別れた。

焦燥にかられて足早に通路を歩くレイフォンに、ウォルターの呆れたような声音が向けられた。

「お前、大丈夫か？」

「……平気です。………まだ、ツエルニは暴走しているんでしょう？」

「ま、そうだけどな。けどまあ……なんだ、騒いでてなんとかなる事でもねえだろ。それにあのアントークなんだし……」

「うるさいです」

レイフォンはウォルターを鋭く睨め付け、言い放つ。

ニーナが居なくなつたというのに、いつもと変わらないウォルターの冷徹な態度に苛立って、思わず口から飛び出てしまった言葉だった。

「……あなたは、人に無関心だからそう言えるんですよ」

あの時、ウォルターはなにも言わなかった。

ただあの時、レイフォンを見ていたウォルターの表情は、何処となく寂しそうだったのだ。

鋼糸を振るいながら、レイフォンは思考する。

本人は気付いていなかったようで、すぐさまその表情を隠してし

まっていたけれど、レイフォンは見逃していなかった。

見間違いでもなかった。確かに、そんな表情だった。

少しは謝るような言葉を言わないといけない……そう思っていたのに。

その翌日にはウォルターまでもが姿を消してしまった。

都市警察が必死でツエル二中を捜索したものの、ウォルターとニーナの姿を見つけることは出来なかった。

「……………」

どうしてあの時、あんな風に冷たく言い放つことしかしなかったのだろうか。

ニーナが居なくなつて焦燥にかられていたというのに、あの表情を見た途端、思わず足を止めて硬直してしまい、その場から動く事ができなくなつてしまつていた。

しかしウォルターはといえば、レイフォンのその表情を不思議そうな目つきで見ながら「いつものような」笑みを浮かべてすべてを隠してしまう。

それが、レイフォンの見た最後のウォルターの姿だった。

——早く、早く、早く！

鋼糸を振るい、汚染獣を斬り裂く。

ウォルターの刀……もとい、金の腕輪は、ハイアに預けられていた。出発前、酷く不機嫌なハイアが届けに来たのだ。

レイフォンはそれにも苛立ちを隠せないが、そこまでしておいて突然消えたということは、ウォルターが自ら消えたという事を示唆していると思えない。ウォルターがなにを考えているのかわからない事はいつものことなのだが、それでも今回は本当に読めず이었다。

いらいらとそんなことを考えていると、レイフォンは先程出発前にハイアとしていたやり取りを思い出していた。

「おい、ヴォルフシュテイン」

「誰がヴォルフシュテイン？ 僕は違うんだけど、人違いじゃない？」

「……………うるせえさ。…………ウオルターから、届けものさ」

「やけにその名前を強調して言うのと、じとり、と不機嫌な目線でレイフォンを睨め付けながら小さな袋を渡してきた。」

「……………僕に？」

「そうさ。……………お前に渡すよう頼まれたのさ」

レイフォンは眉を寄せたまま無言でその軽い袋をひったくるように受け取り、袋の口を開いてやけに軽い中身を手のひらの上に落とすた。

レイフォンがひっくり返した袋の中から出てきたのは、金色の輝きを放つ素地に、赤い宝石がはめ込まれている腕輪。

内容物は知らなかったらしく、レイフォンだけでなくハイアも眼を丸くした。

「それ、ウオルターがいつも左手首につけてる腕輪…？」

「どうして、それをウオルターがハイアに渡したのか。」

レイフォンはハイアに向き直った。

「ウオルターに、どうしてこれを渡されたんですか？」

「…………おれっちが知る訳ないさ…………。寧ろ、そんな事はおれっちが聞きたい。昨日夜中に突然おれっちの所に押しかけてきて…、とにかく渡せって言われたのさ」

「……………いつも唐突な…………」

自分の行動の意図をはつきりと言わないウオルターに、相変わらずだなと思つたと同時に呆れてきて、レイフォンはうんざりと髪を掴む。しかし、渡された事を押し付けられたと言わないのはハイアだからだろうとなんとなく思った。

眉を寄せて腕輪を凝視するレイフォンを、ハイアは納得がいかないという顔で睨みつける。

……………ウオルター、一体なにを考えているんだ……………？

「……………おい、聞いているのかさ？」

ハイアが鋭い眼差しでレイフォンを見たが、やはりレイフォンはな

にも言わず腕輪を握りしめていた。

俯きがちだった顔をあげ、レイフオンは壁越しに外を見据える。

「……………行かないと……………。 ……僕は……………、僕に出来る事を…、しないと」

「……………お前……………」

ハイアは片眉を上げてレイフオンを見ていた。だがレイフオンはただ、やらないと、と呟く。

その場に来て居たフェリ、そしてカリアンは、その状況に眉を寄せずには居られなかった。

本当にウォルターという人物がなにを考えているのか、分からない。
い。

ウォルターが消えた理由も、消えた経緯も、なにも。ただ、自ら消えたという事実のみが明確に見せつけられていた。

——くそッ！

レイフオンはいま流すことの出来る最大の剄を鋼糸に流し込んだ。
上限なく天剣のように扱えるウォルターの刀。

ただし、刀に限りなく近い形にやや抵抗は覚えている、しかしそれでも久々に剄を全開まで放出することが出来るという感覚は溜まっていた鬱憤を晴らすようなものであり、すべてを冴え渡らせていく。

外力系衝剄を変化、繰弦曲・針化粧。

汚染獣を串刺しにしながら、レイフオンは剄を全力で発揮する。

——久しぶりだ、この感覚…………

やはり全力で剄を発揮できる錬金鋼というものはいいと改めてレイフオンは思った。

だが、いまはそれどころではない。

一刻も早く汚染獣を討伐し、ニーナとウォルターを探さなくては。レイフオンは唇を噛んで、再び鋼糸を展開した。

自戒する少年、熟慮する青年

フェリから、次の反応は1週間ほど先だとの報告を受け、補給と整備の為一旦ツエルニへと引き返す事にしたレイフォンはランドローラーへと乗り込む。

—— 僕の、せいだ……

ふたりとも。

ニーナは、自分が機関部へ行けといったから。

ウォルターは、自分があんなふうに言ってしまったから。

もちろんウォルターは男なのだし、そんなやわな人物ではないとわかりきっている。

だが、もしも……、

だがもしも、レイフォンがあの時なにも言わずに焦燥感をすべて押し込んで八つ当たりをしなければ、もつと違う消え方をしてくれたのではないかとも思う。

わざわざレイフォンと仲の悪いハイアに腕輪を渡して、届けさせるという手間もしなかっただろう。

—— あの人は、いつも変なところでやさしい

レイフォンがニーナの事を気負っているとわかって居たからこそ、レイフォンの八つ当たりにもなにも言い返さなかったのだろうと、ほんの少しだけ頭の冷えたいまなら思う。

フェリやシャーニッドに「腕輪を渡してくれ」、と言わなかった事も、十七小隊がニーナ不在で何処か緊迫した雰囲気を漂わせていた事を彼はきつと誰よりも敏感に察知していたのだろう。

だからこそハイアに腕輪は渡された。

ハイアはウォルターの頼みならば、自分が嫌いな相手に会えと言われたとしても律儀にこなしてくれる、その事実をわかりきった上でそうしたのでろう。

そしてさらに、レイフォンとハイアは仲が悪くお互い意地の張り合いいになりがちだ。

実際、現時点最も嫌っている相手であるハイアに渡されれば、普段は受け取らないであろうレイフォンも、「ウォルターから」と言われればなんだかんだと言っても受け取る。

そういう算段もあったのだろう。

レイフォンが酷く気負っていて、という状況下でのあの言葉だったからこそ、その憤りを引きずって素直に受け取らないであろうとでも考えたのだろう。

そう考えるとなんだか信用されていないような気がして、こんなふうにウォルターの事を心配しているのがばかばかしく思えてくる。

「……………こういう時くらい、一言言ってくださいよ……………」

ニーナが居なくなつて、不安なのだ。

ようやく確立してきた自分の動くべき道筋、見えてきていた筈の道がすべて消えてしまったような思いにかられている中、素直に認められないとはいえウォルターという手厳しいながらも道の教えを説いてくれる人物がもうひとり居なくなつてしまったこの現状。

一体、これからどうすればいいのか。

なにもわからない。

レイフォンはただランドローラーを走らせ、自分の目の前に突きつけられた事を必死にすることしか出来ない。

「……………先輩と……………、ウォルターは、見つかりましたか」

長いフェリの沈黙が見つかつていないという事を肯定する。

レイフォンはその事に吐き気にも似た何かお腹にのさばり、重くのしかかるものを胸に抱えた気になりながらランドローラーのグリップを握りしめた。

レイフォンがそんな焦燥感に襲われている中、ひとり縁空間を流れてグレンダンの放浪バスにたどり着きサヴァリス、リーリンと共に放浪の旅……………と言つてもツエルニを目指す旅に出たウォルターは、途中でいきなり放浪バスを包囲され、止まることを余儀なくされてしまつ

た都市、マイアスで道草を食っていた。

ウォルターの背中への傷は、結局手術をせずに内力系活剷とルウの拒絶により強制的に完治させたが、特に目立つ支障は無い。

ルウには随分と叱られたのだが、最終的にはしてくれた為ありがたいという一言に尽きる訳だが。

「僕って本当ウォルターに甘いよねえ……、たまには厳しくしたほうがいいかな」

ルウが小さく呟いていた事は、軽くスルーしたけれども。

現在はロビーに集められ、周りを都市警察に包囲されたまま腕を頭部後ろで組んで待機していた。

のほほんとした声音で呟く長い銀髪を揺らす青年、そして幾分か年下に見える黒髪の青年は呆れた顔で首を鳴らして居た。

「やあ、早速おかしなことに巻き込まれましたねえ」

「あーあ、厄介事はよそでやって欲しいモンだぜ」

「……平然としてますね……」

危機感のなさでは代表を勤められると言っても過言ではないウォルター・ルレイスフオーン。

彼は隣に立つ青年と共に両手を頭の後ろにまわしてけらけらと笑っていた。

「それにしても、面倒なこつて。大体、来たばかりのヤツらを片っ端からとっ捕まえてなにをしようってんだ？ 意味ねえだろうに。ひとりひとり取り調べするって言うのも、非効率だねえ」

リーリンは、溜息をつきながら言うウォルターを静かに観察する。彼がこの程度で動揺する人ではないとわかりきっている。

なにせ彼はもう天剣ではないとはいえ、平然と、女王を除く最高権力者であり、名門武芸一家の時期当主でもある元同僚の背骨に膝蹴りをクリティカルヒットさせるような人なのだ。

「……あれ？」

ふと気づいたという様子でサヴァリスがウォルターの左手首を凝視した。

その視線に気付いたウォルターは気味が悪いとでも言いたそうに

しながら、サヴァリスの視線から左手首をずらす。

「ウォルター、いつも左手首につけている腕輪はどうしたんだい？
いつも肌身離さずつけているのに」

「…ああ、ちよいと色々あって」

「……なくした？」

「なくす訳ねえだろ。……お守り代わりに預けてきただけだよ」

ウォルターが肩を竦めてそう言い、その言葉に、サヴァリスが珍しく眼を丸くした。

「……キミが腕輪を……と言うか、何かを預けるなんて、明日は世界が滅びるかなあ」

「あん？　喧嘩なら買うぞ」

「ああ、違うよ。ただ、よっぽど信頼している人なんだね、って思っただけだよ。キミにもそんな人が出来たんだねえ、少し吃驚」

「はあ…？　お前はなにを勘違いしてんだ…？？」

「勘違い？　……随分的を射た言葉だったと思うんだけど。だって、キミいつも貸してくれるどころか、触らせてよって言っても触らせてくれなかったじゃないか」

「……………そう……だっけ？」

ぽりぽりと頭を搔いてウォルターが視線を逸らした。

そういえば天剣時代、腕輪を刀に変化させて使っていたため、それに興味を持ったサヴァリスがしばらくしつこかったような覚えがうっすらとある。

腕輪を渡したことに、特に深い理由はない。

ただ必要ならばと思つて渡しただけなのだが、自分を知る他人から見れば信頼しているようにみえるのだろうか。

——…：…：オレが？　アルセイフを？

ない、ないだろう、そんなことはありえない。

最も、この世界に来てから信頼しているということ自体珍しい…：…：というより、思いもしなかった。

確かに来た当初は特にそうでもなかった。

初代のグレンダン王に仕えていた時期、同僚だった天剣授受者とは

割と碎けていたような気もする。

しかし運命が回り出したと察した現在、それではいけないと直感的に感じた。

自分に踏み入られないように、他人に踏み入らないように、そうしなければならぬ。

付かず離れず、距離を保ちつつ過ぎ去るべきことを行う、それが自分のいまの状況。

そしてツエルニを離れなければならない状態で、なにも防護策を引かない訳にはいかない。

だからこそレイフォンに渡した。

レイフォンがいま使う事が出来るとして持っている錬金鋼では、レイフォンの剋に耐え切る事は出来ない。

自身こそが「武器」であるウォルターは、その為にレイフォンに渡した。

ただ、使うか使わないかはレイフォン任せで。

———：確かにあれ大事だけど…、渡しただけで信頼してるって取られるのか？

まあレイフォンならば粗雑に扱わないと思ってるが、つまりそういう事なのだろうか。

首をひねりながら考えていたウォルターだが、答えが出そうになかった為思考を放棄した。

思考によりひとり百面相をしていたウォルターに、苦笑したサヴァリスがくつくつと笑いを零す。

リーリンは何故この状況でそんな平然と話を進められるのか理解できなかった。

「はー…あ…。だるい」

いかにも面倒くさいといった雰囲気ウォルターの言動にも態度にもにじみ出ていた。

溜息を吐きながらウォルターは頭を掻き、内心で悪態を吐く。

———：まったく…、オレはこんなことをしに来た訳じゃねえんだが

どうということなのか、リーリンの旅に同行したら何故かニーナが飛ばされたと思しき都市である、学園都市マイアスで足止めを食らってしまった。

盛大な溜息を吐いて、ウォルターはあたりを見渡す。当たり前だが周りは学生ばかり。

それも、ただただ怯えた様子で放浪バスの客に錬金鋼を突きつけるしか脳のないヤツらばかり。

——こう考えると、まだツエルニのヤツらはマシになった方か……

未だに幼生体1匹倒すのにもしどろもどろしているものの、それでもがちがちに身体の筋肉をこわばらせて戦うこのマイアスの生徒よりはマシなのか、とつくづく学園都市の汚染獣への抵抗力の低さに呆れる。

それに再び溜息を吐いてウォルターはサヴァリスに視線を投げた。

「どうしようもねえな、この怯え様は」

「……怯え？ そんなものあるのかい？ 僕には特にわからないんだけど」

「……………ああ……………、そうかお前そういうところ鈍感だったもんな」
「そうかな。僕は割と鋭敏な方だと思っただけ……………」

ウォルターはその発言に肩を竦めて嘲笑うような顔をした。

「ええ……………、嘘だー」

「酷いな」

「いや、だって本当だろ？ 確かにお前戦いに関してはずげえ鋭敏だけど、人の心とか心情に関しては鈍感だろ」

「ん……………そうかもしれない。まあ、これこそ無関心っていうのかもね」
「……………ああ……………」

「……………ウォルター？ どうかした？」

「……あ、いいや……………」

ウォルターは「無関心」という言葉に少し胸の中にもやを感じた。

——無関心……………か

グレンダンの放浪バスに乗るために時間を飛び越える前、レイフォ

ンに鋭い眼差しで睨め付けられながら言われた言葉。

あの時のレイフォンは、ニーナ・アントークの消失により気負っていた状態で、気が立っていたのだろう。

だが、どういふ点でレイフォンの気に障ったのか、ウォルターにはいまいち分からなかった。

そういう事を考えるとウォルターもまた、サヴァリスの事を言えはしないのだろう。

ウォルターも人の心情というものに酷く鈍感であり、他人の悲しみや情緒というものを理解しようとしめない。

理解できない。

昔からそうだったのだ。

興味はあったが、最終的に理解できた事は一度としてなかった。

ただほんの少しだけ、感じたことはあった、それでも結局は自分の納得するような感触を得られはしなかったけれど。

だから全て割り切っている。

その事象が自らに関係があるか、それともこの“世界”の事に関係があるか。

それが、それだけが、ウォルター・ルレイスフォーンという存在が“他人”を気にすべき観点だと。

ただし、後者の方が圧倒的に強いが。

自らのことは、あまり気にすることはない。

——— …アルセイフは、なにが言いたかったんだろ

『……あなたは、人に無関心だからそう言えるんですよ』

だが、人から言わせれば冷淡なウォルターは、その言葉に関してもなにも感じることは無かった。

レイフォンが何故か驚いた顔で硬直してしまい、何かぎこちなかったかと“いつもの笑み”を浮かべたのだが、結局レイフォンはなにも喋らないままだった。

ウォルターもしなければならぬ事があったため、本当はその時に渡そうと思っていた腕輪を必ず渡してくれると確信のあったハイアに預け、渡してくれとだけ頼んで縁空間へと飛び込んだ。

正直、十七小隊の誰か……フェリヤシャーニッドに預けても特に問題は無かったのだが、フェリヤにそんなことを頼めば変に勘ぐられたであらうし、シャーニッドはシャーニッドで“気を使って”自分で渡せとでも言われただろう。

そう考えるとやはりこの場ではハイアに渡すことが一番得策のよう
うに思われ、ウォルターは渡した。

——あれ、でもなんで思ったんだったか

少し前までそのことを考えていて、結論が出た筈だったのだがすっかり忘れてしまった。

ウォルターは少し頭を掻き、まあいいかと放る。

別に忘れたからと言って命に関わるような事は無いし、運命に関わる
ることこそ無い。

「おーい、ウォルター？」

「…んあ」

「移動するよ」

少し歩き始めていたらしいサヴァリスとリーリンがウォルターを
見て首を傾げていた。

苦笑しつつウォルターは一言「悪い」と言うのと2人の後についてい
く。

違和感を持つ男

移動した先であつてもウォルター達が都市警察に囲まれる事は変わらず、強張った筋肉に支えられている鍊金鋼を向けられながらウォルターは溜息を吐き、隣のサヴァリスからも溜息が聞こえた。

「……それにしても……」

「どうした、ルッケンス」

「このザル警備はなんとかならないのかな」

「…お前、ザル警備とか知ってたんだな」

「そこまで疎い気は無いんだけど……。まあ、うん、知ってた」

サヴァリスはウォルターを見やりながら、少し肩を竦めた。

同様にしてウォルターも少し肩を竦め、苦笑気味にサヴァリスに言う。

「…まあ…しようがねえさ、ここは学園都市だぜ？ このタイプの都市は他都市に比べて圧倒的に汚染獣との接触率が低い。つまり、実戦の感覚や本当の戦場って言う事を知らないから危機感も薄い。そうなれば、必然と実力も低い」

「……まあ、そう言われればそうなんだけどねえ……」

「ま、オレやお前ならこの都市潰せるけどな」

「そうだね…。する気は無いけど、しようと思えばあつという間だね」話をしていると、戦闘服を着ているうちのひとりが前へ進み出てきた。

かぶっていたヘルメットを外し、その素顔を晒す。

——…なんだ……？ この男、違和感がある

ウォルターは眉を寄せて鋭く男を見据えた。

男は視線に気付いていないらしく、ロビーにいる人間に向かって話をしていった。

どうやら重要情報が盗まれた為、その検査をしているとのこと。

その関係でひとりひとりへの取り調べ、及び荷物の確認ということらしい。

気だるげにウォルターは溜息を吐き、呆れた顔で遠くを見た。

「ウォルターさん。すっかりしていないと怪しまれますよ」

小さな声で耳打ちをしてきたリーリンに、ウォルターはやや眉を寄せて答える。

「平気だって。寧ろ動きが固い方が変だろ。それに、その程度じゃ死なないし、オレ」

「そういうことじゃないですよ」

「まあまあ、リーリンさん、落ち着いて。…ウォルターも、とりあえず形だけでもきちんとしておいたほうがいいんじゃないかい？ 波風立てるのは後々面倒だろう」

「……はあ……。別に。学園都市がどういう経緯で調べたりすんのかって言うのはある程度把握してる。一応、どのくらいが大丈夫かどうかかもわきまえてやってんよ」

ため息混じりにそう言うと、若干納得がいつていない様子のリーリンが回りにいる学生達を見て、言った。

「…でもなんだか…、やっぱり凄く緊張しているように思います。どうしてでしょうか…」

「リーリンさんも気付いているんですか？ ……ふむ」

「よっぽどやばいモンが盗まれたのかねえ」

「……ウォルターさんは分かるんですか？」

リーリンが少し驚いた様子でウォルターを見つめた。

確かにサヴァリスと同じ……もしくはそれ以上の力量を有するウォルターならば、サヴァリスのように「この程度の緊張感」に対して、鈍感であつてもおかしくはない。

だが、ウォルターはリーリンの疑問にすぐさま納得した。

それはウォルターからすれば当然なのだが、やはりサヴァリスを見るリーリンからすれば当然でも無いのであろうと少し困った顔をして口を噤んだ。

——まあ、オレは純粋な武芸者じゃねえし……

しょうがない、とは思う。

常に警戒をして居なくては咄嗟の時に反応出来ないのがウォル

ターの欠点だ。

それは後付である能力の為に身体がそれに馴染んでいないという欠点があるからこそであり、反射神経はすべて「元々の」ウォルターの技量や異界法則のみに頼られている。

さすがに睡眠時などはウォルターの「能力」も休眠してしまうので、特に神経を削ぐ時とも言える。

——— ……オレは…ルウが居るし……

大きな事を成さなくてはならないというのに、睡眠不足で倒れるなどあまりにも間抜けすぎるので、ウォルターとルウは相談してウォルター睡眠時はルウが周囲の警戒をするという事になっている。

その為ウォルターが仮眠している時や、眠っている時はルウの領域があたりに展開され、ある一定の距離に何かが入ると感知するようになっていいる。

起きているときはそれなりに周囲の状況に過敏な方であるウォルターからすれば、起きてさえいればある程度気付く事は当然なのだ。

「……まあ……、いいけど……」

「つぎだ。入って来い」

「……面倒くさい……」

呼ばれたウォルターは、仕方なく都市警察の後について歩き、ある一室に辿り着く。

部屋に通されたウォルターは、椅子に座る男に眼を向けた。

部屋で先に座っていた男は先程ロビーで話をしてきた男であり、ウォルターが何か違和感を覚えた男だった。

「……あんな……」

「はじめまして。ロイ・エントリオと言います」

にこやかに笑みを浮かべた男……ロイを見据え、やはり若干の違和感を抱えたままウォルターはロイと机を挟んだ向かいの椅子に腰を下ろした。

「あなたの名前を教えてくださいますか？」

「……ウォルター・ルレイスフオーン」

「成程、…ウォルターさん、ですか。あなたにいくつか質問をしたいの

です。面倒だとは思いますが諦めて応じていただきたい」

ロイは一枚の紙切れ、おそらくウォルターの荷物を検査して出た結果をまとめた資料だろう。

それを見てロイはやや困惑したような表情を浮かべ、それから怪訝な顔でウォルターを見てきた。

「ええと……、あなたの荷物には、殆どなにも入っていませんでしたね」

「ああ、そうですよねえ」

「……素性がつきりしませんので、あなたの身分を証明するものがある場合、それを提出していただだけませんか？」

「……身分証明書か。……んー……」

そういえば、とここで気付いた。制服はツエルニに置いてきてしまったのだ。

つまり、ツエルニの生徒であるという身分証明書はツエルニだ。

——しくじった。…あ、でもツエルニの身分証明書出しても無駄か

どちらにせよ、ツエルニとは別の学園都市であり、学園都市の在学書を持っているということは学生という事になる。

学生がこんな所でふらふらと放浪している方が不自然だとも考えられる。

そう考えるとどうするべきか、とウォルターは思考をフル回転させる。

(…ウォルター、僕が検査したつてことにしようか?)

(……いや、まあ……、それはそれでありがたいが…悪いけど、いいよ)(うーん、そっかあ、残念……。…僕なら完璧にしてあげるんだけど…)

ルウがやや拗ねた声音で言ってくる。ウォルターは内心で苦笑してルウをなだめた。

「ウォルターさん、なにも提出することは出来ませんか？ そうなりますと、あなたの身柄を拘束させていただくことになるのですが」

「……あ、ちよつと待ってください」

ウォルターはジャケットのポケットに手を突っ込んで、適当にあ

さった。

——確か、4年前のだけどグレンダンの身分証が入っているような……あつた

物持ちいいなあと言うか、たまにはジャケットのポケット掃除しようぜオレとやや複雑な気持ちにはなるが、これでなんとかなるかな、とロイに差し出す。

4年前の身分証ではあるが、まだ住居の方は引き払っていないうえ、登録も解除していない。

更新していないのでこのだましが効くかどうかは賭けだ。

「……グレンダンの方、ですか」

「ああ、そう。住所は……」

いきなり渡しても信憑性が無いかと住所も口にする。

ロイは何やら頷きながら資料に書き込んでいき、「ふむ」と声をもらす。

「ですが、あなたはいまここにいらつしやいますね。どうしてですか？」

「傭兵なんです」

「ほう。グレンダンの出身の方が傭兵を。成程……。……では、鍊金鋼が入っていないのは何故ですか？」

「ああ、壊れてしまいました」

「……………傭兵の方の命とも言える鍊金鋼が、ですか？」

「はい。オレ、素手で戦うのが最近の個人的流行りです」

ウォルターは胡散臭い笑みを浮かべて頷いた。

実際、鍊金鋼は持ってきていないので無いことは偽りようのないことだ。

ツエルニで渡されている黒鋼鍊金鋼は置いてきている、重晶鍊金鋼はこっそり忍ばせている。

と言うよりも、こういうタイプの武芸者は念威が使えると言っても特に脅威と感じない部類の武芸者が多い。

ウォルターがあまりにもあつけらかんとして言う為、ロイも呆れていたようだったが構わなかった。

「……あなたは本当に現在、錬金鋼を所持していませんか？　それがたとえ……そう、重晶錬金鋼であっても。持ち物があまりに少なすぎますので、身体チェックをさせていただいても結構ですか？」

「……ええ、構いませんが」

ウォルターは軽く笑みを浮かべて爽やかな声音で言った。

ロイ以外に2人ほどの警察がウォルターに近寄ってくる。ウォルターはおもむろに立ち上がり、手を上へとあげた。

ジャケットのポケット、ズボンのポケットを手でまさぐっていく。

「……これは？」

ロイがふとウォルターのズボンの後ろポケットに入っていたものを取り出した。

それ自体にそれほど高さは無く、薄くて、円形の鉄の塊だった。

「ああ、懐中時計です。開けていただいても結構ですよ」

ロイがチェーンと繋がっている接合部のボタンを押すと、鉄はかちりと音をたててその中身を見せた。

懐中時計は静かに時を刻んでいる。

ロイはじろじろと懐中時計を物珍しそうに見つめていたが、やがて蓋を閉じ、先程渡した紙を添えてウォルターに返してくる。

「ありがとうございます。もう結構ですよ。それとこの紙もお返ししますね。…それにしても」

「なんですか？」

「なかなかの骨董品ですね」

「ああ、ありがとうございます」

開放されたウォルターは懐中時計を握ったまま部屋を出てロビーを過ぎていき、割り当てられた部屋へ歩いて行く。

「……っは」

口角をあげ、こらえていた笑みを零す。

ウォルターの手にあるものは、懐中時計、ではない。

「ばーか」

（……うまくいった？）

（ああ、さすがだな、ルウ）

普段はルウの「誤認操作」により懐中時計に見せかけられているが、この「懐中時計」こそがウォルターの重晶鍊金鋼だ。

レイフォン達にもはつきりと伝えた事は無いが、重晶鍊金鋼である以上展開も出来る。

が、ウォルターとルウ以外の「他人」にはただの懐中時計にしか見えないうようにルウがしている。

(……それにしても、さっきのロイ・エントリオだっけ？ 笑っちゃうね)

(まあ、異界法則は絶対のモンなんだし、そう言われてもしようがねえって)

ロイを嘲笑するルウは楽しそうで、珍しくよく笑っている。

ウォルターも結構笑いを堪えて必死だったので、つい先程吹き出したけれど。

「さてと、ここか」

ウォルターが部屋を一応ノックして、重晶鍊金鋼、もとい懐中時計をポケットにしまうと中にいた人物に声をかけた。

「よ」

「ウォルター。取り調べ、終わったのかい？」

「ああ。もう笑っちゃうぜ」

「それにしても、ウォルターなんて荷物全然ないのに調べて意味あったのかな？」

部屋に居た2人の人物のうち、銀の長髪を揺らす青年……サヴァリスはくつくつと笑いながらウォルターを見た。

ウォルターも、先程のロイの反応を思い出して薄く笑いながら答える。

「いやいや、オレに言われても。けど実際困ってたみたいだぜ。身分証明書の提出しろって言われたからな」

「そうなのか。じゃあ、なにだったんだい？」

「これ」

ウォルターは先程ロイにも見せた紙切れを見せる。

紙切れを見せられたサヴァリスはやや頬をひきつらせたような顔

でウォルターに視線を向けた。

「これ、前のじゃ…」

「おう。だが通ったぜ。ま、それ、あながち間違いでもねえし」

「そうだけどね……。ま、ウォルターらしいか」

「そうそう。ってことで、のくんびりしようぜ。焦ってもしようがねえし」

そう言っつてウォルターは大きく伸びをして、目の前にあつた椅子に腰掛けた。

リーリンは呆れた顔をしていたが、それでももすることがないということもありなにかを言うつもりもないらしい。

サヴァリスといえば窓の縁に腰掛けて、やや苦笑していた。

行き交う人々

ウォルターは空を見ていた。

それは窓から空を見ているのではなく、寝そべって空を見ていた。

「…やあ、ウォルター」

「ルッケンス。どうした？」

「いえ、キミには今回の僕の事情を説明しておこうかと思ってね。

…敵方に回られても怖いし」

「っは」

ウォルターは鼻で笑うと、サヴァリスに不敵な笑みを向けた。

サヴァリスの方も口ではそういうものの、表情からはそれほど脅威に感じているような雰囲気は感じられない。

寧ろ、そうなることを楽しみにしているような雰囲気さえうかがえる。

「…ま、おおよそ予想はついでンだけどな。廃貴族だろ？」

「ああ、覚えていたんだね。…キミが言ってくれたお陰もあって、こうして僕が来ることが出来たよ」

「へー、そりやあ良かったー」

「酷い棒読みだね。…それにしても、2日経ったけれど、何か気付いた変化は？」

「いいや、無い」

ウォルターもさすがにお手上げ状態だと言いたげに肩を竦めて言った。

そうですか、と小さく呟いてサヴァリスは都市の足に視線を向けると、ウォルターもそちらへと視線を投げた。

「…気づいているか？」

「もちろん。…あの音が無いのをごまかすのには、逆に骨が折れるよ」
「だなあ」

自立型移動都市オキスの足が止まっている。

身動きひとつしないその鉄の脚部を少し見つめると、ウォルターは眼を伏せた。

昼になり、ウォルター、リーリン、サヴァリスは食堂に来ていた。食堂はビュッフェ形式で多くの皿や料理が用意されていて、なかなか豪華だ。

「おや、小食ですね。リーリンさん」

「え？ ……ああ、あまり食欲無いんです」

「そうですか。ですが、食べないといざという時動けませんよ」

ふと気付いた様子でサヴァリスがリーリンに声をかけた。

ほんの少しだけ困ったような様子が見て取れたサヴァリスを珍しいとリーリンは思いつつも、素直にサヴァリスの意見を正しいと思った。

その為、もう少しだけ増やそうと皿をとって、気づいた。

「……あの、ウォルターさん……」

「どうした？」

「少なすぎや、しませんか……？」

「…そうか？」

ウォルターはきよとんとした様子で、片手に持った本当に小皿を見つめた。

小皿の上には少量のサラダと薄切りベーコンが二枚ほど乗っていて、その上にドレッシングがかかっているのだが、それだけ。

自分よりはるかに多く動く箸のウォルターが、自分のとった量より少ない事に眼を丸くしたリーリンは、さり気なくサヴァリスに視線を送った。

その視線に気付いたらしいサヴァリスもウォルターの皿を見て、眼を丸くしていた。

「…ウォルター、少なすぎるよ。ただでさえキミは戦いもするんだ、それじゃあもたないだろう」

「……ビュッフェ、嫌いなんだよ昔から…。なにをどうしてやればこのヤツらは満足なのかオレには不明解だ」

「そこまで深読みする必要あるかな、ビュツフエ程度で」

「…知らん…。知らんが、どうもビュツフエは気に食わない」

「ビュツフエに何か嫌な思い出でもあるのかい、キミは」

そう言いながらウォルターが眉を寄せると、さすがにサヴァリスも苦笑するしか無い。

溜息を吐いて、何気なくサヴァリスが自分の皿を見ながら言う。

「しようがないね。僕の少し食べるかい？」

「…いらん。お前がとつたのをオレが食べる訳にはいかねえだろ。」

「…正直、オレお前のその気遣いがすげえ気持ち悪いんだが」

「いや、構わないけど…。というか、後半余計だよ」

「いや、オレからしたら重要問題。最重要。だってオレがヤだから」

「…そう。…じゃあ…、とつてあげようか？」

「それもいらん」

ウォルターは眉を寄せてつつけんどんに言い返す。

というより、と言ってウォルターが更に眉をきつく寄せた。

「なんでそんなによそよそしいんだよ」

「え？ …ああ、あわよくばキミと戦えたらいいなっておも、」

「じゃあオレさっさと食べきるわ」

「酷いなあ」

苦笑して素っ気ないウォルターを見るサヴァリスだが、ウォルターは立ったまま小皿のサラダを平らげてさっさと片付けを済ませてしまふ。

そんなウォルターにサヴァリスが何処か訝しげな視線を送った。

「…ウォルター、どこか行くのかい？」

「…部屋。先戻る。人多すぎて落ち着かねえ」

「そう。…お腹すいても知らないよ」

「はいはい、気遣いどーも」

ひらりと手を振ってウォルターは踵を返すとそのまま食堂を出た。

—————さてと

ウォルターは部屋に入って扉をしめると精神を集中させ、縁空間へ飛び込んだ。

食堂でニーナと知り合ったリーリンは、同席を取り食事をしながら話をしていた。

「あの人は武芸者っぽくないかな？」

リーリンは何気なく呟き、ニーナは頭を振った。

あの人、というのは先程まで居たサヴァリスのことだった。

なんとなく軽薄な印象を受けるサヴァリスに対しては仕方のない事かとも思えるが、ニーナは小さく首を振る。

「いいや、本当に強い武芸者というのは、なかなかそうは見えない者の方が多いのかもしれない。わたしはその例として2人ほど知っている。普段は誰より頼りなくてなよなよしているのだが、いざというときは頼りになってしまふんだ。……もうひとりはおつと酷いぞ。武芸者だと名乗らなければ武芸者には到底見えないような間抜け顔を常にしているうえ、不真面目不誠実、本当に困ったヤツだ……」

ニーナはつらつらと話し、ころころと表情を変えながらパンを口に運ぶ。

その話を聞きながら、リーリンはなんだかついさつきまでそんな雰囲気の人と話していたような気がすると思いつながらサラダに手を付けた。

「……しかし、不真面目不誠実だがなんだかんだといい人への気遣いがうまくてな……。こちらはいつもヤツがなにを抱え込んでいるのか把握させてもらえない。こちらは気遣われてばかりなのにな……」

——ニーナ、その人……というか、その人達の事どう思っているのかな？

なんとなく、そちらが気になった。

表情をころころと変えながらしゃべるニーナだが、本人は随分と立腹している様子ではあるものの、随分と楽しそうであるとも思う。

それと何処と無く、後半に話してくれた武芸者は、ウォルターのようだとも思いながらも言わないでおいた。

自己への疑念

ざわり、とすべてが揺らいだ感覚がした。

「……我の場への、侵入者か……」

低く、それでいて機械音声が静かに呟いた。

その姿は異形のものであった。言わば、龍とでも言うのだろうか。背の羽をはばたかせて、龍は空へ舞うと、ある方向を見据えた。

「…あの異民の反応もある…。ヤツは、一体何処でなにをしている？ おめおめと我が領域に不当に侵入を許すなど……」

機械の声には薄らかに苛立ちのような、呆れのような、そんな雰囲気
気が宿されていた。

再び羽をはばたかせると、龍は目的地へ向かい始めた。

「どれだけのものがあつたとしても…、人ひとりにできることというものは酷く限られているものだよ」

会議からの帰り、カリアンは後ろにいるヴァンゼにそう言った。

その言葉を聞いたヴァンゼは、何処か難しい顔をしてカリアンに視線を返した。

「……だが……、この小隊に所属するヤツの中でひとり、それを実現する男が居るだろう」

「………そうだね。だが、彼はおそらく例外だ。差別的な考えをसरつもりは無いが、違う存在だよ、きつとね」

「……だが、そうはしません」

「そう、キミはそういう人だ。そして…、先程わたしが言った彼も、同じ考えの者だよ。ならば、それを信じるしか無い。そして……、いま都市と同じくらいに暴走している彼を止めてくれると、信じているよ」

カリアンはやや苦笑しつつ言った。

しかし、もちろん例外があると分かっている。

彼は実際、自らの目的を果たす事を何よりも最優先としているのだ、そして、彼はそれ以外の事を重視しない。

そんな彼が、もしも現在のツエルニより優先するような事象が起きた際には、彼はツエルニを見捨てるかもしれないのだ。

そんなカリアンの懸念に気付くことは無く、ヴァンゼは溜息を吐いた。

「だが、その頼みの綱である『彼』はいま居ない。ヤツが求めている存在は、現在居ない」

「……早く帰還することを祈るのみだね」

思考を振り切って小さく息を吐くと、カリアンは窓からツエルニを一望する。

まだできることはある、と机の上の書類に集中した。

はじめに倒れたのはフェリだった。

それも当たり前だ。レイフォンとは違い、常に念威端子で都市の周りを不断に確認し続けていたのだから。

そして、ある程度の距離を保って念威による確認をするためには随分と精神を消耗する。

更にはレイフォンが出動するときもその場所までフォローしなくてはならない。

そう考えればフェリが一番初めに倒れる事は明らかだった。

ツエルニに帰還したウォルターが明確な情報としてはじめにきいたのはそれだった。

溜息を吐きつつフェリが入院しているという病院へ赴き、フェリの病室の前まで行く。

2回ノックをすると、ひよこり、とウォルターが顔をフェリに見せた、珍しく驚愕の顔つきでウォルターを凝視してくるフェリに、ウォルターは苦笑いをして片手をあげた。

「……イオ先輩……、どうして、ここに」

「ちよいとあつてな。…留守にしてて悪かったなあ。これ、見舞い」

「あ、どうも……って、そうじゃないです、何処に行っていたんです。

ツエルニ中を探したんですよ」

「悪かったつて。ちよいと野暮用が出来て…」

「ツエルニから急に居なくなる野暮用とはなんですか？ どうやって居なくなつたかも分からないような手段を使って、そうしなくてはならないような理由があつたんですか？」

フェリの質問攻めにウォルターは苦笑し、近くにあつた椅子に腰掛けると見舞いの品をベッドの隣にあつた机に置いた。

座つてからも苦笑していると、フェリは鋭い眼差しでウォルターを睨み付けて来る為、困つた顔をしてウォルターは肩を竦める。

「悪かつたよ。……そういえば、お前が倒れたならアルセイフが居ると思つたんだが…、アルセイフは何処に居る？」

「…分かりません。先程レイフォンは帰りましたから」

「そうか…。まあいいよ。お前を責める気も無いし、お前は悪くないからな」

そう言つてウォルターはフェリの頭をぽふぽふと撫でる。

フェリはほんの少し眉を寄せてウォルターを睨め付けるように見た。

「はは、不機嫌だな」

「…まったくです…。あなたがわたしの頭を撫でる事も納得がいきません。それが…、それ以上にわたしはわたしの失態が許せないのです」

「…そうか。ま、でもそれはお前が自分の仕事に責任を持つてることだろ？ 良い事じゃねえか。……ロス、オレはアルセイフを探しに行く。お前はきつちり休んでおけよ」

ウォルターはほんの小さな溜息混じりに立ち上がると軽く首を鳴らした。

踵を返そうとした所でフェリに服を掴まれ、ウォルターは首を傾げながらフェリを見る。

「……どうした？」

「…先輩。わたしは以前、あなたに言いましたよね。わたし達は何故、こうも意志と反することをしなくてはならないのでしょうか。……そしてあなたは世知辛い世の中だから、と言いました。この現状は、

それだけで説明はつけられません」

「だなあ。……けど、もうそう生まれたらそういう風な性なのかもなあ。オレも同じだよ、事は違えども」

「……イオ先輩ですか……?」

「そうそう。オレも同じなんだよ。なにせオレは昔からずっと戦ってきたんでな。……だからきつと、戦う事がオレの性なんだろう。お前らも同じなんじゃないか?」

ウオルターはやや自嘲気味にそう言うが、フェリは納得がいかないという顔でウオルターを見た。

「……わたしは、望んでこうなったわけではありません」

「そうだな。だが、世の中にはそういうヤツはたくさん居る。オレだって同じだよ。……どうしてオレがこんな役回りなんだとか、柄にもなく考えた事あるさ。」

……だが、どう足掻いてもオレはオレだ。……説教する気は無いから軽く心に留めておいてくれたりすると嬉しいが、自分が不幸だなんだと思う前に、自分と向き合ってみろ。良い所とも、悪い所とも。そうすりゃ、自然と自分つてのは見えてくる。……そして見据えろ。自分と向き合った先にあるものを」

フェリはウオルターを何処か啞然とした顔で見ていた。

バツが悪いと言った表情で、ウオルターは頬を掻いて眼を逸らしつつ言う。

「まあ……長ったらしくなっちゃったが、簡単に言えば抱え込むなって事が言いたかっただけだな、うん。お前はお前だよ。いまのお前を嫌おうとも、オレにとつちやあ眼の前に居るお前つてのがオレにとつての「フェリ・ロス」なんだよ。……だから、あんま難しく考えんな。だいじょーぶだから。……お前も、アルセイフもな」

「……………長いです」

「…悪い、言いたいことを考えながら喋ってたら増えたわ」

「……………あなたは……。まあ、いいです、いまは。……フォンフォンの事、おねがいますね」

「へいよ。任せましたー」

「その棒読みいらつとします」

「あり、ごめんよー」

ウォルターはけらけらと笑いながらフェリの頭を再び撫でて、今度こそ踵を返すと部屋を出て行った。

その眼に映るもの

フェリーの病室を出たウォルターは顎に手を当てて考えていた。
(さて、何処だろうな……ルウ、分かるか)

(端子飛ばした方がウォルターにはわかりやすいんじゃないかな？
別に調べる事は構わないけどね)

(んー……。……って言ったら目の前に会長さん)

ウォルターの視界の先に生徒会長、カリアンの姿があった。

カリアンはまっすぐウォルターに向かって進んで来て、ウォルターの目の前でその足を止めた。

「ウォルター君」

何処か神妙な顔つきのカリアンに、ウォルターは眉を寄せて彼を見た。

「……どうかしたのか、会長さん」

「レイフォン君の位置は分かっているかね？」

「いや……、これから探しに行こうかと思っていたところだけんども……。なんか？」

——アルセイフを探してんのか？

疑問の為にウォルターはやや首を傾げながらカリアンを見、カリアンはウォルターと同じように眉を寄せて、ウォルターを見ている。

特に聞く必要もないとウォルターは思ったが、やはり聞いた。

「アルセイフがどうかしたんですか」

「……ニーナ・アントークが居なくなり、キミが居なくなった。それ
境に彼は休むこと無く汚染獣と戦い続け、いまは極度の疲労状態にあ
る。……いわば、暴走しているとも言えるだろう」

「……あのばか……」

ウォルターが眉を寄せる。溜息混じりの舌打ちをすると、額に手を
当てた。

そんなウォルターにカリアンは鋭い視線を向けて来て、口を開く。

「……キミは、何故唐突に居なくなっただ？ キミ程の存在が突然消える

ということとは、キミが自ら消えたとしか思えられない。……どういうつもりだね?」

「オレにはオレのやるべきことがある。……あんたが、なんとしてもこのツエルニを救いたいというように、オレはなんとしてもやらなければならぬことがある」

「……それは……、いまのキミの『仲間』とも呼べる人間を、捨てるにしても……かな?」

その眼差しに対して、ウォルターは軽く片眉をあげた。

まるで、カリアンの言っている言葉の意味が分からないというような表情で。

「……『仲間』? ……捨てるものにも、オレは拾ったつもりも持ったつもりもない」

「……キミもキミで、困った人だ」

すでに興味が失せた顔でウォルターはカリアンから眼を逸らし、頭を掻きながら面倒くさそうに溜息を吐く。

「キミはそう言いながら、結局はレイフォン君を探しているのだろう? ……つまりはそういうことだ」

「……かもな? ……まったく、面倒なヤツだぜ、あいつも」

「そういうキミも同じ分類の人間だろう」

カリアンがそう言つて、ウォルターを何処か呆れたような眼を見た。

その言葉にウォルターは少し俯きがちに顔を下げて、カリアンには見えないように自嘲気味な笑みを浮かべ、かすれた声で呟く。

「……人間、か。……そうだな……、オレも『面倒なヤツ』で居られる間は、そうなんだろうな」

「ウォルター君?」

「……いいや、なんでもない。……で? ……そんな事が聞けて満足か?」

ウォルターはそう言つてカリアンに向けて笑みを浮かべた。たじろぎこそしなかったものの、ややカリアンの笑みが引きつる。

この笑みは、懐かしい笑みだ。カリアンは内心でそう思う。

「キミは変わらないようなふりをして……、わたしが知る中ではおそら

く一番変化した人物だろう」

「……………いきなり、なんだ？ なにが言いたいんだ、あんたは」

「あの時から、ね」

「ああ、そういえばあんたはオレの入学時からさんざん食って掛かってきたモンな」

ウォルターに浮かぶ笑みが深まった。

その笑みに鮮烈さが増したそれを見、カリアンは軽く瞳を伏せて、あの時“を思い出す。

そう、あれはウォルターがツエル二へ入学してきた時だ。

いきなり上級生数人との喧嘩を始めたウォルターは、平然と武芸科の上級生数人を蹴散らしてしまった。理由はかなりチンケなものだったが、売られた喧嘩は買う主義で動いていたウォルターは容赦無く上級生全員を病院送りにした。

戦いというものは、ただの人間であるカリアンからすれば、それは酷く遠い世界。

一瞬の隙で命の灯火が消える、激烈な世界に身を置く者達。

たとえただの喧嘩であろうと一種の“戦場”に立つ彼の瞳には、隠されもしない程明らかかな、鋭く練磨された刃のような光が宿っていた。

いまの彼の瞳には、その光がほんの僅かだがそれを見ることが出来る。

——学園都市に居るからといって、その彼の“刃”が錆びた

わけでも、なくなつたわけでもない…………、そういうことか

こうやって彼の瞳をまっすぐ見つめると思う。

彼の刃は、日頃はただ巧妙に隠されていただけなのだ。

隠しきる事の出来ない筈の凶暴な刃は、日常の中に埋没させられるように、息を潜めていただけなのだ。

カリアンはその懐かしい瞳の光に、過去へ思いを馳せさせられた。

あの頃の彼を例えるならば、まさに一振りの剣と言えた。

使い手のいない剣。使い手を持たず、自らの意志のみですべてをこなす剣だ。

決して誰にも屈することの無い、鋼のように鍛えぬかれたその気高き意志と、冷徹とした佇まい、そしてなにより彼で最も印象が強いものは、その瞳だ。

彼の瞳は、いえば彼自身のすべてを写していると言えただろう。

その瞳は誰をも戦慄させるような瞳だ。

酷薄で冷淡な印象のみを受ける彼の瞳は、一瞥で彼の沈みきった感情を察しさせる。

入学時の彼の瞳は、まさにそれだった。

そして、カリアンが生徒会長になり彼を小隊へ呼んだ時も、そうだった。

「やあ、ウォルター・ルレイスフオーン君」

「……はあ」

面倒くさい。かつたるい。

まさにそういった雰囲気を漂わせる目の前の彼：ウォルターは、カリアンに気の抜けた返事を返した。

「疲れていたりしたかな、ウォルター君」

「……いえ、そういうわけじゃねえですけど」

「そう。それは良かった。…実は、キミに折り入って相談があるんだ」
「……はあ」

相変わらず気の抜けた返事を繰り返すウォルターは、カリアンが座るように促した事に従いソファに腰を下ろすと鋭い眼差しでカリアンを見た。

「で…、オレに何か用ですか」

「ああ、実はキミに小隊に入ってもらえないかと思っているんだ」

「……それは、全部断っている筈ですけど」

ウォルターは先程より眼を細め、カリアンを見た。

彼が言った事は、カリアンも調査済みだ。いや、調査せずとも彼について周辺のクラスメートに聞けば、すぐに浮上する事実だった。

彼は、幾度となくされる小隊へのスカウトにすべて断りをしているのだ。

このツエルニにおいて、武芸科に所属する武芸者にとっては小隊への入隊は一種の憧れの対象であり、小隊員という存在はより輝かしい存在とされている。

その中で、現在ある小隊すべてからスカウトをされながら、すべてを断っているというのだから驚きだ。

何度も頼み込む小隊も居るそうだが、彼に一蹴されズタボロに悪態を吐かれ泣きをみる事が多いらしい。

しかし、彼の実力は揺るぎない為に彼の奪取に様々な手が尽くされているとの噂も聞く。

彼の断る主な理由としては、面白味が無い、やる意味を見いだせない、面倒くさいなど。

真面目なのか不真面目なのか、やや判断に悩むような回答が幾つか聞かれるがそれでもキャリアンには諦める気は無かった。

「…キミは、小隊に所属することのなになが不満なんだい？」

「あー…？ ……小隊が弱い」

「…ああ、直接的な問題、つてことかな？」

「そういう事もあるし…、面倒。放課後毎日練習あるとか、面倒。そんな余裕無い」

「…だがキミは確か、奨学金Aだったと思うが？」

そう言いながらキャリアンは1枚の紙をウォルターに見せた。

それは、ウォルターの入学届け。

ウォルターの入学届けは、ほぼ空白で特に目立った功績というものは無い。

しかし実際彼は成績優秀、武芸者としても最高峰、やや生活態度に難はあるものの、それは前者ですべて解決され、奨学金Aを獲得している。

簡単なバイトをしても日々の生活には困らない程の余裕はあるだろうし、金銭の余裕もある筈だった。

「奨学金Aだろうとなんだらうと関係ない。オレは機関掃除やつてるから、そんなモンやる気無い」

「そうか…。こう言っては悪いかもしれないが、キミより劣悪な状況

で両方共こなしている生徒も居るが?」

「知らないね。オレにはオレのやる事がある。いちいちそんな事に構ってられるか」

大きな溜息を吐いたウォルターは、ちらとカリアンに視線を向け、にやりとした笑みを浮かべる。

「なに? オレに『ツエルニを救ってください』って言いたいわけ」

「……端的に言うのと、そうだね」

「セルニウム鉱山は余裕無いしな。次の武芸大会で負ければツエルニから全員退避することになるだろう」

「……………それを、防ぎたいのだよ。わたしは」

「ふうん? ……ま、あんたがこの都市に対してどう思ってるかなんて興味ねえし、知らねえよ」

ウォルターがそう言って再び溜息を吐いた。

そんなウォルターに、カリアンはふと思いついた事を口にする。

「そういえば、キミを何度もスカウトするべく居る小隊があるそうだね」

「……………ああ、誰だっけ……………十七小隊?」

「隊長、ニーナ・アントークだね。狙撃手シャーニッド・エリプトン、そして念威操者フェリ・ロス」

「あんたの妹か。……………確か、転科させたんだっけ? 自分の為なら妹も使うってか」

けらけらと笑い、カリアンを見るウォルターにはカリアンを見下すような雰囲気は見られない。

ただ、事実を笑っているだけのようだった。

「…外道だといふかな」

「いいや? オレの方がきつと酷え事をしてきただろうし。オレにはあんたを罵るような権利は無い。…ただ、哀れだなあと思う程度だ」

「……………少し、昔話に付き合ってくれないかな」

カリアンは小さな声で語る。

自身がこのツエルニへ来る事になった理由。

会いたかった人物。

その人物が愛したこの都市。
共に居た存在たち。

「……………あんたさ」

話を聞いていたウォルターは、カリアンの口から発せられた名前に一瞬片眉をあげたが、それでも平然と口を開く。

「あんたがこの都市を好きなのは、あんたの好きな人が好きだったからじゃねえのか」

「……………そうだね。言われればそうなんだろう。だけれど、わたしはそれを恥じる気はない。この都市は、ここの生徒誰もが必要とするものであるには違いないのだから」

「…ふん、そこまで真顔で言えりやあ大したモンだ」

呆れ、諦めたような、そんな表情でウォルターは言うともまた溜息を吐く。

カリアンはそんなウォルターをじっと見据えて居た。

「……………先の話に戻るが…、キミは十七小隊の何処が気に入らないんだい？ 何度もスカウトされているなら、折れてもいいんじゃないかい？」

「面倒なんだよ、人と関わるのは。大体、誰だ…、ニーナ・アントーク？ はさ、ただ単に熱血—つてだけで突っ走るタイプだからな。ああいうのは相手するのが面倒なタイプだ」

「…ふむ…。ところでウォルター君。キミは集団戦の利は？」

「無いね。オレは一对一の戦いや一人対複数っていうのに慣れてるだけで、集団戦は嫌いだ」

言い切るウォルターに、ある意味清々しささえ感じる。

だが、それでもカリアンは「ふむ」と呟くのみで、特に引く気も無いようだった。

「……………なら、こう考えてみてはどうかな？」

「……………あ？」

「キミは集団戦に対しての利が無いのだろう、なら小隊に参加し、キミがしたいという事の為に集団戦の練習と考えるとは、」

「……………お前は…………、誰に向かって言ってるんだ？」

冷えきった声音と、冷酷な瞳がカリアンを射抜いた。

その視線にカリアンは言葉を詰まらせ、ウォルターは見下すようにカリアンを見る。

「残念だが、オレのしたいことに集団戦が必要になることは無い。それと、所詮学園都市の武芸者程度と小隊を組んで集団戦をした所で、オレの集団戦練習になる筈も無い」

「……………」

カリアンは一理あるなど納得しつつ、それでいて困ったという表情を浮かべた。

確かにウォルターにとってはそうだろう。彼は圧倒的な実力を持っている為、共に戦う仲間を必要としない。

集団戦など、彼の実力を考えれば必要無いだろう。

「だが、わたしはキミにやってほしいんだよ」

「……………分かんねえな。なんでそこまでオレにご執心なんだよ」

「…わたしは独自の調べでキミがグレンダンで最強の地位を持っていると知っている。……………そのちからを、この都市の為に使って欲しい」
「……………そんなことをするメリットがオレには無い。そう言われようと無駄だと、さつきからの話続きで分からなかったのか？」

「……………キミがそこまで頑なに拒む理由の方が、わからないけれどね」

「やる意味がない。それで終わりだ」

ウォルターは話にならない、と頭を振りソファから立ち上がる。

制止しようとするカリアンの声も気に止めず、踵を返して生徒会室を出た。

“僕”と“レイフォン・アルセイフ”

ほんの少しだけ口角をあげ、ウォルターはカリアンを見た。

カリアンはひとつ息を吐いてから改めてウォルターに視線を向ける。

「そうだね、本題に入ろうか。こうしてツエルニに居てくれている。それが事実だね。……わたしが言いたいのにはレイフォン君のことだ。次の汚染獣との接触まで1週間あるのでね、レイフォン君には休んで欲しいんだが…、いまの彼はおそらく誰のいうことも聞かないだろう。だからこそ、キミにレイフォン君を説得して欲しいと思っっている」

「……果たして、オレなんかの説得をあいつが聞かかねえ……？」

「聞く、聞かないではない。おそらくわたしの説得では、聞いてくれたとしてもキミ程の影響は無いと思うわけだよ」

「そうか？ あんたが言おうとオレが言おうと同じだと思っただが。……あんたがどう感じてんのかは知らねえし、あいつがどういう状況なのかオレには分かんねえからなんとも言えない様がない訳なんだが……、おそらく、あんたでも変わらねえと思うぜ、オレは」

軽く肩を竦めてそう言うと、ウォルターは片眉を上げつつ笑みを浮かべる。

だが、カリアンは軽く頭を振って真剣な眼差しを向けている。

「キミでないのだめだろう。きつとね」

「……はーあ……、それもそれで面倒くせえなあ……」

「いまキミがすべきことはそういうことなんだろう。諦めてしまえ」

「へえへえ。了解しましたよ」

ウォルターは自嘲気味に笑みを浮かべて髪をかき回しつつ踵を返して、カリアンに背を向けた。

歩き出そうと息を吐く。カリアンが口を開き、ウォルターはそれに足を止める。

「レイフォン君に、言っておいてくれないか？」

「……なにをだ」

「逃げるな、と。…他にわたしが言いたいことは、きつとキミも分かっているだろう」

「……………まあ…な」

カリアンの眼を背中越しに見、ウォルターは再び頭を掻いた。

言われずとも、きつと言いたい事は同じなのだろうが、あえてなにも言わないカリアンに肩を竦めてひらりと手を振った。

「わかってるよ。アルセイフを休ませられるなら、オレは好きなように言っつていいんだな？」

「そういうことだね。……頼むよ」

軽く頷いて、ウォルターは歩き出した。

病院の外に出ると、ウォルターは重晶鍊金鋼を展開させて念威端子を宙へ舞わせた。

その念威端子を使い、レイフォンの剽の感覚を追う。

(……ウォルター、大丈夫？)

(……ん？ 悪い、なんか言っただか？)

(大丈夫？ っつて言っただよ。随分辛そうだし…、やっぱり代わろうか？)

ルウが心配気にウォルターに声をかけてくる。

事実、ウォルターの頬には汗が伝っていて、頭痛が思考を揺さぶり、視界が痛みで揺らぐ。

純粹な武芸者でもなければ念威操者ですらないウォルターに、念威で細かな作業をする……それも通信ではなく、剽の波動を追うということは脳に酷く負荷をかける作業だ。

ウォルターはその負荷により脳みそが沸くような錯覚を覚える。

(これ以上は危ないんじゃない？)

(まだ初めて5分と経ってない。まだ平気だ)

(倒れてからじゃ遅いんだよ。この後レイフォン・アルセイフを説得

しなくちやいけないのに、沸いた頭で出来るの?)

(……あと、2分。2分で見つけるから)

(……もう……)

ルウは大きな溜息を吐いて、眉根を寄せた。

そんなルウにウォルターは肩を竦め、それでも念威に集中する。

(……元々は、通信とか状況を薄ぼんやり把握する為だけにとつたものでしょ? 意に沿わない使い方は、身体に多大な負荷をかけるって分かってるくせに……、どうしてそんなに頑張るのさ。……人間なんて言う、ばかばかしいヤツらの為なんか……)

ルウが苛立たしそうに舌打ち混じりでそう言った。

念威に集中しているウォルターに、返答を返す余裕が無い事はわかりきっている為ルウも返事を期待しては居ない。

だが、それでも言わずには居られなかった。

(……どうせ、レイフォン・アルセイフは“ウォルターが居る事”がどれだけ凄いかなんて、気付こうとはしないんだ。僕のウォルターが、この世界のためにすべてを懸けて戦っているのに……、なのについて、いつも文句ばかり。ウォルターに対して突っかかってばかり。心配かけてばかり。本当に、消してやりたい程僕はレイフォン・アルセイフが嫌いだ)

“中”で膝を抱え込むようにして文句を言うルウは、ウォルターがレイフォンを見つけた時、本気で消してやろうかと考えていた。

ルウにとってウォルターこそがすべてであり、ウォルターが頼むから、しているからこそ手伝っているだけで、そうでなければすべて消して終わらせる。

それだけだ。

だが、それでもそうしないのはウォルターが居るからで、ウォルターの意志を尊重したいというルウの思いからだ。

しかしそれでも、ウォルターに仇なす存在は許容範囲外だ。

たとえ現在ウォルターと活動を共にする存在であろうと、ウォルターに危害を加える相手にルウが慈悲を与える必要は無いし、庇い立てるような事は一切しない。

そして、現時点でルウの中で最も評価が低いのはレイフォンだ。
何故ならルウにとつては一番気に入らない存在だから。

(ウォルターがどれだけ、レイフォン・アルセイフという存在を気にかけているかなんて、あいつは気付きもしない。気づこうともしてない。……それが、何よりも腹立たしいんだ)

レイフォン・アルセイフ。

彼は孤児ということから“つながりをもたずに”生きてきた。

そして不器用ながら生き、彼はその持ち前の不器用さによりすべてを失った。

正直な所、ルウは彼の性格、というよりも彼自身の“性質”については親近感を覚えてすらいる。

ルウもまた、自らの行いのために自らの肉体を失った存在であり、ただ“したいこと”があっただけで、その願いを叶えたくて躍起になっていたただけだ。だが、そのせいで自分はこうなった。

彼もまた願いを叶えるために躍起になり、都市を放逐されるという状況に陥った。

同じような境遇だといえ、そうだろう。ルウが彼を批判するのを同属嫌悪だと言われれば、ある意味そうだと言えるが、ルウが嫌う決定的な理由が違うため、それは違うとも言える。

ただ、ウォルターの邪魔をする。それがルウにとつて気に入らない。それだけだ。

(……まあ……ハイア・ライアも気に入らないけど、ね)

ハイアに至つてはルウが大好きなウォルターにべたべたとくつつくのだ、気に入る筈がない。

軽く溜息を吐き、ルウは残り時間の確認をする。

(……後30秒)

聞こえていないであろう呟きを小さくもらす。ルウは静かに視線を横へと投げた。

「……………見つけた」

(ちえつ、見つけちゃった)

(…悪かったな、見つけて)

(別にー? ……というか大丈夫? 酷い汗だけど)

ウォルターは頬を伝う汗を手で拭い取り、息を吐く。

(平気だよ。このくらいは)

(…嘘つき。無理してるくせに…)

ルウがウォルターを責めるような口調で鋭く言い放つが、それにも軽く苦笑して肩を竦める事しかしないウォルターにルウは眉を寄せ
る。

だが、レイフオンの位置を把握したウォルターは跳躍し、屋根に
がり一気に駆け出した。

屋根上を走るウォルターに、ルウは呆れ混じりの声音で話しかけ
る。

(……本当、優しい “人間” になったよね)

「…そうか?」

(そうだよ。確かに、ウォルターって元々優しかったし、やる時はやる
派の人だけどき。昔はこんなにも優しくはなかったよ)

「…そうかねえ…? ……あ、でもそう言われればそうかもなあ。で
もあれだ、そこまでじゃないと思うぞ。いまでも」

ウォルターが何気なくそう言うと、ルウから苦笑が返ってきた。

(そう言うのはキミだからでしょ)

「あー…、そう…だなあ…」

(ウォルター、さつき頭沸かしたから頭回ってないよ…)

ルウに言われてウォルターはやや頬をひきつらせてなんとなく眼
を逸らす。その行動が無意味だとはわかりきっているが、せずには居
られなかった。

そんなウォルターにルウは肩を竦め、溜息を吐く。

(…ウォルター、本当に後で怒るからね)

「……いや、勘弁して…」

ウォルターは頬をひきつらせたままそう言い、ルウは、つんつと
そっぽを向いてしまう。

そっぽを向かれたウォルターはなんと弁解しようか困り果てて居
たが、それでもレイフオンの説得の為溜息を吐いた。

焦燥

機関室から何処へという宛もなく走っていたレイフオンはひとり、外縁部で茫然と荒廃した大地を見つめていた。

背後に気配を感じ、振り向いたレイフオンは息を飲む。

「……ウォルター……？」

「よう。留守にして悪かったな」

何事も無かったかのように立っているウォルターの姿に、レイフオンは息を詰まらせていた。ウォルターには「いつもの」笑みしか浮かべられていない。それに苛立ちを覚えて、いつもは消されてしまいたいになる言葉を紡ぎ、睨め付けた。

「…何処に行っていたんです」

「ちよつと用事が出来たんで、そっちを見に行ってきたんだよ」

「……そんな理由で…、居なくなっただんですか」

「そうだな」

「勝手にすぎますよ！ ……あなたは、あなたは……ッ、」

自分の中で多くの感情が渦巻いて、うまく言葉にできないレイフオンは言葉を詰まらせた。唇を噛んで俯いたレイフオンを、ウォルターはいつもの様に面倒なヤツだ、とでも言いたげな視線で見下ろす。

——…僕が、どれだけ心配したと思ってるんだ……ッ

そう、言っただけだった。

だがそれを言えば自分の意地が折れてしまうような気がして言えなくて、他のことを言おうとして言えなくなつて、結局レイフオンはなにも言えなかった。

どれだけ自分がかかっても何も変わらない。それを象徴するかのよう存在のウォルターを睨みつけて、レイフオンは拳を握る。

「……悪かったよ。本当に」

しかし、ウォルターから発せられた言葉は意外な言葉だった。バツが悪いと眼を逸らす彼は、手を首に当てていた。

意外な言葉に、返答を用意できなかったレイフオンは唇を噛んで眼を逸らした。震える声を必死に震えないよう、彼に伝わらないよう、

レイフオンは絞りだすように冷静な声でウォルターに言う。

「……ウォルター、汚染獣が迫っているんです」

「分かっている」

「……だから、手伝って欲しいんです。これは返します」

レイフオンはそう言ってポケットから金色の腕輪を取り出し、ウォルターにむかって差し出す。

だが、そんなレイフオンにウォルターは先程の言葉とは裏腹な、冷め切った眼を向けていた。

「……ウォルターは念威も扱えますよね。だから念威で汚染獣の感知をしてくれるだけでいい、僕が戦う。……だから、」

「アルセイフ」

「……なん、ですか……?」

ウォルターが静かにレイフオンを見据えた。その一言と視線に氣圧されたように、レイフオンが若干視線を泳がせる。

レイフオンにとっては、もうウォルターが突然居なくなってしまうことは不問だった。

いまこうして自身の目の前に居る。帰って来てくれている。それならばもうそれでいい。

ただ、まだニーナは帰って来ていない。そしてフェリも倒れてしまった。

まだツエルニは汚染獣の群れの中にいる。ならば、倒さなければならぬ。

戦わなければ生き残れない。目に見えている事柄だ。

ウォルターは呟くのみで言葉を紡ごうとしない。こうしている間にも汚染獣は迫っている。両者に焦らされ、レイフオンは止められたがそれでも口を開く。

「……ウォルター、僕は戦います。その為に、ちからを……」

「何の為に?」

「え?」

「何の為に戦う? お前は」

「……え……?」

レイフオンの気の抜けたような声が、静寂に落ちた。

「そ…、そんな謎掛けをしている暇は無いんです、ウォルター。汚染獣はすぐそこに居るんですよ？ 戦わないと……」

「何故？ 何のために？ どうして戦う」

「…ッ、ウォルター！」

問いしか言わないウォルターをレイフオンが焦りと苛立ちで鋭く睨みつける。動じないことはわかりきって居る、しかしそれでもなにも変わらない彼が苛立たしかった。

冷徹な瞳を維持するウォルターは、再び問いを口にする。

「お前は何故戦う」

「…いま、やることをやらなくて、どうするんですか。僕にできることをしなくて、どうしろっていうんですか」

ウォルターは片眉を上げて酷薄な瞳を向けた。あの時のように。

向けられた瞳は一瞥でレイフオンの心身を凍りつかせ、その瞳に息を飲む。

「そうやってがむしやらにやってお前は何を得た？ 何かを得られたのか？」

「……謎掛けは、」

「そうやってして、アントークが帰ってくるんでも思ってるのか」

レイフオンは言い淀む。ウォルターは言い放つ。

鋭く凍てつくような言葉を、冷徹で、酷薄な態度で。まるであの時

……天剣授受者決定戦の時のような雰囲気がこの場に充満していた。

「お前だってそこまでばかじゃない。自分が『依存』していた相手がいなくなつた程度で、そのざまか。……くだらない」

「…僕は、依存なんて……」

「そう言い切れるのか、お前は」

ウォルターの地を這うように低い声音に、レイフオンが竦み上がった。

意図してなのか分からないウォルターの声に乗せられた剄に打たれて、レイフオンは息を飲み、言葉を詰まらせる。

その声はレイフオンに宿りかけた怒りという炎を一瞬にして吹き

消し、身体の奥底から震えを駆け上がらせる。レイフオンは知らず知らずのうちに拳を握っていた。

「……今更嘆いたって無駄だ。何も覆りはしない」

「そんな……ッ」

言い返そうとしたレイフオンは、ウォルターからあの時と同じ圧力に気圧されて言葉を発せなくなる。

喉まで出てきていた言葉は、しかし紡がれず霧散していく。

「依存してない、そうお前が言うならそうでもいい。オレには関係ないことだ。だが、それでオレのやることを邪魔されるのは、癪に障るンでな。…お前はこうして諦めている？」

諦める。何を？ 武芸をやめることを？ それとも、武芸に理由を持つことを？

どれも当てはまるだろうけれど、どれも違う。

レイフオンは息を吸い込んで、腹から叫ぶように言葉を発した。

「諦めているわけじゃない！ ……だけど、だけど…、どうしようもないんだ」

「それはお前がそうだと思っているから、だろう？」

ウォルターはレイフオンの反論を通そうとはしない。先程よりも冷えきっている瞳に、レイフオンは恐怖を抱く。

恐怖で震える声に必死で気付かれないよう言葉を紡ぎ、彼を見る。

「僕だって、どうしてこうなったのか、わからないんだ」

いいや、分かっている。

グレンダンを放逐された理由だって、ここに來てからのことだって。

一番見つけたいものが、見つかっていない。

こうなった理由は分かっている。ここから自分がどうなるのか、どうしたいのか。

ただ進めば、見つかると思っていたから。

それじゃだめだと気づいた時には、遅かった。

黙り込んだレイフオンに、ウォルターは溜息を吐く。

その溜息には何処か、いまのレイフオンに通ずるものが含まれてい

るようにも思えた。

「……ただなんか生きてりやあ、それでいいんだって思ってた時期が、オレにもあった」

紡がれた言葉は、酷く遠いものを見ているような声音で紡がれた。ウォルターの瞳は悲観的で、全てへの失望を映す。

何処か脱力したような言葉を紡ぎながらも、ウォルターの手は剣帯に収まるひとつの錬金鋼を握りしめていた。

「そうしていれば、なるとかなるってさ。…けど、なるとかなったことなんてなかった。全部、だめだった。気付いても、気付いていないふりをしていた」

ずっとずっと気付いていた。

かつてあちこちを回っていた時から、気付いていた。ずっと心の奥で、じりじりと思考を焦がしていたことだったから。

だけど気付かないふりをしていた。

一瞬浮かんだ映像をかき消すように、ウォルターは眼を伏せる。

気付いている自分ですら嘆かなかった。しかしそれでも空虚だと感じていた。

あなたは誰？ そんな単純な問いに、自らの名前すら答えられないようなモノ。

「…オレは偉そうに言えるような人生を歩んでない。前も言ったろ。だから言えることもある、って」

レイフォンはウォルターの真っ直ぐな瞳に吸い込まれそうな錯覚に陥る。

まさか、ウォルターが自分の事を話すとは思わなかった。前もほんの少しだけ過去をにおわせることは言っていたけれど、はつきりと言われたことは初めてで、レイフォンは戸惑いを感じていた。

ウォルターの表情に変わりはない。あえて言うなら、自嘲気味な笑みが浮かべられた事くらいだ。

「…誰もから賛美されるような事しろとか、誰も成したことのない偉業を成せとかそういう事じゃねえんだ。オレだって口に出せば仰々しい事かもしれないが、やってることはちやちな真似の一言だしな」

そう言つてウォルターはやはり自嘲気味に笑みを浮かべる。レイフオンは視線を逸らして、小さく呟いた。

「…それでもやってている規模が違うことは、確かでしょう。そう自分で言うことでも、何かを見つけていることは確かでしょう」

「ああ、そうだな。確かに、いまは見つけているって言えるのかもな。こんなことでも。…最終的には、自分の意志でやるかどうか、それだけだろ」

「やっぱり、ウォルターはウォルターだ。……そうやって……、…ウォルターはいつも先に居て、僕を…僕らをおいていくんですね」

「…お前がそう感じるなら、そうなのかもな」

「……………」

元々活判で聴力をあげていたウォルターはレイフオンの小さな呟きも聞き漏らさなかった。

「ずっとそうつてわけじゃねえだろ。オレはカミサマジやねえんだ、お前が追いつこうと思えば追いつける。……お前がそうあるというなら、たどる運命は同じだろう」

—— そう、その身に宿す因子に連れられて

ウォルターはやや眼を伏せがちにしてそう思う。

そう、レイフオンはその身に宿している。世界に関わる因子を。

ニーナ・アントーク、アルシエイラ・アルモニス、リーリン・マーフェス、そして天剣授受者達。

それらと同じ世界の運命に関わる為の因子を備えている。ただし、レイフオンの因子は少し違うという事をウォルターは知っている。

—— だが、いまはそんなことを考えている暇は無いな

俯いてほんの少しだけ思考に耽っているレイフオンを見ながら、ウォルターは軽く頭を振った。

レイフオンはウォルターの言葉に入学当初あたりの機関掃除の際、ウォルターと一緒に掃除していた時に言われた言葉を思い出した。

『オレは関わる運命に居る。たとえば、それとして居なくても』

運命。

よく考えれば、レイフオンがツエルニに入学してから2人で話をす

る度に、ウォルターはそんなことを呟いていた。
『なによりお前は、絶対に知るようになるからだ。いまはまだ時じゃねえ』

ウォルターの言葉から察するに、レイフオンはなにがどうあれ必ずウォルターの言っている運命に携わる事になる。

ならば、いま急ぐ必要は無いのではないかとも考える事が出来る。

レイフオンが思考に気を取られている間に、ウォルターはひとつ息を吐き、話を戻した。

「お前は見つけるべきだ。自分自身の“理由”を」

その静かな低音の声音が、レイフオンを思考から現実へ引き戻した。

「さつき言ったな。依存していないと」

レイフオンは弾かれたようにウォルターを見、その表情をこわばらせた。

「じゃあいまのお前のその狼狽ぶりは何なんだ？ 無様に顔をしかめている理由はなんだ？」

「……………!!」

「強く大きな意志に引き摺られたお前は、何がしたいんだ？」

そう言い放ち、ウォルターはひとつ息を吐く。

このまま言いたいことはいくつかあるが、それをすべて行った所できっと彼はわかりきらないだろうし、彼は理解しきれないだろう。

正直ウォルター自身、感情のままに言葉を発するのは苦手であるし、話は組み立てて話したほうが話しやすいこともある。説得には好都合だろう。

「…………ちったあ頭冷やせ。先も言ったが、お前がぶっ倒れようと何をしようとしてアントークが帰ってくるわけじゃねえんだ」

「…………じゃあ、どうしろって言うんですか」

「そんなモン、」

「“自分で考えろ”、でしよう？ ……聞き飽きました、そんな言葉……分らないから、少しでも自分にできることをしようって、隊長を追いかけて来ました。…それなのに、ウォルターはそれをだめだって言

う……！」

「違うな」

ウォルターはため息混じりにそう言い放ち、呆れた目線をレイフォンへ向けた。レイフォンはわけがわからないという顔でウォルターを凝視する。

しかし、先程の雰囲気を消した彼にその瞳は通用しない。

「……いいか？ オレが言いたいのには、ニーナ・アントークを追いかけるな。じゃない。もう一步先、それにばかり気を取られて、お前自身の本来の目的を見失うな。だ」

—— 本来の目的を、見失っている……？

確かに自分でもがむしゃらに戦っていたとはわかりきっている。だが、それでもこれしか出来ないと思っただのだ。

ニーナがいなくなり、ウォルターが居なくなり。

どうすればいいのかわからなくなったけれど、自分にできることを考えた。その結果が、ツエルニを守る為に、汚染獣と戦う。

戦って生きてきた自分は、戦うことしかできない。

だからこそ、戦っていた。それだけなのに。

「……戦うだけでは、だめなんですか？」

「……どうい……」

「あなたが腕輪を渡してきた。あなたがあれほど大切にしていたこれを」

レイフォンは手に握っている腕輪を更に握りしめて、そう言う。

「僕はあなたが戦い続けていると、そうわかっています、平凡な日常にいても、この学園都市にいても、あなたは決してそれに埋没することはない。…僕も戦わなくてはと思いました。だから戦っていました。……僕は、」

「オレの事情は関係無いだろ」

ウォルターの突き放すようないい振りにレイフォンは一瞬眼を見開いて、ウォルターから視線を外した。

「……あなたは、本当にわけがわかりません」

「わかってもらおうなンギ、思っただ事もない」

「……じゃあ、どうして居なくなったのか、ってことも、そういう適当な考えでしたんですか」

「別に。…さっきも言ったが、オレはオレのやるべきことが出来たから行っただけだ。他意はねえよ」

ウォルターはため息混じりに言い、肩を竦めた。

—— やっぱり、いらいらする

この余裕、周りの人間を気にかけるもしないこの態度。

レイフォンは先程意気消沈した怒りが再び息を吹き返しつつあった。

「……あなたは……、本当になにを考えているんです？ この非常事態に、あなたは自分の事しか考えていない。いつもあなたはそうだ。利己的で、自己本位の行動ばかり！ 僕らの事をなにも考えていない！」

叫ぶように言葉を紡ぐレイフォンに対してウォルターはなにも言わない。

珍しく反論してこないウォルターに、レイフォンは感情にまかせて言葉を言い放つ。

「自分のやるべきことが出来た？ あなたの『やるべきこと』がどれだけ大切かなんて、僕は知らない！ だけど、いまあなたの周りにいる人をないがしろにしてでもすべきことってなんですか?! みんな、あなたを心配していたっていうのに……一言、声をかけてくれたって……それなのに、あなたは……ッ」

最低な人だ。

そう罵ろうとした。言おうとした。彼はなにも言う様子はない。

レイフォンの感情が思考のままに言葉を吐こうとしたとき、静かに激昂している声音が、重く、這うように発された。

(……………消す)

その声は、酷く、『彼』に似ていた。だが声の主を見つけることは出来ず、レイフォンは一瞬怒りを忘れて、眩きをこぼす。

「……………え……………？」

(ばか……………っ！)

ウォルターを中心に、豪風が吹き荒れた。

揺れる水縹

ウォルターを中心に吹き荒れた豪風はレイフォンの身体を打ち、その豪風にやや身体を押される。咄嗟にレイフォンは腕と到で風を防ぐが、防ぎきれなかった風に押されてやや後退してしまう。

「な、なん……っ」

頭に直接響いた声や、いきなり吹き荒れた豪風にレイフォンが眼を見開いて、手に持っていたウォルターの刀を反射的に復元し、構えた。

(……消す、絶対消してやる。このガキ)

(ばか、やめろってば！)

更に濃密となった殺気が場を満たした。

激烈なその殺気は激しくレイフォンの身体をうち、豪風よって舞上がった砂塵にレイフォンが眼を細め、戸惑う。

「な、何ですか……ッ？」

(ルウ！)

殺気の源はルウだった。

ウォルターの「中」に存在するルウが、異界法則を扱って豪風を吹き荒らした。

制止をかけるウォルターの言葉は聞いているが、それでもいつ異界法則を展開するかわからない。ルウはいまにもレイフォンを消しかねない殺気を放っている。

ルウがほんの少しだけ声音を落ち着かせて、ウォルターに言う。

(……いままで堪えてたんだ、文句は聞かないよ)

(だめだ。これ以上はなにもするな)

(やだ。許さない。絶対にこいつ許さない。本当に消してやる)

(やめろ、いまずべき事はそんなことじゃないだろ)

ウォルターの言葉にも耳をかそうとしないルウに、ウォルターは舌打ちをしたい気分になる。

ルウはルウでウォルターを考えてくれているのはウォルターも重々承知しているのだが、それでも止めなくてはならない。

(ルウ、頼むから……！)

(……どうしてかばうのさ。あんなの、居ても居なくても同じでしょ？ どうしてかばうの、ねえ)

(メリットは無い。それに、この場は他のヤツだつて見てる。軽率な行動は起こすな)

(軽率な行動だろうといいよ。邪魔なガキが消えるなら僕は嬉しい訳だし、あいつがいなくなつて一緒。……十分でしょ?)

(……ルウ、じゃあこうしよう)

怒りはおさまらないらしいルウに、ウォルターは提案を持ちかけた。やはりルウは渋る様子を見せたが、それでも仕方ないとばかりに頷いてくれる。

昔だつたなら決して折れてはくれなかつただろうが、今では折れてくれる様になつたのか。おとなになつたな、とウォルターは一瞬状況を忘れてしみじみと感動しそうになつた。

実際、提案において能力行使はルウに任せた。ウォルターを通しての能力行使だが、それでも何もさせないよりはマシだろうし、なによりにこれからウォルターが行おうとしていることはルウでなくては出来ない。

ルウが盛大なため息を吐き、至つて面白くないというような声音で呟いた。

(……仕方ないな……。じゃあ僕は、間違えて「拒絶」しないようにするよ)

(そうしてくれ。……悪いな)

(べくつに〜? ……僕がウォルターのお願いを断れるわけ無いでしょ?)

やつぱりまだ機嫌は斜めか、と内心で軽く苦笑しながら、ウォルターはレイフォンに向き直つた。

レイフォンは未だ状況把握ができていないようで、驚愕と困惑の混じつた瞳でウォルターへ視線を向けている。

「……ウォルター」

「アルセイフ、落ち着け」

「いま、のは」

「なんでもない」

驚愕に表情を染めるレイフォンにウォルターは静かな声音で言うが、当のレイフォンは復元したウォルターの刀を握りしめてその場から動かない。

絞り出したような声で、小さくレイフォンが呟く。

「またあなたは……そうやって嘘を吐く」

「嘘じゃねえよ、アルセイフ」

「またそうやって、軽々しく嘘を吐いて、また何処かへ行く。ツエルニから離れて、嘘を吐いて、また勝手にして」

「……アルセイフ」

「また、あなたが十七小隊を混乱させる」

僕の歩む道も。

微かに震える、レイフォンの声音。

先程の提案において、ルウはすでに準備を終えている。後は、ウォルターがレイフォンに近付くだけ。

ウォルターが一步、レイフォンに近づこうと踏み出すが、レイフォンは握っている刀を更に強く握り警戒の意志を示す。

来るな。

その意志の表れだとわかったが、それでもそこでなにもしないわけにもいかない。

「……刀を下げる」

「ウォルターの……『やらなければならないこと』を疑う気はありません。でも、……でも、もう少しくらい、僕らの事を考えてくれないんじゃないですか?」

レイフォンの揺れる水縹の瞳がこちらを見る。だが、その瞳に対してもウォルターの感情が揺れる事はない。

それにレイフォンは俯き、口を嚙む。その様子を見ながら軽くひとつ息を吐いて、ウォルターは言葉を紡いだ。

「え?」

微かに紡がれた言葉はレイフォンの耳に確かに届いた。弾かれた

ようにレイフオンが顔をあげるが、その時すでにウォルターは目の前にいて、レイフオンの顔の前には手が添えられていた。

「……………ツ！」

「……………少し寝てろ」

意識が、暗転した。

「…………ルウ、もうちょっとお手柔らかにしてやれなかったのか？」

地面に倒れ込みそうになったレイフオンを支えつつ、ウォルターはルウに問うた。

ルウにしてもらったことは単純なことだ。ウォルターを通して異界法則を使い、レイフオンの意識を「拒絶」しただけ。

ウォルターを通さずに行うと大まかな位置の指定のみになるため、ウォルターを通してよりの確にレイフオンの意識のみを「拒絶」した。しかしもう少しゆっくり倒れるかと思えば、糸の切れた人形のようにぶつりと落ちるものだから、こう言いたくもなる。

(えっ、僕は充分お手柔らかにしたつもりだったんだけど)

「えっ、…そか…それならまあ…しようがないな」

(まあ、前にウォルターにした時はもっともっとお手柔かにしたけどね)

「あ…、そ…」

そういえば一時期敵対していた頃、自分もルウの異界法則で意識を「拒絶」されたことがあったなと思いついた。あの時はルウも生身だったから彼単体に意識を飛ばされたわけだが、あれはあれでびっくりしたものだ。

当初は再会直後のことだったせいもあり、ルウの異界法則についてウォルターもきちんと把握していなかったことも災いして本気で驚いた。今となってはただの思い出に過ぎないわけではあるものの、きちんとお互いについてわかりあえてよかったと心の底から思う。本当に。

ウォルターの気の抜けたような声音に、ルウは唇を尖らせる。

(あく、信じてないな、その言い方は。本当だつてば。あの時は僕も必

死だったし悪かったけど、ウォルターに対しては今も昔もすーつごく優しいけど?)

「そこはつもりじゃないんだ。確定なんだ」

(うん!)

「いいお返事ですこと」

ウォルターはルウのいい返事に苦笑を浮かべ、レイフオンの手から落ちた腕輪は彼のポケットに突っ込んで抱え直す。

——…そうだ。知られる必要なんて、理解を得る必要なんて無い

“人間”がどう騒ごうと、“自分”には関係無い。

そうウォルターは自分に言い聞かせながら息を吐き、そのまま外縁部から跳躍、病院へと向かった。

「おれ様の活躍の場がない……だと……?!」

「…そんなにショック受けることじゃねえと思うんですけど…、…エリプトン…先輩」

無事にレイフオンを病院送りにすることが出来たウォルターは、レイフオンを運び込んだ病室の外で待機していたシャーニッドと話をしていた。

シャーニッドは一応補助員として後方に配備されていた。しかし、ウォルターの手によってレイフオンが病院送りになったことにより、シャーニッドに活躍の場は与えられなかった。どうやらシャーニッドはその事が不服だったらしい。

「まったくよ、お前も先輩に活躍の場をよこせよ」

「活躍の場って言っても、こうやってしたほうが早かったってだけなんですけど」

「まあ…そうだけだなあ。でもやっぱりせつかく居たんだから、なんかしたかったんだよ」

「その気持ちは、分からないでも…ないです、けど」

「だろ？ もっとこの格好良い先輩に優しくしようぜ」

「……………格好良い？」

「心ゆくまでためて疑問形?!」

ウォルターの真顔に、シャーニツドが衝撃を受けた顔で溜息をつきつつウォルターの肩を叩く。

痛いと言うも、シャーニツドはウォルターの発言を嘆くばかりだ。

「お前はく。もうちよつとそういうことに興味持とうぜ。…格好良いといえばお前、今度暇はあるか」

「あんたはまたいきなり。…まあ、あ…ります、けど…」

「…………よし。ニーナが帰ってきて、ツエルニが落ち着いて、お前も落ち着いたら、十七小隊でどっか行こうぜ！ 遊びに行こう！」

「あんたはナンパに行きたいだけだろ。オレ、あんたと何処か行くとか本当に勘弁」

「酷い言い草。だが拒否権は無いぜ！ なにせ十七小隊の年長者だからなあ！」

ふははは、と古典的な笑い方をしつつ胸を張るシャーニツドに大きな溜息を吐き、内心軽い苛立ちすら覚えた。

この相手をするくらいなら先程のルウカレイフオンの相手でいいと心底思う。

シャーニツドは小さく「冗談冗談」と言いながら笑うが、どうせ上辺だけの言葉で本気で悪いとは思っていないのだろう、とウォルターはため息混じりに腕を組んで、白い目をシャーニツドに向けた。

「ってか…最高決定権はアントークにあるだろ。あんたの決定は通らないと思うけど？ もっとも、あのアントークが遊びを許可すると思えない」

「そうだな…あ、水泳とかなら大丈夫だろ。なにせ、泳ぎは遊びにもなるが訓練にもなる。やり方しただ。そうだろ？」

「…………あんたのくせに頭の良いこと言っただつもりか？」

「おい、辛辣さが隠れてねえぞ」

「隠すつもりもない」

「ほんのちよつとは隠そうっていう意欲を見せろよ」

シャーニツドが呆れたようにやれやれと頭を振った。しかしウォルターはため息を吐くばかりで、反論する気もなくなったらしい。

少し遠くを見ながらウォルターが剣帯に手を添え、錬金鋼を握りしめる。

それに眼を向けたシャーニツドは、ウォルターに声をかけた。

「どうした?」

「別に」

返事は即座に返ってきたが、視線はシャーニツドへ向けられない。

ちらと錬金鋼を見てシャーニツドはふと口にする。

「その錬金鋼って、お前がおれに銃術見せてくれた時の銃か?」

「あ? ……そうだけど」

「ふくん…?」

じつと食い入るように手元を見るシャーニツドにウォルターは、不機嫌に眉根を寄せて剣帯をシャーニツドの視線から外し、言葉を紡ぐ。

「ンだよ…なんか、あンのか?」

「いや、その錬金鋼、随分と色がくすんでるなと思つて。 ……手入れしてねえの?」

「してるよ」

面倒くさそうにウォルターは言葉を返してシャーニツドを見るが、どうも納得がいかないらしいシャーニツドは腕を組む。

「ちよつと見せてくれね?」

「嫌だ」

「そ、即答…? 減るものじゃねえし、見せてくれたっていいだろ…」
「見せる義理もねえだろが」

そうだけだよ、と言いながらシャーニツドが肩を竦めた。

ウォルターは錬金鋼を握りしめながら、小さく呟く。

「……ただの錬金鋼だ」

視線を逸らしながら呟き、ウォルターは踵を返す。その素早い行動にシャーニツドが声をかける。

「おーいウォルター？ 何処行くんだ？」

「オレにはまだやることがある。……そつちに行く」

「……………早く帰ってこいよ」

「……………へいへい」

ウォルターは苦笑交じりに頭を掻き、歩き去った。

その背を見送りながら、シャーニツドは小さく呟く。

「何処が、ただの錬金鋼だ、だよ」

ため息を吐きながら頭を掻く。

最近の若者は年上を頼ってこないなあと思いつつながら、足元に視線を落とす。

ウォルターが握っていた錬金鋼が本当にウォルターの中で “ただの錬金鋼” ならば、彼があそこまで憂いに満ちた顔をすることは無いだろうと思つた。

彼自身からあまり関わってこないからこそ彼の表情の変化と言うものに疎いが、あれにはさすがに気がつく。

—— あんな覇気のねえ顔、一瞬でも初めて見たつての

それほど彼の中で重要視された事柄なのか、それともきつかけを作ったことだったからなのかはよくわからないが、あの錬金鋼が彼の中で重要なものであることは確かだろう。

しかし、レイフォンと何を話していたのかはさっぱり見当もつかないシャーニツドだが、ウォルターの表情にいつもとは違うなにかが現れていたような気がしてならないのだ。

“何か” を知っているような、そんな感触。

「……………まあ、別にいいけどな」

シャーニツドはそう呟いて、自らもその場を去った。

混乱する都市達

汚染獣襲撃の警報が鳴り響くマイアスで、リーリンは宙に浮かぶ光の球体を見つけた。

鳥達が集まるその光に、リーリンは眼を奪われる。

部屋の方を見に行つたサヴァリスが、ウォルターはいなかったと言つた。

何故いないのか……そうも考えたが、彼のことだから汚染獣と遭遇しようとも大丈夫であろうし、そうでなくともなんとかなるだろう。

軽い思考でそう考え、リーリンは改めて空を見る。空に浮かぶ球体。まだ、そこにある。

空を凝視するリーリンにサヴァリスが声をかけ、リーリンは空を指す。

「……僕には見えませんが」

サヴァリスの言葉に、リーリンが眼を見開いた。

ツエルニは嫌に静かだった。

言えば、嵐の前の静けさでも言うのだろうか。いつも賑やかな学園都市から、あの活気は消え失せていた。

「……静かだな」

(まるで、生存者の居る廃都市みたいだね……)

「この学園都市がここまで静かなのは、オレも初めてだ」

(そうだね。『獣』と居た時もこんなことなかった)

ウォルターが経験した、ツエルニでの学園生活は今年で9年程になる。だが、こんな事は一度として経験したことが無かった。

「……運命が、回りだしているせいなのか……」

(かもね。…それにしてももう9年もここにしていることになるんだ)

「…まあ、それは…そうだな。……いきなりナンで？」

(なんとなく。ここで生活してた日が、どのくらいかってちよつと気になったんだ)

「…それならいいんだが…」

ルウの言動に首を傾げながら、ウォルターはあたりを見渡す。

一箇所、ざわめきに満ちている場所を見つけてウォルターはそちらへと足を向けた。

ざわめきの中心には、見知った顔が居た。

そこは都市に待機している武芸者達が装備や準備を整えている場所、武芸者である彼らが居てもおかしくはない。

ウォルターの姿を見つけた暖色の髪の彼…：ハイアは、こちらへ駆け寄って来た。

「ウォルターー！」

「…：ライア。丁度良かった。いまどうなってる？」

「あ、えつと…、特別編成隊っていう生徒で編成した汚染獣討伐チームが荒野に出てるさ。おれっち達がある程度教えこんだから、大丈夫だとは思うけど…」

「敵の規模は？」

「成体になりたての第一期。ちようどいい肩慣らしにはなると思ってるけどさ」

「成程ね。…：ま、そうだな。お前らが教導してくれたって言うなら、まあ良しとますかね」

ウォルターの言葉にハイアはほんの少しだけ頬をほころばせた、が、すぐさま表情を整えた。

しかし、ウォルターはくつくつと笑い声を零す。

「…あッ、つちよ、ウォルター、見てたのかさ、いまの?!」

「丁度見た」

「あ、あく…もく…：。つちよ、ホントどうなんさく…」

「そんなことを言われてもなあ…。見ちまったモンは見ちまったし。

しようがねえだろ」

「……笑いすぎさ、あんた……。……ああもくもく……恥ずかしい」

「今更どんな羞恥心だよ」

けらけらと笑うウォルターにハイアはムキになって声を張った。

だがそんな抵抗もなんのその、ウォルターは笑いを零すばかりで特に反省の色は見られない。

「もー……ウォルターは、能天気過ぎさ」

「……お前だけだなあ、そんなこと言うの」

「え？ ……そう……なのかさ？ ……つて、ちよつと、話逸らすのやめろさ」

「ありり、バレた？」

ハイアは大きな溜息を吐いてふと「あれ？」と首を傾げた。

自分しか言わない。それなら正直、嬉しいと思う。

ウォルターはグレンダンに居た頃から、天剣授受者でありながらあらゆる仕事をこなして慌ただしい生活をしてきた。いまでもこんな状況が立て続けに起きていては、疲れもとれないのだろう。

だから、ほんの少しでもくつろいでくれているならそれはそれで嬉しい。が、ウォルターのことだからもしかしたら言われていない、もしくは聞いていないという事も考えられるので、あまりあてには出来ないが。

——うーん……。ウォルターって時々信じられないボケしてくるから……微妙さ……

隣でけらけらと笑うウォルターを見ながら、やや困惑した顔でハイアは首を傾げた。

レイフォンとフェリは生徒会棟の屋上に居た。汚染獣が近くにいたりというのに、澄んだ青空が頭上にはある。

——ウォルターは、また何処かへ行っちゃって……居ないの

かな

あの時、ウォルターに手を眼前に被せられたところまでは覚えてる。

しかしそこから先はなにも覚えていない。

気がつけばベッドの上で、錬金鋼はすべて手元になかった。慌てて食事を運んできてくれた者に話を聞けば、会長が預かっているとの事。剣帯は腰に巻き付いているのに、ある筈のない重みが無いことは何処かレイフォンを落ち着かない気分させる。

いまはポケットに入っている腕輪だけがレイフォンに重みを与えていた。

「……自信をなくしています。いまの僕は、剣を持ってない」

レイフォンはため息混じりにそう言って屋上の鉄柵に体重を預け、空を見た。

何処か哀愁を漂わせるようなレイフォンの背に、フェリは声をかける。

「イオ先輩に、何か言われましたか？」

「……まあ、おなじみの説教をくりましたよ。相変わらず手厳しいです」

「……なにを言われたんですか？」

レイフォンは要点をかいつまんでフェリに内容を伝える。彼らしいですね、と言ってフェリは息を吐いた。

「……わかってるんですよ。僕が子供だということは。ああやってウォルターに少し言われただけで、すぐに熱くなつて感情的になることも。彼の思考回路が卓越しているとかあるかもですけど……、それ以上をやっぱり、僕が子供だということのほうがあからさまになって」「……あなたは、イオ先輩に言われたことをどう思っているんですか？」

「……やっぱり……、正しいと思います。……いえ、正しいとは言い切れないでしょうけれど、それでも、彼の指摘は鋭いことだと思います」

レイフォンはそう呟いて、ポケットから金の腕輪を取り出した。

ウォルターに預けられたままで居る腕輪を弄びながら、何処か忌々

しいという雰囲気で呟く。

「……あの人はいつも結局なにも教えてくれない。誰も自分の事情に近づけようとしない。他人に自分を気にかけてさせない。……そのくせに、人の事ばかり気にかけている」

そうだ。

レイフォンがこのツエルニに来てすぐに幼生体が襲撃してきた時も、なんだかんだといって励ましてくれて、都市のために奔走していた。

老生体と戦った時も、ニーナ達を気遣って口では酷いことを言いながら近寄せまいとしていた。

廃都市の時も、崩落の被害にあつたゴルネオ達やレイフォン、シャンテに攻撃を受けたフェリを気遣っていた。

違法酒事件の時も、フェリを気遣いレイフォンを気遣って、学園都市の生徒を連れ去ろうとしたハイアまでも気遣っていた。

合宿の時もそうだ。

なにも言わず、ついてきてくれの一言も無くただ歩き出したレイフォンの意図を読み取って、彼もなにも言わずただついてきてくれた。

巻き込まれた崩落事故においてもメイシエンを守り、気絶してしまったレイフォンを助けた。

崩落事故の後にいきなり倒れこんで病院送りになってしまったにも関わらず、ウォルターはレイフォンにも誰にも「気にかける事」を許さなかった。

そのくせに、自分はいつも他人を気にかけて、心配を続けている。そのくせに、それを決して外に出すことを許さず「いつもの笑み」を浮かべて、飄々と軽口を叩く。

——本人にきつと、そんなつもりはないのだろうけれど

大きく溜息を吐く。だが、それでもいつもそうなのだと考えると、ウォルターの行動を無下にも出来ない。

「……そうですよ」

「レイフォン？」

“本当に誰もが納得するような利己的な行動ばかりをしているなら、罵れるのに。”

いつも、“ほんの少しでも、他人の為になることばかりしている”
のだから。

「……だから、腹立たしいんです」

レイフォンはひとり眩きをこぼした。

戸惑い

それは、レイフォンが眩きをこぼしたのとほぼ同時。

突如としてツエルニの空の空気が、変わった。

新たに現れた巨大な来訪者……汚染獣のような風貌をしながらも、龍を思わせる威圧的な姿。

生徒会棟の屋上でそれを目撃したレイフォンは、直感的に感じた。

——あれには、敵わない

完全に次元が違う。違うものだ。

汚染獣なんて脆弱なものとは違う。

もつと、もつと……強大で……

そう、あれこそが、世界の覇者と呼ぶにふさわしい威圧感を備えていた。

「人よ……境界を破ろうとする愚かなる人よ。なにゆえこの地に現れた？」

それは、人の言葉を話した。声、といえども肉声ではなく、何処か機械的な声音だ。

レイフォンは驚愕に表情を染める。咄嗟にフェリを建物の中へやったからこそいいが、これはおかしいと直感的に察していた。

この汚染獣こそが、アルシェイラ・アルモニスの倒すべき存在ではないのか？

この汚染獣こそが、ウォルター・ルレイスフォーンの目的に合致する存在ではないのか？

そんなヤツが、何故このツエルニに？

困惑する思考の中、レイフォンの眼は一瞬見慣れた姿を捉えた気がした。

しかし眼を凝らしても、そこには汚染獣が居るだけでなにも居ない。

——いま、何かを……見たような

酷く見慣れた姿を見た筈だ。しかし、汚染獣が浮かぶ空には何もな

い。

小さく沈黙を挟み始めた汚染獣に、レイフォンは息を飲んだ。

ウォルターはぼうつと空中を見ていた。何処と無く視線を向け、なんとなく思考する。

レイフォンと話している間に自分のことを話したことには今更なんとも思わないが、それでも自分が引きずっているのだと気づく。今更、何も変わりはないのに。

何故、幾度もあったことを未だ振り切れずに、ここにいる。

——オレは、どうするべきかな

手が自然と剣帯に収まる錬金鋼へ伸びた。

その持ち手を握りながら、ウォルターは小さくため息を吐く。

落ち込んだウォルターの思考を叩くように、ルウの焦ったような声が反響した。

(ウォルター、ツエルニ上空にクラウドセル・分離マザーIV・ハルペーの反応だ！)

(ハルペー？ ……どうして、あいつが…)

ここに？

ハイアと汚染獣の後詰に待機して居たウォルターは、ルウの叫びにも似た声に思わず立ち上がり、考えるより先に身体は動き出していた。

「ウォルター、どうしたんさ？」

突然立ち上がって走りだしたウォルターの後をハイアが追おうとするも、人混みに阻まれて見失う。

ハイアの慌てた声も気に留めず、ウォルターは走る。ルウの「拒絶」が働き、ウォルターの姿は誰にも捉えられなくなった。

足裏から空気を「拒絶」し、階段を上るようにウォルターは宙を走りハルペーを目指す。

「ウォルター?!」

いきなりどうしたのか、誰にもわからない。

ただ、彼が動き出したということは、彼の行動するべきことが起きたということ。外まで駆け出して上空を見たハイアは、ようやく状況を少しずつつ飲み込み始めた。

「……空に、汚染獣……。……。ウォルター、何か知ってるのかさ……？」
眩いたところで、答えを返してくれる者はいない。

「ハルペー」

「……異民。何故我が領域への侵入を許した」

「なんのことだ？」

「ここは我が領域。人間の侵入を許した覚えはない。貴様が居て何故この事態が回避できないのだ」

龍……ハルペーの機械音声には苛立ちが含まれていた。

ウォルターもハルペーの事情は知っている。現在は世界の隅でオーロラ・フィールドを監視し、世界のゆらぎを観測している。

そして彼の存在する場所はいわば、聖域。ハルペーのナノマシンにより、その場のみは草や花が咲き誇ることの出来る聖域。

「……オレだってまさかこうなるなんて思ってた。いま原因は究明中だ」

「……ならば急ぐのだな。……。群れの長を私の元へよこせ。貴様はいらぬ」

「冷たいお言葉で。……了解。ならオレはさっさと働きますかね」

ウォルターはツエルニに呼びかけるハルペーの横で肩を竦め、移動しようと足にちからを込め直した時だった。

突き刺さるような視線を感じ、そちらへ視線を向ける。

(……アルセイフ?)

視線の源には、鳶色の髪の後輩がいた。ウォルターが片眉を上げてそれを凝視していると、ルウもまたそちらへ意識を向けて怪訝そうに呟く。

(……見えてる筈はない。となれば、気配とかで感じたかな？ ……
どっちかというと、あれは凝視してる感じか……)

(だよな。見える筈なんて無いし……)

ルウの言葉に同意しながら、やはりレイフォンの方へ視線を向ける。気付いている筈はない。異界法則は「絶対」なのだから。

ウォルターは息をひとつ吐いて再び都市を移動した。

気掛かり

「……………」

「どうしたんだい？」

「べつに」

不機嫌なウォルターの表情。それに気付いたサヴァリスはそう呟いた。

ここは再びマイアス。

深夜になってしまったマイアスでは、老生体……ただの1期だが、それを相手に騒然としていた。リーリン以外の一般人は全員シェルターに逃げ込んでいる。

まだ、リーリンは機関部に居る。そしてその機関部にはツエル二十七小隊の隊長でもあるニーナ・アントークが居た。

(居なければ行くんだけどなあ)

ここマイアスの電子精霊である、小鳥のような姿をしたマイアスが狼面衆に追われているということもすでに知っている。

そしてマイアスがリーリンとともにいることも。

(マーフェスに変に干渉し始めなければいいんだが…)

(ああ、それはそうだね……。でも……どうだろう。狼面衆も動き出した。あの……なんだっけ、クズな男にリーリン・マーフェスも接触したわけでしょ？ 干渉しないわけではないと思うけど…)

(はあ……いろいろな意味を込めて、面倒くさいな)

(ま、しようがないね)

ふう、と軽く溜息を吐き、隣にいるサヴァリスに声をかけた。視線は遠くに投げたまま。

「お前見えてるだろ。いつくる？ あのヘタレ」

「キミも見えてるだろう？ …もうすぐだね。相手する？」

「ンなわけ無いだろ。あんな雑魚相手にするだけ無駄、完全に無駄。絶対にヤだ」

ウォルターが眉を寄せて全面否定すると、サヴァリスはくつくつと

笑い声を零す。

そんなサヴァリスに溜息を吐きながら、ウォルターは再び視線をこちらへ走る男へ向けた。

「ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう！ あの女、絶対にゆるさない」

「……へく、ご大層な言葉ですこと」

嘲るような声音で、ウォルターは男……ロイ・エントリオへ声をかけた。

ロイの眼がウォルターとサヴァリスを捉え、驚愕に瞳を見開く。

「だ、誰だ……?!」

「まったく、情けない方ですね」

サヴァリスが蔑むような視線を彼に向け、ウォルターは飽きたという様子で腕を頭の後ろで組んだ。

飽き性なウォルターに苦笑しつつ、サヴァリスはロイの前へ移動した。逃げようとするロイの喉を、サヴァリスの手は掴む。

「え、どうすんのそれ。こっち見せんな」

「いやあ、少し見てみたくなりました」

「……なにを？」

ウォルターが片眉をあげて問うた。

その何処か面倒くさいという雰囲気が目立つウォルターに対して、サヴァリスは口角をあげる。

「この碎かれた心のまま、再び立ち上がれるのか、否か。僕はそれが見てみたい。……ただの興味ですよ」

「……アルセイフもどうか、気になるからか？」

「さて、どうでしょう？ ……すべてはただの興味ですよ」

そう言っただけで去っていったサヴァリスに、老生体の方は任せた。

天剣が無いとは言え、サヴァリスがああ程度の汚染獣に遅れをとるとは思えない。最もここがああ荒野ならそうもいかないのかもしれないが、ここはエア・フィルターの中だ。

そんな状態で、あの男を気にかかるような必要は微塵もない。それよりも、いまはこちらのほうが重要だ。

「……この都市は、墮ちなかつたようだ」

「そうだな。お前らの思惑どおりにはならなかったな。……狼面衆」
背後に立たれた感覚はあった。だがウォルターは振り向かない。
振り向こうと無駄だと分かっているからこそ、行動は起こさない。

狼面衆は見た所でその特徴を見極められる訳でも、狼面衆を全滅させられるわけでもない。

それならば特に構う必要も無い。いざというときは衝動で一撃食らわせればいいだけのこと。

ルウだっている。戦闘になったとしても、逃しはしない。

「マイアス如き堕とせずとも、全ては変わらない。全ては、聖剣の名の元に進行していく」

「……オレはそれを阻む為に居んだぜ？ 忘れたか？」

「虚構に囲まれながらも世界を見る我らに対し、この小さき世界でもかく貴様、どちらが矮小な存在か……、貴様にはわかりきったことだろう」

「ほぎげ。オレはオレの存在については分かっているつもりだ。…ゼロ領域つていうのは、そういうモンなんだからな」

「『足掻く存在』と共に存在する『愚者』。他は『足掻く存在』の強さに引き摺られ、依存するだけのただの『愚者』と成り果てる。貴様らの終末は目に見えている」

「オレも見えてるぜ。……お前らの終末が、な」

狼面衆の言葉にはつきりと言う。ウォルターの言葉に狼面衆は口を一瞬噤み、再び口を開く。

「『虚無の子』はすでに『虚無』ではない。運命の変動と貴様の影響で変わり始めている」

虚無の子。その言葉に、1人当てはまる存在はいるものの、ウォルターは自分の影響で変わり始めているという言葉を訝しんだ。

「……どういふことだと聞きたくもなかったが、到底答えてもらえとは思えない。」

「……死にかけの存在は生にすぎり、生きている存在は死を呼ぶ。因果なもの」

言葉だけを残して、狼面衆は姿を消した。ウォルターは剣帯から鍊

金鋼を引き抜き、復元しつつようやく後ろを振り返る。

銃に復元された錬金鋼が向けられたそこには、ただ漠々とした闇が広がるのみだ。

劉羅砲の発射音が響き、都市が揺れる。汚染獣は狙撃され、轟音を立てて崩れ落ちていく。

ウォルターは夜を裂く劉羅砲の光に眼を細め、錬金鋼を剣帯へしまいながら帰ってきたサヴァリスに声をかけた。

「おう、どうだった」

「…無駄だったよ。さすがウォルター、感づくのが早い事」

「だろ？ ……まあ、あいつはちよつと特殊かもだけど」

「そうかな…うーん…、まあ、構わないけど。…さて、あっちの方は終わったかな？」

サヴァリスの視線が機関部の方へと向けられた。それなりに状況を把握しているウォルターは軽く息を吐く。

「…まだ、みたいだな。行くなら今のうち」

「…ウォルターは行かないのかい？」

「行かねえ。オレは用事があるし」

「またそれね…。忙しいね、キミも」

「…まったく。じゃ、まあまたあとで来ると思うけど…行くわ」

苦笑するサヴァリスにウォルターはひらりと手を振り、踵を返すと跳躍した。

（…そろそろ落ち着けるといいね、ウォルター）

「…ああ」

ウォルターが発する不機嫌を感じたルウが、さり気なく声をかけた。

未だウォルターの雰囲気にはだちはあるが、ルウの言葉に刺が無いようになるべく声を和らげて返事を返す。ルウも疲れた様子を声ににじませながらさういうと、ウォルターもそれに乗じてため息混じ

りに返事を返した。

疲れのせいか、ウォルターも縁空間を抜けるのが遅くなってきた。
る。

(そろそろルウも辛いよな。連続で異界法則をつかっただけで)

(ううん、僕に肉体的疲れは無いからね。ウォルター程律儀に起きていないといけないってわけでもないし。寧ろ僕はウォルターの方が心配だよ)

だが、あまりそう悠長にも言っていられない。それはわかっている。
る。

それでも狼面衆の言っていた一言が、ウォルターの中でひっかかっていた。

『“虚無の子”はすでに“虚無”ではない。運命の変動と貴様の影響で変わり始めている』

ウォルターの影響、そして運命の変動。 “虚無”ではなくった “虚無の子”。

一体、何を指してそう言っていたのか。狼面衆は何を知っているのか。

眉根を寄せてウォルターが思考に耽っていると、ルウがため息混じりにウォルターに声をかける。

(ウォルター、また難しい顔してるよ)

(え、あ、悪い)

(別に)。でも、あんまり思い悩まないでね、一人で。僕もいるんだから)

(……ああ、さんきゅ……)

ウォルターは軽く笑みを浮かべ、ようやく見えた縁空間の切れ目へ、戦場に飛び込んだ。

疾走

「つぐ、う……い！」

レイフォンはカリアンを抱えて走っていた。

事は数時間前、突然ツエルニ上空に現れた汚染獣……後の紹介でクラウドセル・分離マザーⅣ・ハルペーと分かった、と接触したことであった。

群れの長は来いとのも事だったため、レイフォンはカリアンと共にハルペーに接触し、会話を試みていたのだ。

彼の言う領域を抜けてすぐ、汚染獣に襲われた。

そこから約2時間の逃走劇を繰り広げ、ツエルニ間近となったところで起きたアクシデントにより、カリアンが意識を失ってしまった。ランドローラーはすでにエネルギーが尽きている。ならば、後は走るしかない。

「くそっ！」

ツエルニの剽羅砲によりあらかた汚染獣は撃破されたが、まだ多くの汚染獣がこちらへ押し寄せてきていた。

汚染獣が後ろから迫り来る。その巨大な口腔に並ぶ牙をぎらつかせて、レイフォンを飲み込まんとする。

レイフォンが人間以上の速度で跳躍するのはたやすいが、ただの人間であるカリアンはその速度に耐えられないため、現状それを行う事は無理だ。

—— どうする？ どうする？

どうすればこの状況を打破出来る。

どうする？ 一体、*彼*なら……

思考の隅で、そんなことを考えてしまう。

無意識のうちにそんなことを考えて、レイフォンは頭を振った。

「剣……はだめだ、となれば、鋼糸……」

そんなことを考えながら慌てていたせいだろうか。

注意力が散漫になっていたらしいレイフォンは、らしくないミスを

する。

小さなおうとつに足を取られて身体が傾ぎ、バランスを失う。体勢を立て直そうとしている間にも、汚染獣の口腔がこちらへ迫ってくる。

唾液が糸をひく牙をずらりと並べ、レイフォンとカリアンの肉を引き裂こうと、食らいつこうとしている。

「つく……い！」

この一体だけではない。

他にも汚染獣は居るのだ。

疾走を止めることは出来ない。

他の武芸者達は遠い。

“彼”は居ない。

“彼女”も居ない。

“僕”は、ここにただ一人

「あ、あああああッ!!」

咄嗟に青石錬金鋼を構え、錬金鋼にある剽容量の限界など気にもせず集束出来るだけの剽を全力で錬金鋼に集束させ、振るう。

外力系衝剽の変化、霞楼。

レイフォンが振るった錬金鋼からは高密度の剽が放たれ、汚染獣とその後衛に居た汚染獣を巻き込む。だが、持っていた錬金鋼はぼろぼろと崩れていく。汚染獣はまだ押し寄せてくる。

——まずい

体勢を立て直しきれない。先程の剽技により身体の傾ぎにも拍車がかかった。

後列の汚染獣の口腔が眼前にさらされる。

恐怖はない。だが、なにも出来ない自分に腹が立つ。

——いいや、まだ、まだだ!!

レイフォンは諦めない。

諦めるわけにはいかない。こんなところで、死んでたまるものか。踏ん張って、反撃しろ。

動け。ただ一步を踏み出して、錬金鋼を振るう。自らが持てる技を

放つ。ただそれだけだ。

ポケットに突っ込んだままだったウォルターの腕輪に剄を流し、手の中に剣を復元する。

もう一度、もう一度だ。

やれる。

汚染獣との接触まで、後数秒……

「……つと」

「……………?!」

いきなり、レイフォンの足が地面から浮いた。

カリアンを抱える腕に込めるちからは緩めていないが、レイフォンは抱えられた。

先程復元した剣を掴んだはずのレイフォンの手はそれを掴んでおらず、レイフォンを担いだ男の手にある。

視界の横で、黒と赤の入り交じる髪が踊る。

視界の横で、不敵な笑みが戦闘時独特の鮮烈さをみせつける。

視界の横で、萌黄色の瞳に凶暴な光が宿る。

「……ウォルター」

ヘルメットにこもる、かすれた声で、その名を呼ぶ。

「よう。泣きそうなツラしてどうした？ 寂しがり屋さんか、お前」

男……ウォルターは器用にレイフォンとカリアンを片腕で抱えて、更にはレイフォンに襲いかかっていた汚染獣を足で顎から蹴りあげていた。

ウォルターは刀を肩に担ぎ、口角をつり上げる。

「さて……やるか」

外力系衝剄を変化、塵砂^{じんさ}。

ウォルターが足で止めていた汚染獣の顎に衝剄をぶつけて身体を浮かせると、刀を振るい汚染獣を薙ぐ。そしてそれと同時に、集束させていた剄を放出する。その放出した剄が触れた汚染獣の鎧甲は即座塵と化す。

薙いだ刀を手の中で器用に回転させ、ウォルターは迫る汚染獣へ袈裟斬りに剄を乗せて振るう。

外力系衝剄を变化、餓龍^{がりゆう}。

刀から放たれた剄は一直線に汚染獣へと向かい、その途中で四散し、その剄は汚染獣の鎧甲を食いちぎり汚染獣を屠る。広範囲の攻撃は多くの汚染獣を死滅させた。その四散する前の剄がちりちりと火花を散らし、火を噴く。

外力系衝剄を化鍊变化、爆迅^{ばくしん}。

発生した爆発の炎、そして爆風により後方から押し寄せてきていた汚染獣が弾き飛び、前方の汚染獣は鎧甲ごと吹き飛んだ。

ウォルターには珍しい剄技の応酬に、レイフォンは啞然として閑散としつつある戦場を見た。

「……このくらいやつとけば、一旦は大丈夫だな。アルセイフは会長さん抱えて走れ。ここはオレが引き受ける」

「……………ウォルター」

「…なんだよ？ ほら、まだ汚染獣は居るんだ、行け」

——僕は

レイフォンはほんの少しだけ足元に目線を落とした。

ハルペーの元へ向かった帰り……2時間の逃走劇を繰り広げる前、カリアンに言われた事を思い出して、そこからウォルターに言われた言葉を思い出していた。

だが、考えれば考える程、自分が頼っている……依存している事に近いという事実のみが浮き彫りになって、情けないと胸を締め付けられるような思いにかられるだけだ。

彼の帰還に、こんなにも安堵している自分がある。

——それでも僕は、僕だ

「アルセイフ？」

「……………なんでもありません、行きます」

「ああ」

怪訝なウォルターの表情に、レイフォンははつきりと言葉を返す。はつきりとした返しにウォルターが浮かべた不敵な笑みを見ると、レイフォンは駆け出した。

一言で言えば、レイフォン・アルセイフは“その人”が居ないとな

にも出来ない。だが、それでも、それがいまのレイフォン・アルセイフだ。

いまなら、そう言い切れる。

どれだけでも、それが借り物だと罵られようと、これがレイフォン・アルセイフなのだ。

レイフォンは荒れた大地を駆ける。

すべき事をする、その為に、疾走る。

決意の宿り出したレイフォンの瞳に、探していた金色が映りこんだ。

息をつく間もない

「さあ、やろうか」

外力系衝剄を化鍊変化、剛天^{ごうてん}。

頭上に刀の切っ先を向け、剄技を放つ。放たれた剄は細長く針状に変化し、再び進行を始めた汚染獣達に降り注ぐ。そして一步踏み込むと汚染獣を蹴りあげ、食らい付こうと口腔をみせつける汚染獣に刀を突き刺す。

刀は汚染獣の口腔上部を突き抜け、体液を嘔き出させる。そのまま刀の柄を持ち直して下段への切り下げ、横から襲いかかってきた汚染獣へ横薙ぎに刀を振るう。さらに後方から来た汚染獣の突進を跳躍して避け、刀から形を変形、槍へと変化させた。

柄を逆手に掴んで、ウォルターは口角をあげる。

「たまには、いいよな?」

外力系衝剄を変化、華月^{かげつ}。

ウォルターは下降する勢いに乗せ、槍の刃と柄の繋ぎ目横に足を置いて、そのまま突き刺した。

汚染獣の悲鳴にも似た咆哮が発せられ、もがく動作に合わせてウォルターは槍を引き抜き、そのまま横に振るうと、勢いのまま目の前の汚染獣に突き刺し、上に振り上げながら斬撃を繰り出す。

「つと」

槍を持ち直すと、ウォルターは逆手で構え、ほぼ一直線に並んだ汚染獣に向かって濃密な衝剄を纏う槍を放った。

活剄衝剄混合変化、月刃^{げつば}。

豪速で放たれた槍は汚染獣を貫き、汚染獣の鎧甲を貫いているにも関わらず速度を落とさない。ウォルターが右腕を引く。右手には不可視の糸が巻き付いている。巻き付いている糸は、鋼糸。

槍の石づきから伸びた鋼糸はウォルターの右手に巻き付いており、ウォルターが右腕を引いた事により槍がウォルターの手へ戻る。

「ある程度終わってきたか?」

(……かな。領域を広げて確認してるけど、数は確実に減ってきてるよ)

「ならいい」

後方接近者、有。一名。

レイフォン・アルセイフ。

現状報告をしてくれたルウに答えたウォルターの背後から、先程戻った筈のレイフォンがかけてきた。

「ウォルターー！」

レイフォンは複合錬金鋼を構え、ウォルターの隣に立つ。その片手が空いている事に気づいて、ウォルターが背後を確認する。

「……アントーク」

「はい。隊長も帰ってきました」

「…それは良かった」

「え」

「…え、って…なんだよ」

レイフォンの間抜けな顔に眉を寄せつつ、ウォルターは横から来た汚染獣へ蹴りを放った。

狼狽したようなレイフォンが、おかしな挙動をしながら言葉を紡ぐ。

「だ、だってそんな普通に言うと思わなくて」

「…お前オレをなんだと思ってるんだ」

「……邪知暴虐、自由奔放、自己中心的人間」

「やめろ、無駄に思いつく限りの罵倒の言葉を並べるのはやめろ」

「いえ、やっぱりこう文句を言えないとだめですよね」

「お前な……はぁ」

呆れ半分にウォルターは肩を竦めて、溜息を吐く。

調子が戻ったようでも何よりだとは思っても、自分に關してなんだかんだと言われるのはやや癪に障るのだが……再び溜息を吐きながらもウォルターはレイフォンに声をかける。

「ともかく、だ。…やれるな？ アルセイフ」

「はい」

「……いい瞳だ。じゃあ、やろうか」

ウォルターが槍を刀へもどして肩に担ぎ、不敵に笑みを浮かべてレイフォンへ視線を向けた。

その視線に応え、レイフォンは鍊金鋼を握りしめ、構える。

「遅れるなよ」

「当然です」

「…っは。そうこないと」

ウォルターも刀の柄を握りなおし、大地を蹴りあげた。

事態も終息し、落ち着きを取り戻しつつあるマイアスでリーリンは双眼鏡を握りしめ、うんざりと溜息を吐きながら呟く。

「どうなってるの?」

こここの所毎日通っているにも関わらず、いつまでたっても来ない放浪バスに苛立ちを隠せないリーリンは、八つ当たり混じりに鉄柵を叩いた。

「まあ、世の中そううまくいきませんね」

「そうだなあ。……今日も無駄だろうし、諦めて帰ろうぜ。人間諦めが肝心ってな」

背後で、苦笑しながらベンチに座るサヴァリスと、気怠げにだらしなく座るウォルターの声が聞こえてリーリンは眉を寄せて振り返り、2人を見た。

「そういう風に言わなくてもいいじゃないですか」

「だって、何処にも放浪バスの姿は無いし」

「そうですねえ」

「……それはわざわざどうも」

双眼鏡を使うリーリンより遥かに遠くを見ることが出来る2人からそう言われてしまったのは、リーリンもなにもいうことが出来ない。溜息を吐き、それでも諦めきれずにもう一度双眼鏡を覗きこんだ。

「……レイフォンがだめになっていたらどうします?」

サヴァアリスの唐突な言葉に、リーリンはきよんとんとしてサヴァアリスを見る。

「もし、ここに居たあの武芸者のように、無様を晒していたらどうします?」

「……頑張って頑張って、みつともないんだったら、それはそれ……だとおもいます。でも、もしも、情けないことを言っているようだったら……叩いて直します」

「アルセイフが古いテレビな扱いされてんだけど」

ウォルターはリーリンに苦笑し、「まあ」と頷く。

その領きに、サヴァアリスを見ていたリーリンは視線をウォルターへ向ける。

「確かに、そのくらの喝があつたほうがいいかもな」

「……ウォルターさん、何か知っているんですか?」

「いいや?　なんでオレがアイツの事を気にかけないとなんないのか、さっぱりなんだけど」

「……………そうですか」

リーリンはそれ以上問いただす事を諦めて、双眼鏡を再び覗き込む。

そんななか、ウォルターはある一点に視線を向けたまま。ウォルターの視線に気付いたサヴァアリスが、リーリンに声をかける。

「探すなら、もっと大きい物を探すといいですよ」

ほら、と言ってサヴァアリスはウォルターの視線の先を指した。リーリンは双眼鏡をそちらへ向け、倍率をあわせる。

「え?　あれって……」

「都市、だな」

「……紋章見えるかい?　ウォルター」

「当たり前だろ」

「……………あの、紋章は……………」

図案化された少女と、ペンのマーク。

それはレイフォンの合格通知が来た時にリーリンが見たものと同じ。

「どうして……ここに」

「学園都市、ツエルニ…だな」

現れた都市、学園都市ツエルニ。

ゆつくりとマイアスへ向かってくるツエルニを、リーリンは呆然と見ていた。

歩み寄りをみせる僕の心

ウォルターは盛大に苦笑していた。

というのも、目の前に治療を完了せず出て行ったウォルターに大激怒している医師、テイアリスがいるせいだ。

レイフオンの時は捕縛される前にさっさと逃げたので何とかなかったのだが、ウォルターの担当医師である彼は1度や2度で諦める程諦めがいい人物ではないうえ、そういう点で優しくない。そういう点でなくても優しくない。前々から分かったことだ。

悪かったよ、と言いながら頭を搔くウォルターに、テイアリスは真つ黒な笑みを浮かべて頷いた。

「ああ、許さん」

ウォルターが頬を引きつらせ、から笑いをこぼす。

ああ、わかつてる、わかつてるよ。お前がその笑顔を浮かべた時は、許す気ナノ単位でも無いってことを。

テイアリスのその言葉により、ウォルターは強制的に入院する事になった。

レイフオンは考えていた。

ハルペーとの会話の際に、ハルペーはウォルターを知っているような言い振りで話していた。

その後……ハルペーのところからの帰りは、あまりに事が早く進みすぎてそんなことは頭になかったけれど、確かにそういったニュアンスを含む話をしていたのだ。

それも、まるで「かつてからの知り合い」のように。どこか忌々しように、それでいて気にかけているような……レイフオンにはそれがわからなかった。

ただ、一つ言っていたのだ。

どれだけ手を伸ばしても、届かない存在があれだ、と。

あれ、という言葉はウォルターに向けて言われていた。それなら、届かない存在だというのはなんなのか。

武芸的な強さという意味を指しているのか、彼という存在の強さを指しているのか、レイフォンにはまったく見当が付かない。

武者としての強さを指して言われていたとすれば、それはきつとレイフォンには届かない所だろう。

技術は……そうでもないかな、と思える。しかしウォルターの強みはきつとあの金色の腕輪。自分の実力を最大に引き出せ、容量を気にすること無く剄を放出できる武器。

武器への躊躇がいらぬ。それはレイフォンにとつても羨ましいことだった。強大な剄力のせいで、昔から満足に錬金鋼を扱えなかった。それは本当に悩んでいたのだ。あれがどういふものであれ、そういうものを持っていることは羨ましいと思う。

そして、あらゆる武器や状況、戦場に対応出来るその順応力。ウォルターはあらゆるものを手懐ける。それが武器であろうと、状況であろうとも。自らの有利な状況へ進める。それがウォルターだ。

だが、どれを比べても敵わないのは、彼という存在の強さを指された場合。

レイフォンは、彼に比べればあまりに幼い。思考も、行動も。

感情を制御できず、彼との言い合いになった……いいや、一方的にレイフォンが激情にまかせて罵っていただけだ。彼はただ、静かに聞いていただけ。

だが、もしあの『風』が吹き荒れなかった場合、彼はなんと云っただろう？

レイフォンを哀れんだだろうか。くだらない理屈ばかり立て並べると。

それとも静かに、いつもの様に冷徹な眼で言い返してきただろうか。レイフォンの方が、自己中心的で、利己的な言葉を立て並べていると。

どちらにせよ、見当はつかない。

「……素直に、聞くべきかな」

どんなことだとしても。

だが、いままでの事からして、どうせはぐらかされるだろうという可能性が高い。

聞いても意味のないことのような気がして、レイフォンは顔を出す気が引けていた。

「……そういえば……」

ふと、ハルペーで思い出した。

ハルペーが一番初めにツエルニに現れた時、感じたあの違和感。

空を飛ぶハルペーの横に、「誰か」がいたような気がした。いいや、「誰か」ではない。

——ウォルターが、いた、ような……

だがこれはただの「気がする」だけの事であり、確信があるわけでもない。

まして、もしそんなことがあればそれは人間だと言えるだろうか。武芸者ともいえない存在ではないのか？

どうするべきか、レイフォンにはわからなかった。

自分の感覚が間違っているとも思わないし、ウォルターがそこにいたとも思えない。

ふむ、とレイフォンは腕を組んで、唸った。

そしてそれに並行して、ウォルターの刀についても考えた。あの腕輪はどういう原理か知らないが、質量を変化させることが出来る。レイフォンが持っていた間でも、手にずっと馴染んでいた。

刀。その単語を内心で復唱して、レイフォンは自分が養父に刀を渡した時の事を思い出す。

「……そういえばあの時、あれも一緒に渡したな」

昔からずっと持っていた大切なもの。

刀を使わないと決めて養父に返した時、自分には持っている資格が無いと言って養父に渡したのだ。あれの裏に書かれた言葉が、レイフォンを戒めているような気がしていた。これからレイフォンがし

ようとしていることは、どれだけ愚かな行為なのかと。

だが、とても大切なものだ。レイフォンにとって、唯一無二の。最近は、あまりに忙しくてずっと忘れてしまっていた。

「……………」

気がつくとも足が勝手に病院へ向かっていた。若干ため息混じりに、レイフォンはウォルターの所へ行くことを決めた。

なんとなく、嫌な顔をされるだろうなあと予感しながら。

不機嫌な医者、響く声

「あー…もう…なんで元気なのに患者用の服着て寝させられてるんだよ、オレは」

病院着でベッドに入り上半身を起こしているウォルターは、忌々しそうに目の前の椅子に座るティアリスを睨んだ。

しかしそんなウォルターよりも更に不機嫌な顔をするティアリスが口を開く。

「お前のせいだろ。勝手に退院するなど、医者であるおれが許さん」「いやいや、ちゃんと生徒会通しただろ？」

だからいいだろうと言わんばかりの顔をして、ウォルターはそう言った。だが、ティアリスは苛立たしそうに眉根を寄せて、ウォルターの背を見る。

傷痕が目を凝らせば見えるほどに治っている背を見ながら、ティアリスが背を叩きつつ言った。

「知らん。…それと、なんで手術もしてないのに怪我が完治してるんだ、お前は」

「痛い、叩くな。なんで治ってるっていわれりやあ…オレだからだよ」

「…殴るぞ」

「医者暴力だめ絶対」

そう言ったら持っていたカルテを止めたボードを投げつけられた。丁度角が額に直撃して悶えている間に、ティアリスはカルテを拾いなおして口を開く。

「…話を戻すぞ。ともかく精密検査の具合を考えてお前を3日間ここに拘留する。その後は2日間運動、夜更かし、過度な甘味摂取は禁止。3日間についてだが、朝は…」

「え。…なにその徹底した生活スケジュール管理。運動夜更かしは妥協したとしても…甘味摂取はオレの心の癒やしなだけ、」

「うるさい、異論は認めん。お前はどのくらいしても足らん位だ。お

前は話を聞かないからな。後、甘味については過度な摂取をするなど言っただけだ。お前、調子のいい時はそれに乗じてホールふたつくらい余裕で食べるだろ」

ティアリスが嘆息しながら呟いた言葉に、ウォルターは入院着を着直しながら困惑した顔で頭を振る。

「…いやいや、甘味類がわりと好きなのは認めるが、だからってそこまですごく非常識じゃ…」

「その口は閉じておけ。運動に関してだが、バイトも禁止だ。お前、機関掃除だつただろ。夜更かし関連になる上、全身運動になる。2日間は休みの届けを出しておけ」

「……………」

「…聞いてるのか？」

「聞いている、聞いてるよティアリス。そんなに睨むなよ」

ウォルターは苦笑交じりにティアリスに軽く返し、それでも溜息を吐かれて苦笑した。入学当初からの馴染みだが、ここまでずけずけと言われてはさすがに何も言えない。

苦笑したウォルターも、そう考えて溜息を吐いた。その溜息をうなだれだどとつたらしいティアリスはカルテを強く叩いて言う。

「お前…、そんなふうだからいつまでたっても怪我にばかりするんだ」

「そんなこと言われても、怪我する時は怪我するモンだろ」

あつけらかんとしてウォルターがそう発言した。しかしその言葉はティアリスにとって不服なものだったらしい。その話題にティアリスは先程から浮かべていた笑みを更に深め、低く重低音の声音になった。

「なにか言ったか」

「…いえなんでもありません」

ウォルターは頬が引きつりそうになるのをこらえながらティアリスから視線を逸らした。

別に悪いなんて言わない、思わない。ただ、真つ黒な笑みを浮かべられると流石にたじろぐ。

「本当デス」

「…そんな目で見るな。大体、誰のせいで怒っていると思ってるんだ」
「はい」

「素直でよろしい。…くらいやがれ」
「あたらんよ」

さすがに2度目のカルテボードには当たらない。

カルテボードを避けて掴むが、その代わり額に拳が飛んできて、あ
たった。手からするりとカルテボードが落ちる。

「お前、頭以外は健康体の癖にこういう所は反応鈍いな」

「前半部余計だろ。後半部もだけど」

「要するにしゃべるな、つてか？ 入院期間を伸ばしてもいいんだぞ」

「や、それは勘弁…」

「なら反論するな」

ティアリスに呆れたように言われ、打たれた額を押さえながらウォ
ルターは肩を竦めて苦笑した。そんなウォルターに溜息を吐き、ティ
アリスは落ちたカルテを拾いながら叩く。

「大体お前はたるんでる。そんな風だからいつまでたつても怪我が減
らないんだ」

「そんな事言われても…：…困る」

「真顔か。…：まあいいが、先程おれが言ったことは最低限守れ。5

日後、検査するからごまかしても無駄だ。良いな？」

「了—解」

頭の後ろで手を組みながら軽い調子でウォルターが頷くと、やはり
ため息混じりにティアリスがウォルターに釘を差した。

「まったく…：それとウォルター、面倒は起こすなよ。生徒会がそろ
そろやつれきる頃だろう」

「いやいや、最近はおれのせいじゃないだろ」

「正當に暴られる理由があるからな」

「冷ややか。驚く程冷ややか。小隊の後輩思い出す」

ウォルターはふらふらといまどこにいるかわからない鳶色の髪の後
輩を思い浮かべる。しかしそんな言葉にも耳を貸さず、ティアリス
は呆れきった顔でウォルターを睨むように見た。

「とにかくおれは行くが、おとなしくしているよ」

「……………」

「……聞いているのか？」

「…キイテマス…」

頭をぎりりとティアリスに掴まれ、ウォルターはしぶしぶ返事を返した。先程より大きな溜息を吐きながらティアリスは踵を返し、部屋を退室していく。

その背を見送って部屋にひとりとなったウォルターは、掴まれた頭を押さえながら溜息を吐き、枕に頭を落とした。

——前はティアリス、怒るのこらえてたんかね？

レイフォンがきていた時はキレなかったのだから、そういうことなのだろうかと首を傾げる。

まあ、別にティアリスが素になろうとどうだろうと別にいいのだが、それにしても暇だとウォルターは1人溜息を吐く。

落ち着いて寝転がれる時間というのは嬉しいが、これほど忙しかった中でのこれだと、寧ろ、暇。

(ウォルター、どうするの?)

(どうしようもないな。…しばらくはのんびりしようぜ)

(……そうだね)

ルウは嬉しそうな雰囲気ですう言い、頷く。

ウォルターも久々にゆったりした静かな時間に浸り、息を吐いてシーツを腰程まで引き上げた。頭の後ろで組んだ手で髪を弄びながら、ウォルターは白い天井を見上げる。

見た所でなんの変わりもなく面白味のかけらもない天井を見つめていたウォルターは、ようやく変化を見つけた。

「珍客だな」

「……その言い方、気に入らないわ」

透き通った女性の声が部屋に反響した。

闇を纏う少女は妖艶に笑みを浮かべ

真っ白で清潔な部屋に、漆黒を纏う少女がふわりとスカートを靡かせて現れる。風が吹いていないにも関わらず黒の長髪は宙に漂う。重力に従わないその長髪をなびかせる少女に視線を向ける。

ウォルター自身は久々に会ったのだが、相変わらずの容姿に相変わらずの白さと黒さ。肌の白さ、服の黒さ、部屋自体の白さが相まって、部屋では浮き彫りの存在だった。

「そりゃあ悪いな」

「なに？ その言い方…。もう、相変わらずなんだから」

「はいはい。それで何のようだ？ ……ニルフィリア」

少女……ニルフィリアにウォルターは片眉を上げて問うた。

彼女はやはり気に食わないようだが、それをウォルターが気にかける必要もないだろうと白々しい顔で彼女へ視線を向ける。

「……久々に調子が良かったから、あなたと会おうと思つて。まあ、また戻らないとならないのは事実なのだけど。それにしても…相変わらずね、あなた」

「まあ、変わつてたまるかつて話だが」

「それはそうね。あなたは変わつたら困るもの。…でも、どうかしら」
久しぶりにウォルターを見たニルフィリアは、ほんの少し小首を傾げつつするりと肩を伝う髪を揺らしながら、白の肌を見せる。

その姿に眉ひとつ動かさないウォルターにニルフィリアが頬をふくらませた。

「もう、あなたって本当誘惑のしがいがあるわね」

「しなくていいって」

ふくらんだ頬の空気を抜かせながらウォルターが言い返すと、酷く機嫌の悪いルウが絞り出したような声でニルフィリアに言う。

（そうだそうだ。……鬱陶しい雌はとつと失せてよね）

「あら…、ルウ・ルレイスフォーンじゃない。無様な姿になつたあなたをはつきりと見られなくて残念だわ。姿をはつきり見せてくれない

のが本当に残念」

(ふん、キミに見せる姿なんて無いよーだ。ばーか)

「本当、こどもっぽい事しかないわね、あなた」

ニルフィリアが誘惑出来ない存在は、彼女にとって不快な存在でしか無い。

そしてその存在に完全合致しているウォルターとルウは、あまり好かれてはいるわけではないのだが、彼女とは普通に友人感覚で接している。理由は未だによくわからないのだが、まあ嫌われようと嫌われていなかろうとどうだっていいので気にしたこともない。

彼女さえ気にしていないのなら、ウォルターが気にする必要もないだろうという楽観的な、ウォルターらしいといえづらい考え方だ。

ニルフィリアは特に気にした様子もなく笑みを浮かべつつウォルターの腹に乗った。

両肘について、両手は頬へ当てる。やんわりとした笑みのまま視線をウォルターへ向ける。

肘が胸板に当たるのが痛いと言うも、彼女は一切気にしていないようだ。

「別にいいじゃない。耐えられない痛みじゃあないでしょう？ ……ところでウォルター、あなたはこんな所で何をしているの？」

「……療養中だよ」

「ああ、そういう建前はどうでもいいの。質問の仕方を間違えたわね。……何を迷っているの？」

「……迷う？」

ウォルターは上半身を起こす。その動きに合わせてニルフィリアも身体を起こした。

怪訝な眼をウォルターがニルフィリアに向けるが、彼女は笑みを絶やさない。しかしほんの少しだけ、その柳眉は潜められウォルターを探るような眼を向ける。

「……他人にかまって、学園生活という“一般”に存在して。あなたは…本来の目的を忘れてるんじゃないかしら？」

「忘れてる？ オレが？」

「ええ、そう。……あなたの眼は、そんなにも軟弱な光を宿してはいなかったわ」

軟弱な光。

そんなことを言われるとは思っていなかったウォルターは、眉根を寄せて少し俯きがちにシーツを握りしめた。

その様子を見ていたニルフィリアは蔑むような眼でウォルターへ言う。

「そうやって考えこむ所を見る限り、やっぱりあなたは変わった。そうでしよう？ ……わたし達の目的の為に、酷く不利益な方へ、だけど」

「……かもな」

「同意までされたら、わたしは何も言えないわ。…でも、早く直さないと」何もできなくなるでしょうね」

「……………オレは、別に」

「そういうつもりじゃない？」

ニルフィリアの言葉にウォルターが口を噤んだ。何処か煮え切らない態度をとるウォルターに、不快そうに眉を寄せるニルフィリアはその妖艶な唇でため息を吐く。

ため息を吐かれたウォルターはといえば、やはり考え込んでいるように特にそれに気付かなかったようだった。それにまたため息を吐き、ニルフィリアがするりとウォルターの首筋へ手を這わせる。

「あなた、本当にどうしたの？ 初めて会った時や、前にあの「犬」といた時はそんな風じゃあなかったのに」

「……………それは……………」

「……答えたくないならいいわ、別に。興味ないもの。あなたが変わった理由には。でもそのせいでわたしのしたいことを阻害するのはくれぐれもしないで頂戴ね？」

「……ああ」

柔らかく笑みを浮かべたニルフィリアだが、眼は笑っていない。蠱惑的に弧を描く赤い唇、それを引き立たせる黒い髪、白い肌。ウォル

ターは何処か遠くを見るような眼で彼女を見ていた。

彼女は「もう」と小さく呟いて、左手をウォルターの目元あたりに当てる。

「情けないわね、そんな顔をして。あなたの頭にいま浮かんでいるのは何？ 弟のこと？ 兄さんのこと？ それともわたしの『模造品』の事？ それともはたまたここにいる人間の事？」

はつきりしないウォルターに、ニルフィリアは煮え切らないとばかりに言葉を連ねた。

どう言うべきか、ウォルターは少しだけ考えて、口を開く。

「……名前も知らないヤツのこと。……あいつが、はたして運命に関わっていたのか……いまでもオレにはわからないけれど」

ウォルターは小さくそう呟いて、眼を伏せた。

枯れた瞳

オレはいつまで引きずっているのだろうか、と思う。たった一週間程度の出来事。

剣帯にしまわれている色のくすんだ銃型の鍊金鋼。いつもならすぐにそんなもの捨ててしまふのに。必要ないと思いつつながら、こうして未だ持っている。

この重みが、いつも思い出させてくれる。

それでももう、彼は……

ウォルターの表情からニルフィリアはなんとなく察したらしく、眉を寄せた。それに対して複雑そうに瞳を細める彼から視線を外し、窓の外へ投げる。

窓の外に広がる空は、ニルフィリア「達」にとって不自然なものだ。かつて見ていた空とはまったく違う、本物に限りなく近く、それでいて本物ではない偽物の空、偽物の月。

「…そんなこと、知らないわ。いつまで引きずっているつもりなの？
いままでだって幾度となくあったっていうのに」

「さあ……なんでなんだろうな…。オレもわからない。オレだって、知りたい」

ただ、覚えている。

眩きをこぼしながら、ウォルターはから笑いを浮かべニルフィリアを見た。

その笑みに自嘲的なモノが含まれている事を、ニルフィリアは見逃さない。だが、とくに何かを言うこともなく口をつぐむ。

「確かに……最近慣れ合いが過ぎたかもな。そのせいでちよいとセンチメンタルな状態になってるだけだろ。大丈夫だよ」

(……そうかな……)

意外にも、問いを出したのはルウだった。

先ほどまで静かに話を聞いていたらしいルウだが、ウォルターの言葉を心配そうな声で小さな否定をする。ウォルターはやや怪訝にルウに対して首を傾げ、ほんの少しだけ先の感情を揺り起こす。

珍しい、という顔でニルフィアが頬に手を当てながらルウに問うた。

「あら、何かあるの？」

くすくすと笑うニルフィアにルウは不機嫌な雰囲気返しつつ、やはり心配そうな声で言葉を紡ぐ。

(……ウォルター、ここで十七小隊と関わり初めてから変わったでしょ？ ……結構、堪えると思うな、それ)

「いい。別に……。……どうせ、あいつらにはできることなんて、何もない」

そうだろ？

何処か投げやりとも取れる言葉にルウは眉を寄せた。

ニルフィアはため息を吐きながらウォルターをまたいで膝立ちになると、その細い腰に手を当ててウォルターに向かって言う。

「どうやらここまでのようだよ」

「……何がだ？」

「おしゃべりタイムよ。お客さんが来たみたい」

「……………」

くすくすと笑みを浮かべるニルフィアが、白い病室の空間にほどこけていく。

こういった場面では、彼女という存在は絵になるといえるのだろう。少女という姿に見合わない妖艶さを漂わせ、ありとあらゆる男達を誘惑して自らを唯一絶対と崇めさせる程、麻薬のような中毒にさせる少女。

ウォルターはそのほどけていく様を向けながら、思考は別の方へ向けていた。しかし、次に現れた少年に、ウォルターは思考を引き戻される。

「……アルセイフ」

「ウォルター…、えっと、具合どうですか」

「…別に」

「……そう、ですか」

「通常通り」なウォルターに安堵した様子で、レイフォンはベッドの隣においてある椅子へ腰掛けた。ウォルターはレイフォンに眼を向けておらず、向かいの壁を見つめている。

そわそわとしながらほんの少しだけ言いにくそうにして、レイフォンは口を開く。

「あの、ウォルター」

「………あ？」

「あ、えっと。……あの…答えてくれないとは思いますが、聞きたいことがあつて」

レイフォンが両手を絡めつつ、視線を泳がせて言う。

口の中で言葉を転がすレイフォンに、ウォルターは視線で先を促した。

「……ウォルターと話していた時間こえた、声の主を、ウォルターは知っているんですよね？」

「………」

「沈黙は…肯定ですか？ ……あ、あの…いえ、…別に責める気とかはないんですけど…ただ、気になって」

苦笑を浮かべながらレイフォンは頬を搔く。

そんなレイフォンを尻目にウォルターはどうでもいいといった顔で息を吐いた。

「そんなことが聞きたかったのか？」

「………いえ、その……」

レイフォンは言いにくいという顔で、言葉をまわす。やや渋った顔でウォルターへ視線を向け、面倒くさそうに溜息を吐くウォルターに、意を決したように口を開いた。

「……あの、ハルペーが一番初めに現れた時…、ウォルター、その傍に…いませんでしたか…？」

「……そんな訳ないだろ。オレはそんなところにいなかった」

「です…、よね。いたらおかしいですもん。…なんていうか：ハルペーに並べるなら、やっぱりヒトでも武芸者でもない…ですよね。すみません、変なことを聞いて」

苦笑交じりに髪をかき混ぜてレイフォンは言う。しかし、レイフォンの言葉に自分が一瞬動揺したことをウォルターはわかっていた。顔には一切出なかつたけれど、内心では動揺したのだ。『ヒトでも武芸者でもない』。

それは暗にこう言っているのだろう。人外の、理解不能な領域にいる存在だと。

———化物、か

ああ、そうだろう。その通りだろう。

レイフォンに改めて言われるまでもなく、分かっているのだ。

———……また…同じことになるのか

その事に何故かほんの少しだけ苛立ちを感じた。だが知られればやはり、ウォルターが想像しているようなことになるのだろう。

自らに恐怖を宿した眼を向けて、手に負えない人物だと認識されて、非道だと罵られて。

かつてに戻るだけだろう、そう内心で呟くが、それと同時にニルフィアの言葉を思い出した。

忘れていると。軟弱な光を宿していると。脆弱になったとでも言いたいのか。

そんな訳はない。そして、そんな事になるなど、あつてはならない。そうだろう。

———……ニルおフィアまが『他人なと関れわるあこと』で脆弱になるといふならば、オレはそれをすべて否定して、証明してやるよ

その為にすべてを突き放して、踏みしだくことすら恐れはしないと

「………そうだな」

小さくレイフォンにそう返して、呟いた。

「化物だ、そんなヤツ」

言いながら、ウォルターはレイフォンを乾いた眼で見た。

「きつと大丈夫だ」 って、僕は言い聞かせて

た。
ウォルターの病室を出たレイフオンは、ぼうつと廊下を歩いてい

先程、一瞬だったが気づけた。ウォルターの眼が変わったことに。それがどうしてか……レイフオンにはわからなかった。

……戻ろう。せつかくいるんだから、聞かないと

そう思い、レイフオンは足を止めて踵を返そうとした。だが、そうする前に止められる。足を止めた理由は、声をかけられたからだ。かけられた声はウォルターの主治医、ティアリスのものだった。彼はややくたびれた白衣の裾を直しながらポケットに手をつ突っ込む。

「またウォルターの見舞いか？ 律儀だな」

「え?! ……っあ、いや、あの……」

「言い淀まなくても良い。前、あいつが寝込んでいた時もずっといただろう」

「あ、え……、ええ……まあ………あ……あの……ウォルターは、大丈夫なんですか？」

「……まあな。相変わらずあいつの怪我の多さには呆れるが、その治療速度には感心させられる。入退院をさせるが、検査等のためだ。調子が悪い訳じゃない。安心しろ」

呆れ笑いをこぼし、ティアリスは口角を上げる。しかし、レイフオンはその楽観的なティアリスの表情に今日は乗れなかった。

その表情が暗いことに気づいたらしいティアリスは少し訝しげな顔つきでレイフオンを見る。

「なんだ？ 何か気になってることもあるのか」

「……いえ……あの……」

「なんだ、はつきりしないヤツだな。言いたいことがあるならばはっきり言えばいいだろう」

「す、すみません」

レイフオンはティアリスに軽く頭を下げた。しかしティアリスは、

それを逆に苛立たしそうに舌打ちを一つすると、淡藤色の瞳を先程より鋭く細めレイフオンを睨む。

「謝って欲しい訳じゃない。ただ、はつきりしろと言っているんだ。おれには関係のないことだ、あいつとのことはお前の好きにすればいい。だが、聞いたことに対してははつきりと答えろ。曖昧な答えは誤解を招きやすい」

厳しい言葉に、レイフオンはほんの少し俯いて考えた。が、頷き、口を開く。

「はい。……ウォルターは…その。あなたが問診している時、何か変わった様子はありましたか？」

「変わった様子？ とくには…なかったが。……何か、気になることでも？」

「ウォルターが…なんだか、僕を見ているようで…見ていなかったんです」

「……なんだ？ 詩人か、お前は」
「ち、違いますよ」

ティアリスの言葉をレイフオンは慌てて否定する。やはりティアリスは口角をあげ、腕を組みながら「ふむ」と呟いた。

「見ているように見えていない。遠くを見ていたということか。……あいつが考えに耽るのはいつものことだと思うが？」

「え、ええ……そう、なんですけど。でも…考えに耽っている、という様子ではなかったんですよ。普通に話していて、いきなり……眼が、乾燥したんです」

「ふむ……。少し気にかけてみるが、おれに何とか出来ることかどうかはわからん」

「はい。なので、あの…出来る限り、というか」

そう言ったレイフオンに対しティアリスは、小さく息を吐く。それにはどこか、諦めにも似た感情が含まれていた。

「……いまは所詮、おれはただの医者だ。お前らのような武芸者としての領域でその眼をしたとすれば、おれにはどうもできんぞ」

眼を鋭く細め、ティアリスがそう言った。その鋭い瞳に、レイフオ

ンは強い意味が込められていることに気付く。

彼は医者だ。医者であり、学生である。ただし、そこらにいる医者とは違う。

——これは……

かなり鈍く、濁った剄の煌きだ。レイフォンは一瞬、普段からかなり抑圧しているのだろうかと思ったが、そうでないとすぐに考えを変えた。

抑圧しているだけならば、剄の煌きは鈍くなるだけだ。

きちんとした訓練を積んでいない武芸者は、時としてそのような淀んだ剄を発する時がある。だがそれは例外に近い。だからこそ、彼の剄の淀みが気になったのだ。

「……あなたは、もしかして」

「おれはいまに満足している。医者として動ける自分にな。…だが：だからこそ、その立ち位置で話せることはなにもない」

「……………です、か」

ハーレイの同級生に、車椅子のダイトメカニックがいる。彼もまた、それによるものだ。

それでも口角をあげるティアリスに、レイフォンは疑問を投げたかった。

だがその問いはつぐまれた。彼に対して、そんな問いを投げるのは無意味だから。

彼は今現在自らの目標を見つけ、医者になるという目標に向かって進んでいるのだ。質問は彼を見ればせずともわかる。

「……ウォルターは知っているんですか？ ……その、こと」

「あいつには初対面で見破られた。学園都市に来たのは違うことをするためだったからな」

「あなた、も」

「…ああ、そうか。お前もそうだったな」

ティアリスがそれを知っていたことに驚いて、レイフォンはティアリスを凝視する。そんなレイフォンの反応に肩を竦め、ティアリスは小さく呟いた。

「あいつが言っていたことを、小耳に挟んだだけだ。おれがどうということはない」

「……で……すか」

「ああ。……おれはただ、何かをしたかっただけだ。お前もまた、何かをしたいだけだろう?」

レイフォンは小さく頷いて、ティアリスを見る。やや心配そうな眼をするレイフォンに小さく肩を竦め、ティアリスは息を吐いた。

「べつに、そのことは特に引きずつちやいないんだがな。いきなり言われた時は何故わかった、よりも先に怒りが湧いてきた。……いまでも思うが、本当、あいつの顔面に拳を叩き込んでやりたかったよ」

「……躲されたんですね」

「ああ、見事だ。だがまあ……そんなことがあつてからあいつとはそれなりにそれなりの仲だ」

レイフォンは、目に浮かびますよ、と腕を組んだティアリスに苦笑交じりに言った。

彼はレイフォンが会った時もそうだったように相手の心情を配慮しなかったのだろう。殴られてもしようがないのだろうが、天劍授受者でもあつた彼からして、ティアリスの拳を避けるのは容易かつただろう。特に、剽を扱えないとなれば。

使えてもかすりもしない相手には、しても無駄だと正直思わなくもない、が、初対面の相手に対してそれを見抜くのは無理だったのだろう。

それなりにそれなり。うまくやっていけているということだ。

ティアリスはいま、この医者という役割を見つけ、この都市の中でも腕利きの存在だ。話によれば、ティアリスは何度もウォルターの怪我に対応しているそう。主治医と言われる程なのだから当然だろうが。

ウォルターの担当医が出来るのはきつと彼だけだろうな、と思いがらレイフォンも苦笑する。

だが、ティアリスはどちらかと言えば渋面を浮かべ、自嘲気味に言葉を紡ぐ。

「なにせ、あの頃はまだ自分に武芸が出来ないと受け入れたくなかった頃だ。やっていた頃はやりたくない、やれなくなったらやりたい。……実に矛盾しているとは思わないか？」

「……いえ……そんなこと」

レイフォンだつて同じだ。武芸をやりたくない、グレンダンですでに失敗したのだから、そう言い聞かせている。

だが仕方のない状況だとはいえ、レイフォンはまた剣を持つことを決めた。自らの意志で。

グレンダンで剣を握ることが出来なかった分、レイフォンはツエルニで握れるとなつて、心の奥底では喜んでいたのだろうと思う。幼いころからずっと触れてきた錬金鋼。それを、戦うための武器を握ることを、やはり武芸者としての自分が望んでいるのだ。

軽蔑してくれても構わんぞ、と小さくティアリスが言つて、にやりと笑う。

「まあ、そんなこと取り合わんがな。いまはそれ以上に役に立てていると実感しているし、そうだと信じている」

「それは、もちろんです。ウォルターにあんな風に対応できる人、そういう人はいないと思いますし」

「……はん、それはそうかもしれないな。……しかし話がずれた。とりあえず、あいつがここにいるあいだは少し気にかけてみよう」

「あ、はい。すみません、よろしくお願いします」

レイフォンは頭を下げて、ティアリスに礼を言う。しかしティアリスは「医者だから」と言つて笑みを浮かべている。

「どんな患者だろうと、見るのは責務だ。きちんと果たす」

「……お願いします」

「何よりあいつは、自分のことを気にしない傾向があるからな。……放つておくと、何をするかわからん」

小さくティアリスが呟いた言葉は、咄嗟のことでレイフォンには聞こえなかった。だがそれでももう一度、レイフォンはティアリスに頭を下げ、踵を返した。

いま、ウォルターに聞くべきではないだろうと思つたのだ。

彼は大丈夫。きっと。彼のことは彼で何とかする。

ウォルターの事は気になる。だけど、まだ僕には何も出来ないだろうから。

だから、彼が自分でなんとかしてくれることを、信じるしかないのだ。

それが、どんな結果であろうと

小隊をしきる存在である隊長。第一小隊から第十七小隊まで存在するツエルニの小隊には、それぞれ小隊ごとに特徴がある。

その特色や使用武器の傾向から、小隊の得手不得手ももちろん存在し、小隊の性質から戦況にも長所短所が存在する。

ついに間近となった都市戦に向けて、ツエルニの武芸科は大詰めとなっていた。

「都市戦、か」

(……面倒だねえ。いやあ、まったく)

小さく呟いたウォルターの言葉に、中でルウがため息混じりにそう言う。ほんの少しだけ苦笑して、ウォルターは誰もいなくなった病室で金の腕輪をいじっていた。

もうそろそろ退院していいとティアリスが報告に来るはずだ。制服に着替えて、ウォルターはベッドに座り込んだまま、少し息をつく。

どうするべきか、今になって悩んでしまった。きつと「元に戻る」ことが必要なだろうけれど、ウォルターはそれをどこかためらっていた。それに対しても何故ためらうのか、自分の中で答えを見つけれず、それでいてどちらへ動くべきなのか、わからずにいる。

ニルフィリアに言われた様に、脆弱な光を宿して慣れ合いを続けるのか。

それとも、それを切り捨てて塗り潰すのか。

だがどうも、あの時の感覚を失えずにいた。レイフォンと話していた時の一瞬の違和感。それを、無視できない自分がいた。

「……………」

何気なく窓の外へ視線を投げた。

青い空が広がっている。エア・フィルターの外は汚染物質の濃度はあまり濃くないようだ。

オーロラ・フィールドのない空。ここへ来てどれだけ経っただろうか。どれだけ経ったとしても、この空にウォルターが馴染むことな

い。

——— といえば、練武館に行かないといけないんだったか
マイアスに行っていないようになっていたニーナが、ようやく口を開くと
か。

ここにいた間に生徒会長であるカリアンがウォルターの元に来た
が、ウォルターが口を開くことはなかった。

きつと、練武館へ行けばウォルターも問いただされることだろう。
入院の間に見舞いに来たフェリやレイフォンをはじめとした十七小
隊や、レイフォンの同級生である女子3人組も来た。後半はそういつ
たことを問わなかったが、十七小隊はやはりそうもいかない。

新しく入ったダルシエナもそれを問うてきたし、軽い口調だった
が、シャーニツドも聞いてきた。鍊金鋼の調整がてら様子を見に来た
ハーレイも聞いてきた。

何も言わないでいたが、その時は何も言われなかった。入院してい
る時になんとなく機嫌が悪いことは、新しく入ったダルシエナやナル
キ以外は知っていることで、深く追求してはと思われたのだろう。

だが、おそらく練武館の話し合いではそうもいかないだろうな、と
なんとなく思って、ウォルターは息をつく。

できることなんてない。そうだろう。

だから、口を噤んでおくことが一番得策だろう。

そう思った時、ちょうど扉が開いた。

練武館にウォルターが到着した時には、すでに十七小隊のメンツは
全員揃っていた。

運動禁止令が出たいま、さすがに屋根の上を跳んでいくようなこと
をすればすぐさま病院へ逆戻りだ。それはさすがに避けたいと思っ
て正当法で行けば、時間がいつもの倍以上かかってしまった。

どこか探るような目つきで、レイフォンが視線を向けてくる。いや、十七小隊の全員が、そんな眼をウォルター、そしてニーナに向けていた。事情が説明されていないいま、そういう眼を向けられることは当然だろうなどなんとなく思った胸に、何かがまた違和感を突きつける。

まただ。レイフォンの時と同じ違和感。苛立ちにも似た、不服なような、気に入らないような。

ウォルターは無意識に眉根を寄せながら、とりあえずと集まっている輪へ足を向けた。

ニーナはなんとなく経緯を説明した。

ツエルニにいなかったことや、廃貴族がいま自分の中にあること。廃貴族はデインの時のように暴れることはなく、現在は鎮静状態にあるということも。

だが、詳しい経緯には触れなかった。これからだというところで話をくじかれた面々は怪訝にニーナへ視線を向ける。ニーナは「言えない」ということを強く強調し、それでいて誰にも言っていないのだと、十七小隊だけに内密にしているわけでないのだと、そう言った。

経緯を知りたくてもニーナがそういえば言わないことは誰もがわかっていて。だからこそ、それ以上の追求も出来ず、説明を急かすような真似も出来なかった。

——まあ、ディックに言われたからな

ディクセリオ・マスケイン。元ツエルニ生徒であり、ツエルニの暴君とも呼ばれていたかつての同級生であり、同僚であり、いまなお共にイグナシスの妄執を砕かんと動く獣。

少し前のバンアレン・デイで出会ったニーナとディック。そして、ディックと共に並んだウォルター。だが、ニーナにそのことに関して口を開くようなことは一切しなかった。

関わりを持つものが増えれば、それだけ方向性が増えるということ。それはまたウォルターの仕事が増えるということだ。そして何より、ニーナの性格だから根掘り葉掘り聞かれるのだろうと思うと、それを一番避けたかった。

「……イオ先輩は、どうなんです？」

フェリの静かな問い。ニーナも含め、十七小隊面々の視線がウォルターに集中した。

ウォルターもまたツエルニから姿を消していた。ニーナのように。それでいて彼女と違い、ツエルニに姿を現してフェリやレイフォンと接触していたのだ。怪訝に思われても仕方のないことだろう。

だが、その疑問の視線が突き刺さる中でウォルターは口をつぐむ。何も言う気はないのだと、雰囲気だけで語る。

それに憤りを真つ先に感じたのは、やはりというかナルキだった。彼女の表情がやや怪訝な、不可解なものを見るような様子に変わっていく。

続いて眉を寄せ始めたのはダルシエナで、彼女は口を開いた。

「何も言わないつもりか？ ウォルター」

よく考えれば、ダルシエナと真正面から向き合うのはこれが初めてかもしれない。第十小隊の時はダルシエナをシャーニツドに任せだし、ウォルターはデインとすら向き合っていなかった。ただ、成り行きを見ていただけだ。

彼女はその流麗な表情に怒りをにじませながら、ウォルターを見ている。そしていつまでも黙りこんでいるウォルターに腹を立てたのか、腕を組んで苛立たしげな顔でウォルターを見た。

しかし、十七小隊の怪訝な雰囲気と若干の怒りをにじませた感情の満ちた空間の中でも、ウォルターは黙ったままだった。何も言わず、ただそこに立っただけ。どこを見ているともなく、ただいるだけ。そんな状況だった。

「……オレに、言うことはない」

「なぜです？ 急にいなくなり、急に現れた。そしてまた、あなたは姿を消して、汚染獣が押し寄せてきたあの戦場に姿を現した。……そんなことがあったにも関わらず、なにも言うことはないと言うんですか？」

「ない」

フェリは静かな言葉の中に、小さな憤りを見せた。だが、言い切つ

たウォルターの言葉に更に苛立った様子で、やや眉根を寄せる。

そんな面々の中で、シャーニッドは静かに腕を組む。

「別にお前がどうかしようってわけで、おれらも聞いているんじゃないよ。ただ、十七小隊として、お前のことを気にしてるんだ」

「……………ただ、戦場があつた。だからいた。それだけだ」

「でも…………ウォルター。僕は、その答えで納得出来ません」

レイフォンが小さく前に出た。ウォルターの冷めた目線はレイフォンを捉え、そらされる。

「戦場なら、グレンダンにいればいい話でしょう？ ……そう言うのならなぜ、あなたはここにいますか？」

「……………いることが、悪いとでも？」

「そ、そういう事では…………」

「…ウォルター、あまりレイフォンを困らせてやるな。…わたしも言っていない以上、強く言える立場ではないが…………もし、ウォルターに言える事があるなら、わたしも聞きたい」

「さつき言つたはずだ。『ない』と」

ウォルターの声音は冷えきつたまま。冷えた声音で呟くウォルターの視線は、すでに十七小隊の面々を視界に入れてすらいない。逸らして斜め前の地面を見つめたまま、そこに立っている。

「そうやってなにもかもはぐらかすつもりですか、ウォルター先輩」

「じゃあ言えば理解できるのか？ その話が、どんな話かも、どんな規模かも知らないで？」

「そんなこと…………話の内容どころか、概要すらも聞いていないんですよ？ わかるわけないに決まってるじゃないですか、ウォルター」

「どう言われようと、オレは『お前ら』が分かるとは思えない」

「わからなくても、言うことに意味があるんだろ」

そう言つて、腕を組んだままのシャーニッドは鋭くウォルターを見る。

煮え切らない態度のウォルターにしびれを切らしたようで、シャーニッドの声音も、双眸も、普段からは想像もつかないぐらいの真剣そのものだった。

「おれだって、デインやシェーナとのことがお前らに分かるなんて思ったことはない。だけどおれは話した。おれ自身のけじめと、お前たちに信頼を託すとして」

「……………そんなことは、」

「知らないと言っても言うのか？ ウォルターがよく言うだろう。『分かるのかと言われても、言われなきやわからない。言われないなら誰もわからないし、わかろうとなんてしない』って」

「……………そうだとしても……………お前らには」

この世界の人々が、このままではだめだと思っている。

だが、こんなことを言っただけで本当はわかるのだろうか。理解しようとしても、理解できないことはごまんとあるこの世の中で、どう分かるというのか。

その眼で見ても理解しようとしなければ出来ない。しようとしてもわからない時だってある。

デイツクがニーナを止めた理由はそれで、そしてまた、この世界は連鎖していく。あらゆることにつながりを求め、つながればあらゆるものへと因子を拡散させ、世界の運命に関わるという呪いにも近いそれを与える。

知るということは、呪いへの一歩。

そして、その呪いは綴りが終わらない限り、ずっと続く。それこそきっと末代まで。

グレンダンがいい例だ。王家はすべて運命へ関わりを持ってしまったが故に、『あちら側』を見る。子も、親も、知った友人も、何もかもだ。

知ったものの先に待つものは、絶望か、死しかない。

——だから、あいつも死んだ

知っているウォルターに関わった。だから、死んだ。狼面衆にかかり、死んだのだ。

手が、知らずのうちに剣帯の錬金鋼に伸びた。

(……………言いたく、ない)

自分の知っていること。自分の関わっていること。自分のやるべ

きこと。自分のやりたいこと。

(……ウォルター……)

自分が、していること。

ルウの心配そうな声音が思考に波を立てた。

——知らせることと、関わらせることは別。伝えるべきだと

思うことと、言うことは、別

なら、言わなくていい。

どうせ時が来るならば、必ず知ることになる。

このツエルニには、ウォルターがいるのだから。

だから、言い放つ。

「関係ない」

全員の表情が怒りに染まった。

冷静な表情で、感情の宿らない瞳でそれを見渡しながら、ウォル

ターはやはり言い放つ。

胸にはびこる何かを無視して。

「関わったとしても、知ったとしても。……所詮はそこにいるだけの

役立たずだ」

必要なのは運命に関わる因子を持つものだけ。

半端な関わりを持ったものは、その半端さ故に死ぬ。

いずれくる運命から切り捨てられる存在に過ぎない。

ならば、必要ないのだと

こちらもまた、切り捨てるだけだ

ほんの少しでも、あの日々より良い未来を

ウォルターが揺れている。

そのことは、誰よりも共にあるルウがわかっていた。

だが、その揺れているのは志ではなく、目的ではなく、僕らが一番得ていないであろう”もの”だった。

だからきつと、ウォルターも掴めずに戸惑っているのだと思う。

ウォルターが誰にも言わないし、そんなウォルターを誰も気付かないから誰も知らないけど、ウォルターは一番優しい”人”だと思ってる。

彼は、誰よりも優しいから。

彼は、誰よりも誰かのことを気にかけているから。

彼は、自分には人に一番大切なものが欠けているという。

だけど僕はいつも思うんだ。ウォルター以上に、誰かを思っている”人間”なんて、この世界にいるだろうか。

もちろん、純粋な人間だっているだろうし、誰かに尽くすことを信条とする人だっているだろう。そんなことはわかっている。

きつと他の人だったら、思いが変わってしまうと思うんだ。ウォルターが大切にしているモノはきつと、人間だったら屈折して変わっていつてしまうと思うんだ。ずっと願っているのは、ずっと思い続けるのは、ずっと同じことを続けるのは、何よりも苦痛だと思うから。いまのキミがそうであるように。もどかしい様に。何をしても変わっていないような思い、不安にかられているキミのように。

それでも僕は、キミだから、そこまで強くもっていられるのだとウォルターに言いたい。キミだから、そうしているのかキミで良かったと、僕は思えるって。

だけどきつと彼はそれで満足しない。だってウォルターだもの。

こうして精神を「共有」しているこの空間でも、ウォルターの精神はいま少し引きこもりがちだ。僕にさえ、塞ぎ始めている。

誰も気づいていないだろう変化。ウォルターが大切だと思うから

こそ、無茶をして欲しくない。無理をして欲しくない。彼に、誰にも悟られないまま悲しんで欲しくない。

それでも僕の口から、そんな言葉は言えない。

きつと、精一杯頑張っているのに「頑張れ」って言われるのと同じようなものだろうから。

きつと、泣きたいのに「泣くな」って言われて必死に堪えるのと同じようなものだろうから。

彼は絶対そんな姿、他のヤツには見せない。あの隻眼にですら、見せない。その片割れにも、あの獣にも、闇にも、魔女にも。この世界に存在する誰にも。

僕が、そんな彼の唯一の場所まで、奪っちゃいけない。

「……ウォルター」

小さな声で、呼ぶ。

彼が本当はそうなればいいと思っているもの、彼が欠けていると思っっている大切なもの。

僕が“それ”を掴めているとは思わない。思えない。

ただ僕は、キミと一緒にいたいから、そう思っているから。その思いがきつとそうなんだって、そう思っているだけで。僕だってきつと持っていないに決まってる。そうだとは思うけれど、ただ、そう思っているから。

気づければ簡単なんだ、ウォルター。

キミは僕よりずっとずっと、“それ”に近いものを見つけているはずなんだ。キミだから。

僕なんかよりずっと人と関わって来て、誰かを思いやる事ができるキミだから。

気づいてよ。気付けるはずだ。キミなんだから。

だからそんな風に、僕にまで隠さないでよ

「ねえ、ウォルター……僕の声は、届いてる？」

小さく、波紋が落ちた。お互いの呼応がすぐに聞こえる。

僕はここにいる。焦らないで。大丈夫。

キミはずれてなんていない。キミは、罵られるような化け物なんか

じゃない。

そんなヤツがいるなら、僕が全員消してみせる。僕が持つちからすべてを持って、ウォルターといるから。

「ね、僕はいつだってウォルターといるよ」

ほんの少しだけ、ウォルターと目があった。

やんわりと緩んだ表情が、僕に微笑む。僕も微笑み返ししながら、少しだけ離れた場所で、ウォルターを見る。

(……ああ、大丈夫だ)

(うん……そう、だね)

ああ、またキミが強がった笑みを浮かべてる。

また、そんな表情をさせてしまってる。

僕だってもう、あの日々に戻れるとは思っていない。

だから、ほんの少しでも……あの日々より良い未来を、キミと歩めることだけを願っている。

ずっとずっと、好きだから。ただ唯一の、僕の大切な人だから。

ルウは小さく胸の前で拳を握ると、笑みを浮かべて眼を閉じた。

もどかしさは拭えない

大きな機械音がひしめく機関室への入り口を見ながら、ウォルターは小さく息を吐いた。

バイトをしに来たのではなく、ただツエルニに聞こうかと思っただけだったのだが、どうも時間が悪いらしい。

来ようと思えば深夜にでも来られる。感じなれた気配に若干苦笑を浮かべながら、ウォルターは踵を返した。

サンドウィッチを口に運びながら、ニーナは小さく呟いた。

「相変わらずうまいな」

考え事にふけりすぎてうっかり配達時間を逃したニーナに、ちょうど声をかけてくれたレイフォンが持参していたサンドウィッチをわけてくれたのだ。

具材のぎつしりと入ったサンドウィッチの味は、さすがレイフォンというものだった。

「……ふう」

レイフォンが珍しく溜息にも似た息を小さく吐いた。それに小さく首を傾げ、ニーナは問う。

「どうかしたのか？」

「あ、いえ……。どうしようもないって、わかってるんですけどね。言えないことのひとつやふたつ、誰にだってあると思うので」

「……あ、ああ……。悪いな」

「いえ。いつか教えてくれると信じてますから。それに、僕は隊長の味方です」

やんわりと笑みを浮かべるレイフォンからほんの少し視線を逸らしながら、ニーナは小さく頷く。だが、レイフォンがひっかかっていたのはそれだけではないようで、その笑みを歪ませた。

「ウォルターは、話してくれますかね」

「…さあ…。あいつの考えていることは、相変わらずわからん」

「最近は少しばかり、柔らかくなったかと思っていたんですけど…勘違いだったんでしょか」

「どうだろうな。…わたしも同じような印象は受けていたからこそ…あの対応が納得いかないんだ」

ただ、突き放すように言い放ったウォルターの、あの態度と対応が。どこかわざとらしさすら感じる態度に、眉を寄せずにいられなかった。

「だが…どうだろうな」

ニーナは小さくそう呟き、足元へ視線を投げた。

バンアレン・デイの時に会ったデイクセリオ・マスケイン。彼と共にいたウォルターの印象が、どうも気になる。

ウォルターの見える目は実際大したものだし、デイクセリオ…デイツクがただ単純に強欲で悪い人間だとは思えない。お互いに遠慮しあっているような雰囲気もなく、むしろニーナ達というよりも碎けているような様子さえ伺えた。

あの時の様子はまだマシだった……と言うか、むしろデイツクとの会話が弾んでいたようにも見えた。では、練武館でのあの態度になり得た原因はもつと後だ。

では、いつ？

「……隊長？」

「……む。すまん、考え込んでいた」

「いえ、大丈夫です。…でも、何がどうだろうな、なんですか？」

ニーナは少し言葉を口の中で転がした。言ってもいいことなのか検討したからだ。

だが、すぐに本筋を話さなければきっと支障はないだろうと思っただ。きっとウォルターから話すようなことはないだろうし。

「…わたしが言えないと言ったことに、関わっているかもしれないんだ」

「……じゃあ、ウォルターもまた…何か抱え込んでいるということだ」

すか？」

——ウォルターが抱え込んでいる事のほうがずっと……わたしよりも重く、大きいだろう

小さく頷きながらニーナは考える。

ウォルターが自分の事情を話さないのはいつもだ。大切なことでもうでもいいことも、何も言わない。だがそれは自分自身ですべて解決できてしまうからだ。

だが、もしも……もしも、自分で解決出来ないような事柄にいまいるとしたら。

「もしも何かあるなら……ちからになってやれるといいんだが」

「……そうですね」

「そういえば、レイフォン」

これ以上話を続けるのもよくないかと思つて、ニーナはふと思いついたことを口にする。

「お前に稽古をつけてほしいという武芸科の生徒たちがいるんだが……」

「稽古……ですか？ ……隊長はどう思ってます？」

「わたしか？ ……まあ……わたしとしては、つけてやったほうがいいんじゃないか、とは思うが」

「……そうですね」

ふむ、とレイフォンが少し考え込んだ。考え込んだ様子のレイフォンに、ニーナはやや慌てて言葉を紡ぐ。

「いや、お前がいやだというなら、無理をしてする必要はないと思うが……あくまでお前の自主性に任せる」

「あ、大丈夫ですよ。確かに生徒の質がそれ上がるなら、都市戦での効率も上がると思いますし。僕に稽古なんてものがつけられるかどうかは分かりませんが……、隊長がそういうなら、やってみます。僕にとつても経験になりますしね」

笑みを浮かべたレイフォンは、そう言つてサンドウィッチを口へ放り、飲み物に口をつける。レイフォンの言い回しに少し眉を寄せながら、ニーナもサンドウィッチを食べきつた。

ウォルター・“V”・ルレイスフオーン

「……ウォルター?」

「あ?」

マイアスの宿泊所、食堂でウォルターは思考にふけりながら飲み物に口をつけていた。

カップの端に口をつけたまま、どこというわけでもなく見ているウォルターを、隣で怪訝に見ていたサヴァリスが首を傾げる。

「どうかした?」

「別に」

「……それなら、いいけど」

実質、ティアリスに言われたとおり3日間はおとなしくしていた。

だから3日間は体力の回復にっとめられたというわけだ。ウォルターにとつては十分すぎる程の期間。だが、あれからずっと考え事をしてる為にぼうっとしている時が多いただけだ。

ただ、考えれば考える程ぐるぐる回って、答えは出ない。ルウとも少し話したが、ルウは“しないほうが良い”という意見を変える気はないみたいだ。

久々にルウから行動が頑固すぎると言われた。考えをそろそろ一新した方が良くとも。ルウに言われるとは思わなかったよ、と返したら、苦笑を飛び越えて呆れた笑いが返ってきた。

何処か諦めたという顔をしてカップに口をつけたサヴァリスを尻目に、ウォルターもカップに口をつける。

その様子を見ていたリーリンが、控えめな声でウォルターを呼ぶ。

「あの…」

「…んだよ」

「何か……ありましたか?」

「べつになにも」

鬱陶しそうにウォルターがため息混じりにそう返すが、リーリンはウォルターの態度に合点がいかないという様子で眉を寄せる。

現時点のマイアスでは、ウォルターに変化の起きるような出来事は無いだろう。そう考えていた。しかし、彼は実際「何か」が変わり、彼の態度が豹変した。それをリーリンは神妙な顔つきで考える。

「…詮索は必要ない」

「でも、ウォルターさん…やっぱり、何かあったんじゃない？」

考え事を遮られたウォルターは無言のまま席を立った。

そのまま踵を返して食堂を去って行ってしまおうウォルターの背を、リーリンの視線が追いかける。少し申し訳なさそうにしたリーリンが、控えめにサヴァリスに問うた。

「…サヴァリスさん、心当たりありますか？」

「ないですよ」

ざっくりとしたサヴァリスの答えにリーリンはやや眉根を寄せ、顔をうつむかせた。

ウォルターを心配している様子のリーリンに、サヴァリスはほんの少しだけ苦笑を浮かべる。

「何か悩んでいる様子でしたし…何かあるんでしょうか」

「さあ、どうでしょうね。ウォルターが時々考えこむことはよくありましたし。…ああでも、あの態度には心当たりありませんねえ」

「前にも、ああいった時があったんですか？」

「ええ、まあ。…正確に言えば、「戻った」と言うべきでしょうけど」

サヴァリスの言葉にリーリンは首を傾げながら、カップに口をつけたサヴァリスの言葉を待つ。

前髪のかかる右のこめかみ辺りに手を当てつつ、サヴァリスは酷く楽しそうに笑みを浮かべた。

「…僕が天剣授受者になった頃は、あんな感じでしたよ」

周囲の人間をなんとも思っていない、酷薄な眼。すべてを見下すような冷然とした目つきだった。

今思い出しても、「いまの」彼は「あの頃」の彼からすれば考えられなかっただろう。

なにかで悩んだり、考えこんだりするようなことがあるとは、彼も

考えなかつただろう。

“いまの”彼に迫り着く間……天剣を返還し、グレンダンから去つた彼に、一体何があつたのか。きつとそれは、当の本人ですらわかつていないのだらうな、と小さく思った。

ウォルター・ヴォルフシュティン・ルレイスフォーンとは、昔から“よくわからないヒト”だつた。

彼は僕よりずっと早く天剣授受者として座していたが、彼にそれといった貫禄は周囲の人間がものすごく気を使うという点以外では見られなかつた。なにより、彼が貴族ではないということが一因しているのはまったくわからないのだが、彼という人物はものすごく楽観的だ。

かつてのグレンダン王とも知り合いだそうで、グレンダン王家に昔から関わってきたそうだ。そのため政治的なことにも時々口を出すし、女王に対しても敬語を使うどころかからかう側である筈の女王をからかつて遊んだりする。それでいて、律儀に女王のからかいに付き合つたりする。

やつぱり、「よくわからないヒトだ」というのが正直な見解だつた。軽薄な所もあれば、普段からにじみ出る剽軽さで周囲を困惑させたり、かと思えばそれとなく重要なアドバイスを出していたり、真面目に部隊をまとめたり、汚染獣戦で絶大な活躍を残したりもする。

まったく、このウォルター・ヴォルフシュティン・ルレイスフォーンという存在はなんなのだろうか。

周囲の人間……同じ天剣授受者にもそれとなく聞いてみたが、皆口にするのは、不思議で掴みどころのないヤツだ、とだけ。

本人にはあれやこれやとのらりくらりかわされて、素直に返事を返してもらえた試しがない。

僕を子供扱いしているのか、それともただそういう質だからそう言いくるめるのか、僕が言いくるめられるほど口で弱いのか、いろいろ合致しそうでなんととも言えない。

自分が天剣授受者になった後、すぐ天剣授受者になったリントンス・サーヴォレイド・ハーデンをちらと見ながら、僕はそう思う。

謹慎がとけたのはいいが、さつそくだ、女王の我が儘は。こう言うてはなんだが、彼女は本当に仕事をすればいいと思う。遊びにばかり全力を尽くすとは、我が女王ながら、やってくれる。

隣のリントンスさんもものすごく面倒くさそうな顔をしているし、まいった。

今回の指令は、ウォルターを捕まえること。なんでもウォルターが何処かへ行くと言って帰ってこないそうさ。

そんなもの念威端子を使って念威操者にでも探してもらえばいいのに……、そう思いながらも女王の命令となれば聞かないわけにはいかない。

内心でため息を吐きながら、僕はグレンダンを見渡せる尖塔の上に乗っていた。

謹慎を終えてすぐの作業がこれとは、まいったくつまらない。

といっても、謹慎になった理由はウォルターに喧嘩を売ったからだ。正確には陛下に対してだが、ウォルターに阻まれてウォルターとぶつかった。それが原因で謹慎になった。

活剷で視力を強化してグレンダンを見渡すが、見つけれない。もつと末端にいるんだろうか。もう少しよく見渡せるよう、視界に剷を集中した。のだが。

「……おい、なにしてんだ？」

「ッ?!」

「……ンだよ……」

真後ろから探していた人物に声をかけられ、僕は思わず声にならない声をあげた。普段は殺剷をしている人物まで見つける僕が、まさか

後ろを取られるとは思わなかったのだ。

平然とそこに立つ彼……ウォルター・ヴォルフシュテイン・ルレイスフオーンは、眠たげな萌黄色の眼でこちらを見ている。

「びっくりしてねえで、答えるよ。なにしてんだ？　って、聞いてンだろが」

「あ、あなたを探してたんですよ」

「オレを？　……ああ、アルモニスの命令か」

「予想的中です。さすがですね。……というより、いつからいたんですか？」

「お前が来た時から、ずっと」

「ずっといたとは、これまた言ってくれる。」

そう思いながら僕はウォルターを忌々しげに見る。探す場所は末端でもなく中央でもなく、後ろだったとは。本当にこの人はよく分からない。

「いたなら、声をかけてくれても良かったじゃないですか」

「関わりたくねえと思って」

「……はあ、そうですか」

面倒だし、と言いながら腕を組んだウォルターに、僕はやはり忌々しいと視線を向けた。本当にどういいうつもりなんだこの人は。

長年の付き合いだとは聞いているし、天劍授受者が動くことは女王の命令だとはわかっていただろう。それを関わりたくないと失礼極まりない理由で無視するとは、なんというぞんざいさ。

「……えつと……とりあえず、来てもらえませんか？」

「嫌だ」

「え」

「どうせまたくだらないことに付き合わされンだろ？　絶対に嫌だね」

そのくだらないことの序章に、僕は付き合わされているわけだけど。

腕を胸の前で交差してバツじるしを作るウォルターは、本当に心底嫌そうな顔をしている。

それは僕も言いたいです。

「きつとウォルターだけですよ、そんなこと言えるのは」

「言おうと思えば誰だって言えるだろ」

「…言うのはそうでしょうけど、その後が…」

收拾つきません。不機嫌顔でそう言い放つたら、ウォルターに鼻で笑われた。

こっちは結構真面目なんですが、彼には伝わってないようです。

「とりあえず行かねえ、面倒だし」

「…そうですか」

「ああ、アルモニスには適当に言っておけばいいだろ。いつものことだし。あいつの我が儘は今に始まったことじゃねえ」

「まあ…そうでしょうね」

ふうと溜息を吐いて、僕は尖塔の屋根に座った。

ウォルターも少し距離をおいて座る。汚染物質の濃いエリアを周回しているはずのグレンダンの空は、やけに青い。まったく、僕はそんなに清々しくありませんよ。

「…ああ、そういえば」

「なんです？」

口を開いたウォルターが、眠たげな眼をこちらに向け、言った。

「お前、名前なんだっけ？」

…少し前言った気がするんですが、もう忘れたんですか。

僕…サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスは、嘆息しながらしようがないとばかりに口を開いた。

追想

「……まあ、つっけんどんなのは昔からですし、それに拍車がかかったと言つても特に気にすることではないですよ」

「確かに、言われればそうかもしれないけど……」

「ウォルターの“あれ”はしばらくすれば元の性格……といえますか、リーリンさんの知っているウォルターに戻ると思いますよ」

軽い調子でサヴァリスが言うが、リーリンはやはり不安げな顔つきでウォルターの去って行った方向を一瞥した。

それに苦笑しながら、サヴァリスは「そういえば」と口を開く。

「あの性格といえは、レイフォンに天剣を授受したときもそうでしたね。レイフォンの強さは僕ら天剣授受者もよくわかっていましたが、ウォルターが圧倒的過ぎてなかなか受け入れられ難かったです」

「……レイフォンは……本当に強かったですか？」

リーリンがそう言葉を紡ぐ。

確かにそう疑つても仕方のないことではあった。レイフォンはウォルターに惨敗したにも関わらず、ウォルターの一言で天剣になった。

勿論レイフォンだつて負けたことが無いわけではない。しかし、あの事は本当に悔しがっていた。日が経つてもその事は腹に据えかねていたようで、レイフォンにその話を振るといつも不機嫌になっていたのだから。

「ええ、強かったですよ。ただ、ウォルターが規格外過ぎただけです」

「……レイフォンが一番得意な刀を使わなかったからとか、そういうことではないんですね」

「それはそうでしょうね。それを言ったら、僕やリテンズさん達だつて、何度もウォルターに負けているんですよ」

「え？」

そう言いながら、サヴァリスがやはり右のこめかみ辺りを触る。

リーリンはその仕草を少し気にながら言葉を待った。

「何度も手合わせしてもらいましたけど、一度も勝てたことはないです。だから、レイフォンだけがどうということではないんですよ。天劍授受者……、へたをすれば、我が女王陛下でさえ彼に勝てるかどうかわかりませんし」

サヴァリスはくつくつと笑いながらそう言う。リーリンはサヴァリスが何故笑えるのか、自身が武芸者ではないからなのかは知らないがわからなかった。

そういえば、とリーリンは思い出す。

「あれ、刀を父さんに渡した時に一緒に渡してた。……いまも父さんが持つてるのかな……?」

「……あれ、とは?」

「……レイフォンの、親につながるかもしれない唯一のものです。レイフォンが刀をやめた時父さんに渡していたので、すっかり忘れていたんですけど。いまふつと思いついて」

「そういえば、孤児でしたね。……それにしても、そんなものがあつたんですか」

「はい。でもレイフォン、いまは頭に無いんじゃないかな……」

リーリンが小さく呟いて口元に手を当てて考える。

考えに耽りだしたリーリンに、サヴァリスはこめかみから手を離しつつ、思い出した事を口にした。

「レイフォンが強いといえば」

サヴァリスの発したレイフォン、という言葉に反応し、リーリンは顔をあげた。

ふむ、と過去を思い出しながら話すサヴァリスの言葉を、リーリンが静かに聞く。

「前に老生6期のベヒモトという汚染獣を相手にしたことがあるんですよ。天劍授受者の共同戦線だね。僕とレイフォン、リントンスさんの3人。あの戦いをした時に、確かに彼は強いと思いました」

「ベヒモト……」

「ええ。あれは苦戦しましたよ。3人がかりで3日3晩、戦い続けましたからね。……ああ、それにしてもあの戦いは楽しかった」

口元を軽く緩めながら、サヴァリスは過去へ思考を馳せた。

「あー、疲れた」

ウォルターは宿泊施設の寝室で、1人ベッドへ埋もれていた。

頭痛が酷くウォルターの頭を揺さぶって、どうも思考に集中出来ない。

ちくしょう、と小さく吐き捨てる。

なにがこんなにも自身に影響を及ぼしているのか。何故、こんなにも疲れているのか。

能力の負荷というものは確かにある。だが、この感覚はそうではなかった。能力での疲れは、どちらかと言うとだるさのほうが多い。しかしいまは、だるさというよりも苦しさといったほうが近いかもしれない。

しかもその疲れに加えて何故かちりちりとした苛立ちものさばっている。レイフオンと話していた頃から抱えている苛立ちが、いつになっても取れないのだ。

なんとも言えない疲れと苛立ちに、ウォルターは逆らうこと無く眼を閉じた。

意識を落としたウォルターの中で、ルウはふうと息を吐いた。

この疲れが、いままで「気楽に」彼らに接していたことの証拠だと彼は気づかないだろう。その苛立ちが、ゆらぎだとは気づかないだろう。

彼らを信じようとしていた、信じてくれていると思っていたことへの。

——いつになったら、ウォルターはそれなりに気を重くしないでいられるのかなあ…

そう思いながら足を組んで、腕を組んだ。

ツエルニ、グレンダン、シユナイバル……ウォルターが関わりを持っている電子精霊は数え切れないほどだ。それら一つ一つにかまっている暇はないが、それでもそれなりの付き合いというものはある。

運命の終末が来るのが早いか、ウォルターが過労で倒れるのが早いか、正直いい勝負だと思う。

ルウとしてはどちらも嫌だが、何よりも早く「ここ」から出たかった。

ウォルターと共に居られるというメリットはルウにとつて嬉しい事だ。それこそ、小躍りを始めたくなるくらいに。だがいまは、「ここ」にいるだけというこの状況に歯がゆさを感じている。

懸命に戦っているウォルターに、いつになったら自分は並べるだろうか。

そう考えながら、ルウも瞳を閉じた。

グレンダンで名前のついた汚染獣と言うのは、ある種特別な意味合いを持つ。

強力な汚染獣であり、一度の戦闘で殺せなかった事が条件。

そしてウォルターが対応した汚染獣のなかで、唯一と言っている、一体だけ逃れ続けた汚染獣がいた。

名をベヒモトという、サヴァリス、リントンス、レイフオンの3人が仕留めた時には老生6期と呼ばれるようになっていた汚染獣。

かつてベヒモトがもつと幼い……と言っては表現がおかしいかもしれないが、老生体として変わり、2期となった頃だった。ウォルターが初めてベヒモトと接触したのは。

ベヒモトという汚染獣はかなり昔からいる。サヴァリス達には戦意に関わるとして伝えられなかったことだが、ウォルターが2度とも対応して2度とも逃している。

どちらもベヒモトに撤退されたにしても、1度目は仕方のない時だったと言えばそうだった。その一言で済ます気は無いからこそ、仕留められるなら仕留めたかったが、すでに済んだことだと気にしていない。

初めにベヒモトと接触したのは、本当に昔だ。

まだデルボネもいなかった頃。それなりに強力な念威操者がいたとはいえ、なかなか危機感の足りない念威操者だった。

そして自身もまた、戦いに対して興味の失せていた頃だった。

〈天剣時代〉 戦場に立つは、黒と銀

鼻孔が刺激を受ける。

エア・フィルターを突き抜けてすら強烈な汚染物質のにおいを漂わせるのは、汚染物質を食らって育つ世界の覇者、汚染獣。

この槍殻都市グレンダンのエア・フィルターを突き破り、市街地手前まで侵入してきた汚染獣に誰もが驚いていた。

戦場に立つ2人を除いて。

「…ウォルター、聞こえるかい？」

(聞こえてる。……つか、あいつ何してんの?)

「え? ……ああ、なにしてるんでしょうね」

銀色の短髪を揺らしながら、灰青色の瞳を鋭く細める。黒と赤の髪を揺らす青年、ウォルター・ヴォルフシュティン・ルレイスフォーンは尖塔の上に立ち、念威と剄を交じり合わせながら発している。

それに眼を向けるのは、この槍殻都市グレンダンが誇る武芸貴族ルッケンスの2代目、ハルフエッド・ルッケンス。

天剣授受者になった初代とは違い、彼は酷く楽観的で不真面目。戦いと、余興で読書に關してだけ興味を持っているような存在だった。

——相変わらずの特異体質だなあ

綺麗な念威を出すと思う。それでいて強烈かつ正確。その剄と念威の混ざった輝きにハルフエッドは眼を細める。

あいつ、と彼が呼んだ念威操者…ルテイエンス・ファードイナンドから応答はまだない。

「ルテイエンスに構ってる暇はないですよ。ウォルター、サポートと援護頼めます?」

(オレを誰だと思ってるんだ、お前は?)

不機嫌そうなウォルターの返答が返ってきた。しかしこう返してくれるという事はやってくれたいということだ。

まあ、やらなければ敗北しか無いわけだが。

「はい、ごめんなさいね、っとー」

ウォルターの言葉に軽く返事を返しつつ、目の前に現れた汚染獣の巨大な頭、その額に拳を叩き込む。

(まったく、面倒なヤツだな。オレはこういうの向いてねえンだつて)
「ウォルターも特攻タイプですもんね」

(まったく。……ところでルッケンス、右)

「おっと」

右から押し寄せた触手を跳躍して躲し、ハルフエッドは近くにあった屋根に着地、拳に衝剄を乗せて放つ。

ウォルターは相変わらず不機嫌で、その雰囲気は漂う端子がハルフエッドの横を浮遊している。その不機嫌さに苦笑しながらハルフエッドは構えをとった。

「ウォルターなら両方出来るでしょう?」

(めんどろくせえ。疲れるし)

「……キミらしいです」

(あ、ファードイナンド早く来いよ)

「とりあえず、現状での撃破は無理ですかね? 倒したいは倒したいですけど……無理をすると復興が大変です。さっさと押し返しましょう」

それもそうだ、とウォルターは内心で思った。

このグレンダンがいくら汚染獣との接触が多く、戦いに慣れ、修復力が強いとはいえその資金面での不安は拭い切れない。

市街地手前というだけで修復するための総額を考えるとこめかみを押さえたくなる程だろう。

ハルフエッドの言葉に、ウォルターがしようがないとばかりに同意を示した。

発生する念威が若干弱くなったと思うと、ウォルターがいる方向から強烈な剄の圧と振動が伝わってくる。ウォルターただ一人の剄が、都市を鳴動させる。

ハルフエッドはそちらへ眼をやり、ウォルターが天剣を復元する姿を見る。

白金鍊金鋼にも似た光を放つ天剣がウォルターの手の中で光を爆

発させ、巨大な質量を顕現させる。大太刀とも言えるだろう程に巨大な刀だ。刀身の幅が広く、刃渡りも長い。それを両手で掴み、右足を前に重心を落とした姿勢で身体の前面を汚染獣から完全に逸らした状態で構える。

(遅れるなよ)

「分かってますよ」

外力系衝剄を變化、龍顎りゅうがく。

外力系衝剄の化鍊變化、蛇流。

同時に剄技を放つ。

ウォルターは刀に収束させた剄を龍の形を成形し、それが汚染獣を食いちぎるべく飛来し、ハルフエツドの放った技は白金の爆発を連鎖させ、襲い来る触手、そして目的の場所である胴体へと衝撃波と共に爆発を起こす。

(ルッケンス、跳べ)

「?!」

剄技が炸裂した箇所から剥がれた汚染獣の鎧甲が爆発した。その爆発によりハルフエツドの頬、肩、腕と身体の至る所を破片が掠めていく。

「まったく、やってくれますね」

「油断してるからだ」

いつの間にか隣に来ていたウォルターが不機嫌にそう呟く。念威の光と剄の煌めきを引き連れながら、ウォルターはため息混じりに天剣を構え直す。

ハルフエツドはどこどころどころ滲み出した血に顔をしかめ、かすり傷一つ負っていないウォルターを視界に映しつつ自身も構えを取りなおした。

「ささっと押し返した方が本当に良さそうです。これ以上爆発されると、市街地への被害が本当に甚大なものになりそうですね」

「まあ、そうだな。給料減らされても困る」

「……ほんと、ウォルターは儉約家ですよねー……」

「生活がかかってんだ、うだうだ言ってられるか」

吐き捨てるように言い返ししながらハルフエツドの苦笑を鼻で笑い、ウォルターは跳躍した。向かってくる触手は大太刀を振り回して切り裂き、高度を上げていく。汚染獣の頭上まで来ると、汚染獣がその口腔を開いた。

それを見下ろしながら、ウォルターは天剣を手の中で回しながら上段に構え、振り下ろす。

外力系衝剄を变化、喰剣^{はけん}。

酷く鈍重な汚染獣に、勢いが減速しない程度に調整された高密度の剄が斬線の型で食らいつく。それは微細な振動をしながら削り取るように汚染獣の鎧甲、口腔内部を食いちぎる。

飛び散った鎧甲達を更に切り裂きながら爆発を躲し、ウォルターは背後で跳躍したハルフエツドが立つ屋根まで撤退した。

「悠長にやっている暇はなさそうですね。これは時間がかかりそうな気がします」

「本当だな。ついでに言うところとファードイナンドもいつまで悠長にやってんだ？」

「誘導してるみたいです。遠くで声が聞こえました。僕も来るまでに見かけたので協力しましたよ」

「……お前って戦闘狂なのか律儀なのかわからねえよな」

「酷いです。僕はいつだって紳士ですよ」

「その笑顔が胡散くさい。……お前の子どもは絶対戦闘狂になるわ。予言しといてやるよ、ルツケンス家で頭角を現すヤツは絶対戦闘狂だ」

「そんなこと無いですって、ウォルター。それ言ったら親父殿はどうなるんですか」

再び苦笑を浮かべるハルフエツドに肩を竦め、「それなりにそれなりな感じ」と小さく呟く。

ウォルターの信頼度のなさにハルフエツドは不満気に腕を組む。

「どうしてですか。僕は紳士ですよ」

「えー。だってルツケンスお前、お前の親父と比べるとひでえよ？」

「ああ、親父殿ですか？ ……まあ、親父殿は確かに真面目な人ですけ

ど。そんなこと言わないでくださいよ」

「ふん」

「と、言うか」

ハルフエツドが口を開いた。何が言いたいとウォルターがじろりとハルフエツドへ視線を向ける。

「なんだよ」

「何度も言いますが、僕はハルフエツド・ルツケンスであってルツケンスではないです。ひとまとめにしないでくださいよ」

「はあ？ 面倒」

「いつも、ハルフエツドか、もしくはハルフって呼んでくださいって言ってるじゃないですか」

「どうでもいいだろ。ルツケンスだろうが」

「ですからそれは家名であってですね……」

「うるせえしつこい」

ハルフエツドはやはり不満そうに文句を言う。どうでもいいとばかりにウォルターはハルフエツドの言葉を無視した。

先にも言ったが、天劍授受者になった初代とはうって変わり、この次期当主である2代目は酷く楽観的だ。あの真面目な初代からどうやったらこんなのが生まれるんだろうか。

体格に至つても真逆、性格も真逆。親子とは到底思えない。

ついでに言うと、天劍授受者になった初代と比べると頭一つ分程力量が足りていないのがこの息子だ。

いや、実力はある。ただ、初代がいたのがこの2代目の不幸というものか。

ふむ、とハルフエツドが声をもらし、ウォルターに声をかけてくる。

「しようがないですねえ……。……ところでウォルター、この爆発についてなにか見解は？」

「あ？ ……細胞レベルでの構成体なんだろう、この汚染獣。と言うよりそれ以下のサイズの物質だろうな」

「……ふむ。つまりこれで一個体ということではなく、細胞が、それ以下の物質で構成された群生生命体ということですね。どうでしょう

う？ 爆発したあれは汚染獣へ結集していきますよ。放っておいたら完全に復元でもされるんじゃないですか？」

ハルフエツドが至って落ち着いた様子で触手を避けながらウォルターにその声をかける。

それはウォルターも考えていたが、おそらくそれはないだろうと考えていた。汚染獣の更に元、つまりかつてはポーンという名前で呼ばれていた、ナノマシンで構成されていたものだ。だからこういった群生生命体がいっても驚きはしない。が、面倒だというのは確かだ。

しかし、あれだけ派手な爆発をするのだ、完全に復元出来る筈がない。コンマ以下だろうとなんだろうと、確実に削れてはいるだろうが……

「まあ、真面目にあれに付き合おうと数日かかるだろうな」

「それは困りますねえ。じゃあさっさと追い出しましょうか。ウォルター、先に行きますか？」

「そうする」

大太刀を構えてウォルターが屋根から飛び降り、逆手に構えた大太刀を地面につかれていた汚染獣の手と思しき部分に突き刺した。

汚染獣の咆吼を聞きながら、天剣はそのままに汚染獣の腕を伝って駆け上がり、跳ぶ。跳んだ勢いに乗せて狼の形を模す剄を纏わせた蹴りを放ち、汚染獣の鎧甲を破砕する。

外力系衝剄を变化、鋼蹴こうしゅう・餓狼牙がろうが。

汚染獣が大きく体勢を崩し、後方へ更に下がる。外縁部まで、もう少し。

ウォルターの蹴りによって碎かれた鎧甲は、反動で宙へ舞い、ウォルターを取り囲む。

「ウォルターー！」

ハルフエツドが声を張った。ウォルターは舞い上がった鎧甲を冷静に見据え、認識する。

汚染獣の一部が爆発の光を放つ一瞬、ウォルターの左手首も光を爆発させた。

爆発による風圧がハルフエツドの銀髪を揺らす。ハルフエツドは

それに眼を細めながら跳躍し、一つ上の位置にあつた屋根の上に着地、未だ爆煙の残る宙の上を活剽で駆け抜け、汚染獣へ拳を叩き込んだ。

空中で回転しながらハルフエツドは更に汚染獣が下がったことを視認し、屋根に着地してから未だ残る爆煙へ眼を向け、その名を呼ぶ。「ウォルター、無事ですか？」

返事が無いことを訝しげに思い、ようやく晴れ始めた煙の中心へ目を奪われる。

「……なんだ、あれは」

ハルフエツドの視界が、光を跳ね返す球体を捉えた。

赤も無ければ、飛び散った肉片もない。鋼鉄の球体が、ただ、そこにある。

〈天劍時代〉 赤、青の電光

突然現れた鋼鉄の球体。

活剷で視力を強化すると、その球体から周囲へ向かって、常人では見えない程極細の鋼の糸が出ているのが見えた。それがどうやら球体を支えているようだ。そして、その球を構成しているのもその鋼の糸。鋼の球体は、爆煙のあびたようには一切見えないほど綺麗だ。

球体を構成していた糸の上部が解け始め、内部に内包していた人間の姿を見せ始めた。

黒と赤の髪が吹きぬけていく風に揺られ、やる気のなさそうな萌黄色の瞳。それが気怠げに、更に後退している汚染獣を見据えた。

「あぶねえなあ…」

確か、鋼糸という武器の筈だ。かなり需要が低く、扱い手が少ない為それを実際に目にする日は来ないだろうと思っていたのに。

話に聞く程度でしか知らなかった鋼糸を目の当たりにして、ハルフエツドは「戦いたい」という欲求が湧き上がるのを感じた。

鋼鉄の球体はウォルターの足元にだけその面影を残して、すべて解けた。ウォルターの左手首の腕輪が若干霞んで見える。どうやら鋼糸は腕輪から展開されていたようだ。

「ウォルター、鋼糸使えたんですか」

「…まあ。それなりに」

それなり、と言いなながらあのタイミングで展開して完全に防御してのけるとは、さすがというか、ウォルターだなあとハルフエツドは思う。

さて、とウォルターとハルフエツドが息をつくとき、ふわりとウォルターの端子ではない念威端子がやってきた。

(遅くなつてごめん、やつと手が空いた)

「遅い」

「遅いねえ。もう仕上げですよ、ルティエンス」

(えっ、そんなに遅かった？ 結構頑張ったんやけどなー)

やってきた端子から聞こえてきた声、ルティエンスにウォルターは

不機嫌に言い返す。ハルフエッドは特に怒っているわけでも無いようだが、呆れているようだった。

ルティエンス・フアーディナンド。現グレンダンにて、ウォルターは純粋な念威操者ではないが、彼に次ぐ念威操者と言われているが、かなり性格が緩い。それでいて表情筋も緩い。念威操者にも関わらず。

ウォルターの雰囲気は先程よりさらに悪くなったのを感じながらも、ルティエンスは特に悪びれた様子もなく軽快な笑いと共に言葉を紡ぐ。

（ごめんって、ふたりとも。だってハルフとウォルターおるからダイジョブかなーって…）

「大丈夫なモンかよ…平気だけど」

「まあ、もう少し早く来て欲しかったですけど。もう何を言っても無駄ですしね、さっさと追い出しましょう、ウォルター」

「そうだな」

（あらやだ！ この子たちったら対応が冷たいわっ）

当たり前前だろ、と言いながらウォルターは天剣の柄尻に結合させていた鋼糸を引き、天剣を掴む。

「後一息ってところか。さっさと出そうぜ」

「そうですね。ルティエンス、周囲には他にいませんよね？」

（他のヤツは全員退避したし、他の汚染獣の反応は無いよ）

「じゃあやれるな」

ウォルターが順手で天剣を掴み、構えつつ剄を収束させ密度をあげていく。ハルフエッドもまた剄を練り上げて技を放つべく構えをとる。

「じゃあ、やるか」

言葉は乾燥しており、瞳には光すら映らなくなった。その冷えきつた目つきに、ハルフエッドは口角を上げる。

——まったく、これだから

ウォルターと戦いたくなってしまうがな。

武芸者の中でも規格外である天剣授受者という存在のウォルター。

そして天劍授受者に近く、それになれる程のちからを有したハルフエツド。しかし2人には明らかな違いがある。

ハルフエツドは規格外である天劍授受者の手前の存在。ウォルターは規格外な天劍授受者の中で規格外の存在。

純粋な武芸者としての強さと、技の完成度、技術力の高さ、意志の強さ、そして何よりも彼という存在の大きさ。

彼はそう意識していることも、そんなつもりもないのだろう。しかし彼はあらゆる“ニンゲン達”に埋没することの出来ない存在だ。

モノクロの世界ですら、たった一人だけカラーでいるような存在。彼こそがまさに“トクベツ”なモノ。

この世界にあるあらゆるものを凌駕する圧倒的存在。そんな存在がすぐ隣にいる。手の、届く範囲にいる。

—— 僕の興味の範疇に入っていない筈が無い

ああ、戦いたい。

練り上げたこの剄と技を、隣に立つ黒と赤の髪を揺らす青年に向けて放ちたくなる。

だが、そんな誘惑に駆られている時ではない。いまはともかくにも、目の前の障害を潰さなくては。

同時に踏み出す。ハルフエツドは上空から、ウォルターは地面を這うように下から突き進む。

外力系衝剄の変化、ふうれつつけい風烈剄・こうさいじんか紅碎迅架。

外力系衝剄を変化、こうりゆうせん弧龍閃。

足に収束させた剄を、汚染獣に叩きつける。

刀に収束させた剄を爆散させながら、強烈な斬撃を繰り出す。

汚染獣の身体が外縁部の縁へかかった。

活剄衝剄混合変化、千人衝。

ハルフエツドの姿が増殖していく。ハルフエツドが両腕を引き、増殖した姿を重ね合わせる。

外力系衝剄を変化、こうけん・そうりゆうとつ鋼拳・双龍突。

剄を込めたハルフエツドの両拳が汚染獣の腹を捉えた。拳が体皮に触れると同時、込められていた剄が外部衝撃を加えて更に後方へ高

圧力と共に汚染獣の巨大で鈍重な体軀を吹き飛ばす。

———いまの感覚、いいな

ハルフエツドは戦いの最中ですらそう思った。ウォルターの使う体術をハルフエツドなりに模したのだが、やはり彼のような威力は出ない。だが、両手突きを放つたいまの剄の込め方、感覚。

もう少し、自分にあつた改良が出来る気がした。

ああ、そうだ。そう思ったと同時に、ルティエンスが叫ぶ。

(あと一撃！)

ルティエンスの声が聞こえた時にはすでにウォルターの準備も完了していた。

踏み出し、すでに技を放ち終わり体勢を戻すハルフエツドの横を通り過ぎ、後方へ吹き飛ぶ汚染獣の目の前にいる。

その瞳に、一瞬の狂気が宿り、霧散した。

活剄衝剄混合変化、破鋼龍^{はこうりゆう}。

強烈な一撃は、ハルフエツドが双龍突を放つたと同じ位置へ叩き込まれる。左足を軸に放たれた豪速の突きが衝撃で脆くなつた鎧甲を更に打ち砕き、汚染獣を完全に外へ吹き飛ばした。

巨大な咆吼を上げながら、汚染獣が荒れた大地へ吐き出された。鈍重な動きを見せながら汚染獣が撤退していく姿を見つつ、ウォルターは大きな息を吐き出す。

「あー…疲れた」

「お疲れ、ウォルター」

「もう何もしたくない。家に帰って寝たい」

「寝たい所悪いけど、まだ不完全燃焼なんですよ。後で付き合ってくださいませんか？ さつき良い技を思い浮かんで、試したいんです」

「オレ実験台かよ」

ハルフエツドの軽快な笑いに、軽く苛立ちを覚えながらウォルターはため息を吐く。

こう言い始めたら付き合うまでしつこいのだ、この男は。ウォルターが諦めたという顔で再びため息を吐いた。

(ハルフ、ウォルター、仲いい所悪いんやけど)

「どうしたんですか、ルティエンス？」

(陛下から呼び出しや。はよ戻れって)

「……駆り出しといて、勝手な……」

盛大にため息を吐くウォルターに、ルティエンスはけらけらと笑った。

念威操者でありながら表情の豊かなルティエンスにウォルターは悪態を吐く。

「ふざけんな、疲れてんだよ」

(そんなこと言われても。陛下に言うてよ)

「まあ陛下ですし…行かないと逆に大変なことになりますよ、ウォルター」

「めんどくせ…あいつ本当1回死なねえかな」

(そんなこと言つとる間においでって)

「うるせえ、言わずにいられるかってんだ」

しょうがないとばかりにやはり溜息を吐く。そのため息にルティエンスが「幸せが逃げる」と笑いながら言う。

その言葉をウォルターはくだらないと一蹴しつつ、隣を歩くハルフエッドに視線を向けた。

その時だった。

ルティエンスの声がかすれ始めたのは。

(ウォルター、ハ…フ、な　か　ん　が　おか、)

「……ファードイナンド？」

「ウォルター、周囲の様子が…」

ウォルター達を中心に、周りの景色が歪み始めて、やがて元に戻る。しかし、それでいてここがグレンダンであってグレンダンではない感覚がする。

これは、とウォルターはいち早く察する。腕輪を弾くと手の中に刀を復元した。

「ウォルター？」

「静かに。……来る」

狼の面をかぶった成人男性平均身長ほどの何者かが、ノコギリ状の

凶暴な刃をウォルターに向かつて振り下ろした。

ウォルターの刀とノコギリ状の刃が噛み合い、火花が散る。力任せにウォルターはそれを弾き返し、ハルフエツドの襟首を掴んで距離を取る。

それに少し息をつまらせながらハルフエツドは体勢を取りなおし、狼の面をつける黒いフードの存在を睨みつけた。

「随分危ないですね。……あれはなんですか？」

「…世界の外側の存在」

「ほう。じゃああれが、親父殿もあつたという『イグナシス』の手足である狼面衆ですね？ 面があつてわかりやすいです」

「お前は動くべきじゃない。ミスをすれば巻き込まれるぞ」

「嫌ですよ。戦いたいですし」

ハルフエツドがふてくされた顔でウォルターに反論する。

その反論に対して不機嫌に眉根を寄せ、ウォルターが舌打ち混じりに口を開いた。

「ふざけんなよ。処理するの面倒なんだぞ」

「ウォルターは『こつち』の事に関わってるんですか？」

「……関係ない」

「そういう言い方をするってことは、関わってるんですね？ ……まあ、別にいいですけど…、さて、やりましようかねえ」

「だから……」

「いいじゃないですか」

そう言つてハルフエツドが口角をあげる。

「どうせ、このグレンダンで戦いを求める以上、遅かれ早かれ僕らは関わるんですから。それにほら、親父殿も関わったんでしよう？ ということとは、ここで戦わなからうと戦おうと、きつとルツケンス家は関

わる。そうでしょう？ 『師匠』？」

「わざとらしく呼ぶな。大体お前はいつも無謀な…：もう、いい。勝手にしろ。ただ、仮面の下は見るなよ。『本当に』関わることになる」

「了解です」

ハルフエツドは天剣を復元し、四肢に手甲を装備する。拳を握り、感覚を確かめる。

「現状としてどうなっているんです？」

「…軸がずれた。グレンダンであってグレンダンではない場所。あれを潰せば戻れる筈だ。さっさとやるぞ」

「ふむ。なかなか興味深い話ではありますが、まああとで聞くとしましょう」

ハルフエツドが拳に剄を収束させ、光を連れて高速の移動を行う。ウォルターは剣帯にしまわれた銃型の錬金鋼を引き抜き復元し、刀を左手で、銃を右手で構える。

外力系衝剄を變化、降雨・霰弾。

上空に向けられた銃口から銃弾が放たれ、上空で散らばり、そして降り注ぐ。降り注いだ銃弾は狼面衆達を屠っていく。

ウォルターの剄技が止む合間を縫うようにルツケンスが拳を狼面衆に叩き込み、右から振りぬかれた錬金鋼を屈んで避け、足を払う。体勢を崩した狼面衆に衝剄を放って仕留め、反対から向かってきた狼面衆へ回し蹴りを食らわせる。

「倒した感覚がありませんね。どういうことでしょう」

「実体が無いんだ、そいつらは。ただの脆弱な精神体だと納得しろ、構うと面倒だぞ」

「それもそうですよね…：しょうがないです」

ハルフエツドが狼面衆を一体ずつ潰していく。ウォルターもまた、銃の乱打で狼面衆を潰していく。

狼面衆の数が減ってきたことを確認し、踏みだそうと刀を構えたとき、ウォルターの背後で巨大な剄が爆発、雷光を引き連れて青の電撃が横をかけていった。

「あいつは」

こんな所にあられて横から手をだすヤツは1人しか知らない。

青の電撃の中で存在感を放つ赤の髪が揺れている。ウォルターはその赤髪の名を小さく呼んだ。

「なんだ、来たのか…：ディック」

呆れ混じりのウォルターの声を聞いたハルフエッドが撤退してきた。ウォルターの横に並んだハルフエッドが口を開く。

「ディック、と言うのは……彼ですか？」

雷光を爆発させ、狼面衆に愚者の一撃を放った赤髪を見ながらハルフエッドが言う。優男のような出で立ちの男……ディックことディクセリオ・マスケイン。ウォルターの知り合いである。

随分と昔から知り合いだが、彼も彼で特殊な存在のため姿は変わっていない。

彼とはかつて共にツエルニで学生として過ごしていた事もあったが、彼とは特に意見が食い違うこともなければ意見が合致することもないというなんとも言えない間柄だ。

そんなことはどうでもいいが、とウォルターは思考を打ち切り、ハルフエッドに声をかける。

「まあどうでもいいが、お前戦場横取りされたからってあいつに喧嘩を売、」

るなよ、と言おうとしたウォルターの隣を銀髪が煌めく剽の残滓を残して駆け出した。

ウォルターの髪が剽の風に揺られ、乱れる。髪を抑えながらウォルターはディックとぶつかった銀髪を睨みつけた。

「……あの野郎……話聞けつての」

ウォルターが発した言葉はすでに届いていない。その事に更にため息を吐き、苛立たしく銃と刀をだらりとさげた。

ハルフエッドといえば、にこやかにディックに喧嘩を売っていた。世界が戻りそうになっているというにも関わらず、完全に戦う気満々だ。

「僕、楽しみにしてたんですよ。戦い足らなかったのよ」

「そりゃあ悪かったな。ところでウォルターがお怒りみたいだが？」

「まあ後で何かお詫びに奢りますよ。それより、いまは僕の技の実験台になってもらえませんか？」

軽快に笑いながら、ハルフエッドは先程の感覚を思い出す。

ウォルターが使う剽技、鋼拳の改良型。龍突りゅうとつは主に威力よりも速

度重視だ。そのための双龍突がある。しかし、そこからハルフエツドは更に変化させる。自身の独自の技とする。

高密度の衝剄を練り上げ、拳から剄があふれだす程に収束する。外部破壊の衝剄を練り上げて、破壊を纏った拳をハルフエツドがデイツクへ拳を尽き出し、デイツクの鉄鞭を直撃した。

外力系衝剄鋼拳変化、剛力徹破・咬牙。

衝剄が煌き、デイツクを後方へ吹き飛ばす。自身が放った剄技の出来にまずまずと満足な息を漏らしながらハルフエツドは恍惚としていた。

「ああ、いいですね。こういう感覚は」

初めて使ったにも関わらず、まるで長年使い込んできたかのような技の馴染み具合。

たまらない。ハルフエツドは後方へ吹き飛び、体勢を立て直したデイツクを見据えながら思考する。

デイツクはといえば、酷く面倒くさいと言いたげな顔で頬をひきつけていた。

「つとに、グレンダンはろくなヤツがいねえ」

「そうですか？　こんなにも楽しい都市は無いと思います」

「そりゃあ、お前みたいなのにはそうだろうとは思いますが。おれには楽しくねえよ」

デイツクが舌打ちをしながら口角を引き上げた。

はあ、とウォルターは戦闘を続ける2人へため息混じりに見る。

———　なんだかんだ言つて、お前も戦うの好きな

ハルフエツドに文句を言っておきなながら、お前は。

ウォルターは再び盛大に溜息をこぼして2人を睨みつける。2人をどうしようかと考えながらウォルターはやはり鍊金鋼を構えた。

変動

くあつ。

「あー…、久々にゆっくり出来た気がする」

ウォルターは大あくびをしながらひよこひよこことツエルニの屋根の上を跳んでいた。

結局、マイアスの宿泊施設で久々に爆睡していた。あの後サヴァリーストリーリンの質問攻めをダブルアタックで食らって正直サヴァリスだけでもぶちのめそうかとも思ったが、それも面倒だと思ってツエルニへ戻ったわけだ。

2人が聞きたい、言いたいことなど、興味のない事だつたとしても言えればいいのだろうか。

(それはそれで酷い話だね)

(ああ、そうかもしれないが…教えるほどでもないし、聞かれることでもない)

息を吐きながらウォルターは進んでいく、と、目の前に見慣れた暖色が現れた。

「……お前」

「っ！」

妙に焦り、逃走しようとする暖色の襟を掴み、ウォルターは怪訝に息を吐いた。

「……なにしてんだ？ ライア」

何処か呆れたような視線を受け、暖色……ハイアは気まずそうに視線を逸らした。

ウォルターに捕まる少し前、ハイアは煮え切らない感情が腹に居座っている感覚に悶々と悩まされていた。

理由は至って簡単で、グレンダンの女王から届いた一通の手紙のせい。サリンバン教導傭兵団では廃貴族の捕縛は出来ないとられ、天劍授受者をこちらへ派遣することのこと。

ハイアに廃貴族への執着は無く、別に廃貴族を天劍授受者に渡そうと特に興味はない。が、無理だと思われてしまったという事が不服なのだ。

負けたと思われている事が、不服なのだ。

——ウォルターにちよつと認めてもらえたかと思つたらこれだ

少し前の汚染獣に対して組んだ隊に戦闘指導を行った際に、ウォルターはそんな風のことを言ってくれていた。

それを嬉しく思っていたら、これだ。

確かに、廃貴族のことと教導の事は別といえば別だ。話が根底からまったく違うのだから。だがそれでも癪に障るという話だ。

生きているならば、負けたというわけではない。

それがハイアの考えだ。戦いとは生と死の間で行われることであり、勝つ事はすなわち生を示し、負けることはすなわち死を示す。傭兵という都市から都市へと、戦いと戦いを転々としていく生き方の中で、ハイアはその考えを培ってきた。

ハイアを殺せなかったのは、レイフォンが甘いから。その甘さ故に、レイフォンはハイアを殺さず生かした。若くして天劍を授かり、最高位の称号と地位を得、グレンダンの地で激戦を繰り広げたウォルフシュテイン。しかし、その甘さがたたつてか、地位を奪われ、名誉も何もかも汚名に塗りつぶされ、都市を放逐される始末だ。

そして何よりも、その甘さこそがレイフォンに刀を握らせず、本領であるはずのサイハーデンの刀術を使わせない。

——まったく、面倒さ

廃貴族の事はすでになんとも思っていない。所詮は自分のちからではないのだから。

さて、そうなればどうする必要が出てくるのか。

ハイアの気持ちとしてはやはりレイフォンとの決着……なのだが、

「あの」レイフォンが素直に決闘に応じることもないだろうと思うと、どうしたものかと首を捻る。

ふう、と息を吐いてハイアは区画を分ける壁を飛び越え、屋根に着地した時だった。

「……お前」

「っー」

黒と赤の髪に、あいも変わらない柑子色のピン。

不機嫌に細められていた萌黄色の瞳が、一瞬の驚きに見開かれてハイアを捉える。

まずい、とハイアが脱兎しようとしたもののその抵抗は無駄に終わり、即座ウォルターに襟を掴まれた。

コートの襟を掴まれ、ずるずるとハイアは屋根に座り込む。ウォルターにコートは掴まれたままの為、腕は上に引っ張られたまま、コートは脱げていく。

屋根に座り込んでやや気まずいという顔でウォルターを見るハイアに、ウォルターは息を吐きながら、呆れた視線をハイアに向けた。

「……なにしてんだ？ ライア」

ハイアは気まずいとばかりに視線を逸らした。

そして、現在に戻る。

「…なにしてんだ？」

「ごめんなさい…」

「……いや、謝って欲しい訳じゃねえんだけど」

低姿勢なハイアに対して、ウォルターは片眉をあげて襟髪を触った。

戦場を動かす

少し高い建物の屋根に移動したウォルターとハイアは、少し感覚をおいて座っていた。ウォルターはといえば、来るまでに買ったパンをかじりながらぼうつと空を見ている。

ちらと視線を向けているハイアに気づいたのか、視線は動かさないうまま、怪訝にウォルターは口を開く。

「……なんか？」

いつもに増して言い方がきつい。

ツエルニに宿泊させてもらっているサリンバン教導傭兵団の人間が、勝手に決められている区画から学生区画へ来たことを怒っている様子ではないようだ。

だが、ウォルターの機嫌が悪いことは確か。

——ウォルターが機嫌悪い時って、基本的に…考えこんでる時だよな

だが何を考えこんでいるのかはさっぱりだ。

それはさすがに分からない。機嫌の悪い時は大抵そうだからなんとなく見当はつかなくもない、が、色々と考えて悶々としていると、ウォルターの苛立たしそうな雰囲気から刺さった。

ハイアは口の中で言葉を転がしながら小さく口を開く。

「……え……えつと……いろいろと……」

「ふーん」

至って興味はないと言った声音でパンをかじり、ウォルターはあくび混じりに空を見ていて、視線はこちらへ向かない。

ハイアは小さく息を吸って、声をかけた。

「…あの」

「……んー……？」

視線を空から動かささないウォルターが声を返してくる。

その声はさっぱりとしていて、特に何も考えていない声だった。

「……なんでもないさ」

「……そ」

言おうと思った言葉はハイアの喉の奥に飲み込まれた。ハイアが言いたかった言葉は消えて、代わりにそっけない言葉が紡がれる。

ウォルターは相変わらずパンをかじりながら空を見ていた。

至って人の事に興味がなさそうなのは、いつものこと。言われなければ動かない事もいっただし、人の事を気にかけているような様子を見せない、それもいつものこと。

ハイアは小さく、ウォルターに問うた。

「……おれっち、どうすればいいんさ？」

「……なにが」

どうして悩んでいるのかを説明していないのだから、わからないことは当然だ。

やはりそっけない返事を返しながら、ウォルターはハイアに問う。

視線は動かない。何処か不機嫌そうな雰囲気がないでもないウォルターに、ハイアは苦笑を浮かべた。

「…理由は簡単さ。天剣が来る。廃貴族なんてもんにおれっちは興味無いけど、レイフオンはおれっちが倒したい。……けど、どうやればいいのかーってところさね」

「ふうん…」

ウォルターはハイアのやや影の差した笑みをちらと一瞥して、パンを口に入れて怪訝な顔をする。その表情に、逆にハイアが首を傾げた。

「どうかしたのかさ？」

「……悩んでたって言う割には…すっきりした顔してるな…、と」

「そう…かさ？」

怪訝にハイアが問うと、ウォルターは小さく鼻で笑いながら言う。

「…まあ、確かにさっきは炒められたもやしみたい顔してたけど」

「どんな顔さあ！」

「ああ、炒められたもやしっていうかは…、どっちかって言うと、しなびたもやしっ！」

「だからどんな顔…ッ！」

「いまは…収穫寸前のもやしみたいな」

「だから………つて、ウォルターに必死に言った所で無駄だったさ…。…とりあえずもやしから離れてほしいさ。てか、結局どんな状況なんさ、それ…」

深々と溜息を吐き、ハイアは脱力する。興味はないって顔してそっけない返事を返しておきながら人を茶化すようなこの言動。この人は厄介な人だ。そう思いながらまたため息を吐いた。

そんなハイアをウォルターは軽く鼻で笑い、パンを持ち替えてハイアの額を突く。

「つちよ、なにするんさ」

「…ま…、隣でそうされても鬱陶しいだけだ。さっさと調子戻せ」

「………そう、さね。………でも、レイフォンは絶対におれつちが倒す。これは譲れねえんさ。だから、どうすればいいかなって…」

「…まあ、好きにすりゃいいだろ」

ウォルターの言葉に、ハイアは少し考える。考え込んだ様子に対して小さく首を傾げると、息を吐いたハイアが口を開いた。

「………少し前の汚染獣襲撃時…あいつ、どう考えても態度がおかしかったんさ」

「…汚染獣の話か」

「あれのことも少し聞きたいけど…、そつちじゃなくて、ウォルターが消えてすぐのことさ。あの届け物…腕輪をあいつに届けた時、あいつ妙だったんさ。ずっと、『できることをしないと』つて」

「………できることをしないと、か………」

ハイアの言葉にウォルターはようやく視線を動かし、眉を寄せてパンを噛んだ。

———成程な。あいつがあんなに文句を言ってきたのはそういうことか

レイフォンはレイフォンで、自分を責めていたということだ。

なによりレイフォンが、ニーナが消えた事だけでなく、ウォルターが消えたことにも動揺していたということにウォルターは少し驚きを覚えていた。

正直つい最近のレイフォンから昔ほどの警戒心は持っていないと思っていた。

が、ここまでとは思っていなかった。

それともただ単に素っ気ない言葉を言った後にウォルターが消えたから、それに負い目を感じたとしても言うのだろうか。

だがそれは実際どうなのだろう、と考えつつ、ウォルターは息を吐きながらパンをまた噛んだ。

小さく頷きながら、ウォルターは「それで」と口を開く。

「アルセイフがおかしかった？」

「…そうさ。あいつ、ウォルターが帰ってくるまで本当におかしかったんさ。話聞かねえし、…いつもだけど、なに考えてるか分かんねえし、…いつもだけど、…とにかくおかしかったさ」

「……いつものことばっかだな。…アルセイフ、そんなに切羽詰ったのか」

「ずっと休み無しで汚染獣とぶっ通し戦ってたさ」

「…まあ、それは聞いたといええばそうなんだが…あいつ…」

「でもいまは落ち着いてるみたいさ。寧ろ、前の甘ちゃんに戻ったくらいさ」

————— ……甘ちゃん、ね

確かに反論はしない。レイフォンは驚異的なほどに甘い。

ガハルドの件もそうだが、なにに関してもレイフォンのつめはいつも甘いのだ。

レイフォンがああの性格でなければきつと、グレンダンを放逐されることはなかったであろうと思う程に。その驚異的な甘さは、レイフォンの道をねじ曲げていく。

そういう点では大人な考えをするハイアに甘いと見えても当たり前だ。レイフォンのああの性格は、ウォルターでなくとも甘いと言うだろう。

「…でも、それはそれでムカつくんさ。だって、またのほほんのんきになるんだったら、おれっちは今のうちにあいつと戦う」

「……戦う…か」

「戦争期も近いし、微妙だったのはわかってるさ。でも、きっといまじゃなきや…」

「……オレは別にとめやしねえが……どうでもいいし」

ウォルターの言葉に、ハイアは意外そうな顔をする。

その気の抜けた顔を見たウォルターは、つん、と再び額をつついた。

「あ？ ンだよ」

「……ウォルターなら絶対止めると思ったさ……」

「……ああ、確かに」

「えっ」

「…お前がそんなに真剣勝負したいって言うなら止めねえけど、って話だよ。言っただろ、どうでもいいって」

ウォルターに突かれた額を押さえながら、ハイアは少し思考を巡らせた。

そうだ。先程ウォルターに会う前も、そのことで悩んでいたのだ。

どうやって、レイフォンを戦いの場に引きずり込むか。

—— どうでもいい、かあ……

レイフォンのような相手を本気にさせるためには、それ相応の事をしなくてはならないだろう。

目の前に出て一騎打ちをしようと云おうとも、レイフォンのことだ、するはずがない。

そう、少々手荒な事をするくらいはしなければ……

—— ……あいつを本気にさせるなら……

手段は浮かんだ。

この前まであったあの汚染獣との連戦の中で、なぜ、レイフォンがあそこまでして必死に戦っていたのか。天剣授受者であったレイフォンが、長期戦においての念威操者の扱いを気にかける余裕がなくなるほど、戦いに集中していた理由。

そう、それだ。しかし、それだけではどこか心もとない気がしないでもない。こここの人間だけで十分な気はする。だが……

ふと、ハイアはもうひとつの「保険」を思い浮かべた。

—— けど……これは……

眉を寄せてほんの少し思考を巡らせる。

することに後悔はない。いずれ、するとは決めていた。

レイフォンとの決着をつける。それに集中すること。

だがこれが、ただの自己満足であり自己中心的な行動であることはハイアもわかっている。わかっているからこそ、どうすべきか悩んでいるのだ。

——おれっち、は…… “そう”、ありがたい

『最強』を誇示する存在になりたいのではない。

ただ、強くありたい。認められる存在になりたい。大衆の眼などどうでもいい。

ただ、自分がそうありたいのだ。他の意志は関係ない。ただ、それだけだ。

——なら、迷うことなんてないはずさ

ほんの少しだけ眼を伏せてから、表情を引き締めたハイアはウォルターに向き直る。

「……ウォルター、ちよつと……手伝ってほしいさ」

ウォルターは企みを隠さない笑みを浮かべたハイアに、パンをかじりながら首を傾げた。

誘導

(ウォルター……お疲れだね)

「まあ、それもあるけど……つと」

ついついもの感覚で口に出してルウと『会話』してしまった。

あたりにいた生徒が少なかつたことと、ただの一般生徒だったことが幸いか。

(ライアだよ。あいつ大丈夫か?)

(今更でしょ? 頭の出来を心配したって)

(いや、そこ……)

そこ違う。

そう言おうかと思ったが、結局は放っておく事にした。別に言ったところでルウは気になどしないだろうし。

ただ少しだけ気になったのだ。ハイアの様子について。

(ま……なるようになるかな)

(そうだと思うよ? まあそれに、もしもウォルターに危害を加えるようなばかなヤツが出たら僕が消せばいいだけだしね)

(お、おう……?)

(ふふ、冗談だよ)

どこからどこまでが冗談かわかんないけどな、と小さく返してウォルターは腕を組んだ。

小声できて、と眩きながらウォルターは道を歩いていた。

(…頼まれたことはやるの?)

(まあ、一応。面倒くさいけど)

(律儀は健在だね。……でも、怒るんじゃない?)

(まあそうだけどな。その辺は適当に……なんとか……)

ウォルターが曖昧に返すと、ルウはほんの少し苦笑を浮かべた。

(……って事は……リーリン・マーフェスの方とか、都市の戦争には参加しないわけだ)

(マーフェスの方にはルッケンスがインだし、都市戦の方はなんとか

なるだろ)

(でた、ウォルターの超楽観視)

(…でたってなんだよ…別にいいだろ？ オレばっか気張るなンギ面倒だしな)

(まー…それはそうだねー。当然だよ)

ルウの同意を聞きながらウォルターは息を吐き、あるマンションのロビーに入った。

「ここだったが…そういえば」

(どうしたの?)

(十七小隊、呼び出しがあったような気がする)

気がするだけかもしれないが、とウォルターは眉を寄せて頭を掻く。そう思っていると丁度、不機嫌そうではあるが目的の人物が現れた。

「……イオ先輩?」

どうしようか、と思いつつ、ウォルターは苦笑をこぼしながら声をかけた。

「どういうことだ?」

ニーナは困惑していた。

現在、マイアスと明日接触するということで十七小隊は集まっていた。

しかし、フェリとウォルターがいつまでたっても来ないのだ。

「……フェリのこととはなんとなく察せるような気はしなくてもないのだが…ウォルターはどうした? レイフォン、何か知らないか?」

「どうして僕に聞くんですか…。 ……知らないです。話ではここ数日、アパートと病院を行き来していたそうですけど」

その言葉にやや眼を丸くして、シャーニッドが眉根を寄せて答えたレイフォンに問う。

「そうなのか? あいつまた調子崩したり…」

「…いえ、そういうわけではないらしいです。病院でただの検査だと

のことです」

「ああ、そういう。…お前、知らないって言った割には知ってるな」
「別に、聞いただけですよ、そ、そう！　そうです、小耳に挟んだだけです！」

「……そ…、そう…なのか？」

ほんの少し困惑した様子で、ナルキは慌てた様子のレイフォンに言葉
を返した。

だが、その言葉に更にレイフォンは狼狽したようで、首を縦に勢い
良く振る。

「そ、そうですよ！　それ以外の他意なんてありません、あ、ある訳無
いですっ！　…べ、べつに…病院のほうに行ったからついでに聞いて
知ってるなんて事無いですから！」

「レイフォン、口から全部事情駄々漏れだぞ」

レイフォンが早口で強情に言い張ったが、すべて駄々漏れ。しかし
ニーナとシャーニッドはいつものことだと言わんばかりに苦笑しな
がら頷いた。

だが、と呟いてシャーニッドのやや後ろにいたダルシエナが憤りの
混じった声音で悪態を吐く。

「いくらちからを持つていても、こういう時にしつかり動かな
いのは好かん」

「いや、そう言うけどなあ、シエーナ。ウォルターならいつもきつちり
来てるはずなんだよ。寧ろ、来てないっていうこの状況のほうがおか
しいんだ」

そう、ウォルターならば必ず来ているはずだ。

なのに、来ていない。

怪訝な顔をしたナルキが小さく口を開いて、言う。

「……フェリ先輩やウォルターに、何かあつたんですかね」

「フェリはその可能性を考えてもおかしくはないが、ウォルターはな
…」

「…あのウォルターに危害を加えられるヤツなんて、いないんじや
ねえの？」

シャーニツドの言葉に、落ち着きを取り戻しつつあるレイフオンは、そうであって欲しいと思いつつ眉を寄せた。

消えた姿の行方

練武館を出たレイフォンは、フェリのマンションへ向かっていた。ウォルターの住んでいるアパートは後として、ともかくフェリがいるであろう可能性の高い方へ向かうことにした訳だ。

実際、ウォルターはこの前のように「自分のこと」でこのツエルニという都市にすらいらない可能性も考えられるからだ。その点では、フェリにはそういう可能性は無い、必ず予想のつく場所にいる筈だと。

マンションには程なくしてたどり着いた。

レイフォンがエントランスホールに入って、チャイムを鳴らすために部屋番号を探していた時、その声はかかった。

「……いよう」

声で誰かは分かった。

レイフォンは対応を遅れさせないためにも、振り返り、声の主と向き合う。

声の主……ハイアは、何処か企んだ笑みを浮かべていた。レイフォンは嫌な予感がして、先程よりも一層不機嫌を表情ににじませる。

「どうしてここにいる？」

「本当、裏表の激しいヤツさね。……まだウォルターにもそんな態度とってんのかさ？」

「……ウォルターはいま関係ない。……どうしてここにいる？」

「手厳しい」

「答えろ」

ハイアの何処か余裕じみた言葉にも耳を貸さず、レイフォンは鋭く言葉を言い放つ。

ひっそりと、内心ウォルターという言葉に動揺した事は、ハイアには気取られていないようだった。

「まあ、そんな顔もいつまでしてられるか、見ものさ」

「だから……」

話を逸そうとするハイアにレイフオンは、苛立たしいとばかりに言葉を紡ごうとしたがそれは遮られる。

遮ったものは、ふたつの金属。

小さいその金属はハイアの手から放られ、放物線を描きながらレイフオンの方へ向かってくる。

宙でそれらをレイフオンは掴み取り、手の中のものを確認して、眼を見開いた。

「これ、は……」

エントランスホールの光を受けて鈍く輝くふたつの金属は、十七小队のバツヂ。

レイフオンは先程より眼を険しくして、ハイアを見た。

「おっと、動揺してるさ？　まあ、もう分かってる筈さ。……フェリ・ロスとウォルターはちよいと預かってる」

「笑えない冗談だね。…なにより、お前がウォルターを捕まえられるほどの実力があるとは思えないんだけど？」

「……ちよつと、ウォルターの優しさに付け込ませてもらったのさ。絶対に、こんな事をするつもりなかったけど…、あんたと戦うために、さ」

ハイアの言葉に、レイフオンは更に双眸を鋭く細めた。

そうレイフオンに話すハイアの眼にゆらぎはない。

しかしレイフオンは目の前で話すハイアの態度に、今までとは何処か違うような、よくわからない感覚に襲われていた。

感じている理由は、ひとつ。その瞳が冷えきっているからだ。

いままでは燃え盛る炎のような覇気をハイアから感じていた。しかし、いまのハイアにはそれが無い。だからといって、戦いに熱意が無いわけではない。

——じゃあ、なんだ…この感覚は

レイフオンはハイアのその瞳をはかりかねていた。

冷たく、鋭利な感覚、それでいて戦いに対しての凶暴性がなくなっただけではない。

レイフオンのように感情を沈殿させている瞳というわけでもなく、

ただ、何処か……

「ともかく、さ」

ハイアの言葉に、レイフオンは思考から現実へ引き戻される。

相変わらず冷めたハイアの声音にレイフオンは無意識に剣帯の青石錬金鋼へ手をかけた。

「勝負は明日、さ。余計な詮索はいらない。あんたと戦う。それだけさ」

「……マイアスと裏で手を組んでたりでもしたのかな」

「そんなわけないさ。さつきも言っただろ、戦うため、それだけさ。……あと、あんたが使う錬金鋼はいまあんたが手をかけてる錬金鋼じゃない」

「……………」

そう言いながら、ハイアが組んでいた腕をほどき、レイフオンの剣帯を指さした。

「そっちの、〃刀〃の錬金鋼の方さ」

「……なにを、考えて……」

「こつちだつて信念は曲げてる。だったら、そつちだつて曲げて当然だろ？」

「……ウオルターの、事か」

レイフオンの瞳に疑惑が宿る。

それを察したのか、ハイアはくつくつと笑い声をこぼした。

「そういうことさ。……ウオルターには純粹に憧れてる。だから裏切るなんて真似をする気は一切なかった。……けど、あんたは随分と甘ちゃんさ、並大抵の事じゃ本気になんてならないだろ？」

「……………」

ハイアは片眉をあげてレイフオンを見た。

訝しげなハイアの視線を向けられながら、レイフオンの纏う空気が変わっていく。

レイフオンの発した剽があたりの空気と摩擦し、床の僅かな埃でさえ弾き、音を立てる。

「……お前がそんなに死にたかったとは、知らなかった」

「いまやろうなんて無駄な話さ。…2人はサリンバン教導傭兵団の放浪バスにいる。おれつちが戻らなかつたら、それはそれでお楽しみさ」

「……本当に出来ると思っっているのかな」

「それはそれさ。あんたみたいな甘ちゃんが、〃仕留める〃なんてこと、出来るなら別だけどさ」

ハイアの挑発的な言葉にレイフォンは先程よりも鍊金鋼を掴む手にちからを込めた。しかしそんなレイフォンに目もくれず、ハイアは踵を返す。

レイフォンは最後の確認だとばかりに言葉を投げた。

「本気で、フェリ先輩やウォルターを拉致したんだって言うなら…、僕は手加減しない」

「本気さ。本気じゃなけりや…：巻き込んだりしないさ」

振り返りはせず、そのままハイアは去っていった。

その場に残されたレイフォンは1人、手の中のバツヂを見つめて強く握りしめた。

「フェリ先輩…：、ウォルター」

——確かに、これは相当本気みたいだ

少し前の違法酒事件の事を考えれば、ハイアは特に興味のない相手に対して、真剣に対応するという様子は見られなかった。だがその逆、ウォルターのような人に対しては決して〃自分勝手な行動〃に巻き込むとは思いつかなかったのだ。

だが、今回は巻き込んだ。

それならそれでレイフォンも全力を尽くすだけだということだ。

ニーナ達十七小隊に事を伝え、レイフォンは生徒会室でカリアン、ヴァンゼに事情を伝え、移動していった。

生徒会室にいるカリアンとヴァンゼは、レイフォンが出て行った扉

を見つめつつ息を吐く。

「本当、レイフォン・アルセイフは誇りなどでは戦わないね。彼は、ほんとに明確な理由……誰かがいなければ動かない」

「……動けないとも言うがな」

「そうだね。だけど、そうなればその彼が誰かのために動くようとして
いる時、それを阻むなんて真似が出来るはずがない」

「厄介だな」

カリアンの言葉にヴァンゼは溜息混じりに息を吐いた。

そんなヴァンゼに対し、カリアンは笑みを浮かべる。

「だが、彼よりはマシだろう」

「……ああ、ウォルター・ルレイスフォーンか」

「そうだ。レイフォン君は名前の無い大衆が死んだ場合、心が痛む程度の事はあるだろうが……。ウォルター君にはそんな事一切ないの
だろうね……。彼が躊躇することなんてないかもしれない」

「……危険か？」

「さて、ね……」

レイフォンは現在、ニーナ・アントークの強い意志に手を引かれて
いる。

そして、それに加えてウォルター・ルレイスフォーンという存在の
屈強な意志と存在感に引き摺られているような所も見受けられる。

少し前の汚染獣の襲撃に関してもそういった所が見受けられた。
ニーナがいなくなった事は、武芸ということベースにして、自分の
進む道に関しての支えがなくなったというような印象があった。

だが、ウォルターに関して少し違った。

だからこそ懸念しているのだ。

ウォルター・ルレイスフォーンがレイフォン・アルセイフの手綱を
とった時、その手綱をとるウォルターがカリアン達の敵に回った場
合、彼はどのようなだろうと。

ウォルターは自分の目的を成すためならば、現在「仲間」といえる
存在であるレイフォンやニーナ達でさえ、邪魔になれば安々と手にか
けるのだろう。

その瞳には、そのことに対する罪悪感もなにもなく、ただ悠然とそこに立つのだろう。

赤にまみれて、“いつもの笑み”を浮かべて、そう、不敵に笑うのだろう。

そんな彼にでも、レイフォン・アルセイフはついていくのだろうか。

そんな彼にでも、レイフォン・アルセイフは従うのだろうか。

引き摺られ、従属するのだろうか。

これから変わるやもしれない事象だからこそ決めつけられはしないが、彼が変われるのなら、そうなれば良いと思う。

「……いま、わたし達に出来るのは、信じることだけだね」

カリアンはそう言って窓の外を見た。

拉致

そんなことを話されているとも知らないウォルターは現在、目の前に座る銀髪の念威操者に脛を蹴られていた。

彼女に拘束は無いが、武芸者であり天劍授受者でもあつた彼には用心として——意味のない用心ではあるが——両手両足に拘束が施されていた。

その為に、やろうと思えばできるが、そんな気も起きないウォルターは彼女……フェリの機嫌がなおるまでは心ゆくまで蹴られてやろうと諦めていた。

「不快です、非常に不快です」

「あー……」

「まったく、どうしてくれましようね」

「落ち着けよ」

「では、イオ先輩の脛が青く染まり切ったら落ち着きましよう」

「……………」

フェリの横暴さにウォルターはいつものことか、と諦め混じりに息を吐いた。

しかし怒らせた理由は自身であり、加担していた事も確か、こうなった理由も自分とあつては、さすがにウォルターも反論や言い訳はしなかった。

すっかり諦めた様子のウォルターにフェリも息を吐き、脛を蹴つていた足を止める。

「……冗談です。……………ですが、まさかあなたがこんなことに加担するとは思いませんでした」

「オレはそんなつもりじゃねえけどなあ」

「…頼まれたから、でしょう?」

「……………」

「無言は肯定ですか。…本当あなたは人がいいというか、なんというか……」

「……まあ、オレだって同じ状態なんだし、別に文句は言えねえだろ。おあいこだ」

ウォルターがそう言っただけで肩を竦める。肩をすくめた動きに合わせて手につけられた拘束具が金属音を奏でた。

「……あなたは、わたしをこうしろとだけ言われていたんですか？」

「隙作れ、程度だ」

「じゃあ、あつさり降参したのは……」

「面倒だったから」

「……なんですか、それ……」

「怪我をさせる気はねえみたいだからな。どうでもいいと思って」

ウォルターはそう言っただけで自身の拘束具に視線を落とす。

拘束具はウォルターが怪我をしないよう丁寧に取り付けられている。金属と皮膚が擦れて傷にならないようさり気なく布が巻いてあり、拘束具はゆるい。抜こうと思えば手を引き抜く事も出来る。

「特に文句はない」

「……あなたは、いいんですか？」

「なにが」

「……一応、ハイアのことは『信頼』していたんでしょう？」

「……『信頼』、ね」

フェリの言った「信頼」という言葉に、それがおかしいとも言いたげにウォルターは小さな笑い声をもらった。

くつくつと笑うウォルターに、フェリは怪訝な眼を向ける。

一体、なにがおかしいのだろうと。

「何か、わたしはおかしなことを言いましたか？」

「……言っただけ……と思うけど？」

「どういうことですか」

はつきりしない態度にフェリは軽い苛立ちを覚え、ウォルターの脛を再び蹴った。

先程青あざになるほど、といったが、ウォルターがこの程度でそうなるとは思えない。だからこそ容赦なくフェリは脛を蹴った。

口では「痛い」というウォルターだが、表情や声にそんな雰囲気は

なかった。

「……オレが信頼しているかどうかと言われれば別だ。…オレは、他人”を”信頼”するつもりはないんでね」

「……信頼するかどうかは、自分では決められないのでは？ 知らないうちに信じている、なんて事があってもおかしくはないでしょう」「いま言ったことをロスが、オレにライアの前ではつきりと言えって言われたら言えるぜ？ ……いま、扉の前にいるライアに」

ウォルターの言葉にほんの少し驚いた様子でフェリが扉の方へ視線を投げた。

言葉と視線を向けられた扉は、小さな音を立てて開く。

「さすがウォルター、気付いてたんさね」

「隠す気も無かっただろ。……で、なんのようだ」

「……ウォルター、怒ってないんさ？」

「別に」

あつさりとしたウォルターの言い方にハイアは申し訳ないという感情よりも、寧ろ背筋が凍るような、恐怖が湧き上がるのを感じていた。

その言葉にハイアは、信頼を……いいや、ほんの少しでも気を許してくれていた事を、すべて無下にしたのだと。

だがそんな事を感じ取ったのか、ウォルターは鼻で笑う。

「……悪いけど、オレは別になんとも思ってたねえだけだ」

「……………」

「オレはなんとも思ってたねえって言ってんだろ。……なんかしてほしいなア、とは思うけど」

にやりと意地の悪いような顔をして、ウォルターはハイアに笑みを向ける。わざとらしく拘束具の金属音を奏で、催促するようにして。

しばし停止していたハイアだったが、ウォルターに控えめな視線を向けると、拘束具を外した。

「どーも」

「……いいんですか、こんなことで」

「オレは別に怒ってた訳じゃねえし。……邪魔だなあと思ってただ

け」

「……………適當すぎます」

フェリが納得行かないというような顔でウォルターを見、そんなフェリをウォルターは軽く肩を竦めつつ視線を向ける。

「別にそんなに深刻に考えることもねえだろ」

「……………ウォルター、ほんとに怒ってないのかさ……………？」

「…あん？」

「確かに、言うべきだったっておれっちもわかってたさ、けど、結局言わなくて…」

ウォルターはふむ、と無表情で腕を組んで、ちよいちよいとハイアを呼び、かがませた。

屈んで、用を問おうとしたハイアの額を、ウォルターは勢いよく突く。

「なんさ……………っ、いッ！」

完全に無防備だったハイアはそのまま後ろに尻もちをつく。

地面に座り込んだハイアは、茫然とした顔でウォルターに視線を向け、ウォルターがにやりと笑った。

「っは、ばかだろお前。オレを怒らせたいにしては、甘えなあ？」

「べ、別に怒らせたい訳じゃないさ！」

「ならいいだろ。うじうじ言われる方が鬱陶しい」

「……………なんだかんだいって、ウォルターも甘いさ……………」

ウォルターは、唇を尖らせたままそっぽを向いたハイアの頭を軽く叩くと、座っていたベッドに寝転んだ。

「あ……………らくらく」

気楽なウォルターの声音に、ハイアは軽く叩かれた頭を押さえてさらに視線を逸らす。

……………おれっちは、心のどこかで「ウォルターなら許してくれる」って思ってた

結局は、ウォルターに甘えたのだ。

レイフォンには格好つけてあんなことを言ったが、結局はそこだ。ウォルターなら許してくれる。

そんな甘えからこんな行動を起こして、ウォルターに手間をかけさせて。許してくれると思うなんていうこの甘えを何とかしない限り、自分もレイフオンの事を言えはしない。

レイフオンにもそういう節がある。ウォルターになら、大抵の事はしても許してもらえる。

本人にそういうつもりがなくても、裏にはそういう感情がありそうな行動が幾つかちらちらと見える。

—— おれっちもまだまださ

だが、いまはそれにさいなまれる時ではない。だからこそ今、〃こうする〃と決めたのだから。

視線をウォルターへ戻し、ハイアは口を開いた。

「…ウォルター、本当に悪かったさ。フェリ・ロスにも迷惑かけて、悪いけどもう少し待ってるさ」

「さっさとしてください」

「おう。……気いつけろよ」

「……りょーかい、さ」

ハイアはやんわりと笑みを浮かべながらウォルターから視線を外し、立ち上がって踵を返すと部屋を出た。

ウォルターにも分かっている。

武芸者同士の戦いで、絶対に怪我をしないことなどない、と。だが、まあ、それでも言うだけならと言うだけだ。

躊躇

「……フォンフォンは、来てくれるでしょうか……」

「……ロス？」

不意にフェリが呟いた言葉に、ウォルターは怪訝な顔でフェリを見た。

なぜフェリがそんなことを言うのか、その言葉に込められた意図を、意味を、ウォルターが測りかねたからだ。

そのウォルターの怪訝な表情に気づいたらしいフェリは、少しバツが悪いという表情を浮かべたものの、口を開く。

「……少しだけ…不安なんです」

「ふうん…？ …でもまあ…あのアルセイフだからな。心配する必要もねえと思うぜ」

少しだけ。その言葉に若干違和感を抱いたが、ウォルターは口をつぐんだままでいた。

フェリはウォルターの言葉に眉根を寄せる。どこともつかない視線を向けられた事に、ウォルターは更に怪訝な表情を見せた。

「……なんだよ？」

「いえ…、あなたがそんな風に言うとは思いませんでした」

「あ…？… なんでだよ？」

「いえ、あなたですから…。と言うより、そんなニュアンスを含んだ事の言い方をするとは」

「……どういう言い方だよ…。オレはただ、アルセイフの性格が甘く、そして何かを『失う』事に対して異様なほどの反応をするからくるんじゃないのか、って言いたいだけだ」

ウォルターは腕を組んで枕を引っ張り、頭を落とした。しかし、フェリはそれでは気がすまないようで、顔をしかめた。

「確かに、そうかもしれないけど…」

フェリのその言い方から、ウォルターはふと考えたことを口にした。

「もしかして…お前が、アルセイフが来るのかどうかってのを懸念してンのは…以前のことがあったからか」

「……………」

先ほどまで陰りを見せていた表情がこわばった。その表情の変わり方に、凶星か、とウォルターは息を吐いた。

「自分の事も、同じように心配してほしいって感じか」

「べ、つに…そういうわけじゃ…」

「…まあ、オレには関係ねえことだ。……そんな感情も……、オレには関係ない」

「イオ先輩……？」

「いや……なんでもねえ」

フェリが言った言葉の意図にあるような感情は、関係のないことだ。ウォルターにとって。

その感情を察する必要性を、ウォルターは感じない。不必要な感情は、すべて戦いと役目の為に潰れる。

考えに耽りだしたフェリを視界の端で見ながら、ウォルターはほんの少しだけ眼を伏せた。

(どうだろうな、知る必要は…)

(…どうだろうね。ウォルターが『知りたい』ことを知るには、必要かもしれないけれど…)

(けれど?)

(…ウォルターには…、いや、僕らには…まだわからない…かもしれない。……僕もそうだけど、他の感情というものを、単純な感情でしか理解しない僕らには…まだ、分からない事だと思う)

ウォルターはルウの言葉に小さく頷く。

———なら…ニルフィリアの言葉のようにする必要もないのかもしれない

ルウが言う様に、ただ、固執しているだけなのではないのかと思える。

必要なのは…他と交わることをやめて孤立し戦うことではないのではないか。

今度こそ、決着をつける為に。今度こそ、人類の未来を掴むために。それを掴む為に必要なことは……

「……オレにはその感情はわからない。…だが、あいつや…お前は違うだろう」

ウォルターがそう言つて寝転がったまま腕を組むと、フェリは驚愕に表情を染めた。

「……やっぱ、あなたは変わりました」

「あ……？」

「わたしが入学した時のあなたのままなら、絶対にそんなこと言いませんでした」

「……………変わった、ね」

「はい。変わりました」

「……オレにはわかんねえな」

分かるかなんてことすら、わからないのに。

小さく、一般人には聞こえないような声音でそう言つて、ウォルターは部屋の外から聞こえるハイアの声と団員達の声を拾い始めた。

聞くことの出来ないフェリは顔をしかめ、部屋の外から聞こえる戸惑いや怒りの滲んだ声の事をウォルターに問う。

「…なにを話しているか、聞こえますか？」

「特に意味のない会話だ」

「……そうですか。…まったく、こんなことに巻き込んで…、…レイフォンと戦いたいと言うなら、真正面から戦えばいいじゃないですか」

「無理だろ」

「…確かにむやみやたらに戦うのはやめたほうがいいとは思いますが…、それでも…」

フェリは眉を寄せて考えこんでしまう。

考え込み始めたフェリに、ウォルターは身体を起こして話しかけた。

「そういう事柄は相手にしねえだろ。まあ……そんな戯言は、『本当の戦場』じゃねえから言えるんだろうが」

「……それは……」

「ま……簡単に言うなら、死ぬのは嫌だろってこった」

「それは…そう、でしょうけど。……いまの戦いは、あなたからすればやはり生ぬるいですか？」

「……そりゃあ、な」

そう言つてウォルターは腕にはめた金の腕輪をいじりながらそう呟くように言った。

フェリはウォルターの弄る金の腕輪に視線を向ける。

「その腕輪は、あなたがずっとしてきたものなんですか？」

「…それが？」

「少し前、あなたはその腕輪をレイフォンに渡しましたよね。…なぜですか？」

「……なんとなく、としか」

「あなたがいつも大切にしていたそれを、 “信頼していない” 人に預けたと言うんですか？」

「……そこでその話……」

ウォルターは頭を掻き、やや眉根を寄せてフェリに視線を向けた。

しかしフェリの視線は変わらず怪訝だった。

「どうして、それも隠そうとするんですか？ 別に、あなたが他人を “信頼” している事を隠す必要は無いでしょう」

「……いや…そういうつもりは微塵もねえけど」

「じゃあなんですか？ 相変わらずはつきりしませんね」

「……信じているなんて…オレにはわからない」

「どういうことですか？」

フェリが困惑した表情で首を傾げ、ウォルターに問うた。

だが、問われた本人であるウォルター自身もほんの少し困惑の表情を浮かべており、やはり頭を掻いて口を開く。

「他のヤツことなんて気にしたこともねえし、オレはどうだっていいからな」

「……あなた自身が、信じているのかどうかわからないと？」

「まあ…」

フェリに言葉を返しながら、ウォルターは内心で小さく呟いた。

……知らず知らずのうちに、信じていた……？

レイフォンに腕輪を貸した事も、カリアンにあれだけ啖呵を切ったにも関わらず、実はそうだったから行った行動おこなだったというのか。

ウォルター・ルレイスフォーンは、いつから揺れ始めていたのだろう。

——…違う。………オレは、

(……ウォルター?)

思考を直接揺さぶるルウの声さえ聞かず、ウォルターは金の腕輪をはめた手首を掴んだ。

(ウォルター?!)

ルウの声が思考を叩く。だが、それにもウォルターは気付かない。

何処かうつろなウォルターの様子の変化に、フェリが気づいた。

「イオ先輩……？」

フェリの怪訝な声が小さく呟かれる。

摩擦

ウォルターが拾っていた音は、サリンバン教導傭兵団内での揉め事だった。

ハイアの起こした「勝手な」行動を、団員達はとがめ、叱責していたのだ。

「ハイア……俺は別に、お前のやり方を否定する気はないけどな」

「……ヴィート」

腕を組みながら、ヴィートと呼ばれた青年はハイアを見ていた。その隣で、心配そうな眼でミュンファがハイアに視線を向けている。

どこか呆れたような口調で言うヴィートは、ハイアを責めるわけでもなく、ただ淡々と言葉を紡ぐ。

「ウォルターさんのことは知ってるし、お前の性格もよく知ってる。レイフォン・アルセイフと決着を付けたいと強く望んでいることも」

「……じゃあ、なんさ？」

「…お前が決着をつけるかつかないかは、好きにすればいい。…だけど、ウォルターさん達や…、このサリンバン教導傭兵団を巻き込むのがいただけないんだよ、みんな」

黒緑色の短髪をかき混ぜながら、ヴィートは言う。彼の周りに立つ団員達も、同じようにやや眉根を寄せていた。

「だけど、とハイアは口を開く。

「天剣授受者が、サリンバン教導傭兵団の安全を保証してくれるらしいさ。……それに、レイフォンの報復は、きつとない」

「なぜ、そうだと言い切れる？ あれは不安定だ。かつて天剣になったとは思えないほどにな。そして……あのウォルター・ルレイスフォンから継承したとは思えないほどに」

「……危険があるうちは、ないからさ。あの甘ちゃんは、牽制程度しかしてこない」

「それなら、いいけどな。……ウォルターさんは、お前の行動に納得してるのか？」

「……わかんないさ」

相変わらずあやふやな態度か。ヴィートは少し眉間を押さえ、息を吐いた。

ハイアはヴィートへ視線を向けながら呟く。

「おれっちはただ、こういう形であれ決着を付けたいだけさ。……それに……」

「それに？」

「……これが終われば、おれっちはいないから」

団長としてはふさわしくない行動だ。

サリンバン教導傭兵団から追い出されてもおかしくない。だからこそ、レイフォンが報復すべきはハイア個人となる。すでに、戦うときには「団長」ではないだろうから。

そんなハイアに対し、ヴィートは溜息を吐いた。

「……お前のそういうところ、分かったたはずだったんだけどなあ」

やんわりと困ったように笑みを浮かべ、ヴィートは呟く。

「無茶をさせないのが、大人の務めだと思ってたんだけどね……。……そうもいかないかな……」

ハイアとそれなりに年齢が近いからといって、思考が同じだとは思っていない。

似た感情を抱くことがあっても、同じではない。

レイフォン・アルセイフの存在は、どうあってもハイアにとっては無視できない存在のようだ。

何より、ウォルター・ルレイスフォーンの存在が。

「取り返しの付かない事態になるわけでもない、か。……好きにするといいんじゃない、『団長』」

「……迷惑、かけるぞ」

「かけられました」

くつくつとヴィートは笑って、ハイアが見慣れたヴィートのへらへらとした笑顔に戻る。

常はテンションの高い人間のくせに、しつかりものだというのが困りどころだ、と思いつながらハイアは小さく感謝した。

深く追求せず、したいといったことをさせてくれる彼を。

ふと、その場にいなかったフェルマウスが戻ってきた。その手には、拳大の石が握られている。

それには手紙のようなものがしっかりと括りつけられていた。

「これがそこに落ちていた」

そう言葉を紡いだフェルマウスから石を受け取り、ハイアはそれを見る。なんともつかない笑い声を漏らしながら、便箋をフェルマウスへ渡した。

「…まったく、天劍授受者っていうのは困ったもんさね」

「フェルマウス。…手紙はなんて書いてある？」

ヴィートはそう問う。回りにいた団員の視線がフェルマウスへ集まった。

「天劍授受者、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスがマイアスにいる。明日の戦闘に乗じこちらへ移動するつもりだが、それをレイフォン・アルセイフに気取られては面倒なことになる可能性がある。注意を引くように、とのことだ」

「…それは…おれたちの身柄の安全を、本当に天劍授受者がしてくれるってことだな？」

やや眉根を潜めたヴィートの隣に立っていた男が、そう呟いた。その言葉に、周囲にいた団員から安堵の息が漏れる。

彼らが恐れていたのは事を起こしたハイアへ、そしてそれに伴った自分達へのレイフォンからの報復、そして、それを許さないといった時のウォルターの報復だ。

その怒りの矛先を、自分たちが受けない事に対して安堵したのだ。それにやや納得いかないという顔で、ハイアは小さく舌打ちをした。

「…マイアスからツエルニに石をぶん投げて届かせただって？ ……
本当…」

呟こうとした言葉は、飲み込んだ。

確かに天劍授受者がそういう者達の巣窟だということは知っている。そしてその中ですら、ウォルターが規格外の存在であったこと

も。

だが、それを眩きだとしても言うことをためらう自分がいた。

———そんなこと言ってる場合じゃない、さね…

やるべきことを、きっちりやり通さなければ。

「……ねね、ハイアちゃん」

「ヴェイト…。なんさく？」

フェルマウスは沈黙を保ち、ミュンファはヴェイトの隣で肩身狭そうに立っている。

先程のほぐれた顔より少し表情を引き締めて、ヴェイトはハイアを見ていた。

「どうして先走ったりしたの？」

「……いきなり、そこ言ってくるのかさく？ もうちよつと…オブラートに包んでくれてもいいのに」

「ええ、だめだめ。俺がハイアちゃんをそーやって甘やかすとさあ？ ハイアちゃんったらすーぐ調子に乗って『教えてやんないさく』とか言うから。ねえ、ミュンちゃん」

「声真似までしなくっていいさつ」

話を振られたミュンファは慌てた様子で手を絡ませ、ハイアはヴェイトに文句を言った。

からからと笑ってヴェイトはハイアを見ているが、視線はまっすぐにハイアを射抜いている。

「…で…どうして？」

「……ここは、おれっちの家さ」

「まあ……そうね…」

ヴェイトは腕を組み、小さく頷く。

他都市で拾われたハイアは、この放浪バスの中で育った。日毎に刀術の技術を伸ばし、年を追うごとに背が伸び、そして団長として成長する姿を、ヴェイトは見てきた。

「生まれた都市にいい思い出なんてない。ここがおれっちの家さ。…おれっちが育った、ここが」

ハイアの手が、壁を走るパイプを撫でた。

その動作を視界の端で見ながら、ヴィートは再び小さく頷く。

「…やけじゃないっていう事は一応、信じてるつもりだけどね、俺は。……ねえ、フェルマウスはどう思う?」

「…わたしも同じ意見だ。自分から壊してやろうという気ではないと思っているが…そうにせよ、そうでないにせよ…どうするつもりだ?」

ハイアのパイプを撫でる手が止まった。

ヴィートも、フェルマウスも気づいた。ハイアが独り立ちする気なのだと。失われる前に、自分から、家を出ると。

ハイアは孤児だ。そんな彼には、独りに疲れた時に身を寄せられる場所がない。そんな彼は、一体どうしようというのか。

「…流れ者らしく、ふらふらしてみろさ。天剣はほしいけど、もし天剣を得ることになれば定住することになる。……それはそれで、今現在はちよつと抵抗あるし…なんとなくさ」

「ふうん…、まあ、ハイアちゃんがそれでいいならいいけどね。ミュンちゃんは どうする?」

「…わ、わたしは…わたしも、ハイアちゃんと一緒に、行く」

「へ」

「へえ?」

ミュンファアの意外な言葉に、ハイアは眼を丸くし、ヴィートがにやりと口角をあげた。

勢い込んだその顔に、ハイアはわざとらしく渋い顔をしてみせる。

「未熟者のミュンは邪魔さ」

「…う…」

言い方が辛辣だよ、とヴィートが肩を竦めた。だが、涙目になったミュンファアを見て、ハイアはおもいつきり笑う。

「あはは! ま、好きにすればいいさ、おれっちはもうミュンに命令なんてできないさ」

「……うん、うん……」

涙を拭いながら笑みを作ったミュンファアに、肩の力を抜いてハイアは笑いかけた。

ヴィートはやれやれといったような顔で呆れ笑いをこぼし、腰に手を当てる。

「まったくハイアちゃんはいじめっこだよねー」

「そういうヴィートは、どうするんさ？」

「んー……俺？」

「そうさ。おれっち達が来るよりもずっと前からいたヴィートこそ、ここの方がいやすいんじゃないのかさ？」

ハイアがそう言っつてヴィートを見る。だが、ヴィートはいまいはつきりしない顔で首を傾げた。

「うーん……そかな？」

「そかな？　つて聞かれても……おれっちは知らないさ」

「あはつ、そうだね。…俺としては、まったりどっかできるといいねえ。老後のためにも」

「老後つて……早いさ……」

「そう？　でも傭兵やってるとそう思うよ。俺だつて……この武芸の腕を落としたいとは思わないけど。でもやっぱり、そういうまったりした生活に憧れるよ、正直」

「おっさんさ……」

呆れてハイアが笑いながら声をもらす。

ヴィートは「三十路近いんだからおっさんだよ」とハイアの肩を引っ叩いて答えた。

そんな何気ない日々の空気が、戻つてこようとした。

ちようど、その時だった。

『イオ先輩?!』

フェリ・ロスの戸惑ったような声。続いて響く乾いた音。

ハイアは慌てて、ウォルターとフェリの方へ向かった。

軋み

そうならば、何も出来ないのではないのか。

“信頼”している存在たちに足を取られて、いつまでたっても何も出来ないのではないのか。

脆弱。そうだ、自分は随分と“弱く”なった。

こんな言葉一つで揺らいでいると気づいて、揺らがされていると思つて。

昔なら、そんな言葉すら聞いていなかったのに。

先程考えたことだつて、言葉だつて、『前』なら言わなかったはずなのに。

どうして。ウォルター・ルレイスフォーンは、一体いつからこうなつていたのか。

“1人じゃ出来ないことがある”なんてこと、いつから思い始めていたのか。

「イオ先輩?!」

相変わらずフェリの声はウォルターに届いていないようだ。

仕方ないとばかりに、フェリはウォルターの肩から手を離して息を深く吸い込み、手を振り上げた。

「……………つ、て……………」

乾いた音が部屋に響く。眼を瞬かせ、ウォルターがきよとした顔で、目の前で懸命な表情を浮かべて手を握っているフェリを見た。

様子の戻ったウォルターに、フェリが深々と息を吐くが、いまいち現状の理解が及ばないらしいウォルターは首を傾げ、痛む頬をさすつた。

フェリといえは、様子が戻ったことに安堵している様子を見せながら、平手打ちを放つて赤くなつた手をさすつている。

「ウォルター、どうかしたかき?」

「あ……？ ……あれ？」

ウォルターが首を傾げながら駆け込んできたハリアを凝視する。

調子は戻っていないようで、ウォルターは「あれ？」とやはり首を傾げながら2人に視線をむけた。

「……まったく…、騒がせてくれますね、イオ先輩」

「どうしたんさ、一体…」

「……えっと、さっきまで確かロスと…なんかを…話してたような……？」

はて、と首を傾げたウォルターにフェリは怪訝に眉を寄せた。

——…忘れている？

フェリはウォルターの言葉に眉を寄せていたが、当の本人から嘘偽りと言った雰囲気を感じる事が出来ず、それ以上問い詰める事も出来なかった。

相変わらずきよとんとしたままのウォルターは若干戸惑ったような表情を浮かべた。

フェリはそんな様子を見ながらウォルターを凝視していた。

ウォルターの様子がおかしくなったのは、ウォルターが「信賴しているか否か」という問答についてなにかに納得したような素振りを見せた時だった。

それは一体何故なのか……それをフェリに推し量る事は出来ない、が、それでもウォルター自身が揺らいでいるということに気付いたのではないか、とほんの少しだけ思った。

「本当、イオ先輩。…今後、思いつめる前に言ってください。絶対です」

「ん？ …お、おう…？ ……ぜ…善処する……」

「そうしてください」

素直にウォルターが頷き左腕の腕輪に視線を落とした。

また思考に耽りそうになっていたウォルターに、フェリが鋭い視線と共に指摘した。

「また考え事ですか？ いい加減悶々としてっていると鬱になりますよ」

「………あ？ ……えと、ロスなんて……？」

やはり聞いていない。

フェリは先程より二割増し冷やややかな表情を浮かべててウォルターの頭に手刀を入れた。

「いてっ」

「いい加減にしてください。あなたのセンチメンタルにかまっている暇はないんです」

「ウォルター、いつもに増してぼーっとしてるさく。大丈夫かさ？」

「……微妙」

態度のあやふやなウォルターに、フェリはどうにでもなれと頭を振った。

……これは、まずいかもね

ウォルターの「中」で、ルウはひとり眩く。

「中」に存在する為に誰よりもウォルターが揺らぎを感じた、揺らいだのだと感じた。

ルウはウォルターが陥った状況にデジャヴを感じていたのだが、つい先程、その理由がわかった。

——ゼロ領域、あの崩壊状態だ

ゼロ領域では、自らの意志、そして自らを確立するものが無い限り生き残る事はできない。

そしてかつてルウはゼロ領域で崩壊しかけた事があった。

その結果が現在だといえはそうなのだが、だが、先程の状況はそれに似た部分が多々あった事に気付いていた。

ウォルターが自分のゆらぎにはつきりと向き合う事が出来て、それを無視……あるいは、それに対してある種の恐怖を抱く事がなくなれば、精神という水面に波紋が落ちる事はなくなるだろう。

しかし、彼がそうなるかどうかはルウにもわからない。

先程の状況になる少し前の事を忘れている。

これは精神状況から来る後退だろうとルウは見当をつけている。

何故そこまでして「信頼している」というそれだけの事をウォルターが否定しようとするのか、他の人間にはわからないのだろう。

ウォルター本人、本当は彼も「わかつてはいる」のだろうが、彼は、「分からない」。

……この世界に来る前の出来事が、意外にもウォルターの中で辛かったんだろうなあ

もしくは、恐怖したのか。

「その他大勢」の人間を殺した所でウォルターは特に悲しみも罪悪感も抱きはしない。

それどころか、きつと不敵に笑みを浮かべるほどの余裕があるくらいだろう。

そして彼は「目的の為には手段を選ぶことをしない」。

その為に彼は、誰かを「信頼する」という事象を無意識にでも避けているのではないか、というのがルウの見解。

正直ウォルターは表面上変化を見受けることが出来ないことでも、実はしっかり彼を「見れば」変化をしていると気付く事が多い。

そして、一番人から外れていると豪語する彼ほど人に近寄っている、近寄ろうとする存在も珍しいのだろう。

——確かに、道徳的には外れているんだろうけどね。そういう話をすれば

だが、おそらくこれで揺らいだ精神は一旦落ち着きを取り戻すだろう。

「彼」が「ウォルター・ルレイスフオーン」であるためには、揺らいではならない。

ウォルターはウォルターでなくては、目的を達することなど出来ないだろう。

——……ウォルターって本当、そういうところ下手だからなあ

彼以外を必要だと感じないルウが言えたことではないが、他人の手を借りたところで、目的が達成できなくなるわけではないのだろう。しかし、どうやら彼の頭の中には「協力」という言葉はない様子だ。確かに昔からずっと1人で何でもこなしてきた。1人ですべてをやらねばならなかった。

まだ彼は、気付いていないのだろう。

—— 僕が気付くくらいなんだから、どう考えても明確なんだろうけど…、ウォルターはまだその辺り疎いねえ

ふう、と息を吐いて、ルウははまだ気付かない妙な疎さを持つ兄に苦笑をこぼした。

マイアス戦、開始

電子音が鳴り響いた。

本来ならば昼を告げるそれは、今日に限っては違っていた。

学園都市ツエルニと学園都市マイアスがぶつかり、接触点には喧騒が渦巻いている。

両都市の生徒達の勢いは増しつつあり、熱気が立ち込めていた。そんな中、都市対抗戦のブザーは鳴り響く。

「……はじまった」

外の怒号にも似た声を聞きつけ、ウォルターはそうサリンバン教導傭兵団の放浪バスの中、ベッドに寝そべり呟く。どうでもいいといった様子で呟くウォルターに、フェリは息を吐いた。

すでにマイアス接近の事実をウォルターから聞いていたフェリの様子に驚愕はない。

「そうですね。…大変面倒な事ながら、わたしが念威を使うことは出来ません。イオ先輩は使えますか？」

「…ん」

フェリに問われ、一応念威を放出してみるも、妙なノイズに阻まれて念威は部屋から外へ出ることはかなわなかった。

「…フォアか…」

「……サリンバン教導傭兵団の念威操者ですね。おそらくそうだとわたしも思います」

「まあ、そうだろうな。念威使って助けを呼ばれたりするのは面倒だろうしな」

「この状況では、もし使えたとしても呼ぶに呼べませんけどね」

フェリは溜息を吐いて腕を組んだ。

事実、ハイアに頼まれてここにいるわけであって、半分は強制だが半分は了承したようなものだ。この状況で呼ぶということも出来ないだろう。

「まあ、手持ち無沙汰な感じはあるな」

「そうですね…。でも、どうしようも無いですし、待っているしか無いでしょう」

「…それは…な。アルセイフとライアがさっさと決着をつけるのが重要だ。…それさえ終われば、自由だ」

ウォルターは軽い調子で言うが、フェリの表情は晴れない。

一抹の不安を拭い切れないフェリは、ベッドに寝そべったまま起き上がる様子の無いウォルターを、眉を寄せながら小さく呟く。

「…そんな事で、いいんですか？ あなたは」

「…ん…？」

フェリの言葉を真剣に聞いていないウォルターは、あくびをしながら眠たげな眼でフェリを見た。

しかし相変わらず態度の改善をしないウォルターに、フェリはさらに眉を寄せる。

「いかにもどうでもいいって顔はやめてください。…イオ先輩、あなたは心配していませんか？ もしかしたら、レイフォンがわたしやあなたの為に怪我をするかもしれないですよ？」

「…オレやお前の為に、なあ…。お前の為ならわかるけど、オレの為ってのは無いな」

「どうしてですか？」

「いや、だってお前はレイフォンの保護対象だろうけど、オレは…」

「…あなたは…どうしてそんな偏屈な考えをするのでしょうか」

深々と息を吐いて、フェリは先程より三割増し冷めた目線でウォルターを睨め付けるように見た。

その視線に気まずそうな顔をして、ウォルターはフェリへ向けていた視線を逸らす。

「そんな事言われてもなあ…。だってそうだろう？」

「違います」

フェリが放った否定の即答に、ウォルターがほんの少したじろぐ様子を見せる。

再び溜息を吐いて、フェリはウォルターを見たが、ウォルターは寝

そべつたまま組んでいた足を組み換え、ベッドが金属音を奏でた。

「なにが違うか…いえ、あなたがなにをわかっていないか、わかっていますか?」

「……悪い、さっぱりだ」

「…はあ…やはり、あなたも変に鈍い所はレイフォンにそっくりですね。…いいですか、あなたはレイフォンに関して見解を間違えています」

「……見解を?」

「彼は変わりました」

「…そんな事言われてもな…」

ウォルターが片眉をあげて、おもむろに上半身を起こした。

唐突にフェリから投げられた、レイフォンに関しての見解の相違。

その相違が、ウォルターにはわからない。

フェリは相変わらず眉を寄せたままウォルターを見ているが、ウォルターはやはりそれを理解することは出来ない。

ウォルターから見たレイフォンと言うと、変なヤツの一言に限る。よくわからない所で怒り出したり、いきなり変な態度をとったり、いちいち突つかかってくる…レイフォン・アルセイフとは、ウォルターには酷く分かり難い存在なのだ。特にウォルターは基本他人と深く関わるという事をしない。

その為、余計にレイフォンのように「変わった」人間に関して、「観察」することは出来ても「理解」することはできなかった。

いいや、しなかつたのだ。興味を示さないウォルターは、理解しなかつた。

だからフェリの問いに対してウォルターがわからない、と言い放つ事もそのせいだった。

——どうしろつていうんだ…

ウォルターは襟髪を触りながらフェリを見たが、フェリはやはり相変わらずだ。

このフェリの言葉は、レイフォンに対しての見解を改めろということなのだろうか、とウォルターは思考を巡らせる。

しかし考えを巡らせようとも一向に答えは出てきそうにない。

困ったなあ、と言わんばかりにウォルターは眉を寄せ、頭を掻いた。

「一体どうして欲しいんだ」

ウォルターは問いを口に出した。問いを問いで返すと言うことは、彼自身が不快に思う為あまりしたくないと思っっているが、さすがに問わずにはいられなかった。

やはりフェリも不快に思ったようで、ウォルターを睨め付けるような視線を向けてきた。

「それは…なにに対して、ですか？」

「アルセイフに対しての見識を改めろ、つてことだろ？　だが、オレにはそれがいまいち理解できない。……お前はオレがどうすれば満足だつて言うんだ？」

「レイフォンは…、変わりました」

「それは聞いた」

「…わたしは、空にあの汚染獣が現れる少し前に…、レイフォンと話していました。あなたの事を、気にかけていました。わたしはグレンダンの時のあなたのこと、レイフォンの事も知りません。でもいまの彼は、そしてわたし達は、あなたのことを真摯に考えています」

フェリの言葉に、ウォルターは眉を寄せる。

「真摯に考えています」。フェリは確かにそう言った。

真摯。この場合はある意見、または事象に対しての正当性について、諧謔性のない考えなどを指しているのだろう。

しかし、とウォルターは考える。たとえそうだとしても、そんな簡単に人は変わるのだろうか。

人というのは不思議な生き物だ。個々でそれぞれ違う、それも分かる。

だがそれでも、ウォルターには信じる事が出来なかった。フェリの言葉を。

嘘だ、と言い切る事はしない。フェリはそういった類の嘘は嫌いだ。くだらない嘘もつかない主義。

だからこそ、そんな嘘かもしれない、と疑う気もない。

ウォルターが視線を逸らしながら頭を掻いたが、フェリはまっすぐにウォルターを見ていた。

「あなたは、そんなレイフォンに応えようと思わないんですか？」

「…あー…、悪い。えっと…微妙に信じられないんだが…、オレが悪いかね」

「…ああ、あなたは変なところで頭が堅いですから。いえ、というよりもただ、考えが固執しているんですよ、きつと」

「ふむ…」

ウォルターはやはり視線を逸らしながら首裏を掻くようにして襟髪を触った。

「別に、わたしだってあなたに対してレイフォンにああしろ、こうしろ、なんて言う気はありません。…ただ…、もう少し考えてくれてもいいんじゃないですか？」

「……………考える、ね」

けだるいとはかりに溜息を吐き、ベッドの枕へ頭を落として視線だけで窓の外を見た。

その視線でフェリはようやく気づく。

「もう…、戦いが」

レイフォンとハイアが剄を纏い、刃を交えていた。

『劍』の到来

「お前だけは……ただで済むと思うな」

レイフオンは自分でもはつきりと分かるくらい激昂していた。

ウォルター・ルレイスフォーン、フェリ・ロスの2人を「拉致」し、レイフオンが禁じている刀を使うことを強要した。

レイフオンにとって、刀の強要も許しがたいことだった。

闘試合をするにあたって、父の大切に行っていたサイハーデン刀争術の技を汚すわけにはいかない。

そう思っただけを使わない、刀を使わないと決めたのに、それを無理矢理曲げさせられた。

だがそれでも、レイフオンがここまで激昂している理由はそれではなかった。

レイフオンと戦う。ただそのためだけにこんな事を起こした。

それが何よりも許せなかったのだ。

ただ、それだけの為の愚行。

確かにレイフオンは、『通常の状態』ではハイアの要望に答えることはなかっただろう。

それを見越してハイアはレイフオンが絶対に断れない状況をつくりだした。

———くだらない

そう、くだらない。意味のない愚行。戦うためだけの行為。なにを求めている。

ハイアの沈黙した瞳は変わらない。

燃えたぎるような瞳の光、しかしそれでいて、冷えきっている瞳だ。レイフオンに話を持ってきた時と同じ瞳。

何故。廃貴族の時にはあれだけ敵意を見せ、あれだけ感情を露わにしていたのに。

何が、彼の瞳を凍らせたのか。

———ウォルターを、巻き込んだからなのか

ウォルターの事に関しては、絶対にする気はなかったと言っていた。

それなら、そういうことなのだろうか。

「……なんさ」

ハイアが怪訝に眉を寄せた。

どうやら、レイフォンがハイアを疑り深く見ていた事に気付いたらしい。しかしレイフォンは頭を振り、錬金鋼を剣帯から引き抜いて復元する。

勿論、錬金鋼はハイアの要望通り刀である簡易型複合錬金鋼を使う。

「…お前は、僕が『刀』を使えば、ウォルターやフェリ先輩に手は出さないんだな」

「そうさ。…おれっちはただ、お前を倒したいだけさ」

レイフォンが構えた事に合わせてハイアも刀を構えた。

濃密な刃が練り上げられ、互いの間でぶつかり合う。

じりじりと間合いを取り合い、剣尖の先で集束した刃が火花を放つ。

マイアスの方で戦うツエルニ生徒により雄叫びが上がった。それを合図に、2人は踏み出した。

雄叫びは勿論ウォルターにも聞こえていた。

フェリがそれに一瞬肩をはねさせていたが、ウォルターは相変わらずベッドに寝そべったまま、窓の方に視線だけを向けていた。

「……マイアスの方も、ですが…大丈夫でしょうか……」

「…さあ…」

ふあ、と大きなあくびをして伏せ目がちに返事を返すと、フェリが眉を寄せてウォルターを見る。

気の抜けきった様子で今にも眠りそうなウォルターに、フェリは口

を開く。

「これだけ派手な音がしているというのに、のんきですね」

「慣れてるから」

「……そうですか。…はあ…、どうしてあなたはこうものんきなんでしょうね」

「さあ？　そういう性分だからだろ」

「そうなんでしょうけど…。はあ」

フェリは何度目かもわからない溜息を吐き、完全に眼を瞑ってしまつたウォルターに視線を向けた。

しかしウォルターからはなんの反応も無く、整つた呼吸だけが聞える。

——まったく…、この人は

寝ているような呼吸では無いため、ただ眼をつむっているだけなのだろうが、こうなつたらもう返事は返って来ないとわかりきっている。

することのないフェリは、剽の波動を見ることが出来る窓の向こうへ視線を投げた。

フェリの予想通り、ウォルターは眠つたわけではない。

ただルウとの会話に集中するために目を閉じただけだ。

(で、マイアスの方はどうだ?)

ルウには領域を広げてもらい、マイアスの方も一応観測していた。

ウォルターの言葉にルウはやや考えながら顎に手をあて、ふむ、と言葉を返す。

(そうだねえ、サヴァリス・ルツケンスがリーリン・マーフェスをこつちへ連れてくるつもりみたいだよ。ただ、まだ機会をうかがっているみたいだ)

(……ははーん……成程ね)

(……ん？　どうしたの?)

ルウが首を傾げた。ウォルターは納得した様子で「ふんふん」と内心でだが頷く。

そんなウォルターに、意味が理解できないルウは頬をふくらませ

た。

(もう、教えてよ。どういうこと?)

(ああ、ライアが悩んでたことを考えてたんだよな)

(……ああ……、そういえば何か言いたそうだったね)

(そうそう。それに、「天剣が来る」って言ってた)

(そう言われればそうだね。…あ、まさか)

(わかったか? これは陽動だ)

レイフォン程の存在は、サヴァリスがこちらへ隠密に来るには少々邪魔になる。

今回の任務は秘密裏に、だ。サヴァリスも女王命令とあつては基本的に動くことはしないだろう。

となれば、レイフォンの意識が他へ向かない程何か大きな出来事が必要になる。

そのためのハイアだ。

レイフォンと戦う。それを建前にして、ハイアがレイフォンと戦う大きな理由となつたのは陽動作戦だろう。

(よく気づいたね、さすがウォルター)

(まあ、ルツケンス達がこつちへ来る機会をうかがってるって言われたらなあ……さすがに)

もとより廃貴族が目的で、公にこちらに来るわけではない。そしてなにより現在は戦争期だ。簡単にこちらに来るすべは無いだろう。

となれば、こういった入り方になるというのも頷けるのだが。

(面倒なことを)

(まあでも、ハイア・ライアの方は、どつちかって言うのと陽動が建前で戦う方が主要な事になってるんでしょ?)

(そりやそうだろうな。ライアだし)

(難儀だねえ、ハイア・ライアも。同情はしないけど)

(しても無駄だしな)

ウォルターはルウにそう返事を返して、眼を開けた。

窓の外で戦う2人へ心配そうな視線を向けるフェリを視界に映しながら、小さくため息を吐く。

『もう少し考えてくれてもいいんじゃないですか？』

レイフオンにも言われた言葉だ。

考える。何を？ 他人への気遣いをか。それとも、他人への思いやりを持ってとでも言うのか？

それが人間性であり、それを求めるといふならば、ウォルターは “不可能だ” と思う。

だが、認識を改めるにしても何にしても、情報が足りない。再びため息を吐いて、ウォルターも窓の外へ視線を投げた。

声が名を呼ぶ

レイフオンは横へ跳んだ。ハイアの袈裟斬りを躲し、一步踏み込む。

その斬撃は空を裂く。揺れる赤橙の髪の下で、灰色の冷えた眼がレイフオンを睨みつけている。

——また、あの眼だ

思考をしている余裕はあるわけではない。しかし、考えずには居られない。

デイン・デイーの違法酒事件の時戦ったハイアの眼には、あからさまな感情が宿っていた。

どうしてそこまで強く嫌悪にも似た感情を抱けるのだろうかと思っただが、ハイアのウォルターへの態度を見ていればそれは明らかだ。

それでもまだ、レイフオンがいまの状況に答えを出すには至らない。

ハイアの沈殿した瞳。レイフオンへの対抗心は消えていないのだろうが、それでも前程……いや、表にほとんど出ていない。

技を放つ時、それに意志を込める時、ちらと見え隠れする程度だ。何故？

彼は言っていた。本気でなければウォルターを巻き込んだりしない。

それはそうだろう。誰だって、憧れや敬意を評している相手に対して無礼はしたくない。

それでもハイアはそれを行った。だから、腹はくくっているのだとばかり思っていた。

——そういうわけじゃ、無いのか
ハイアはいま、揺らいでいるのか。

それとも、苛まれているだけなのか。

——だけどあの眼……どこかで

見たことがある気がする。だがどこで見たかは思い出せない。だが、いまはそんなこと構わない。レイフォンはただ、ハイアを倒す。

それをするだけだ。

外力系衝剄を变化、焰切り。

上段から下段へ。ハイアはその冷えた眼で状況を判断し、それを躲す。

身を翻しながら避けたハイアが避けた足で踏み込み、刀を振るう。その斬撃を受け止めながら、レイフォンは重心を低く落とした。鏢と鏢がぶつかり、火花が散る。

お互いが剄を放ち、身体が圧に押されて後退する。

ハイアに斬りかかるべく、レイフォンが片足を地面につけた時だった。

(……………さか)

——え

聞いたことのある声が、脳内にこだました。

伝播して伝わってきたとでも言うのだろうか、その声は波紋のように広がり、レイフォンの思考へとどく。

(……………は……………だ……………)

——この、こえ。……………だれと、話して…、

聞き馴染みのある声音が、レイフォンの思考へと侵入する。

(……………ね、さすがウォルター)

ウォルター。

その一言にすべての意識を持って行かれ、レイフォンは刀を振りかぶり目の前に現れたハイアへの対処を失念する。

ハイアの鋭く、冷えきった眼がレイフォンの瞳に映った。

「もらったさ」

「し、ま……………ッ！」

どうして、“あの声”がウォルターの名を。

その問いは激痛の波に飲み込まれ、意識的に考えるには至らなかった。

ぼたぼたと肩口から血が流れ出る。

よけきれなかったハイアの刀は左肩に食い込み、レイフオンの肩口を切り裂いた。

激痛の走る肩を押さえて、レイフオンは右手に握る刀の感触を確かめる。

——左は動かないな

この戦いの間は動かないだろう。それにレイフオンは舌打ちをしつつ、刀を握り直す。

ハイアといえば、鋭い目つきでレイフオンを見据えている。

——やっぱり……おかしい

ハイアならこんなふうにならざるに平然と立っているだろうか？

レイフオンを挑発するような一言でも言いそうなものだが、それもない。

では、どうして？

レイフオンは疑念を頭に残したまま、踏み込んだ。

刀がぶつかり合い、武器破壊の技が斬線を描き、それがいなされ、蝕壊の剄が閃く。それすらも躲した両者の刀が火花を散らし、衝剄が火を噴いた。

お互いが後方に跳躍し、再び踏み出す。レイフオンは下段からの切り上げ、ハイアが上段からの切り下げ。喰い合う勢いが衝撃波を生み出し、辺りの空気を震撼させる。鏢迫り合いをする2人の間でちりちりと剄が煌めく。単純に剄での押し合いでは負けるとわかりきっているハイアは、重心を落として踏みとどまる。

——右手だけじゃ……さすがにきついか

衝剄や技だけならばまだしも、鏢迫り合いでは確実に負ける。レイフオンは右足全体に体重を乗せ、勢いに剄を乗せて錬金鋼を振るつた。

外力系衝剄を变化、九乃。

矢のように鋭い剄が衝剄に押されて後退したハイアに襲いかかる。それを跳躍して躲しながら、ハイアは軽く舌打ちをした。

頭がくらくらする。レイフォンは出血によりふらつく頭と足を叱咤しながら錬金鋼を握る。

負けるわけにはいかない。何があろうとも。

怪我を負ったのは自分の不注意、他のことに気を取られたからで、自身の甘さゆえだ。

それをなにか言うつもりはない。

「……何を考えてるさ？ 随分と余裕さね」

ハイアがやはり表情を動かさずに言う。

そんなふうに言われるくらいならば、あの、人を茶化したような笑みで言われたほうがマシだ、とレイフォンは内心で悪態を吐く。

余裕は無い。一刻も早くハイアを倒す。フェリとウォルターを開放させる。

ウォルター。その言葉に先程の声を思い出した。

……いまはそれを考えてる場合じゃない、かな

内力系活剄の变化、旋剄。

レイフォンがハイアへ一気に距離を詰め、そのまま剄で押しこむ。ハイアの炎剄を自身の剄で弾き返しながら、マイアスの方へと押し込んでいく。

突然の一直線さに、ハイアは怪訝な目つきでレイフォンを見ながらも後退し、跳躍して剄技を放つレイフォンに向かって、剄技を放つ。

外力系衝剄の变化、蛇落とし。

サイハーデン刀争術、焰切り。

レイフォンが放った高圧の竜巻状の衝剄がハイアを飲み込む。ハイアの足が地面から浮いたと直後、ハイアは炎を纏う斬撃で衝剄を切り裂く。

裂いたその先に、レイフォンの姿は無い。

すでに着地したレイフォンは、そこから切り上げの斬撃に衝剄を乗せた。

外力系衝剄を变化、喰劍^{はけん}。

「！」
ハイアが眼を見開いた。斬線型に放たれる高密度の剄がハイアに襲いかかる。

それを跳躍、衝剄と斬撃で躲しながらハイアが大きな舌打ちをした。

「……ウォルターの技……」

レイフォンも幾度か見たことのある、ウォルターの技だ。

だが、あまりの使い難さにレイフォンは内心で驚いていた。

ウォルターの使っている所を見ているだけではなかなか幅広く扱える剄技のように感じていたが、こうして彼が放つように再現してみるとなかなか難しい。

剄の密度が高過ぎれば振るつたとしても勢いがなくなってしまうし、低すぎれば振るつた勢いに負けて霧散してしまう。言えばこの技は、〃剄の込め方〃が酷く面倒だ。

斬撃として放つ為、直線の動きのみをする。それは確かだ。しかし、剄が常に眼には捉えられない程微細に振動している。

ここまで再現が難しいとは、レイフォンも思っていなかった。

この技はもう使えないなど切り捨てて、レイフォンは錬金鋼を握り直す。

「お前、さっきから何考えてるさ」

ハイアが外縁部の縁に着地しながら呟く。

鋭く細められた眼に射抜かれながら、レイフォンは内力系活剄を傷口に集中する。

ほんの少しでも戦いに専念するために、僅かな時間すら惜しい。

レイフォンが内力系活剄に集中しながら構えを取る。

ツエルニとぶつかっているマイアスでは雄叫びと武器のぶつかり合う音が聞こえ、レイフォンはじりじりと剄の密度を増しながらハイアとの距離を詰めていく。

ハイアの数歩後ろには荒れた荒野、本物の大地がある。レイフォンはハイアを前に出させる気はない。この戦場はお互いの剄力を考え

ると狭い。

なら、レイフオンが考えていることは……

「…いいさ。乗ってやる」

冷えた光を宿したまま、ハイアは身体を傾がせる。

傾いた身体のまま衝剄を爆発させ、マイアスへ跳んだ。それを追うようにして、レイフオンもまた跳んだ。

裏舞台

ハイアとレイフォンがマイアスの外縁部の方へ跳んでいったのを確認したヴィートは、フェルマウスが言っていた作業を済ませることにした。

マイアスに滞在していた天剣授受者、サヴァリス・クオルラフィン・ルツケンスの荷物を両腕で抱え、放浪バスの入り口近くへ運ぶ。団員たちは戦場が移動したことに安堵しているようで、どこか複雑な表情を浮かべていた。

「なーんだよ、晴れない顔だねえ」

「ヴィート…お前相変わらずテンション変わらないな」

「だっておれだよ？ 当然じゃん！」

「お前な、もう三十路近いだろ？ 落ち着けよ」

「落ち着いてる落ち着いてる！ てか三十路近いか言わないでよー、そうだけど。……そんなこと言っても、ハイアちゃんに言ったじゃんか、ちやーんと、さ」

同じ団員の男は、呆れたようにヴィートに言葉を返した。

だが、至って様子が変わらないテンションの高いヴィートは、どこか浮かれたような顔でハイア達の移動した戦場を見る。

「やっぱレイフォンくんの方が優勢かなー？ でも、ハイアも片腕に怪我を負わせれたならまだいけそうだね。あの辺りで退くとは到底思えないけど」

「お前は…そういえば、もう一人の天剣授受者の方は？」

「うん？ ウォルターさん？ 特に動く気ないみたいだよ」

ほっとしたように息を吐いた男に、ヴィートは眉根を寄せてひとつ文句を言おうとした。

しかし、不意に背後によってきた剽に気づき、振り返る。

「あっ」

「おや」

そこにいたのは、銀髪を揺らすグレンダンの天剣授受者、サヴァリスだった。

ヴィートは軽い調子で片手をあげ、サヴァリスに挨拶をするが、団員の方は退いていく。

それに若干苦笑しながらも、ヴィートはサヴァリスへ向き直る。

「サヴァリスさんだー！ お久しぶりでーす」

「僕は殺到をしていたっていうのに……キミは相変わらず察知能力高いね。……見どころあるよ、そこだけ」

「ちよつとー、ひーどーいー」

けらけらと笑いながらヴィートが言い返す。サヴァリスは相変わらずだなどという顔でヴィートを見ていた。

「ところで……僕の荷物は届いているかい？」

「もちろん！ その入り口にまとめてありますよー。……いやあ、サヴァリスさんが来るなんてびっくりしましたよ。さつきフェルマウスから聞きました。廃貴族、ですか？」

「まあ、ね。とりあえずそっちの役目は終わりだろう？ 言ったとおり、陽動はしてくれているみたいだし」

「ああ……それでハイアちゃんが言い出したんですね。まったく、うちのハイアちゃんはなんだかんだ言ってセンチメンタル・ボーイなんですから、もうちよつとメンタルに来ないものにしてくれてもいいんじゃないですかねー」

「僕が来たことを、レイフォンに悟られたくなかっただけだよ」

サヴァリスとの会話をしながらころころと表情を変えるヴィートに、サヴァリスは「変わってないね」と小さく呟いた。

ヴィートがサヴァリスと知り合いなのはウォルターとハイアが知り合ったつながりだが、気取らないヴィートにこれはこれで面白いと思っっている。

「そりやあ変わりませんよ！ ヴリスト・ウエーバー28歳！ 生まれてこの方能天気さでは随一ですよー！」

「誰と比べてるの」

「そりやあサヴァリ……おつとなんでもないでーす」

あはは、と笑ったヴィートにサヴァリスは肩を竦め、「それで」と少しだけ声音を鋭くした。

「ウォルターはここに居るのかな？」

表情は先程と変わっていないが、声に含まれた硬質さにヴィートは笑みをゆるめ、言葉を返す。

「ええ、いますよ」

「ふうん……ウォルターのことだし、わざと？」

「まあ、お情けって感じじゃないですかねー」

ヴィートはあっさりと言う。そのあっけらかんとしたヴィートの様子に、ほんの少しだけサヴァリスが眉根を寄せた。

「それで……レイフォンを引つ張ったわけ？」

「うちのハイアちゃんの家ですけど、ね。まあ、本当はもう一人が本命でしたけど、保険だそうです」

「成程ね。……それにしても怪我をするなんて、どういう理由があるうと甘すぎる」

「うーん。まあなんだかあの一瞬だけ様子が変わりましたし、どういう理由かはいまいちよく分かりませんがね。とりあえず現状はまずまずって感じですよ」

そう言いながら、ヴィートは視線をハイアとレイフォンの方へ向けた。その視線を追いかけるようにして、サヴァリスも戦場へ目を向ける。

「じゃあ、レイフォンと、もう一人の方が団長のハイア・サリンバン・ライアかな？」

「あー……うーん、実はもう違うんですよ」

「もう違う、とは？」

「……今回の行動は団長としてはふさわしくありませんし……、……本人もそう言っていましたからねえ。……ってことで、いまはうちの念威操者が代理ですよ」

「へえ？ 一番の古株はキミなのには？」

「いやあー、俺は団長なんて器じゃないですよー。……俺はせいぜい裏方ですし、裏方が好きなんです。表舞台なんて派手すぎて眼がちかちかする」

フェルマウスとほぼ同期だが、ヴィートの方がやや早くサリンバン

教導傭兵団にいる。そして、現在の古株と呼べる存在はフェルマウスとヴィートの2人だけ。

サヴァリスはヴィートの言い方に肩を竦めつつ、ハイアの動きを追った。

「追い出すにはもったいなさそうだけどね、彼」

「そりゃあそりゃあ。ハイアちゃんが聞いたら泣いて喜ぶね、きつと」
けらけらと再び笑ったヴィートに、サヴァリスは怪訝な視線を向ける。

「そうかな？ 彼はウォルターを尊敬してたんじゃないか？」

「そうですよー。でもほら、ハイアちゃんになりたいって言ってる天劍授受者だし、体術じゃあサヴァリスさんの方が上じゃないですか？」

「……いや、そんなことはないよ。後にも先にも、ウォルターの技術と比べて自分の技術が優れていると思えたことはないから」

「あらー。……でも、負けてるつもりもないってことですよね、その言い方」

「それはもちろん」

ヴィートはサヴァリスの自信満々な言葉に笑みをこぼし、「そうだと手を打った。」

「…あ、そろそろ開放してあげなくちゃ、ウォルターさん達」

「もう開放かい？」

「ええ。あまり長く拘束してもしようがないでしょう。それに、戦場は動きました。ウォルターさんいまやる気ないみたいですし、大丈夫でしょー」

「楽観的だね、キミは」

あはは、と笑いながら、念威端子の光を引き連れながら放浪バスへ入っていったヴィートの背から視線を逸し、サヴァリスの視界は戦場を捉えた。

挑発

身体がエア・フィルターを突き抜けた感覚は一瞬だ。汚染物質が身体を焼いた感覚も一瞬。

ハイアが先に地面に着地し、レイフォンはそれを追う形でマイアスのエア・フィルターを突き抜けた。

外縁部に着地した足に衝剄を収束させ、はじけさせる。旋剄に乗せた一撃に対して焰切りを放ち応戦する。ハイアは右足を軸にして身体を逸し、勢いのまま宙に足が浮いているレイフォンの体勢を崩させた。

「ちいっ！」

レイフォンの身体が逸れて横へ流れた。流したその瞬間に刀を腰に寄せ抜刀の型を取る。小さく踏み込み、衝剄を爆発させる。

外力系衝剄を変化、空断くうだん。

放たれた衝剄は斬線の形に沿って飛来し、レイフォンへと迫る。衝剄を前方へ放ちながら後退、更にもう一步後退。空中で霧散していく衝剄を見ながら、レイフォンは眉根を寄せた。

——あれも、ウォルターの技だ

本来は斬線に沿って飛来した衝剄は空中で四散し、衝剄として周囲を破壊していく技だが、やはりハイアも技の扱いに慣れていないらしい。舌打ち混じりに眉を寄せている。

「……前と同じようにいくと思うなよ」

ハイアが身体を逸らした。レイフォンに対して刀を上段へ持ち上げ、柄を上、剣先を下げる。急所を完全に外側に逸し、前に出した右足と左足の歩幅を開いた、体幹を低く、重くおいた型だ。

その型に、見覚えがあった。その型の姿が、重なるものがあった。

「……ウォルターの、構えか」

天剣授受者決定戦の時、ウォルターが見せた構え。幾度か見に行つたウォルターの試合で数度見せたその型。

彼独特の型を、ハイアはとった。それはつまり……

フエリを促しながらウォルターは放浪バスから降りる。気づいた気配の方へ視線を向けると、ちょうど目が合った。

「……ルッケンス」

「ああ、ちよつと前に来たんですねー。……ところで、ウォルターさんはいいいんですか、戻らなくて」

「オレには関係ない。あれはライアの私戦だろう。なら手をだすこともない。マイアスの方も小隊の動きは悪くない。力添えは必要あると判断すればする」

「ふうん、そういうもんですかね？」

「オレは、な」

ウォルターは軽く腕を組み、濃密な剄のうねりの中で動くハイアとレイフオンを視界にいれたまま、ヴィートに言う。

「ところで。錬金鋼は返せないと言ったな」

「……ええ、まあ……。もう団長じゃないとはいえ、一応はうちのハイアちゃんの頼みなんで。……誰にも邪魔させるな、って」

「邪魔をする気はない。わかってるだろう」

「もつちろん。……でもほら、やつぱり色々ありますから」

ヴィートはあくまで笑顔のまま。ウォルターがそんなヴィートに鋭い双眸を向けた。

「オレの錬金鋼を返してもらおうか」

「……………それは……………」

「ツエルニの錬金鋼はいらない。銃の黒鋼錬金鋼だけ返せ」

静かな威圧感を放ちながら言うウォルターに、ヴィートは笑みを苦笑に変えた。

苦笑は浮かべたまま、おもむろに腰につけていた予備さし用の剣帯から黒鋼錬金鋼を引き抜き、ウォルターへ手渡す。

「そんなに怒らないでくださいよ」

「怒ってはない」

手に収まった黒鋼錬金鋼の感覚を確かめながら、ウォルターが空っぽの剣帯へ黒鋼錬金鋼を差し込む。

「そうですか？ ……俺の目には随分、怒ってる様に見えますけど……」

「……ウエーバー。それ以上くだらないことをほざくなら、お前のその口の銃を突っ込んで穴を開けてやってもいいんだぜ？」

「わあわあ。それは勘弁願いたいっ」

「じゃあ黙ってろ」

ウォルターは剣帯に収まった黒鋼錬金鋼を掴みながら素晴らしい、踵を返す。

冷えきった雰囲気を纏うウォルターの背に、グイートは声をかけた。

「……何かありました？」

「そうだとしても……少なくともそれはお前の気にすることじゃない」

「…そーですか…。ま、もし言えるよーになったら言ってくださいよね」

グイートがひらひらと手を振った。

それを肩越しに見、ウォルターは無言のまま跳躍した。

痛み

サヴァリスは少し高い屋根の上でレイフォンとハイアの戦場を見つめていた。

その隣に立ったウォルターは、サヴァリスに問う。

「状況は」

「うーん…、レイフォンが芳しくないかな。左肩に一撃、食らった。もつとも、僕が来る前のようだけれど。…これは思い過ごしかもしれないけど、ハイア・ライアの方の詰め方、なんだかキミに似てない？」

「ライアの詰め方？」

ウォルターは活剷で視力を強化し、マイアスの外縁部で斬撃を打ち合うハイアとレイフォンを見た。

（…似てるか？）

（うーん…、どうだろうね。構えを同じにしたのはあるだろうね。技術的にはまだまだ…だけど。ああ、確かに戦局の運びはウォルターに似てるかも）

そう言われても、いまいちぴんときかない。

ウォルターはただ、その場にあつた戦い方をするだけだ。別に意図して戦局を運ぶことがないわけではないが、基本的にはその場に合わせる動くことが多い。相手の出方にも対応しなければならぬ事もある。

（たぶん、そろそろハイア・ライアの剷技使用率が下がってくるだろうね。その代わり、体術が増えそうだな）

（ああ…確かに）

衝剷に回していた分の剷を活剷に回せば、その分機動力が上がる。レイフォンはいま手負いの状態だ。必要なのは忍耐力と、対応力か。レイフォンに剷力では勝てない。ならば、すでに削いだ機動力を更に削ぎにかかるか、自身の機動力をあげるかをして、レイフォンと戦う気なのだろう。

幾度か手合わせをしてきているわけだし、ハイアも見よう見まね程

度だが鋼拳を扱える。ウォルターが扱う体術の真似はよくしていたし、それを実戦で扱うということだろう。

「しかし、鋼拳がそれほどうまく扱えるとは思いが」

「ああ、キミの鋼蹴拳は扱いが難しいからね。よく扱うと思うよ」

「それは慣れてないからだ。扱いなれば使いやすいことこの上ない」

「へえ。やっぱり套路のつなぎが滑らかだからかな？ 技の数も多いしね」

「技の数は問題じゃない。……どうせ使うのなんてごく一部だ。ほとんどは派生型だしな。ひとつ扱えるようになれば……後はどれだけ熟練させるかだ。……その為に、百の技より一の技を尊ぶ」

そんなものかな、と言いながらサヴァリスは腕を組んだ。

「ルッケンスの部門も同じだろう。風烈劉なんて特にそれだろうし」

「ああ、それはそうかもしれない。……けど……それはウォルターだから言えるんじゃないかな？」

「……お前もルッケンスの型を崩せば使える」

「ルッケンスの型を、ですか……。ふむ、検討してみましよう」

サヴァリスはそう言いながら、ウォルターへ向けていた視線をレイフォンとハイアの戦闘へ戻した。元々視線を動かしていなかったウォルターは、静かに呟く。

「……さて、どちらに優勢になるのか……」

そう言いながら黒鋼錬金鋼を引き抜き、銃を復元する。

その行動に怪訝そうな視線と声音でサヴァリスがウォルターに問うた。

「何かするのかい？」

「あいつらには何もしない。ただ……」

銃口をマイアスの一番高い尖塔へ向けた。その上ではためく布。そして、見慣れた金髪を揺らす姿。引き金をひく。

外力系衝動を変化、槍弾・突破。

放たれた銃弾は高速で飛来し、目的のものへとあつという間に向かっていく。

「さて、後はあいつら次第か……」

錬金鋼を基礎状態に戻しながら、ウォルターはそう呟いた。

外力系衝剄の変化、焰蛇。

ハイアがレイフオンに向かって剄技を放った。蛇落としの変形。放たれた剄技はレイフオンの全身を呑み込む。全身から衝剄を放出し、その熱気を払う。

だが、身体の内自由は奪われたまま。その一瞬を、ハイアがついた。ハイアの構えは崩れていない。刀を翻し、上段から下段への切り下げ。それを受け流す形でレイフオンは身体を逸し、距離を取ろうと左足を退いた。だが、ハイアが右足を大きく滑らせた。レイフオンの眼前で赤橙の髪が踊る。大きく滑らされた右足はレイフオンの右足に絡み、さらなる後退を許さない。それどころか、お互いの刀の間合いすら取らせない。

ハイアが左手で刀の柄を握ったまま、右手を離れた。右拳を作りそのまま右肘を突き出すと、滑らせる勢いそのままレイフオンの腋窩上部へ肘を埋めた。

「ぐっ……！」

「まださ！」

肘は埋めたまま、右拳を上へ跳ね上げ、レイフオンの額を打つ。身体が傾いだ。距離が開く。右手でも柄を掴み、左足を大きく踏み出して一閃。

「！」

咄嗟に衝剄を練り上げて剣撃の到達をずらす。レイフオンの手が刀を握り直す時間が出来た。後退した足を踏み出して、レイフオンも一閃。

外力系衝剄の変化、九乃。

4本に収束された剄の矢を放つ。ハイアがそれをすべて叩き落とした。構えが戻る。下からの切り上げ、それを刀で防ぎ、前へ。鏢迫

り合いになる。

外力系衝剄を化鍊変化、紅龍撃。こりゆうげき

考えていたことはお互い同じだった。

レイフォンとハイアの持つ刀の鏢元から炎の龍が具現する。ちりちりと炎が刀を舐め、互いの炎が喰い合う。

飛び退いて後退し、構えを戻す。いや、ハイアは踏み出した。炎の中、衝剄を纏ってレイフォンへと踏み込む。勝利を急いでいるわけではない。単純に、間合い詰めにかかったのだ。

互いに放った剄技は不完全だった。ウォルターの扱う剄技。それというだけで難易度が跳ね上がる。だがハイアは体勢が崩れたことも気にせず、踏み込んでくる。ハイアの構えた刀が、煌めく剄を引き連れて斬線をえがく。

左上段からの逆袈裟斬り。

振りぬかれたハイアの刀が切っ先を閃かせ翻る。レイフォンは後方へさらに後退する。しかし、左肩がずきりと痛んだ。膝のちからが抜けそうになり、後退が遅れる。

——この程度の怪我、なんともないはずなのに

だが、そう思っているうちにもハイアの刀はレイフォンの胸を、腹を撫でる様に切っていく。

——どうして、こんな時に限って痛むんだ……！

振りぬかれた刀は鮮血を引き連れて陽光に煌めく。

衝剄の煌きと共に、ブザーが鳴り響いた。

重なる瞳

「おや……意外な結果だ」

「存外、肩の傷が深かったみたいだな」

サヴァリスがやや眼を丸くして戦況を見る。そんなサヴァリスの隣で、ウォルターは小さく眉を動かしながら呟く。眉を動かしたのは、鳴り響いたブザーの大きさに顔をしかめたからだだった。

戦況を興味深そうに見るサヴァリスは、楽しそうに口角をあげる。

「やっぱりレイフォンは腐っていたのかな」

「…さあ、な」

「キミの眼からはどうだい？」

「……対人戦をした経験の差じゃないのか」

ウォルターの言葉に、サヴァリスはふむ、と顎を摘んだ。

レイフォンが後方に吹き飛び、地面に倒れる。

そんな状況を見ているも、自身の胸には、この程度で終わるのかと言う呆れもしようがないなという諦めのようなものもなかった。

「……なんだろうな……」

「ウォルター？ 何か言ったかい？」

「……いいや」

ずっと胸にのさばっているもの。

フェリと話してから、更に肥大したような気はしなくてもない。だが、それに称すことのできる名前はやはり見つからないまま。

ただ、小さく懸念しているだけだ。この胸にのさばる何かに、気付けるのかどうか。

——もし、これに気付けるなら……オレはもう少しだけ、進めるのかもしれない。

そう考えながら、ウォルターは視線を戦場へと戻した。

ハイアとレイフォンの戦いは、まだ続いている。

胴体を薙がれた。胸から腹にかけて刀の冷たい鉄の感触が通り過ぎていった。それと同時に激しい激痛と熱。咄嗟に下がったことで皮膚を裂かれ、肉を裂かれたまできにとどまった。内蔵まではとどいていない。

だが、勢いに押されてレイフオンの身体は後ろへ傾ぎ、外縁部の地面に倒れ込む。

血が流れる。右手はまだ青石錬金鋼を握っている。まだ、足にもちからは入る。なら、まだ戦える。なのに、動かない。

——油断した僕が悪いんだ。だけど……

あの声はどうしてウォルターの声を呼んでいたのか、分からない。ウォルターがレイフオンを叱っていた時間こえたあの声。

(……………消す)

ただ、その一言。だけどはつきりと覚えている。あの冷えきった、殺意を込めた声音は。

「……………おれっちは、お前に勝つ」

ハイアは歩を進め、レイフオンが青石錬金鋼を掴んでいる手を鏝ごと踏みつけた。

刀を握りしめて、ハイアはレイフオンを見下ろす。

「ただそれだけさ」

ブザーの音が一際大きくなった。ハイアは言葉を言い放つ。

冷えきったハイアの眼。言葉は鋭く、レイフオンに突き刺さる。

——ああ、そうか

ハイアの瞳が冷めていたのは、彼への申し訳なきがあつたのは確かのようなのだ。

だが、それ以上に「勝つ」というそれに冷めてしまっている様だった。何故か、というのわからない。それは、レイフオンにはわからない。しかし、レイフオンにもわからないが、おそらくハイアにも分かってない様に思う。

レイフォンとの決着をつける。それは、圧倒的に。確実に。このハイアの眼を見たことがあるはずだ。

——天剣授受者決定戦の時の、ウォルターの眼に似てるんだ
酷薄で、冷酷な眼。

彼程の鋭さがないとはいえ、普段のハイアからは考えられないような鋭い目つき。

ウォルターの技、ウォルターの構え。先程はそんな余裕もなく考えていなかったが、戦況の運び方もウォルターに似ていた気がする。

——……ハイアはウォルターに……憧れているんだっけ
だからだろうか。いいや、だが、そうだとしても。

レイフォンは手を踏まれたまま、青石鍊金鋼の柄を握りしめた。

戦場に呑まれる前に

「ふうん」

ハイアとレイフオンの戦況を見ながら、ヴィートは小さく声をもらした。未だ鳴り響くブザーに眉根を寄せながら。

「いくら憧れてるからって言っても…俺はいいと思えないんだけどなあ…」

ヴィートはちらと隣で心配そうに立つミュンファアへ視線を向けた。心配そうに眉根を寄せて、必死にハイアの剽を追いかけている様子。弓使いとは言っても、ミュンファアの活剽は未熟だ。ここからの距離でも見えるかどうか……

自身も活剽を使って視力を強化しながら、ハイアの表情が見えないかと活剽を集中する。

が、さすがにそれはむりだった。軽く溜息を吐きながら、ぼやく。

「うーん、ウォルターさんならできるんだろーけどなー」

「……ヴィートさん？」

「ああ、うん。…ミュンちゃん、見えにくくて大変でしょ。大丈夫？」

「だ、大丈夫です」

会話をさり気なく回避すると、ミュンファアはどこか困ったような顔でヴィートの横顔を見る。

それに肩を竦めつつ「そうだ」とヴィートが手を打った。

「ミュンちゃん……ハイアちゃんについて行きたいんですよ？ だったら、向こうへ行った方がいいんでない？」

「え？ ……で、でも」

「……ハイアちゃんの邪魔にはならないと思うよ？ むしろちよつと……いろんな意味で、ハイアちゃん危ない気がするし」

「わ……、分かり、ました」

「うん、頑張ってねー」

ミュンファアが慌ててかけ出した。向かうはマイアス外縁部。

おそらくまだあの2人の戦いは終わっていないだろうし、まだ続く

だろう。このままハイアを戦わせるのは、少しよくない気がする。

だからこそそのミュンファアだ。ミュンファアとハイアは幼馴染に近い存在。なんだかんだ言って碎けた関係だし、ヴィート自身が行くよりはマシだと思っっている。

隣に浮かぶ念威端子の光を視界の端に映しながら、ヴィートは軽く息をつく。

「まー…俺は裏方だしねー…。そう思わない？ フェルマウス」

（さあ、どうだろうな。それなら、わたしの方がそうだろう）

「そうかな？ あー…まあ、フェルマウスは参謀役みたいなのが板についちやっただもんねえ」

（そういうことだ。おそろく、わたしでは傭兵団をまとめきれない）

「え、なにそれ。遠回しに俺に団長代理やれって言ってるの、フェルマウス」

けらけら笑いながらヴィートは言うが、フェルマウスは冗談じゃないぞ、と付け足した。

（あまり若いものにやらせるのも酷だ）

「そうかな？ ハイアちゃんみたいになれとは言わないけど、俺はヤだなー。向いてないし」

（リュホウが没し、ハイアが団長につくまではお前がしていただろう）
「え、そんな遠い過去は忘れたなあ…」

すつとぼけた顔でヴィートが言うと、機械音声が溜息を吐いた。

そう。もう遠いことだ。自分が担当したのは2、3ヶ月程だったが、本当に勘弁してほしいと思う。

そういう表立ったことは他の若い子にさせる方がいい、なんて年寄り臭いようなことを考えながら、ヴィートは腕を組んだ。

2人の成長はずつと見てきた。リュホウがいた頃も、リュホウ没後も。だからこそハイアがどんな人間かよくわかってるつもりだ。ハイアとミュンファアをよく構っていた、大抵適当で大雑把な人間のヴィートに似ないで、まっすぐ育った。

「…だから思うんだよねえ…余計に」

ハイアはハイアだ。ヴィートだってウォルターのことはすごいと

思っている。

だが、ハイアにはハイアの良さがある。

それを殺してまで、強さを求める必要などあるのだろうか、と。

何よりハイアが「1人」にこだわるのは、きつと慣れてきたことを断つためだ。すべてを、ではなく、いままで誰かに頼つてきた自分の姿をだ。

誰かに背中を預ける戦いしか知らないハイアは、天剣授受者になりたいという。だが、それになれば、たった1人であの孤独な戦場に立たねばならなくなる。圧倒的不利な状況を、絶望的状况を覆す程の存在であらねばならない。

傭兵団は解散する。背中を預けられるものはなくなる。ハイアの帰る家は、消えてなくなる。あつたという事実すら、年月に消えていくだろう。

その中でハイアは、たった1人の戦場に立つと言う。

「……ウォルターさんは気づいてるかなあ…ハイアちゃんのこととか。あの人だし、なんとなく気づいてそーで、なさそーだけど」

ウォルターの方へ視線を向けながら小さく呟き、ヴィートは大きく伸びをした。

ミュンファはハイアの方へ向かわせたことだし、これでヴィートのできるサポートはすべてしたのだ、これ以上できることは何も無い。念威端子は淡い光を放ちながら、ヴィートのひとりごとを聞き流している。

「……ああ、だけど……どうだろうなあ」

小さく呟く。いつだって思う。まだ、何かできることがあつたんじゃないかと。

未練たらしいと自分でもわかっている。

だがそれでも思わずにいられないのだ。自分にできることは、まだあつたはずじゃないのかと。

「……あの人は、動く気ないだろーな…いま」

軽く視線をあげて、銀髪と距離をおいて立つ黒と赤が混ざった髪を揺らす彼を見る。

先の様子を見てみると、彼が今動く気はない。それなら…

「あー…」

自嘲気味に口角をあげて、ヴィートは腰の錬金鋼を握りしめながら、足を踏み出した。

「……さっき、言ったばっかりなのになー」

自分の適所としては、裏方だと思っていたのに。

でも動かないなら、行かないといけない。

団長ではなくなっても、自分にとって、ハイアは。

「あー…もう…、恨みますよウォルターさん……！」

悪態をつきながら、ヴィートはミュンファの後を追ってマイアスへと走りだした。

それがお前なのだ

「そんなことしても、ウォルターに近づけるはずなんてないって、わかってるでしょう」

その言葉は、口をついて出た言葉だった。

どう言ってもきつとハイアに変わる気なんてないとはわかってい
るし、レイフォンの言葉など聞く気がないということとはわかってい
る。だが、きつとこのままではよくないと、レイフォンはそう思った。
いまの状態のウォルターが気にかけるとは思えない。だがきつと、
いまじゃないウォルターならそれを促したはずだ。

レイフォンだつて不本意だ。ハイアのことなんてどうだつていい。
ただ、フェリとウォルターを開放してもらえるなら、ハイアのこの変
わり様などどうだつていい。だが、それでも目につく程の変わり様
だ。

「……なんさ、お前」

ハイアの表情が更に冷えた。だが、眉は訝しげに寄せられる。

表情にゆらぎが出た。いくらウォルターの様にしようとしても、ハ
イアはハイアだ。

「そんなことしてもウォルターに近づけるはずがない、つて言ったん
ですよ」

「……お前にそんなこと言われる筋合いなんてないさ」

はつきりとした嫌悪を眼に宿したハイアを、レイフォンは笑う。

「じゃあ……どうして、そんな顔をしてるんでしょね？」

そう言った瞬間、ハイアの眼が見開かれ、武芸大会終了のブザーが
鳴り響いた。

「！」

レイフォンがハイアの足を衝剄で弾いた。

青石錬金鋼は落としていない。右手で掴み、そのまま身体を跳ね上
げながらハイアの首に突きを放った。

が、すんでのところで躲され、突きは空を切っただけにとどまる。

ハイアは一瞬遅れてそれを刀で跳ね上げ、切り返す。それをレイフオンは刀で返し、胴への袈裟斬りを放つ。

ハイアはレイフオンの袈裟斬りに対し、身体を逸らしながら屈んでよけると、レイフオンの足を払った。だが、一瞬早くレイフオンが軽い跳躍をして躲すと空中で衝剄を放った。

衝剄に対し衝剄をぶつけるが、ハイアの剄の量はレイフオンに到底及ばない。純粹な力比べでは負ける。だからこそ、踏み込んだ。下段からの切り上げ。レイフオンがそれを弾き、お互いに距離をとった。

レイフオンの胴と肩からの出血は収まらない。それどころか、放った衝剄や身体を跳ね上げる動作の際、更に裂けたようだった。だが、先程のように痛みが襲ってくることはない。レイフオンは内力系活剄を体内で練り上げ、刀に衝剄を纏わせる。

再び型を取りなおしたハイアの剣先の延長が、レイフオンの喉元を捉える。

「これ以上続けたって、きつとむだだ」

レイフオンの瞳がハイアを捉える。構えにゆらぎはない。瞳のゆらぎも落ち着きを取り戻した。

だが、まだまだ。攻めるならいま。

「これで決める」

「……上等さ」

衝剄を更に練りあげる。辺りに散っていた砂埃を巻き上げ、外縁部の地面をちりちりとした火花が滑っていく。動かない左腕をぶら下げて、レイフオンは簡易型複合錬金鋼を左の腰に引き寄せた。ハイアもまた、刀を腰に引き寄せる。構えを取り、重心を落とし、互いが同じ構えをとった。

抜き打ちの構え。

ブザーは終わりに向け、音を小さくしていく。二人が練り上げる衝剄は勢いを増していく。

サイハーデン刀争術、焰切り。

「他を信頼して戦ってきたのなら……やっぱり、お前は『僕ら』と同じようになんて出来ない」

レイフォンの言葉に、ハイアが一瞬片眉をあげた。

「僕らだって他人を信じてないわけじゃない。だけど、何よりも自分の力と技量のみで頼ってきた。そんな僕らの場所に、他人と自身の技量を合わせて戦ってきた人間が入ることは、難しい」

「……出来ないわけじゃないさ」

「…天剣に求められたのは、ただ純粹にちからがあること。その他は必要ないくらいに。だけど…」

言葉を口の中で転がすレイフォンに、怪訝に眉を寄せたハイアは、刀に収束させる剄の密度を更に増加させた。

簡易型複合錬金鋼を握るレイフォンの手に、力がこもる。

「お前は……、ただそうあるなんて、きつと無理だ」

「……………お前が、勝手にきめんじゃねえさ」

ブザーの音がやんだ。

同時に、踏み出す。

剄を纏わせた刀を、全力の踏み込みで一閃させる。

音の余韻が破碎音でかき消される。

斬撃の軌道はほぼ同じ。衝突し、剄は衝剄となり辺りを荒らしまわっていく。衝剄の衝突と食い合いが足場を崩壊させ、後方へと両者を引き下げる。

だが、まだまだ。技はまだ続いている。

着地した足のまま、両者踏み出す。

レイフォンとハイアの剄は未だ食い合い、衝剄の火花を散らしている。

動かないレイフォンの左腕から鮮血が飛び散り、剄がそれを引きちぎっていくなかで、ハイアは衝剄の密度を高くする。

衝剄のぶつけあいには、レイフォンが怪我をしていなければ一瞬で力タが付いたはずだった。だが、レイフォンは事実左腕を負傷しており、しかも怪我をしてからの時間が随分と経っている。斬撃は骨まで届き、神経を断裂しているはずだ。もう、ほぼ動かないに等しい。それならば、練れた剄も不完全。

負けられないのだ、絶対に。レイフォンに言われたように、同じよ

うな事ができないとしても。

誰かに背中を預ける戦いしかして来なかった。互いの背中を預け合う戦いをするのが、サリンバン教導傭兵団だったから。

天剣授受者には遠く及ばない存在であっても、サリンバン教導傭兵団の中には他人に頼らなくても戦える人材はいた。事実、ヴィートがそうだった。だがそれでも、互いの背を守りながら戦うことをモットーにして、誰もが戦っていた。同じ傭兵団という家族の背を守り合う、その姿を見ながらハイアは成長し、自身もそうであれと育った。その、傭兵団という家族の中で、ハイアは自らの技量を、戦いを養ってきた。

だが、早晚傭兵団は解散する。背中を預けられると信頼していた者達は、いなくなっていく。散り散りになる。その存在は、なくなってしまう。

——こんなところで、無様は晒してられないのさ！

1人で戦場に立つ。あの人に、近づく。一步でも、半歩でも。たった1人ででも、戦えるようにならなければならぬ。

ハイアとレイフォンがぶつかり合った。衝剄は再び食い合いを始め、刀が纏う衝剄の火花の延長である炎が互いの炎を食い合う。

レイフォンの肩からの出血は激しい。傭兵団では危険だと無理矢理にでも後方へ下げられるほどに。だが、レイフォンの表情に変わりはない。

——なんで、こいつ……

こんな表情をしていられる？

出血は激しい。痛みだつてあるはずだ。ウォルターを拉致し、フェリまでも攫ったハイアに対して憎悪があつたはずだ。刀を握らせたことにも多いに不服があつただろう。戦いが始まった時には、それがずっと見えていた。レイフォンの怒りの表情が、ずっと見えていた。だがそれでも、戦いが続くにつれて感情は消え去り、瞳には何も浮き出ていない。

まるで、「彼」のように。

——……………っ……………！

戦いに対して、死を恐れもせず、生きることが渴望もしない。ただ、戦う為に動く。

その表情に、ハイアはどういった言葉をつければいいのかわからなかった。

ただ、彼も同じ表情をすると。それは知っていた。

冷えきった瞳の奥に、何かの感情を見つけることは出来なかった。いつもの風合いもなく、ただ、底知れない何かを抱えた、『戦人』の姿がそこにあった。

レイフォンの瞳が、一瞬彼と重なる。

たった1人の世界。

たった1人の戦場。

それは喉元に死神を引き連れて刀を振るい、一瞬の油断が敗北を呼ぶ事。その敗北が、すべての死であること。

その世界が、自分に襲いかかってくることになる。

たった1人で戦うということは、そういうことだ。

誰も助けてくれない世界。

彼の背負っていたものを、今になって理解した。

レイフォンの表情の意味を、その強さの過程を、今になって知った。ならば、ハイアは？

……そ、んなの

背筋が凍ったような感覚がした。全身が震えたような錯覚が襲ってくる。それを必死に押さえ、刀を掴む手にちからを込めた。

薙ぎきる。

しかし、刀は後方へ一歩下がったレイフォンの前を素通りし、斬線は虚しく空を断った。

レイフォンの刀を掴む手にちからがこもり、左腕が刀の柄を握りこむ。

「！」

神経は完全に絶たれたわけではなかった。だからこそ、レイフォンは衝突の間、内力系活剷を行って左腕を動かすことに集中していた。

ほんの刹那、動くことだけを狙って。

誰も助けてくれない世界。そんなただ1人の世界で必要なのは、刹那の瞬間だろうとも自らのちからで最大限の光を見出すこと。見出し、掴み取ること。

両手で簡易型複合錬金鋼を握ったレイフォンが、衝剄の威力をあげ、踏み込む。

衝剄はハイアの刀を弾き飛ばし、体勢を崩させ、切り込んだ。

手を伸ばした

サイハーデン刀争術、焰重ね。

切っ先が翻る。ハイアの肩から胴にかけて斬撃の激痛が走った。肉がきしみ、骨が碎ける感覚。押し潰そうとする衝撃に内臓が悲鳴を上げる。

ハイアは声もなく後方へ吹き飛んだ。地面に落ちていくハイアを、レイフオンが追撃する。とどめを刺す気だろう。

……これは……死ぬ……かも……

激痛が身体を蝕んで、指先すら動かせない。思考は真っ白に染まっ
ていく。

もう、無理か。そんな冷静な思考が巡った。

それなのに、どうして。それなのに、なぜだか……

……おれっちの手は、刀を握ってる

まだ、戦えると。軋んだ肉が、碎けた骨が、押し潰されていく内臓が悲鳴を上げる中で、ハイアの意志は、ハイアの心は、まだ戦えると叫び声を上げている。

まだ、意志は、心は、折れていない。戦えるのだと、この腕が、この刀が、告げる。

『まあ、なかなか良い剄をした』

あきれたような声で、さり気なく褒めてくれた彼の声が聞こえた。

グレンダンで何度も手合わせをしてもらった。

『なんのために戦うのか。なんのために生きるのか。……お前は、分かるか?』

そう言っていた彼は、自嘲気味な笑みを浮かべていた。

強く、屈強な意志を持つ瞳を何処か悲しげに細めて、その瞳に空の星を映していた。

空を穿つ光を放つ星は、その瞳にも光を注ぎ、世界を映し、夜を映していた。

彼ほどの存在ですら、誰もが思う悩みに悩まされているのか、とどこか遠いものを見るような感覚で思ったことを覚えている。そして

それと一緒に彼だからこそその思いなのか、と、ふと思っていた。あの時はそんなそれどころじゃなくて、一瞬でかき消された思考だったけれど。

『…だれでもこうなれる訳じゃない。そして、出来ることなら、こうなるべきじゃない』

そう言っていた彼の瞳は、真剣そのものだった。

……ああ、だけど……だけど！

ハイアの刀を持つ手に力がこもる。すでに限界を超えた身体に力込める。

動けど。敗北が「死」であるならば、「死」を迎えていないならば敗北してなどいない。

不格好だろうと。圧倒的ではなからうと。

必要なのは、勝つこと。戦う理由は、強くなりたい。そうであるようにと、自らに課したから。

だからだ。彼が言うように、誰だって彼のように、誰だってレイフォンのようになれる訳ではない。

だが、たとえそうだとしても。『出来ることならこうなるべきじゃない』と、彼に言わせるようなことであっても。

もう決めたのだ。あの背に、追い付くために。

「……あ、ああ……ッ、」

レイフォンの目が見開かれた。

衝動で身体を跳ね上げて、踏み込む。体勢は崩れきっている。踏み込む足に、いつものような感覚は一切ない。地面を噛んだ靴から、硬質な感覚が伝わってくる。足が、身体が重い。こんなにも鈍重な身体感覚は初めてだ。

重すぎる。走れない。だがレイフォンは目の前に迫っている。そこにいる。ここに、いる。

この手が、刀を握こころっている。

ならば、振りきれ。

踏み込んだ左足に力を込める。持ち上げる刀がこれほど重いと感じたことはない。だが、構わない。何があろうと、振りきる。これが、

自分のすべてだ。

そんな刀の先で、レイフォンの表情が歪んだ。

ハイアの手から刀が吹き飛ぶ。レイフォンが刀を弾き飛ばしのだ。そんなレイフォンの足が踏み込んできた。刀が寸前まで迫る。

——ああ、やつぱり

口角が上がる。自嘲気味に。彼のように。

——意味なんて、わからなかったさく……

だが、来ると思っていた感覚は来なかった。乾いた金属音が鼓膜を揺らし、自分の体は何か抱きとめられた。

血の滴る身体を、見慣れた眼鏡をかけた涙目の幼馴染が抱きかかえていた。

死を纏った刀を、見慣れた黒緑色の短髪を揺らす背が短剣で受け止めていた。

「……ミュ、ン……？ ヴイー……ト……？ なに、してるのさ……」

レイフォンの刀を受け止めたヴィートの短剣には亀裂が走っていた。かちかちと金属同士がぶつかり、火花が散る。

「……あ、あなたは」

「悪いね……もう、団長じゃないとは言っても……やつぱ、ね。……

俺の大事な、弟なのよ」

「……殺す気なんて、ないですよ」

そう言いながらも、レイフォンの刀を持つ手からちからは抜かれな。警戒されているのだ。

「ミュン……逃げるさ……。ヴィートも、早く……退くべきさ」

「……いや」

ハイアの言葉に対して、ミュンファがはっきりと答えた。

その言葉に顔をさらに歪ませ、ハイアは言う。

「むちゃ、言うな……さ……」

「いやです」

いつもなら、ミュンファがそこまではつきりとした否定を言うことなどなかった。

それにハイアが虚を突かれていると、ミュンファは言葉を続けた。

「ハイアちゃんとは離れない！ もう決めたんです」

意外な決意に、ハイアは目を見開いた。

レイフオンに視線を向け、ヴィートは軽く肩を竦める。

「……とりあえず……さ、ウォルターさんとフェリ・ロスに開放してるから、大丈夫だよ」

「そう……、なんですか？」

「うん。だから許してなんて言うつもりないけど……さ、ホント、ごめんね色々」

「……いえ……、怪我なく開放してもらえたなら……文句はないです」

そう言っただけでレイフオンはゆっくりと刀をどけた。亀裂の入った短剣を見ながら、ヴィートは苦笑を浮かべる。

「それはありがとね。……それにしても……さつきああ言っただけど、結構本気だったでしょ」

「……それは……その。……まあ」

「あはは、まあそーだよ」

錬金鋼を基礎状態に戻し、レイフオンは剣帯にしまった。ヴィートも短剣を剣帯にしまうと、肩越しにハイアを見て声をかける。

「ハイアちゃんは大丈夫？」

「……いろいろ、と……大丈夫じゃない」

「あははー。ま、そーだろねえ……。……でも、いい経験になったんじゃないの」

そう言っただけで、ヴィートはゆっくりと、それでいてしっかりとハイアを担ぎあげた。

それに驚いたハイアは、小さく声をあげてばたばたと目がく。だがそれほどのちからが残っておらず、抵抗は無駄に終わった。ヴィートは呆れた顔でハイアの背を優しく撫で、同じ様にミュンファの頭を撫でた。

ふむ、と顎をつまみ、ヴィートは考える。

私戦でここまでしたのだから、怪我を治す為とはいえ、このツェルニの病院の方には行けないかと思い、どうしようかと悩む。

「……あの」

考え事をしていたヴィートに、左肩を押さえ、腕を朱に染めたレイフォンが口を開く。

それにほんの少し首を傾げ、ヴィートはレイフォンを見た。

「どーかした？」

「…えつと、ツエルニの中央病院に…ウォルターの同級生の方で、医者の方がいらつしやるんです。…その人に頼めば、たぶん治療してもらえるとと思いますけど…」

その言葉をヴィートは酷く驚いた顔でレイフォンに目を向けた。

目を丸くして自分を見るヴィートに、気まずいというか、バツが悪いというか、複雑そうな顔で視線を逸らしながらレイフォンは答える。

「…あの、えつと…。…僕は、ハイアのしたことはよくないことだと思いますし…。実際に本気で腹がたちました。…でも、手段はどうあれ、その思いや、ハイアの決意は、伝わってきたから」

「…ありがとうーね」

ヴィートは笑みを浮かべ、そういった。

しかし、と頭を振り、傭兵団の放浪バスの方で治療すると告げる。それなりの設備はあるそうで、とりあえずはなんとかしてみるところとどった。それでもどうにもならない場合、世話になるとヴィートは言った。

レイフォンもそれに同意し、ツエルニへ戻るため踵を返した。だが、不意にハイアに声をかけられ、足を止める。

「……おい」

「……あなたに同情なんてしない。今回の悪役はあなたで、僕じゃない。……ただ、それだけだ」

投げやりとも取れる声で、レイフォンはそう言い去る。

その背に掛ける言葉を見つけれなかったヴィートは、小さく頭を下げた。

影が、忍ぶ

「…………ふむ。まあこんなものなのかな」

腕を組み、尖塔の上でサヴァリスは呟く。その隣で立ったままのウォルターは、不機嫌な顔で立ち去り始めたレイフォンと、その場から動かないハイア達を視界に据えた。

「…………どうだろうな。やはり、ライアもアルセイフもガキだ。いつまでたつても部門に固執する」

「うーん、あれはそういうものじゃあないと僕は思うけどな。どうだろう」

サヴァリスはそう言つて苦笑する。はつきりしないサヴァリスの言葉に、ウォルターが怪訝な目を向けた。

「…まあ、自分が大切にしてきたことを蔑ろにされたらやっぱり嫌だろうな、つてことだよ」

「そういうものか？」

「まあ…………、そういうものじゃないかな？ ウォルターだって、自分が培ってきた技術を変に貶されたら嫌だろう？」

「…………さあ…。オレの刀術は我流のモノだしな。なんとも言えない」
肩をすくめて言うウォルターに、サヴァリスはまた苦笑した。

その苦笑を呆れととつたウォルターが、ため息混じりにサヴァリスに向けた視線を不快だというものに変える。

「…………考えてみなよ。レイフォンはサイハーデンの刀術を汚さないためだ、と言つて、刀を使うこと、そしてサイハーデンの技を使うことを自ら封じた。…………そんなレイフォンが、ああいう場で怒らないと思うかい？」

「…………まあ、あいつだしな」

「それは言えるかもしれないけれど。…………正直、僕は強くなれるのならルッケンスの部門だって捨てる気にいるけれど…、きつとレイフォンにとつてサイハーデンの刀術っていうものは、ただひとつのものなんだらうね」

「……お前でもそんな事言うんだな」

ウォルターの言葉にくつくつと笑い、サヴァリスは口を開く。

「ただ、せめて僕がいる間は楽しい時代になってほしいと願っているだけだよ。少しでも、ね」

「……戦いへの悦楽か？ その感情は」

「さて、どうだろうね」

「……まあ、別にいい。オレは行く」

「そうか。じゃあ、また後で」

ひらりと手を振ったサヴァリスには目もくれず、ウォルターは尖塔の上から飛び降りた。屋根を伝って降り、レギオス地上部へ降りようとした時、異様な雰囲気を感じた。

「……これは……」

(ウォルター、狼面衆の反応)

「……マーフェスにつられて、やってきたか？ 脆弱な塵共が」

ウォルターは苛立たしげに眉根を寄せ、しやうがないと踵を返す。

地上部ではレイフォンとフェリ、ニーナといった面々に加え、合流したらしいリーリンもいる。それを視界の端で確認しながら、ウォルターは反応の方へと跳躍した。

(しかし奇妙だね。ここへ侵入したのなんて、バンアレン・デイ以来じゃないかな?)

「ああ、火神……じゃなかった、シャンテ・ライテの時か」

デイックにはすでにその話をしている。

かつてデイックとウォルターが共にツエルニにいた頃に、デイックと一度関係を持ったことのあるレアン・パール。彼女が持っていたちからを顕現させた姿が火神。そして、そのちからを抑えこみ、現在あるものがシャンテだ。

森海都市エルパにデイックがおいってきたそうだが、そこに住んでいた野生動物に育てられ、立派な野生児として育ったようだった。過去の面影など何処にもない。

だが、少し前はそれを利用された。バンアレン・デイの時に狼面衆はシャンテの育った環境と習慣を利用した。結果として大事には至

らなかったが、これ以上火神のちからを放置することは危険だ。

あの時、事後報告だったがレイフォンも妙な仮面をかぶった男と接触したらしい。

関わらずの因子

レイフォンまでもが狼面衆と接触するほどに、狼面衆はツエルニに迫ってきていたのだ。

「……厄介だな」

(そうだね…、どうするべきなのかな)

「…さあな。とりあえず、現状としては侵入した狼面衆を叩くしかない」

(離れてて良かったね。近かったら面倒だったもん)

ルウの言葉は何処か気に食わないと言った雰囲気醸し出していた。

先程話していたサヴァリスの話にはあまり興味はなかったようだが、フェリとの話についてはルウも考える所があったようだ。

「…ルウも、やっぱり他人と関わることは嫌いか？」

(…嫌い、っていうか…)

ルウはやや言葉を転がした。

どう答えればいいのかかわからないようで、ルウは唸る。

(なんか…、気に食わない)

「気に食わない、か」

(僕は別にどうでもいいんだけど…正直。でも、ウォルターがなんだかんだと文句付けられるのは、気に食わない)

「…それは、お前のことじゃなくてオレのことじゃないのか…？」

(うん、ウォルターのことだよ?)

「…いや、オレはお前のことを聞いたんだけど…」

ウォルターは苦笑を浮かべながらルウにそう言ったが、ルウは頬をふくらませる。

(だって、他人と関わってるのはウォルターだもん。僕は関係ないよ)
「…そんなことないだろ。ルウだってオレと一緒に関わってんだから…」

(…いいの。とにかく、いま僕が気に食わないのはこの一連の流れだ

よ)

「……ライアのことか？」

(それはそれだけど……タイミングの悪い狼面衆に、ばかを晒すハイア・ライアもそうだし、もたもた戦うレイフォン・アルセイフ、わざとらしいヴリスト・ウエーバーに面倒な天剣授受者サヴァリス・ルツケンス、どうしようもないフェリ・ロス。：なんか、本気でむかついてきた)

ルウがむすつとした顔で腕を組んだ。ウォルターはそれに苦笑しながら跳躍し、反応のある場所に到達する。

ウォルターは調子を取り戻し、ルウに声をかけた。

黒の少女

「ルウ、反応はするか？」

(……うん、……たぶんこの辺り)

「じゃあそろそろ軸が……」

視界が歪んだ。それはウォルターのせいではなく、狼面衆が現れる予兆。

ウォルターが腕輪に手をかざした時、それは来た。

「！」

金属音が閑散とした学園都市に響く。

軸のずれた都市には誰一人として存在しない。存在しているのは、侵入点に接触したウォルターと、そこにいる狼面衆のみ。

「やってくれたな、狼面衆」

「オリジナルに添う因子を持つものが移動したのを見届けに来たのみだ」

「それだけで済まないのがお前らだろうが」

ウォルターがじりじりと狼面衆との間合いを詰め、踏み込む。

刀を上段から下段へと振り下ろす。剣圧が風を巻き起こし、砂埃を巻き上げる。狼面衆の姿がかき消えた。場所は真後ろ。右足を軸にして回転、刀の先で狼面衆の武器を防ぐ。

「……気がつけば袋のネズミ、って感じだな」

(そこまでもないんじゃない?)

「ま……それはそうか」

ウォルターが口を開いた。

外力系衝剄を变化、戦声。

強大な咆哮の振動が飛散する。狼面衆が傾いた。刀の柄から炎が漏れだす。漏れだした炎は刀を舐め、包み込む。その状態のままウォルターは膝を曲げ、刀の峰を背に当てる様に構えると、左足を軸に回転した。

炎と斬撃は回転の勢いにもなって周囲を取り囲んでいた狼面衆

たちを吹き飛ばし、焼きつくす。残像であるとも言える狼面衆には適度に対応するのが一番だ。

ウォルターは息を吐きながら立ち直した。

「それで？」

残ったひとつの影。ウォルターはそれに視線を向けながら嘲笑の視線を向けた。

「要件はなんだったかな？ ……狼面衆」

「……貴様の役割の終わりも近い」

狼面衆の言葉に、ウォルターは怪訝な目を向ける。

表情の映らない仮面に、そんな目を向けた所で無駄だとはわかって
いるが、向けずにいられなかった。

「聖剣は近づいている。この虚構の世界に」

「……はん。なら、戦場も近いってことか」

「そして、『ウォルター・ルレイスフォーン』にも終わりが訪れる」

狼面衆はただ言葉を紡ぐ。

それでも、言い回しが妙だということに違和感があった。

影が増えた。

「聖剣の名のもとに、すべては進む」

「女王の君臨も近い」

(……女王……ドウリンダナってところか？)

あったことはないが、かつての友人の話から、かつての神話から
とった聖剣の名前を冠すナノセルロイドが四体いることは聞いている。
そして、その名前も。

ウォルターが考えているうちに、狼面衆の姿はまた増えていた。

「その時は近い」

「オリジナルを持つ都市に」

「女王は顕現する」

「なれば、終焉も近い」

ウォルターは首を鳴らし、刀を振るった。ただそれだけで、狼面衆
の姿は掻き消える。

「……させやしねえよ」

(…ウオルター…)

「ルウ…？」

(…の、反応…)

「…え？」

(楽土、の…反応がある)

「…楽…サヤ…？」

狼面衆がかき消えたその先。

黒い、喪服のようなドレス。黒髪に、精巧な人形のように流麗な顔立ち。

いるはずのない姿が、そこにあつた。

「…サヤ」

「お久しぶりです、ウオルター」

そう言ったサヤのあまり動くことのない表情は、やんわりと緩められた。

影が、寄る

この所、わたしは眠りにつくことができていません。その言葉は、脅威が近づいている証拠だった。

何よりも、彼女自身がこうして出てくるということ自体が異例だったのだ。

ただの影だとはいえ、この世界が出来てからというもの、ウォルターが会いに行く以外でこの少女に会うことは皆無。

それにも関わらず、彼女はいまここにいる。

その理由は、*“添うモノの因子”*がここにいることと、何よりも脅威が迫っていることだった。

それは近いのか、と問うた。だが彼女は小さく頭を振り、やや顔を俯かせる。

彼女は危険を察知こそ出来るが、それがなんなのか、いつにくるかということとはわからない。

前からそうだったのだ。それがわかっていながら問うた自分は、随分と意地悪になったものだとして少し自嘲した。

とりあえずと刀をしまったウォルターは、サヤに歩み寄る。

「……いつかはわからないのは仕方のない事だが……ここへ来てよかったのか」

ウォルターが静かに問う。

サヤは小さく頭を振り、口を開いた。

電子音が鳴り響く。現在真昼。睡眠不足の頭に劈くように響く電子音にウォルターは苛立ちを隠さず、苛立たしげに枕を叩いた。

「……ざげんじゃねえぞ……、誰だ……んな時間に……」

ここ3日は大忙しかったというのに、このタイミングでの尋ね人。

くだらない事情、くだらないヤツだったら殴る。ウォルターは軽く拳を握りながら扉を荒々しく開け放った。

だが、その扉の先には思いもよらない尋ね人がいた。

暖色の髪に、左顔面に刺青を入れた男。そしてその少し後ろに立つ戸惑いを顔全面ににじませている女。

「……ごめんなさい……さく……」

「す、すみません……突然……」

「……ライアに……ルファ……?」

サリンバン教導備兵団「元」団長、ハイア・ライアと、団員ミュンファ・ルファがそこにいた。

「ンだよ……面倒くせえな……」

「……ご、ごめんさ、本当に……。本当はちゃんと行くって言ってからくるつもりだったんだけど、さく……。……予想以上にいろいろ手間取って」

「本当にすみません、ご迷惑をお掛けしてしまつて……」

「はあ……。もういい、どうでも」

話すことすら気だるい。ウォルターはそう吐き捨てる様に言いながら2人を見る。

とりあえず入り口で立たせていてはそれもそれで面倒だと部屋へ入れた。適当に椅子に座らせて、ウォルターはため息を吐きながら飲み物を入れる。

「それで?」

「え、えつと……」

視線を泳がせて気まずいとばかりに言葉を口の中で転がすハイアを、軽く睨め付けながらウォルターは先を促す。

まったく面倒だと入れ終わった飲み物を2人の前に叩きつけるように置くと、どっかりと向かいの椅子に座り込む。

ウォルターの明らかに機嫌が悪いという睨みに晒され、ハイアは視線を泳がせ続けながらも言葉を紡いだ。

「えつと、さく」

「……おう」

「実は、放浪バスを待つてるんだけど、さ」

「……ああ」

「それが、実はしばらく来ないらしくて。戦争期は少し過ぎつつあるから大丈夫らしいんだけど、まだその目処が立ってなくて……」

「ああ、そうらしいな。……それで？　なんで、いきなりオレのアパートに来たんだ？　お前らは」

「えつと…実は…その…あの…なんていうか、さね」

もごもごと視線を逸らすハイアに、苛立たしげな視線を向けた。

ハイアはそつとウォルターが出した飲み物、カフェオレに口をつけて一息吐いてから口を開く。

「ほら…この間、騒ぎ起こしちゃったじゃないかさ。その…レイフオンのこととか、ウォルターとかのことで」

「ああ、ロスまで巻き込んだあれね」

「ぐうツ！　……そ、それで、宿泊施設にも顔が出しにくくって…その…」

「結局話じゃティアリスのどこ行ったんだろお前」

行ったというか、連れて行かれたらしいが。連れて行ったのはヴィートあたりだろう。

まあ要するに、騒ぎを起こして後ろめたいので公共施設に顔が出せません、と言いたいわけか、とウォルターは簡潔に思考をまとめる。

しかしそれをはつきり言わないハイアに、ため息を吐いてからウォルターは高圧的に気圧した。

「で？　……結論は？」

「……泊めてください」

「却下」

「えええええ！　そんなあ…」

「お前なあ…なんでオレのところなんだよ。他の所行きやいいだろうが」

「そ、そう言われても…」

視線を逸らしたハイアに、ウォルターが先を急かす様に視線を向け

ればもごもごとまた口を動かした。

「…ウォルターしか、頼れなくて」

ウォルターは至極面倒だという顔をした。眉根をよせながらカフェオレに口をつける。

ミュンファも肩が狭いといった表情でカフェオレをすすっていた。

1つ息を吐いて、ウォルターはカップを机におく。

考えこんでいる様な様子を見せたウォルターに、申し訳ないという顔でハイアが口を開いた。

「あの…本当に、あの、ごめんさ。でも、あの……ミュンだけでもーと思っ」

「ああん？」

「…だって、ミュンは悪くないし…悪いのは、その、おれっち、だし……と思っ、さ…」

「はーあ……。ルフア泊めんならお前も泊めるって。ひねくれんな、面倒くせえ」

盛大にため息を吐いて、ウォルターはカフェオレに手を伸ばす。

しょうがないとばかりに台所へ向かい、適当に中を漁る。

「あー…モノがねえな。おいライア、買いモンならお前でも出来るだろ」

「え？ えつと、おれっちが行く…んさ？」

「行け、がきでも出来る簡単なお仕事だ」

「…おれっちそういうところ行きたくないからウォルターを頼ったのに…」

ハイアが頭を抱えた。だが、ウォルターは特になんとも思っていない眼で冷えた眼を向けて、言い放つ。

「おらさっさとしろ。郷に入っては郷に従え、働かざるもの食うべからずだ」

「…せめて一緒に、」

「1人で行け」

「うう…」

財布と買い物リストを渡すと、ハイアが渋々といった様子で受け取

り踵を返した。

そんなに顔を見られるのが嫌なら帽子でもかぶればいいだろ、とウォルターは帽子を投げ渡す。やはり渋々と言った様子で帽子を受け取ったハイアが、ようやく扉から出て行く。

背中から哀愁が漂っていたような気がしないでもないが、ウォルターの知ったことではないとばかりに息を吐いてすべてを流す。

「あの、えっと…ウォルターさん」

「…ああ、ルファはシーツとか敷くの手伝ってくれ」

「は、はい」

ウォルターは寝室に向かい、備え付けである予備の布団を引きずり出して窓を開け放つ。

その間にシーツのある場所を指示して、ミュンファアに持たせた。窓から布団を半分出して、バンバンと力任せに叩く。

「…ああ、あの…」

「あ?」

「……………すみません、本当に…………あの、急に来てしまって。ウォルターさんのご迷惑になつているとは、重々承知なんです…」

「別に、どうでもいい」

ミュンファアにそっけなく返事を返して、ウォルターは視線をずらす。

布団を引き上げると元々引いてあった布団を床に落として、予備の布団を敷く。

「ほら、さっさと動け」

「あ、すみません」

ミュンファアがテキパキと作業を進める。さすが放浪バスであちこちを旅してただけであつてこういうことの手際は良い。

手早くウォルターは、はがしたシーツや掛け布団代わりのタオルを洗濯機へ放り込む。

「お前はそこで寝ればいいから。オレは向こうのソファで寝る。ライアは…………まあ適当に考えるわ」

「す、すみません…………」

「別に。さすがにお前にも床で寝るとは言わない」

「うう…すみません」

ウォルターはミュンファアの謝罪を軽く受け流して、台所へ向かい下準備を始めた。

作業が終わったらしいミュンファアがリビングへ戻ってきた。恐る恐る、ウォルターを探るように声をかけてくる。

「あの、ウォルターさん、は…」

「あ？」

ミュンファアが控えめにウォルターに声をかけてきた。

それをやや眉根を寄せて問い返したウォルターにミュンファアが一瞬びくりと肩を揺らす。

「…あ、あの…、ハイアちゃんのこと、ウォルターさんはどう思ってますか？」

「ライアの事？ ……特に、なんとも」

「…ハイアちゃん、今回の事すごく気にかけてて…、ウォルターさんにも迷惑をたくさんかけちゃったって…。それで、今日だから余計に…」

「別に、気にしてないって前に言っただろ。しつこいヤツは嫌いだぜ」
「あ…すみません…」

別に。

ウォルターがやはり簡潔にそういうと、ミュンファアは少し考えた様子で口を開いた。

「…でもハイアちゃん、ウォルターさんに迷惑かけるって分かってても、それでもウォルターさんのところに行かせてもらおうって言うって…、きつと何とかしてもらえるからって」

「なんとか…とか言われてもなあ。特になんかしてやれてんのか？ オレは」

「ハイアちゃんのお願ひ、ウォルターさん聞いてくれましたし…その…、やっぱり、信頼してるんだろうなあ、って思いました」

「…信頼…ね」

あんなふうと言ったのに、まだハイアはウォルターを「信頼」して

いるのか、と呆れ半分に鼻で笑った。

ミュンファは至って真面目のようで、特に嘘を付いている様子もなければ、嘘が言えるような人物でもないだろう。

(あいつにはある意味呆れるわ)

(本当にねえ…、素直すぎるくらいだよね)

(まったくだ)

ため息混じりにウォルターは手を動かしつつミュンファに問う。

「ライアがオレを信頼してるって言うけどよ、そんな事あるのか？」

あんな風に言ったのに」

ウォルターは口角を上げてそう言う。よそ見をしながらもウォルターの動きに遅滞はない。

手際よく作業を進めながらミュンファへ視線を投げる。

「……でも…、ハイアちゃんは…ウォルターさんのこと、ずっと憧れてるって。たとえウォルターさんに軽蔑されても」

「そこまで健気になれる理由がわからねえな、オレには」

軽蔑はしないけどな、と小さく呟きながらウォルターはスプーの味を確認する。

ウォルターが小皿に少量取り分け、ミュンファに差し出す。

「……あ、美味しい、です」

「ライアも食えるかな」

「大丈夫だと思います。…そういうえば、ハイアちゃんが前にもらったサンドイッチ、喜んでましたよ」

「あんな適当ものでか？ 安上がりだな、相変わらず」

そう言つて鼻で笑うと、ミュンファは軽く首を振った。

「でも、そう言つた小さな事でも喜べる、というか…小さな優しさに気付ける事大切だと思います」

「優しさ、ねえ…。……オレは優しいかな」

「優しいですよ。貴方自身が気づいていないだけで」

そう言つてミュンファは柔らかなく笑みを浮かべる。その笑みから自然と視線を逸らしつつ、ウォルターは作業を進めた。

——…気づいてない、か

ウォルターはミュンファアの言葉でなんとなく思考を巡らせる。

優しい、と一概に言われたところで、ウォルターにはよくわからない。どういったことが「優しい」に当たるのか、なんとなくはわかってはいる。が、自分の行動がそれに当てはまっているかと言われると、いまいちよくわからない。

それを理解しようとしても理解できた試しが無い。だからもう諦めていた。別にいいか、と考えることを放棄していた。だが、果たしてそれでいいのか……ウォルターは決めあぐねていた。

「……ウォルターさん、あの」

「ん？」

「ハイアちゃんの事、嫌いにならないであげてください」

「……あ？」

ミュンファアが両手を握りながらウォルターにそう言う。いつもはどこか気弱な瞳に、強い意志を宿してウォルターを見ている。ミュンファアのその眼に片眉を上げながら、ウォルターは口を開く。

「何度も言ってるが、オレは特になんとも思ってる。だから嫌いになるとかならないとかそういうはないじゃないんだ」

「……ウォルターさんのことはウォルターさんのことですから……、わたしが口出しできることじゃないですけど……、それでも、ハイアちゃんも結構無理をしてたので」

「……………そんなこと言われてもな……………」

「さつきまではきつと、強がってたただけだと思うんです。ウォルターさんと会うまでは、随分と落ち込んだので……。だから、きつとハイアちゃんは……………」

自身の震える両手を、ミュンファアが握りしめた。

その様子を見ながら、ウォルターは作業を済ませる。

小さく息を吐いて、自分が使ったものを片付けて手を洗う。

「……ウォルターさん。我が儘だとはわかってはいるんです。でも……、わたし、わたしは、」

「もういい」

「ウォルター、さん」

どこかすがる様な眼つき。そんなものを自分に向けるなどは思ったが、ウォルターは頭を掻く。

ミュンファアの瞳から眼を逸らしながら、ウォルターは大きなため息を吐いた。

「…あいつが無駄遣いしてねえか、確認ついでに迎えに行ってくる」

「……………はい」

嬉しそうなミュンファアの笑みに肩を竦めながら、ウォルターは上着を羽織り、アパートを出た。

「……………やっぱり、優しいです。ウォルターさんは」

口で厳しいことをいいながらも、結局はそうして助けてくれる。

だからきつと彼も頼りにしてしまうだろうと、ミュンファは主のいなくなった部屋でそう思った。

その感情は、一体

「はあ……」

ウォルターに買い出しに行けと言われ、買い物リストをもらったのはいいがどこで何が売っているのかさっぱりだ。なんとか幾つか見つけたのだが、ウォルターの買い物チョイスは若干際どいものが多い。つかある。

「香草類(そのまま)」って……この表記からして、瓶とかに入ってるヤツじゃなくて、生？　つか、つまりローリエを葉っぱでってこと？　椿油とか売ってんのかさ……？」

瓶での香辛料はいくつかあるが、そのままというのがなかなか揃わない。油も見つかからないし。

む、と呻きながらハイアはふらふらと商店街を歩く。ウォルターから借りた帽子をギュツと深くかぶり、商店街へ視線を巡らせた。

「はあ……」

本日何度目かもわからない溜息を吐き、ハイアは拳を握った。

——ウォルター、いつもに増して鬱陶しそうな顔してた

軽蔑されたか。大きく捉えられずにすんだものの、拉致事件を起こしたことには変わらないのだ。

それでもウォルターを頼る以外、他にどうすればいいのかハイアにはわからなかった。この前のことを忘れたわけではないし、ウォルターが最近苛立っていることもわかっている。だが、それでもそれ以外にハイアはどう手を打てばいいのかわからなかったのだ。

ウォルターを頼ってばかりで情けないとも思うし、そればかりになっってしまったのは良くないともわかっている。

少しでも近づくと決めたはずなのに、結局、決めた場所から動けないような気がして。

それが……

「おい」

ばふ、と頭に手が乗せられる。ハイアは声とその手に驚いて肩を跳

ねさせ、その人物を見た。

「お前には買ひ物を頼んだ筈だが……なにしてんだ？」

「ウオ、ウォルター……。……あ、えつと、ごめんさ……その、えつと」
「……………はあ」

盛大に溜息を吐いて、ウォルターは腰に手を当てた。うなだれたハイアの帽子を奪い取って、慌てた顔でウォルターを見たハイアの腕を掴み、立ち上がらせる。

「な、なにするんさつ」

ウォルターはハイアの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。髪の毛の乱れたハイアは、頭を抑えながらきよとんとウォルターを見る。

『きつとハイアちゃんは……』

彼女の言葉を気にしているわけではない。だが、それでも気にかけるに値する存在であるとは思っている。

突き放さず、ハイアを元気づけることのできるような言葉をかける。言えば簡単かもしれないが、ウォルターにはどうすればいいのか、さっぱりわからない。

(…ル、ルウ……?)

(……僕に聞いて、僕が答えると思ってるの？ ウォルター)

(お、思っていないけど。やっぱり聞けるのはお前しかいなくて)

(その言葉は嬉しいんだけどなー。…はあ…別にいいじゃん、そんなヤツ…)

ルウが酷く鬱陶しそうに言った。そう言われても、とウォルターが内心で渋面を浮かべる。

何を言ってもルウは案を出してくれる様子はない。どうしようかと考えながらウォルターは頭を掻いた。

「……えつと…、なんていうか。お前の行動は確かにやり方を考えろって話だけど。オレは別に責める気はないから。筋通したかっただけだろ」

「……うん…、そう、さ」

「じゃあそれでいいだろ。考えこむな。お前がお前を責めてどうする。誰も責めるお前を責めたりしねえよ」

「……でも……」

言うことを聞かないハイアの髪を再びぐしゃぐしゃとかき混ぜ、そのまま掴んで強制的に眼を合わさせた。慌てたハイアがまごまごと動いて眼を逸そうとするが、それを許さないウォルターの瞳がハイアを気圧す。

「……………」

「でも、も、だって、もねえ。何度も言わせんな。言っただろ、オレはお前を責める気はねえ、つて。しゃんとしやがれ」

「おれっちは……」

「……お前が、オレがお前を突き放すかもつてことに怯えてるんだとすれば、それは無駄な事だ」

びく、とハイアが肩を震わせた。

ウォルターの口から出た「突き放す」という言葉に、一瞬眼を見開く。しかしウォルターの落ち着いた瞳に、その動揺をかき消される。

「しゃんとしろ。いつまでもめそめそしてンじゃねえ。自分で決めたんだろ、やるつて」

「……でも、やっぱり……ウォルターの、その……所のヤツに迷惑をかけたのは事実だし……」

「……はあ」

ウォルターが盛大に溜息を吐いて、ハイアを掴んでいた手を離し自分の頭を掻いた。

「ここまで来たらしようがない、とウォルターは再び盛大に溜息を吐く。

「お前以外、もうそんなこと気にしてねえよ。あんまり悩んで鬱陶しいなら部屋から換気するぜ」

「……後悔は、してない。言っただとおり、あいつとの決着はつけられたんだから、さ……。けど、ウォルターに迷惑をかけたのが、おれっちは……」

まだぐずるか、とばかりにウォルターはハイアの額を指で弾き、その手からメモと財布を奪い取る様にとると、踵を返す。

「いつまでも惨めに塞ぎこんでるお前に用はない。オレは行く。これ

以上は時間の無駄だ」

「……………おれっち、は……………」

「…整理がついたら追いついて来い」

「……………っ……………ウォルター……………」

ここまで言えばなんとかなるだろ。

ほぼ適当だ。なにせ相手を気にして言葉をかけるなど、そうそう無いのだから。ウォルターは頭を掻きながらなるべくゆっくり歩き出す。

(はあ…こんなつもりじゃなかったんだが)

(結局、いつもとあまり変わらないんじゃない?)

(グレンダンの時も比較的あったけどな、こういうこと)

(主に女王関連でね)

だから別に珍しいことじゃないけど、と内心で返事を返ししながらウォルターはため息をつく。

別に、そんなつもりはなかったのだが。自力で立ち直れないならば、構う必要性も感じない。

必要性を感じないのは確かなのだが、しかしどこか違和感がした。なんというか、ウォルターにもいまいちよくわからない感覚。胸のあたりがもやもやするというか、放っておくことをためらう感覚……………でも言うのだろうか。

————…この、感覚は…

変革、か？

そう思考し、ほんの少しだけ目を伏せた。

はあ、と再び溜息を吐いたルウが、口を開く。

(ま…ウォルターだからねえ？ 周りの生徒からしたら、「ウォルターすごい」、「ウォルターならなんとかしてくれる」っていう注目の的なんだでしょ?)

(…………正直、鬱陶しい。そういう目は)

(ハイア・ライアにもその気はあるじゃない。…………でもま、甘やかすのは良くないよね)

(だから放つところと思ったんだが…そうもいかなかったな)

先程の会話が、ウォルターがハイアに与えた最後のチャンスだ。これではハイアが立ち直る……ことは出来なくても、気を戻すことが出来ないなら、もう本当にウォルターは突き放す気にいる。

いちいち構っている程ウォルターも暇ではない。

つん、と服の裾が引かれた。大抵こういう引き方をしてくるのは2人ほどしかないため、ウォルターは振り返ってその赤橙の髪を視界に映す。

「……ウォルター……おれっちは……、やっぱり、諦めない。負けたことは負けた。それはもういいさ。だから……おれっちは……、おれっちは、もっと強くなりたい。もっと、強くなる」

廃貴族の騒動の時も言っていた言葉。ウォルターはその言葉を聞きながら、あの時と重ねあわせていた。

ハイアの表情は見えない。俯いたまま、拳を握っている。

「だから、ウォルターに言ったことを絶対実現させる。何があっても、天剣授受者になる」

「……ああ」

「……ウォルター……おれっちは、行っても、いい、さ?」

そこで引くのか。ウォルターは苦笑交じりにハイアの髪をかき混ぜて言う。

「そんなこと、自分で決めろ」

「……行く。行く、さ」

ハイアの頭に帽子をかぶせて、ウォルターが先に行く。服の裾を掴んだままのハイアの手が、きつく握られた。

「……ごめんさ。店につくまでには、なんとか、するから」

「了解」

端的な返事を返す。後ろで小さく嗚咽が聞こえた。

悔しかったのは悔しかったのだろう。誰だって負けたら悔しい。必死に戦ったのだ、お互いに。

あの戦いは、お互いのプライドをかけていた。

デイン・デイーの時も、勿論そうだった。だが、あの時の怒りや羨望、妥協の出来ない状況はまだお互い表面でのものであり、内面を反

映した戦いではなかった。しかし今回は、その内面を反映した戦い。お互いの決して妥協できない所を曝け出し、その為にお互いが頑として許さなかった事までも強行した。

それはきつと、想像を絶する恐怖だっただろう。自らを裏切る背徳、その時は簡単だと思つていても、あとから襲い来る絶望にも似た感覚。

——ライアが考えてたのもそれだろうな、きつと

ウォルターに対して失態を責めていたのももちろんあるのだろうが、きつとそれ以上に自身を信じられなくなりつつあったのだと思う。かつて裏切りをした時のウォルターにも、なんとなく、同じような感覚があつた気がする。

あの時のウォルターはそれこそ“本当に”目的を果たすためにすべてを潰していたから、罪悪感こそなくても自身を信じられたことはそうなかった。ゼロ領域では心を塞いで、自分自身を自分が信じられていないと暴かれぬようにしていたから良かったものの、問われればきつと答えられなかっただろう。

きつといまのハイアもそうなのだろうと考えて、なんとなくかつての自分を考える。

人に偉そうに言えることもしていないし、おおっぴらに言えるようなこともしてきていない。

そんな自分が、何故ここまで。

(本当、なんの冗談だろうな?)

慕われる、なんて。

(……まあ、とりあえず落ち着いたならいいじゃない。なんとかなるだろうし。……そうでしょ?)

(まー……そうだな)

ルウの言葉に気軽に返事を返し、ウォルターはなるべくゆつくりと道を歩いた。

鋭利なコトバ

「プールだー！」

「水着だー！」

「……じゃあ帰ろうぜ」

『おいッ!!』

ノリが悪いぞ、とばかりにシャーニツドに肩を掴まれた。

現在ここは都市の中にあるプールだ。十七小隊以外にも生徒はいるが、大抵は小隊所属者。

ここに居る十七小隊も、少し前……幼生体の群れにツエルニが突っ込んでいた時にシャーニツドが言っていたリフレツシュ休暇……ではなく。そのリフレツシュ休暇を行う事と引き換えに措置された水泳も兼ねた訓練だ。

一応訓練という面目があるため、全員標準の水着着用。男性の方はノーマルなトランクスタイプの水着、女性の方は競泳用水着。そしてまあ、ウォルターも着ているわけだが、ウォルターは多少重装備でラツシュパーカーを来てサンダルを着用していた。その様子に周囲は若干怪訝そうだが、周囲がその点に関して問える程、ウォルターの顔色が良くないのだった。

「…ウォルター、大丈夫か？ さっきからずっと黙ってるけどよ」

シャーニツドが黙りこんでいるウォルターに怪訝な顔で肩を揺さぶる。

何気なくだが、肩に触れられたウォルターはシャーニツドに酷く不機嫌な顔で手を弾く、が、その声にいつものような覇気はなかった。

「……平気だ。つか、触るな」

普段より5割増し声の低いウォルター。そんな中、水泳という普段中々することのできない訓練にワクワクとした気分が抑えきれないニーナが声をかけた。

「そうだとウォルター。せつかく来たのだからキチンと入っつけていけよ。訓練も兼ねているのだぞ」

「……物凄く、嫌だ……」

「珍しい……ことではないですが、珍しいですね。イオ先輩がそこまで拒絶するなんて」

フェリはどうでもいい、という意味合いの強い語調でそう端的に言い放った。普段であればそれに対して軽く言葉のひとつふたつでも返していただろうウォルターは、しかしから笑いを零して遠い目をするばかりである。

ちなみに、普段であればウォルターにひとつふたつの小言を零すであらうに、現在の様子に一切ツツコんで来ないレイフォンと言えは。

『……』

プールサイド、十七小隊の輪から少し外れ、険悪ムードのその真っ只中にいた。

赤橙の短髪を揺らす、左顔面に刺青を入れた男……ハイアと、お互いに心底嫌そうな顔をして、睨み合いを続けていた。

ハイアとミュンファについては、放浪バスが来るまでウォルターの監視下におくという条件でツエルニ滞在が許された。

現時期は戦争期ということもあって放浪バスが来ない。その為、これはサリンバン教導傭兵団からの措置であるが、他都市からツエルニを出るための放浪バスを回してくれることとなった。ただし、この放浪バスは戦争期である都市達との諍いを避けるため少人数用であり、グレンダンへは直接向かわない為に、リーリンを乗せて帰還できる見込みは一切ないとの話。

何よりも本来、都市の方針に沿えばおそらく都市外追放なのだが、そこはウォルターの動きで対応され、監視下に置かれている。ツエルニ内での鍊金鋼、剽の使用禁止という制約以外はハイアにつけられていない。そしてそれは、ミュンファも同様である。

そんなハイアの腰には、当然ながら鍊金鋼も剣帯も無く、彼も現在の十七小隊と同様に水着である。何故か、と言うのは火を見るより明らかで、少しでも身体が鈍らないように運動をするためだった。

そして現在、睨み合いを続けている2人を、普段ならば牽制するはずのウォルターには一切その気力が無いらしく、プールに虚ろな眼を

向けたまま項垂れている。

「……地獄だ……ここが地獄か……」

「ウォルター……そんなにプール苦手なのか？」

「いや……プールは別に……」

ウォルターが再びから笑いと共に返答を返すが、眼が笑っていない。完全に諦めで呆然となつていようだ。さすがにニーナだけでなく、その他の十七小隊隊員もなんと声をかけたものか決めあぐね、ちらちらとお互いに視線を合わせている。そんな中、構っていられるかとダルシエナは足早にプールへ向かつていった。

そんなウォルターと十七小隊のやや後ろで睨み合いを繰り広げているレイフォンとハイア。2人の間には嫌悪なムードしか漂つておらず、若干レイフォンから発せられた衝動によつてプールサイドの床に撒き散らされた水が跳ねている。ハイアが軽く腕組みをして体勢を変え、レイフォンはにっこりと嘘臭い笑みを浮かべた。

「どうしてここににいる？ ハイア」

「レイフォン、おれっちはさつきから何度も『ウォルターのお陰だ』って言ってるさ。何回言つたらその脳みそは理解するのさ？」

「うん、ツエルニにしていることはまあ、いいとしても。どうして、『いま、ここに』いるわけ？」

「それもさつき運動しに来たただけだつて言つたさ」

はん、と鼻で笑いながら飄々とレイフォンの怒りを躲すハイアは、べえ、と舌を出してレイフォンの怒りを煽る。それにレイフォンが頬をひきつらせ、拳を握つて拳に剄を走らせ始める。

それに気づいたニーナがさすがにそれはまずいと2人を牽制するも、慌てたニーナの牽制をハイアは面白がり、レイフォンは牽制に勢いを沈めつつあるものの、ウォルターに牽制された時ほどの効果は無い。

ニーナは常日頃どれだけウォルターが2人に叩き込んで……と言ふより、この2人への影響力が強いのか痛感する。

2人を苦笑して見ているミュンファに対してニーナは助けを求めつつ、やはり項垂れているウォルターに声をかけた。

「ウォルター、なんとかしてくれ！」

「：オレ帰りたいんだけど…」

「だめですよ。：隊長、イオ先輩は役に立ちません」

「なんだとツ!? むむ…つ、ああもう、2人とも落ち着け！」

声を張り上げてニーナが牽制するが、しかし馬の耳に念仏状態である。そんな様子をぼーつと傍観するのみとなっているウォルターは、大きく息を吐き出した。

(ウォルター大丈夫? いやなら断ればよかったじゃない)

(断つたらまたうるせえから…)

(そう言ってもなあ…それで体調崩したら元も子もないじゃない)
(だけど…：…ああ吐き気がする)

ウォルターは口元を押さえつつ、重い腹を押さえた。レイフォンとハイアの睨み合いはお互いがそっぽを向くという形でようやく収まったらしく、挟まれていたニーナが酷く疲れた顔をしている。

いつもならばここで「情けない」だの「くだらない喧嘩をするな」だの言うのだが、そんな気力さえないウォルターは近くにあったベンチに座り込む。

座り込んで深々とため息を吐き出すウォルターへ寄ったハイアが、その顔色の悪さに眉を寄せた。

「ウォルター、大丈夫かさ? 体調悪い?」

「…ああ…へいきだけど…お前らは行ってこいよ、せつかく来たんだし…」

「でもウォルター…」

「ウォルター、水苦手なんですか?」

やってきたレイフォンが、ハイアの言葉を遮った。それにハイアが若干顔をしかめ、レイフォンを見たが、特に気にしていない様子のレイフォンは言葉を続ける。

「とりあえず小隊で来てるんですし、入るべきだとは思いますが…」
「…お腹気持ち悪い…」

「体調悪いのに無理に引き込んだらだめさ。余計に体調崩すさ」

ウォルターを擁護するハイアにレイフォンが片眉を上げる。いつ

もの事とはいえ、今回は正論だ。理にかなった反論に、レイフオンは内心不機嫌になりつつ、ハイアへ向けた視線をウォルターに向けた。「ウォルター、とりあえず慣れてみるのはどうですか？ ほら、このプールは段々深くなっていく形ですし」

レイフオンはそう言ってプールを指した。

ここのプールはプールサイドに近い場所が一番浅く、だいたい足首ほどまで。少し進んでいき、プール半ばくらいまで来ると腰、そして進んで肩辺り。更に進んだ先にある仕切りを超えると足がつかない程の深さに到達することになる。

本当に浅瀬の部分ならば大丈夫ではないか、とレイフオンは提案するが、ウォルターはベンチでうなだれたまま腹を抑えている。

「どうしてそこまで苦手なんですか？」

「……いろいろあつて」

「またいろいろですか。…しょうがないですね」

レイフオンはウォルターの腕を掴んでプールへ引っ張っていく。ウォルターはそれには通常では見られないほど頬をひきつらせ、必死にレイフオンを止めようとするが、どこかいきいきとしたレイフオンは止められない。ハイアも止めようとしたが、につこりとレイフオンに退けられた。

ばしゃん、とレイフオンの足が水へ入った。続いてウォルターの足が。本当に足首に届くか届かないかというほどの水深。

足の甲辺りまでひんやりとした水が触れる。レイフオンはウォルターに向き直る。そんな2人をハラハラとした表情で見守る十七小隊とハイア、ミュンファ。

「どうですか？ 大丈夫じゃないですか？」

「……ウォルター……大丈夫か……？」

後ろで控えていたニーナだったが、どうも心配だったらしくウォルターの方へ声をかけつつ歩み寄ってくる。

だが、当のウォルターは先程より二割増し程に顔色を悪くしていた。

「……むり……」

「この程度でだめなんですか!？」

「と、とりあえず水から出る、ウォルター!」

かなりか細い、今にも掻き消えそうな声で咳かれたウォルターの「むり」に、あのシャーニツドが慌てて抱え引きずり出した。

どおりで、とレイフォンが息を吐いた。

ウォルターは結局ベンチへ逆戻り、ウォルターを除くレイフォン達十七小隊プラスハイアとミュンファは、プールの水深が腰ほどに来る場所で許可をとり、それぞれ運動を開始していた。

フェリはニーナと泳ぎの練習、シャーニツドは：何やらよくわからない水泳、レイフォン、ナルキ、ダルシエナも水泳、ハイアはちらちらとウォルターを気にしながらミュンファと柔軟をしていた。

みな等しくだが、レイフォンも訝しく思っていたのだ、ウォルターの格好が重装備だったことに。一応水着は着ているものの、上にはラッシュパーカー、サンダルと言うよりはもう少し布面積の広い靴を履いていたものだから、何かあるな、とは思っていた。しかしウォルターともあるう人が、水が苦手だとは。

自身も野菜は苦手だし、まあ人にはそれぞれ苦手なものがあるだろうしいのだが、それにしてもあの様子は尋常ではない。

何故あそこまで嫌いになる要因が水にあったのかはわからないが、苦手なものは苦手なのだろうと思ひ、それでいて克服出来るといいとぼんやり考えていた。

「と言うか、あんなに苦手なら来なければよかつたんじゃ：」

「：去年は難癖つけて来なかつたぞ、ウォルター」

「隊長。：：：：そうなんですか?」

「ああ。ウォルターが入ったのは去年の夏季帯終わり目からだつたんだが、2回ほど行った実習にもこず、授業の方にも一切出席しなかつた」

ニーナがフェリの指導をしながら言う。レイフォンはその言葉にふむ、と考えた。

「隊長、今回ウォルターが来るって言った理由、聞きました？」

「いや、聞いてない。ダメ元で聞いてみたら普通に行くと返されたから…来るならいいかと。わざわざ聞いてやはり行かないと言われても困るしな」

「それは、そうですね」

「まあ、あの時は本当にひねくれていたと言うか、素直に言葉を聞いてくれないというか…」

そう言ってニーナがレイフオンに苦笑を浮かべた。

「…お前」

「…げ…」

目の前に現れた金髪の女子生徒に、ウォルターは何故居るのかと怪訝に眉をよせた。同学年とはいえ、対面率が高くないか、とどこか面倒くさい気分で頭を掻く。

目の前の金髪…ニーナ・アントークは、そんなウォルターに対し、気軽な声をかけてくる。

「ウォルター。小隊に入ってくれる気にはなったか？」

「…どうしてそうなんだよ。お前の頭はお花畑か」

「む、むう…、ようやく来てくれるのかと思ったのだがな」

「んなわけねえだろ、ばかかお前」

「そうか、残念だ。…だが、わたしは諦めんぞ」

「そーですかー」

ウォルターは呆れてやや眼を細め、ニーナを軽く睨め付けるようにして見る。が、ニーナは真剣な顔でこちらを見ているだけだった。

大きな溜息を吐いて頭を掻き、ウォルターはニーナに問うてみる。

「あのさ、お前ってなんでそんなにオレ誘うのに必死なわけ」

「…いきなりなんだ？」

「誘うなら別に他のヤツでもいいだろ？ オレにこだわる訳がわからねえって言ってるんだよ」

「…そう、だな…」

「周りが無駄にオレをはやし立ててるから、それで自分もーって、薄っぺらい理由じゃねえの？」

「……確かに、お前を小隊に入りたい、はっきりした理由がわたしには無い」

少し考えた様子で、そう呟くように言葉を発したニーナに、ウォルターは「なんだそれ」といいたくなかったが、ニーナがなにやら考えながらその言葉を発した為に、その言葉を飲み込みニーナの言葉を待つ。

「だが、わたしはお前を十七小隊に欲しいと思った。……それは理由にならないのか？」

「理由つてのはわけを説明するモンだけ。お前のは理由じゃなくて、ただの感情だろ。子どもかよ」

「た、たしかに子どもみたいだとはよく言われるが……」

「はん、はっきりした理由もなく、よくそんな事が言えるぜ。子どもの方がもっとマシな事言うんじゃないのか？」

「ぐ、ぐううつ」

鼻で笑いつつそう吐き捨てたウォルターに、ニーナはやや項垂れた。気分を落ち着かせようとか、ニーナは大きく息を吐き出す。

しかし、それをさせないようウォルターは言葉を続けた。

「深く考えてもいない、眼の前の事しか処理できない、そのくせそうやって冷静に考えようとせず感情で動く。隊長としての器は微塵も無いな」

「ぐ、ぐう……つ。だが、直感と言うのは信じてもいいだろう……」

「直感なんて不確定要素の多いモン、オレは信じないね。それにそれを信じるだの認めるだの言ったら、お前調子に乗んだろ、絶対。ホント、大人になって詐欺とかに引っかけりそう」

「い、いや……！ だからといってお前みたいにあれこれと難しく考えていては、ひねくれてしまうぞ！」

「確かに、オレ程難しく考える必要はねえと思うけどな。……直感で動いて得したことでもあんの？」

「……な、無いが……」

「だろうな」

ザツクリと切り捨てたウォルターの言葉に、ニーナが呻きながら頭を抱える。廊下で項垂れたニーナに、はんと薄い笑いを零すウォルターが、そらダメじゃねえか、と吐くと、ニーナはバツと俯かせていた顔をあげ、ウォルターを強い眼差しで見た。

「ここは学園都市だ。あらゆる可能性を試す場だ。わたしも、いまわたしを試し、成長するためにこうして小隊を作ろうとしているんだ。だから、ダメだなんてことはない」

「…可能性を提示する場が、学園都市だと言いたいわけか」

「そういうことだ。だからわたしは可能性を提示する」

「……はあ？」

意味がわからないと怪訝に眉を寄せ、首を傾げたウォルターの前で、ニーナは真っ直ぐな眼でニーナはそこに立っている。

しっかりとした足取りで、つかつかとウォルターとの距離を詰めたニーナは、はつきりと口にした。

「わたしの小隊に入れ。断言は出来ない。だが、お前にとって変革があると思う」

ニーナのまっすぐな意志の宿る瞳に見つめられ、ウォルターは大きな溜息を吐いて目線を逸し、ニーナに背を向けた。

「ウォルター！」

「悪いけど、オレは変わる気はないンでね。諦めろ」

ウォルターが足早に去っていく背だけを、ニーナは見ていた。

レイフォンはそれとなくその話に耳を傾け、ニーナとニーナが指導するフェリへ視線を向けた。

「でも隊長、ウォルターがそういう風だったっていうのはわかりましたけど、最近の態度については？」

「なんとも言えんな。今日はまあ…あれだが、最近の態度には少し…あの時より鋭いものを感じている」

「イオ先輩がきついのはいつものことですけどね。ですが確かに、最

近は異常な気がします」

「……どうして、でしょうかね。最近は……少し、柔らかくなってきた気がするんですけど」

レイフォンがそう言っただけで、プールの水へ顔を付けた。ぶくぶくと泡を吐き、レイフォンはニーナに視線を向ける。ニーナは、レイフォンのそのどこか同意を求める様な視線にやや渋い顔をした。

「……そうだな。ようやくウォルターが少し馴染んできたかと思ったんだが……」

「そういう隊長は、まだ言う気になりませんか」

フェリの厳しい言葉に、ニーナが眉根を寄せ、やや俯いた。

「……すまん」

「いえ」

なんとも思っていない、という声でフェリが返すが、実際はそうでもないだろう。

マイアスとぶつかる前、ニーナ・アントーク、ウォルター・ルレイスフォーンはツエルニから忽然と姿を消した。そしてどちらも、いなくなつた真相を明かさなかつたのだ。

ニーナもウォルターもカリアンに失踪した理由を問われたが、どちらも答えなかつた。口をつぐみ、ニーナは「話せない」とだけ言つて何も言わなかつた。ウォルターは「話せない」とも言わず、カリアンの問いを右から左へ、その時にはすでに鋭さが戻っていた。

その鋭さに、それ以上の追求は危険だとカリアンも判断し、十七小队もまたそう判断した。

ニーナに関しては「必ず話す」と答えたため、ニーナが話す時を待っている。

だが、ウォルターは……

「イオ先輩は……どうなんでしょうね」

「さあ……ウォルターですから。……また……、いつもの様子”に戻るといいんですけど」

「そうだな……」

ウォルターが、どうしてあの眼に戻つたのか。誰もわからない。

ハイアとレイフオンの戦いの時にはすでにそうだった。レイフオンは思考を巡らせる。

「…ウォルターが強制入院になった時に、会ったんですけど…その時は、そうでもなかった気がします。……でも……」

「でも?」

レイフオンが言い淀んだところに、ニーナが問うた。

「そうだ…、ハルペーの話をした時だ。ハルペーの話をした時に、ウォルターが……」

そうだ。あの時だ。

あの眼が苛立ちを宿し、一瞬で乾ききったのは。乾ききったあの眼は、レイフオンを見ていなかった。レイフオンに向けられていながら、ウォルターの眼はどこか遠くを見ていたのだから。

どうして、あの時に問わなかったのか。

わかっていた。彼が考えだすと1人ですべてなそうとすることを。

他人に頼らず、自らのちからだけしか信じない。

まさに、ハルペーに会う前に考えていたことだ。

彼はたった一人で「何か」をしようとしている。彼は、考えだすと止まらないのだ。

彼が決めている、もしくは決めたそのときから、彼は決して止まることは出来ない。止まらない。

たとえ、「誰か」にそれを阻害されようと、それを引き止められようと。彼は決して、それを邪魔立てされることを許さないだろう。

だからこそ、気付くべきだった。気づいた時に、彼に問うべきだったのだ。

彼の眼が、「乾いた」と気づいた時から。

「……僕はもしかしたら、彼に酷いことを言ったかもしれない」「どういうことだ?」

いや、それならばいつも言っているだろう。

レイフオンが彼に対して憎まれ口をきくことはしよっちゅうで、彼にそっけない口をきくのもいつもだ。

だが、それ以上に……

『…なんていうか…ハルペーに並べるなら、やっぱりヒトでも武芸者でもない…ですよね』

あの時は、なんとなくそう紡いだ。

素直に、感想を言ったのだ。そう、あの時は。素直に“言っ
てしまった”。

素直に言った言葉が、きつといまの状況を招いているのではない
か、とレイフォンは思ったのだ。

“ウォルター”なのだから、自分で何とか出来る。何とかするに決
まっている。

そう結論づけたのだ。彼を気にしていなかったわけではない。
だが、彼なら、彼だから、とレイフォンは安心しきっていた。

「…ウォルターが考えこんでいる理由は、僕かもしれない」

レイフォンはそう呟いて、その不安をかき消すようにプールへ潜っ
た。

“色の無いカンジョウ”

ベンチに座り込んだウォルターは、胃の中で暴れまわる感覚に口元を抑えていた。

特に興味もない事柄に引つ張り込まれ、更には水に浸かるはめになるとは思っていなかった。

「…ああ、くそ」

他のメンツは全員プールに入ったようで、それぞれ泳ぎの練習やらなんやらと、各自の行動を続けている。

吐き気は収まらない。喉の奥までせり上げた感覚を呑み込んで、ウォルターは着ていたパーカーのフードをかぶりこんだ。

日差しを避けるものが出来、光で霞んでいた視界が少しだけはつきりとする。水に浸かった感触が足から消えない。お湯ならまだマシだったものを、とウォルターは内心で悪態を吐いた。

さすがに、この夏季帯手前に来て温水プールに入るなんてばかりのようだが、ウォルターからすればそっちの方がまだマシだったとは思いう。まあ、その他の面々はこちらで充分満足しているようだし、なによりこっちの方が気分的にも楽しいだろう、とは思った。ウォルターの事は微々たるものであり、全体の方針を決める程重要なことではない。そんなことはウォルター自身わかりきっている。

(ああ、もう、帰りたい)

(…ウォルター…大丈夫…？ 消す…？)

(え、い、いや…、消さなくて大丈夫…)

腹の気持ち悪さは拭えないが、ルウとの会話は落ち着く。打ち解けて素で話すことの出来るルウは、気取らなくていいという点でとても気楽で心地良い。

ウォルターの軽い返しに、先程までなだめるような口調だったものが、やや怒ったような語調に変わる。

(ウォルター、またそう言って。もっと頼っていいんだって何度言えば分かるの)

(も、もう十分頼ってンだけど…)

(……まだだめ)

(だ、だめかあ)

妙に強く言われ、ウォルターは『会話』だということを忘れて思わず苦笑した。どうせフードもかぶっていることだ、見えはしないだろう。

そう思いながらふらふらと『会話』を続けていれば、こつんと頭に何かがあたった。

「…え」

「調子は戻りましたか」

「……ロス」

いつもは流されている銀髪が今日は高くまとめあげられ、頭の後ろから少し垂れ下がり、またまとめあげられている。その手に持っていたのは缶ジュースで、一本はウォルターに向けられていた。

「…まあ、それなりに」

「そうですか。…これどうぞ」

フェリからほぼ強引な形で缶ジュースを渡され、ウォルターは思わず受け取った。

以前と同じ様にプルタブを開ける動作に苦勞するフェリに苦笑をこぼし、ウォルターがプルタブを開けて手渡す。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。…お前は泳がねえの？ オレはここでのろのろしてるつもりだけど」

「死ぬのでいやです」

「…そうか」

「なので逃げてきました」

あつけらかなとした顔で言い放ったフェリに再び苦笑し、ウォルターが他の面々について尋ねれば、至って普通という調子で言葉を返された。

こうしているこちらとしては、正直特にやることもない。ただ待っているだけだ。

缶ジュースのプルタブを開けると、軽い音と共に飲みくちが開く。

口元まで持つていって、一瞬喉の奥で何かが詰まった感覚がしたが、缶ジュースの中身と共に腹へ流し込んだ。

冷たい炭酸が口を這う様に進み、喉を通り、食道を通って胃へと到達する。それに一瞬眉を寄せたが、息を吐き出して表情を戻した。

「…それで」

不意に口を開いたのはフェリだった。

特に話す気もなかったウォルターはその言葉に沈黙していたが、あからさまに不機嫌だという表情を浮かべ、フェリがウォルターを睨め付ける様に見る。

「機嫌は治ってないみたいですね」

「…別に、機嫌が悪い訳じゃねえが」

「じゃあ、どうしてそう不満顔をするんでしょうか？」

「不満顔なんて、」

「してます。…いつもの仏頂面が、こここの所5割増です」

ため息混じりにそう言い放たれ、ウォルターはさらに苦笑する。

事実、ウォルターとしては他との壁を作る事以外に機嫌が悪いつもりはない。だが、元々の愛想のなさが相まって機嫌が悪いと取られているようだ。別にいま意識している事をしていない時もよく言われた。

まあ確かに考えることが多いせいとか意図せずして眉間にしわを寄せている事はよくある。気にかけてはいるつもりだが、癖というものはある意味すごいと思う。

「…別に、仏頂面を気にするつもりなんてありませんけど。…今に始まったことではありませんし。けれど…最近は輪をかけて機嫌が悪い気がします」

「……そうかねえ」

「そうです。…丁度、あなたが帰ってきて、隊長も帰ってきた辺りからでしょうか」

「……どうかねえ」

なんとなくはぐらかそうと適当に言葉を返している事はわかってる。そしてそれが、フェリにとって最も不満であることをウォル

ターはわかっている。事実、フェリの流麗な眉がよった。

「あなたは本当に……」

呆れきった表情で言われ、ウォルターはやはり薄く苦笑をこぼす。はつきりとした言葉で返さず、ただ苦笑するだけ。答える気はない。

答える必要はないと思ったからだ。答えればきつとフェリは「くだらない」の一言で一蹴するのだろう。そんなことはわかりきっている。そして、ウォルターもこの行動に本当に意味があるのかどうか、見据えかねていた。だからこそ、いまこの状況に陥っているのだから。

「……ですが、個人的な意見を言わせていただくと、初めてあなたの様子が変わったとわたしが感じた時に比べると、随分とまた丸くなりました」

「……そう……かねえ」

「はい、そうです。……結局、意地を張っても意味はないということですよ」

フェリのぎっくりとしたいいい振りにウォルターは無意識に眉を寄せた。

——意地？

そんなつもりはない。そう言いたかったのに、言葉は喉の奥でつかえて霧散した。

フェリの表情は変わらない。ウォルターのよった眉もすでに戻った。

ウォルターからすれば、一体どこが意地を張っていると言うのか、むしろ教えてほしいくらいだった。

やらなければならぬことがある。そして、きつとそれは近いのだ。

ハルペーが現れ、ディクセリオ……ディックも動き始めた。狼面衆が現れ、“あの因子”を有するリーリン・マーフェスがこのツエルニへ来た。

何故？ 運命が束ねられるのはグレンダンにも関わらずリーリン

はここへ来た。

何故？ 本来グレンダンの奥の院にいる筈のサヤがツエルニに現れた本当の理由はなにか。

何もはつきりもしない。釈然としない。

もやもやとした感覚に、ここ最近感じていた胸のもやを思い出す。

—— オレは決めた。：ニルフィリアに言われたからじゃ、ない

変わっては困るのだ。待ち受ける未来の為にも、
“ウォルター・ルレイスフォーン”は
“ウォルター・ルレイスフォーン”であり続けなければならぬ。

だから、すべてを否定する。変わったと思われる様な事実を、他人と関わる事を、脆弱になつたと、軟弱な光を宿していると言われた事を覆すために。

そう決めたのだ。

—— ……これが、ロスの言う、
“意地を張ってる”？

否定する必要なんてないのではないのか。

そうなんとなく、本当になんとなくだが、思わなくはない。だがウォルターはそれとして在り続けなければならぬ。だからそれを否定しなくてはならない。単純な連想だ。

けれど、それとして在り続けなければならぬ自分を忘れたわけではないが、ニーナ達十七小隊、レイフォンの同級生や自分の同級生と関わり合うことを悪いと思う自分はいないのだ。

むしろ、そう……どこことなく、いい雰囲気だ、というの、思える。

それをわかっていながら、無視しようとする自分にいま違和感が生じているのだ、きつと。

だからもやもやする。

なら、どうして？ どうしてそれに違和感を覚えるのか。

それがわからない。そんなことに違和感を覚えたことがなかったからか、ウォルターにはまったくとして見当がつかないのだ。

どうしてレイフォンの、暗に“化物だ”と言われた時、苛立ったのだろうか。

別にそう言われることは慣れている。かつてから言われていた言葉だ。それがウォルターの武芸的な強さに向けられた事柄でなくともだ。

きつと良いことではないのだろうけれど、言われて慣れているのだ、そんなことは。

だが何故か、今回に限ってはそれに苛立ちを感じる。いま思い出しでも、なんだか苛立ってくる。

この理由がわからないから、「変わった」という言葉を、現状を受け入れられないのだ。

——— …じゃあ、この理由がわかったら？

分かったとしたら、ウォルターはそれを受け入れるのだろうか。

受け入れて、それで？

脆弱と言われようと、「絶対に目的を達成する事ができる」と言える存在である確証があるのだろうか。志が変わらなくとも、有り様が変わらなければなんとでもなると言えるのだろうか。

その「変わった」が為に得た物の為に、目的が達成できなくなるといふ事象があり得ないことではない。

じゃあ、理由を知っても受け入れられないべきなのか。これを続けるべきなのか。

——— それとも、原因を根本から断つか、だ

このツエルニに基点を置くことをやめることも選択肢にある。ツエルニに固執する必要はない。

もちろん、この都市はあらゆる意味で特別だ。ニルフィリアを匿い、デイクセリオにちからを貸した。この都市が、「定められた運命の外側」からの干渉をしていることは確かだ。経過観察は必要と判断している。しかし、この場に溶け込んでいる絶対の必要は無い。

だからこそ、その選択肢もありうる。

いつまでも理解でき無いことに構い続ける事なんてできない。捨て置いても問題の無いこと、そのはずだとウォルターは考えた。わからないから問題を放棄するなんて子どもじみたことだが、これが後を引くならば、ただ邪魔になるだけだ。

だが、現状のウォルターはそれでいいのだろうか。捨てて、それで？ もしくはそれを受け入れて、それで？ その先の戦略をどうするか。

……わからない

なにが、一番正しいんだ。

「……まあ、イオ先輩のことですし、何を言ってもむだでしょうけど」
深々と吐き出したフェリの一言。スツと細められたその瞳が、ウォルターを射抜いていた。

「……どうせ、こう言っても言うことを聞く気はないんでしょう？」

「それは……まあ」

「でしたらこれ以上話してもむだですね。……そろそろ隊長たちも一旦上がるようですし、わたしは着替えに行きます」

「……ん……、了解」

踵を返し、すたすたと足早に去っていく背を見つめながら、ウォルターは途方に暮れる。空を仰ぐように見上げれば、後頭部がゴツンとやや派手な音を立てて壁に当たった。

問題は減るところが増える一方だ。くしやりと前髪を掴んで、盛大に溜息を吐きだした。

(大丈夫、ウォルター……)

(ん……、あんま大丈夫じゃない)

(……だろうね……。……フェリ・ロスも好き勝手言ってくれるよ)

ウォルターが何も考えてないわけじゃないのに。

そういつてルウは不満そうに息を吐く。それに内心で苦笑を返して、だけど、と『言葉』を紡ぎだす。

(言われたこと、わからないわけじゃないし……。意地になってる、とは思……)

(……それはそうだよ)

(え)

(そんなの、初っ端からわかったことでしょ？ それは全部ウォルターの意地だって)

(……え、あ……う、うん……？ まあ、そうっちゃあ……。そう、だな)

(でしよ?)

どこか呆れたような声音でルウにあっけらかんと返され、ウォルターは言葉に困った。

ウォルターとしてはそういうつもりはなかったのだが、ルウはそう思っていたということか、と思いながら、どうするかなと呟く。

(何を?)

(このまま様子を見るか、この意地を通すことをやめるか)

(…ウォルターが、したい様にしていいよ。…でも、ウォルターが傷つくのは、絶対だめだからね)

(…:うん)

ルウは厳しい口調でそうウォルターに釘を差してくる。

わかっているよ、とは返し難い。ウォルター自身も、自分がよく無茶をしていることを自覚しているということもあるからだ。

ペタペタと水気のある音が聞こえ、ウォルターは音へ視線を向けた。

「…:ウォルター、調子どうですか」

「…:アルセイフ。…:まあまあ」

「そうですか。…:さつきはすみません、そこまでだめだと思わなくて」「別に、気にしてねえよ」

話しかけてきたレイフオンにあしらう様に言葉を返せば、どこか居心地の悪い様な表情で視線を泳がせた。それに気づきながらも何も言わず、そのままウォルターも視線を逸らす。

ニーナやシャーニッド、ハイア辺りも上がってきて、ウォルターとレイフオンの方へ歩を進めてきた。

「ウォルター、調子はどうか」

「…:まあまあ」

「そりやあ良かった。こいつが沈みきったら、うちの小隊の最強も廃るってもんだしな!」

「シャーニッド先輩…:別にこの程度じゃ、そういう事はないと思いますけど」

テンションの高いシャーニッドに対し、呆れたように言葉を返した

のはレイフォン。

レイフォンの言った言葉に対し、シャーニツドはやはりテンション高く「甘い!」と言い放つ。

「考えても見ろよ、四方八方敵なしのウォルターが、たかが水に怯えるなんて知られればさらに人気が増すに決まってるんだろ」

「:悪かったな、 たかが」 水程度に怯えて」

「わ、悪くないさ、ウォルター。誰だって苦手なもの1つや2つあるさ」

シャーニツドの言葉に嫌味つたらしく単語を強調して言えば、シャーニツドは肩を竦め、ハイアは慌ててフォローに入ってくる。

向こうから上がってきたナルキやダルシエナと言った女性陣もまた、プールから上がってくるとウォルターの様子を伺う。

「ウォルター先輩、調子はどうですか?」

「:ああ、まあまあ:」

「普段からたるんでいるからすぐに体調を崩すんだ。もう少し気を引き締めたらどうだ?」

ダルシエナの鋭い言葉に、ウォルターは苦笑を零す。どうやら少し前の練武館でのやりとりをやや引きずっているらしい。だがダルシエナが厳しい言葉をかけてくるのはいつものことで、ウォルターはあまり気にしないでおいた。

しかし、2人に対しても同じような返事を返せば、どことなく安堵したような表情を浮かべられる。

——— なんか、妙な感じ

なんとも言い得ない感覚をため息で吐き出しつつ、ニーナにどうするのかと問うた。

とりあえずは昼休憩らしい。ウォルターも着替えるべく、ようやくベンチから腰を上げた。

押し込める

昼食をとった後はまた午前と同じような活動を繰り返していた。

その間、ウォルターはテラスでアイスをひたすら食べていた。お腹下しそうだなと内心で適当な事をぼやきながらのろのろとしていたのだ。

プールの方で水鉄砲を使って水をはね散らかしながら動きまわるのを見て、ウォルターはばかに元気だなと思っていた。そう思いながら、いつもの鳶色が見えない事を妙だとも思っていた。

もうすでに幾つ目かわからないアイスを食べきり、ウォルターがスプーンを銜えたまま片肘をつき遠くを眺めていれば、テーブルに軽く影がかかる。

何かと思えば、目の前に立っていたのはレイフォンだった。

「…どうした」

「いえ…その。ちよつと、話したいことが、あつて」

少し前のように酷く口ごもる事はない。だが、やはりはつきりとはしない表情と様子だ。

視線が泳ぎ、ウォルターの視線と合致しない。声をかけてきた場所から動こうとしないレイフォンに、ウォルターはため息を吐き出しつつ少しばかり椅子を引いた。

「…座れ。首が痛い」

「あ、はい。…えつと」

控えめに向かいの椅子に座り、レイフォンは改まった表情でウォルターを見た。

それに気だるいとばかりに視線を返していれば、レイフォンが意を決した表情で口を開く。

「…あ、の。…僕…、ウォルターの事、いまは別に嫌いじゃないです」

「…は？」

いきなり言われた事に、思わず素っ頓狂な声を上げた。

レイフォンは俯いてテーブルの上において握りこんだ拳を見つめていて、ウォルターからははつきりと表情が見えない。

「…入学当初は、大嫌いでした。顔も見たくなくなかった。でも、ウォルターはウォルターなりに僕を気遣ってくれて、十七小隊のために尽くしてくれていて…、僕らのことを考えてくれてるんだ、ってわかっています」

あまりにも意外過ぎた言葉に、正直開いた口が塞がらないウォルターはただ眼を瞬かせて、レイフォンを凝視していた。

レイフォンはやはり握りこんだ拳を見つめていて、表情をうかがい知ることも出来ず、ウォルターはただ表情を隠す前髪を見つめるしかない。

「…僕のせいで、大けがを負わせてしまつて、本当に申し訳ないつて思ってます。メイシエンからも話を聞きましたし、隊長達からも聞きました。…だから、ずっと言えてなかつたんですけど、言わせて欲しいです」

「…何を」

「…あ…あ、あり、」

「…なんだよ…？」

「…あ、りがとう…」ぎいいます」

レイフォンの突然の礼に、ウォルターは思わず「は？」と返してしまつた。

威圧だどとつたのか、レイフォンが慌てて顔を上げ、ウォルターに弁解を始める。

「いや、あのですね！　じ、実は前々から言おうとは思ってたんです！

でも…あの、隊長とウォルターがいなくなつて、余裕がなくなつて、色々あつて…ウォルターが…」

だんだんと言葉が尻すぼみになっていく。叱られる子どもを見ている様な気分だ。

だがウォルターに叱る気なんてものは一切なくて、言葉を返すなら、「そうか」の一言だった。

「…だから、ちゃんと素直に言えなくて…、でも、言わなくちゃって、思つたから」

「それを、なんでいま」

「…それ、は…」

ウォルターの問いに口ごもり、言葉を転がすレイフオンをウォルターは睨め付けるように見た。

特に興味もないことだ、早く言えと。

「……僕は、そう言うつもりで言ったんじや、無かつたんですけど…、でも、僕が思いつく限りでは、僕のせいで、ウォルターが考えこんでいる様に思ったから、……です」

「…お前のせいだ？」

「僕が…ウォルターに、言ったから…かな…って…」
「何を」

「…ヒトでも、ハルペーに並べるなら、やっぱりヒトでも武芸者でもない、って…言った、から…」

レイフオンの言葉にウォルターが瞠目した。

あまりに的を射過ぎていた。確かにひっかかっていた言葉ではあったが、まさかレイフオンからそう言われるとは本当に思っていなかったことだ。

動揺したことに気付かれたのか、レイフオンは少し息を吸い込み、ゆっくりと吐き出しながら言葉を紡ぐ。

「…僕は、〃そういう意味〃で言ったわけじゃないんです。…いえ、〃そういうつもり〃で言ったんじやなかつたんです。……でも暗にはそういう意味にとれてしまう言い方をして…すみませんでした。僕が思っている事が本当にあっているかはわかりませんし、別にウォルターが考えている原因が違おうとしても、僕が謝りたい。……本当に、すみませんでした」

頭を下げたレイフオンに、ウォルターは喉の奥で詰まった息を吐き出すので手一杯だった。

「あの、本当、勝手だつてわかってます…！ でも、僕…」

「……待て、しゃべんな」

「…う、……はい」

ウォルターは思わず眉間を抑え、しゅん、と顔を伏せたレイフオンに構う余裕もなく盛大に溜息を吐いた。

吐いた言葉と溜息に、レイフォンは完全にウォルターが怒っているものだと思い込んでいるらしく、かなり青ざめた顔をしている。しかし、ウォルターは完全にそれどころではない。

「アルセイフ」

「……っ」

「……んだ、その情けねえ顔……」

盛大なため息と共に、ウォルターはそう言った。

レイフォンの神妙な顔を困り顔で見やれば、レイフォンはほんの少しだけ強張りきっていた表情を緩める。

「……怒ってねえよ、別に……」

「じゃあ……?」

「……ただ、少し……オレが、……分かってねえんだ。……かなり……その……こ、まってる……」

意外だ、という眼で、レイフォンはウォルターを見た。

ウォルターなら、そんな事はない。ウォルターなら、迷う事なんてない。

そう、思っていたのに。

それなのに、目の前のウォルターはどうだ? 戸惑いを瞳に宿して、レイフォンから視線を逸らしている。

確かに体調が悪いという事もあって、あまり見ない表情ではあった。だが、それでもこんな表情をレイフォンは見たことがない。

——……困惑、戸惑い……?」

ウォルターの表情にあるのはそれだった。

だが、レイフォンからすればどうしてウォルターがそんな表情を浮かべるのか分からなかった。

レイフォンは、自分自身がウォルターに言った言葉に非があると思っただけだから謝罪をするために来た。しかしウォルターはその謝罪に困ると言う。

何故? レイフォンに、その問いに対しての答えを見つけてはできない。

「……アルセイフ」

「はい…？」

「…そんな縮こまんな。…オレは、ただ…」

ゆっくりと、それでいてはつきりと。ウォルターは言葉を紡ぐ。しかし言葉は尻すぼみに小さくなっていき、結局はウォルターの口の中に収められてしまう。

ウォルターはどうやら、その先の言葉を口にしたくないようだった。だが、どうしてもレイフオンはその先が聞きたかった。

その表情に揺らぎが出たのは、きつとウォルターになにかあったはずだから。

ウォルターが自分のちからになってくれるように、レイフオン自身も、ちからになりたいと思った。

「…ただ…？」

だが、先を促してもウォルターは口を開こうとしない。

考え込んだように右手の甲を口元に押し付けていた。まるで、出さうになる言葉を押し込めるように。

不意に、左腕にはまった金色の腕輪が光った気がした。

「レイフオン、大丈夫か」

「た、隊長。…はい、すみません」

「気にするな。…ウォルターの方は…相変わらずか」

ニーナの言葉にレイフオンは苦笑し、ウォルターを見てまた苦笑した。

現時点では体調が悪い云々の問題ではないが、そう勘違いしてくれるなら都合だったウォルターは、ただ沈黙を選んだ。

レイフオンが調子悪いといって抜けたらしいことは、ニーナの表情からしてそうだろう。

後ろから来たナルキが、ウォルターに声をかけてきた。

「先輩は大丈夫ですか？ 午前よりは、調子戻りましたか」

「…まあまあ」

ナルキとはあまり仲がいいとはいえないものの、こういう時は配慮してくれるらしい。そこもまた彼女らしさなのだろう。ウォルターは気を使われているという状況に慣れず、肩を竦めた。

「オレは別に重病人とかじゃないんだ、普通に話してくれ」

「…そう言いながら、あなたの顔色が類を見ないほど悪いからみんな気を使うんですよ」

すでに來ていたらしいフェリの鋭い一言に、ウォルターは苦笑を返す事しかできなかつた。

逸らす

「……また……水……」

「今度はお湯ですよ？ ウォルター」

「そうそう、お前は動いてなかったって言ってもあんなくそ暑い中にいたんだ、汗くらいかいたろ。ちゃんと入ってけよ？ でなきや夜酷いぜ〜？」

「何を企んでんだ、何を」

「そ、そうぴりぴりしないさ、ウォルター……」

慌てて仲裁に入ったハイアを軽くひと睨みして、ウォルターはさつさと個室シャワーの方へ向かっていく。個室シャワーの扉を開けた際に、一瞬視線を感じ振り返ったが、こちらを見ている者は誰もいない。軽く息を吐き出しつつ力任せに扉を閉めて、ウォルターはシャワーのバルブをひねった。

お湯が頭上から注ぐ。お湯とは言え水にはあまり変わりがない。肌を伝う感覚に、思わず肌が粟立ちそうになった。

適当に髪に指を通し、湯を浸透させる事でそれを振り切ろうとする。

少し離れながらシャンプーをとって適当に泡立たせ、髪をぐしゃぐしゃと洗った。

（あーあ、またそんな風に洗って。痛むよ、髪）

（…気にしてない）

（言うと思った。いい髪質してるんだから、もつとちゃんとすればいいのにな）

（…早く出たいんだよ）

またシャワーに戻り、シャンプーを流す。俯けば、泡が排水口に流れていくのが見える。

ふと腕に視線を向ければ、軽く肌が粟立っていた。ため息を吐き、ウォルターはシャワーのバルブを閉める。

——…あんなにも前のことなのに、未だに引きずるか、才

レは

なかなか、こういうことをふっきるのが苦手らしいと気づいたのはつい最近だ。

あの黒鋼錬金鋼を捨てられない事も、そういう理由だろう。ウォルターは再びため息を吐いて、腰に巻いたタオルをぎゅつと縛り直す。と同時に、真上からそれなりに温められた水が降ってきた。

「っ…!? …ツエリプトン！」

「よお、しけたツラしやがって。早々に逃げやがったから先輩的な激励だばーか」

「ンだと…っ、……………はあ……、」

盛大に怒鳴ろうと思いきは吸ったものの、結局吐きたかった言葉は霧散させた。怒鳴った所で、この剽軽なお調子者は懲りないのだろう。

何よりもこのシャワー個室に、屋根がついていないことを恨んだ。

女子の個室は色々な問題を防ぐために完全防備だが、男子の方はそうではない。そのせいで前後左右は守られているが上下はから空きなのである。いくらプールに併設されているとはいえ、個人もへつたくれない仕様に、これが戦場なら防衛のがばがば加減にも呆れ以上に失笑するレベルだと、ウォルターは盛大なため息を吐きながら前髪を掻き上げる。

「あんたのせいで頭から足まで冷てえ」

「そりゃあよかった」

「よくねえだろ…」

「…お前、何を考えこんでるわけだ？」

シャーニツドの包み隠す気もない言葉。ウォルターは顔が見えないことをいいこととして眉を寄せた。きつとこの表情を見られたら嫌な顔の1つや2つされただろうが、幸い顔はお互い見えない。

「…色々」

「色々ね。そうか」

「…ンだ…、根掘り葉掘り聞かれんのかと思った」

「聞いて欲しいか？」

「嫌だね」

ウォルターがぼつさりと切り捨てれば、シャーニツドはからからと壁越しに笑った。

「そう言うと思ったぜ。…ま！あのウォルターが『別に』とか『関係ない』って言わずに『色々』っていうだけ進展かなと思つてな。それ以上聞かないでおいてやる。…今日はな！」

「明日は聞くのかよ…」

「日付変わったらすぐだ！」

「叩き起こす気か」

はた迷惑な、と溜息混じりにバルブをひねった。シャワーの湯が再び頭上から注がれる。

シャーニツドは特に気にした様子もなく、わしゃわしゃと髪の毛をかき回す音が聞こえた。

「ま、冗談はおいといてだな。お前を悪くいうつもりはねえが、あまりそう抱え込むなって話だよ。ニーナも同じきらいがあるしな」

「あいつと一緒にすんな。…つか、あんたからそう言う話聞くと気色悪いんですけど」

「はっはー、おれも同じだぜ！」

「じゃあ言うな…」

軽快なシャーニツドの答えにまたため息を吐く。一体この先輩は何を言いたいというのか。

「そーいや、レイフォンがやたら気にしてたぜ、お前の事」

「オレは、別に気にしてねえ」

「お前が怒つてねえつてことは分かったみたいだが、理由は知りたいたろうしよ」

「…言う気はねえぞ」

「そうだろうな。…けど、お前がおれらのちからになつてくれた様におれらだつてお前のちからになりてえの」

「あんたらに…何かしたか…？ オレ…」

首を傾げ、小さく呟いた言葉はシャワーに掻き消され聞こえなかった。

ウォルターがシャワーのバルブを思い切りひねり、お湯をこれでもかとかぶる。少し間を置いてバルブを締めると同時に、シャーニツドの声が聞こえた。

「おれは、お前がデインとの戦いの時おれに配慮してくれたことをありがたく思ってる。シエーナと戦わせてくれたこと。…だからおれだって、お前にそれなりの礼がしたい」

「…そうかよ」

一瞬、動揺した。声に動揺が出ないよう細心の注意を払いつつ返事を返した。どうやらこちらの動揺は気づかれていないらしい。ウォルターは小さく安堵の息をこぼした。

いそいそと隣に戻ったらしいシャーニツドがけらけら笑い、声を聞きつけてきたらしいレイフォンとハイアの声が外で聞こえる。

「ウォルター、…大丈夫ですか」

「…お湯は、それなりに」

「おれは無視かよレイフォン」

「シャーニツド先輩、いなくなっと思ったたらここにいたんですか…」
「ひつでえ！ おれが頑張って後輩を元気づけてたって時にこの後輩！」

「そう言われましても…」

レイフォンが苦笑する。シャーニツドが隣のシャワーから出る音が聞こえ、ウォルターも同じ様に出た。未だ、レイフォンやハイアの疑った様な視線に、ウォルターは盛大なため息を吐く。

三人の視線から逃げるように視線を逸らして、脱衣所の方へ向かった。

脆い虚勢

「…で…隣の状況は？」

「音聞いている限りじゃ、芳しくないさ」

レイフオンは都市警察の方へ移動し、こんな時にシャーニツドはどこかへ。

ウォルターとハイアは壁に背を預けたまま、盛大にため息をこぼしていた。

「つとに…アルセイフはしようがないとは言え、あの変態にも困ったもんだな」

「せめて先輩って呼んでやるさ、ウォルター…」

少しばかり困った表情を浮かべたハイアがそうこぼし、ウォルターがそんなことは知らない、と返す。ハイアとウォルターの会話では至ってよくあることである。

とにかくウォルターが黒鋼錬金鋼、重晶錬金鋼を取り出して復元した。

「レストレーション」

黒鋼錬金鋼は刀へ姿を変えた。重晶錬金鋼から散らばる念威端子が宿泊施設を包囲する。

そう、現在起きているのは人質事件。

しかも現場は隣の女子浴場の方で、その場所にはニーナやフェリ、ナルキ、ダルシエナと言った十七小隊とミュンファもいた。

念威端子から伝わってくる情報をまとめると、どうやら脱衣所中央に全員集められ、座らされているらしい。ニーナ達武芸者の錬金鋼はすべて没収され、周囲を人質犯達に囲まれている。

「…ミュン、大丈夫か心配さ」

「とりあえず武芸者なんだし、そこまで心配する必要もねえだろ」

「そりゃ、そうだけどさ…」

ハイアが眉をよせてため息を吐く。

現在錬金鋼の携帯が許されていないハイアに錬金鋼はない。持つ

ことも許されない。

持てばそれこそすぐに強制退去、剄を使っても強制退去、そう言う取り決めになっている。

何もできることがない訳ではないが、錬金鋼を持っている時よりは確実にできることが少ない。

素手で錬金鋼と渡り合うことは不可能ではない。ハイアの身体能力を持ってすれば、そこらの学生武者ならば余裕で勝てる。それはもちろんのことで、並の武者者ならばそれなりになんとかなる。

だが今回は複数犯の上、それなりに強い武者者のようだった。そのため、ウォルターも慎重に動いているのだ。

「さて、どうするかね」

そう口にしつつ、ウォルターが口角をあげた。

その表情を見て、ハイアがきよとんと眼を丸くする。それに気づいたウォルターは首を傾げた。

「なんだよ、ライア」

「え？ ……あ、いや…その。…久々に、そんな表情見たなって、思っ
て…さ」

「……そ…うか？」

そういえばそうだったかもしれない。

色々考え込んでいたことや、こういった事も無かった事があり、確かに言われればそんな気がしてくる。

実際に指摘されると妙な気分になり、ウォルターは表情を引き締めた。

「とにかくだ。突入作戦はさっさと決行する。位置の把握は出来る。サポートは任せろ。お前は手前を潰せ。奥はオレが」

「了解さ」

「そーいや…わかってると思うが、剄は使うなよ」

「剄が使えなきや戦えない様なやわじやないから大丈夫さ」

にやりと笑ったハイアが重心を落とす。ウォルターも同様にして女子浴場の入り口、両サイドの壁に背を預け、視線を交わすと同時に突撃した。

扉をウォルターが蹴り飛ばし、中央でしゃがんでいた女子達の頭上を扉が舞う。背後にいた男に扉の縁が当たり、のけぞる。扉が女子群の上の落ちる前にハイアが踏み込み、扉をさらに蹴り飛ばした。

男達の反応も早い。鍊金鋼の銃口がハイアを捉える。引鉄が引かれようとする。だが、それよりも早くウォルターが踏み込み、黒鋼鍊金鋼の刀が銃口を切り裂いた。

黒鋼鍊金鋼に刃が奔る。

外力系衝剄を變化、喰劍^{はけん}。

「つちよ……」

ハイアが慌てて屈んだ。

振るった刀から放たれたウォルターの剄技は、ハイアの首があった位置を通りすぎて人質犯に命中する。そのまま活剄で脚力を強化し、懐へ踏み込む。鳩尾に柄尻を埋め、昏倒させた。とりあえず全員終わったか、とウォルターは辺りを見渡す。

「あ、危ないさあー！」

「おーわりいな

「…謝罪に誠意が見えないさ…」

「いつものことだろ」

「……そうさね」

ため息混じりにハイアは頷き、しようがないとばかりに肩を竦める。

中央に集められていた女性陣の中に見知った顔を見つけ、ウォルターが肩を竦める。ハイアはミュンファの方へ寄って行っていた。

都市警察がようやく到着し、犯人たちをまとめている間、ウォルターは違和感に気づいていた。

（…ルウ、見られてるか？）

（うん、ずっと先。……領域広げてみようか？）

（…いいや、いい。…この視線、今日一日中ずっとだな）

時たま感じていた視線は、今になってずっと感じる様になっていった。

一体誰なのか、見当がつかないわけではないが付けたいわけでもな

い。
ひとまず放っておくこととし、ウォルターはレイフォン達の方へ向かった。

「でだ」

ようやく事態が終息し、聴取が終わった頃にはすっかり夜は更けていた。

ニーナはややその表情に疲れをにじませながらも、何故か十七小隊とハイア、ミュンファを外へ集めていた。その片手にはバケツ。

「何だ？ バケツもって…悪いことでもしたのか」

「そうじゃない」

呆れた顔でニーナが腰に手を当てる。バケツには水が入っていたらしく、中でばしやんと水の跳ねる音がした。

姿の见えていなかったシャーニツドとレイフォンが、何やら手に袋を持っていた。

その袋をやや凝視して、その中身にウォルターは気づく。

「…花火？」

「よくわかったなウォルター。今日、旅館の人に頼んでおいた。さっきの事件のこともあって増量してくださいましたぞ」

「へええ、オレとライアの功績だな」

「ロケット花火もあるぜ、祝って打ち上げるか？」

「あんたの顔面に向けて打ち上げてやろうか？」

「大惨事免れないのでやめてください」

ウォルターとシャーニツド、レイフォンの掛け合いに、ニーナはやりわりと笑う。

ニーナが持っていたバケツを勢い良く地面に置き、レイフォンとシャーニツドは花火の袋をあけた。

「よし…じゃあ始めよう！」

ニーナのその言葉を合図に、皆がそれぞれ、花火を手にとった。

シャーニツドが派手にネズミ花火を放り投げた。

火薬を包んでいた紙が地面に飛び散り、火花を上げながら目の前にいたレイフォンの方へ跳ね回りながら向かっていく。その光景にレイフォンが小さな悲鳴を上げながら退いていった。

ハイアはそれを笑いながらシャーニツドに加勢し、さらにネズミ花火を放り投げる。派手な爆発音が鳴り響き、レイフォンがハイアに怒鳴る。

女性陣はというと、隅のほうで噴射型の花火で遊んでいた。ニーナが噴射型を四本持ちして振り回しているのを、ナルキとダルシエナが若干距離を持って眺め、フェリとミュンファは屈んでロウソクの周囲で花火を頼んでいた。それぞれ楽しんでいるらしい。

ウォルターは1人少し離れた場所で階段に腰掛け、1人線香花火に火を灯していた。

(花火ねえ。結構マイナーなのによく貰えたな)

(そうだね。…ウォルターはなんで線香花火選んだの?)

(んー…なんか、いいかなって)

考え事に耽るには。

火を付けて、持っているだけの線香花火は考え事をするにはうってつけだった。

視線の感覚は消えていないが、特に異常もない。

だがそれ以上に考えに耽りたかった理由は、ウォルター自身にあった。

——ルウに言われ、アルセイフに気を使わせた

ただの意地だと。今回のことを。

——ライアも、違和感を持つてる

それなら、ウォルターの“これ”は、間違っていると言うのだろうか。

ウォルターの指先に摘まれた線香花火の先が膨らみ、ぱちぱちと火花を立て始める。

——アントークも、エリプトンも、ロスも。……あのマテル

ナやゲルニまで気を使う

だが、それでも通したい意地だ。

変わらない事を続ける。これ程までに難しいとは思わなかったが、それでもやるしかない。周囲にはくだらないと言われても、ウォルターにとつては続けるしかない意地だ。

すべての目的を達成させるために。

——それなら、迷う必要なんてないのかもしれない

例えどう言われても、続ければいい。この姿勢を。自分の意地だ。

ただ意地を張っていればいい。今まで通り。ルウはわかってくれている。理解者はいら。ずっと、一緒にいてくれる。

——ああ、なんだか昔のルウみたいだ

悪く言うつもりは無いが、かつてあの隻眼、そして楽土と動いていた時のルウは、ウォルターと居る為という理由で動いていた。ずっと、一緒に。

それを否定して今ここにいる自分が、似通った考えをするとは。

ウォルターは苦笑を零しつつ、火花を散らす線香花火をジツと見つけていた。

(続けること、ルウは、ダメって言うか?)

(…僕自身は、ウォルターが無理をすることになるから、あまりして欲しくない。でも、ウォルターがそうするって言うなら、協力するよ。ウォルターの気が済むまで)

ゆっくり、それでいてはつきりとしたルウの主張に、ウォルターはふと、その『意地の終着点』を考えて、遠くを見た。

その意地は一体いつまで通せばいい?

月が崩れ落ちるまで? 自立型移動都市が減ぶまで?

世界の終わりが来るまで? すべての終わりが来るまで?

ルウはそれをわかっている。

いつまで通せばいいのかを考える時点で、ウォルターはその終わりが来ることを望んでいるのだということ。ただそれに目を向けずそらし続けているだけなのだ。

(……もう少しだけ、続けてみる)

(…そっか。うん。わかった。無理は、しないで)

そしてルウはそれが虚勢だと知っている。けれど、それをやめると言うこともできない。

けれどその変革は、ルウが最も望まないことを起こす引き金となる。

ウォルターが他人に目を向ける様になる。

この世界で、目的のために孤立を選んだ彼が目を向けてくれる存在が、自分だけではなくなる。それは、ルウ自身がその他大勢に含まれることを暗に示唆していた。

けれどウォルターは変わることとを恐れている。これはルウに、彼がずっと自分だけに目を向けてくれるという最良の状況だった。それをみすみす手放すような真似はしたくない。

けれど……

——もしウォルターが、それを望むなら、僕は……

変わったとしても。彼の志は変わらないだろうから。その志が、最もルウが共にいたいと望むウォルターのあり方だろうから。

——僕は……

ルウが『中』で拳を握ったと同時、ウォルターの摘んでいた線香花火が地に落ちた。

存在の変革

人は絶えず変わっていくものだ、みたいなことを、たまに映画やドラマで言っているような気がする。

誰かの為とか、何かの為とか、その他云々の理由で。それは家族だったり、友人だったり、恋人だったり、はたまた地域、社会、あるいは世界の為に変わると。

そしてそんな性格や気質的なものではなく、それ自体としても個人は変わっていく。身体であれば細胞は絶えず変わっていくし、違う食物を取り入れて別のものからエネルギーを得る。あるいは新たな技術を身につけて、今まで持っていたものを捨てたかもしれない。またあるいは、今まで捨てていたものを拾ったかもしれない。

それらを継ぎ足して出来ている存在は、果たして同じだと言えるのだろうか。

昨日と今日では既に細胞から違う身体、かつて意志を持った時とは違う身体で、違う思考で、はたして『それ』は同じ存在であると言えるのだろうか。

『ウォルター・ルレイスフォーン』は、かつてそうあり続けた『ウォルター・ルレイスフォーン』であると言えるのだろうか？

けたたましい警鐘な鳴り響いた。

甲高い悲鳴にも似たその警鐘は、ツエル二に汚染獣が接近していることを告げていた。

窓の外が騒がしい。一般生徒達が、武芸科の指示に従って動いているせいだろう。都市が地鳴りのように震え、揺れている。そんな状況の音を、ウォルターは一人ベッドの中でボーッと天井を見上げて聞いている。

「…うるさい…」

(しようなないよ。汚染獣が来たみたいだからね)

「あー…そうだと思った…。今度はなんだ？　また母体の上通ったか？　踏み抜いた？」

(ううん、近くに廃都市モドキがいて、そこからこっちに向かってきたみたい。雄生体が多いね)

「うえー…絶対呼び出されるヤツだ…」

ルウが淡々と告げた事実には辟易しつつ、盛大に溜息を吐き出してウォルターはベッドに潜った。しかしこの揺れはまだしも、警鐘が大音量で鳴り響く中寝られるほどウォルターも凶太くはない。ベッドに潜り込んだのはささやかな抵抗だった。

目を閉じて知らぬ存ぜぬを決め込んでいると、玄関の扉が強くノックされる音が聞こえ、しばらく叩いているなど思っていたら、怒声が聞こえてきた。

「いつまで寝てるんですか、ウォルターツ!!」

「ウォルター！　招集かかっているさく!!」

外から聞こえてきた声の人間が誰かを考えるほど、ウォルターも寝ぼけていない。再び大きなため息を吐き出して、無理矢理上半身を起こした。

「引き摺り出し係がガチじゃねえか…全力で連れていくヤツらじゃん…起きたくない…」

(そうやって言いつつも、ちゃんと律儀に起き上がってるウォルター好き。僕も不本意だけど頑張ろ?)

「ん…励ましてくれるルウ好き…ぐう」

(あつ、だめだよ寝直しちゃ。起きてく)

ウォルターがうつらうつらと船を漕ぎだしたのとほぼ同時、ボン、とド派手な音がして、その後金属が床に転がる音が聞こえた。

嫌な予感がしてのそのそと玄関へ通じる廊下へ向かう。ウォルターが見たその先には、べっこりと大きなへコミをつけた、かつて扉だった鉄の塊が廊下のフローリングの上に転がっていた。二転三転したらしく、フローリングも何箇所か大きなへコミが出来ている。

「…アルセイフ…」

「おはようございます、こんにちは。休日とはいえもう昼過ぎですよ。」

…何やってんですか」

「まさか本気で蹴破るとは思わなかったさ…」

「僕はいつだって本気です。…だいたい、ハイアと二人で駆り出されて苛立つてるっていうのに、ウォルターがいつまで経っても出てこないから悪いんですよ」

「そりゃこっちのセリフさ。元々おれっちが頼まれたっていうのに、後で食いついてきて行くって言ったのお前さ〜」

「ウォルターの為に労力をかけるのも面倒で嫌だけど、ハイアがドヤ顔で頼まれてるのもムカつく」

「…本当にガキさ…」

ハイアは深々と溜息を吐いてから、ウォルターに視線を向け、硬直した。その表情の変化に気づいたレイフォンが、怪訝な目でハイアを見た。

「なに?」

「……スウェット着てる……」

「そりゃウォルターだってスウェットくらい着るでしょ」

「しかも紺蒼のボーダー柄…」

「…部屋着によくある色と柄だね」

「……絶対暖色の方が似合うと思うさ」

「さり気なく自分の色推してきた。うっわ引く」

「赤!! 赤か紅!!」

「必死さがまた怪しいんだけど…。というかなにそのアイドルの私生活覗いちちゃってイメージとズレてたファンみたいな反応」

「……絶対小隊のファンに、お前同じこと言われるさ」

ギャンギャンと蹴つ飛ばした扉をとやってきたウォルターをそのままに言い合う二人に、ウォルターは盛大に溜息を吐いて口を開いた。

「…随分盛り上がってるが、うるせえし、オレ寝室に帰っていいか?」

「駄目です」

「駄目さ〜」

「ンでお前らそういうところは息ピッタリなんだよ…」

「不本意だけどしようがないのさ。ほら早く着替えてくるさ」

「…行くことは決定してんのか」

はああ、と再びため息を吐いて、ウォルターは着替えの為部屋に戻る。

リビングでは未だ二人の言い合う声が聞こえて、よくやるよとため息を吐き出しつつ、クローゼットを開けた。

「どうやら近くにある都市が汚染獣に襲われているようだ」

カリアンが口にした事実は、ルウから聞いていた為に驚きはなかった。

生徒会長としての椅子に腰掛けたカリアンの前にフェリを除く十七小隊、ハイアとミュンファを加えた面々で並ぶ中、ウォルターはあくびを噛み殺す。眠気が勝ってきたウォルターが、結局噛み殺せなかったあくびをしつつ口を開いた。

「そういえば、ロス妹はどこに行った？」

「フェリなら先に移動している。探査の為に先行して動いてもらっているからな」

「ふーん…」

「おれ達もこれから移動か、せつかくの休日だったんだがな」

「シャーニツド、まだそんな事を言っているのか」

ジロリとダルシエナがシャーニツドをひと睨みすると、シャーニツドは肩を竦めて苦笑を零す。特に緊張した雰囲気のないレイフォンに、強張った表情のナルキが声をかけた。

「レイとんは怖くないのか？」

「うーん、流石に慣れてるからね。大丈夫だよ、基本僕らが先行するから、援護よろしく」

「あ、ああ…」

あっさりとしたレイフォンの口ぶりに、ナルキはほんの少し視線を泳がせた。

そんなレイフォンの緩い表情に、ハイアは不満げに口を開く。

「気は緩めんなさ」

「うるさい。お前に言われなくてもわかってる」

「ふーん？　ならいいけどささ？」

「何が言いたい」

「別に？」

「ハ、ハイアちゃん、そんな言い方しちやだめだよ」

「ミュンはわかってないのささ、コイツほっとくと絶対調子乗るタイプさ」

腕を組みつつそう言い放ったハイアにミュンファは困り顔で視線を向ける。レイフォンはムスツとした顔でハイアを睨みつけた。面々はまたか、という顔で息を吐き出す。

「お前ら…そろそろやめないか…。何度同じことをするんだ…？」

「……ハイアが喧嘩売ってくる限りは……」

「……コイツがいる限りは売るささ……」

「…なんですかその理由。ハイアがさっさとツエルニから出ていけば良いと思うんですけど？」

「おれっちが言ってるのは都市からって話じゃなくて目の前からって話だけだよ？」

「お前らうるせえ」

ウォルターが再びあくびをしつつ言い放つと、二人してウォルターに視線を向けた後、そっぽを向く形で收拾した。ニーナがチラリとウォルターに視線を向け、なにも言わずカリアンへと視線を戻す。

「生徒会長、わたし達は準備ができ次第出撃します」

「ああ。よろしく頼むよ」

「はい。…出撃準備をすろぞ、各自キッチンとするように」

ニーナの言葉に従い、各自行動を開始した。

存在の変革 ― 2

ランドローラーの整備を終わらせ、ウォルターは運転席に腰掛けてぼーっとしていた。

シャーニツドがダルシエナと会話をし、ナルキは何か用があったのか、ニーナの方に歩いていく。レイフォンはフェリ、ハーレイと一緒にいる。おそらくレイフォンの鋼糸は通常使えないように設定がされていることから、それ絡みのことだろう。ハイアとミュンファは、それより離れた場所でツエルニの戦闘衣に着替え、お互いにチエツクを済ませていた。

(汚染獣かー…)

(どうしたの？ 何か不安でも？)

(いや、そういうことじゃないんだが…、…汚染獣って、あんまり楽しくなくてな)

(こーら。ダメでしょそんな風に言っちゃ)

(せっかくなら楽しい方がいいのに…)

汚染獣は老生体になれば奇妙な攻撃を繰り出してくる事がある。しかしそれは対人間の戦いの時程の巧妙さはない。戦いになれば、圧倒的に対人間の方が変調で、切り詰められた白の世界を生きる事が出来る。汚染獣にはそれが無い。あれはただ外敵を殺す為に攻撃をするだけで、裏の読み合いを繰り返した一撃を繰り出すこともなく、出来もしない。

(つまらないな)

(まあまあ。そんなに考えなくてもすぐ終わるよ)

(…だったらいいな…)

ルウの言葉に内心で小さく頷き返しながら、ウォルターは軽く息を吐き出した。

「ウォルターっ！」

「ぐっ」

うつかりしていた。コイツはこういうやつだった。

ウォルターは後ろから突進してきた明るい短髪の揺れる頭を軽く

叩く。

「いてえ、なにすんだ」

「いや…、背中ががら空きで、つい、いたずら心が」

「ほお、オレが隙だらけだと。いい度胸だな」

「い、いたたたた！ 痛い！ 痛いさウォルター！ 頭拳でグリグリ

しないで欲しいさー！」

しばし両拳で圧力をかけていたが、痛いの声も聞こえなくなったので流石に止めた。パツと離すとハイアがか細く

「…痛い…」

と言いながら頭を擦りながら屈み込んでいた。

自業自得だと声をかければ、威力が違ったと若干涙目で返される。

屈み込んで頭を擦るハイアの背が丁度いい高さにあつた為、ウォルターが適当に腰掛けてブーツとしてしていると、レイフォンがこちらへ歩み寄ってきた。

「ざまあないですね、ハイア。…：今回は特攻要員が僕とウォルターとこのバカなので、ランドローラーが一緒になりました。その次に隊長、ナツキ、ダルシエナ先輩、後続にフェリと…：ミュンファさんだそうです」

「…お前本当、おれっちには容赦ないさね」

ウォルターは一言レイフォンに返し、立ち上がるとハイアの首根っこを掴んで、ランドローラーのサイドカーに放り込んだ。どちやつと落ちたハイアが痛いと騒ぐが、ウォルターは知ったことじゃないと知らん顔で無視を決め込む。

「と言うか待ってください、僕とハイアをサイドカーに詰め込む気ですか」

「ほかになんかあんののか」

「嫌です。断固嫌です」

「オレはお前の運転は絶対に嫌だ」

「…じゃあ間とおれっちが運転するさ」

「…仕方ないですね」

盛大なため息を吐いたレイフォンが渋々承諾し、ウォルターも同様にため息を吐いて承諾した。

ランドローラーが荒れた大地を疾駆する。

整備されていない荒れた大地、汚染物質の蔓延した大地を噛むタイヤが小石と砂を撒き散らしていく。サイドカーに二人乗りしているウォルターとレイフォン、運転席で操作するハイアの元に、後ろから念威端子が近づいてきた。

(通信状態はどうですか)

「フェリ。良好ですよ」

(ならいいです。いいですか、その先に雄生体がおよそ30体。その先、都市にいる汚染獣についてははっきりとした把握はまだ出来ていません。しかし、おそらく都心部まで汚染獣は進行していると考えられます)

「……つまり、廃都市」

(…はい。ですが、生存者がいる可能性もありますので、搜索を怠らないようにしてください)

「分かりました。…とりあえず…僕、と…ウォルターは鋼糸が使えますけど…ハイアはどうしますか」

「そりゃ、食ってかかるしかねえさ」

「……アルセイフは鋼糸、ライアは援護しろ。先行はオレがする」

「えっ、ウォルター!？」

サイドカーの縁に足をかけて立ち上がる。レイフォンとハイアは困惑した顔でウォルターを見上げていた。

「ま、待ってください。勝手な先行は、」

レイフォンが反論しているが、ウォルターの耳はもうその音を拾おうともしていない。荒れた大地に吹き荒れる暴風、その中心に、この世界に跋扈する覇者がいる。

汚染物質の臭いはしない。ルウの拒絶のおかげだ。吹き荒れる暴風は、ウォルターの髪を揺らすのみであり、死を纏う粒子は滞留し過

ぎ去っていく。知性の無い、本能的な飢餓を宿すその複眼がギョロリとウォルターの立つランドローラーを捉えようとしていた。

サイドカーの縁を蹴りあげ、跳躍。活剷で身体能力を向上させる。ランドローラーは跳躍の反動でグラついたが、体勢を立て直した。ランドローラーが先を行く。レイフォンとハイアの困惑した眼がウォルターを捉える。

踏み出す。

足裏に剷を圧縮、地面を弾く動作に合わせ、爆発させる。ランドローラーを跳躍で越え、もう1歩で汚染獣達の手前まで踏み込む。

左手首の腕輪が溶けるようにその有り様を崩し、ウォルターの右手の中で形を織り成し、顕現した。

ウォルターの右手の中に顕現した刀が剷を帯びる。踏み込んだ先には汚染獣。跳躍と加速の爆音で汚染獣達は既にこちらに気づいている。その獰猛な複眼で確実にこちらを捉え、がちがちと音を鳴らしながら粘つく口腔を晒し、この肉を捕えんと欲する。

柄を強く握り込む。踏み込む。

外力系衝剷を変化、喰剣。

振り切った。

振り切られた刀が描く剣線に沿った剷が放出され、轟と周囲の風を巻き込みながら加速する。剣線に沿って放たれた剷は眼の前にいた汚染獣の口腔を切り裂き、前方へと飛来し薙ぎ払っていく。

汚染獣の体液と肉片を撒き散らしながら剷が過ぎ去る。汚染獣達が衝撃波で体躯を揺らしたその一瞬に、左足を軸に旋回、回転しつづ次の剷技を放つ為刀に剷を収束させる。背後に汚染獣の第2波が迫る。再び、ウォルターの背丈を超えるその口腔が晒された。

外力系衝剷を変化、叉龍。

振るわれた勢いに乗せられて放たれた剷は、その勢いのまま汚染獣へと衝突する。その瞬間、衝剷へと変化し汚染獣の身体を切り裂いていく。それは引きちぎるとも、削るともいい難い破壊の衝撃だった。汚染獣の死骸の下から抜け、ウォルターは地面を弾き体勢を低くして加速すると跳躍、一足先にその都市の全貌を見た。

都市で最も高い尖塔。その上に取り付けられた、煤に塗れ紋章の霞んだ旗。茨と石を図式化した、剛毅で荘厳な紋章。

「……暮畔都市、ローフォード」

そう零した。

かつて訪れたことがあったような。そう考えたところで、ウォルターの下方から、がちがちと牙を鳴らす音が聞こえる。ウォルターは身を翻すと再び刀に剄を通した。

外力系衝剄を変化、夜叉。

振り切られた刀から降り注いだ散弾が汚染獣を貫き、ただの塊として荒れた大地へ叩き落としていく。ローフォードの脚部を上がってこようとしていた汚染獣にもその散弾は直撃し、次々と死骸へと化していった。

「…もういいか」

外縁部に着地したウォルターは、都市外部をザツと見渡して、汚染獣の生き残りがさほどいないことを確かめてから、こちらへ疾駆するランドローラーへと視線を向ける。ハイアとレイフオンのランドローラーを先頭に、いくつかのランドローラーがローフォードへと向かっていた。

ウォルターは踵を返すと、都市中央部へ向かって歩き出した。

中央へ向かうにつれ、汚染獣の数は増えていた。本来であれば外縁部の方が多い筈だが、と考えつつウォルターは向かってくる汚染獣を薙ぎ払いつつ先へと進む。

(ウォルター、大丈夫？ 疲れてない？)

「……ああ、へいきだ」

剄を使った事や戦闘から多少の倦怠感はあるが、さしたる問題もない。ウォルターは刀の形状を解き鋼糸へと変化させると、都市の中央部へ向けて詮索を開始する。

「……やっぱり、中央部の方が多いな」

(うん。この都市はもうダメだね。どうやら都市中央下部から狙われたみたいだ)

「自律移動型都市に住むヤツらからしたら、悪夢みたいな話だな」

(本当に。まさか、いきなり心臓部を潰されるなんて思ってなかっただろうし)

「……まあ、災難だったって事で」

簡潔にそう言い放ち、ウォルターは息を吐き出すと跳躍した。

前方に多くの汚染獣がいる。その群れの中央に着地すると、跳躍のうち鋼糸にしていた形状を戻していた刀を構え、抜刀の型。右足を軸に回転。

吹き荒れた衝撃波の暴風は汚染獣を切り裂き、ウォルターを中心として体液と肉片を撒き散らす。刀についた体液を振り払い、鞘を顕現させると納刀した。

「……はあ」

(大丈夫？)

「うん？ ……ああ、大丈夫」

(……大丈夫じゃないでしょ、ウォルター)

「……大丈夫だよ」

少しばかり厳しい声音のルウに、ウォルターは襟髪を触る。足は中央部に進め、先へと歩いていく。

そんなウォルターに、ルウは軽く息を吐き出して、口を開いた。

(あのね、ウォルターが思ってる以上に、ウォルターは大丈夫じゃないんだよ。…わかってないでしょ)

「…わ、かってるよ」

(嘘。絶対わかってない。だってわかってたら絶対いまみたいになっ
てないでしょ)

「……協力するって言ってくれたじゃん」

(もちろんするよ。でもね、ウォルターがあからさまに無理してるっ
てわかってることに進んで協力できないよ。だって、そうじゃな
きゃ、ウォルターが辛くて苦しい思いをしちゃうんだもの)

「し、してない、オレはしてないぞルウ」

(ほらしてるじゃん…。もお、ウォルターってば…)

「…してないんだ、本当に。本当だよ」

(……だったら、もつと明るい顔してよ。ニルフィリア・ガーフィート
に言われる前みたいになさ)

ルウの言葉は耳が痛い。苦笑を零し、ウォルターは息を吐き出し
た。

ウォルターはずっと自身が変わる訳が無いと思っていた。けれど
薄々わかっていたのだ、自身が変わってしまったている様な感覚が。変
わるわけが無いと思っていた。自分は変わっていないとそう言い聞
かせていた。だから大丈夫だと思っていた。

なのに、いぎニルフィリアに言葉にされてしまったら、揺らいでし
まったのだ。

だから恐れたのだ。

「ああ、自分はこんなに弱くなってしまったのだ」という事を。嘆
かしいことだ。

きつと亜空間で暮らしていた頃に流行っていた戯曲にある悲劇の
主人公なら、どれだけこの事実が嘆かわしいか、悲劇的かを語り、歌
い上げるのだろうかとどこことなく考える。

けれどウォルターにその選択肢は無い。

ただそれを内包し、語る事なく、ただ目的を達成する為だけに、黙々

と行動を起こしてきた。

なのになんだ？ この体たらくは。

自ら決めた有り様すら揺らぎ、意地を通しきることすら揺らぐ。

なんとしても目的は達さなければならぬ。それがこの場所にいる理由なのだ。

ウォルターが決めたものであろうとそうでなかろうと、しなければならぬのだ。圧倒的なちからと運命とでもいうその引力が、ウォルターをその道筋に縛り付けている。

——どうあっても、オレは、絶対に“できない”で終われる存在じゃない

たとえば、すべてを踏みしだいたとしても

グツと拳を握り、息を吸い込んで、吐き出す。

「できるよ、そのくらい」

(僕の前でできるのは知ってるの。…レイフォン・アルセイフとかの
その他大勢の前でだよ)

「…それは、ちよつと…」

(ちよつと?)

「………苦しい、かな」

(………そうやってつっけんどんに接しようとしてるからじゃないの
?)

「…前もそうだったろ?」

キョトン、とウォルターはルウに問うた。

『箱』の中で、ルウは腕を組んで小さく唸る。

(うん、ごめん。そうじゃなくって…)

「…あー…意識してってこと?」

(まあ、うん。そう)

「でも、変わらないだろ。…いざって時は俺が守るって約束したんだ。
…サヤだろうと、この楽土だろうと」

(うん。………でもさ、ウォルター。それって本当に、ウォルターがそこ
まで苦しまなきゃだめなの? ……僕は納得いかないよ。ウォルター
ばっかり、こんな辛い思いするなんて)

「……俺は大丈夫だよ。オレはここに立てる。サヤを守り、イグナシスを殺す為。その為にディックが狼面衆を潰し、ニルフィリアがツエル二で準備を進め、オレがすべてを確立させる盾と矛になる。…それは、あいつらと目的を共有した時に既に決められたことだ」

強く、それでいて吐き捨てるような言い方に、『箱』の中でルウはあからさまに眉を寄せた。

その目的が、ウォルター自身で決めたことではない事を、ルウもまた、いいや、おそらくウォルターよりもはつきりとわかっている。

その目的に対する、ウォルター自身の思いがないのだ。

世界を救う。楽土を守る。あの死神との約束を果たす。

そういったウォルターの言う目的は、すべて決められた事柄だ。

それをやると決めたのも、その為に動くのもウォルターの意思、そのために考え、行動する。時には強硬手段も行う。だが、その目的に対して、『ウォルターが本当にしたいこと』はない。場と状況の為に決められた事柄を遂行するという目的は、ウォルターにとっての『したいこと』というレッテルを有さない。

そして、それは世界を救うなんて大仰な意味を内包してしまった。いつイグナシスが現れるか、いつあの月が崩れるか、いつこの状況が瓦解するのか。果てしない年月と消えていく友人達を見ながら、ウォルターがその決断を下し、継続を決意した瞬間をルウは知らない。

——そしてきつと、キミを意固地にさせている要因は僕にもある

絶縁空間での出来事。

ルウはウォルターと今までと変わらない未来を望んでいたあの時。それは今でも変わらない。けれど、今以上に、『それこそが正しいこと』だと信じていたあの時。

『きつといつかは、別の道を歩む。…それが少し、早く来たただけだ。でもルウ、どうか』

ルウを必死で止めようとしていたウォルターは、何を言おうとしていたのか。それをルウは未だ聞けていない。その言葉の前に、ルウはすでに絶縁空間に精神を暴かれ、崩壊してしまう寸前だった。

箱にルウを内包し、ルウが目覚めるまで、ウォルターが歩んだ修羅の如き道を、ルウは知らない。

そしてその道筋とルウの崩壊こそが、ウォルターをこの考えに縛り付けている。

この目的は決められたこと。そうだ。その通りだ。

(……確かに、そうかもしれない。でも、ウォルター……。その目的のどこに、ウォルターはいるの……?)

ウォルターは口をつぐんだ。答えない。ギユツと強く拳を握り、唇を固く結んでいた。震える声が、名を呼ぶ。

「……ルウ」

(そうでしょ? ……ねえウォルター)

「待ってくれ」

(ウォルターが言ってることも、しようとしてることも、間違ってるよ。でもね、)

「……言うな」

(その目的のどこにも、ウォルターはいないんだよ)

「やめろ!」

吐き出された声が都市に響く。手の中に顕現していた刀は蜃気楼のようにその姿を解きさった。

やや先にいた汚染獣はその声に気づき、発生源であるこちらへとその複眼を向けてくる。そして発生源を捉え、気づいた汚染獣はウォルター目掛けて疾駆する。都市が揺らぐ様な疾走の中で、空虚になった両の手でウォルターは自身の顔を覆った。

「……やめてくれ」

膝から崩れ落ちそうになるのを堪え、絞り出した言葉はあまりに弱々しかった。

(ウォルター…)

「…わかってる。オレがそのどこにもいないこちくらい、わかってるんだ。でも、決めたんだよルウ。オレは、やらなきゃ、じゃなきゃ、何の為にあいつらは」

何の為に死んだんだ。

がちがちと牙のなる音が聞こえる。汚染獣はすぐそこだ。その口腔が晒され、動かないウォルターを噛みちぎるべく迫る。

左手が腰の黒鋼錬金鋼を掴んだ。

引き抜く。復元。

その手に現れたのは、上下二連式大型拳銃。

陽光を受け、鈍く黒の光を放つ、重厚な銃だ。剽を通し、引き金を引く。強烈なマズルフラッシュと共に放たれる剽弾は汚染獣の外殻を砕いた。咆哮を上げ、砕かれた外殻と剽弾に引き千切られた肉はそのままに、愚直な突進を繰り返す汚染獣に、ウォルターは再び剽弾を撃ち込む。

数発撃ち込んだところで、ようやく雄性体はその動きを止めた。

地に伏し、動かなくなつたそれを見下すように視線を向ける。ウォルターは大きく息を吐き出しつつ、強くその言葉を吐き捨てた。

「オレがやらなきゃ、誰がやるんだ」

銃口が地面に向けられた。その銃口の先には地に転がった死骸のみ。

(ウォルター…)

「誰かがいようと、いなかろうと、オレ以上の適任なんざいないだろう」

(…：ウォルターが、そうしたいの?)

「そう。…実際そうだろう。アインだつてもしかしたら今頃、月でくたばってるかもしれない。あいつはただの人間だ。オレはオレの異界法則の為に、普通じゃ死ぬことはない。劣りもしない。…適任だろう? ウォルター・ルレイスフォーンという人造人間が。創世前から続

く、気の遠くなるようなバカバカしい奇譚の役者には」

「はは、と乾ききった笑いが喉の奥から競り上げて、吐き出された。『ディックは目的の終着が同じだから協力が築けるだけであいつはだた復讐したいだけだ。自分のものを奪ったという存在に怒って吠えている獣。ニルフィリアも同じようなモノ。ただ自らの地位を侵したイグナシスを殺す復讐を夢見ている。』オレは、オレは何もないよ。だから都合がいい。ただ目的を果たす為だけに動ける」

手の中にあつた銃が解け、ただの錬金鋼という塊に戻る。ウォルターはそれを強く握った。

「……そう、やらなくちゃいけないんだ。やると決めたのは、それに決断を下したのは、オレだ。アインに頼まれた事実はある。サヤを頼まれた。でもオレには、やらなくちゃいけない理由がある」

ウォルターの言葉を静かに聞いていたルウは、ゆつくりと目を伏せ、息を吸いこんで、口を開いた。

「……それが、ウォルターの決めたことで……その錬金鋼に関係があること？」

ルウがウォルターの決断した理由を知らない事には、二つ理由がある。ひとつは消滅寸前だった影響で自我が崩壊しかけていたこと。ウォルターの箱の中で、ルウはつい近年まで眠っていたのだ。

そしてもうひとつ。

ウォルターはルウが目覚めるまでの出来事を語ってくれた。しかし、明らかにその話は欠けていた。ウォルターは、ある点をひたすらに避けて語つたのだ。聞いたことのない人間でもわかるほどに。

「……ああ、そうだ」

しばしの沈黙の後、ウォルターは肯定した。

その肯定に、全ての理由があるとルウにはわかった。

「……そっか。……でもねウォルター、これだけはわかって。僕は本当に、ウォルターの味方だよ。ただ、ウォルターの辛かったり苦しかったりするのを、少しでも緩和させる術があれば、って……思っただけなんだ……」

「……わかってる。大丈夫だよ。お前を疑ったりなんてしないよ」
(ごめんね)

小さくルウが紡いだ言葉に、ウォルターは息を吐き出しながら頭を振った。

きつと、本当に謝らなければならないのはウォルター自身の方だろう、とウォルターはわかっていた。自身ですら“くだらない”と呼称するようなこの奇譚劇に唯一の家族である弟を巻き込んだ。有無を言わさない方法で。こんな自身と一緒にいるしかないという酷い仕打ちをした。

「……ルウ……」

(うん?)

「……本当は、」

オレが。

感謝と、心痛。その念にかられ、ウォルターがその言葉を紡ごうとした途端、その異変は起きた。

突然中央部分が陥没し、地面が瓦解した。ウォルターは後方へ跳躍し、その崩落から逃れる。ほぼ同時に後方から鋼糸が張り巡らされ、剽が奔る。感じ慣れた剽に、ウォルターは視線をそちらへ向けた。

「ウォルター、無事ですか!？」

「…アルセイフ」

「都市外でしばらく状況を伺っていたんです。雄生体が多く、外から何体か潰しましたが…、……怪我はないですか」

「…ああ」

「あ、ハイアは後から来ます。内力系活剽でおいできてやったので」

満足げに鼻を鳴らしたレイフオンが錬金鋼を動かす。青石錬金鋼が解け、鋼糸に変化していた。左手に携えた複合錬金鋼はやや赤熱化しており、すでに何度か振るわれた事が見える。

「…外の汚染獣はほぼ駆逐したと思ってたが」

「ええ。ついさっきの陥没で、中央部から多く吐き出されたんですよ。剽技はさほど使ってませんが、流石に剽を通すので赤熱化は避けられませんか」

更に後方にいるであろうニーナ達はウォルターのいる場所から見ることはできない。ただ視線を向けたのみだったが、レイフォンがウォルターの様子を窺いつつ声をかけてきた。

「隊長達は大丈夫ですよ。僕の後ろに、生きている汚染獣は一匹もいません」

ヘルメットのガラスについたらしい砂をこすり取りつつ、そう紡ぎ出された言葉。

一瞬、手が強張り跳ねた。しかし、腰の位置にあった事が幸いし、気づかれることはなかったようだ。後ろでやや大きな音がして、そこからウォルターの腰にドシンと衝撃。痛いと言いながら振り返れば、暖色の短髪が見えた。

「や、あつと追いついたさ……!」

「ようやく来た。……遅っ」

「うる、っさいさ。こちらとら、崩れた瓦礫ふっ飛ばしながら来たんだから、崩れる前に突っ切ったお前とは苦労が違うのさ」

「ただの言い訳にしか聞こえないけど?」

「マジうるさいさ」

鋭くレイフォンを睨みつけながら絞り出した様な声音でそう言い放ったハイアは、やや大きく息を吐き出して呼吸を整えると、ウォルターからようやく離れた。

「もう酷いのさコイツ、人の事置いてさっさと行って。あれだけあの隊長さんが連携で動けて言っただのにこれさ」

「ふうん…」

「って言っても、真っ先に連携崩したのあなたがしゃべってるその人ですけどね」

「ウォルターは強いからいいのさ」

「露骨なえこひいき…」

「えこひいきじゃなくて区別って言うのさ」

言い合いはいつものことかとウォルターはひとつ息を吐いて中央部に視線を戻した。

中央部は完全に陥没しており、到底この都市が無事とは思えなかつ

た。汚染獣に占領されている時点で復興は厳しいだろうし、おそらく電子精霊も廃貴族と化していることだろう。

「……ローフオード……」

ウォルターがジツと中央部を見つめていると、中央部から一条の光が伸びた。生き物の様にうねり、それはこちらへと光の尾を引きながら放物線を描き向かってきた。

「跳べー！」

後方へ跳躍。

ウォルターが声をかけると同時、言い合っていた二人も跳んだ。近場の屋根に着地した。光は地面にぶつかると、消えも突き抜けもせず、実態があるかのように跳ね上がり、その勢いで更にこちらへと照準を定めてきた。

——狙いはオレか

ウォルターは更に跳躍、左手首の腕輪を鋼糸として展開、レイフォンの鋼糸も利用しながら足場を展開する。蜘蛛の巣の様に張り巡らされた、レイフォンの鋼糸の巣を基点としたウォルターの巣。光の帯を躲しつつ、鋼糸の適度なたわみを利用して跳躍する。

——やはり発生は中央部からか。∴問題は、あれが何かだな

∴

イグナシスの新たな策略か。オーロラ粒子を利用した、ナノセルロイド達と同じ様な群生体であれば、対応が厄介なことになる。

崩落が進む。レイフォンの鋼糸が大きいたわむ。崩落で鋼糸が引きずられた。ウォルターが着地しようとしていた鋼糸がたわみ、跳躍の距離が出ない。

「ちいっ」

(……！)

脳内にノイズが響いた。ルウとの『会話』ができない。

帯がウォルターの足を捉えた。まるで捕食動物が獲物を丸呑みするのように、ずるりと光の帯がウォルターを飲み込んだ。

「ウォルター!!」

自身の名を呼ぶ声を認識するよりも早く、ウォルターの意識は途絶

えた。

気がついた時、ビリリと神経がしびれるような感覚がした。

どうやら中央に開いた穴に落ちたようだったが、上を見上げて落ちたと思しき穴は見えず、ただ都市の機関部が周囲を埋め尽くしていた。

「…ルウ、聞こえるか」

(…—え、…けど、…ズが、…)

——駄目か…

とぎれとぎれにしか聞こえない。

自体の理解は追いついていないが、ひとまずここを脱出すべきだろう。ルウとの『会話』も修復しなければならぬ。

拒絶の領域は働いているらしく、中央部に流入してきているであろう汚染物質の影響は無い。

「…:…」

大きいため息を吐き出して立ち上がる。

頭痛とルウとの会話ができない点を除けば、至って問題は無い。左手首の金色の腕輪をいじりながら歩き出す。少しばかり厚底の靴裏が機関部のパイプの束を踏みつけて歩く、後ろで何度もゴツン、ゴツンと大きな音がしている。

「…:…」

あれが敵だった場合、対処を考えなければならぬと考えながら、ただ眼の前にある道を歩いて行く。上を破壊すれば良いような気はしたが、それをする気もおきず、ただ歩き続けていた。

惰性のように歩き続け、どのくらい経ったのかわからないまま歩いて、気づけば中央深部に到達していた。

「…:…」

中央にそびえる大きな光る結晶が、呼応するように一際大きな光をこぼした。

円錐状の枠組みの中央に置かれた結晶に、ウォルターはゆつくりと歩み寄る。そしてその結晶にそっと手を伸ばした。淡く、くすんだ光

を放つ結晶へと。

「…お前が、呼んだのか」

結晶の中に、電子精霊の姿をかたどったものが見えた。少女だ。光の束が収束し、その形を形成していく。流れた髪は光をこぼし、切りそろえられたように整った髪は、淡く溶けるように霞んでいた。

「うん」

凜とした声音だった。

ぱちりと開かれた瞳が真っ直ぐにウォルターを見つめ、それからゆつくりと伏せられる。

「この都市は終わり。せつかく来てくれたのに申し訳ないけど」

「…オレらが来たのは勝手に、だ。…お前が気にするようなことじゃない」

「変わったね、あなた」

「…よく言われる。最近」

ローフォードが柔和に表情を緩ませる。しかし、ウォルターはそこまで樂觀視できず、息を吐き出した。

「…：大事なものがあったんだね」

しみじみとした声で告げられた言葉に、ウォルターは酷くゾツとした。

おそらく、いいや、確実に、ローフォードの言葉はルウに向けられたものではない。それは考えるに、ウォルターの周囲に存在する人間たちを指して言っていることだと気付いて、ウォルターはどうしようもない感覚に襲われた。

喉が詰まるような感覚と共に、後頭部が急激に氷結するような、そんな感覚だった。

「…：…：だいいじなもの」

「うん、そう。…：だつて前に…：あの男と来た時とは、その瞳が違うもの。悪ぶるのは悪い癖よ、あなたの」

「…：悪ぶる、ね」

「そうでしょ？ いまもそう。…：何をしてるのかな」

「ただ戻っただけだろ、…：お前と会った時にな」

「確かにね。わたしと会った時のあなたにそっくり。でも違う点もある」

ローフォードがスツと人差し指をたてた。

髪の中から、光が泡のようにこぼれ、宙へ消えていく。ウォルターはそれを静かに視認しながら、視線を逸らした。

「当時のあなたは、そんな不機嫌丸出しじゃなかったよ。あと、いまみたいにぎこちなさがなかった」

「…不機嫌なのはお前がオレをここに引きずり込んだからだろ」

「ふふっ、言ってる！ 不機嫌の要因はそれもあるね。でもそれだけじゃないんでしょ？」

いたずらに笑うローフォードに、ウォルターはハアと大きく息を吐き出す。

「…まるで何かを試すような言い方だな」

「そうね。…この世界はまた壊れていく。…ありえないはずのことが、ありえるようになる」

「……イグナシスの手は、もう、そこまで……」

「そう。近く、イグナシスの手のものはこの世界に降りるでしょう。…滅びるわたしには何もできないけれど、あなたにはできるでしょう？」

「…その為にここにいるんだ。…当然だろ」

「あなたはそういう人ね。…だからこそ、だよ。…ちゃんと受け入れなきゃ、あなたは辛いまま」

「それは、さつきお前が言った “大事なもの” に対しての言葉か」

ウォルターはローフォードを睨むようにそう言い放った。

すでに足の形成すらままならなくなってきたローフォードは、それでもなお、柔和に笑ってみせた。

「そう」

「……必要ない。理解も、賛同も、賞賛もいらぬ。必要ない。必要なのは、邪魔をしないこと。オレに関わらないこと。知らないこと。…でなきゃ、……みんな」

「運命なんて簡単に変わるの。人が変われば、世界は一気に変容を遂

げる。…あなたも同じでしょう」

「…オレは」

「いつまでも意地を張ってちやわからないものだよ。あなたの悪いところは変に頑固なところ。…でも、そのやり遂げようとする意志は素敵なところ」

微笑んだローフォードが、淡く、緩やかにその姿を消そうとしていた。

「だから恐れなくて。怖がらないで。信じることを。変わることを。あなたの世界はもう変わっている。それに気付いているはず。…後は、あなたが認めるだけ。あなたはきつとわかる。あなたに起きた変化が必然なんだって」

ゆつくりと伸ばされた手が、ウォルターの頬に触れた。空間に溶けていくその姿を、ただ呆然と見やるしかできないウォルターに、ローフォードは笑んで見せた。

「大丈夫。あなたには心強い大切な人がいるでしょ。あなたを理解しようとしてくれる大事な人がいるでしょう。あなたが一番わかっているはずだよ。ウォルター・ルレイスフォーン。…だからどうか……」

言葉は最後まで紡がれ切らず、ローフォードは空間に消えた。

きつとこの後は廃貴族となり、どこかを浮遊しているのだろうか。ウォルターは消えたその空虚を撫で、ギョツと胸に手を当てた。

「…信じる…変わる…」

小さく頷き返して、ウォルターはようやく、ここ暫くずっと胸にはびこっていた気持ち悪さの意味に気づいた。

「…誰より、オレが他人を信じたかったのか」

レイフォンの言葉に苛立った。自分のことを言ったら軽蔑されるのだろうかと考えて、またそれに苛立った。彼らが自分に向ける眼を、直視できなくなった。謝られた事に動揺した。ちからになりたいと言われ、柄にもなくまた動揺した。

すべて、自分が信じたかったのだ。

他を必要ないと感じていた自分が、他を信じようとしたことに戸

感っていたのだ。

1人じゃできないことがある。

そう思う前から。信じたくて、信じようとしていた。

けれどそれを必死で押し込めようとしたから、自分が自分でないような妙なズレを感じた。

—— 軽々しく言えることなんかじゃないのに

そうだとしても、信じて、いいのだろうか。

信じてくれと、言っていていいのだろうか。

(……いいと思うよ)

「……ルウ？」

『箱』の接続が直ったのか。

無事で良かった、そう一言言おうと息を吸ったが、それより早く、ルウが口を開いた。

(ウォルターなら、絶対大丈夫だよ)

強く、そう答える。

はつきりとした声音が、嘘のない言葉だとわからせてくれる。ウォルターは自身が言おうとしていた言葉を口の中で転がして、霧散させる。

信じてくれている。信じて大丈夫。信じてくれと、言っていていいのだ。それが妙にじんときて、一瞬、目頭が熱いと感じた。

「……うん。……うん。……そうだな。大丈夫だ。オレが、どうにかしてやればいいんだ。オレなら、どうだってできる」

運命だとか、そんなくだらないことにいつからこだわるようになったんだか。

自分でもわからないが、それでもこだわっていたことは事実なんだろう。自分を意固地にした理由も何もかも、自分がそれにこだわったからなんだろう。

「……ここに立つのは、アインでも、サヤでも、ましてやイグナシスでもない。オレ自身だ。そうだろう。知ったことじゃない。イグナシスの執着も、狼面衆の思惑も、くだらない運命も、何もかも」

ああそうだ。ここに立っている。生きている。

戦っていた。戦っている。戦う。

誰のために。

自分自身の為に。

「オレはオレ自身の意志で、戦う。ここに立つ。…もう二度と、…誰も奪わせない」

ウォルターは手を開く。その掌の上には何もない。だが、確かに決意があった。それを握り込む。掴む。この身体に、心に、刻みつける様に。

ルウはほんの少しその言葉に瞠目して、それでも表情を緩める。
(もちろん僕も最後まで手を貸すよ。最後まで、ウォルターのちからになる)

染みるように、柔らかな声で、頷きながらルウは答える。

その柔らかな声音に、ウォルターは大きく息を吐き出した。もう一度、自分の “くだらない意地” を吐き出す様に。そして、力強く頷く。

「…：ありがとう。…無事でいてくれて、本当に良かった」

(…うん。ありがとう、大丈夫だよ)

ルウが再度頷く。『箱』の中の柔らかな感覚に触れながら、ウォルターは息を吸い込む。吐き出す。

「…：できるはずなんだ。オレなら。オレを、…信じようとしてくれて
いる人間に応えることも…、その存在を守ること。…この異界法則
で、かつての存在を救う事も、かつての居場所を創造することも」
たとえ、それが “かつてと同じ” でなくとも。

—— オレ達は人の形をした模造品、そして世界だ

ここに立つウォルター・ルレイスフオーンは人ではない。けれど人に近く、そして世界に近い。決して彼らと同じ道を辿ることなど叶わない。しかしその生き方を似せることはできる。

ならば、ならば。

近づけて見せようじゃないか。矮小だと罵られようと、脆弱だと誹りを受けようと。この心が内包する刃は、決して鈍りはしない。外敵を殺し、目的を達し、そして最後の時を迎えるまで。

自らの赴くままに、かつての様に。

—— それが…かつての存在の為にならないとしても

これが、 “ウォルター・ルレイスフオーン” の生き様だと。

再度息を吸い込んで、吐き出す。少し肩を回す。

ウォルターは眼を伏せてもう一度深呼吸をして、パツと開いた。

「はは、はー、あー、…あー、うん。…へいき。おつけおつけ。調子戻ってきた気がするわ」

（あはは、ウォルターってば）

「まあ、本当、…迷惑かけて悪かった。…し、ローフォードには本当迷惑かけたわ」

よいしよと声を出しながら、軽く伸びをして歩き出す。空気の流れを探し、肌を撫でた地上へ吹き抜ける風の方へと足を向けた。肌を撫でた風は少し髪を揺らし、黒と赤の髪を舞わせる、それを手で少し抑えながら、ウォルターは瓦礫の道を歩いて行く。

（僕は別に構わないよ、ウォルターだし。…ここには、前にも来たことがあるんだっけ？）

「ああ、あの時はディックと2人で荒れてたからなあ、狼面衆を潰すのに軸をズラしたは良かったんだが、その後すぐに汚染獣が来て…撃退ついでに都市をあちこち壊した。…めっちゃ怒られたの覚えてるわ」
（アハハ、それは確かに迷惑かけてるね）

「…ソンなつもりなかったけど、まー何度も言うがあの時は荒れてたから。しょうがないってことで」

手打ち、なんて言い、手を叩きながら軽く笑いを零す。瓦礫の道なき道を歩いて行くなか、自身の名を呼ぶ聞き慣れた声達が聞こえる。その音が鼓膜を揺るのをどこかこそばゆく感じた。その感覚を払う様に、ウォルターはほんの少し息を吐き出して、吸う。

「…探されてるっぽいな」

（…まあ…、だろうね）

「うーん、こりゃアントークに叱られるかね」

（ふふ、ウォルターはちよつとくらい叱られてもいいかもね。今回は）
「…今回は、な」

お互いに笑みをこぼしつつ歩いていると、バタバタとこちらへやってくる鳶色が見え、ウォルターはその姿に軽く苦笑をこぼした。

「大丈夫ですか、ウォルター！」

珍しく肩で息をするレイフォン。ウォルターの眼の前まで来ると、

はーっと息を吐き出して膝に手をついた。ヘルメットの奥で、少しばかり汗が流れているのが見える。

「見つけるのが遅れてすみません、隊長達もすぐ来ますから…。ハア、見つけられて良かったです」

安堵したように息を零すレイフォンの、その表情をウォルターはジッと見つめていた。

そんなウォルターにきよとんとレイフォンは首を傾げて、ウォルターを見る。

「…どうかしたんですか、ウォルター」

「…ああ、いや…」

ウォルターが苦笑を浮かべたのとほぼ同時か、そのすぐ後に、少し遠くで剽が爆発するような光が見えた。

「ウォルターッ!!」

「うっ」

「…ウォルターそろそろ避けられるようになったらどうですか」

「…オレも思うわ…」

しがみついて離れようとしないうハイアをウォルターがやや強引に引き剥がしていると、後続からニーナ、シャーニッドといった面々も追いつく。ウォルターのケロリとした表情に、各々が息を零していた。

「ウォルター、無事でよかった。フェリの端子の追跡から外れてしまつて、見つけるのが遅くなつてしまつたようだ。本当にすまない…！」

「…ま、無事で良かったぜ」

苦笑交じりに笑うシャーニッドに肩を竦めつつ、ウォルターはその更に後続で来ていた2人に視線を向け、ジッと見ていた。

それに怪訝な表情を浮かべたのは、やはりと言うか見られていたダルシエナとナルキだ。

「どうかしたのか、ウォルター」

「先輩、何か調子でも？ …ひよつとして、怪我を？」

「…ああ、いいや…」

じゃあ？ と詰め寄るように口を開いたのはハイアだ。すぐ近くにいたこともあり、距離が近い。

その真剣さに軽く苦笑をこぼし、ウォルターはよくハイアの髪を掻き混ぜる時のように、それでいて強くヘルメットのガラスを掴んだ。

「んん、なんでもない」

「うっ、ヘルメットのガラス部分抑えられたらなんにも見えないさ！

ウォルターなにするんさ…っ」

「ははっ、無様だな」

そう笑みをこぼせば、ハイアだけでなく、他の面々からも視線が刺さった。

何よりもレイフォンとニーナの目線が刺さる。それに少しばかりむず痒いような、気恥ずかしいような、なんとも言えない感覚に陥る。

だが、十分だ。これでいい。

「なんだよ。文句でもあんのか」

「…ハア、あなたたつて人は…」

「ンだ、アルセイフ。せつかく人が労ってやろうっていうのに」

「あなたのその態度のどこに労いがあるんです？」

「撫でてやってるだろ？」

「それは掴むって言うんです」

「…お前もやってやろうか？」

「やめてください。頭かち割られたいんですか」

スツとレイフォンの方に出したウォルターの手は、素早くレイフォンに叩き落された。いてえなあ、なんて軽口を叩きながら苦笑をこぼせば、レイフォンは全く、と息を吐き出した。それからレイフォンが小さな声で「良かったんだか良くなかったんだか…」と呟いたのをウォルターは聞き逃さず、笑いをこぼした。

「素直に喜べよ、この生意気後輩」

「喜べないと言うか、喜びたくないというか…なんていうか複雑です」

「ははっ、まあウォルターらしいな！」

「…全くだな。…だが！ 勝手に先行したことは反省してもらおうぞ。ツエルニに戻ったら反省会だ」

「うげ…」

「自業自得だな」

「あんたはいつも手厳しいなあ、マテルナ…先輩」

「当然だろう。大体団体行動も取れんヤツが小隊員で…」

「ストロップ、シェーナ！ 今日はその辺にしておいてやろうぜ。
なっ」

「うるさいシャーニッド、軽々しく肩を組むな」

「…ウォルター先輩、そろそろその手外しても良いのでは…」

「…ああ、忘れてた」

「忘れないでほしいさ…」

ナルキに言われ、シャーニッドとダルシェナの言い合いを聞き流しつつ、ウォルターがハイアのヘルメットを掴んだままだった手を外せば、ハイアが息を吐き出した。近くに端子が降り、ウォルターは視線を上げた。

「ロス妹」

（本当、無茶をしますねあなたは）

「そりや悪かった」

「ウォルターの言葉に反省が見えないのが一番の難点だと思うさ…」

「それはいつもでしょう」

（全くです）

「ひでえなあ」

「今回ばかりはちよーっと怒ってるさ〜」

「ええ…悪かったって」

「あなたは毎度口先ばかりです」

「…今回ばかりは本気で悪かったと思ってるよ」

「……し、仕方ないですね…」

額より少し上辺りで軽く両手をあわせながら、そう小さく呟いたウォルターに、レイフォンは渋々という様子を見せつつも許諾した。そんなレイフォンにフェリは盛大なため息を吐き出す。

（…その隣のイオ先輩盲信者にあれこれ言いますが、レイフォンもなんだかんだ言って甘すぎです）

「盲信者って…まあ、あながち間違っていないですね」

「ハア？ レイフォン、お前だって言えないって言われてるんだから同じ穴のムジナさく」

（ハ、ハイアちゃん、そう強く当たっちゃだめだよ）

「ミュン、何度も言うけどコイツは…」

「はいはいもういいから。似たようなこと出る前もやってただろ。…おら、とつとつツエルニ戻るぞ。いつまでここに居る気だよ」

「ウォルターが一番長居させる原因なんですけど」

「はいはい。…おいアントーク、そろそろそつちも收拾つけてくれ」

「そう言うならお前も手伝ってくれ！」

「あく無理だな」

ハハ、と笑いをこぼしたウォルターに、ニーナが「ああもう！」と盛大に声を上げた。

似たもの集団

「ハア!? んなの困るさー」

ハイアは声を張り上げた。

眼の前にはこの都市の生徒会長カリアンが座っていて、彼は困ったように眉を下げている。実際、互いが互いに困ったことになった。カリアンに差し出された紙を握りしめ、ハイアは大きいため息を吐き出した。

「こちらとしても、あまりよくはないね」

「そりやそうさ。…戦争期にバカしたのが裏目にでたか…」

互いにもう一度ため息を吐き、ハイアはくしゃくしゃになってしまった紙を机に放る。それを隣に座っていたミュンファが小さく咎めたが聞き流した。

「…傭兵団が準備に手こずるって言うなら、こっちで動くしかないさ。これでもう一月は待ってる」

「そうしてくれた方が、こちらとしてもありがたいが…。しかし、だからといって本当に放り出すような事をしては、わたし自身として厄介になるのでね」

そう言われ、ハイアはやや眉を寄せた。隣のミュンファは意味を理解していない。

———ま、それがすべてじゃないにしても、評価に響くか…

できるだけ生徒会長としての座に座りたい人間なら、降ろされる事態をできるだけ避けたい筈だ。それに響く様な危険分子も、要因も。そして目の前の男はそういう男だ。出来る限り被害は最小限に、なおかつ迅速に。

ハイアはちらとミュンファを見た。彼女は身勝手をした自分についてくるといった。そうして彼女はここにいる。ハイアと違い世渡り上手なフェルマウスやヴィート達ではなく、自身を選びここにいる。

彼女のためにも、傭兵団という囲いを出たハイアはこの酷く生きづらい世の中を生きて行かねばならぬのだ。できるだけうまく。面倒

を起こさず。

彼女のために。そして、この都市に在する尊敬する彼のために。

「面倒はこれ以上かけられない。…あんたらも厄介は早めに消えた方が良いと思うさ。こんな傭兵の1人がパツと消えたって誰も気にしやしない。…ウオルターにも、これ以上迷惑は…」

「ハイアちゃん…」

ミュンファアの小さな声が鼓膜をかすめる。膝上で拳を握った。

ああそうだ、これ以上迷惑はかけられない。

まっすぐに視線をあげられず俯いたハイアからカリアンの表情は見えない、しかし、どうやら困ったような、呆れたような、よく見るもの〃を見る様な眼を向けられた気がした。

「…キミは…」

そうカリアンが口を開いたのと同様、生徒会室の扉が開いた。それなりの勢いで開いた扉は大きな音をたて、少し古びた音とともに反動で少しばかり戻る。そうして、その先にいる人物の姿を晒した。

この場にいたおおよその人間が想定した人物が、当然のようにそこにいた。片手に大量の資料を抱え、雑務で来たであろう彼はジツと話の渦中の男…ハイアを見据え、それからニヤリと笑う。後ろで「あーあ」と言わんばかりに呆れ顔をしていた鳶色は、それからハイアを鼻で笑った。

「内容によっちゃ拳ひとつじゃ済まさねえぞ、ライア」

「…ウオルター…」

ひえ、と口端から悲鳴が零れたのを、隣に座っていたミュンファアは聞き逃さず、それでいて苦笑を浮かべた。

「オレがあれだけ言ったのにな？」

「あ、ああ、ちが、違う…、いや、違わないけど、なんていうか…」

「オレ傷つくなあ…お前らのためだと思って監視役引き受けたのに…」

「あゝゝゝそういう言い方は酷いさゝゝ!!」

ウォルターが持っていた資料を受け取り、レイフォンはカリアンに資料類を差し出しながらため息を吐き出した。

自主的に床に滑り降りたハイアはともかく、その眼の前で「悲しいわ〜」とか棒読みで嘘泣きを披露するウォルターには、本当に良かったんだか良くなかったんだかと複雑だ。

——まあ良かったんだらうけど

つい先日までの表情は嘘の様に消え、「以前の」彼が戻ってきた。あの都心部の奥でなにがあったのかレイフォンやニーナを含めた面々には知る由もないが、それでも戻って欲しいと願っていた自分達にとっては喜ばしいことだ。たとえそれが、自分達の知る場所でなかったとしても、そのふんいきさえ戻ってきてくれれば、それでよかったですなのだ。

しかし、素直に喜べないのがレイフォン・アルセイフの悲しい性であって。

嬉しいと良かったと思う自分がいるのはすでに認めている。それはもう認めざるをえないことだった。だからそれを否定する気はない。

しかし、しかしだ。

だからといって、いわゆる「調子のいい」ウォルターになるのも、少しばかりレイフォンにとっては複雑な面もある。ここでレイフォンの指す「調子のいい」は、例えば技のキレが良いとか身体の調子が良いとか——そうだったらある意味では良かったのだろうが——そういう事ではなく。彼独特、といつては妙かもしれないが、おちよくなる様な態度や軽薄にも取れる表情と態度と雰囲気に戻ったことが、どうしようもなく複雑なのであった。

——ウォルターだからしょうがないっていうか、まあ…わかってるんだけどなあ…

言葉では言い難い面はあるが、とにかく「ウォルターはこういう人物だ」と認識している以上、現状よりも良くしろだのその態度を改めるだのと言う気はレイフォンにはさらさらない、が、なんというか…

……それは治らなかつたんだなあ……みたいな……

まあこれが、ウォルターという人物の素の表情なのかもしれないが。

妙な疲れに、レイフォンはため息をひとつ。それから肩を揉んで、成り行きを見守るべく少しばかり彼らと距離をとる。決して、引いたとか云々ではないと、レイフォンは内心で誰というわけでもなく弁明した。

「だからおれっちが言ってるのは、またウォルターの手を借りることになるから……！」

「それがお前はオレの迷惑になつてると言うんだろ」

ハイアのはつきりとしめない態度と言い振りに、ウォルターは腕を組んだ。

元々小隊の生徒会提出資料とついでに先日の廃都市の調査報告書を提出するために訪れたのだが、まさかこうなるとは。中の話を聞く気がなかったといえは嘘になるが、それにしても今朝生徒会から呼び出しがかかった時、2人が浮かべていた妙な表情が気にかかつていたらこうだ。

本当、重要なことを言わない目の前の元傭兵団団長には盛大に溜息をつきたくもなる。

(こゝれだからコイツは)

(んふふ誰かさんにそっくり)

(……うわ……耳がいた……)

そう言われればそうでした、とウォルターは内心でから笑いを零す、ルウは楽しそうに笑うだけだ。

ため息を零しそうになるウォルターの眼の前で床に正座するハイアは、ワツと泣かんばかりの勢いで言葉を発しながら拳をブンブン振った。

「だつておれっちが頼んだ時ウォルター嫌そうな顔した！」

「そりやアポなしで来られたら誰だって嫌な顔くらいするだろ。…いいだろ、結果的にお前ら泊めたんだから」

「嫌そうな顔するのは迷惑だから、その前もその後も機嫌悪かった!」
「それは悪かったけどお前のせいじゃないって何度説明すりゃわかんだよお前…」

はああ、と結局は大きなため息を吐き出し、「うーん」と腕を組んだ。とりあえず現状をまとめると、現在ツエルニが戦争期で、また周囲も同じ様に動き回っているために放浪バスが来るのは早く見込んでさらに2ヶ月後。サリンバン教導傭兵団がこちらに回してくれるとなっていた放浪バスも、結局は都市同士の戦争や汚染獣の危険を回避するため動きが慎重になっている。サリンバン教導傭兵団お抱えというわけでもなく、交渉により来てもらうことが可能になっていることから、サリンバン教導傭兵団の方も無理に強いることもできないということらしい。

つまり、予定していた時期よりも大幅にずれ、ハイアとミュンファがただただツエルニに居座ってしまうという状況が出来上がる。それはツエルニ側としてもそうそう黙認出来るものではなく、それはハイアとミュンファも同様だった。

戦争前であれば、都市間の移動は可能になるため、ツエルニが他都市とぶつかった際に移動するか…

「…ランドローラーとか…」

「バカか」

「うっ」

「もう一回言っとくかな? バカか」

「ううっ」

傭兵としてあちこちを回ってきたハイアが、その危険性を知らない訳はない。にも関わらず、低確率で危険な方法を提示してくることにウォルターは再びため息を吐き出しながら頭を抱えた。

「会長さん…、コイツらの事情を知ってるのはオレらだけか」

「…ああ、多少の誤差はあるだろうが第十小隊とマイアス時の事を知っているのは、十七小隊を除くとわたしとヴァンゼくらいだろう

ね」

「…なあ、会長さん」

「ああ、おそらくキミが言いたいことならわたしが言おうとしていたところだよ」

「…まあ…それしかねえモンなあ…」

本日何度目かわからないため息を吐き出して、ウォルターは「そうだよなあ」とカリアンに同意を示した。

似たもの集団 — 2

余計な用事も含む仕事の終わったウォルターとレイフオンは、十七小隊がいる練武館へ戻る道を歩く。この後は訓練と連係の練習か、また仕事が増えたなあ、なんてボーツと考えつつ歩いていると、少し後ろを歩いていたレイフオンから声がかかった。

「ウォルター、それにしても良かったんですか」

「なあにが」

「いえ、僕が言えたこと…というか、決定されたんですし覆しようがないですけど…ウォルターで言う、面倒事なのではと思って」

「…面倒つちやあ面倒だけだな。けど、まあ…その…なんだ」

ふむ、と顎に手を当てた。的確な言葉が見つからずしばし考え、それから「ああ」と声を零す。

「まあ、迷惑じゃあないからな」

「…僕は迷惑なんですけど」

「はは、まあそうだろうな」

「なんでそんな愉快そうなんですか…。これから隊長達にも頼まなくちゃいけないのに」

「このくらい楽観してる方が余裕あっていいだろ。…一番説得しんどいのは、アントークじゃなくてマテルナだろうし…」

「……ダルシエナ先輩は…ダメでしょうね…」

二人してため息を吐いた。

結局、放浪バスが来ないものは仕方がない。こちらから出せるバスも無い。となれば、長期滞在することになるのは当然だ。

元来学園都市は放浪バスの経由点としては向いていない。それは学園都市の周回路がその他の都市に近づく経路を通らないからだ。通常の都市であれば、周囲の都市との交易や放浪バスの点も加味して経路が似通ることがあるが、学園都市はほぼ独立している事が多く、戦争期のみ他都市と経路が似通ってくる。その為、元々外縁部の区画にはさほど経由点としての栄えはないのであった。

そして、ハイアが他都市へ行く為の放浪バスをサリンバン教導傭兵

団が他都市から持つてくることだったが、しかし戦争期であるがゆえに、そのバスはツエルニへ出発する事を伸ばしに伸ばして一月が経った。そしてこれ以上の滞在は難しいだろう。というのも、通常であれば外縁部の区画での長期滞在は問題視されない。サリンバン教導傭兵団も問題視をされていないが故に現在も外縁部に滞在している。

しかし、ハイアは違う。武芸科長とその下数人の長に当たる面々に、第十小隊、そしてマイアスとの都市戦時の事を認知されている。カリアンはそうでないにしても、その他の面々がどう認識するかは目に見えている。

一番は都市から出すことが良いだろうと事実を知っている面々は誰もが思う。しかし、それが不可能であるならば、「正当な」理由が必要になる。もちろん面倒な点はある。しかし多少の厄介を無視してでも、その決定を行うのが一番得策ではないのかと、カリアンもウォルターも考えた。

「まさか、リーリンについて、ハイアとミュンファさんまで滞在することになるなんて」

「戦争期じゃしようがないだろ…」

「あつ、ウォルターがハイアとミュンファさん他都市に送ればいいんじゃないですか？ 勝手に都市からいなくなれるくらいですし」

「お前そのこと最近ポジティブに捉えるようになったな…」

名案、と言わんばかりに表情を輝かせたレイフォンの頭を軽く叩き、「出来るかバカ」と返しておいた。ウォルターが何らかの技術で都市間を移動する術を持っているという事実が十七小隊辺りにバレている事実をどうこうする気はウォルターには毛頭ないが、しかしだからといってそれをおおっぴらに使う気もない。

ザツクリとしたウォルターの言い振りに、レイフォンは少しつまらないという表情を浮かべ、それからため息を吐いた。

元々この決定を下した理由としても、この一月、ハイアとミュンファが——主にはハイアだが——ウォルターの監視つきである程度
の自由活動に許可が出されていたことが根底にある。ウォルターが

このツエルニにおいて一目置かれる武芸者である事は武芸科全体に認識されていることであり、上層部もだからこそ監視を任せ自由活動の許可を出した。忙しくなる中で外縁部での監視が行き届かなくなり、もしもの事態がおきるのではないかと恐怖を抱いている上層部には、「確実に仕留められる」存在であるウォルターの近くに配置しておくのが、一番安心だということ煽りやすかった。そしてそれをカリアンは適切に煽る事ができ、ウォルターは実力で納得させる事ができた。だからこそ決定させることのできた事柄だ。

「…ま、いい感じにいい配役がいたおかげだな。オレだけじゃなくて、お前もいて、お前はライアに二度勝利の実績がある。それもあの腰抜け上層部共にこの決定を押し通すことができる要因になった」

「腰抜けって…、武芸科以外は相応にして一般人なんですから、怯えるのは当然といえば当然と言えるでしょう。そんな言い方しなくても…」

「不必要に怯えるのは腰抜けの証だ。…ともかく、オレとお前でせいぜいあいつを抑えつけてる様に見せておくのが一番だってこった」

「なんか詐欺でもしてる気分ですよ…」

「ある程度事実なら良いんだよ。詐欺じゃない。…つか、まあ…あいつも外縁部にいるより学生経験できていいだろ」

けろりとウォルターが言えば、レイフオンは複雑そうに眉根を寄せせる。ウォルターの意見には「まあそうなんですけど」と同意を零しつつ、それから腕を組んだ。

「…なんていうか…複雑っていうか…嫌だなあ…。学年はまだしも、管轄下に置かないといけないからって小隊まで一緒にされて…」

「まさか武芸の許可くれるとはな。会長さんよく通したよなあ。…ちなみにオレはちよつとあいつらの学力気になってる」

「武芸のことはできてても頭悪かったりして」

「ハハ、盛大にブーメランな気がすんだけど」

「ブーメランは余計です。僕はちゃんと学生してますよ」

「学生してンのと頭いいのは違う気がすんだよなあ。…ひよつとして、お前の同級生になつたりしてな〜」

「ぜつつつたい嫌です」

「でもお前アイツが年相応に3年に入って先輩になっても嫌って言う
だろ。アイツの事先輩って呼ベンの？」

「ウォルターも先輩ってつけて呼んでないのに何を今更」

「……そうだったな……」

この対応が当然のようになってしまっている現状、一切の違和感を
抱いていなかったが、言われれば確かにそうだった。ウォルターもあ
まり気にしない質のせいか、レイフォンはすっかりウォルターを
「ウォルター」呼びで定着していて、ウォルターもそれで慣れていた。
「まあ無理に呼ばせる様なモンでもないしな……」

「いまからでも呼んであげましょうか？ ウォルター先輩って」

にこりと表面的にレイフォンが笑みを浮かべ、ウォルターは微妙な
顔で硬直し、レイフォンもそのまま硬直し、そうしてしばし時間を
おいて、

「……気色悪……」

「……嘘くさあ……」

2人して気分が悪くなった。

練武館に到着し、ウォルターを中心にレイフォンが補足を入れつつ
ニーナ達に事情を説明した。その中で嫌そうな顔をしたのが、やはり
と言うかダルシエナとナルキだ。だがしかし決定してしまったものは
覆すこともできないため、事実は事実だとして淡々と告げた。しか
し、どうやらそれが一番ダルシエナの癩に障ったようで、その綺麗な
眉をきつく寄せた。

「…他の小隊でも良かっただろう。何故、この小隊ばかりがそうして
対象になる?」

「あ、…悪い、オレがうちでつて言ってるからだわ」

「……貴様……」

「まあまあシエーナ! とりあえず落ち着けて。お前がカリカリし
てても話進まねえからよ!」

「うるさいシャーニッド、何度も言うがお前は馴れ馴れしいんだ」

軽く肩を組んだシャーニッドの手を払いつつ、ダルシエナは腹立た
しそうに腕を組んだ。フェリは暫し沈黙していたが、ウォルターとレ
イフォンを訝しげに見つめていた。

「…あなた達…というより、イオ先輩ですね。あなたは甘いというか、
緩いというか…」

「いやあ…悪いとは思ってんだけど…他の小隊に任せてはっちゃけら
れても困るし…それにほら、一緒の場所においてくれる方が口裏も合わ
せやすいだろ? …まあ実際、いざとなったら叩き伏せるくらい出来
るヤツがいる十七小隊に置くのが一番安全なんだよって言うのが上
層部に伝えていることだから、どうやってもなる」

「う…む…確かに、お前の近場に配置しておくのが一番こちらとして
も安心感はあるが」

「オブジェクト扱いか…」

「わかります。ついでに僕を少し遠くに配置しておいてくれればい
ざって時には殺れまます」

「レイフォン、そんなマジな顔で錬金鋼握るな。ウォルターも引いてんぞ」

真顔で言ったレイフォンにシャーニツドが頭を振った。そりやそうだという顔でニーナがレイフォンを見れば、不服そうな顔で首を傾げつつレイフォンは腕を組む。意図を理解できていないレイフォンにフェリはため息を吐きながら、ウォルターに視線を向けた。

「相変わらず仲悪いですね。あの弓使いの方は置いておいて、ハイアとレイフォンは犬猿…と言うより犬猫って感じですね」

「酷い言われようだ…」

「事実だろ」

「ウォルターまで！ 大体なんですか犬と猫って!? そんなに僕は犬っぽいんですか!」

「……絶対逆なんだよなあ……」

はは、とから笑いを零したウォルターにレイフォンが噛み付くが、はいはいと流してその議題を放る。レイフォンはやはり不服そうであつたが、周囲はさり気なく頷いて納得していた。

とりあえずと話の方向を戻したウォルターは軽く顎に手を当てる。

「とりあえず…、えっと、ライアとルファをうちの小隊にいれるのはいいのか?」

「つ……ま、…まあ…、それ以外…ないだろう…なつ。…なつ、シャーニツド、なつ」

「……隊長…気持ちにはわかるけどよ……」

「隊長、そのニヤけ顔なんとかしてください」

「い、いや、わざとじゃないんだが…その…つい、ついな!」
「うるさいです」

フェリのピシヤリとした一喝に、ニーナは小さく笑いを零しながら視線を逸らす、が、未だ緩んだ顔は直らない様で、頬が緩いままだ。当のウォルターはいまいち理由が分かっていないらしく、「一応いいつつことでもいいのか…?」と首を傾げる。

「まあそういうことですね」

「…先に言っておくが、私は賛成した訳ではない。その隊長が認可

したから従うだけだ。そこを間違えるなよ」

「ああ、それでいい。十分だ」

厳しい言葉だったが、絶対にと否定するものではなかった。軽く笑い聞いたウォルターに、ダルシエナはバツが悪いとばかりに視線を逸らす。小さく何かを呟いたが、ダルシエナの隣にいたシャーニツド以外には聞こえなかった。

咳払いをしつつ表情を整えるニーナがそうだ、と口を開いた。

「ところで、当のハイアとミュンファはどこに？」

「アイツらはいま学力テスト中。それによつて学年振り分けるんだと」

「ああ、リーリンもしていたな。…聞く話では傭兵として都市外に出ているらしいが、学力は大丈夫なんだろうか…」

「武芸はできてても知能は低い可能性がありますね」

「…みんな同じこと言うんだなあ…」

翌日、カリアンに呼び出され、ウォルターは再び生徒会室へ向かっていた。道すがら、レイフオンが同級生のエド・ドロンといた所を見つけ、さり気なく連行しつっだ。

「なに がッ、さり気なくですか!!」

「暴れるな暴れるな」

襟首を掴まれて後ろに引っ張られ、よろよろと転びそうになりながらなんとか歩いていったレイフオンは、グツと右足を軸に身体を捻ると、ウォルターの腕を弾く。学校の廊下でどうしてこんな動きをしなければならぬのか、と盛大に溜息を吐きながらレイフオンは制服を整えた。

「こんなことされなくてもついていきますよ。僕だつて同意した身ですからね」

「はは、そりや助かる」

「…ちよつとは素直になりました…?」

「割と聞こえてンぞアルセイフ。そういうお前がもう少し素直になれ

るといいよな」

「うとううるさいです！ 僕が素直になるにはウォルターより気長に繊細な気遣いが必要ですよ！ まだまだレベルが足りませんね!!」

「はは、そりや残念だ」

「……全然そうは見えないんですけど……」

軽快に笑ったウォルターに、レイフォンは拳を握りしめて言葉を絞り出す。そんなレイフォンにやはりウォルターは軽快に笑い、先を歩いて行く。その後ろを、少しばかり恨めしい様な嬉しい様な、やつぱり複雑な気持ちでレイフォンはついて歩いた。

「おっ、同級生」

「ハア!? どっちのですか!!」

「アルセイフの食いつき方エグいから落ち着けよ……」

「お前……うるさいさ」

レイフォンの声に、ご丁寧に不機嫌ですと顔全面に貼り付けたハイアは、じつとりとレイフォンを睨みつけるように見ていた。その後ろにはミュンファが気恥ずかしそうにソワソワしつつ立っていて、ウォルターは2人の剣帯を見てふむ、とやはり繰り返し返した。

「ひとつ下」

「誰がですか!!」

「お前マジうるさいさ。生憎おれっちはお前の先輩入りさ」

「うつつつわ」

「心底嫌そうな顔すんなさ。おれっちだってお前に先輩呼ばわりされたくないに決まってるさ」

「残念ながらあなた方につけるような先輩は僕の中ありませんので」

「さり気なくオレも一緒にまたデイスられた」

「お前本当失礼さね……」

ハア、とため息を吐き出したハイアは面倒くさそうに腰に手を当てた。いままでのラフな格好とは違い、一応カッターシャツにネクタ

イ、ツエルニ支給のズボン。ミュンファも同様にシャツ類に武芸科のネクタイとスカートだった。正直そこまで渡すならもう制服支給でいいんじゃないのか…とウォルターは少し思ったが、そうして「ああ」と小さく零した。

「どうしたんです?」

「アルセイフ不機嫌隠せ。いや、一人で納得しただけ」

「え? な、何をですか?」

ミュンファも不思議そうに首を傾げる。自然と自身に視線が集まったことに、ウォルターは少し自分の髪の襟足を弄びながら苦笑した。

そうしている間にキャリアンが到着し、ウォルターに視線を向けると口を開いた。

「とりあえず、学力的には相当の学年で良い事になった。ただ、学費の方だが…」

「短期扱いだから奨学金は出ねえんだろ。学費はオレの口座から出す。天剣時代のそのまま持ってきたし、死ぬ程あるだろ、持ってけ持ってけ」

「…そう言う気がしていたから、手続きが出来るよう用意しておいた。後で渡す必要書類に記入しておいてくれ」

「はっ!? ちよ、ちよつと待つき! そんな事聞いてない!」

当然制止をかけたのはハイアで、その隣にいたミュンファやウォルターの後ろにいたレイフォンもウォルターを凝視していた。

ようやく意味の理解ができたらしいレイフォンが、少し遅れて声をあげる。

「ばっ…:…ばかじゃないですか!? 三人分の学費って…:一体いくら掛かると思ってるんですか!?!」

「オレ奨学金Aだから。あとオレの分はその口座から払ってないんだけどな」

「いやいや、だったらだったで問題さ! アンタ何のために奨学金もらってるのさ!?!」

「俺が入学しようと思った時は天剣授受者の仕事で使ってた口座が可

動できなかったんだよ。で、しょうがないから別で使ってた口座でやったんだが足りなくてな。奨学金申請することになったんだが：最近使用申請してようやく可動できるようになったんだよ。そして結構あつてあぶれてんだ」

「…いやだからってバカですかほんと!! 大事にとつとけばいいじゃないですか!」

「なんでそんな非難轟々なんだよ…」

「非難じゃなくて…ああもう、アンタのそういうところほんと勘弁してほしいさ…!」

このある種のトンチンカンに言えば伝わるのか。ハイアとレイフォンが同じ理由で頭を抱えた。ウォルターは未だ首を傾げて2人を怪訝そうに見つめている。

「あ、あの…」

そんな中手を挙げたのはミュンファだ。

「わ、わたし達の分はわたし達でなんとかしますから…あの、ウォルターさんにこれ以上お世話になるわけには…いかない…思うんです…が…どうでしょう…?」

ハイアとレイフォンが同時にミュンファを見た。そういうことが言いたかったと言わんばかりの力強い肯定に、ミュンファはたじたじしたまま2人に視線を返す。

しかしやはりというか、それに同意を示さないのがウォルターだった。

「ていつたって、お前ら学園都市の学費エグいぞ。死ぬほど持ってかれるぞ」

「で、でもおれっちは、」

「とにかく。…いいから…、…なんていうか…、とにかく…オレが払うから、お前らは自分の面倒みれる分だけ稼げて。良いな」
バツが悪いとばかりに襟髪を触りながら言うウォルター。珍しく譲らない態度に、ハイアはグツと言おうとしていたことを堪えた。そしてレイフォンは珍しく口ごもった様な言い振りに、ハツとした。

——圧倒的に理由付けが下手すぎる…!!

ここまで来てレイフォンはようやく理解した。

ウォルター本人は事実の三点しか理解していないことを。

『ハイアとミュンファをツエルニに滞在させる理由のために無理を言って学生にした』、『言い出したのはウォルターだから責任はウォルターにある』、『だからウォルターが学費を全面的にバックアップする』。

しかしおそらくそれだけではない。ウォルターの今回の異様なバックアップ行動の影には彼が確実に、かなり、必ず否定する3K、つまり彼の“面倒見の良い面”が関わっていると考えられる。

レイフォンは心底不服で認めたくないとは思っているが、実際面倒見が良いという事実は理解しているし分かっている。

そして今回のハイアとミュンファの件に、そのウォルターの“面倒見の良い面”が発揮されているのだと、いくら朴念仁だの鈍感だの言われているレイフォンでも気がつけた。

——— それにしても本人が理解してないんだよなー！

責任面の理由もあるだろうが、それ以外の“とにかく自分がそうしてやりたいんだ”と言えればいいだろう。そう言えば目の前の男は云々言っても頷くだろう。レイフォンはグツと喉奥からせり上げる言葉を押さえながら思った。これを押さえる理由はひとつだ。

これを言つてウォルターに否定されたらもつと厄介なことになる。

理解していないのだから肯定するわけではないし、言われて理解しても否定するだろう。どちらにせよ否定される未来しか見えない。レイフォンは盛大なため息を吐き出し、天井を仰いだ。

「…どうした、アルセイフ」

「いえ…あなたは心底面倒くさいなと…」

「…よくわからん…」

「でしようね。自覚があつてそれならあなたはちよつと頭の病院にかかった方が良い話に変わります」

「方向性が急だな」

ウォルターのけろりとした顔に再び盛大なため息を吐き出しながら、レイフォンはとりあえずとハイアとミュンファの方を見る。おそ

らくここでレイフオンも同意しなければ、ウォルターとハイアは堂々巡りになり話の收拾もつかないのだろう。話の收拾をつけるためにも、レイフオンは仕方なく同意を示すことにした。

「実際ウォルターの提案をのまなければ不可能なことなんですし、一応承諾しておいては？ 後で返すなり何なり出来るでしょう…。：僕はこうしてここにお前が居座ることになったのか未だにイマイチ理解できないけど」

「そう…なんだけどき。…てか後半マジ余計さ」

ミュンファはただハイアを見つめるばかりで、何を言うこともしない。その視線にハイアはやはり渋り表情を歪めて暫し沈黙する。そうして深呼吸をしてから、ハイアはウォルターに深く頭を下げた。

「…よろしくお願いします、さ」

「はいよ、よろしくされます」

話に一旦キリがついた。レイフオンはようやくかとかばかりに息を吐き出す。ハイアは未だ納得がいかないという顔であったが、言った以上グダグダと言いはしない。これからまた面倒くさいな、なんて第三者目線で再びこっそりと息を吐いた。

話は進み、主にはウォルターがカリアンと話をしていた。レイフオンは時折ウォルターの言葉に制止をかける様に言葉を挟んだが、それはさほど話に影響をもたらされなかった。というのも、ほぼほぼウォルターからの提案で、カリアンはそれを承諾する形になっていただけだからだ。議題の中心になっているハイアとミュンファは、時々ハイアとミュンファに求められる同意に頷くのみで、いつもの様な雰囲気はなかった。

宿泊先もこの一月と同様、ウォルターの住むアパートの一室となり、とりあえず十七小隊の面々と会うことになって廊下を歩く。ウォルターの先導のもと、その後ろをレイフオン、ミュンファ、ハイアと歩いて行くが、すっかり消沈した様子のハイアに、レイフオンは盛大なため息をひとつ吐き出した。

「ハイア、そろそろその機嫌直したらどうなの？」

「……………うるさかっや」

「これから小隊の人に会うのに、そのテンションじゃあダメだと思っ
からって言ってるんだけど」

「……うるさいや……」

ミუნファは困ったように眉を下げ、レイフォンとハイアを見比べ
ては、ウォルターに視線を送る。

そんな視線にウォルターも気づいているが、正直だからどうしろと
いうのか……と内心苦笑を浮かべていた。

(…ま、勝手にハイア・ライアが悩んでるだけなんだからほつとこ
よ)

(まあアイツ悩んでんの…？ 年頃の子どもは大変だなあ…)

(うーん、ウォルターも人のこと言えないような…)

(それは言わないお約束だから)

(ええ？ そうなの？)

くすくす、と『箱』の中でルウが笑う。だってそうだろ、と思考で
ルウに返し、ウォルターは音声では沈黙を保ったまま道を歩いて行
く。

「つていうか、ウォルターも何か言ってくださいよ」

「…そこでオレに振るのか…」

「逆に振られないと思ったんですか？」

「お前その『バカですか？』みたいな視線やめろ」

「事実じゃないですか…」

「その『当然でしょう？』みたいな顔もやめろ。…これだからうちの後
輩は…」

はーヤだやだ、と零すウォルターに、レイフォンは白けた顔で「早
くしてください」と催促し、レイフォン自身はスタスタと先へ歩く。
お前はスルーするのかよと言いたくもなかったが、まあ言っても無駄だ
ろうと早々にその思考は捨てた。軽く息を吐きだしては、ウォルター
はハイアの方へ足を向ける。

「そんなに嫌か？」

「い、嫌じゃないのさ。…こういう場ってちやんといたことないし…
憧れがなかった訳じゃあないのさ。…ただ…」

「方法の話か」

ウォルターは軽く腕を組み、ふむと考える。しかしウォルターとしては最善策だと思っっているし、何よりこれ以外の方法がないと思ったために提案した。ほぼ否定も肯定もしなかった事を今になって嫌だと言われても困るといのが実際だが、ハイア的には内心そういう状況なのだろうか、と思ひ至り、少しばかり勢いつけすぎたかと考える。「…まあ、お前らの意見あんま聞いてやれなかったし、オレが押し付けた様なモンだしな。文句言われても仕方ないんだが」

「違うのさ！…そうじゃなくて、…ただ…」

はく、と音を無しに紡がれた言葉は、ハッキリとウォルターが気づくことのできる言葉だった。しかしそれはやはり同じ言葉で、ウォルターは顔を顰める。

「お前なあ、」

「そうじゃない。って、…ウォルターは言うけど、おれっちからしたら同じなのさ…」

「…ふむ」

（しまったな。さっぱり理解できない）

（…：僕分かったから一抜け）

（待つてくれ、頼むよルウ…ここで置いて行かれたらオレ絶対たどり着けない、答え合わせは1人じゃ出来ないだろ？ 一緒にいてくれ）
（もおくウォルターそれ前の世界で言ってほしかった！ …：そうしたら僕…）

（…やめろやめろ、それ以上言うな。容易に想像できる）

（僕とウォルター以心伝心だもんね）

（そういうアレで済ませていいのか、この話題…）

ふふふ、と心底嬉しそうで楽しそうなルウに内心で苦笑をこぼしながらウォルターは頭を掻く。

（とりあえず、嫌がられてる訳…じゃ、ないんだよな）

（うん、そうだね）

（…で…、方法が気に入らない？）

（うん、65点）

(65点!? …うん…)

(…ヒント、〃ウォルターの〃全面バックアップ)

(は? オレの? ……オレがバックアップするのが嫌とか)

(急にネガティブになったね。ちなみにその答えが正しかったらあい
ついまここにいないよ)

(ウン違うな)

さすがにそこまで嫌われているとは思っていないが、最近の事を考
えれば考えつかない話でもないかと思った、が、しかしそうではな
かったらしい。

———確かに、数日前の廢都市の時の反応から一変してそう
なったら気分の浮き沈み激しすぎだよな

まあ、現状ある意味そうと言える状況ではあるし、少し前までそう
だったウォルターが言えたことはない。ウォルターは少しばかり息
を零し、眉間を揉んだ。

ニーナは困っていた。

今回ウォルターが説明した事情から、自分のクラスにハイアが、小隊にハイアとミュンファが来ることは十七小隊全員が理解していたし承諾もした。だが、まさかここまでとは思っていなかったのだ。

ダルシエナの雰囲気、かなり、悪い。

当然だ。わかっていた。さすがのニーナでもわかっていたことだ。

間接的にせよ、彼女は彼女が大切に思っていた人を傷つけられたも同然なのだから、ハイアに対する嫌悪感があることは当然だ。

その居づらさにニーナは深々とため息を吐き出し、眉間を軽く揉む。そんな中、ウォルターは至つて気にした様子もなく、この険悪なムード漂う広い練武館にけろりとした顔で立っていた。軽口の多いシャーニツドでさえ口をつぐんでいるが、ウォルターはおもむろに伸びをしつつニーナを見、口を開く。

「ええと…入隊テストすんの？」

「はっ!? …あ、ああそうだな。一応しておこうか。…：相手は、わたしよりお前かレイフォンが良いと思うのだが、どうだろうか」

「…：僕か、ウォルターですか？ 異論はありませんけど…」

レイフォンは首を傾げつつニーナを見た。

十四小隊から移り、入隊テストを行っていないダルシエナは別として、それぞれの面々の入隊テストはニーナが行っている。しかし今回はウォルターとレイフォンを指名したニーナに、それぞれがやや瞠目する。

「急だな」

「ああ。…レイフォンの時は実力がわかっていなかったからな、わたしが相手したが、実力が分かっている、なおかつテストに最適な者がいるのであれば、そうするべきだろう」

「…なるほど。まあ理にかなってんな」

「だろう？」

「けど、マテルナ…先輩の時は実力はわかってるってしなかったんだ

から、ライアとルフアもしなくていいんじゃないのか？」

「…う、と、とりあえず、ウォルターとレイフォンで相談して決めてくれ。どちらでも構わん。ハイアと当たらなかつた方がミュンファと当たってもらうぞ」

ゴホンゴホンとわざとらしくニーナが咳払いをする。ウォルターとレイフォンは視線を合わせつつ、肩を竦める。まあいかとウォルターが頷くと、レイフォンも納得したように頷いた。それと同時に扉が開き、レイフォンが口を開く。

「あの、」

「準備終わったさ〜」

「おお、おつかれ。アルセイフはなんだよ」

「…：僕、ハイアと当たるの嫌です」

「バツサリ言つたな…」

「お前…ホント…」

「…まあ…わかんなくはないけどな…」

「もう二回も戦つたんで僕はもういいです」

「本当に本音出たさね。生憎おれっちも、もうしばらくはお前と当たらんなくていいさ〜」

露骨に嫌そうな表情を浮かべたレイフォンはハイアをひと睨みした後、壁際へ移動していった。ハイアとミュンファはすでに準備を終え、ツエルニでの戦闘着に着替えている。錬金鋼の調子確かめる様子を見ながら、ウォルターは「うん？」と零した。

「待てよオレ着替えてないじゃん」

「あ、…着替えてくるさ？」

「あく、うーん。まあいいや。アントーク、ジャケットだけ預かってくれ」

「いいのか。爆破とか焦げたりしたらアウトだぞ」

「手合せで爆破と焦げってなんだよ。ガチ過ぎ」

「いえ、イオ先輩ならありえます」

「ロス妹まで言うか」

ウォルターの苦笑に、ニーナはウォルターが良いならいいと言って

壁際に下がっていく。

練武館の中央あたりに移動しつつウォルターは袖をまくり、ツエル
二の錬金鋼を叩いた。

それが合図となった。

ハイアは重心を落とし、足裏に剄を凝縮、爆発。先手を取るべく
ウォルターの眼前に迫る。ハイアの手の中で支給された鋼鉄錬金鋼
が復元の光を放つ。それが、一瞬ウォルターの視界を潰した。抜き打
ちの型。抜刀。ウォルターが黒鋼錬金鋼を掴む。復元。刀。刀身が
かち合い、火花を放つ。金属音が練武館に響き、不快感を呼ぶ。鍰が
ぶつかり合い、押し合いが始まる。

「危ないな、急に詰めてくるヤツがあるか」

「あんたに勝つつもりだからさ」

「はっ、言ってる」

柄を握り直す。ちからの入り具合が変わる。ハイアの重心がほん
の少しだけずれた。

外力系衝剄を变化、咬龍。

錬金鋼に込められた剄が外部強化の役割を担い、周辺を剄が覆って
硬化していく。ハイアが反射的に後退する。練武館の床を靴が滑り、
摩擦で烧ける臭いもした。片手が床に触れる。勢いを殺すべく掴む。
後退しつつも、視線はウォルターから外さない。鍰迫り合いの為に構
えられていた刀がピュウと下げられる。その刀が手の中で翻り、身体
が半身逸らされ重心がずれる。刀がゆっくりと持ち上がり、上段に構
えられる。ウォルターの眼が鋭く細められ、口角が上がった。

「ま、割と本気でも良いな」

「っは、あ…!?!」

ウォルターの握る刀が振るわれる。その斬線が剄を纏う。形態を
変化させる。剄の波動がハイアの髪を揺らす。練武館という空間を
振動させる。

外力系衝剄を变化、龍顎りゅうがく。

重厚な剄は龍の頭蓋を模し、凶暴性をあらわす口腔を見せる。それ
はウォルターが通常使用する喰剣とは違い、鈍足だ。しかしそれでい

て、喰剣よりもずっと質量が多く、放たれる剄の重圧は強い。

「くっ…」

ハイアはさらに後退する。背後に壁が迫り、これ以上の後退は許されなくなつた。

鋼鉄錬金鋼を握る。構える。柄頭に片手を当て、迫り来る剄を真正面から受ける。

サイハーデン刀争術、逆螺子。

衝剄を放つた。本来は内部破壊の為の技であり、ウォルターの放つた剄技とは比べ物にならない程に剄の質量は少ない。だが、内部破壊の余波はその形を模した剄の構造を壊す。崩す。内部破壊が進行する場所には、空隙が生まれる。

———ここさ

その数瞬を掴む。刀を腰へ。抜き打ちの型。踏み込む。

活剄衝剄混合変化、かえんくるま火焰車。

要領は焰切りと変わらない。刀に剄を通す。けれど濃密に、重厚に。ちりと熱が髪を揺らす。柄を握る手に熱が伝播する。床を弾く。刀を抜いた。躊躇わず振り抜く。振り抜いた勢いを殺さず、前へ。回転する。剄の龍を抜けた。片足が床を噛む。さらに前進。片足で跳躍し、勢いを上へ。上段の構え。揺れる空間の先に、先程と同じく黒と赤の髪を揺らす青年が萌黄色の眼を鋭く細め、口角をあげているのが見えた。

「ちえええらああつー！」

「…土壇場にしては機転のきいた技だ。だが」

その手に握られていたものは、弓だ。彼が弓を使う所は見たことが無い。弓の扱い自体は知っている。ミュンファアを見てきた。だがそれがウォルターの手に渡つた時がわからない。

「ここまでだ」

その指は鋼鉄の弦を引いていた。放たれる。剄量に押し負け、自身の熱波が押し戻される。視界が霞む。だが、これは後退の許されない技だ。現状だ。柄を握る手に力がこもる。同時に熱が強まっていく。振り下ろす。

視界を白と薄紅が埋めた。
外力系衝剄を變化、終曲・牡丹。

「あ、やべ」

ウォルターの放った剄技はハイアを直撃した。ウォルターの剄技とハイアが放った剄の炎がぶつかり合い、爆発した。その勢いを殺せなかつたハイアはそのまま背後へ吹き飛ばされた。その為、床に倒れた、と言うよりおそらく落ちた、という表現が適切であろう状況に、ウォルターは頭を掻いた。

「……やりすぎたわ」

「そりやそうでしょうね。バカですか」

「氣遣いの無い後輩ですこと。…おーいライア、大丈夫かー」

床に落ちてぴくりともしないハイアに近寄り、頭辺りを小突けばうめき声が返ってきた。

「生きてる」

「生きてなかつたらお前ダメだろ！ あくレイフォン来た時のニーナみたいな事する」

「じゃあ後でロスが見舞いに来ないとだな」

「断固お断りします。というかわたしが言った通りになりましたね」

「んな真顔で言うな…」

「…わ、わたしハイアちゃんに付き添います」

「ああ悪いなルフア。運ぶのはオレやるから…。ただ、お前この後テストだろ。終わってから来いよ。それまでいるから」

「え、あ、…あうう」

ウォルターが抱えたハイアと、レイフォンの方で数度視線を歩き来させたミュンファは、それから小さく頷くとレイフォンの方へと向かっていく。

（あいつは素直で良いねえ）

（え、ウォルターの趣味で好いてる？ それとも恋愛的な方面で好い

てる？ やめた方が良いよあれは)

(あれ言うな)

(え…擁護…？ やっぱ好きなの…？？ ヤだあ、ウォルターが僕以外擁護するのムカつくから消す…!!)

(違うから！ あいにくそういうことは思ったことないから、やめろってば)

内心で過激派…と小さく零しながら、ウォルターは廊下を歩いて行く。『箱』の中のルウは未だにご機嫌斜めで、小さく消したい…と眩き、盛大なため息を吐き出す。やはりルウからしたら煩わしいのだからかど頭が痛い、現状には腹をくくるしか無いだろう。

(……とここで、答えはわかった？)

(あ、忘れてたわ。…なんだっけ、ライアが嫌がる理由？ …ハア、なんかいまいちピンと来ないな。なんつーか、理由が内在的過ぎ？ っていうのか?)

(ああ、うん、確かに。でもそんなに難しいことじゃないよ。僕は傍観者を決め込んでいるから気づきやすかっただけだろうし。僕に他人への同調とかその心を慮る様なことはできないってこと、ウォルターが一番知ってるでしょ?)

(ううん…オレは別に、んな事ないと思うが…お前がそう言うならそうなんかね?)

(ふふ。…うん。僕はできない)

淡々と言う「弟」は、ひどく楽しそうに笑う。頬に手を当て、柔らかに微笑んだ。

(…だとしたらオレは、察するのができないな。まったくわからん)
(ふふ、またまたあ。ヒントはあげたよ？ ウォルターの全面バックアップ、って)

(それがわからないんだがなあ。今更優しくしてやったからどうとかないだろ。今まで叩き潰したり色々したが)

(見事に突き放し要因だね。その調子でどんどん突っぱねて行くよ)

(ルウ?)

(うんゴメン、つい本音が。：うーん、そこまでわかんないとなると、答えになっちゃうんだけど…)

(オレ結構頑張ったと思うからもう答え教えてほしい)

(ウォルターにそう言われると教えてあげたくなくなるけど…、でもこういうのって自分でわかんないとだめなんじゃないの?)

(マジかー、人間ってしんどいな)

ずっと悩み続けるじゃん、なんてぼやくウォルターに、ルウは苦笑を零した。そう言いながら考える事を放棄しなくなった彼は、きつと成長したのだろうか。

(ルウ? : 大丈夫か)

(：うん。大丈夫。ごめんね、ちよつと考え事してた)

(そうか。まあ、悩み事なら聞くから、あんま考え込むなよ)

(うん、ありがとう。ウォルター大好き)

オレもオレも、なんて軽い返答だが、同意をくれる。ルウ自身、これは自分だけの特権だと知っている。理解している。

——だから別に、いいんだ

一緒にいられるのだから。だからこそできる事がこうしてあるのだから。

未だにルウの意見まで届かず首を捻る “兄” にやんわりと微笑んだ。

医務室ちようどいたティアリスに処置を任せ、ウォルターは医務室内に設置されたパイプ椅子に腰掛けた。慣れた手つきで処置を進めていくティアリスを横目で見ながら、ウォルターは腕輪をいじる。

「：何やったらこうなるわけだ? 簡単に怪我しやがって」

「そつちかよ。：うちの小隊に来ることになったから、その関係。テストだよ」

「ああ：入学式の近くもあつたな。あれもお前か」

「あれはオレじゃなくてアントークな」

「どっちでも一緒だ馬鹿」

呆れ顔のティアリスは処置を済ませて医療用ベッドに寝かせると、つかつかと靴を鳴らしながらウォルターの方へ移動し、机の上の報告書に書き込んでいく。

「どうだよ?」

「:右の手から肘にかけてやけど、全身の打撲:後、足の筋肉も少し切れていた」

「:……あいつ……」

「お前のせいだろう、どう考えても」

「いやいや、勝手に……」

あいつが、と言いかけて少し口をつぐみ、それからウォルターは顎に手を当てながら「ああ」と呟いた。

「:確かにオレのせい……か?」

「だろうが。:珍しいなお前が認めるの。疑問形だが」

「おいおいオレが通常から横暴みたいな事言うなよ」

「横暴だろう。:まあいい、このくらいならばらく薬の処方と個人の内力系活剷で治る。お前がそういうくらい調子に乗ったんだろうしな」

「その発言心に刺さるー」

そう苦笑を零したウォルターに、ティアリスは「わかったんなら自重しろ」と言い放ち、踵を返す。

「もう戻るのか?」

「今下学年の研修が来てるんだ。おれは資料を取りに来ただけだった。終われば戻るのは当然だろう」

「あー、まあ、確かに?」

「:何だ。何が言いたい」

「いや別に? 頑張れ鬼教官」

「誰が鬼教官だろくでなし」

ったく、と吐き捨てるように言い去っていくティアリスの背中をくつくつと笑いながら見送り、ギイと音の鳴るパイプ椅子の背もたれに体重を預けた。

(流石ティエアリス凶太いわ。面白いねえ)

(あいつ態度ム力つくから消していい?)

(…絶対にやめておけ)

ティエアリスが凶太いことにも理由がある。

ウォルター達三年生が入学した当初、ツエルニは敗戦続きで医療関係に従事していた人数が少なく、かなり忙しかった。入学して半年も経たないティエアリスやその同期の面々も駆り出されたほどに。現場で直に技術を叩き込まれたいわゆる叩き上げが多い三年勢だ。下学年の研修では実践も交えた経験と知識を教える事ができる。ツエルニの現状においてはとても有益になるだろうと思いつつも、ウォルターでも苦笑せざるを得ない勇ましさに、から笑いを零した。

(しかしやけどか。出力間違えたか…と思っただけど、そういえば途中で出力上がったよな)

(ウォルターに接触する一瞬、出力上がったね)

(多分そのせいだな。多分、その前でもコントロールが甘かったのはあるんだろうが)

(あの土壇場であんなの使ったら、そりややけどもするよね。あの密度の剽を弾くのに相当量いるだろうし。ハイア・ライアは元々剽量としてはさほど持ち合わせてないから…普段意識して出力する以上に出力したんじゃない?)

ルウの言葉に頷きながら、ウォルターはベッドの方を見た。

薄く剽の発光が見える。内力系活剽によるものだろう。流石にそういう対処は早いなど思いながら、先程の言葉を思い返した。

「…オレのせいか」

(ウォルターのせいな訳ないじゃん。あんなのただの自爆だよ自爆。ハイア・ライアが勝手に怪我しただけじゃん。ウォルターは悪くないよ)

「…まあ、そうっっちゃそうなんだけど」

(でしょ? 気にしなくて良いよ。それに、あいつはあいつでウォルターと手合せできるのが嬉しくて調子乗ったんじゃないの? ウォルターにこれ以上間抜けは晒せないだろうし)

ウォルターは小さく「うん、」と返しつつ、腰掛けたパイプ椅子の背もたれに体重をかける。

—— オレに間抜けを晒せない、ねえ：

少しばかり天井を見上げ、それから視線を床に落とす。

—— 別にオレは気にしてないんだがな

軽く息を吐き出しながら、ミュンファが早く来てくれるよう思いながら、寝息の響く部屋で眼を閉じた。

夏の訪れ

どうしてこうなった。ウォルターは遠い目をして思う。

現在この場所で活剏を使って嗅覚を鋭敏にでもしたら、即座に卒倒しそうな場所にウォルターはいる。

「はあ…、いま来るべきじゃあなかったな、オレ」

「つか、ひとりで行けくそが」

「口調、口調」

隣を歩く不機嫌な女性……バーメリンに苦笑交じりに返し、ウォルターは溜息を吐きながら額に浮かんでは流れていく汗を乱暴に拭いた。これが終わったら風呂にでも飛び込むか、なんて投げやりに考えながら息を吐いた。

現在この都市……槍殻都市グレンダンは真夏の域。そしてその地下である機関部の更に端に属する下水道は蒸し暑く、熱気がこもっている。さらに言えば、都市の汚水処理も兼ねているこの下水道の臭いは一般人でも敏感にわかるほどであるため、武芸者にとってはある種地獄のような場所であった。

「暑……。これは予想以上だ」

息を吐いて、ウォルターはいつもより襟元をゆるめるためネクタイを引つ張った。

少し服の風通しを良くしたところで、風の通り道がないこの場所では暑さは解消されず、肌になっとりとしぬるい空気が当たるばかりだ。そんな中汗は絶えず額を伝う上に、下水道独特のにおいのせいで深く呼吸をする気にもなれなかった。

「つとに…、暑い」

「そう言ってる間に進め、ブツブツ言うな、わたしが我慢してるにも関わらず。ウザい」

「えげつない言いっぷり。オレは天劍授受者でもないのに巻き込まれてんだぞ？ 文句くらい言う」

「ふざけるな。わたしだって行きたくもないのにあの突撃ばかりのせい…。まさかあんな風にじゃんけんで負けるなんて思わない。…女

性尊重の念が欠けたくそ共が」

「落ち着けよ、言ってもしょうがない。…オレが先行するから、お前は後ろからついてこい」

「……癩に障るけど、あんたの方がまだマシ。バスボムくらいはマシ」
「……………そりやどうも」

いや嘘、ミジンコ一匹分くらいマシ。などというバーメリンの声がボソボソと聞こえたが、それ以上を追求する気にもなれず、ウォルターは苦笑しつつ頭を搔く。

進行方向には多くの浄化用の樹木の根があり、それをかき分け、時折バーメリンの姿を目視しつつ進んでいく。思い出した、とウォルターはバーメリンに言葉だけを向けた。

「で？ 今回の概要はなんだったか」

「この更に奥に侵入したくその排除。簡単な事」

「だから口調。…まあ、想像通りつてところか…」

溜息を吐いてウォルターは先行を続ける。バーメリンはウォルターの言動に首を傾げ、眉を寄せた。

「想像通りつて…、あんた、これ理由に王宮に来た？」

「まあ、そんな所だ。まさか駆り出されるとは思わなんだが」

「駆り出されるに決まってるだろ、ウォルターのくせに出されないと思ったら大間違いだ、死ね」

「酷い言い草だな」

ようやくたどり着いた壁の眼の前で二人して立ち止まる。ようやくたどり着いた疲れと会話の内容に息をつきながら苛立たしそうにバーメリンは言う。そんなバーメリンに対してウォルターも息を吐きながら壁に手をつく。壁のある部分ををテンポよくタップするとモニターが浮き上がり、さらにそこに指を走らせる。

壁が大きな音を立ててその口を開けた。

先を確認する為に初めに入り、中を軽く確認するとバーメリンを呼んだ。飛び込んできたバーメリンはちょうどウォルターの上へ降ってくる。避けるのもと思いい受け止めたが、かなり嫌そうな顔をされた。

「……軽々しく持ち上げるな、ウザい。キモい」

「お前が降ってきたんだろ？」

苦笑交じりにそう言い返すが、バーメリンはお気に召さなかったようだ。

必要以上の非難を浴びる前に下ろし、とりあえずと進行方向に足を向けた。

青い光を放つ空間は、空虚だった。

広い空間であるだけあって閉塞感はないが、壁に囲われた空間独特の圧迫感はある存在していた。散々迷路でひどい目にあつた赤髪……デイクセリオ、デイツクは酷く疲れたという顔で手を腰に当てて溜息を吐く。

「まったく、このグレンダンに来るとろくな眼にあわねえ」

デイツクはそう呟きながら、ふと感じた気配の方向へ眼を向けた。

「……つてことで、さっさと通してくれると嬉しいんだが」

「お前がくそか」

「……だから言葉遣いが悪いって」

デイツクに答えた声、バーメリンに対してその言葉遣いを咎める声、ウォルターにデイツクは眉根を寄せた。

バーメリンはまだしも、まさかウォルターが来ていたとは思わなかったという顔で。

——ウォルターがいるのはものすごく分が悪いな

彼とは一応友人ではあるものの、彼のことだ。自分が疑われない為にデイツクを本気で殺しに来るだろう。いくらデイツクが死なないことを知っているとはいえ、容赦の無い事この上ない。

「あんたのせいでこんな面倒くさいことになったんだ、嫌な所通らされたりこのキモい毛野郎に抱えられたり。どうしてくれる」

「そりゃあ……そりゃあ」

「誰がだ、誰が。お前最近本当に口が悪いぞ。強制する気はないが、

ちよつとは整える努力をしろ。…つか、話してないでさっさと仕留めよーぜ。だから伸ばす方が面倒だろ」

「…それもそうだ」

あの野郎、催促しやがった。早いうちに片付ける気だ、本気で。内心で盛大に悪友に悪態を吐きつつ、ディックは頬を嫌な汗が伝うのを感じた。しかし自らも武人。錬金鋼に手を添え、剽を通した。手の中に記憶された形状が復元し、慣れ親しんだグリップを握り、重心を落とし、鉄鞭を構える。

「ウザ、やる気？ とつとと死ね」

「だからお前口悪いって」

「わたしに口出すな。保護者のつもりか。ウザ死ね」

「つとにもー…」

ウォルターが苦笑しながらディックの前に立ち塞がる。

目があった。引く気も無く引かせる気もないらしい。相変わらず気分屋だ。

——だが、こいつがいるならまだ手を出す必要はないってことか

ある程度八百長をして、ウォルターともう一人の相手に見せてやればいいだろう。

疑われる事のほうがまずい。動きにくくなるわけにもいかず、ウォルターがこのグレンダンでうまく動けなくなる事が一番痛打になる。「とつとと通してくれるとありがたいんだけどな」

「そうはさせねえ。…って、言ってるだろ？」

にやりと笑みを浮かべたウォルター。その表情を見てディックは確信した。本気で一戦交える気らしい。ディックは八百長のつもりだったが、ウォルターは八百長をする気はないようだ。ため息を吐き出しながらもディックが鉄鞭を握り直し、ウォルターも刀を構える。じりじりと間合いを取りながら剽を練り上げ、ディックは先手を打つ。

踏み出した。

活剽衝剽混合変化、雷迅。

つんぎくような音が鼓膜を振動させる。青の稲妻を引き連れ、デイツクはウォルターにまっすぐ直進する。

この技は幾度と無くウォルターといえる時に放った技だ。きつと他の誰よりもこの技を見ていて、彼と共に練磨をした。つまり、彼にはこの技のすべてが筒抜けだということ。

だがそれでも構わなかった。デイツクにはこの一撃しかない。この技がデイツクの武人として鍛え上げたすべてを込めた叡智だ。この攻撃方法と有り様が、愚者の一撃と呼ばれる全てだ。

デイツクが鉄鞭を振り下ろす。豪速で振り下ろされた鉄鞭を見上げながら、ウォルターの金の腕輪が溶け、手の中にその姿を顕現させた。

「ハッ」

ウォルターの全身から溢れた重厚な剄の圧が、デイツクの雷迅の剄を押しよける。そのためだけに雷迅が体表に叩きつけられるタイミンがずれる。ウォルターの手が顕現された武器を握り込む。握られた武器は、デイツクと同様のそれだ。

——やべえ

ちりちり、と、焼けるような音が耳をこそぐった。雷迅に比べればひどく小さなそれは、ゴウと音を立て、真紅を見せつける。

デイツクが飛び退いた。若干の距離が開く。その行動を行いながら、この判断が失敗であったことを瞬時にデイツクは理解した。デイツクが開いてしまった若干の距離は、ウォルターに剄技を打ち込んでくれと言わんばかりの距離であったためだ。ウォルターが踏み込む。振り上げられた鉄鞭が真紅に染まり、デイツクに叩きつけられるようにする。

外力系衝剄を变化、火雷。

鉄鞭同士がかち合う。真紅と雷撃がぶつかり合い、食い合う。

——まずった

瞬発的な破壊力で言えば、雷迅よりウォルターの火雷の方が圧倒的に強い。剄量で言ってもウォルターの方が上だ。ウォルターのはなった火雷は瞬発的な爆発力が特徴で、込められる剄量が多ければ多

いほど、爆発力が増す。

押し合いが続く中、ディックが重心をずらしてさらに後方へ。足裏に剄を集めつつ、練り上げる。次撃、踏み出す。

活剄衝剄混合変化、雷迅。

「ははっ、そう来なくちゃな！」

活剄衝剄混合変化、雷紅。

武器内に剄を通す。衝剄を練り上げる。活剄を練り上げる。ディックとぶつかり合う寸前に活剄で踏み出し、鉄鞭をぶつけ合う。ディックの青の雷撃とウォルターの赤の雷撃がぶつかり合い、食い合い、ところどころで小爆発が起こる。剄の衝撃波で床が抉られ、軽度の陥没を起こした。

ウォルターの攻撃の向きが変わる。すうと鉄鞭のがちあいが緩み、軽くなったと感じた瞬間、腹に殺気を感じる。ウォルターの操る鉄鞭の柄尻がディックの鳩尾を狙う、それを剄が込められた拳で弾く。弾かれた勢いを殺すことなくウォルターの身体は回転するが、蹴りがディックの顔面を狙った。それを再び拳で弾き、後退。

「！」

弾雨。さらに後退。後方支援で待機していたバーメリンの剄弾だ。内心でディックが盛大に舌打ちをした。ディックはせいぜい近、中距離。ウォルターはすべての領域をカバーできる上に、今回のウォルターの相棒は遠距離のプロ。しかも短気そうだ。厄介だな、と再び舌打ちをする。

バーメリンの弾雨が降り注ぐ。ウォルターも武器を銃へ変化させ、銃口を上へ向けた。

外力系衝剄を変化、降雨・霰弾。

ウォルターの雑に込められた剄が上空から降り注ぎ、バーメリンが放つ強烈な銃弾が前方から襲いかかる。

うまくウォルターの剄弾の雨を利用したバーメリンの弾丸は確実にディックを追い詰めていく。

「っち、……ってっ！」

「あ」

ウォルターが屈んだ。それに気付くのが一瞬遅ければ、本当に危険だった。

ディックの姿はそこにはない。バーメリンは巨大な筒を抱えて不機嫌そうに何もいない空間に向かって引き金を引く。バーメリンが抱える巨大な砲。彼女の扱う天剣、スワツティスだ。

「危ないな」

「けろつとした顔してるくせに文句言うな、くそが」

「お前ね」

やれやれと溜息を吐きつつ、ウォルターは屈んだまま頬杖をついた。

バーメリンが苛立たしさに天剣で好き勝手に乱射しはじめたのだから、もう何もするまいと溜息を再び吐く。

（やれやれですね。ウォルターさん、どうでしょう？ わたしの端子にはもう反応がありませんので）

「ごっちもだ。うんともすんとも」

（では、ここまでですかねえ…。バーメリンさんを早く止めないと、陛下がお怒りになりますよ）

「ちえ、オレの仕事かよ」

本日何度目かもわからないため息を吐き、ウォルターは砲を打つバーメリンに声をかけた。

「……………くそ、痛え」

木の上に落ちたディックは、小さく悪態をついた。その上から、別の声がかかる。

「大丈夫か？ 久しぶりに会ったが、技の切れが悪いな。ディック」

「……………ウォルターか。お前なあ、もうちよつと…っ、いて、……………っ考えろよな」

「知るかよ。お前が勝手にそうだったんだろ」

「そう言ってられる状況じゃねえぞ、さすがに」

ウォルターはディックの炭化した腕と足を見る。表情一つ変えず、ウォルターは視線をすいと目の前に広がる建物達へ向けた。

その視線に気づいたディックが意識を手放しそうになりながら、呟く。

「暑い、な」

「……下水道ほどじゃないがな」

雑用は懲り懲りだわ、というウォルターのどうでもいい呟きに力なく笑ったディックは、意識を手放した。

夏の訪れ ― 2

太陽に照らされ、水がきらきらと光る。学生たちのはしゃいだ声があちこちで響き、水が跳ねる。光が踊る。波が起き、それをボードで滑る。砂浜で戯れるカップル、女子を狙う男子、男子を狙う女子。恋の予感。

つまるどころ。

「夏だ！」

輝く太陽。

「美女だ！」

白い砂浜。

「水着だ！」

青い養殖湖。

「泳ぐぞー！」

盛り上がる学生達。

「ナンパだー！」

という輩でいっぱいなのであった。

「……帰ろうぜ……」

「だから、お前はまたノリの悪い!!」

きつ！ とシャーニツドが睨みつけるようにウォルターを見た。

そんな目線に対し、ウォルターは大きな溜息を吐いて呆れた眼を向ける。その眼に対して、シャーニツドはウォルター以上に盛大な溜息を吐き出しては肩を竦め、頭を振った。

「これだから夏の養殖湖の良さがわからねえヤツは。……いいか？ 制服に押し込められたおれ達の青春をここでこそ溢れさせるべきなんだよ！ 素晴らしいだろ養殖湖！」

「……どうだか……。頼むから事案だけは起こすなよ」

「お前はおれをなんだと思ってるんだ!」

「……僕、少しだけわからなくもないです……」

レイフオンが気恥ずかしい、といった様子で頭を掻いた。

なにせグレンダンに似た毛色の男がいる。女ったらしで一夜限り

の関係を腐るほど持ち合わせた軽薄男。だと言うのに、さすがは天劍授受者と言うべきか、勁技の質は非の打ち所のないというのがなんとも複雑だった。軽薄な笑みを浮かべる男の姿をため息混じりに頭を振って払い、再度ため息を吐いた。

そんな中、心外だぜ、と騒ぐシャーニツドの後ろで、おお、と声が上がった。

「ツエルニの養殖湖、でかいさね。グレンダンじゃこういうことなかったし、初めてかも。なあミュン」

「うん、そうだね。グレンダンが夏季帯に入ることってそうそうないし……」

「……ハイア、と、ミュンファさん」

「二応、おれっち達も十七小隊に在籍してるから呼ばれたのさ。なんか文句でも？」

「……いいえ別に……？」

「お前らいがみ合うな、頼むからいがみ合うな。面倒くさくなるだろ」顔を突き合わせれば即座のいがみ合いは相変わらずだ。ウォルターはやはり大きな溜息を吐き出しながら、視界の先に広がる養殖湖を遠い目で見つめた。先程からずっとウキウキして浮足立っているニーナは、女子勢を連れてさっさと更衣室へ移動していった。そんなニーナと同じかそれ以上に浮足立っているこの当小隊一の上級生はガシツとウォルターの首根っこを掴んで更衣室へと足を向ける。

「さあさあさあさあ、さささと着替えてこようぜ」

「離せ…離してくれ…マジで離してくれ…」

「ウォルターがシャーニツド先輩に引きずられていく…」

はは、とから笑いを零すレイフォンに「笑ってんな」と言うも、特に効果はなし。無情にも更衣室に引きずり込まれた。

「……ないわあ」

ラッシュガードをきつちり上まで締め、ズボンは膝丈。面積の広いサンダルを履き、小さめのタオルを首から下げる。なんとも入る気のない装備。更衣室の人間すし詰め状態を思い出して若干身震いしつ

つ、ウォルターは再度溜息を吐いた。

ようやく更衣室から出てきたレイフオンはごく普通の水着を着用しており、タオルを片手にウォルターの装備に苦い笑いを零す。

「またウォルター重装備じゃないですか…」

そう言うレイフオンの後続で出てきたシャーニツドもそれを目視し「確かに」とつまらなさそうに言葉を零す。しかし、そんな二人の反応など知ったことではないと睨めつけるようにウォルターはその顔を見た。

「…当たり前だろ。オレは入る気なかないなだからな」

「言い方に絶妙なツンデレ感を感じるんだが、そういうのフェリちゃんで十分だぜ」

「ツンもデレもないつつの。燃やすぞ。つてか、あんたの水着…」

シャーニツドが得意げな表情でポーズングを決めた。上着も無く、布は必要最低限。なんだその水着、といわんばかりウォルターの視線に、シャーニツドは笑う。

「こういうのは遊び心って言うんだ。お前らみたいにコテコテのノーマルってのは遊び心が無くてナンパになんざ向いちゃいねえ」

「ナンパする気ないんですが…」

「うわっ、あんた布面積狭っ！ウォルター布面積多っ！…メンツの布面積が両極端さ…」

「そりやそうだろうな。…つか、アントーク達は出てきたのか？」

「ああ、面々好きにしてるらしいぜ」

「ふうん…」

しらっとしたウォルターの表情に、シャーニツドが呆れた笑みを浮かべて「分かってねえなあ、」と再度繰り返した。

「いいか？…ここで開放せずしていつ開放するんだ。俺達の青春をあんなむさ苦しい練武館やきつちりと着こなされた制服の中に押し込めちゃいけねえんだよ。そう…ここぞとばかりに俺達の青春をここで弾けさせるべきなんだよ」

「他のモン弾けさせたり不祥事起こしたりしない限りは好きにしてくれて構わないぜ」

「冷めきつてんなお前はよ〜〜!! 見ろ! 俺のこの熱いパツションを!!」

「一瞬見たら十分なんだよアピールすんな」

「ハハ、確かに。てか、あんた本当こういうお祭りごと好きさね。おれっちはそういうのわっかんねえさ〜」

「:非常に不満ですが今回はかりはハイアに同意します:」

「お前はもうちよい素直になった方がいいと思うのさ〜」

「結構です」

「レイフォンまた力強い否定だなあ、おい。つか、んなこたどうだつていいんだよ! 俺のこの熱いパツションもジェットマグナムも女にアピールするもんなんだからな!!」

「当たり前だろどの方向性に向かってんだ。さっさとナンパして玉砕してこりやいいんじゃないですかエリプトン先輩」

「こういうときだけ饒舌に敬語喋ってんじゃね——よ!! これだからうちの後輩達はよ!!」

しかも玉砕決定してんのかよ! と一言叫んで、シャーニッドが先に養殖湖の方へ歩き出した。それを見送りながら、レイフォンが伸びをしつつ言う。

「じゃあ僕らもとりあえず行きます?」

「オレここで待っててもいいか」

「着替えた意味は!? せっかく着替えたんですから砂浜までは行きましようよ」

「マジかよ…」

「そういや、ミシエルも来るとか言ってたさ。そのあたりのパラソル探してそこいたらいいんじゃないのさ?」

「……あいつら来てんの?」

「らしいさ〜。ティアリスも来てるとか」

「……パラソルの方言ったら背負投で海に入れられる気配がする……」

「豪快」

ウォルター言葉にレイフォンがケラケラと笑う。

まあ確かに、と頭を掻きながらも砂浜へ向けて歩き出した。

強い日差しの下を歩く。十七小隊の物と思しきパラソルが見つかり、ウォルターがパラソルの下にスツと入った。その行動の速さ以降ろでレイフォンとハイアが揃って苦笑していると、そんな二人の隣で砂を踏み締める音がした。二人は同時に音の方向を確認して、硬直した。その気配を察したウォルターが、二人の後ろに視線を投げる。

「……あん？」

「ウォルター、いいところにいるじゃない」

につこり、と清々しい笑みを浮かべたミハイル・ルディアがそこに立っていた。

上着に海パン、戦闘準備完了だった。ぎくぎくと砂を踏みしめ、ウォルターとの距離をジリジリと詰めていく。

「……ルディア……」

「ティアリスもいるのよ。今年こそは克服しなあい？」

「……遠慮シマス」

「そう言わずに」

「濡れた手で触ろうとすんな！ 離れろ！ やめろ！ 近づくな!!」

「ふふふ…逃さないわよ」

「お前といるとろくなことが起きないんだよ！」

ずるずるとパラソルの下でミハイルから離れるウォルター。しかし、レイフォンとハイアは気づいていた。その向こうに一番恐れれた人物がいることを。

「ハッ——！」

ウォルターが気配に気づく。瞬間、剽による身体強化。下方に剽を集め、地面を弾く。地面が砂の為瞬発力がやや落ちるが、構ってられない。パラソルの柄を掴み、横へ跳ぶ。ズツ、とパラソルが砂から抜け、砂粒を落としながらパラソルが槍を構える様に握られた。傘の部分がウォルターの背中側にある為、太陽の日差しは遮られていた。太陽光を真正面から浴びている男は、盛大に強めの舌打ちをかました。

「……チツ。さすがは現役武芸者と言ったところか」

「ハッ、このオレを出し抜こうなんざ甘いんだよ。粒子レベルから生まれ直して来な」

「ふん。甘いのはお前の方だ。今日のおれは最近にしては調子がいい」

「知るか、んなこと。お前の調子が良かろうと悪かろうと……、……まさか」

「そういうことだ」

髪を掻き上げながら男……ティアリスが不敵に笑う。その瞬間、ざつと空気が変わったことに、レイフォンもハイアも気づいた。

……この感覚……まさか、剽？ でもティアリスさんは剽脈が……

彼は武芸者としての道を絶たれて医者になった。そういう話だったはずだ。レイフォンは集中する。やはり、ティアリスの周囲に濁った剽の動きが見える。剽脈の動きは悪い、筈だ。しかし更に集中して剽の動きをよく観察すると、内部の剽の動きだけが活発化していた。……これは。

——内部の剽の動きや活発化は正常だ。……ということは、剽脈は正常……？

ティアリスが動いた。

砂が後方に飛び散り、衝撃音が響き渡る。手が伸ばされた。ウォルターの肩へと迫るティアリスの腕を、ウォルターはパラソルの柄で弾き、絡め、勢いの方向を変える。後退しつつ、脚力を強化。跳躍。パラソルの傘が空気を受け、瞬間、浮力が発生する。下降が一瞬遅れる。柄を手放す。ウォルターが下降し、屈伸の要領で着地、下方から拳を突き出す。それを内側から弾き、そのまま腕を掴む。自身の方へ引くと、ウォルターの重心が揺れた。そして唐突にその身体が強張った。

「うっ、お……！」

「もらった!!」

足払いが見事に決まる。体勢を完全に崩されたウォルターの腕を捻り上げ、関節を決める。砂に叩きつけられ、「ぐえっ」と珍しい声が

聞こえた。衝撃の風圧で降下が遅れたパラソルは、ようやく地面にその柄の頭を突き刺した。

「……お、つ前……卑怯だぞ……」

「はん、一足先に養殖湖で泳いで来たんでな」

「めつちや鳥肌立ってンだけど……。……わーったよ、入りやいいンだろ入りや……。つとに……」

「いっえーい！ さすがダニー！ 体術オンリーならイケイケね！」

「イケイケとか超古いき。……つてかティエアリス、医者なのに武芸者なのさく？」

「ハッ：ハイアちゃん、その質問は超タブーよ!? 知らないでしょうけどー！」

慌てるミハイル、困惑するハイア。ようやく関節技を外したティエアリスが立ち上がり、膝やらズボンやらについた砂を払う。同様に身体についた砂を落としてつつ、ウォルターがゆっくりと立ち上がった。

「おれは別になんとも思っていないんだがな」

「あれだろ、お前は何も思つて無くても周囲は気を使つてるつてヤツ」
「……なるほどな。……まあ、別に気にするな」

「あらそうなの？ ……じゃあいいわね！ ダニーは元々鉄鞭使いの武芸者だったのよ、体術も結構強くて未だに体術だけは強いのよ！ いまはほぼやってないけどね！」

「……そういや、元武芸者つてのはちらつと聞いてたさね……」
「ミハイルお前。逆にちよつとは気にしろ」

「あいつ急にあつけらかんとし始めつからな」
「……僕、てつきりキリク先輩みたいな感じだと思つてました」

「ん？ ……ああ、サットンの同級生の。鍊金鋼メカニックのヤツか。現状、非常に残念だがこいつは全然違う」

「“現状”と“非常に”と“残念だが”を誇張するなお前。……そういえばはつきり言つていなかったから、誤解していたかもしれないが、生憎剋脈は至つて正常に機能している」

ミハイルのあつけらかんとした説明と同様か、それ以上にあつけらかんとした顔で言うティエアリスに、小さくウォルターが「お前の方が

気にしてないだろ…」と眩きを零す。それをティアリスがグーで殴って制止しつつ、再度口を開く。

「だが、色々あって衝剄系統が一切使えなくなっちゃってしまっただけな。衝剄が使えなければ汚染獣戦ではほぼ役に立たん。……だから武芸者を辞めたんだ。まあ活剄は未だ好調で、こいつを殴るくらいはできる」

「まあ99.9%外れるけどな」

「もっぺんグーで殴りたいのか貴様」

「まーまーそう喧嘩腰になんないのよ子どもじゃないんだし！…まっ、そういうのが理由でダニーがウォルターの主治医になってるのもあるのよ。そいつ、問診・治療・入院超絶拒否勢だから」

「ウォルター……」

「ンでお前はそんな哀れんだ眼をすんだ、アルセイフ。大体今年に入るまでよっぼどの怪我なんぞしてないぞ」

「しただろ。単騎でのセルニウム鉱山の調査。火災現場での単騎迎撃。あと……」

「もーいいつつの」

「ウォルター……」

「お前までんな眼すんなつつの、ライア。別にオレはへいきだって言っただだろが」

「それとこれとは別でしょうよ」

全員から哀れんだ…呆れたような眼を向けられ、バツが悪いとウォルターは襟髪を触る。

やはりため息混じりに「とにかく」と口を開く。

「行きやいいんだろ、行きやあ」

「そぞ、それぞれ。せっかくだからレイフオンくんもハイアちゃんも一緒に行きましょうよ！ ウォルターの苦手克服レツスンパート

……まあ忘れたけど行きましょー！」

「適当か。……勘弁してくれ本当……」